

社台 1 遺跡・虎杖浜 4 遺跡  
千歳 4 遺跡・富岸 遺跡

— 北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和 55 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

## 序

本報告書は、北海道縦貫自動車道の建設にともない、白老・登別地区で当センターが日本道路公団札幌建設局の委託を受けて実施した、埋蔵文化財包蔵地発掘調査の概要の一部を収録したものであります。

調査を実施した埋蔵文化財包蔵地は、社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・虎杖浜3遺跡・千歳4遺跡・川上B遺跡・富岸遺跡の計6遺跡 12,690 m<sup>2</sup>であります。このうち、虎杖浜3遺跡および川上B遺跡については、昭和57年度以降に継続して発掘調査が予定されておりますので、調査が完了した時点で報告書を刊行する予定であります。

この区域内に所在する遺跡は、ともに太平洋に面する丘陵または段丘上に立地し、海との関連がきわめて強く、とくに、サケ・マスの遡上河川であったと思われる、白老町内のアヨロ川流域には数多くの遺跡が所在し、そのうちの虎杖浜3・4遺跡は縄文時代早期および中期の遺跡であり、アヨロ川流域の歴史を明確にする上で、重要な手がかりを得ることができました。また、社台1遺跡は縄文時代晚期の亀ヶ岡文化圏に包括される墳墓群で、付近に類似の遺跡がないことから、好資料を提供したものといえます。

調査にあたっては、カーボンによる年代測定、動植物遺存体の同定、花粉分析など関連諸科学の協力を得て、少しでも先史時代人の生活のようすが復元できるよう努力いたしました。本書が学術研究者のみならず、広く一般の人びとにも活用されることを望むものであります。

発掘調査の実施にあたっては、御指導、御協力を賜った文化庁・北海道教育委員会ならびに北海道開拓記念館、また深い御理解をいただいた日本道路公団札幌建設局、同登別工事事務所に感謝申し上げるとともに、登別市教育委員会および白老町教育委員会ならびに関係各位に、心から御礼を申し上げる次第であります。

昭和56年3月

財團法人 北海道埋蔵文化財センター

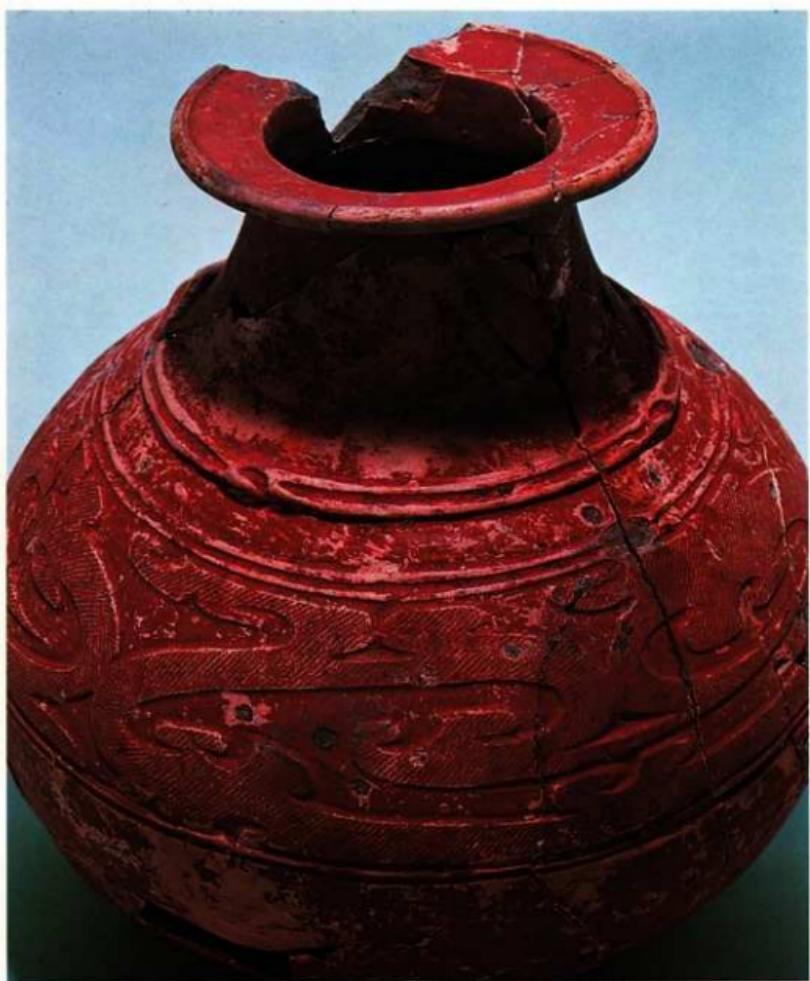
理事長 浅井理一郎

# 目 次

序	
目次	
巻頭図版	
<b>I. 調査の概要</b>	
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯と経過	2
4. 調査の要約	5
<b>II. 調査の方法</b>	
1. 発掘調査の方法	6
2. 整理の方法	7
<b>III. 社台 1 遺跡</b>	
1. 概要	25
2. 遺構	32
3. 包含層の遺物	106
4. まとめ	171
付録	174
<b>IV. 虎杖浜 4 遺跡</b>	
1. 概要	187
2. 遺構	193
3. 包含層の遺物	209
4. まとめ	279
<b>V. 千歳 4 遺跡</b>	
1. 概要	281
2. 遺構	286
3. 包含層の遺物	312
4. まとめ	342

## VI. 富岸遺跡

1. 概要	343
2. 遺構	348
3. 包含層の遺物	348
4. まとめ	381



社古1 遺跡出土の朱塗り壺



虎杖浜 4 遺跡近景



虎杖浜 4 遺跡調査風景



千歳 4 遺跡近景



千歳 4 遺跡調査風景



富岸遺跡調査風景



富岸遺跡調査風景

## I 調査の概要

## II 調査の方法

# I 調査の概要

## 1. 調査要項

事業名 北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査

事業委託者 日本道路公団札幌建設局

事業受託者 財團法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名・所在地および調査面積

道教委登載番号	遺跡名	所在地	発掘面積
J-10-17	社台1遺跡	白老郡白老町字社台375-19	1,100m <sup>2</sup>
J-10-14	虎杖浜4遺跡	白老郡白老町字虎杖浜412-6他	520m <sup>2</sup>
J-10-12	虎杖浜3遺跡	白老郡白老町字虎杖浜439-21他	2,210m <sup>2</sup>
J-03-22	千歳4遺跡	登別市千歳町156-4181-3	1,890m <sup>2</sup>
J-03-6	川上B遺跡	登別市青葉町18-20他	6,000m <sup>2</sup>
J-03-18	富岸遺跡	登別市富岸町18-1他	960m <sup>2</sup>
			計 12,680m <sup>2</sup>

## 2. 調査体制

調査主体者 財團法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長	浅井理一郎	調査部長	高橋和一
専務理事	岩原 市男	調査部第一班長	中村福彦
業務部長	馬場 治夫	同 調査第一班文化財保護主事	種市幸生
業務部管理課長	小山内光之	同 同	西田 茂
同 管理課主事	佐川 俊一	同 同	青柳文吉
同 経理課長	長谷川睦雄	(調査補助員) 中村英重、西条美智枝、野村留美	
同 経理課主事	菅野 聰	(写真技師) 佐藤和雄、立川トマス	
同 経理課嘱託	石井 義男	(測量技師) 阿部和夫、上野喜代次	

調査にあたっては、つぎの機関及び諸氏の御指導ならびに御協力を得た。

文化庁、北海道教育委員会、北海道開拓記念館、登別市教育委員会、白老町教育委員会、室蘭工業大学教授 室住正世、同助教授 白幡浩志、北海道教育大学教授 春日井昭、道立中央農業試験場技術吏員 小林茂、佐々木龍男、北海道大学北方文化研究施設 西本豊弘

(敬称略)

### 3. 調査の経緯と経過

日本道路公団が建設を進めている北海道縦貫自動車道(函館・稚内間 643 km)のうち、現在供用となっているのは、道央部の札幌南インターチェンジから苫小牧西インターチェンジ間の 57.4 km である。

これより南の苫小牧・室蘭間は、昭和 47 年施行区間となり、以来同公団による建設計画が既に進められてきたところであるが、昭和 52 年埋蔵文化財の調査に関して、同公団から北海道教育委員会(道教委)に対し協議がなされた。道教委は同区間の分布調査が不十分であることおよび火山灰降下地帯であることを考慮し、次のとおり事前の調査を行った。

#### ○昭和 51 年度 遺跡所在確認調査

主として地表面観察による調査で、遺跡の所在を確認しようとする第一段階の調査である。

#### ○昭和 53 年度 遺跡範囲確認調査

所在確認調査で対象となった遺跡について、その調査範囲を 10 m 方眼に区画し、各交点に 1 m × 1 m のピットを掘開する調査である。遺跡の範囲や一定程度の性格を把握しようとする第二段階の調査である。

#### ○昭和 54 年度 事前発掘調査(当センター実施)

調査の目的は、範囲確認調査と同様であるが、掘開するピットの大きさが 2 m × 2 m である点異なっている。

昭和 55 年、同公団より前出の 6 遺跡の発掘調査について要請があり、道教委を含めた三者協議によって、記録保存を目的に当センターが日本道路公団の委託を受けて調査を行うことに決定した。

現地調査は 5 月 12 日から 10 月 31 日まで、ついで 11 月 1 日から昭和 56 年 3 月 31 日まで室内整理作業を実施した。発掘調査の途中で遺跡面積の増加があり、公団との協議の結果、増加分は年度内に調査することとし、他の遺跡の面積を減じることで全体面積の調整をはかった。

なお、6 遺跡中、虎杖浜 3 遺跡および川上 B 遺跡は、本年度一部分を調査したのであり、昭和 57 年度以降継続調査が予定されている。

#### 4. 調査の要約

本調査は、北海道縦貫自動車道苫小牧——室蘭間の建設予定地内に所在する遺跡のうち、次の6遺跡について実施したものである。このうち、虎杖浜3遺跡および川上B遺跡は、昭和57年度以降に雑続調査が予定されているので、本書には調査の概要のみ掲載し、本報告は調査の完了年次に行う予定である。

現在、6遺跡が分布する苫小牧から室蘭までの海岸線は、ほぼ直線的であるが、縄文海進のあった今から5,000年以前は、多くの入江が湾入し、海岸に近い丘陵や段丘の縁辺部には、海との深い結びつきを持った人々の生活があった。社台1遺跡を除く5遺跡は、ともにこのような時期に形成されたものである。また、この地域は有珠・駒ヶ岳・樽前などの火山から噴出した火山灰の降下地域にあたっており、数層からなる堆積層を認めることができる。この中には、縄文時代中期頃に降下したと思われる、茶褐色の火山灰層が認められるが噴出源は不明である。次に、各遺跡の概要を記述する。

遺跡名	概要
社台1遺跡	縄文時代晚期、亀ヶ岡文化期の遺跡。遺跡は丘陵先端の緩斜面とそれに続く低地部に及んでいる。遺構は住居跡・墓・祭祀跡などあるが、本遺跡を特徴づけるのは72基からなる墳墓群である。副葬品は土器・石器・玉類・漆器などあるが、土器の中には朱塗りのもので、埋葬時に壊して入れたものがある。ベンガラの検出されたもの7例。空土偶および藍染漆器片出土。遺物総点数83,000点。
虎杖浜4遺跡	縄文時代前期・中期・後期・晚期および統縄文時代の遺跡で、主体は前期・中期。遺跡は丘陵西斜面の比較的平坦な地形にある。前面にオモンベツ川、アヨロ川が流れている。遺構は住居跡5、このうち石組炉の認められたもの3。時期は前期末葉。出土遺物は、円筒下肩式・同上肩式・北筒式・涌元式・入江式・恵山式・後北式期のものが出土。遺物総点数28,900点。
虎杖浜3遺跡	縄文時代早期・前期・中期の遺跡。遺跡はアヨロ川左岸の小支流によって形成された沖積地にある。遺構は住居跡類似の窓穴2・墓8。出土遺物は、貝殻文系統の虎杖浜式・アルトリ式、撚糸文系統の東絞路田式・コッタロ式・中茶路式、中野式・天神山式など。遺物総点数41,600点。
千歳4遺跡	縄文時代早期・中期・後期の遺跡。遺跡は二つの小川にはさまれた丘陵の南向き斜面から低地にかけて広がる。遺構は住居跡6・墓2・落し穴1。中期の住居跡の床面から、北筒式・藤特式・最花式系統の土器がまとまって出土し、土器の縦的研究に貴重な資料を提供した。遺物総点数8,500点。
川上B遺跡	縄文時代早期・中期の遺跡。遺跡はやや起伏のある斜面上にあり、下を小川が流れている。遺構は住居跡4・墓7。住居の周辺に石器製作所や作業場を思わせる状態で遺物が出土している。遺物は東絞路IV式・円筒上肩式が出土。遺物総点数14,530点。
富岸遺跡	縄文時代各期のものが出土しているが、中期・後期が主体の遺跡。富岸川左岸の比高20mの段丘上にある。遺構は、落し穴3。早期東絞路IV式土器にともなって、魚の骨を土器の表面に回転させた魚骨回転文土器出土。遺物総点数5,510点。

## II 調査の方法

### 1. 発掘調査の方法

#### (1) 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、工事路線の中心線を基準とし、これを横軸、これに直交する線を縦軸とした。縦・横とも 10 m 間隔に分割線を設け、縦線には算用数字、横線にはアルファベットを付した。

これによってできた 10 m 方眼の発掘区を 5 m × 5 m に小分割し、逆時計まわりに a、b、c、d、と表示した(図 2-1)。ただし、虎杖浜 4 遺跡については、調査区の都合上 4 m × 4 m の発掘区とし、さらにそれを、2 m × 2 m に分割して小グリッドとした。

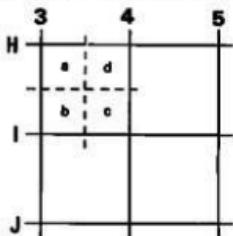


図 2-1 グリッド設定図

#### (2) 発掘の方法

発掘対象面積の 25% (小グリッドの a 区) について、遺跡の概要把握を目的に発掘し、この結果によって、調査の方法および調査工程を補正しながら、対象地域を完掘した。

#### (3) 遺構の表記

各遺構には、次に示す記号を付し、各種記録に使用した。

住居跡	—————	H
墓およびその他のピット	——	P
焼土	—————	F
落し穴	—————	TP

#### (4) 遺物の収集

包含層の遺物は、原則として 5 m × 5 m の発掘区単位ごとに、遺物収集帳およびポリ袋に記入のうえ収集した。一括遺物等については、地点・レベルを記録し、あるいは大縮尺の出土状況図を作成した。遺構の遺物は原則として地点・レベルを記録した。

## 2. 整理の方法

### (1) 現地並行整理

5月から10月まで、野外調査と並行して、現地に作業場を設け遺物の水洗・注記（発掘区と遺物収集番号）、遺物台帳作成、遺物の計測・分類およびカード作成、遺構台帳作成等の業務を行った。

### (2) 冬期の整理

野外調査終了後、11月から3月まで、センター施設内において、土器の復原、土器・石器の実測・製図、遺物集計および記録類の整理を行い、あわせて報告書を作成した。

### (3) 遺物の分類

社台1、虎杖浜4、千歳4、富岸の各遺跡から出土した資料の整理にあたっては、当センターの分類基準に若干の修正を加えて使用することとした。

土器は、縄文時代早期に属する資料をI群とし、以下順次前、中、後、晩期をII群、III群、IV群、V群とし、統縄文時代に属する資料をVI群とした。

剝片、礫、土・石製品は分類対象から除外した。

#### 1) 土器

##### 〈I群〉

縄文時代早期に属する土器群一本群はa、bの2類に分類され、後者はさらにb-1、b-2、b-3、b-4の4類に細分される。

a類：貝殻腹縁压痕文、条痕文のある土器群

b類：縄文、燃糸文、絡条体压痕文、組縦压痕文、貼付文等のある土器群

b-1類：東鋼路Ⅲ式に相当するもの

b-2類：コックロ式に相当するもの

b-3類：中茶路式に相当するもの

b-4類：東鋼路Ⅳ式に相当するもの

##### 〈II群〉

縄文時代前期に属する土器群—胎土に植物性纖維を多量に含むもので、a、bの2類に分類される。

a類：縄文尖底土器群

b類：円筒土器下層式に相当するもの

##### 〈III群〉

縄文時代中期に属する土器群一本群は、a、bの2類に分類される。後者はさらにb-1、b-2、b-3の3類に細分される。

a類：円筒土器上層式に相当するもの

b-1類：天神山式に相当するもの

b-2類：柏木川式、大安在B遺跡出土資料（注1）に相当するもの

b-3類：北筒式、ノダップII式、静持式、レンガ台式に類似するもの

#### 〈IV群〉

縄文時代後期に属する土器群一本群はa、b、cの3類に分類される。

a類：余市式および入江式、入江貝塚第3貝層出土資料（注2）に相当するもの。桶元式、手桶砂山式（注3）に類似するものを含む。

b類：手桶式、船泊上層式および茶津洞穴IV層出土資料に相当するもの

c類：堂林式および茶津洞穴III層出土資料に相当するもの

#### 〈V群〉

縄文時代晩期に属する土器群一本群はa、b、cの3類に分類される。

a類：大洞B、BC式に相当するもの。上ノ国式に類似するものを含む。

b類：大洞C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>式に相当するもの

c類：大洞A式に相当するもの。タンネトウL式を含む。

#### 〈VI群〉

統縄文時代の土器群。

注1 上ノ国町教育委員会 1972 大安在B遺跡

2 名取武光・峰山巖 1958 入江貝塚 北方文化研究報告 13

3 石川徹 1967 札幌郡手桶砂山出土の土器について 北海道考古学 3

## 2) 石器

〈I群〉 やじり・やり先類

尖頭部をもつもの。

A : 石やじり

1 : 石刀鐵

2 : 細身で薄いもの、基部が内湾するものもある。

a : 柳葉形を呈するもの。

b : 五角形を呈するもの。

3 : 三角形を呈するもの。

a : 基部がたいらなものの。

b : 基部にえぐりが入るもの。内湾するものを含める。

4 : 基部をもつもの。

a : 茎をもつもの。

b : ひし形になるもの。

5 : 細長いもの。

a : 断面がうすいもの。

b : 断面が厚いもの (棒状のもの)。

B : 石やり

1 : 茎部をもつもの。

a : 茎をもつもの。

b : ひし形を呈するもの。

2 : 明瞭な基部のつくりがみられないもの。

a : 幅が広いもの。

b : 細長いもの。

〈II群〉 穿孔具類

A : 刺突部を作り出したもの (刺突部が複数のものもある)。

1 : 周辺加工のある剥片に刺突部がみられるもの。

2 : 剥片に刺突部がみられるもの。

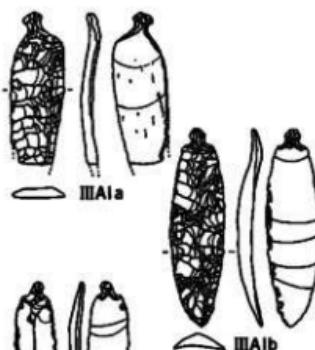
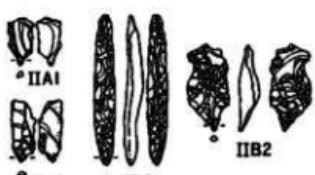
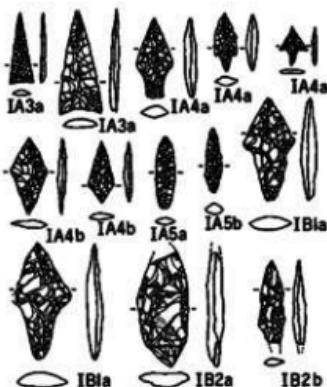
B : 回転による磨痕がみられるもの。

1 : 棒状のもの。

2 : つまみ部が作り出されたもの。

〈III群〉 ナイフ・スクレイパー類

A : つまみ付きナイフ



1 : 縱形のもの。

a : 二次加工が片面全体に施され、表面右側縁に急角度の刃部をもつもの。

b : 二次加工が片面全体に施されるもの。

c : 二次加工が周辺に施されるもの。

d : 両面加工のもの。

e : 身部底辺の刃部が内湾するもの。

2 : 横形のもの。

B : スクレイパー

1 : 石べらと称されるもの。

a : 片面加工のもの。

b : 両面加工のもの。

2 : 長円形のもの（先端が尖っているものを含む）。

a : 片面加工のもの。

b : 両面加工のもの。

3 : まる形のもの（ラウンドスクレイパー）。

4 : 棒状で尖端部をもつもの。

5 : 急角度の刃部をもつもの（エンドスクレイパー）。

6 : えぐりこみをもつもの。

7 : 不定形で、一辺もしくは二辺に刃部をもつもの。

〈IV群〉 石斧類

A : 石斧

1 : 擦り切り手法によって製作されたもの。

2 : 全体的な磨きがみられるもの。

3 : 素材が大きく変形することなく刃部のみに磨きがみられるもの。

4 : 打製石斧

5 : ベッキング（敲打）の痕跡がみられるもの。

B : 石のみ

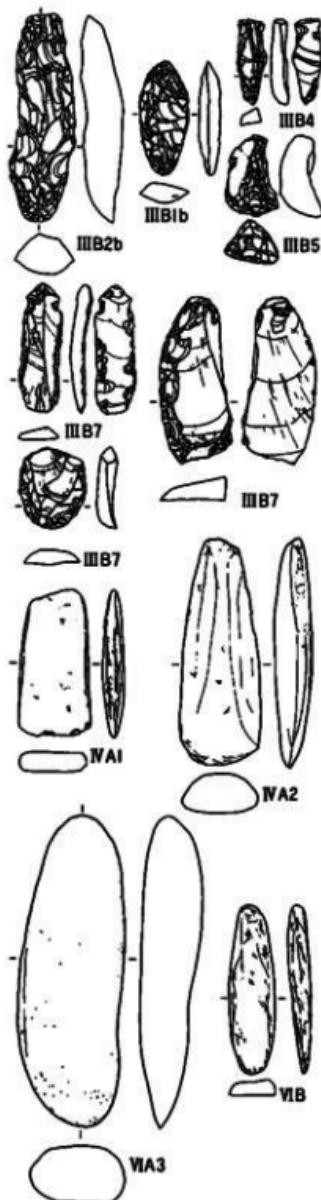
〈V群〉 たたき石・台石類

A : たたき石

1 : 棒状の一端もしくは、両端にたたき痕がみられるもの。

2 : 扁平礫の周辺にたたき痕がみられるもの。

3 : 扁平礫の腹・背面にたたき痕がみられるもの。



B：台石

- ### 1：くほみ石と称されるもの。

- ## 2：ストーン・リタッチャー

- 3：白石

### 〈VI群〉 すり石・石皿類

### A: すり石

- ### 1：北海道式石冠と称されるもの。

- 2：扁平碟を半円形に粗く打ちかき弦をすつたもの。

- 3：断面が、すみまる三角形の疊の積をすったもの。

- 4：扁平膜の側縫をすったもの。

B：石皿

〈VII群〉 石鋸・砥石類

A：石鵠

- ：砾石

- 1：研磨面に溝があるも

2：研磨面

《四庫》

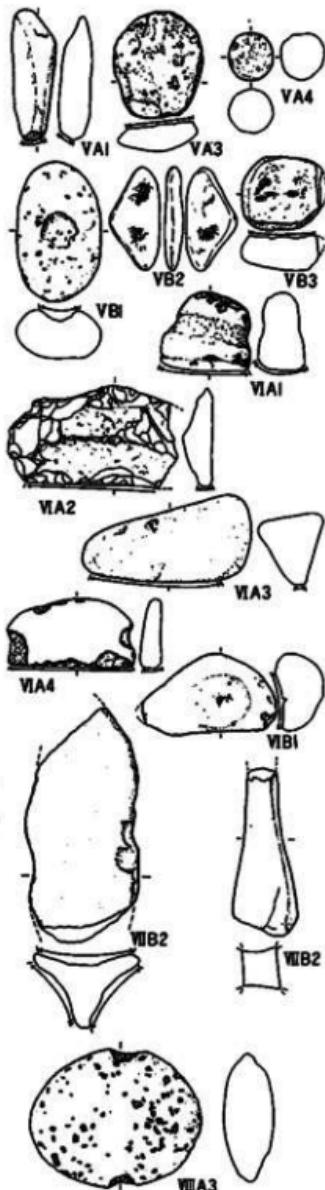
- ：石錐

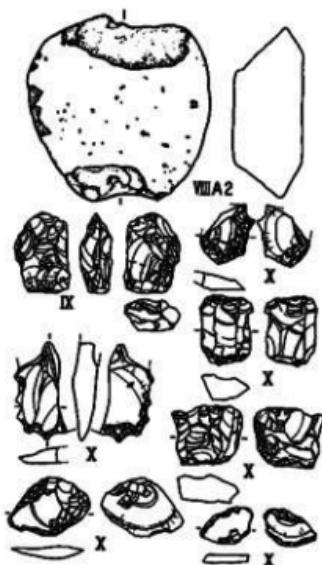
- 1：打ち欠きを4か所にもつもの。

- 2：長軸の両端に打ち欠きをもつもの。

3：短縮の

〈X群〉 石核  
〈X群〉 加工痕、使用痕のある剥片。彫器、ピエス・エス・キューと呼称されるもの。それらの削片なども含む。





### 3) 岩石名の略号

略号	英 石	和 名	略号	英 石	和 名
Aga.	Agate	めのう	Jad.	Jade	ひすい
Aga-Sh.	Agatic Shale	めのう質頁岩	Mud.	Mudstone	泥 岩
And.	Andesite	安山岩	Obs.	Obsidian	黒曜石
Che.	Chert	チャート	Sa.	Sandstone	砂 岩
Gr-Mud.	Green Mudstone	緑色泥岩	Sch.	Schist	片 岩
Gr-Sch.	Green Schist	緑色片岩	Sh.	Shale	頁 岩
Ha-Sh.	Hard Shale	硬質頁岩	Ta.	Talc	滑 石

### 3. 遺物および記録類の収納方法

#### (1) 遺物の収納

報告書掲載資料およびA資料（造構出土資料および資料的価値が高く、活用頻度のとくに高い資料）、B資料（活用頻度の高い資料）およびC資料（活用頻度の低い資料）とに区分し、造構別、発掘区別、分類別に収納。プラスチック・コンテナ（約40cm×60cmで深さ9cm、15cm、25cmの3種類）に詰め、遺物収納台帳（索引簿）を付して、遺物台帳、遺物カードと一緒に保管。

#### (2) 記録類の収納

造構図等の実測図類は、製図後マイクロ・フィルムとし、アバチュア・カードを作成して収納保管。製図原本は報告書の印刷原稿として利用。

写真類は、フィルム台帳、写真索引カードを添付して所定のケースに収納。

なお、調査終了後は遺物および記録のすべてを、北海道教育庁文化課が保管する。

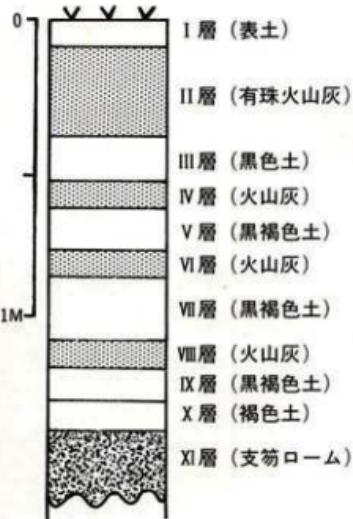
III **社台 1 遺跡**



1. 遺跡遠景



2. 遺跡近景



1. 層序模式



2. 1号焼土の獣骨分布



1. 1号焼土の断面



2. 上左：1号焼土周辺の小ビット群 上右：小砂利出土状況 下：29号墓のベニガラと石皿



1. 19号墓 墓口出土の遺物



2. 19号墓 墓口出土の注口土器

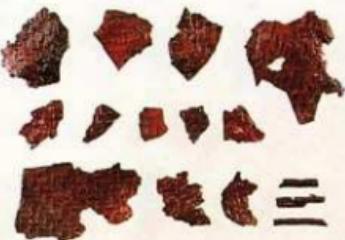


1. 19号墓 墓底出土の朱塗り鉢



2. 19号墓 墓底の遺物出土状況

図版3の6



1. 19号墓 墓中出土の漆胎漆器



2. 左27号墓 漆器出土状況 右上20号墓 炭化物出土状況・右下20号墓 墓口出土状況



1. 左：55号墓の首飾り出土状態 右：首飾り



2. 62号墓 左上：土層断面 左下：石器 右上：土器 右下：焼土

図版3の8



1. 68号墓 墓底の玉とベンガラ出土状況



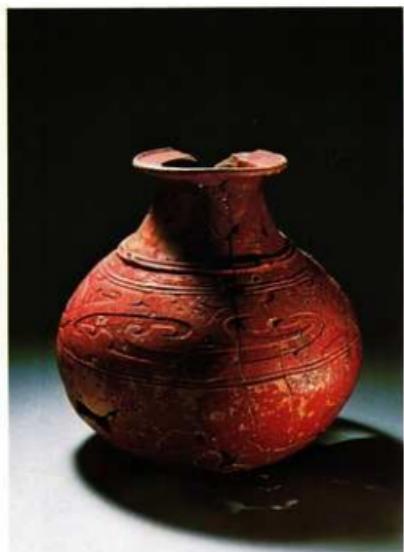
2. 水付き部分の状態



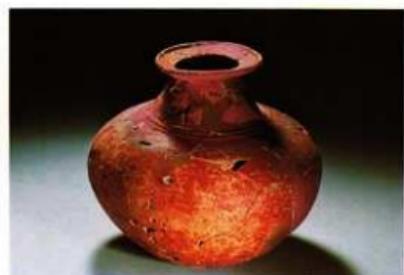
1. 水付き部分 上左：作業風景 上右：流木の出土状態 下：河底の堆積状態



2. 朱塗り壺の出土状態



1. 朱塗り壺 右上：頸部の内側 右下：壺のなかにあったペニガラ付着の自然石



2. 上：壺とその出土状態 下左：玉類 下右：土偶破片

### III 社台1遺跡

#### 1 概要

立地：遺跡の北方 12 km に樽前山、その後方に風不死岳、今から約 3 万年前に支笏火山が噴火したあとに陥没によってできた支笏湖、恵庭岳が並んでいる。樽前山の南方には支笏火山噴出物によって形成された典型的な火山灰台地が、同心円状に広がっており、ふもとから流れ出社台川、別々川などの諸河川がその台地を開析しながら太平洋に注いでいる（図版 3 の 11 参照）。

火山灰台地の前方に広がる低湿な冲積平野は、これらの河川によって運ばれた土砂が海岸線に沿って発達する古砂丘に堰止められて形成されたものである。遺跡は、別々川右岸の台地先端部東側の一帯低い傾斜地にある。傾斜地は、南東方向にせりだし、標高 12 m 前後の狭い平坦部をもち、そそは別々川に向って張り出し、舌状の低平地をなしている。この平地のもっとも低い部分の包含層は、標高 6 ~ 9 m で包水している。平坦部と低地との間はややきつい傾斜をなし、その斜面は浅い谷によってはさまれる。遺構はその傾斜面に分布する。なお、斜面の南縁は、土砂採取によって削り取られているが遺跡の主体部からは離れていたため、遺跡の性格を知るうえで大きな支障とはならなかった。

環境：社台付近は、気温の年較差が小さく、降水量も少ない。このような気象条件の良さを反映して、当地に牧場が設置された経緯がある。遺跡の北側には牧草地が、東側にはトウモロコシ畑が、西側には湿地帯がある。台地には、ママウルシ、サンザシ、<sup>セキセキ</sup>山椒、ミズナラ、ヤマモミジ、オニグルミ、エゾヤマザクラ、ヤマグワ、ウダイカンバ、ヤマブドウ、クリ、カシワ、マコミなどが見られる。それらのなかでは、ミズナラ、ヤマモミジが多い。トチの木は当地方が植生分布上の北限にあたるが遺跡付近には見当らない。

別々川は、遺跡から東方 300 m にあり、川幅約 10 m、長さ 14 km である。川は、河川改修されて現在は蛇行していないが、「明治の旧図を見ると、この川の中下流は、やちのちを流れていて、周辺の諸河川と姿が違っていた」らしい。川には、現在、ヤマベ、イワナ、ウグイ、ハナカジカが生息している。ヤマベ（属名サクラマス）の存在は、サケ・マスが遡上していたことを裏付けるものである。しかし、本河川に増殖ふ化場が過去に設置されていないことなどを考慮すると大量のサケ・マスが遡上していた可能性は薄い。白老地方で、大量にサケ・マスが遡上していた河川は白老川で昭和 30 年頃までは人工ふ化場が設置されていた。江戸時代（安政 3 年）には、この白老川下流の左岸にコタンがあった。

遺跡周辺に生息する動物はクマ、ウサギ、キタキツネなどであるが、シカは見られない。しかし、シカは、昭和の初めまでは、別々川上流の山地に群せいしていたとのことである。夏に



図3-1 遺跡の位置図（この図は国土地理院発行の1/25,000 地形図白老・博前山を複製したものである）



遺跡周辺の空中写真（この写真は国土地理院発行の1/10,000の空中写真を複製したものである。）

樽前山のふもとにむらがり、秋口に小樽・余市方面へ移動し、冬になるとまた社台に戻っていたらしい。冬に社台に戻ってくるのは、当地域の降雪量が少なく、エサをとるのに最適だったためである。クマは、今でも別々川奥の山地では日々出没する。

層序：先に述べたように、台地は、支笏火山の降下軽石層をベースとし、遺跡にみられる黄褐色ローム層はこれの風化したものである。表土直下には、有珠軽石層が厚く堆積している。腐植土中の包含層は、その両者にによってはさまれる。腐植土中には、2、3枚の火山灰が認められる（図版3の2上段参照）。

I層：厚さ5cm程度の表土である。

II層：径2~5cmの灰白色軽石からなる層で、厚さ30cm。ほぼ均一に調査区全域に分布する。1663年降下の有珠火山噴出物である。

III層：厚さ10cmの黒色土で、斜面の上では薄く、下方にいくにしたがって厚くなる。無遺物層である。

IV層：赤味を帯びた褐色土で、火山灰が腐植化したものである。その厚さは、5cm前後で平坦部と水付き部分に主に分布する。特に水付き部分では、色調が灰白色をなし、厚く堆積している。駒ヶ岳系統の火山灰かと思われる。

V層：厚さ15~30cmの黒褐色土で、台地のそにいくにしたがって厚くなる。調査区全域に分布する。縄文時代晩期の遺物を包含するが、その量はVII層に比して極端に少ない。

VI層：5cm前後の灰白色火山灰で調査区全域に分布するが、特に遺構の落ち込みの凹部にレンズ状に厚く堆積する。水付き部分では、10cmほどの厚さを持つ。なお、この直下には、岩片まじりの薄い黒色土がある。いずれも樽前火山系統のもので、前者がTa-c<sub>1</sub>、後者がTa-c<sub>2</sub>と考えられる。

VII層：調査区全域に分布し、30~40cmの厚さをもつ黒褐色土で斜面下方に行くに従って厚くなる。縄文時代中期・後期・晩期の遺物を包含する層で、それらのうちで晩期の遺物が圧倒的に多く出土する。本遺跡の出土遺物の大半がこの層から出土したものである。

VIII層：赤褐色をした火山灰で、厚さは5~10cmで、調査区全域に分布する。水付き部分では灰白色をなし、厚く堆積している。その噴出源は不明である。

IX層：5cmほどの黒褐色土で調査区全域にはば均一に分布する。無遺物層である。

X層：厚さ20cmほどの褐色土で、遺物は含まれない。漸移層である。

XI層：黄褐色ロームで支笏軽石の風化したものである。台地のベース層である。

周辺の遺跡 当地方は、有珠火山の噴出物が厚く堆積しているため、遺跡の発見が遅れていながら実状で、今のところ、縄文時代の遺跡は、他に1か所しか発見されていない。本遺跡は土砂採取の際に偶然発見された経緯をもっている。

概要 当遺跡は、墓が圧倒的に多いことがわかつた特徴である。墓は、72個で調査区の全域に分布するが、多くは斜面に濃密な分布を示す。低地にはわずか4個しかない。住居跡は、

低地に一軒のみ分布している。焼土は、6か所に発見され、その半分が低地にある。このように、造構は、平坦部から斜面にかけて見られ、低地にはきわめて少ない。その主な理由は、晩期中頃に水位が上昇し、低地の部分が冠水したため利用が困難になったと考えられる。低地の冠水後は、墓地として利用されたことを物語っている。

造構から出土する遺物は、すべて縄文時代晩期中葉の土器である。包含層中からは、少量の中期・後期・晩期初頭の土器が出土するが、全出土土器の1%に満たない。それらは、すべて低地の部分で発見されている。晩期中葉の土器は、大牛が、大洞系の土器で、精製土器・粗製土器とも見られる。数量的には粗製土器が多く、精製土器は少ない。注口土器・朱塗り壺・藍胎漆器・中空土偶など東北の亀ヶ岡文化を特徴づける遺物が出土している一方で、北海道独自の伝統をもつ土器群（口縁部に2~3条の縄線文をもつグループ）も少量であるが伴出している。また、墓においても、壙口に粘土を被覆する例などの東北地方の墓には見られない傾向もある。このように遺物の組成は亀ヶ岡文化の特徴をもち、墓のあり方は北海道的な伝統をそなえているのが本遺跡の大きな特色である。

注1 山田秀三 「北海道の川の名」 1972

注2 水産庁北海道さけ・ますふ化場調査課 小林哲夫氏の教示を得た。

注3 小林和夫 「北方文化研究」9号 1975

注4 土層の分類にあたっては、遺立中央農業試験場技術史員 小林茂氏の教示を得た。

## 2. 遺構

### はじめに

本遺跡から発見された遺構は、住居跡1軒・墓72個・焼土6か所である。この項では、このうちの主なものについて、説明を加えるものとする。

墓の副葬品については、図解考古学辞典によると「遺骸にそえて葬る品物をすべて副葬品という……」とあるので、この考え方には従うとしても、埋土中から散発的に出土した土器片や石片については、遺跡全体に分布する遺物の状況から考えて、埋め戻しの際偶然混入したことが想定される。したがって、これらの遺物については副葬品の中に含めず、墓壙内出土の遺物として区別した。なお、墓壙としたものの中には、小規模なもののも含めており、これらのものは今後、検討を加える必要がある。

### 主な遺構の説明

1号住居跡：低地の比較的平坦な部分に長軸をほぼ南北に向けて位置する。長径5m(推定)短径3.5mの長円形をなす。床面は、VII層中に掘り込まれ、ほぼ平坦であるがその中央は32号墓によって切られる。炉跡は、床の中央に浅い掘り込みをもっているがその全容は不明である。壁は全周緩やかに傾斜し、その高さは低い。柱穴は、壁際と炉跡の回りを二重にめぐるようである。外側の柱穴は規模が小さく、内側のものが大きい。両者の深さは、ほぼ同じで浅い。埋土中の土器は、小破片のみで、墓壙出土の土器と大差ない。石器は、スクレイバーの類が多く、床面北壁寄りで敲石が1点出土した。

4号墓：副葬品は、いずれも土器である。壺と台付鉢は、南東壁の壙口で発見されたのに対して、深体破片は器面を壙底に接して北東壁寄りから出土。壺は朱塗りで胴部以下はない。台付鉢は、底部のみである。

9号墓：本遺跡の中では、壙底中央に円形のピットをもつ稀なものである。このピットから副葬品は出土していない。副葬品は、墓中央の壙口から深鉢の口縁部・胴部がかたまって出土。底部はない。その傍に両端を打ち欠いた石が置かれている。

10号墓：平面形が円形の墓で、一括土器が壙底を敷き詰めるような形で出土。底部は北壁近く、口縁は東壁沿いに発見された。壙底と土器との間に間層ではなく、また土器片と土器片の間には土・骨等は結まっていたなかった。復原された土器は粗製で、高さ35cm・胴部29cmの大形壺である。器面にL Rの縦文が施され、口唇に4つのB状突起、口唇裏側に一本の沈線がめぐらしている。この土器の直上に大量の木炭が検出された。木炭は一括土器の分布範囲を覆うような形で厚く堆積していた。樹種は不明である。この木炭の<sup>14</sup>C測定年代は、B.P.2,900±50y.(KSU-368)である。

12号墓：壙口から壺の胴部と台付鉢の底部が、壙底の北壁寄りから敲石が一点出土。台付鉢の底部は朱塗りで、体との接合面の縁は磨滅している。壙口の上には玉砂利が敷かれている。

18号墓：29号墓によって切られている。壙底中央から、無文の完形鉢が横転した状態で、さ

らにその北側に軟玉製の勾玉が2個対になって出土。

29号墓：18号墓を切る。北壁に石皿が使用面を下にして出土し、その前方に貝岩製のフレークのかたまり、その後方に壺が口を傾け、さらに鉢もやや横転した形で出土。壺も鉢も完形である。石皿は、細長な安山岩の片側中央がくぼんだ状態のもので、使用面および側面のところどころにベンガラの付着がみられる（図版3の3）。なお、埋土中に山ぶどうの種子が1個出土している<sup>(注1)</sup>。

19号墓：本遺跡の墓のなかで特にきわだった出土例を示すものである。まず、墓中央の壙口からは台付鉢の台部を挿入した精製の注口土器が口を上にして出土。注口土器の口縁部の一部および台付鉢の底部の縁辺は、挿入する際に打ち欠いている。打ち欠いて残った小破片の大部分は埋土中に見られたが、そのうちの台付鉢の1点は別のグリットの包含層中から出土した。また注口土器の器内から土に混じって石やじりが1点出土した。さらに、壙口から、漆器破片、丸玉に近い白玉が北壁・南壁際で発見された。壙中からは、台付鉢が2個、朱塗りの浅鉢（台付の可能性もある）が1個、鉢が2個出土したが、いずれも台部を欠いている。台付鉢は、胴部と台部とが分離されているが、ほぼ同一か所で発見されている。その傍に塗胎漆器の破片が散在している。塗胎漆器（図版3の5）は、浅鉢状のもので、それを意図的に打ちくだいて副葬しているように思われる。壙底からは、朱塗りの浅鉢を石などによって10数点の破片に打ちくだき、破碎された土器片を三分して北壁と中央部と南壁にそれぞれ副葬しているようである。漆器も同様な方法で副葬されたのである。三分された土器片のかたまりが被葬者の頭、胸、足などにそれぞれ対応するものなのかどうかは不明である。ただ、凡むね中央部の土器破片の両端から出土している。以上のように、19号墓は、壙口、壙中、壙底から明らかに副葬品が出土していること、また、壙底にあらかじめ土器を割って副葬していることなどは他に例を見ないものである。壙口出土の注口土器、壙底出土の浅鉢は、いずれも精製土器で、前者がC字を並列させた文様であるのに対し、後者は、C字を互い違いに組み合わせてつくられたものである。

20号墓：壙口部に粘土を被覆させている。中央部が凹み、上下二枚の黒土に挟まれるが、上が自然堆積層で、下が埋土である。粘土の上に深鉢の口縁部破片が置かれていたが粘土直下から副葬品は出土していない。壙底に、径13cm・長さ30cmのハルニレを半割した炭化材に対して炭化した丸太状のナラ（径8cm・長さ18cm）が直交するような形で出土している。これらの物がどういう意味をもっているのかは不明である。

21号墓：壙口と壙底から深鉢が各1個出土している。壙口出土の深鉢は北壁寄りに口縁部・胴部破片が散らばって、底部に近い破片は中央部付近で出土した。壙底のものは、底部を欠いた胴部のみが壙底にやや斜めに置かれている。口縁部は、その直上に散らばっていた。骨片等は入っていない。

27号墓：20号墓と同じように壙口部に粘土が被覆され、中央がくぼむ。粘土の直上、直下からは、副葬品は出土しなかった。壙底にベンガラが散かれ、それに密着して漆器と思われる細

い棒状の遺物が出土した。現在分析依頼中である。副葬品はそれのみである。

28号墓：壇中の東壁寄りから、台付鉢の底部が出土。底部は数点に割れている。

40号墓：壇中のほぼ中央から鉢が、口縁部・胴部が10数点ほどに散らばって出土。鉢は肩部に、くの字の張り出しをもつもので、その下に繩文が施文される。

55号墓：墓群の中で唯一頭位の方向がうかがえるものである。壇底一面にベンガラが塗かれそれに食い込むように数珠つなぎになった100個の丸玉が、西南壁寄りに長軸に対して直交するように出土した。その東方に勾玉が2個、やや距離をへだててあり、その更に東方の北壁際には10個の丸玉が、これも数珠状になって出土。西方の丸玉群は、数珠つなぎになった首飾りを二つ折りにして被葬者の首に掛けたものと思われ、東方の丸玉群は、円状にめぐることから、足首にはめていたものと想定される。ただ、西方の丸玉群と勾玉の関係は考慮を要する。すなわち、北壁寄りの丸玉は小さく、下にいくに従って大きくなる。そのことからするとあるいは2個の勾玉は、南方の大きな丸玉につながることも考えられる。東方の丸玉も、上にある6個の丸玉が大きく、下にもぐる5個の丸玉は小さい。前者の丸玉は、西方の丸玉群のどれよりも大きいものである。玉の出土位置から考えると、被葬者は、頭位を北西に向かって仰臥屈葬の形で埋葬されたものと思われる。

56号墓：壇口のほぼ中央から深鉢の口縁部・胴部が出土。底部はない。

62号墓：20号墓と同じように壇口部に粘土が被覆されている。粘土の中央部はややくぼみ、そのくぼんだところに別個体の鉢破片と石やじりが1点出土した。粘土の中央は赤褐色をなし、炭化物が点在することから、火を受けた痕跡が認められる。鉢破片、石やじりは焼けていない。

68号墓：壇口と壇底から同一個体の鉢の口縁がそれぞれ出土し、壇底からは南壁寄りで軟玉製の大形の玉が1個、壇底中央にはベンガラが薄く認められる。鉢は底部ではなく、口縁部・胴部も半分しかない。

71号墓：壇口の北壁寄りに石刀・石斧・石やじり・凹石がややかたまって出土した。石刀は一旦折れたものを別な用途として再利用している。石器のみが副葬されているものは本例以外には確認されていない。

以上の主な墓以外に、15号墓では壇口部の上に玉砂利が散かれ、59号墓では粘土を被覆し33号墓・34号墓・60号墓では壇底にベンガラが発見されている。これらの墓にも副葬品があったと思われるが、調査時点では確認できなかった。また、30号墓では、オニグレミの核片が1点出土している。

1号焼土：平坦部にあり、VII層を10cmほど掘り下げたところで獸骨片の広がりが認められ、その下に焼土がある。焼土の部分は、浅皿状にくぼみ、焼土中には獸骨片は混入せずレンズ状の堆積をする(図版3の3)。焼土周辺の獸骨片を含む黒褐色土層を掘り下げるとき30cm内外の円形ピット10個ほど発見された。それらは、焼土を取り囲むように配列されている。このピット群はどういう性格のものかは不明である。北側の広がりは、用地外のため調査できずその全容はつかむことはできなかった。獸骨は、ほとんどが火を受けている。このような獸骨

の出方は2号・3号・4号・5号・6号焼土でも同様である。獸骨片は、ほとんどがエゾシカである。エゾシカの骨片に混じって、1号焼土ではイノシシの基節骨・末節骨が各1点、2号焼土ではヒグマの中手・中足骨が1点、3号焼土ではキツネの脛骨が1点、4号焼土ではイノシシの基節骨・末節骨が各1点出土している。以上のような獸骨の出土状態からすると、1号焼土以外のものにも、ピット群がめぐっていた可能性も考えられる。なお、1号焼土中から骨針（図3-129の181・182）が2点出土。同一個体と思われ、体部が丸く、先端が細くなる。

#### 小括

遺構は、すべてVI層の火山灰下から出土し、VII層の薄い部分ではローム層を切って底面がつくるられるが、厚いところでは黒色土層中に掘り込まれることがある。遺構の時期は、すべて縄文時代晩期中葉のものである。出土土器のなかには極く少量中期・後期・晩期初頭のものが含まれるがそれに伴う遺構は発見されなかった。

住居跡は、一新しか出土しなかったが、この問題についてはまとめでふれるので省略する。

墓群は、粘土を被覆する墓が同一か所に3個かたまって見られることなどを考慮すると、2~3個の墓が一単位を形成していたものと思われる。これらの墓に共通していることは、その規模が長径1m前後の長円形あるいは円形で、隅丸方形のものはないこと、そして、埋土中に炭化物を含んでいることである。人骨は、すべて骨片で、部位が判別できるものはない。

墓のあり方は、大きく2つに分けることが可能である。ひとつは、壇口部を粘土あるいは小砂利によって被覆するもので全体の10%の割合で出土する。粘土で被覆する例は5個、小砂利の例は、2個である。前者は、粘土の中央部がたわんでいるが墓の構築当時はマウンドを形成していたと思われる。そのうち、62号墓は、その上で焚火を行った可能性が強い。副葬品は、主に粘土の上と壇底に見られるが、粘土直下の出土例はない。粘土の上に副葬される土器は、口縁部破片で、完形になるものではなく、また、土器は精製のものは出土していない。玉類は、副葬されている例はない。後者は、2例しかないこともあって特徴づける傾向は認められない。他方、上部構造をもたない墓は、もつものに比較して副葬品がバラエティに富み、かつ副葬の仕方に異なった傾向が認められる。特に、19号墓は壇口・壇中・壇底から副葬品が出土し、その内訳を見ると墓群出土の副葬品の種類をほとんど網羅している。上部構造をもつ墓には見られなかった玉類は、4つの墓（18号墓・19号墓・55号墓・68号墓）から出土し、ほとんど壇底部である。そのうち、55号墓は首だけではなく、足首にも丸玉が付けられた可能性をもつもので、それから頭位を推定することのできる唯一の例である。また、玉類の出土する墓の壇底には、ベンガラが認められるものが多い。副葬されている遺物は、土器が多く、壺・浅鉢・鉢・台付鉢・深鉢とこの時期の器形がほとんど網羅されている。副葬される位置は、壇口、壇中、壇底から出土する。出土する土器のうち、底部を欠いているものが多く、完形のものは少ない。底部に穿孔しているものは1例もない。石器は、壇口と壇底に見られる例が多い。スクレイバーの類は全く出土していないのに対し、敲石・台石などの加工工具が少ないながらも出土している。石やじりは、3個の墓から出土しているが、いずれもアスファルトは付着していない。玉

類は、丸玉が大半で東北地方にある白玉はほとんどない。丸玉は滑石製で、勾玉は軟玉製である。確實にヒスイと断定できるものはない。

- 注1 北海道開拓記念館研究職員 矢野牧夫氏の教示を得た。
- 注2 北海道開拓記念館研究職員 三野紀雄氏の教示を得た。
- 注3 同上

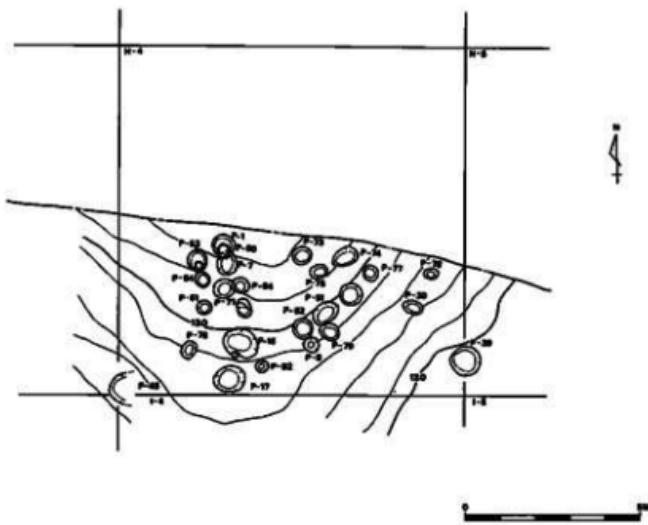


圖 3-4 H-4 区遺構位置圖

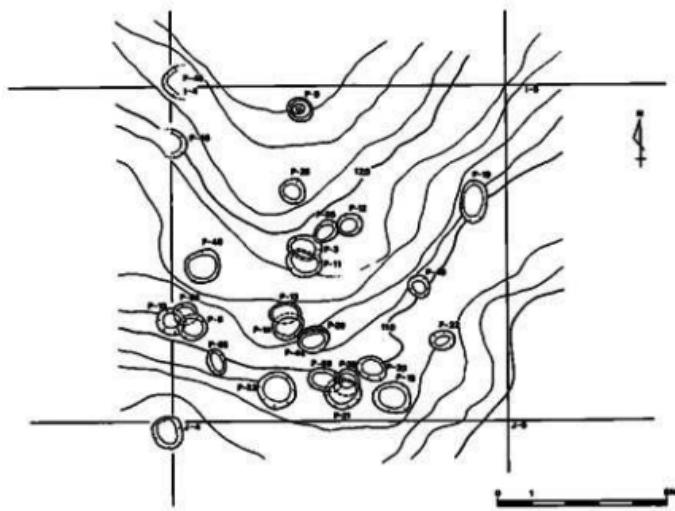


图 3-5 I-4 区造構位置図

表3-1 造構一覧表

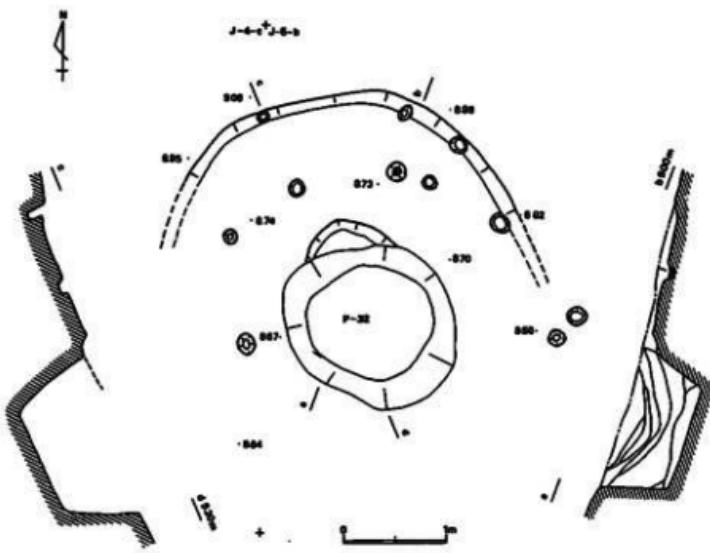
基礎

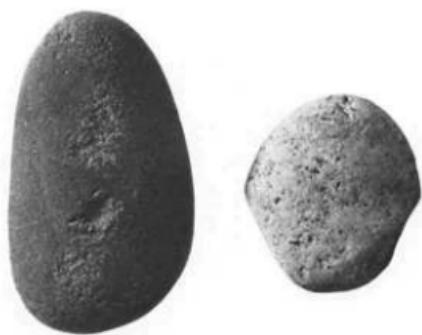
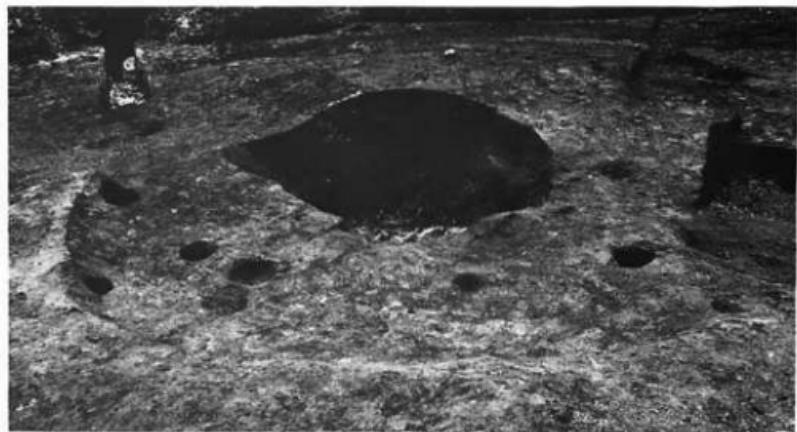
名前	発源区	平面形	(長径上)×(長底下)×(短径上)×(短底下)	長軸 方向	傾位	備考
1 H-4-b		円 形	(0.77)×(0.51)×(0.67)×(0.54)	N-24.5°-E	不明	P-80に切られる
2 I-5-b		長円形	1.07×0.65×0.62×0.42	N-72.5°-E	#	
3 I-4-a・I-4-b		円 形	(1.06)×(0.54)×(0.96)×(0.47)	N-31°-W	#	P-11を切る
4 H-3-c		#	1.08×0.65×1.04×0.69	N-37°-W	#	
5 I-3-d		#	(0.82)×(0.59)×(0.73)×(0.53)	N-25°-W	#	P-35を切る
6 H-4-d		長円形	1.05×0.45×0.66×0.37	N-19.5°-W	#	
8 I-4-b		#	0.93×0.89×0.67×0.52	N-39°-E	#	P-66を切る
9 I-4-a		円 形	0.85×0.65×0.77×0.56	N-39°-W	#	
10 I-3-c・I-4-b		#	0.76×0.52×0.70×0.50	N-9.5°-E	#	P-66に切られる
11 I-4-a・I-4-b		#	(1.04)×(0.55)×1.00×0.73	N-9.5°-E	#	P-55とP-3を切る
12 I-4-d		#	(0.75)×(0.55)×0.65×0.48	N-54°-E	#	P-55を切る
13 I-4-b		長円形	(0.86)×(0.62)×(0.76)×(0.56)	N-89.5°-W	#	P-14に切られる
14 I-4-b		#	0.93×0.78×(0.76)×(0.54)	N-63.5°-E	#	P-13を切る
15 I-4-c		円 形	1.03×0.68×0.94×0.69	N-89.5°-W	#	
16 H-4-b		長円形	0.97×0.67×0.76×0.54	N-81.5°-W	#	
17 H-4-c		#	0.82×0.55×0.72×0.45	N-72.5°-W	#	
18 J-4-d		#	(0.94)×(0.62)×(0.65)×(0.52)	N-65°-W	#	P-29を切る
19 I-4-d		#	1.08×0.91×0.83×0.52	N-2°-E	#	
20 I-4-c		#	0.96×0.63×0.76×0.46	N-68°-E	#	
21 I-4-b・I-4-c		#	(1.13)×(0.90)×(0.94)×(0.72)	N-38.5°-E	#	P-36を切る
22 I-4-c		#	0.72×0.52×0.59×0.37	N-30.5°-E	#	
23 I-4-b		円 形	1.20×0.93×1.13×0.81	N-28°-W	#	
24 I-5-d		#	0.78×0.74×0.70×0.58	N-4.5°-W	#	
25 I-5-c・I-5-d		#	1.29×1.06×1.23×0.92	N-14°-W	#	
26 I-4-a		長円形	0.75×0.54×0.53×0.40	N-63°-W	#	
27 H-3-b・I-3-a		#	1.16×0.81×0.69×0.51	N-4.5°-E	#	
28 I-4-b		#	0.91×0.77×(0.60)×0.52	N-82°-E	#	P-44を切る
29 J-4-d		#	(0.79)×(0.56)×(0.62)×(0.48)	N-66°-W	#	P-18に切られる
30 H-3-b		#	0.63×0.46×0.56×0.30	N-42°-W	#	
31 I-6-a		円 形	0.77×0.57×0.73×0.50	N-41.5°-W	#	
32 J-5-b		長円形	1.82×1.19×1.51×1.07	N-64°-W	#	H-1床面を切る
33 J-4-d・J-5-a		#	1.24×1.03×0.90×0.72	N-10.5°-W	#	
34 J-4-d		#	0.96×0.82×0.69×0.36	N-39°-W	#	
35 I-3-d		円 形	(1.37)×(1.02)×(1.32)×(1.05)	N-64.5°-W	#	P-5を切る
36 I-4-b・I-4-c		#	(1.04)×(0.92)×(1.00)×(0.89)	N-18.5°-E	#	P-21に切られる
38 H-4-c		長円形	0.64×0.53×0.45×0.32	N-72°-W	#	
39 H-4-c・H-5-b		#	0.95×0.85×0.75×0.60	N-39.5°-E	#	
40 I-6-a		円 形	0.88×0.70×0.78×0.60	N-23.5°-W	#	
41 I-6-a		#	0.62×0.46×0.53×0.37	N-65.5°-E	#	
42 I-3-d		#	0.99×0.66×0.91×0.68	N-44.5°-W	#	
43 I-3-d		#	0.90×0.53×0.75×0.58	N-12°-E	#	
44 I-4-b		長円形	1.06×0.91×0.86×0.65	N-82°-E	#	P-28に切られる
45 H-3-c・I-3-d		円形(?)	(1.01)×(0.78)×(0.98)×(0.69)	N-73°-E	#	
46 I-3-d・I-4-a		#(?)	(0.80)×(0.68)×(0.71)×(0.46)	N-70.5°-E	#	
47 J-3-c・J-3-d		長円形	0.87×0.67×0.75×0.55	N-8.5°-W	#	
48 I-4-b		#	0.94×0.72×0.74×0.64	N-2.5°-W	#	
49 I-4-c		円 形	0.66×0.47×0.64×0.52	N-13.5°-E	#	
50 H-4-c		#	0.58×0.34×0.56×0.38	N-58.5°-E	#	

名 称	発 振 区	平 面 形	(長径上)・(長径下)×(幅径上)・(幅径下)m	長 軸 方 面	頂 位	備 考
51	H - 4 - c	長 円 形	(0.81)・(0.64)×0.59・0.49	N - 49.5° - E	不 明	
52	H - 4 - c	円 形	0.50・0.27×0.49・0.20	N - 14.5° - W	"	
53	H - 4 - b	長 円 形	0.64・0.45×0.51・0.34	N - 17° - W	"	
55	I - 4 - a + I - 4 - d	"	0.89・0.65×0.56・0.30	N - 60° - E	P-11とP-12に上面を切られる	
56	J - 5 - a	円 形	0.50・0.34×0.43・0.29	N - 26° - E	不 明	
57	I - 3 - a	長 円 形	1.15・0.86×0.97・0.66	N - 56° - W	"	
58	k - 4 - d + k - 4 - c	円 形	0.67・0.34×0.62・0.42	N - 21.5° - W	"	
59	I - 4 - b + I - 4 - c	長 円 形	(0.90)・(0.61)×0.58・0.35	N - 85.5° - W	"	
60	J - 4 - d	"	0.74・0.56×0.59・0.44	N - 26° - W	"	
62	I - 3 - a	円 形	1.06・0.78×0.98・0.76	N - 25° - W	"	
63	H - 4 - b	長 円 形	0.52・0.30×0.42・0.21	N - 41° - W	"	
64	I - 4 - b	"	0.78・0.54×0.73・0.46	N - 29.5° - W	"	
65	I - 4 - b	"	0.69・0.32×0.60・0.31	N - 51° - W	"	
66	H - 4 - b	"	0.72・0.53×0.65・0.45	N - 51.5° - E	P-5に切られ、P-10を切る	
67	J - 4 - c	"	0.90・0.72×0.77・0.53	N - 41° - E	"	
68	J - 4 - d	円 形	0.72・0.46×0.70・0.42	N - 51.5° - E	"	
69	J - 4 - d	長 円 形	1.03・0.68×0.76・0.49	N - 44° - E	"	
70	H - 3 - c	"	0.45・0.26×0.31・0.16	N - 82° - E	"	
71	H - 4 - b	"	(0.70)・(0.53)×(0.56)・(0.36)	N - 78° - W	"	
72	H - 4 - b	円 形	(0.76)・(0.56)×0.73・0.52	N - 45.5° - W	P-1とP-80を切る	
73	H - 4 - c	長 円 形	0.60・0.43×0.49・0.30	N - 41° - W	"	
74	H - 4 - c	"	0.63・0.44×0.58・0.36	N - 61.5° - E	"	
80	H - 4 - b	円 形	0.54・0.39×(0.51)・(0.38)	N - 48.5° - E	P-72に切られる	
83	H - 4 - b	"	(0.55)・(0.39)×(0.50)・(0.39)	N - 46° - E	"	

### 焼土

名 称	発 振 区	規 模 (m)	出 土 遺 物	備 考
1	H-4-b + H-4-c	0.64×0.60	骨針出土	焼土のまわりに小ピットあり
2	I-4-a + I-4-d	0.52×0.4		
3	J-5-a + J-5-b	0.76×0.68		
4	J-5-a + J-5-d	0.78×0.44		
5	J-5-a + J-5-d	0.22×0.12		
6	K-4-d	0.44×0.20		





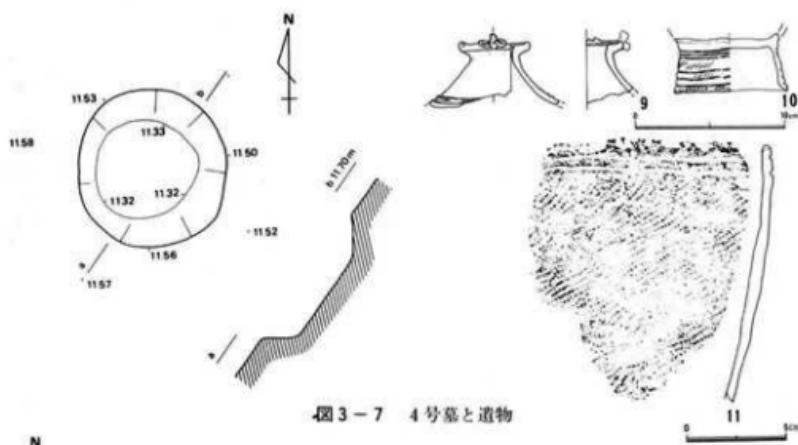


図3-7 4号墓と遺物

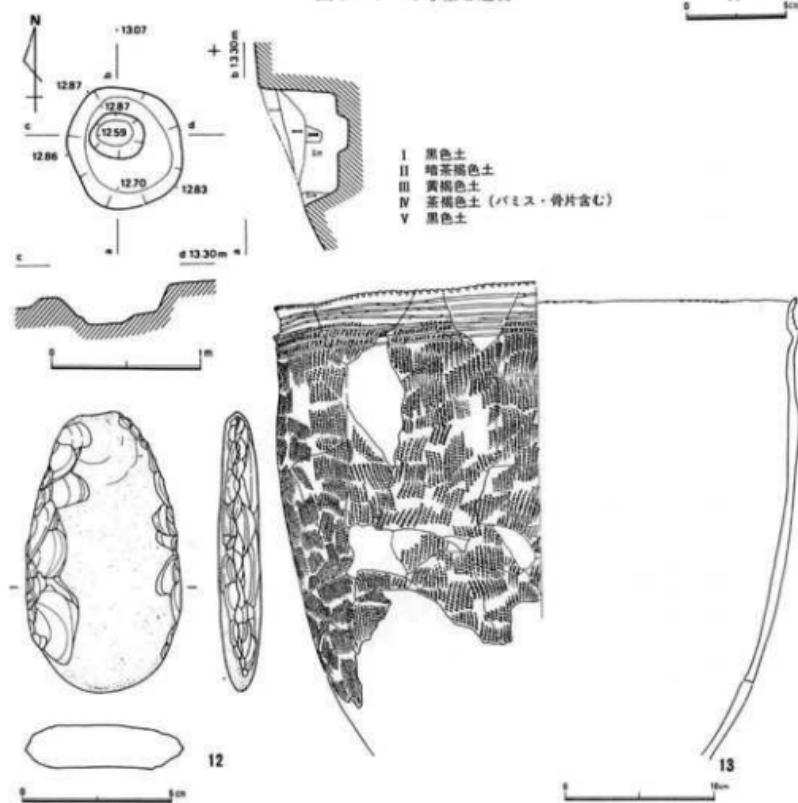
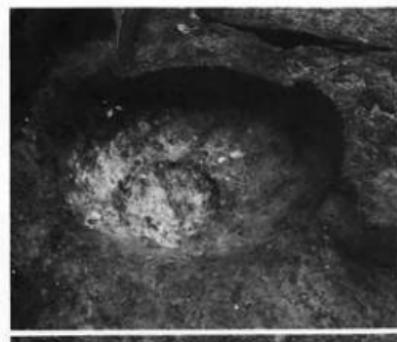
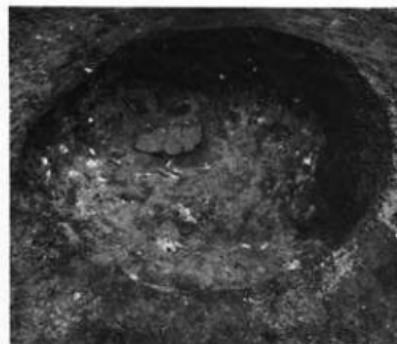
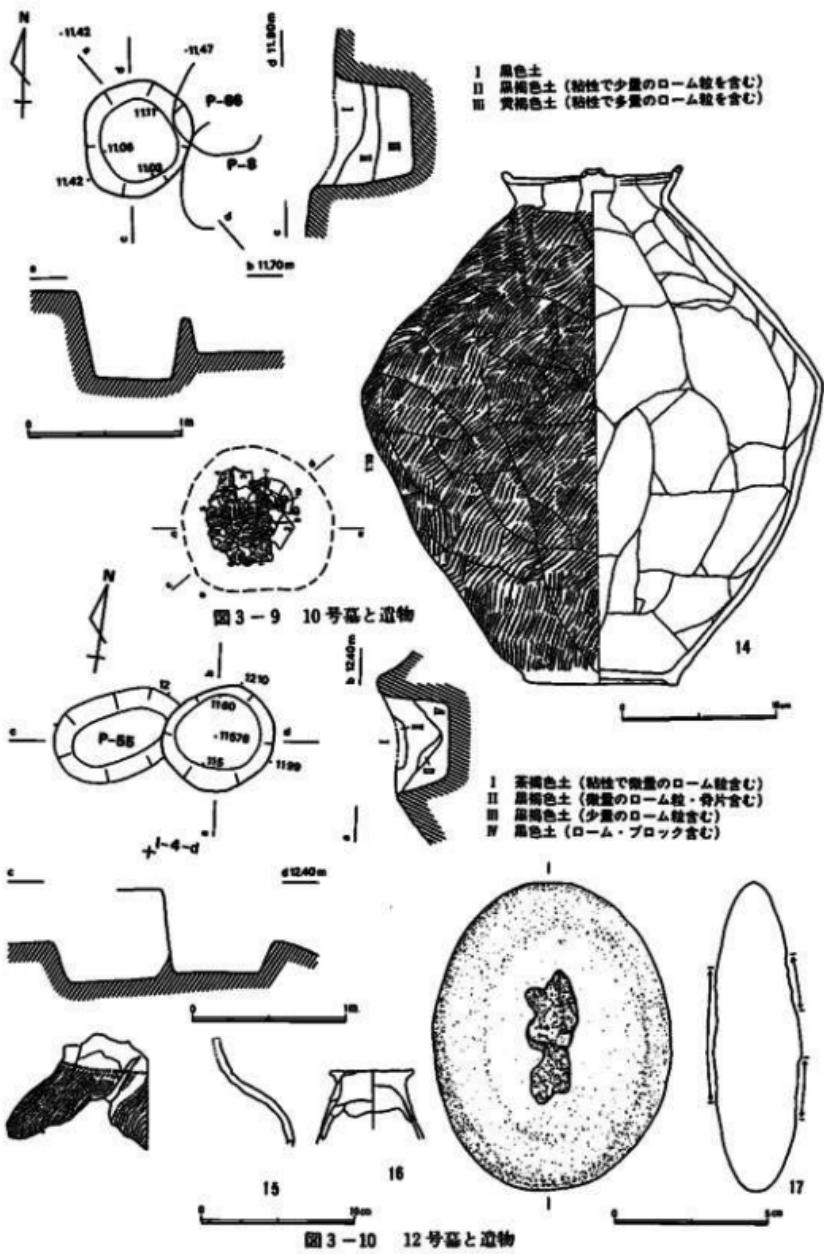
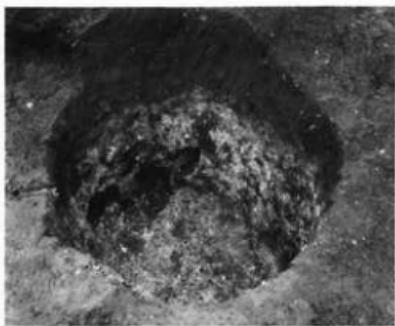
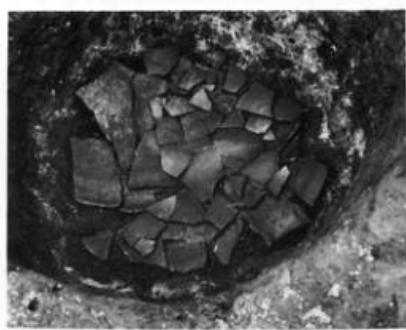


図3-8 9号墓と遺物







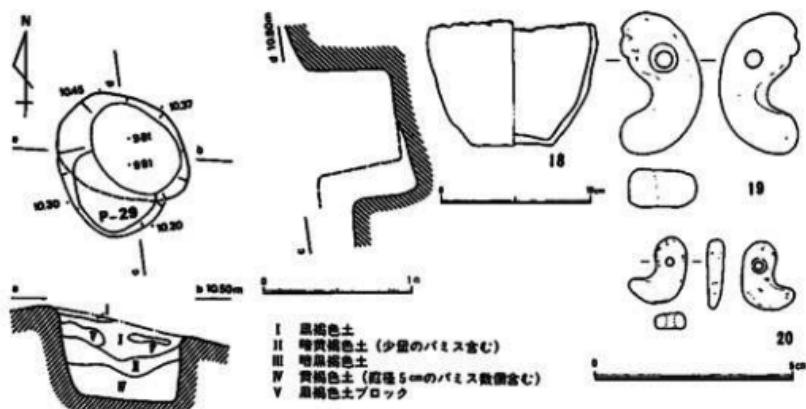


図3-11 18号墓と遺物

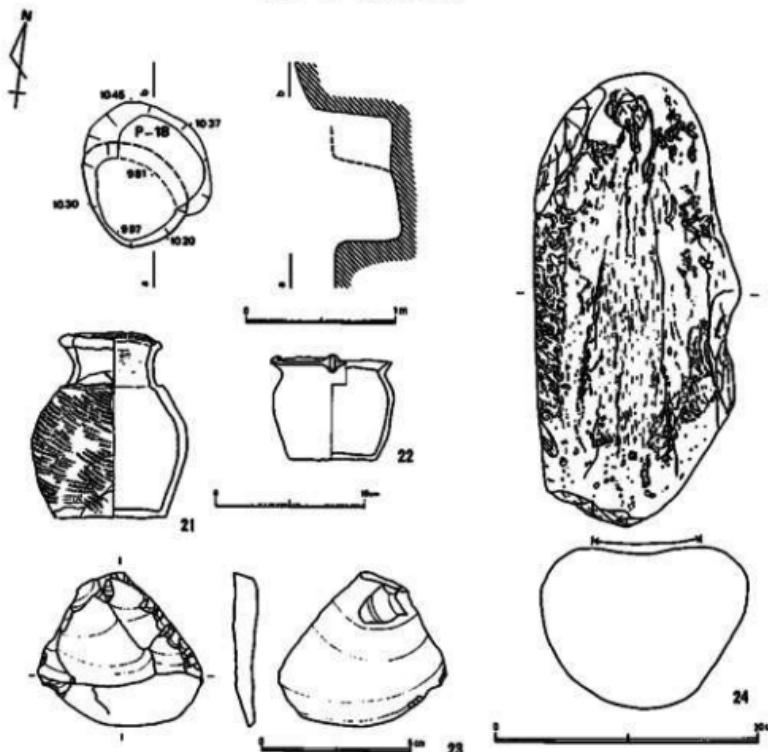
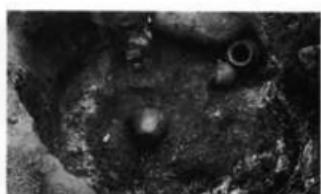


図3-12 29号墓と遺物



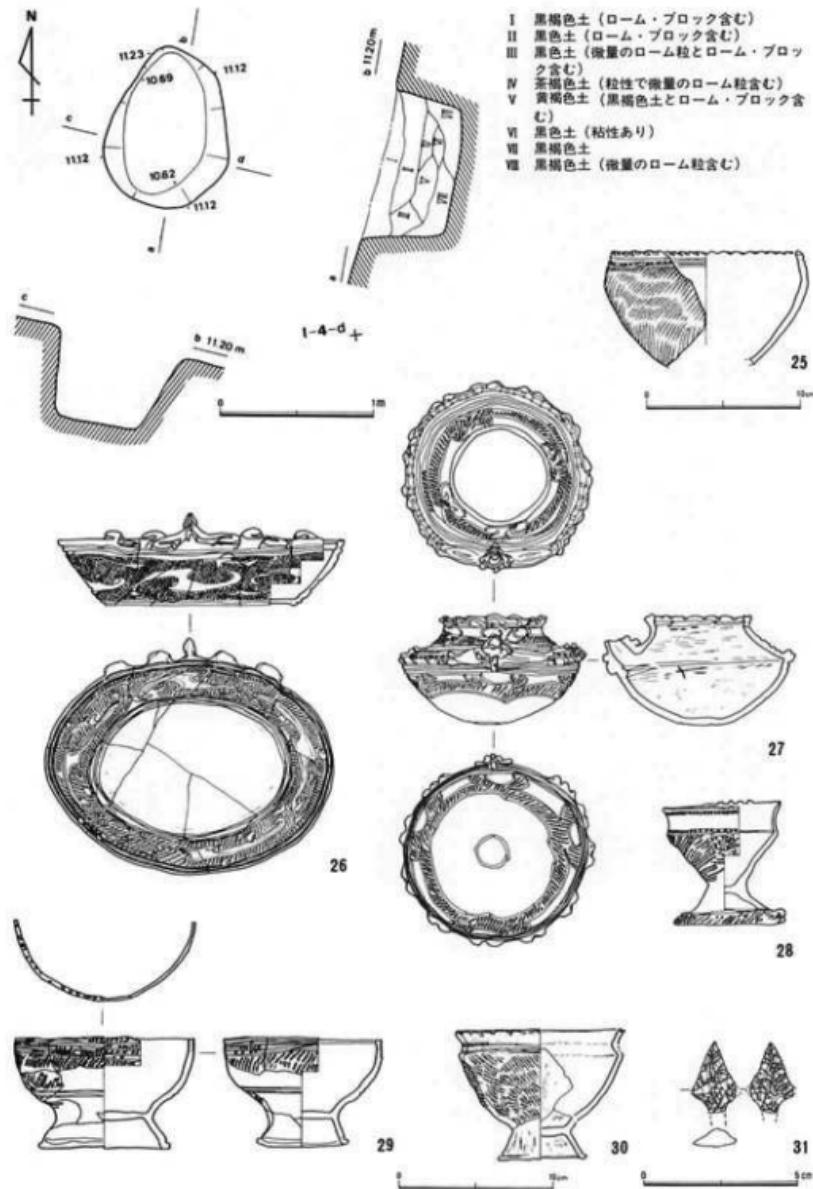
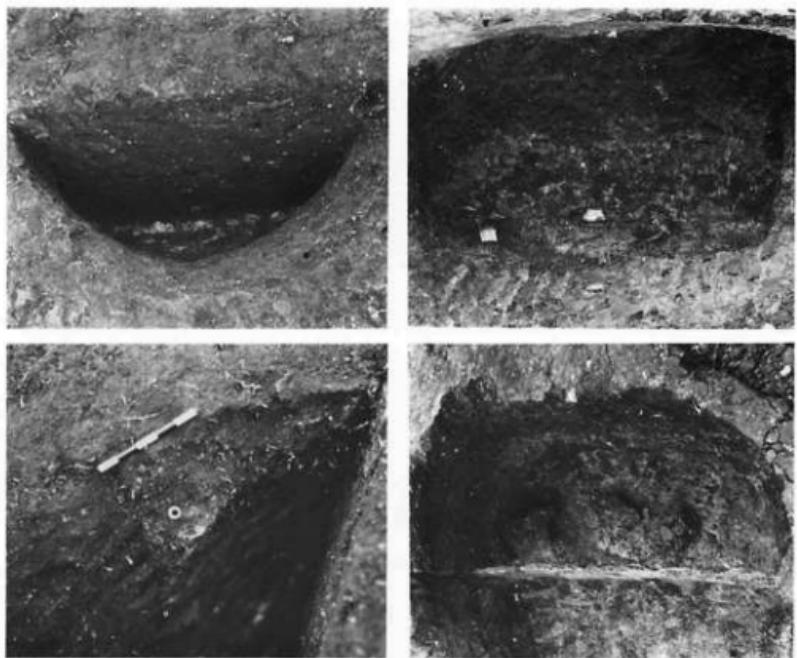


図3-13 19号墓と遺物



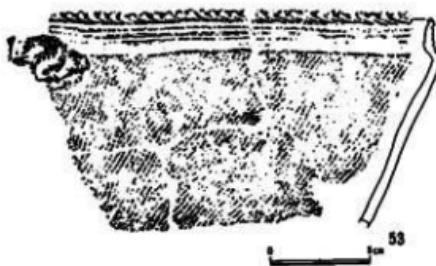
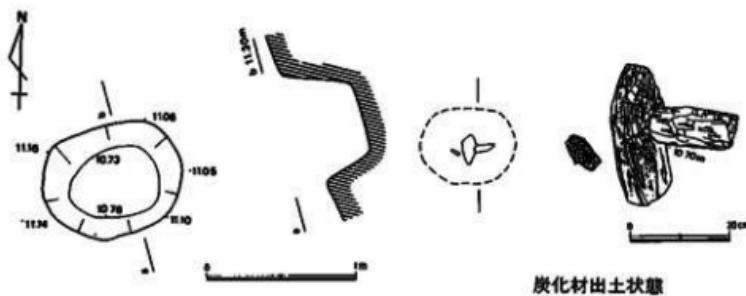
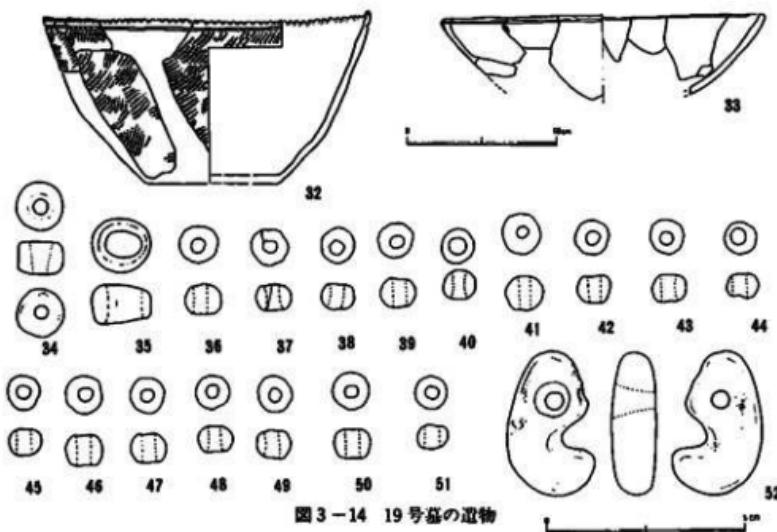
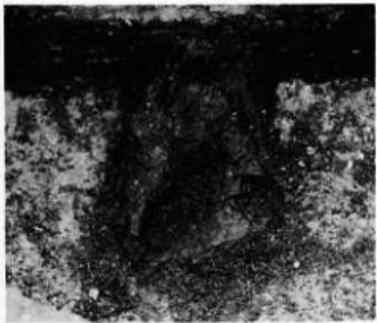
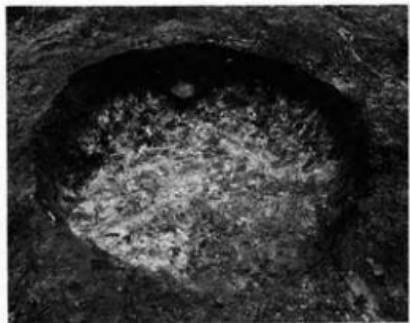
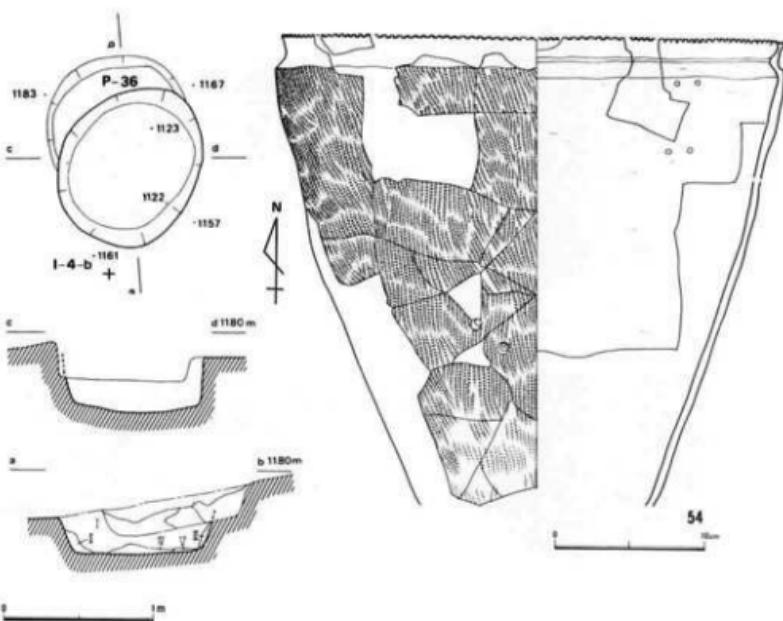


図3-15 20号墓と遺物





- I 黄褐色土（多量のローム粒に  
黄褐色土を混える）
- II 茶褐色土（少量のローム粒含む）
- III 黄色土
- IV 黒色土（少量のローム粒含む）
- V 黒褐色土（ローム粒含む）

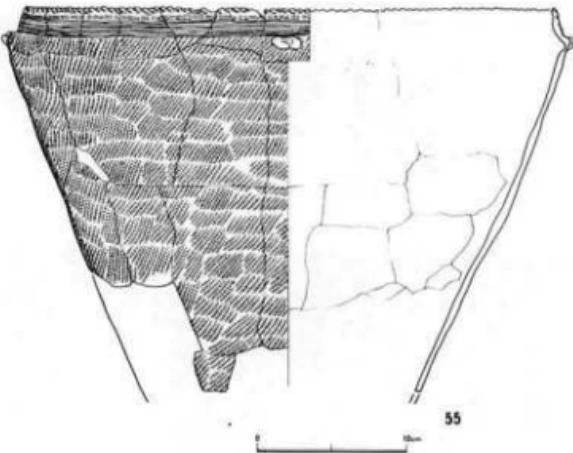
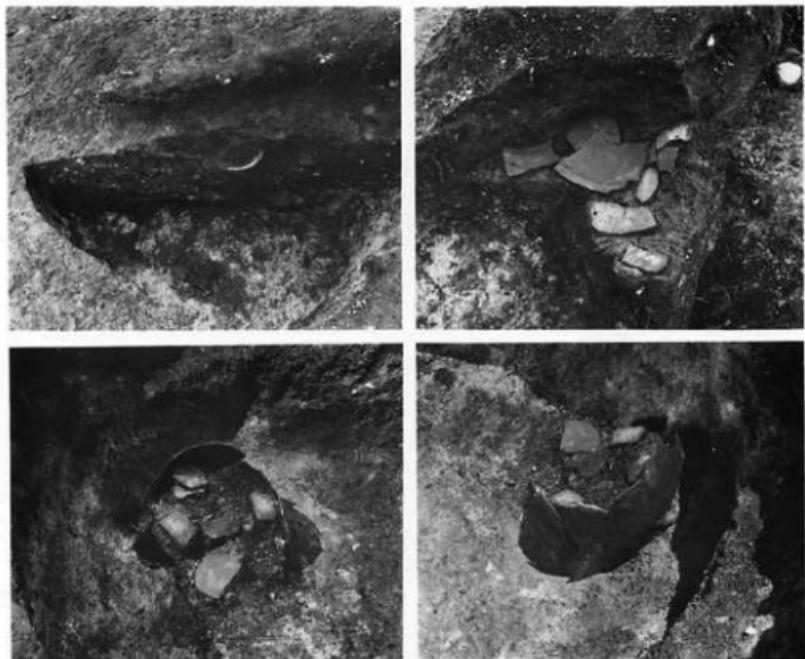


図3-16 21号墓と遺物



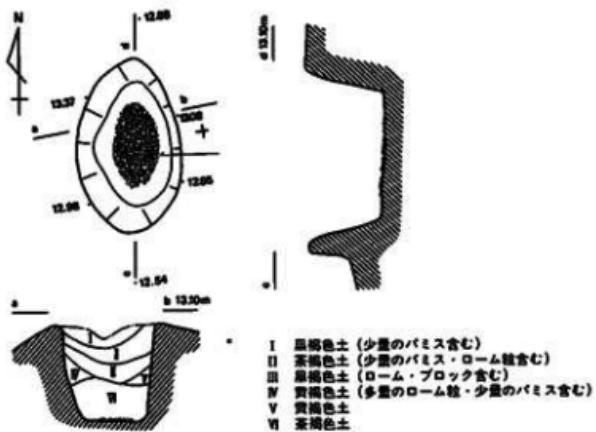


図3-17 27号墓と遺物

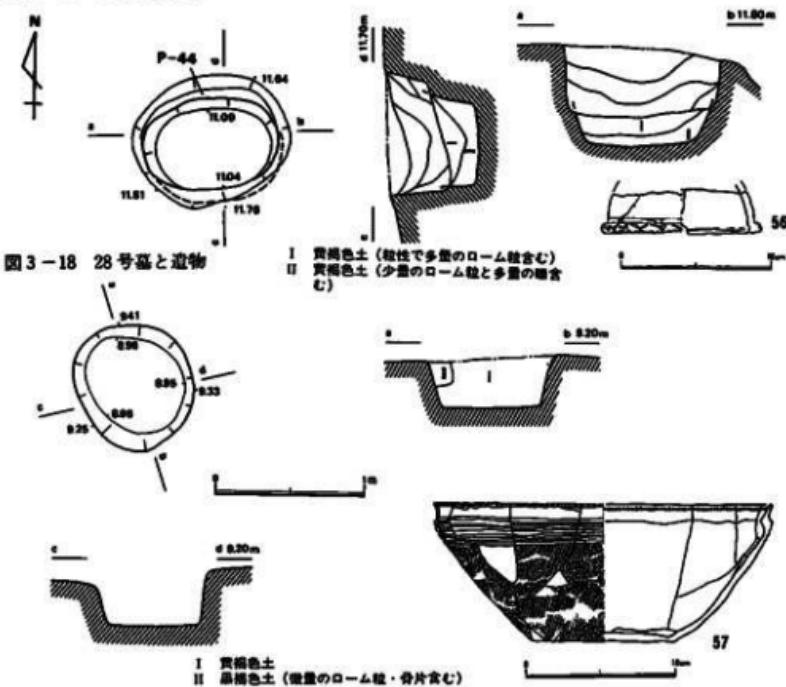
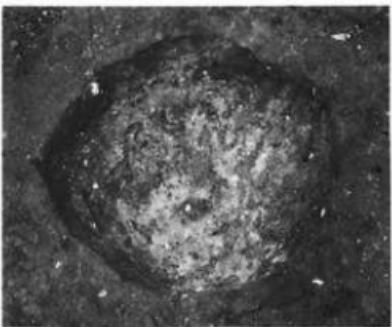
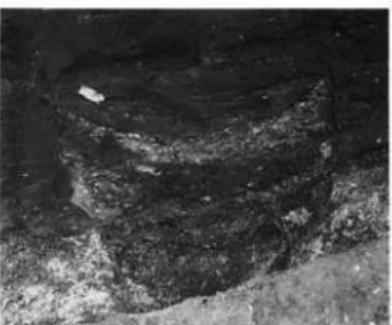
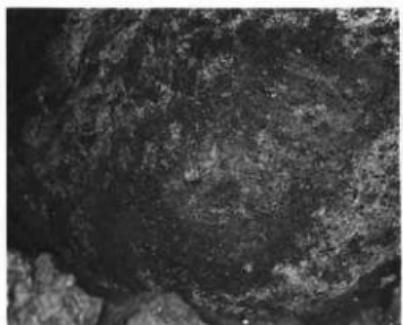


図3-19 40号墓と遺物



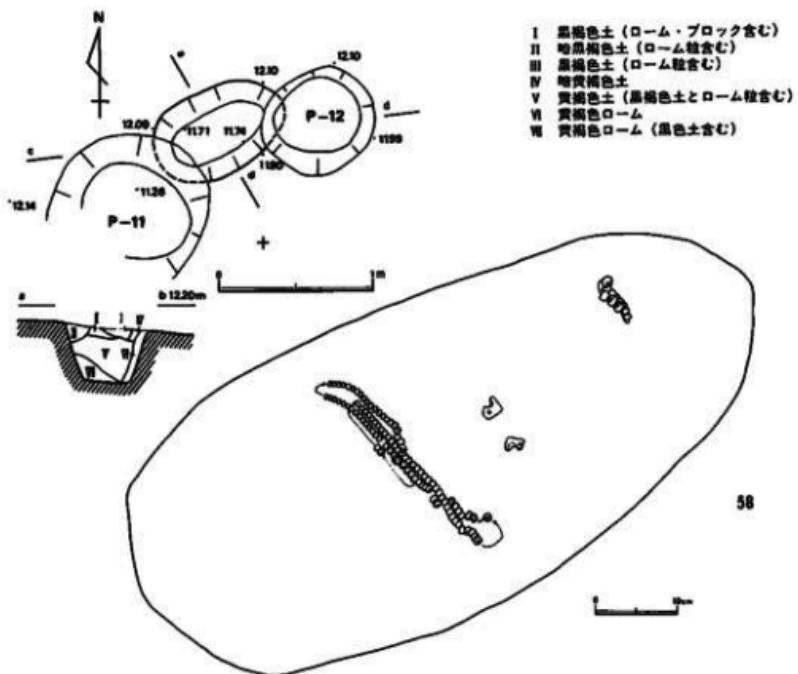


図3-20 55号墓と遺物

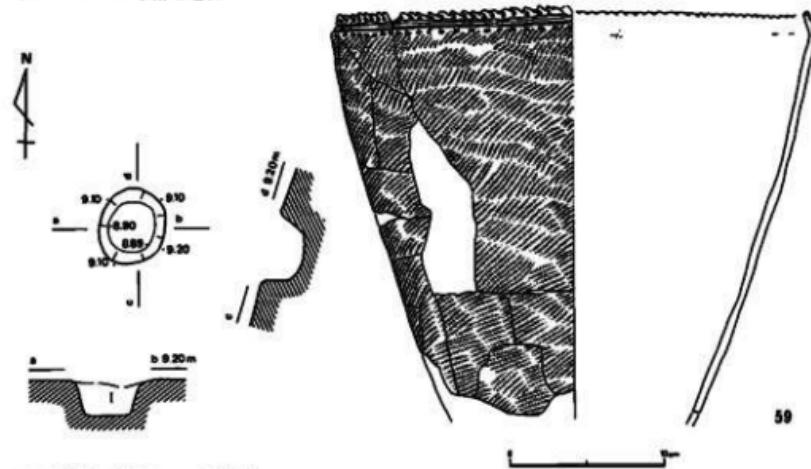
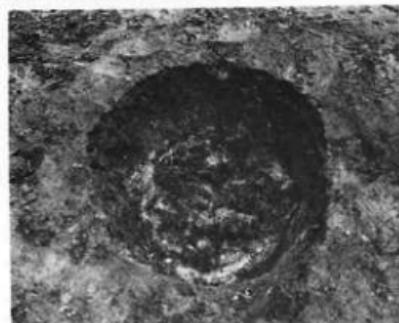
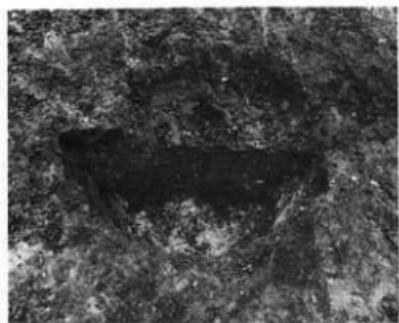
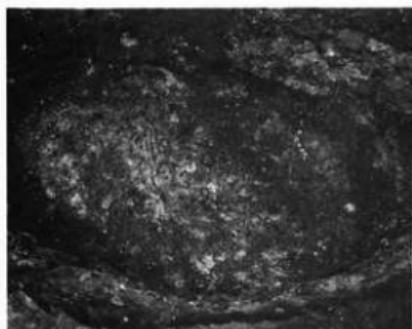


図3-21 56号墓と遺物



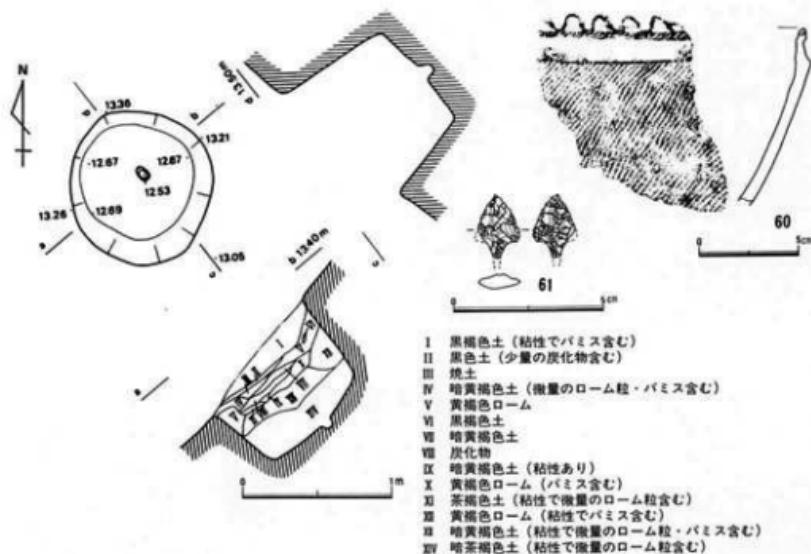


図 3-22 62 号墓と遺物

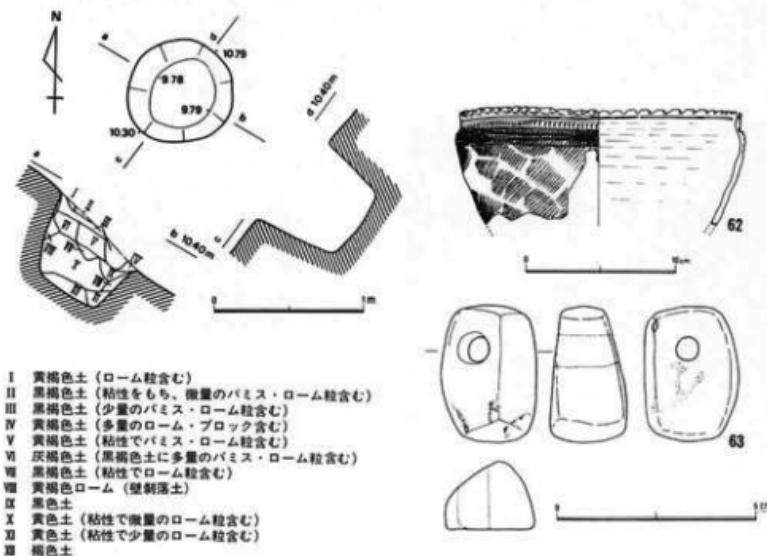
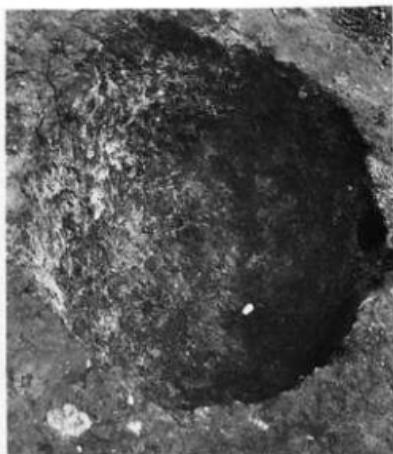
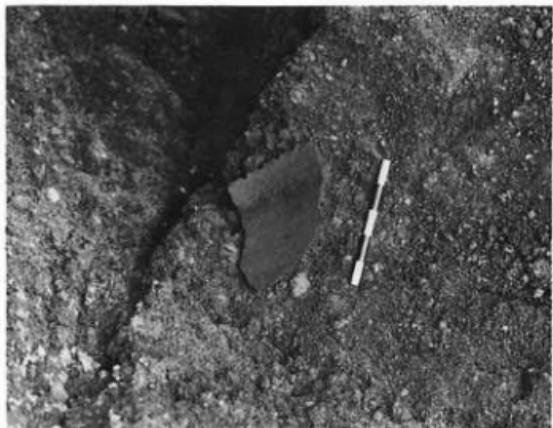


図 3-23 68 号墓と遺物



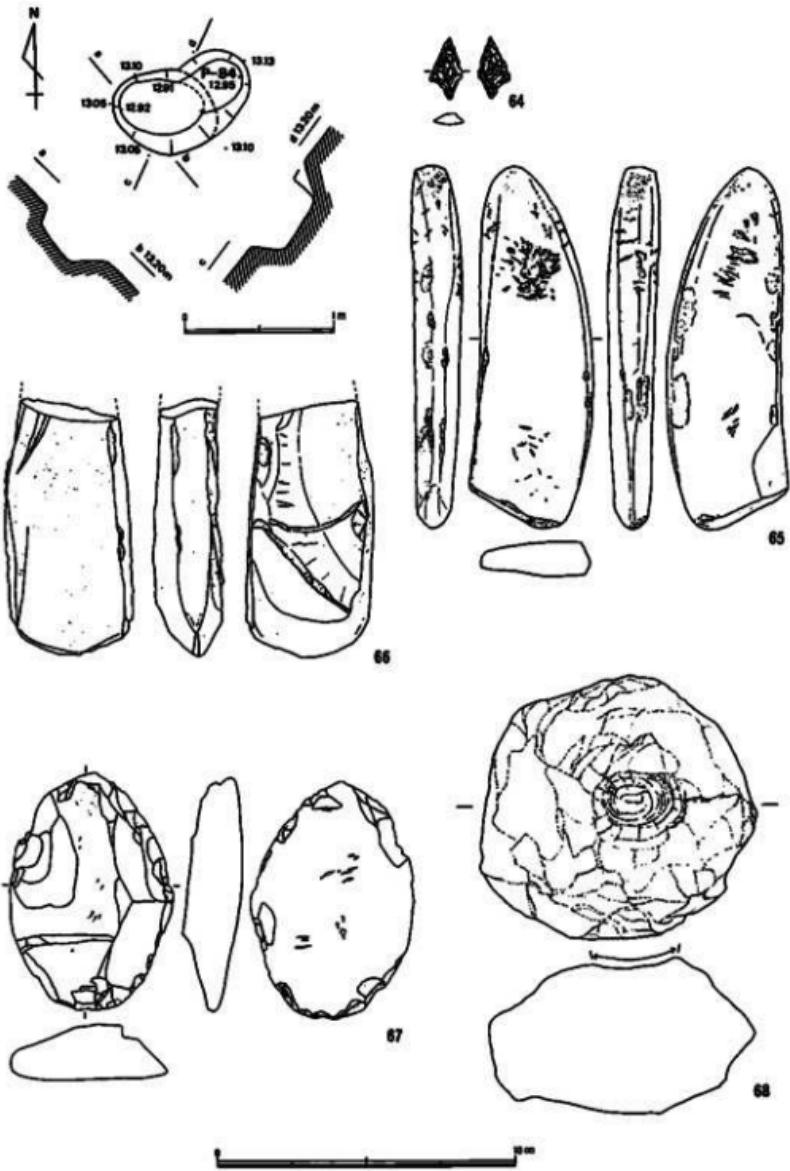
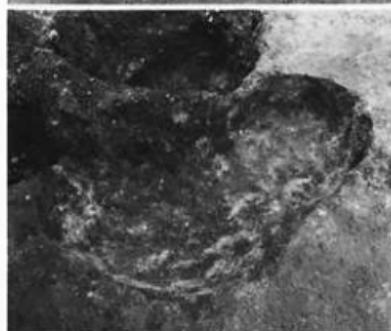


図3-24 71号墓と遺物



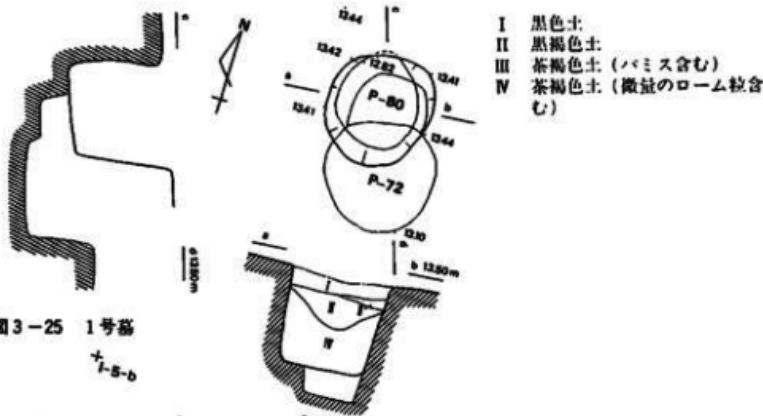


図3-25 1号坑

+  
I-5-b

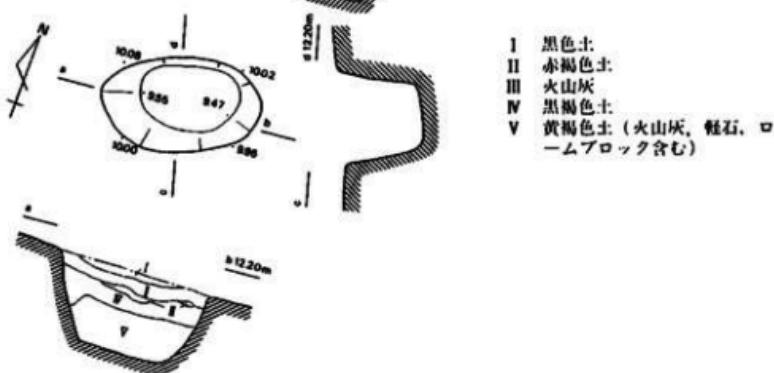


図3-26 2号坑

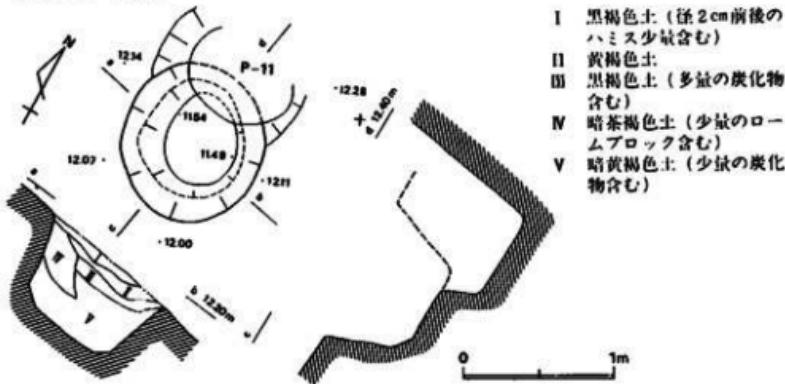


図3-27 3号坑

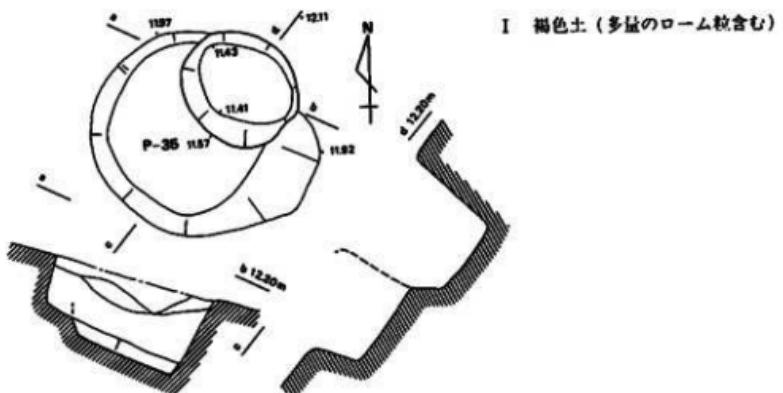


図3-28 5号墓

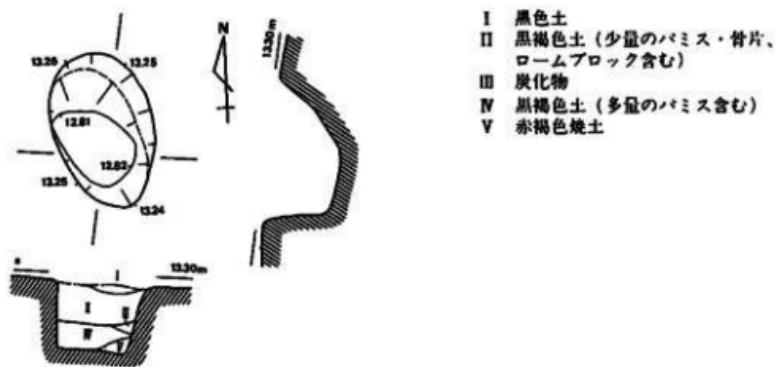


図3-29 6号墓

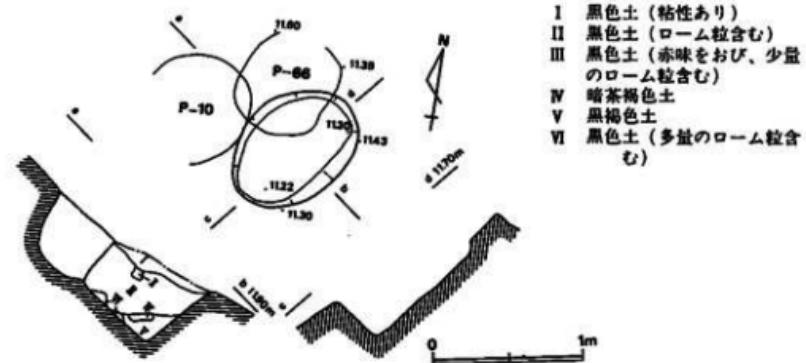


図3-30 8号墓

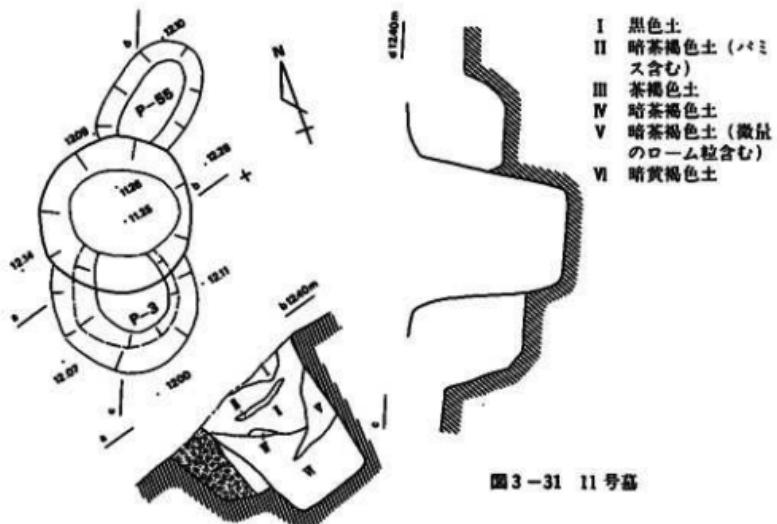


図3-31 11号墓

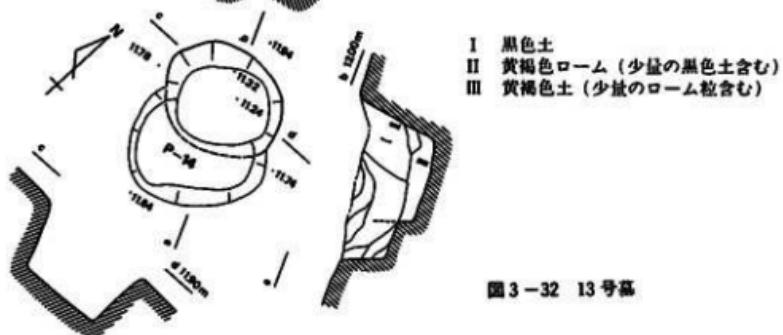


図3-32 13号墓

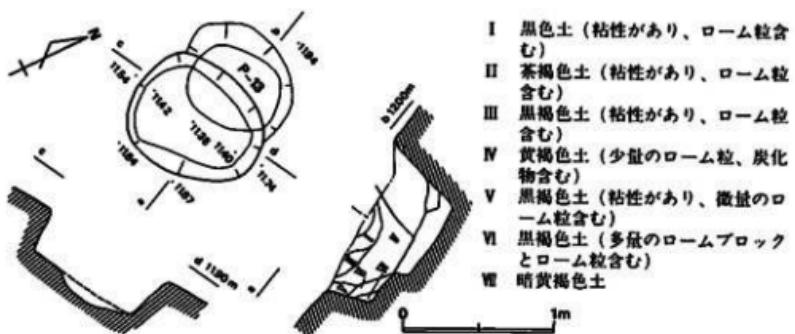


図3-33 14号墓

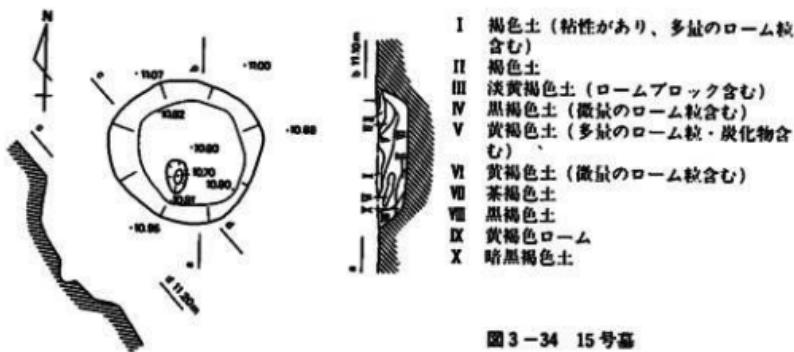


図3-34 15号墓

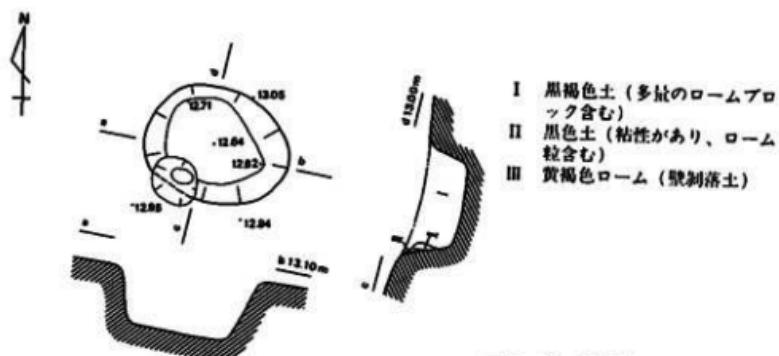


図3-35 16号墓

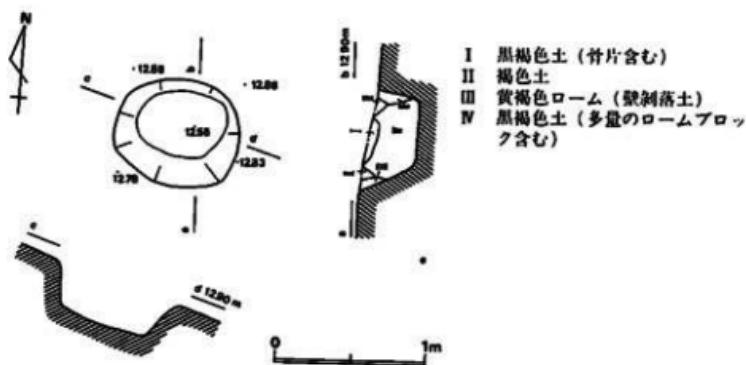


図3-36 17号墓

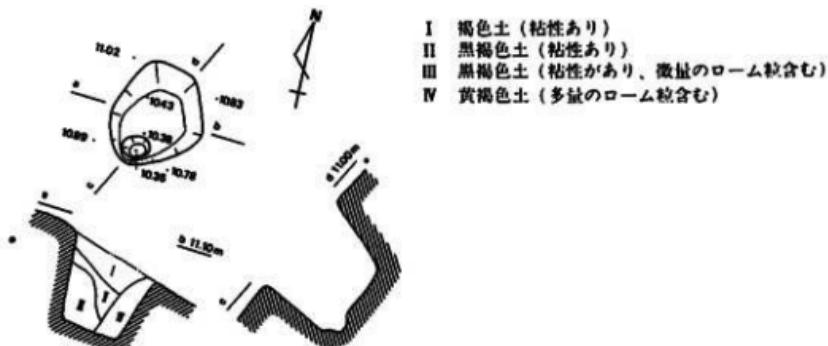


図3-37 22号墓

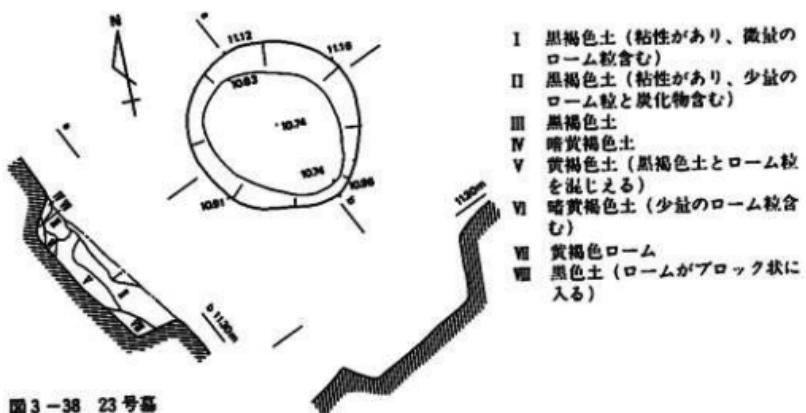


図3-38 23号墓

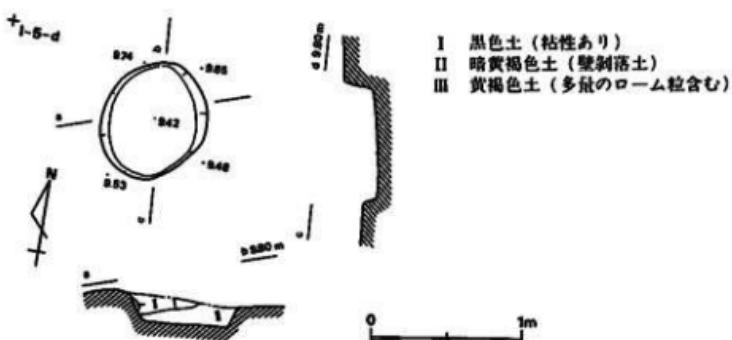


図3-39 24号墓

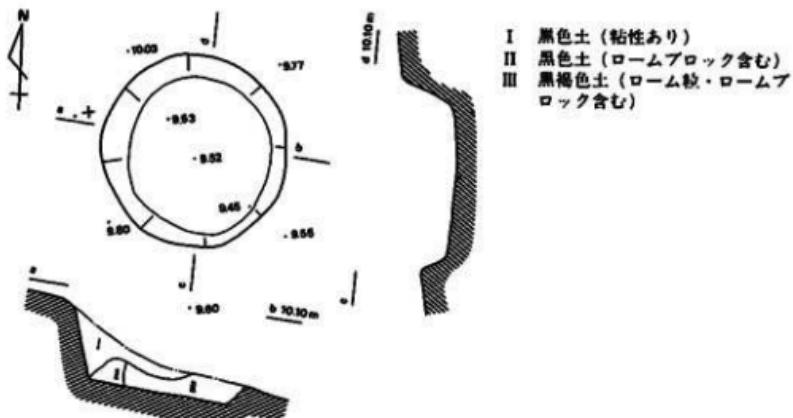


図3-40 25号墓

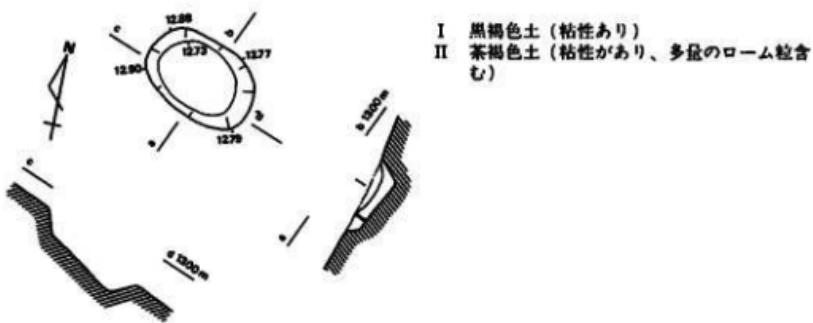


図3-41 26号墓

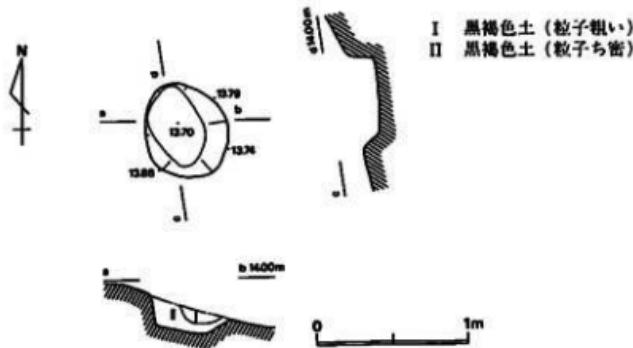


図3-42 30号墓

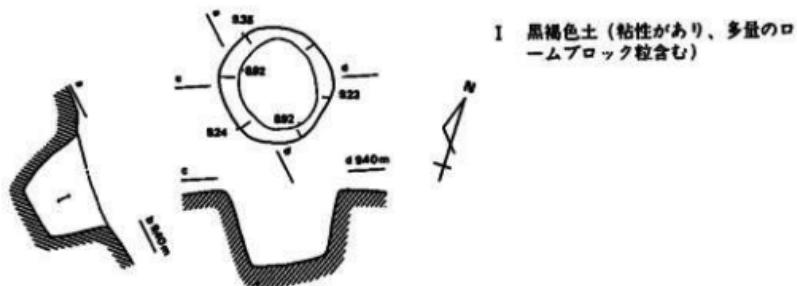


図3-43 31号墓

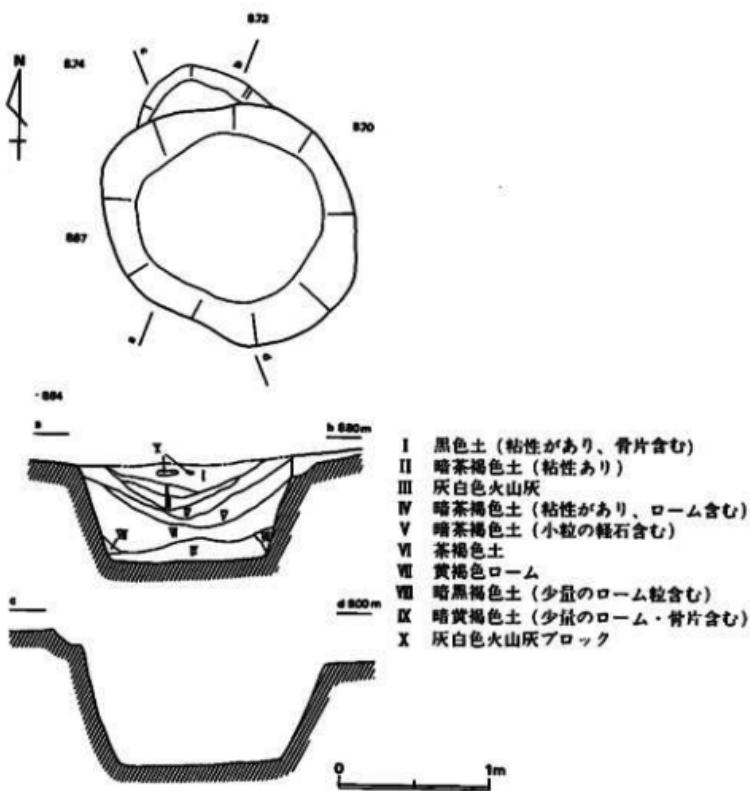


図3-44 32号墓

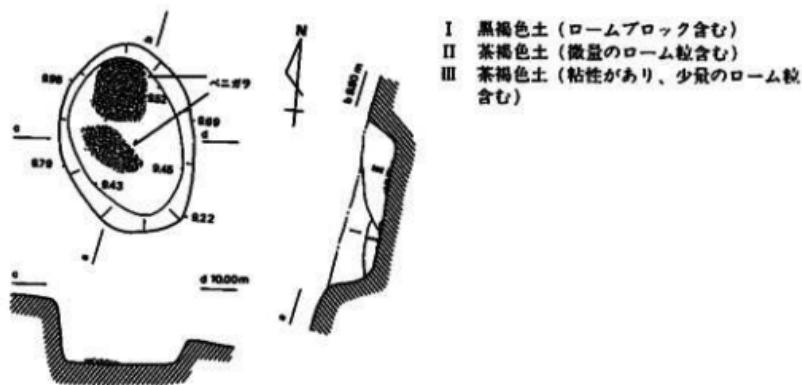


図3-45 33号墓



図3-46 34号墓

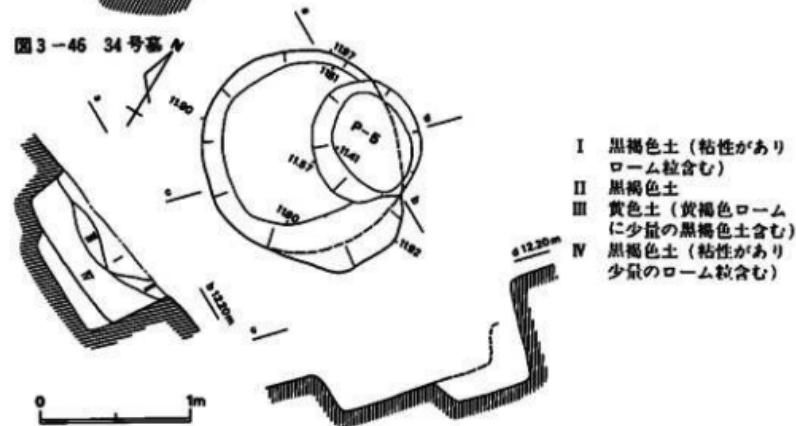


図3-47 35号墓

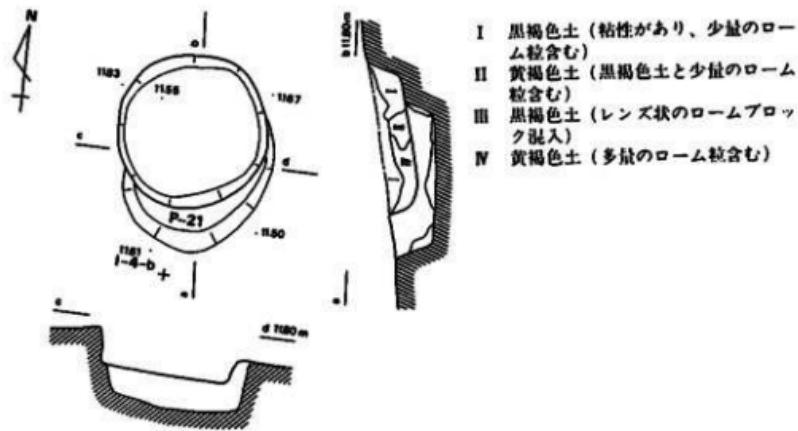


図3-48 36号墓

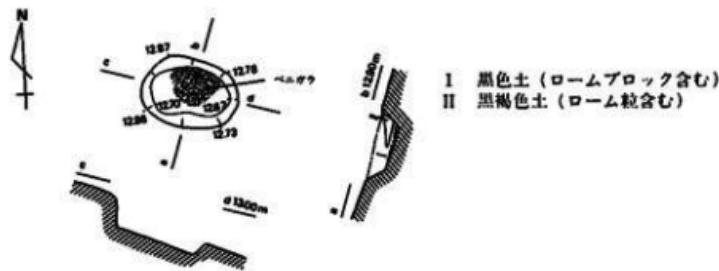


図3-49 38号墓

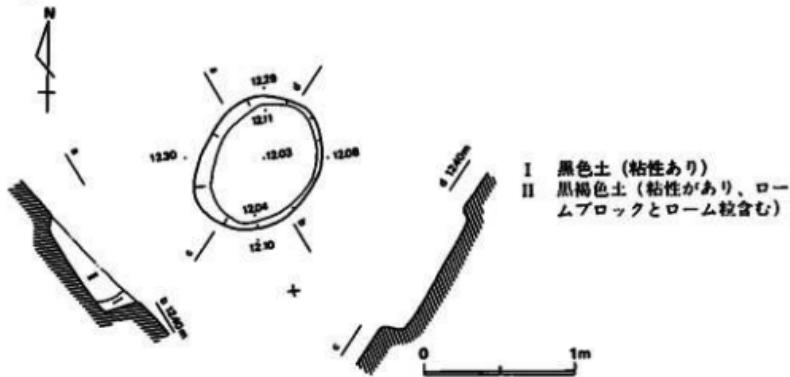


図3-50 39号墓

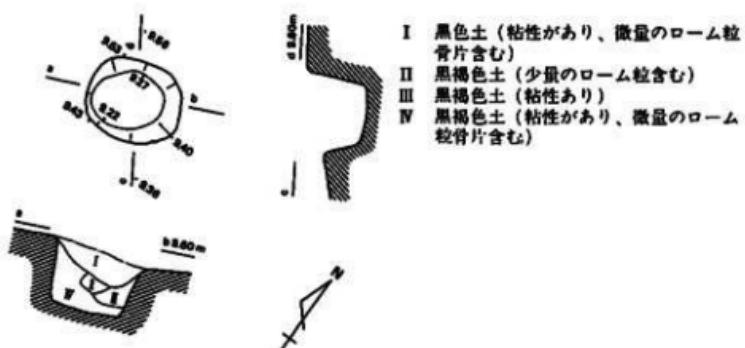


圖 3-51 41 号墓

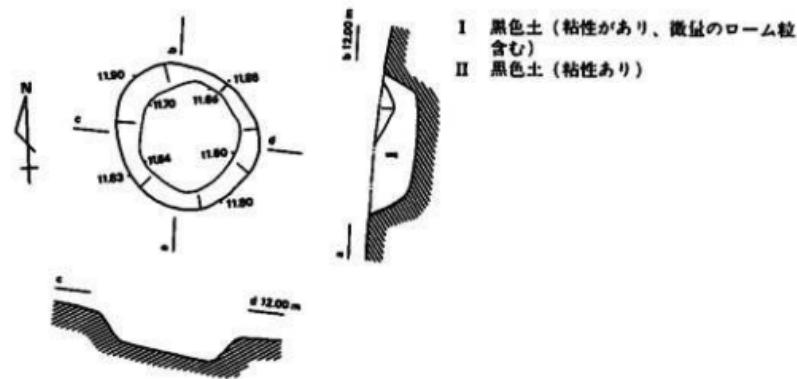


図3-52 42号墓

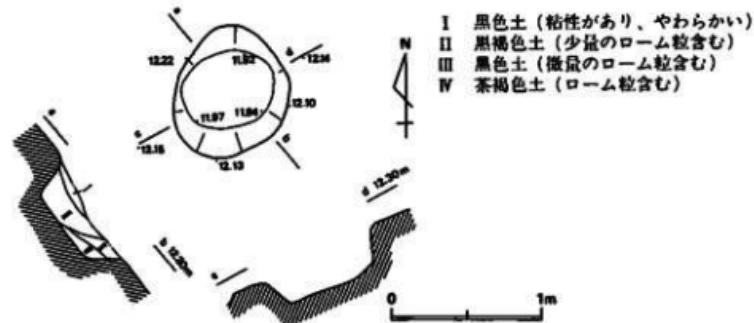


图 3-53 43 号墓

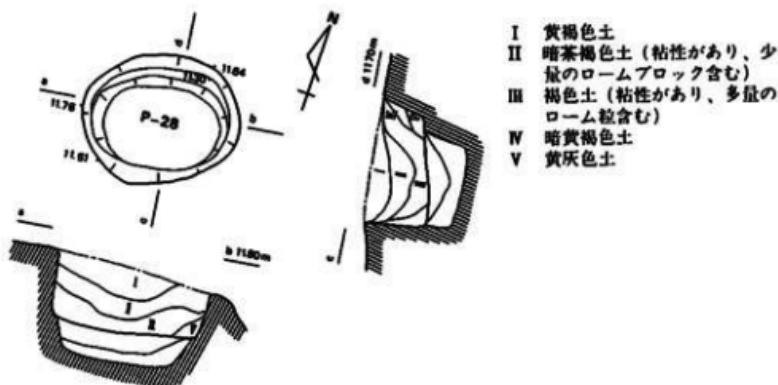


図 3-54 44 号墓

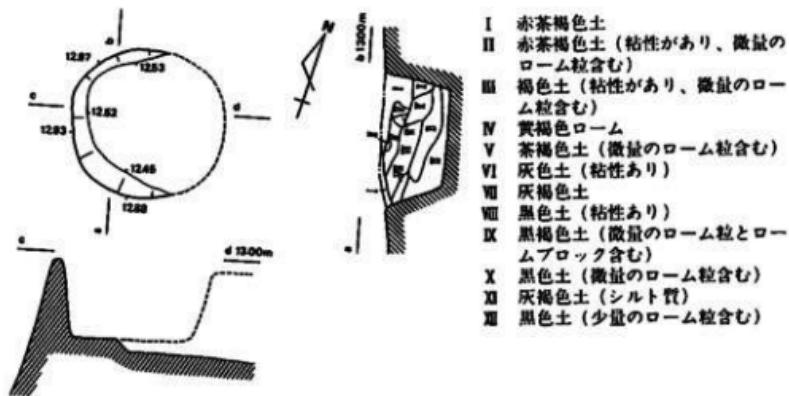


図 3-55 45 号墓

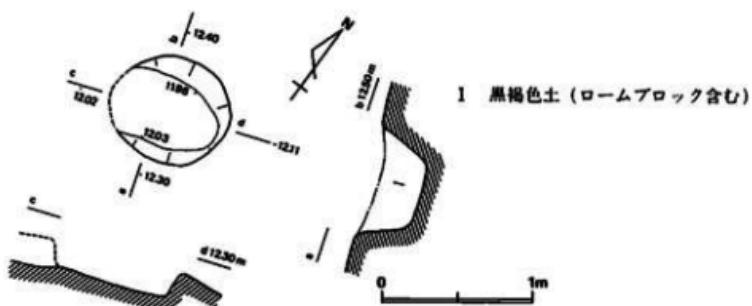
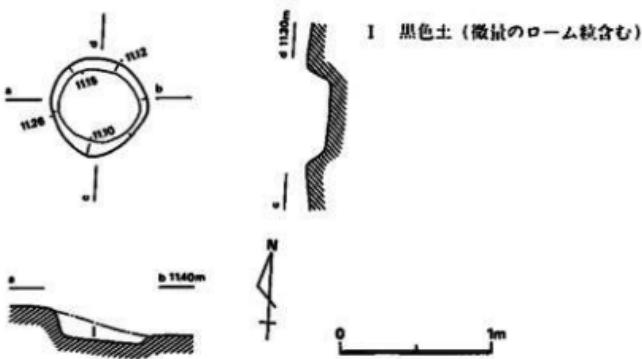
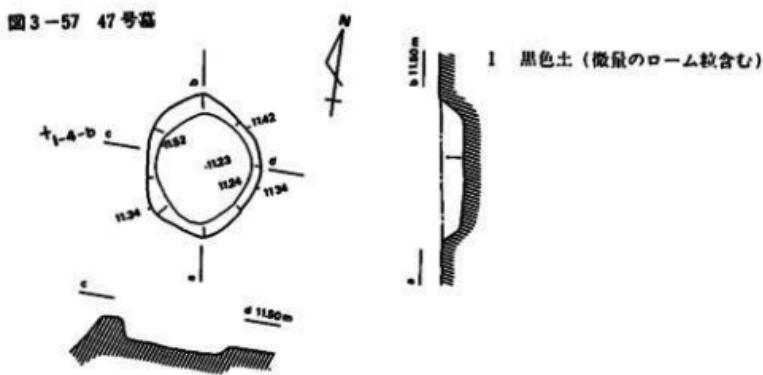
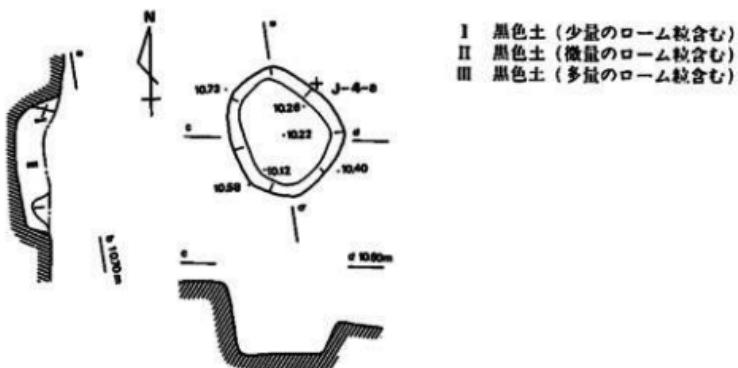
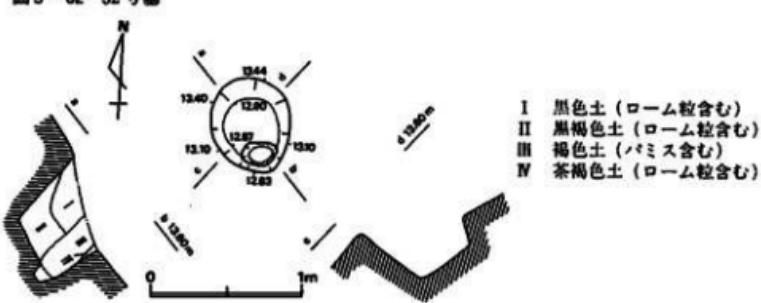
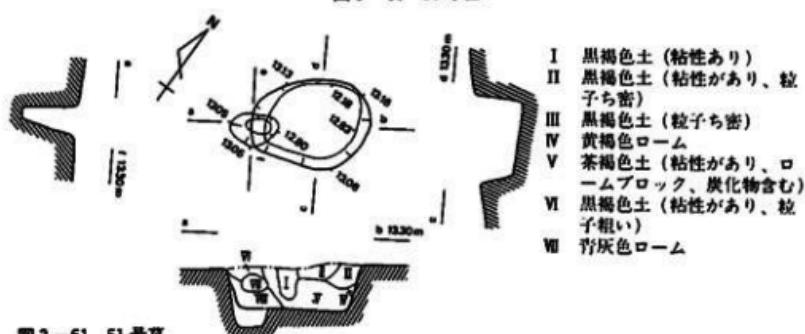


図 3-56 46 号墓

- I 黄褐色土
- II 暗茶褐色土（粘性があり、少量のロームブロック含む）
- III 褐色土（粘性があり、多量のローム粒含む）
- IV 暗黄褐色土
- V 黄灰色土

- I 赤茶褐色土
- II 赤茶褐色土（粘性があり、微量のローム粒含む）
- III 褐色土（粘性があり、微量のローム粒含む）
- IV 黄褐色ローム
- V 茶褐色土（微量のローム粒含む）
- VI 灰色土（粘性あり）
- VII 黑褐色土（粘性あり）
- IX 黑褐色土（微量のローム粒とロームブロック含む）
- X 黑色土（微量のローム粒含む）
- XI 灰褐色土（シルト質）
- XII 黑色土（少量のローム粒含む）





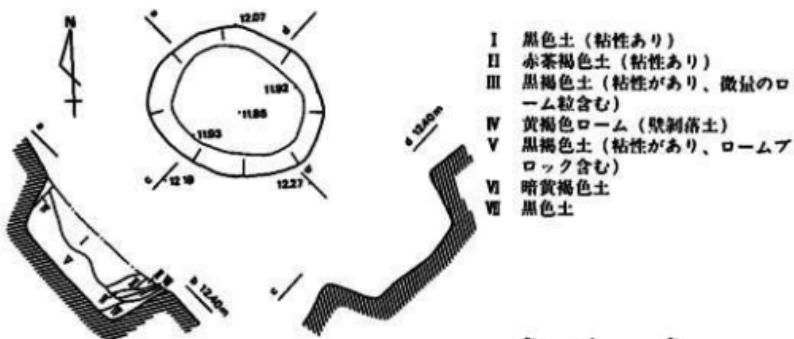


図3-64 57号墓

- I 黒色土（粘性あり）
- II 赤茶褐色土（粘性あり）
- III 黒褐色土（粘性があり、微量のローム粒含む）
- IV 黄褐色ローム（黒刺落土）
- V 黒褐色土（粘性があり、ロームブロック含む）
- VI 暗黄褐色土
- VII 黒色土

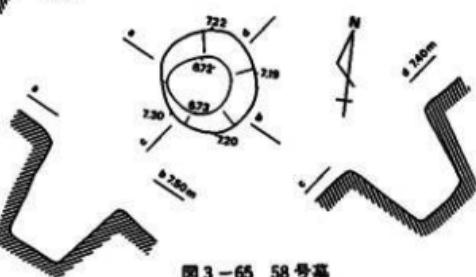


図3-65 58号墓

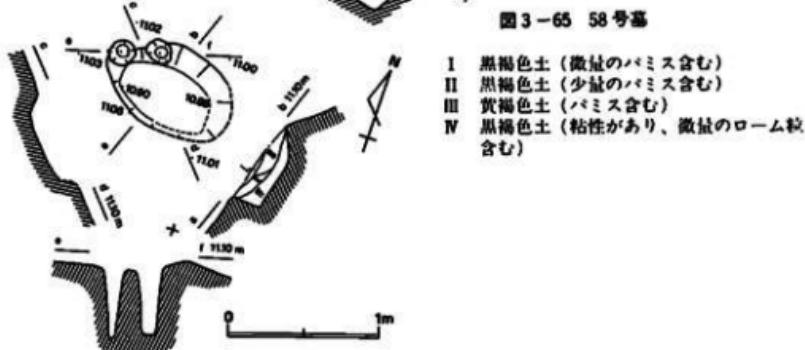


図3-66 59号墓

- I 黒褐色土（微量のバミス含む）
- II 黒褐色土（少量のバミス含む）
- III 黄褐色土（バミス含む）
- IV 黑褐色土（粘性があり、微量のローム粒含む）

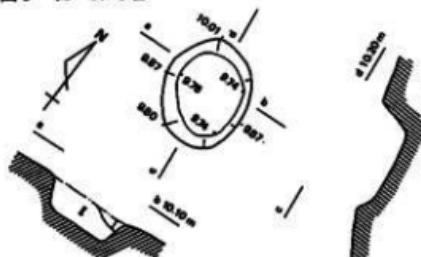


図3-67 60号墓

- I 黒褐色土（粘性あり）
- II 黒色土（粘性があり、少量のローム粒含む）

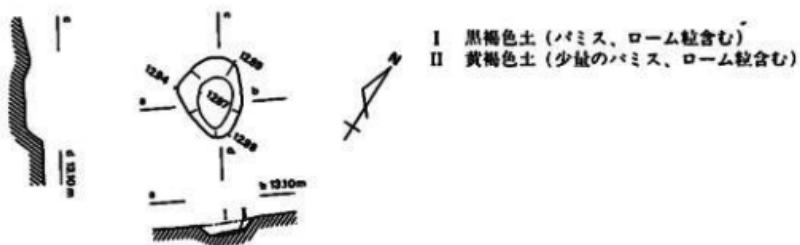


図3-68 63号墓

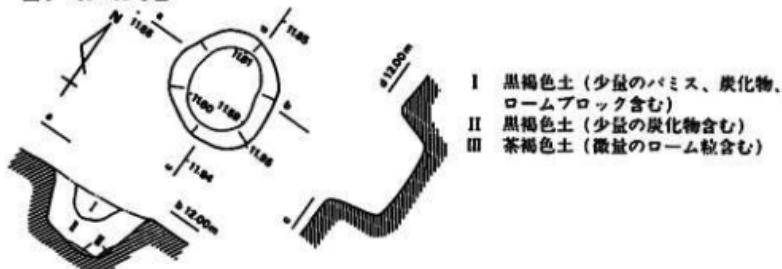


図3-69 64号墓

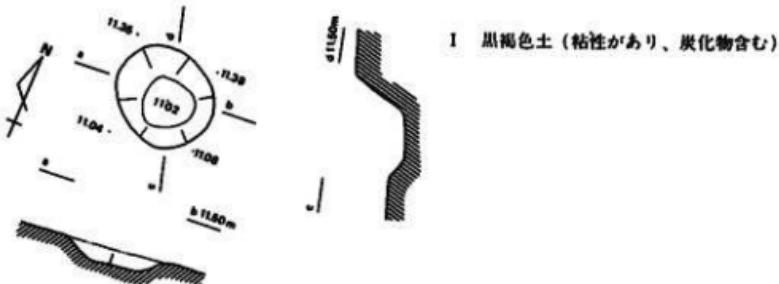


図3-70 65号墓

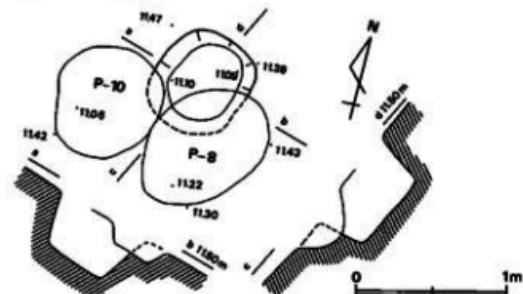
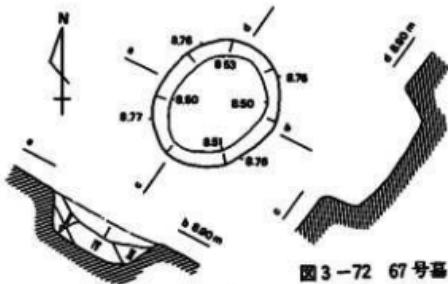
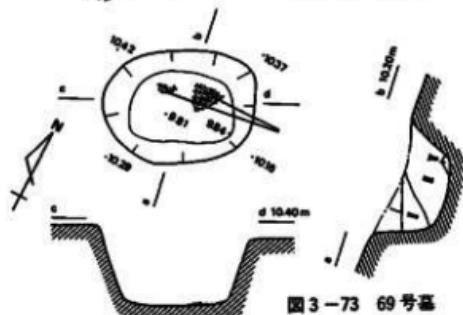


図3-71 66号墓



- I 黒褐色土（少量のローム粒、バミス含む）
- II 黒褐色土（微量のバミス含む）
- III 黒褐色土（粘性あり）
- IV 黒褐色土（多量のバミス含む）
- V 茶褐色土（粘性あり）

図3-72 67号墓



- I 暗褐色土（粘性あり）
- II 暗褐色土（粘性があり、ローム粒含む）
- III 暗黄褐色土
- IV 黄色土（ローム粒含む）

図3-73 69号墓

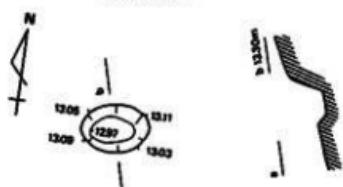


図3-74 70号墓

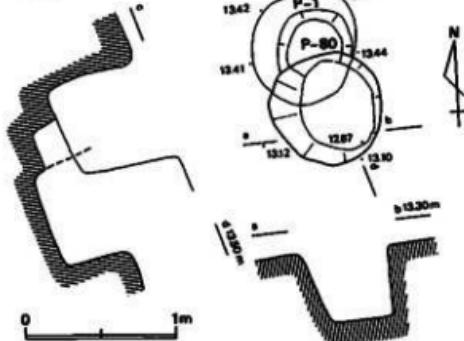


図3-75 72号墓

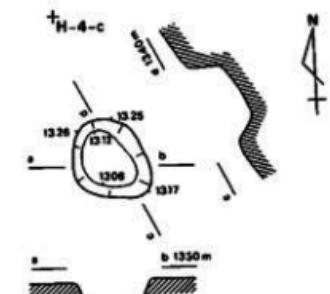


图3-76 73号墓

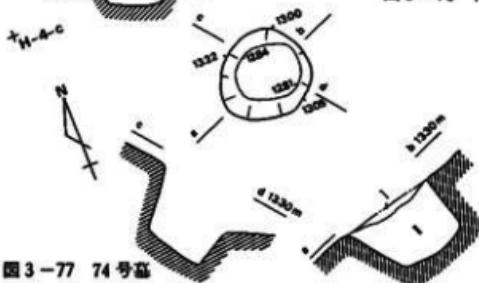


图3-77 74号墓

I 黒褐色土  
II 茶褐色土（少量のローム粒とバミス含む）

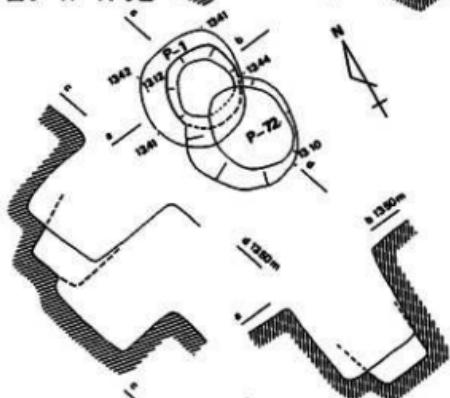


图3-78 80号墓

I 茶褐色土（粘性があり、バミス ローム粒含む）  
II 黄褐色ローム（壁剥落土）  
III 炭化物

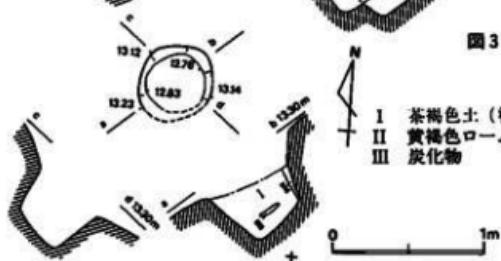


图3-79 83号墓

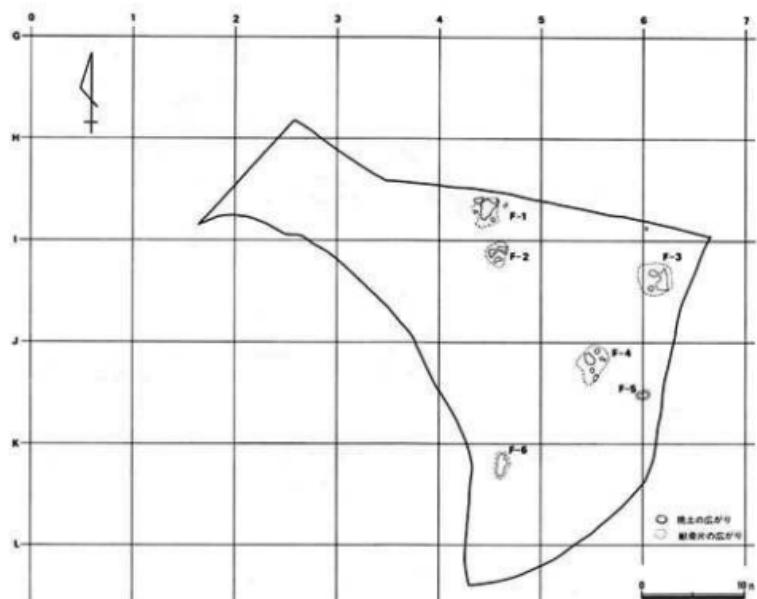


図3-80 焼土群位置図

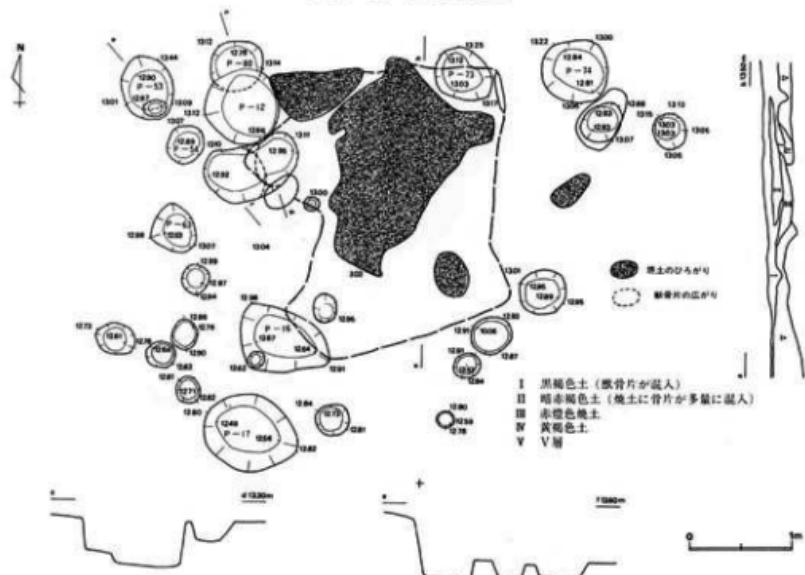
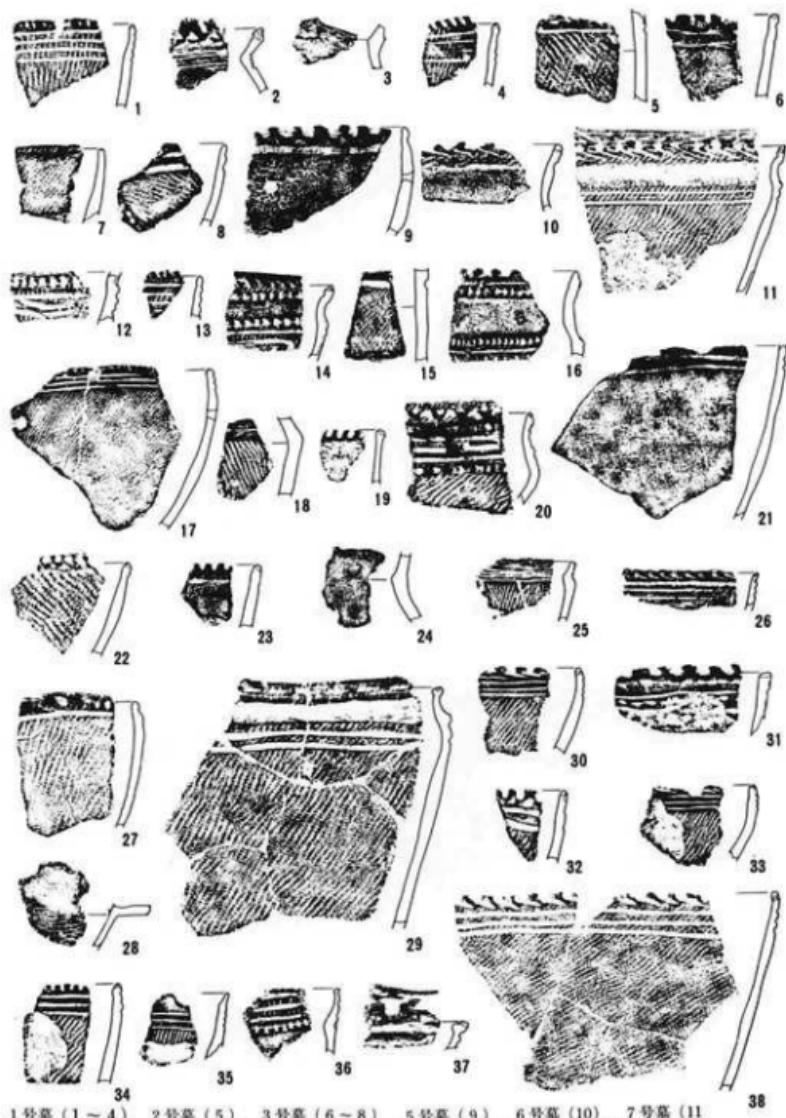


図3-81 1号焼土に伴う小ピット群



1号墓（1～4） 2号墓（5） 3号墓（6～8） 5号墓（9） 6号墓（10） 7号墓（11～14） 8号墓（15） 10号墓（16） 11号墓（17～21） 12号墓（22） 18号墓（23～25） 20号墓（26～28） 21号墓（29～31） 25号墓（32～33） 27号墓（34～37） 32号墓（38）

図3-82 墓壙内出土の土器（拓影図）

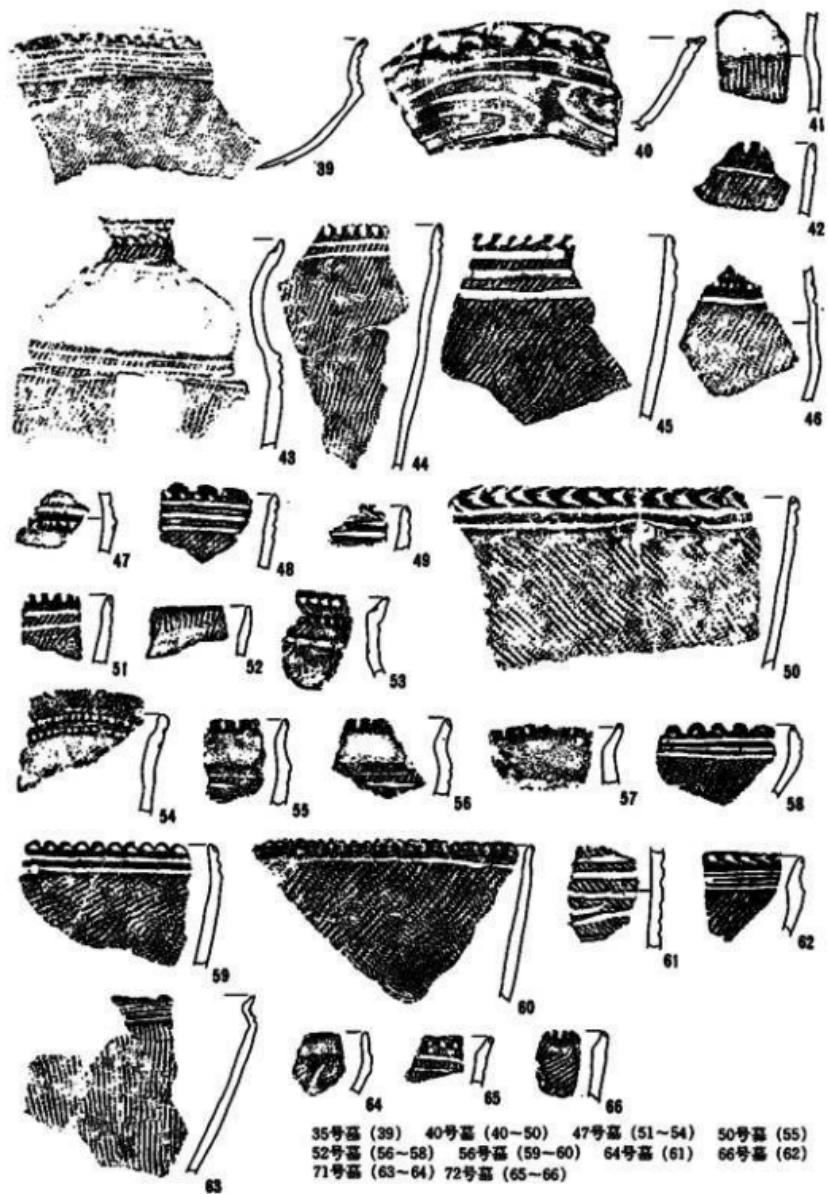


図3-83 墓壙内出土の土器（拓影図）

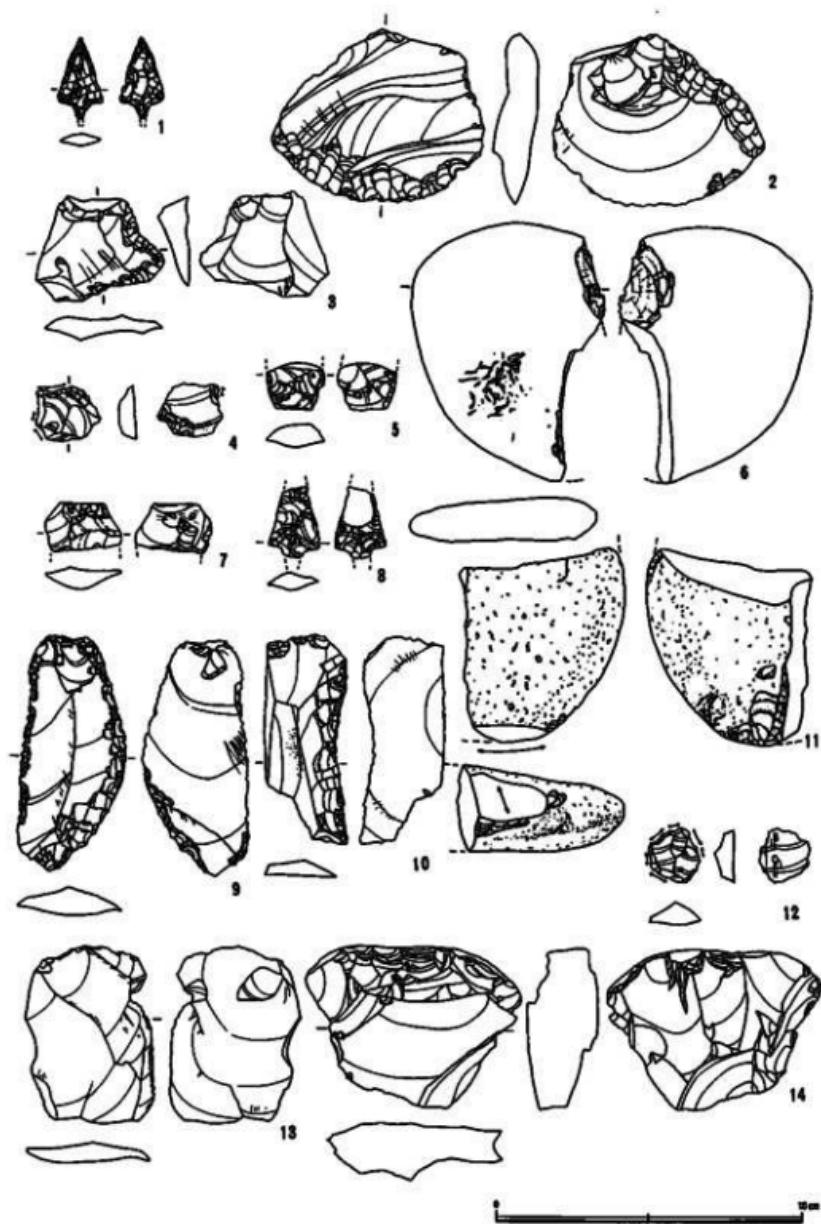


図3-84 墓壙内出土の石器

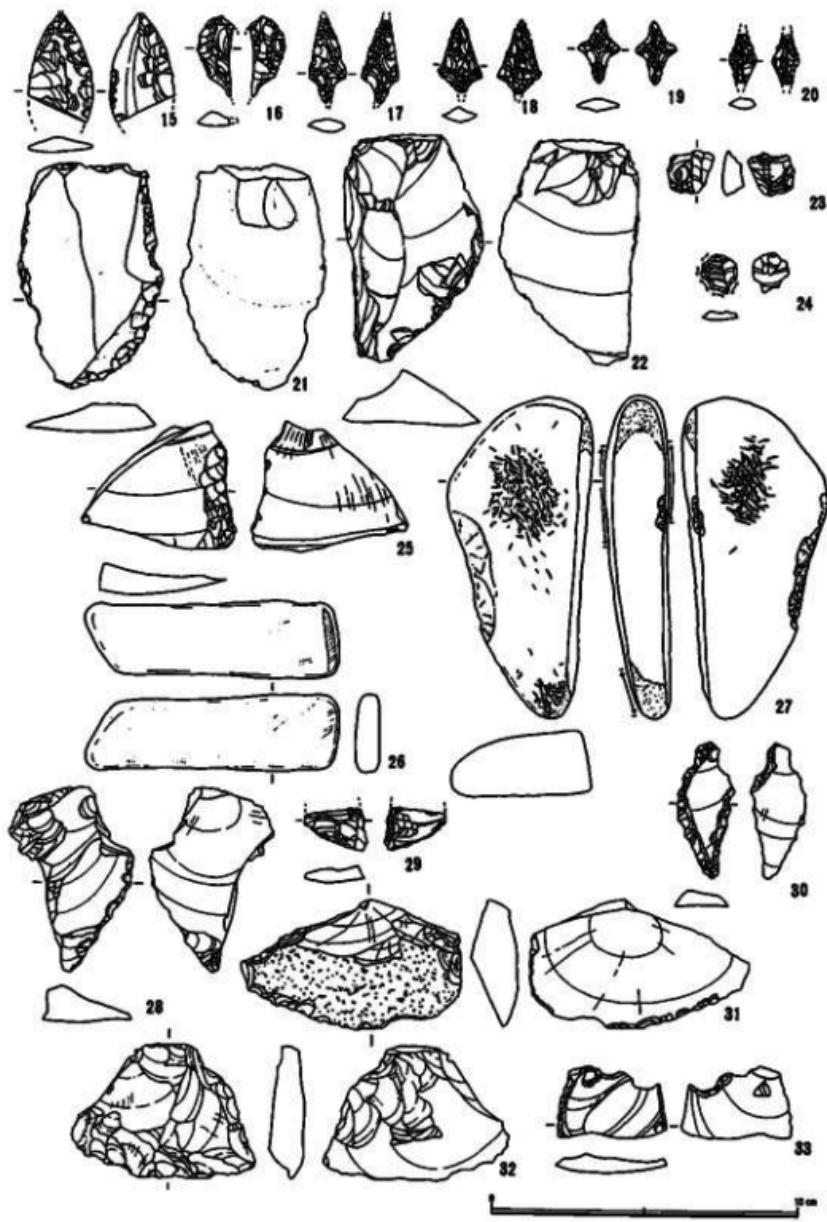


図3-85 墓壇内出土の石器

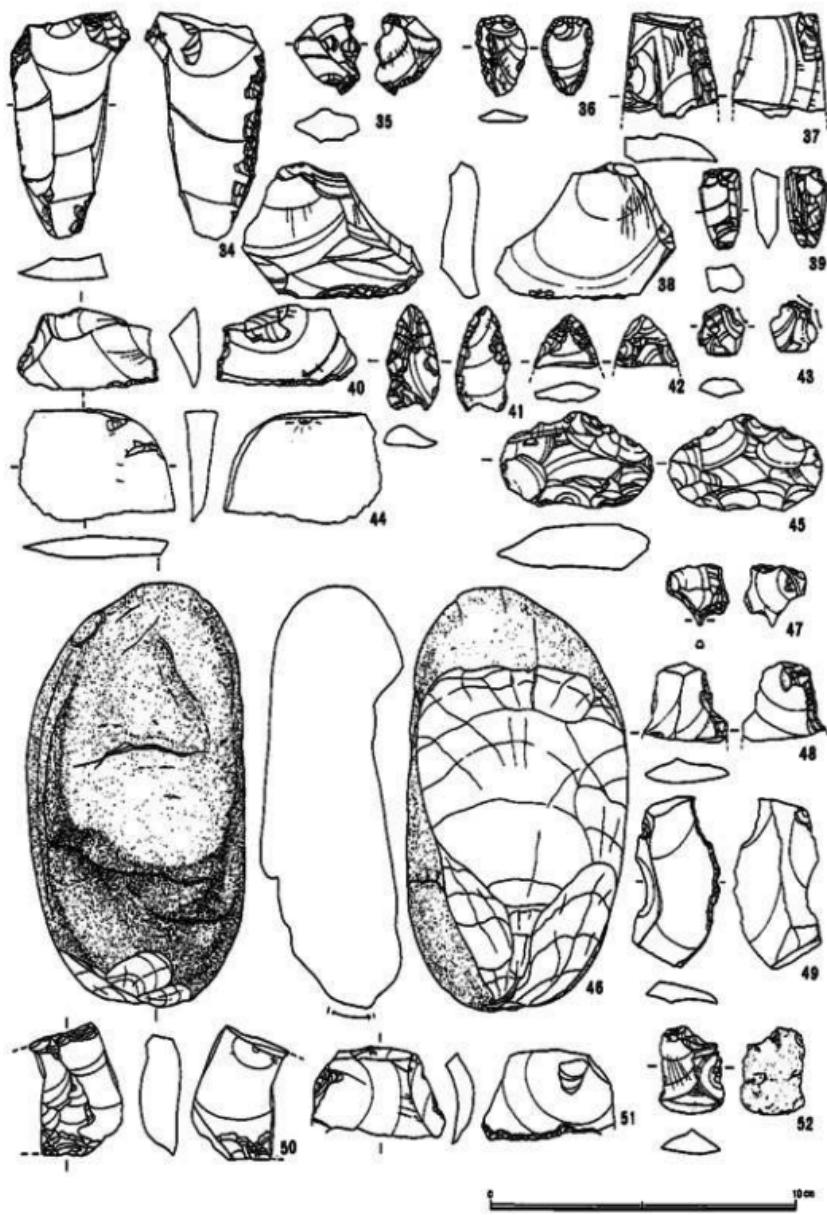


図3-86 墓域内出土の石器

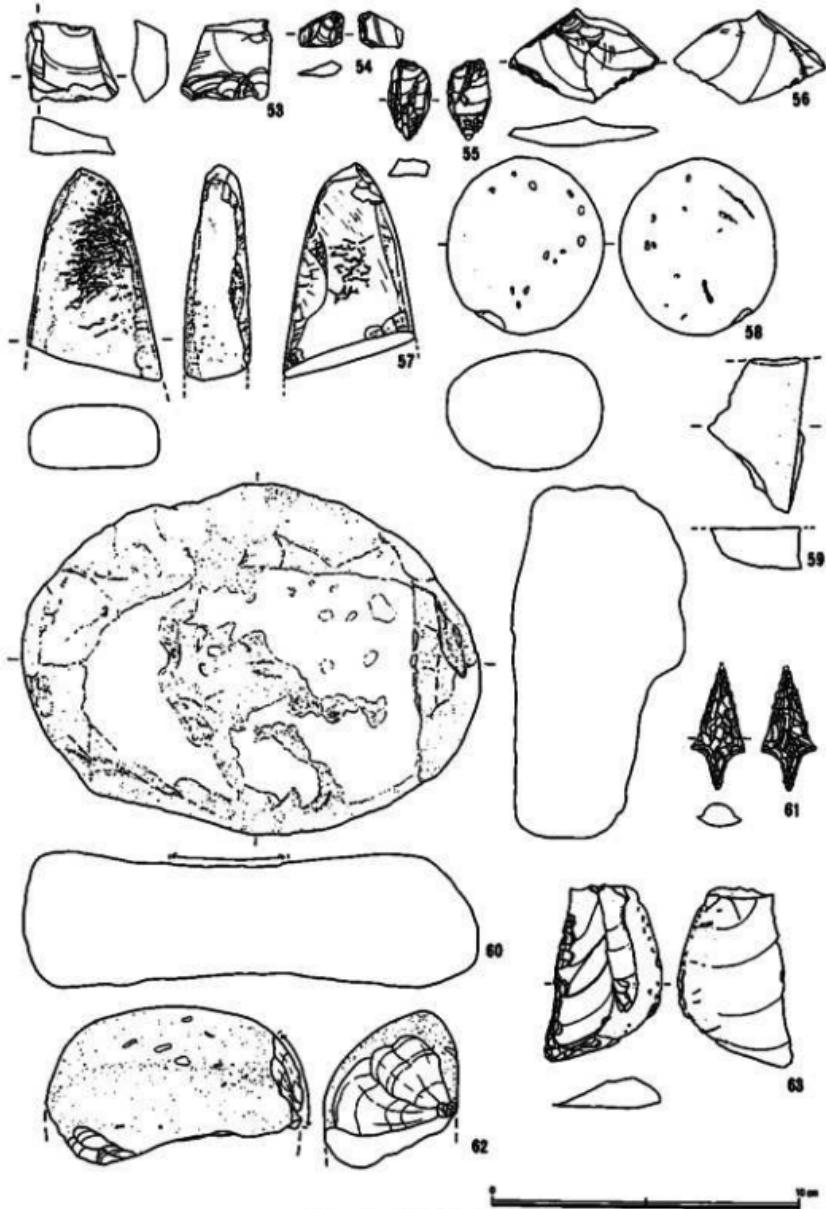


図3-87 墓壙内出土の石器

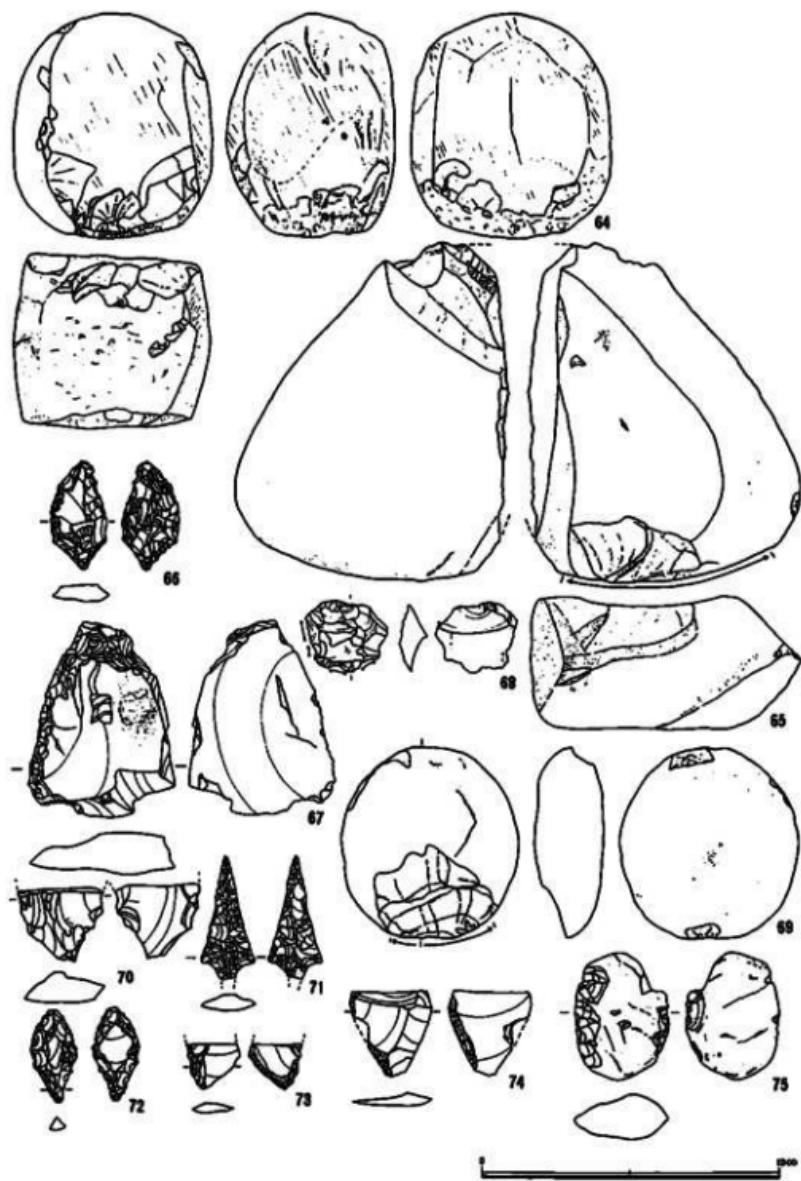


図3-88 墓壙内出土の石器



図3-89 墓壙内出土の石器

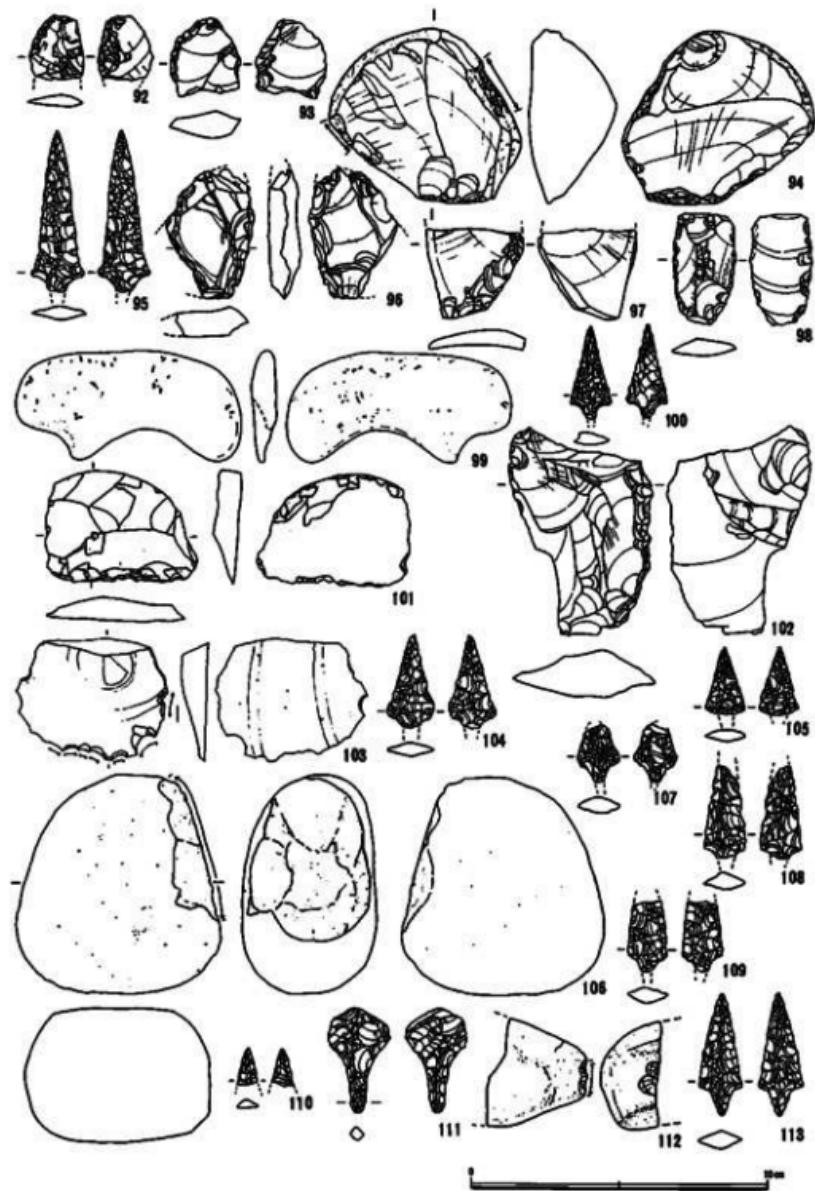


図3-90 墓壙内出土の石器

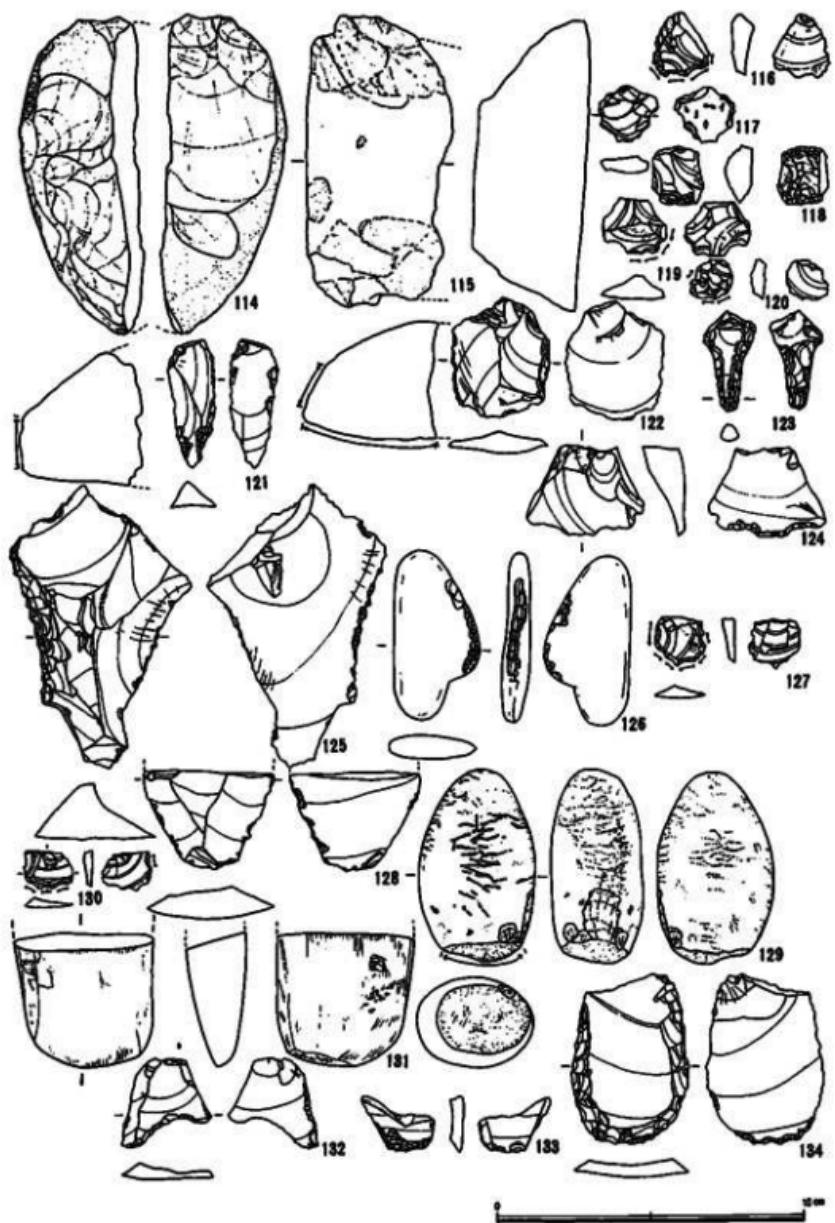


図3-91 墓坑内出土の石器

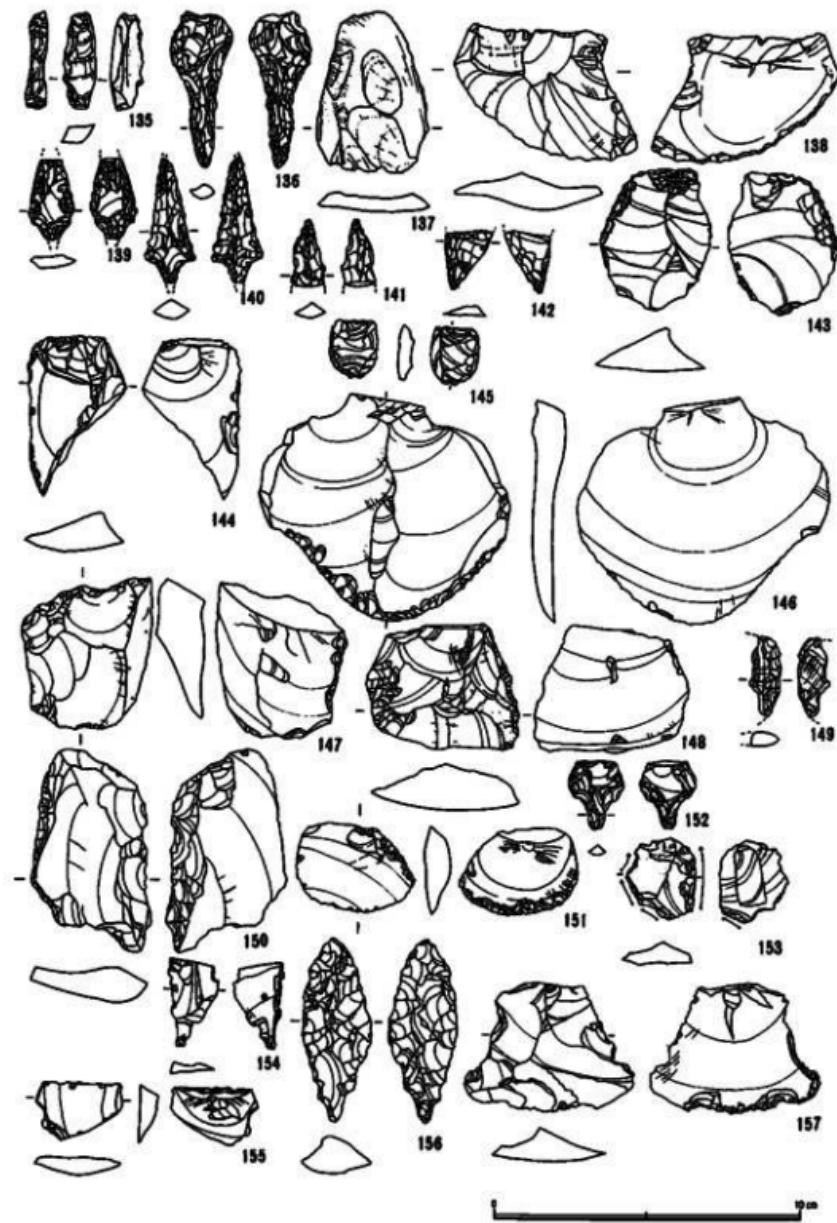


図3-92 墓壙内出土の石器

表3-2 造構出土石器一覧表

造構名	名 称	分類	数 量		造構名	名 称	分類	数 量	
			覆土	床(底)				覆土	床(底)
P-1	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1			計			22
	ス ク レ イ バ イ	III B 7	2		P-8	ス ク レ イ バ イ	III B 7	2	
	ス ト ーン リ ッ チ ャ イ	W B 2	1			U フ レ イ ク	X	2	
	U フ レ イ ク	X	3			フ レ イ ク		1	
	フ レ イ ク		15			フ レ イ ク チ ッ プ		1	
	フ レ イ ク チ ッ プ		64			砾		2	
	砾		1			計		8	
	計		87		P-9	石 犁	W A 4	1	
P-2	フ レ イ ク		5			フ レ イ ク		2	
	計		5			フ レ イ ク チ ッ プ		12	
P-3	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1			計		15	
	フ レ イ ク		1		P-10	ス ク レ イ バ イ	III B 7	3	
	フ レ イ ク チ ッ プ		3			U フ レ イ ク	X	2	
	计		5			フ レ イ ク		5	
P-4	ス ク レ イ バ イ	III B 2 a	1			砾		2	
	ス ク レ イ バ イ	III B 7	1			计		12	
	U フ レ イ ク	X	2		P-11	石 ヤ ジ リ	I A	1	
	使 用 痕 の あ る 砂	X	1			石 ヤ ジ リ	I A 3 a	1	
	フ レ イ ク		6			ス ク レ イ バ イ	III B 7	1	
	フ レ イ ク チ ッ プ		6			た た き 石	V A 1	1	
	砾		1			U フ レ イ ク	X	1	
	计		18			フ レ イ ク		8	
P-5	石 ヤ ジ リ	I A	1			フ レ イ ク チ ッ プ		9	
	U フ レ イ ク	X	1			计		22	
	フ レ イ ク チ ッ プ		1		P-12	刺 突 器	II A 2	1	
	计		3			つ ま み 付 ナ イ フ	III A	1	
P-6	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	3			ス ク レ イ バ イ	III B 5	1	
	石 ヤ ジ リ	I A 4 b	1			た た き 石	V A 3	1	
	ス ク レ イ バ イ	III B 2 a	1			U フ レ イ ク	X	6	
	ス ク レ イ バ イ	III B 7	2			フ レ イ ク		8	
	ス ト ーン リ ッ チ ャ イ	W B 2	1			フ レ イ ク チ ッ プ		11	
	U フ レ イ ク	X	6			砾		3	
	使 用 痕 の あ る 砂	X	1			计		31	1
	フ レ イ ク		8		P-13	石 犁	W A 2	1	
	フ レ イ ク チ ッ プ		30			U フ レ イ ク	X	3	
	砾		6			フ レ イ ク		9	
	计		59			フ レ イ ク チ ッ プ		7	
P-7	つ ま み 付 ナ イ フ	III A 1 c	1			砾		1	
	U フ レ イ ク	X	4			鉛 石		1	
	フ レ イ ク		3			计		22	
	フ レ イ ク チ ッ プ		11		P-15	台 石	V B	1	
	砾		3						

造構名	名 称	分類	数 量		造構名	名 称	分類	数 量	
			粗土	床(底)				粗土	床(底)
	台 石	V B 3	1		P-25	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1	
	フ レ イ ク		3			つまみ付ナイフ	田	1	
	計		5			フ レ イ ク		9	
P-16	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1			フ レ イ クチップ		5	
	た た き 石	V A 1	2			計		16	
	た た き 石	V A	1		P-26	フ レ イ ク		3	
	U フ レ イ ク	X	1			フ レ イ クチップ		6	
	フ レ イ ク		6			磯		1	
	フ レ イ クチップ		1			計		10	
	計		12		P-27	U フ レ イ ク	X		
P-18	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1			計		1	
	ス ク レ イ バ ー	III B 7	1		P-28	フ レ イ クチップ		3	
	た た き 石	V A 1	1			計		3	
	U フ レ イ ク	X	1		P-29	石 盆	V B	1	
	フ レ イ ク		7			U フ レ イ ク	X	2	
	勾 玉		2			フ レ イ ク		6	
	計		11 2			計		9	
P-19	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	2		P-31	ス ク レ イ バ ー	III B 7	1	
	ド リ ル	II B 1	1			石 盆	V B 1	1	
	ス ク レ イ バ ー	III B 7	1			フ レ イ ク		1	
	U フ レ イ ク	X	3			フ レ イ クチップ		1	
	使 用 痕 の あ る 磯	X	1			磯		1	
	フ レ イ ク		22			計		5	
	フ レ イ クチップ		35		P-32	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1	
	磯		2			つまみ付ナイフ	III A 1 b	1	
	勾 玉		1			ス ク レ イ バ ー	III B 7	1	
	丸 玉	16				U フ レ イ ク	X	8	
	白 玉	2				フ レ イ ク		14	
	計	86				フ レ イ クチップ		31	
P-20	U フ レ イ	X	2			磯		5	
	フ レ イ クチップ		2			計		61	
	計		4		P-33	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1	
P-21	調 て と た な き 痕 の あ る 磯	X	1			た た き 石	V A	1	
	磯		1			U フ レ イ ク	X	2	
	計		2			フ レ イ ク		1	
P-22	つまみ付ナイフ	III A 1 C	1			玉		1	
	フ レ イ ク		6			計		6	
	フ レ イ クチップ		1		P-34	U フ レ イ ク		1	
	計		8			フ レ イ クチップ	X	28	
P-23	フ レ イ ク		1			磯		2	
	フ レ イ クチップ		1			石 製 品		1	
	計		2			計		32	

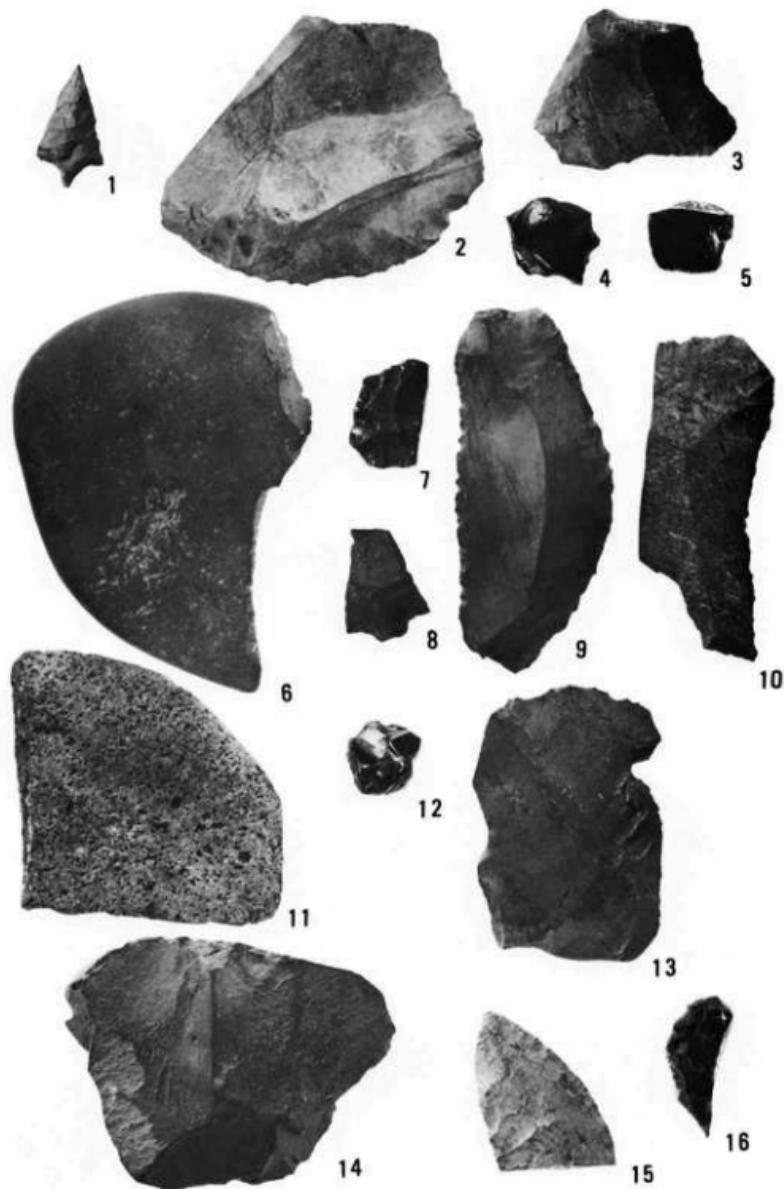
造構名	名 称	分 類	数 量	造構名	名 称	分 類	数 量
			覆土 床(底)				覆土 床(底)
P-35	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1		計		16
	スクリイバー	III B 2 a	1	P-47	フ レ イ ク		2
	U フ レ イ ク	X	1		計		2
	フ レ イ ク		2				
	フ レ イ クチップ		13	P-50	U フ レ イ ク	X	1
	計		18		フ レ イ クチップ		5
					計		6
P-39	U フ レ イ ク	X	1				
	磚		1	P-51	スクリイバー	III B 2 a	1
	計		2		U フ レ イ ク	X	1
					フ レ イ クチップ		4
P-40	石 ヤ ジ リ	I A	1		計		6
	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	6				
	ド リ ル	II B 2	1	P-52	ド リ ル	II B 2	1
	た た き 石	V A 1	2		石 片	VI A 2	1
	た た き 石	V A 2	1		フ レ イ クチップ		3
	ス リ 石	VI A	1		計		5
	U フ レ イ ク	X	11	P-53	U フ レ イ ク	X	1
	フ レ イ ク		56		フ レ イ クチップ		1
	フ レ イ クチップ		71		計		2
	磚		1				
	計		151	P-54	スクリイバー	III B 2 a	1
P-41	ド リ ル	II B 2	1		U フ レ イ ク	X	1
	スクリイバー	III B 7	1		フ レ イ ク		18
	U フ レ イ ク	X	3		計		20
	フ レ イ ク		6				
	フ レ イ クチップ		7	P-55	丸 玉		105
	計		18		勾 玉		2
P-42	U フ レ イ ク	X	2		怪 石		1
	フ レ イ ク		2		計		1 107
	フ レ イ クチップ		3				
	計		7	P-56	石 ヤ ジ リ	I A	1
P-43	た た き 石	V A 1	1		石 ヤ ジ リ	I A 4 a	2
	U フ レ イ ク	X	1		つまみ付ナイフ	III A	1
	フ レ イ クチップ		1		U フ レ イ ク	X	1
	計		3		フ レ イ ク		11
P-45	石 片	VI A 2	1		フ レ イ クチップ		3
	U フ レ イ ク	X	1		磚		1
	フ レ イ ク		1		計		20
	フ レ イ クチップ		1				
	計		4	P-60	フ レ イ ク		2
P-46	U フ レ イ ク	X	5		フ レ イ クチップ		1
	フ レ イ クチップ		10		計		3
	磚		1	P-62	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1
					U フ レ イ ク	X	1
					フ レ イ ク		6
					フ レ イ クチップ		38

造構名	名 称	分 類	数 量		造構名	名 称	分 類	数 量	
			覆 土	床(底)				覆 土	床(底)
	軽 石		2			フレイクチップ		8	
	計		48			磯		1	
P-68	スクレイパー	III B 7	1			軽 石		2	
	U フレイク	X	1			計		22	
	垂 飾			1	P-73	石 ヤ リ	I B 1 b	1	
	計		2	1		U フレイク	X	2	
P-69	U フレイク	X	1			フレイク		2	
	フレイク		2			フレイクチップ		6	
	計		3			計		11	
P-71	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1		H-1	ド リ ル	II A 1	1	
	スクレイパー	III B 7	3			スクレイパー	III B	1	
	石 斧	IV A 1	1			スクレイパー	III B 7	1	
	石 斧	IV A 2	1			たたき石	V A 2	1	
	たたき石	V A 3	1			たたき石	V A 3	1	
	U フレイク	X	2			U フレイク	X	2	
	フレイク		7			フレイク		3	
	フレイクチップ		36			フレイクチップ		1	
	磯		2			磯		1	
	石 刀		1			計		12	
	計		55		F-1	石 ヤ ジ リ	I A 4 a	1	
P-72	ド リ ル	II B 2	1			U フレイク		1	
	U フレイク	X	3			フレイク		12	
	使用底のある磯	X	1			フレイクチップ		101	
	フレイク		6			計		115	

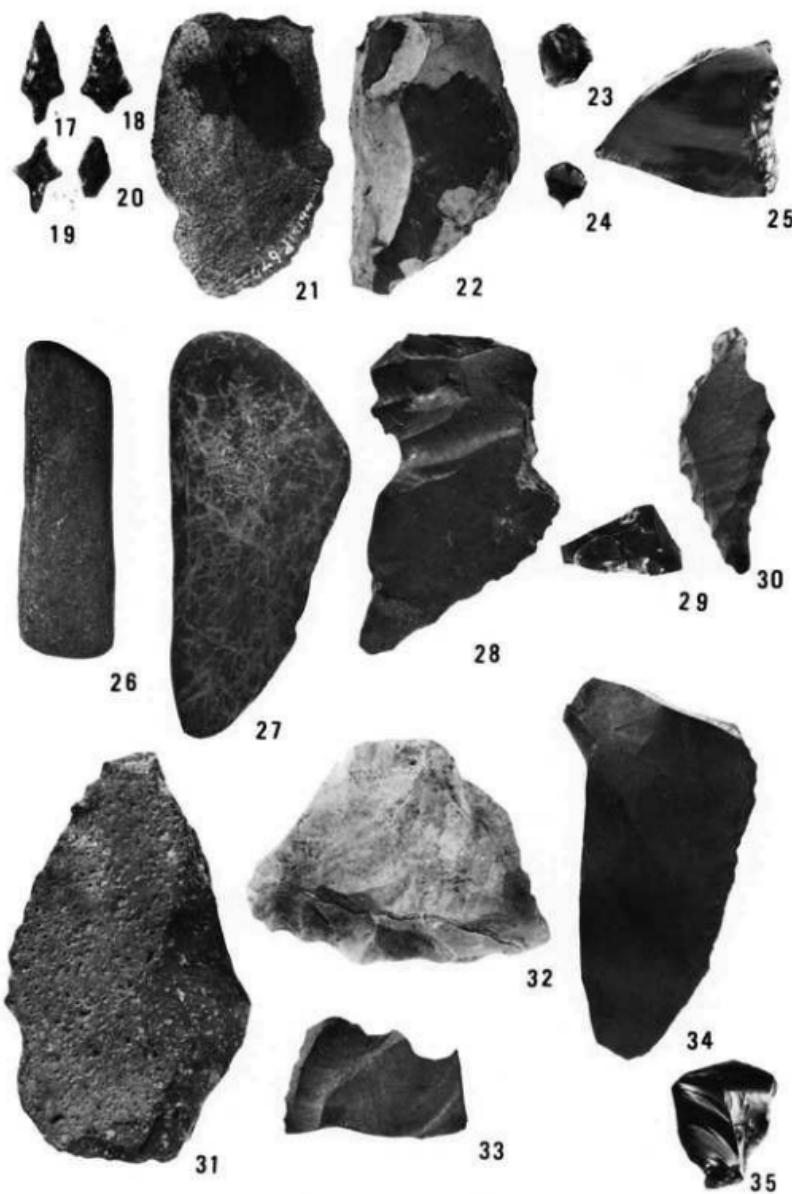
表3-3 図示した遺構出土の石器

遺構名	分類・名稱	重量 g	材質	出土位置	備註	遺構名	分類・名稱	重量 g	材質	出土位置	備註
P-1	I A 4 a	(0.9)	Ha-Sh	埋土	3-54	P-12	X	(12.5)	Ha-Sh	埋土	3-55
"	III B 7	43.1	"	"	2	"	"	(8.5)	"	"	51
"	"	9.4	"	"	3	"	"	4.8	Obs	"	52
"	V B 2	(111.3)	Mud	"	6	"	"	9.2	Aga	"	53
"	X	2.1	Obs	"	4	"	"	0.5	Obs	"	54
"	"	(2.1)	"	"	5	"	"	9.9	Ha-Sh	"	55
"	"	(2.4)	"	"	7	"	クサビ	2.2	Obs	"	56
P-3	I A 4 a	(1.3)	Ha-Sh	"	6	P-13	IV A 2	(88.5)	Tu-Sh	"	57
P-4	III B 2 a	24.1	"	"	9	"	鈴石	31.7	Pum	"	58
"	III B 7	11.6	"	"	10	P-15	V B 3	1,375	And	"	59
"	X	(114.3)	And	"	11	"	V B	(19.7)	"	"	60
"	"	17	Obs	"	12	P-16	I A 4 a	(2.4)	Ha-Sh	"	61
"	"	15.9	"	"	13	"	V A 1	(230)	And	"	62
"	フレイク	78.2	Mud	"	14	"	"	510	Bl-Mud	"	63
P-5	I A	(2.9)	Ha-Sh	"	3-55	"	V A	(845)	Gr-Mud	"	64
"	X	(1.1)	Obs	"	15	"	X	24.3	Ha-Sh	"	65
P-6	I A 4 a	(0.9)	"	"	16	P-18	I A 4 a	4.2	"	"	66
"	"	(0.8)	"	"	17	"	III B 7	47.6	"	"	67
"	"	0.5	"	"	18	"	V A 1	126.5	"	"	68
"	I A 4 b	(0.45)	"	"	19	"	X	4.8	Obs	"	69
"	III B 2 a	28.9	Ha-Sh	"	20	"	勾玉	1.5	Jad	底	70
"	III B 7	42.9	"	"	21	"	"	15.9	Ta	"	71
"	"	14.2	Obs	"	22	P-19	I A 4 a	(1.2)	Obs	埋土	72
"	V B 2	112.3	Mud	"	23	"	"	2.0	Ha-Sh	"	73
"	X	1.4	Obs	"	24	"	II B 1	2.8	"	"	74
"	"	0.3	"	"	25	"	III B 7	42.9	Mud	"	75
"	"	33.8	Gr-Mud	"	26	"	X	(0.8)	Ha-Sh	"	76
P-7	III A 1 c	2.9	Ha-Sh	"	27	"	"	22.2	"	"	77
"	X	17	"	"	28	"	"	(3.1)	"	"	78
"	"	(1.3)	Obs	"	29	"	フレイク	(2.0)	"	"	79
"	"	38.2	And	"	30	"	勾玉	11.7	Jad	底	80
P-8	III B 7	27.7	Ha-Sh	"	31	"	臼玉	2.0	"	"	81
"	"	29.7	"	"	32	"	"	2.5	Ta	"	82
"	X	5.2	"	"	33	"	九玉	0.9	"	"	83
"	"	4.1	Obs	"	34	"	"	0.5	"	"	84
P-19	IV A 4	119.4	Gr-Mud	"	35	"	"	0.8	"	"	85
P-10	III B 7	1.6	Ha-Sh	"	36	"	"	0.6	"	"	86
"	"	(13.9)	"	"	37	"	"	0.4	"	"	87
"	"	34.0	"	"	38	"	"	0.5	"	"	88
"	X	2.9	Obs	"	39	"	"	0.6	"	"	89
"	"	9.8	Ha-Sh	"	40	"	"	0.4	"	"	90
P-11	I A 3 a	3.5	"	"	41	"	"	0.6	"	"	91
"	I A	(1.4)	"	"	42	"	"	0.7	"	"	92
"	III B 7	21.1	"	"	43	"	"	0.7	"	"	93
"	V A 1	720	And	"	44	"	"	0.6	"	"	94
P-12	II A 2	3.1	Obs	"	45	"	"	0.7	"	"	95
"	III B 5	(21.2)	Ha-Sh	"	46	"	"	0.6	"	"	96
"	III B 7	(5.1)	"	"	47	"	"	0.5	"	"	97
"	V A 3	3.10	And	底	48	"	"	0.5	"	"	98

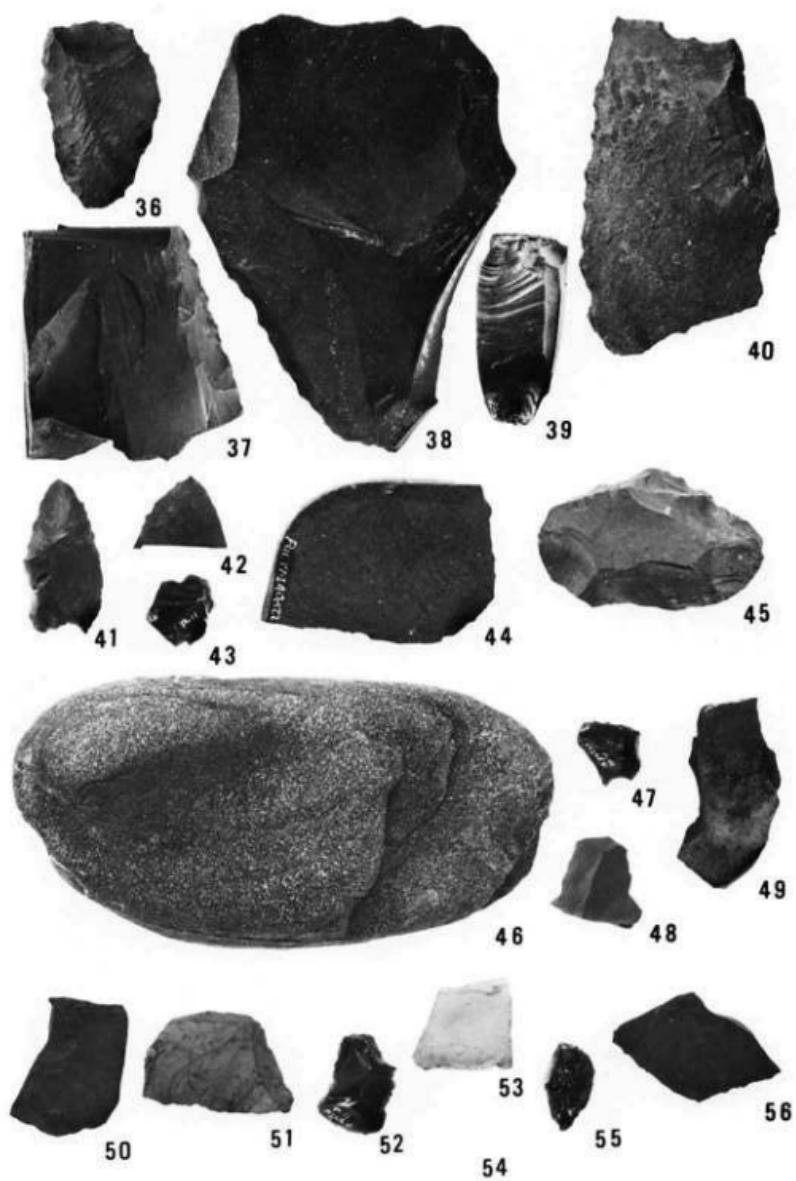
遺構名	分類・名称	重量 g	材質	出土位置	標号	遺構名	分類・名称	重量 g	材質	出土位置	標号
P-20	X	19.3	Ha-Sh	埋土	3-77	P-41	III B 7	58.7	Ha-Sh	埋土	3-125
"	"	4.2	"	"	78	"	X	11.1	"	"	124
P-21	"	285	And	"	79	"	"	19.0	Mud	"	126
P-22	III A 1 c	29.1	Ha-Sh	"	80	P-42	"	1.0	Obs	"	127
P-25	I A 4 a	2.0	"	"	81	P-45	V A 1	109	Mud	"	129
"	III	31.5	Mud	"	82	"	X	(9.5)	Ha-Sh	"	28
P-29	IV B 1	10.1kg	And	底	3-122 24	P-45	IV A 2	51.1	Ser	"	131
"	X	10.5	Ha-Sh	"	23	"	X	0.8	Obs	"	130
P-31	III B 7	32.6	"	埋土	3-88 83	P-46	X	2.6	Ha-Sh	"	132
"	VI B	53.3	And	"	84	P-50	X	1.4	Obs	"	133
P-32	I A 4 a	1.6	Ha-Sh	"	85	P-51	III B 2 a	15.1	Mud	"	134
"	III A 1 b	2.9	"	"	87	"	X	1.9	Obs	"	135
"	III B 7	19.0	"	"	88	P-52	II B 2	6.2	Ha-Sh	"	136
"	X	1.3	Obs	"	85	"	IV A 2	11.5	Bl-Mud	"	137
"	"	2.6	"	"	89	P-53	X	21.7	Ha-Sh	"	138
"	"	18.8	Ha-Sh	"	90	P-55	勾玉	"	Ta	底	205-20 58
"	"	(1.9)	Obs	"	91	"	丸玉	"	"	"	58
"	"	(1.8)	"	"	3-90 92	P-56	I A 4 a	(1.4)	Ha-Sh	埋土	3-92 139
"	"	5.8	Ha-Sh	"	93	"	"	(2.5)	"	"	140
P-33	I A 4 a	2.3	"	"	95	"	I A	(0.8)	"	"	141
"	V A	124.1	Mud	"	94	"	III A	(0.7)	"	"	142
"	X	38.2	Ha-Sh	"	31	"	X	16.4	"	"	143
"	"	(7.4)	"	"	96	P-62	I A 4 a	(1.0)	Obs	"	205-22 61
"	"	4.3	"	"	97	"	X	14.9	Ha-Sh	"	3-92 144
"	IV 玉	4.9	Jad	"	"	P-68	III B 7	43.3	"	"	146
P-34	X	4.3	Ha-Sh	"	98	"	X	2.0	Obs	"	148
"	石製品	38.9	Mud	"	99	"	坐鏡	27.7	Tad	底	205-23 63
P-35	I A 4 a	(1.1)	Ha-Sh	"	100	P-69	X	34.5	Ha-Sh	埋土	3-92 147
"	III B 2 a	38.1	"	"	"	P-71	I A 4 a	0.4	Obs	"	205-24 64
"	X	19.5	Mud	"	"	"	III B 7	25.3	"	"	3-92 148
P-39	"	15.7	Ha-Sh	"	"	"	III B 7	25.7	Ha-Sh	"	150
P-40	I A 4 a	(1.4)	Obs	"	104	"	"	7.1	Obs	"	151
"	"	(0.7)	"	"	105	"	IV A 1	153.5	Gr-Mud	"	205-24 66
"	"	(0.9)	"	"	107	"	IV A 4	97	"	"	67
"	"	(1.9)	Ha-Sh	"	108	"	V A 3	603	And	"	68
"	"	(1.5)	"	"	109	"	X	(1.3)	Obs	"	149
"	"	1.7	"	"	113	"	石製品	139	Gr-Mud	"	205-24 65
"	I A	(0.1)	Obs	"	110	P-72	II B 2	1.7	Ha-Sh	"	3-92 152
"	II B 2	4.0	Ha-Sh	"	111	"	X	4.3	Obs	"	153
"	V A 1	378	And	"	106	"	"	1.1	"	"	154
"	"	(27.6)	"	"	112	"	"	2.7	"	"	155
"	V A 2	234	Gr-Mud	"	3-111 114	P-73	IB 1 b	9.5	Ha-Sh	"	156
"	VI A	(248)	Granod	"	115	"	X	13.7	"	"	157
"	X	1.9	Obs	"	116	H-1	II A 1	7.8	"	"	3-4 2
"	"	3.0	"	"	118	"	III B 7	17.4	"	底	3
"	"	0.8	"	"	120	"	III B	2.5	"	埋土	5
"	"	3.6	Ha-Sh	"	121	"	V A 2	132.7	Gran	底	8
"	"	7.7	"	"	122	"	V A 3	242	Sa	埋土	7
"	7v-24-7	1.6	Obs	"	117	"	X	1.5	Obs	"	6
"	"	2.4	"	"	119	"	"	3.9	Ha-Sh	粘土	4
P-41	III B 7	58.7	Ha-Sh	"	123						



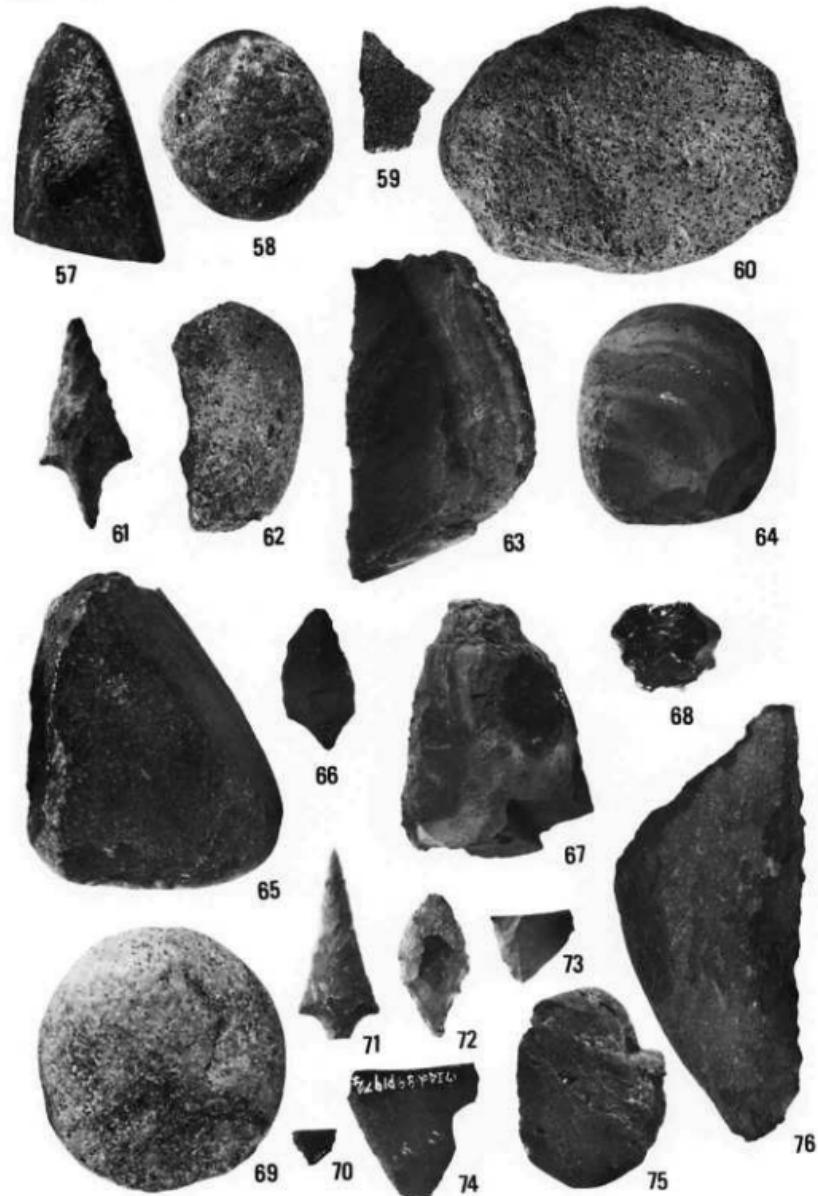
墓壇内出土の石器（写真）



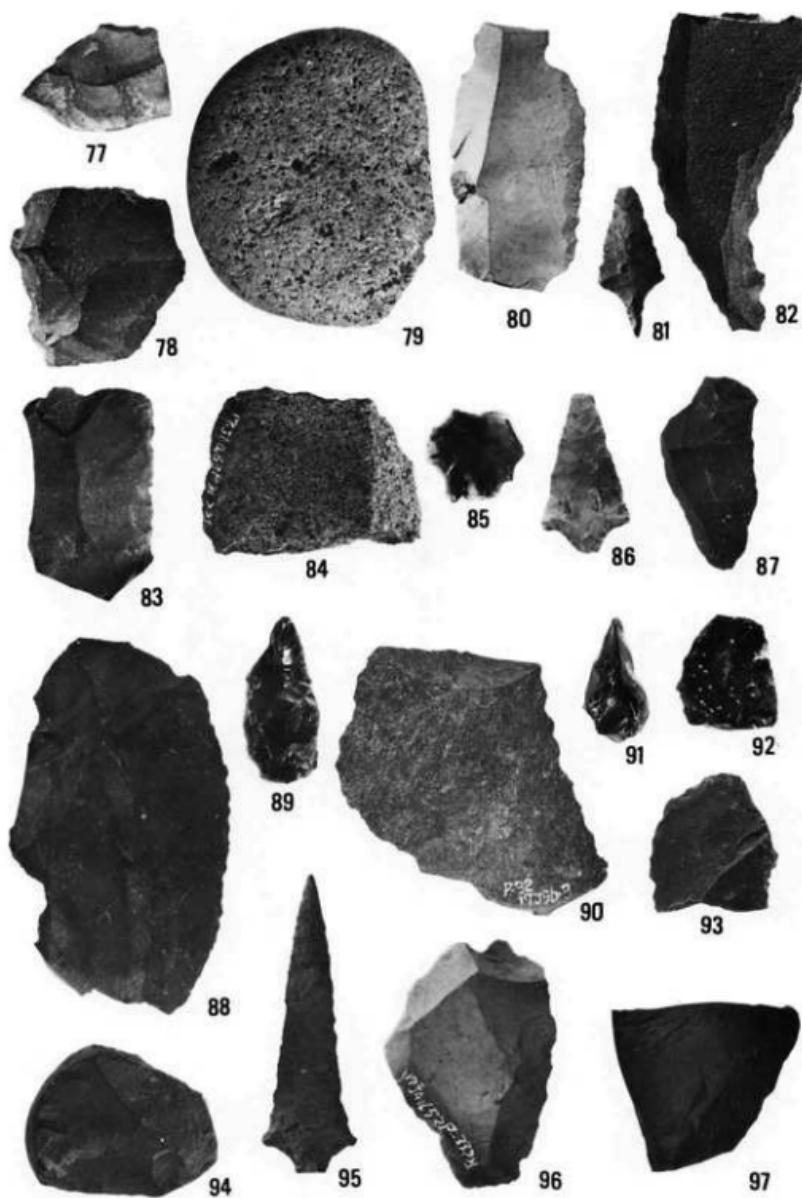
墓壙内出土の石器（写真）



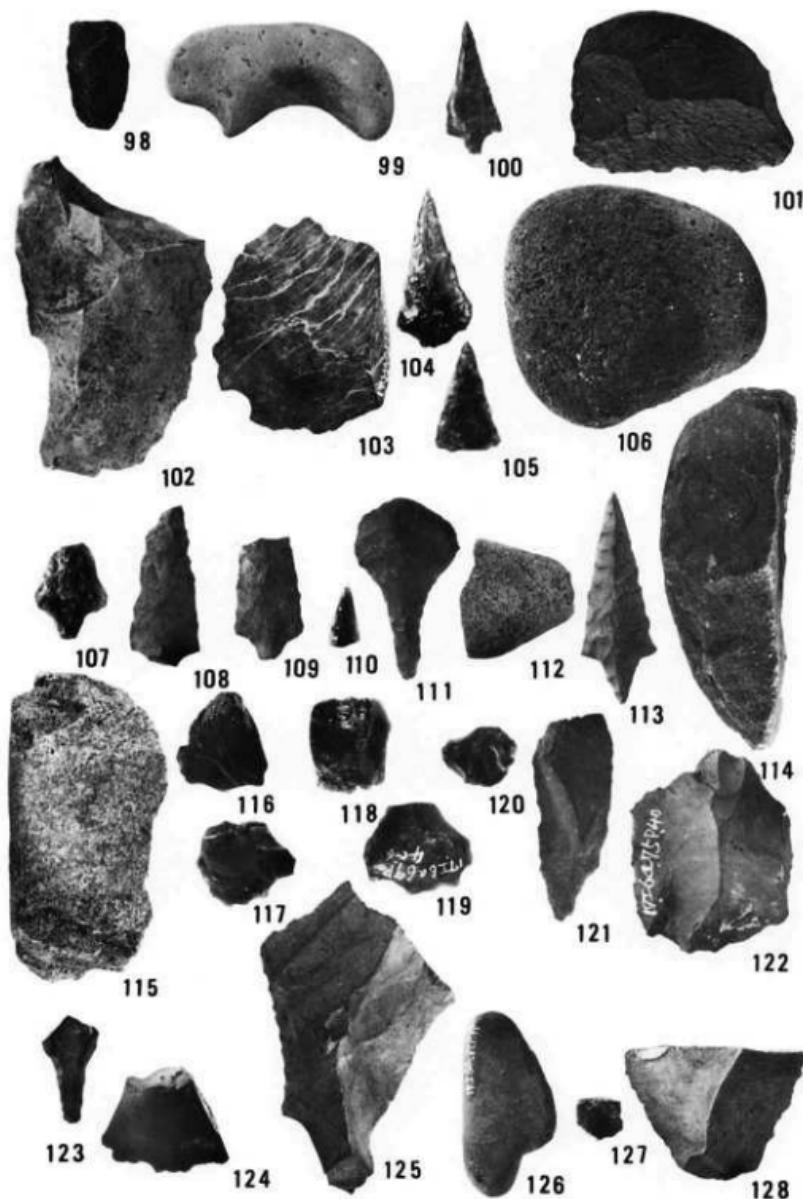
墓壙内出土の石器（写真）



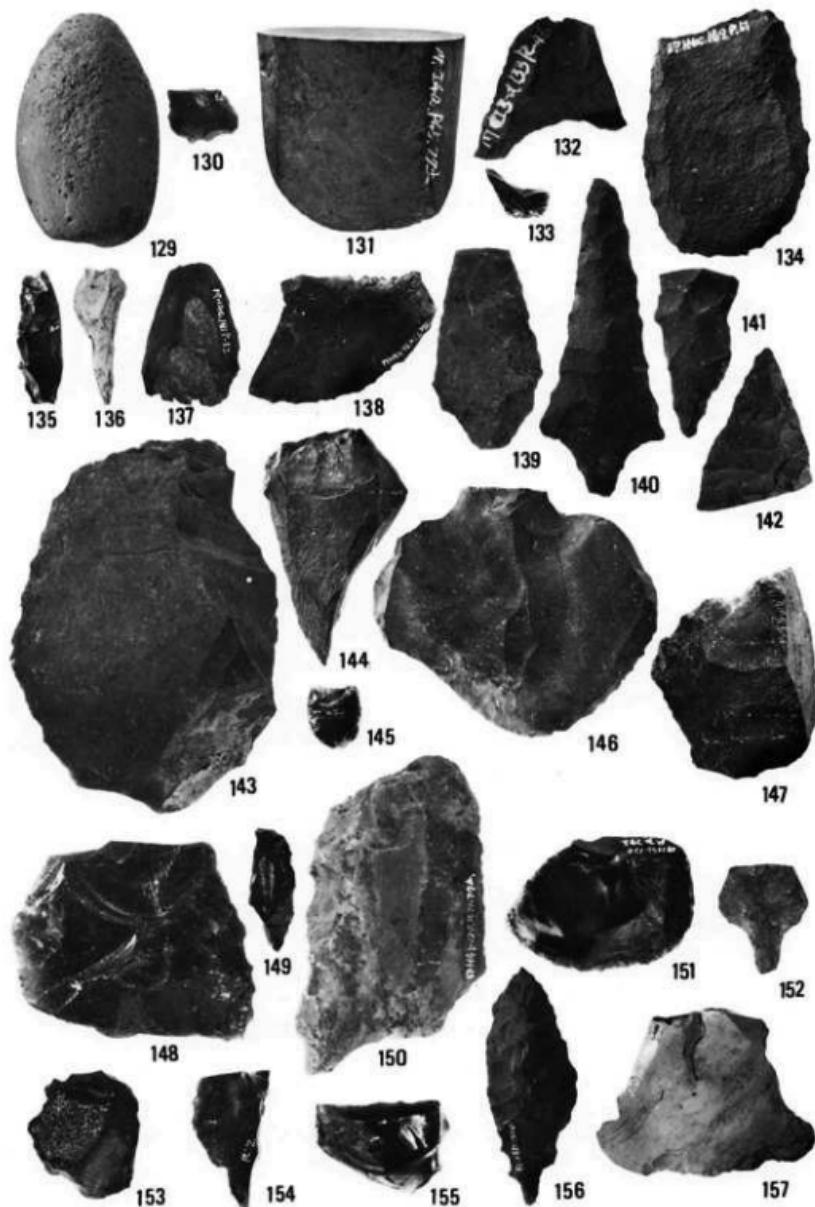
墓壙内出土の石器（写真）



墓域内出土の石器（写真）



墓壇内出土の石器（写真）



墓壙内出土の石器（写真）

### 3. 包含層の遺物

#### 遺物の出土状態

朱塗壺はK-5-d区の包水する部分で出土した。壺は口縁部を欠いたのみで直立したまま出土（図版3の9）し、器内には泥土がびっしり詰まり、それにまじって口縁部破片、先端にペニガラを付着させた河原石が出土している。それに伴う遺構はなく、単に置かれているような状態である。他方、朱塗土器は底部と肩部の一部が同一か所（図版3の10）で出土し他のものは別のところで発見されている。粗製土器では、口縁部、胴部、底部が各地区に分散して出土するようである。同一個体が、かたまって出土しても底部が接合される例は少ない。

#### 遺物の説明

本遺跡出土の土器は、III群a類の円筒上層式土器（図3-102の1）が1点、IV群a類の余市式土器胴部破片（図3-102の2）が2点、IV群b類の船泊上層式土器（図3-102の3・4）の壺破片が2点、IV群c類の堂林式土器（図3-102の5～9）が5点、大洞B-C式に相当するV群a類（図3-102の10～19）が10点出土している。それ以外の土器は、V群b類のものである。本稿では主にV群b類について述べる。V群b類は、大洞C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>に相当する。

#### 粗製土器（図3-97の1～7、図3-102の20～60）

粗製土器には、壺・注口・浅鉢等が出土する。壺には、二つの器形が見られる。ひとつは頸部の細いもの、他は広口のものである。細くすぼまるものには体部に磨消手法による雲形文（図3-97の1）と沈線文による雲形文（図3-97の2）、頸部の肩に2条の沈線をめぐらすもの（図3-97の3）がある。これらは、頸部からなだらかに体部に移行していくものと頸部の下がくびれ、肩の張るものとが見られる。後者の類例は、札苅遺跡の墓で出土している。他方、広口の壺は、沈線の間にやや角張るS字文が肩部につけられているものである（図3-97の4）。

注口土器は、肩部と底部に磨消手法による鉢巻状の文様（図3-102の30・31）がつけられる。

浅鉢は、丸底ではなく平底が多い。口縁部に比較的狭く施文するもの（図3-97の5）、体部全面に施文するもの（図3-97の6）、地に繩文のない半浮彫りの雲形文をもつもの（図3-103の55）がある。無文のものは、口唇部が肥厚するものと、しないものとがあり、肥厚するもの（図3-103の7）は、押し引きによる細い瓜形状の文様と鋸歯状のきざみがある。

その他に、頸部にくびれをもつ浅鉢と思われる資料（図3-103の56・57）が2点出土している。肩部に沈線文がめぐらされ、沈線の底に刻みがつけられるものである。また、台付鉢の台部の破片（図3-103の58）も1点であるが出土している。

#### 粗製土器（図3-97の8～図3-101の43、図3-102の61～図3-115の415）

粗製土器には、壺、浅鉢および鉢、台付鉢、深鉢などの器形が見られる。壺（図3-98の15～21）は、大形、中形、小形があり、大形のものは、頸部が短くて強くくびれるもの（10号墓出土の

壺が典型的なもの)と頸部にやや幅の広い沈線文によるS字文をもつものと、頸部が長くて多くの字に折れ曲がっているものがある。その他、外反する口縁部をもち、やや肩の張る体部に条の縱走する縄文が施されるものがある。中形の壺は、頸部がすばまり、底部が丸くなるものが1例ある。小形壺は、頸部が短く、そこに太い沈線が一条めぐるもの、やや頸部が長くて多くの字形にくびれるものがある。図3-104の75は、中形の壺と思われ、口縁部が強く外反し、肩部に沈線による渦巻文がつけられる。

鉢(図3-98の22~29)には、口縁部にくびれをもつものと、もたないものがある。くびれをもたないものには、太い沈線が、もつものには細い沈線がつけられるようである。なお、くびれをもつ鉢には台付鉢になるものが相当数ある。また、くびれをもつ鉢には、くびれの傾きがゆるやかなものから急なものまであり、くびれの強いもののうちには条の縱走する縄文が多いようである。くびれをもつもののなかには、稀に口縁部から頸部にかけて縄線文が施される例がある(図3-99の28)。

台付の台部には、沈線、連続した割み目が施文される例が多い。

深鉢(図3-99の30~図3-101の40)は、大形、中形、小形とがあり、大形は、頸部のくびれるものとくびれないものがある。くびれをもつものは、くびれ部を無文にしているものとそこに沈線をめぐらしているものとが見られる。後者には、条の縱走する縄文が多い。くびれのないものは、横走する太い沈線が施文される。中形には、口縁部に縄線文を施文する例(図3-115の395~415)が多い。小形のものには、体部全面に渦巻文が施文されるもの(図3-99の28)、下から突上された刺突文を2段めぐらしているもの(図3-99の32)がある。その他に大きさは不明であるが、上向きと下向きの弧線を互い違いに配列してつくられた文様(図3-109の233)、半円状文の流れをくむS字状の文様(図3-109の234)、上ノ国式に系統が求められる横に爪形が残されたもの(図3-109の235)がある。

縄線文の施した土器には、無文のものと地文をもつものとがある。後者の地の縄文は、沈線文をめぐらした土器の縄文と相違はない。この縄線文をもつグループには、くびれをもつ深鉢は認められない。また、胎土、焼成などは、沈線文のものとグループと変わらない。その他に、これまで述べてきたものとは若干異なる土器がある。それらは、胎土・焼成とも他のものとは違いはないけれども、体部に集中的に刺突文を施すもの(図3-115の391)、形がだ円で丸底をなすもの(図3-115の392)、口唇直上に指痕のみられる波状口縁のもの(図3-115の393)である。これらの土器は、タンネトウシ式土器につながる特色をもっている。

#### 土製品(図版31の1~3)

土器あるいは土製品の器面から剥落したと思われる把手状のもの(1)、土偶の胸部あるいは土製品の破片と思われるものの(2)、土器片の縁を打ち欠いた円盤状のもので、中央部に穿孔のある例(3)などが出土している。

#### 土偶(図版3の10・図3-129の183)

K-4-cの包含層中から発見された中空土偶がある。中空土偶は肩から手にかけた部分で、手のそりかえりからみると左肩の可能性が強い。縄文が施され、肩部に渦巻文と思われる文様が見られるが、腕から手にかけては縄文が磨耗されている。札幌遺跡出土の土偶は、板状の小形土偶で、中空のものではなく、いずれも右腕が破損しているとのことである。<sup>(11)</sup> 地に縄文ではなく両肩の下に渦巻文が単独に施文されるものが1例ある。室蘭出土の土偶は、地に縄文をもつ胸部と腹部とに渦巻文が連続して施文される例で、報告者の芹沢長介氏は大洞C<sub>2</sub>式土器に伴うものと推測している<sup>(12)</sup>。

#### 木製品 (図3-130の183~186)

水付き部分のJ-6-a、-b、K-6において発見されたもので、その出土層位は不明である。直徑4cmの丸い木の片方を斜めに削いた跡が見られるクイ状のもの(183)、やや偏平な形で一方の先端が舌状をなす櫂状のもの(184)、中央部に抉入部をもつや胴渦のような形をしたもの(185)、それらの三者に対して光沢をもつり返った縦筋形をしたもの(186)4点が出土した。これらのもののうち、前三者が晩期のもの可能性があり、最後のものは、江戸時代以降のものと思われる。それらの材質等は、現在分析依頼中である。

#### 石器等

石器の分類別のうちわけは、表3-4で示した。石器のグリッド別の出土数は、図3-93~図3-96に示した。遺物は、H-2区をのぞく調査区域のほぼ全面にわたって出土している。地形図と重ね合わせると、標高15mより低い所にあたる。

石器の分布をみると、器種ごとに少しずつずれはあるが、ふたつのまとまりを認めうる。住居跡から10mほど離れたJ-5-d区を中心としたまとまりと、焼土の近くのI-4-a区を中心としたまとまりである。

剥片石器の素材としては、頁岩、安山岩、黒曜石が使われているが、頁岩がもっとも多い。安山岩は、10~20cm大の亜角礫、亜円礫、頁岩は10~15cm大の角礫、亜角礫、黒曜石は5~10cm大の亜円礫などが素材として推定できる。剥片剝離の作業を想定する剥片、破片の中部分を4か所ほど検出できた。それらのうちのひとつで、J-4-a区にあった集中部分では、約130点の頁岩の剥片がみられた。剥片の接合をなした資料は少なく、図示するまでにはいたっていない。

使用痕、加工痕のある剥片(X群)に分類したもののうちに、特徴的な石器がある(図3-128の151~164)。角度が直角にちかい、長さ5mm前後のスクレイバーエッジが、内側に曲がる石器である。素材としては、黒曜石が多い。刃部の角度が大きく通常の図では示しにくいので、スクレイバーエッジの部分は、補助線→で示しておいた(分布図は図3-94下)。

黒曜石製のものには、「つくりかた・つかいかた」に強い齊一性が認められる。151~154、159は、厚さ3~8mmの剥片で、13~25mmほどの円形をなす。主要剝離面とは逆の面(背面)

に刃部がある。ほぼ全間に刃部がみられ、刃部と刃部の境には、結果としての「とんがり」ができる。ラウンドスクレイバーに類似するが、刃部が内側に曲がるところで区別する。

主要剥離面に刃部があるもの(同図 155、157、160、164)、両面に刃部をもつもの(同図 158、163)もある。156、161、162にも内側に曲がる刃部がみられる。遺構出土のものもある。

玉類は、遺構内から出土したものとほぼ同じである。ただ図 3-129 の 171 の頁岩製の勾玉は、ふたつに割れて、わかれて出土している。剥片石器につかうものと同じような頁岩で、表面には、仕上げの研磨痕がみられる。紐孔のあるほうの半分は黄褐色で、下の半分は黒っぽく風化変色している。紐孔は、両面からの穿孔で、すこしづれがあり、ドリルの回転痕が鮮明に残っている。紐孔のちかくには、以前の紐孔の痕跡が認められる。

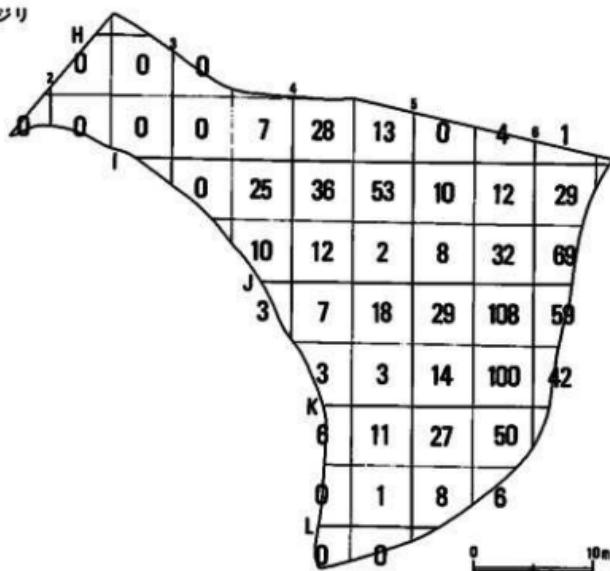
注 1 野村 崇 「北海道考古学」12 号 1976

注 2 「世界陶磁全集」1 1958

表 3-4 包含層出土の石器等一覧表

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
石 や じ り	I A 3 a	3	つまみ付きナイフ	III A -	12	す り 石	VIA 2	7
"	I A 3 b	3	ス ク レ イ バ イ	III B 2 a	73	"	VIA 3	1
"	I A 3 -	1	"	III B 2 b	79	"	VIA 4	1
"	I A 4 a	598	"	III B 3	20	"	VIA -	7
"	I A 4 b	134	"	III B 4	1	石	VIB -	14
"	I A 5 a	9	"	III B 5	11	石	VIB 1	17
"	I A 5 b	2	"	III B 7	649	"	VIB 2	14
"	I A -	106	"	III B -	47	"	VIB -	8
石 や り	IB 1 a	13	石	VIA 1	10	石 核 類	IX	3
"	IB 1 b	8	"	VIA 2	36	石核ある断片	X	2,047
"	IB 2 a	2	"	VIA 3	3	礫		412
"	IB -	19	"	VIA -	6	フレイクチップ		18,923
剥 突 器	II A 1	27	た た き 石	VIA 1	44	黒曜石原石		12
"	II A 2	11	"	VIA 2	36	メノウ原石		16
"	II A -	2	"	VIA 3	25	コハク		1
F リ ル	II B 1	18	"	VIA -	35	石 製 品		2
"	II B 2	46	合	VIB 1	3	玉 類		10
"	II B -	2	"	VIB 2	28	針 (骨製品)		2
つまみ付きナイフ	III A 1 b	4	"	VIB 3	22	計		23,667
"	III A 1 c	10	"	VIB -	6			
"	III A 1 d	2	す り 石	VIA 1	3			

1. 石ヤシリ



2. ドリル・穿孔具類

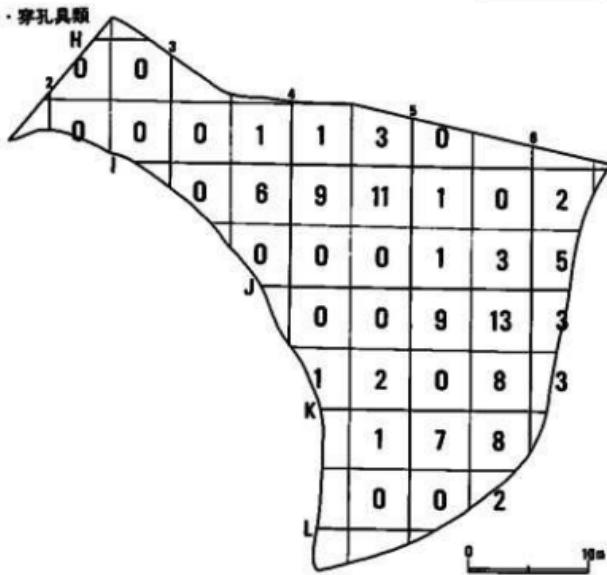
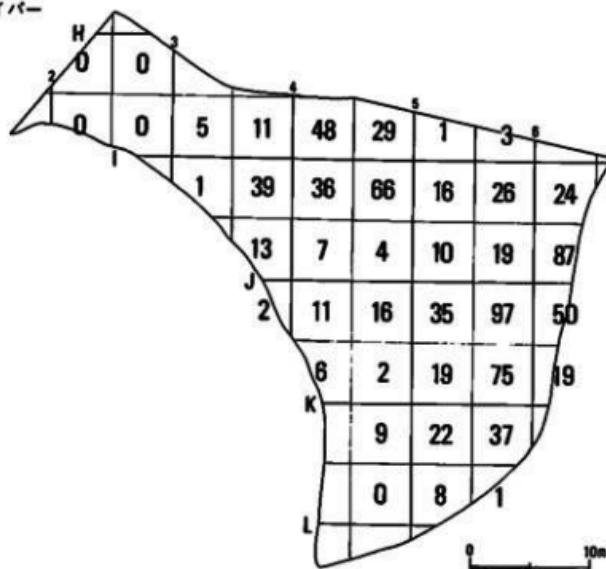


図3-93 グリッド別石器分布図(1)

1. スクレイパー



2. 加工痕・使用痕  
のある刮片①

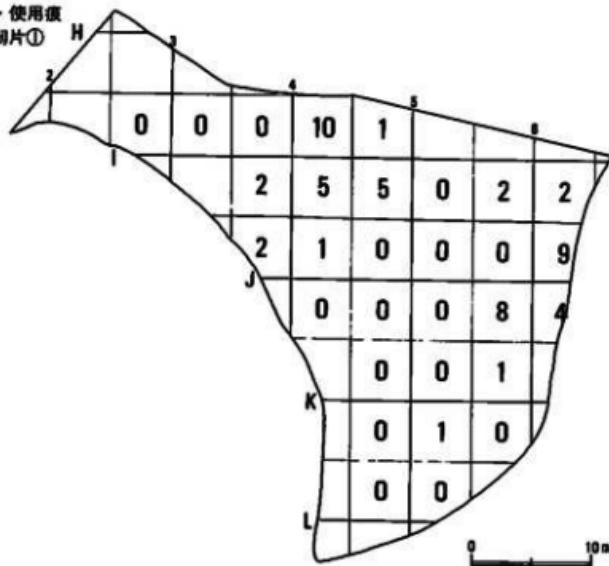
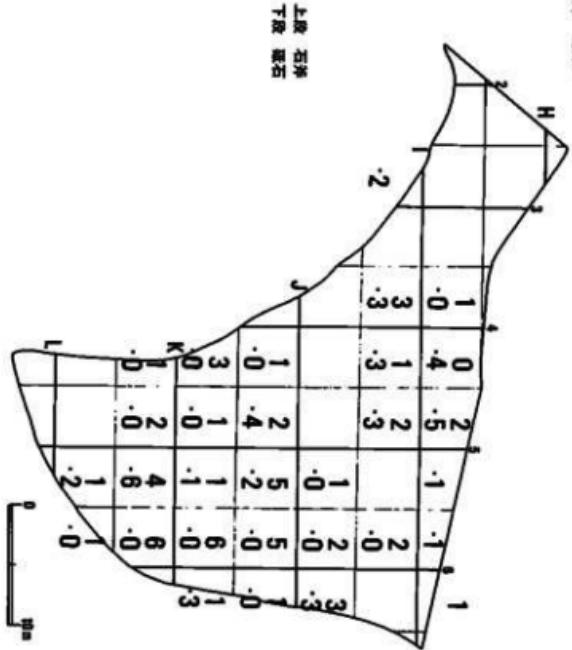


図3-94 グリッド別石器分布図(2)

1. 石斧・石刀



2. たたき石・合石



図3-95 グリッド別石器分布図(3)

1. すり石・石皿



2. 加工痕・使用痕  
のある剝片②

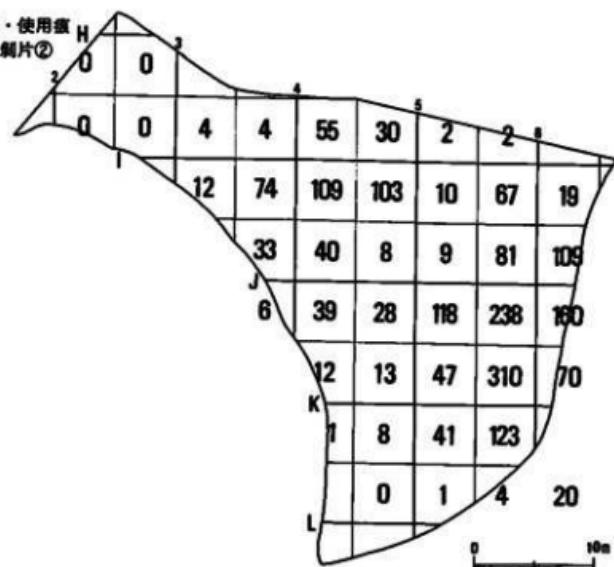


図3-96 グリッド別石器分布図(4)

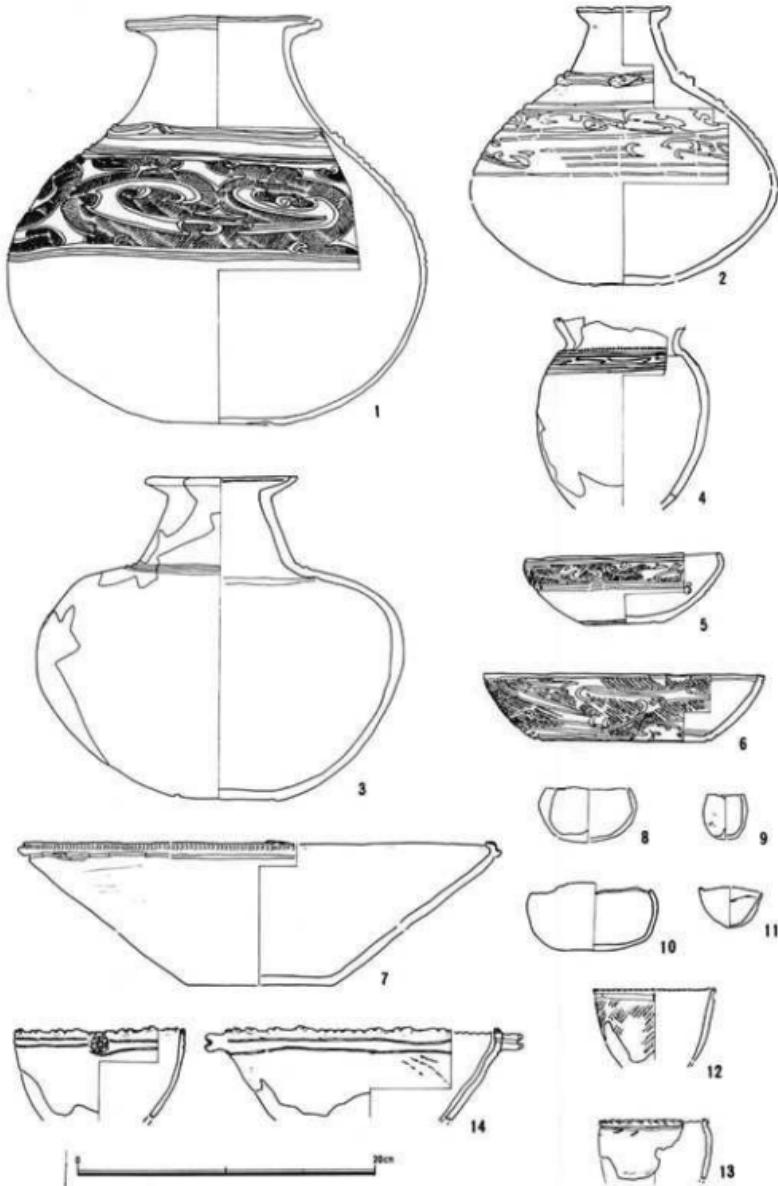


図3-97 包含層出土の土器（実測図）



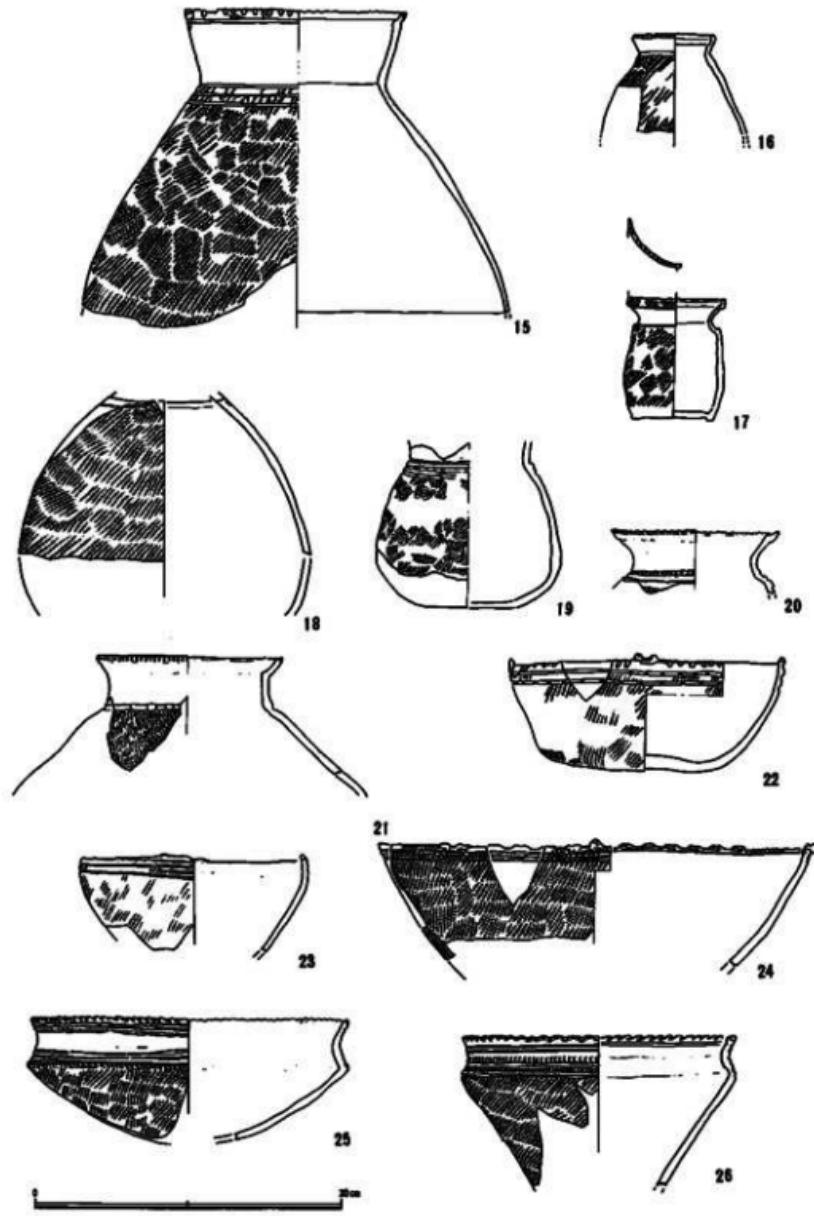
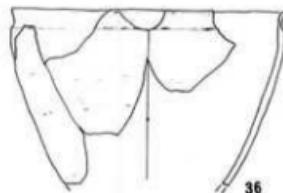
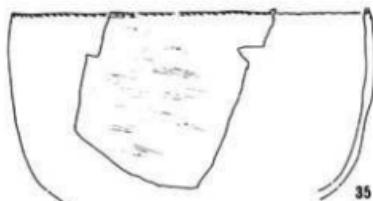
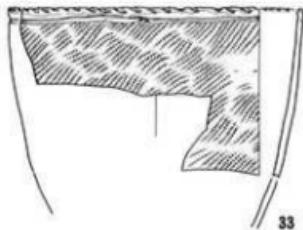
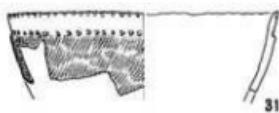
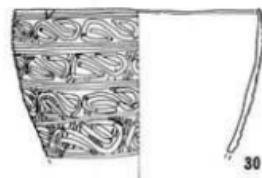
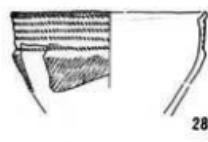
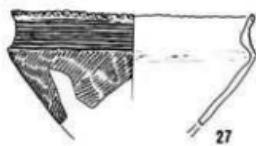


図3-98 包含層出土の土器（実測図）

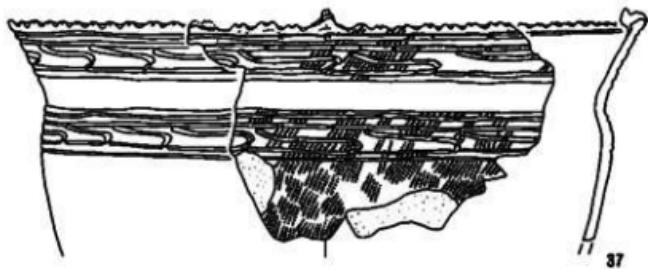




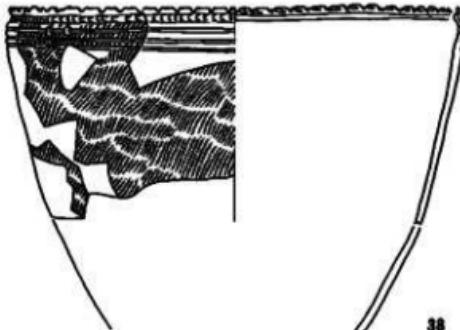
0 20 cm

図3-99 包含層出土の土器 (実測図)

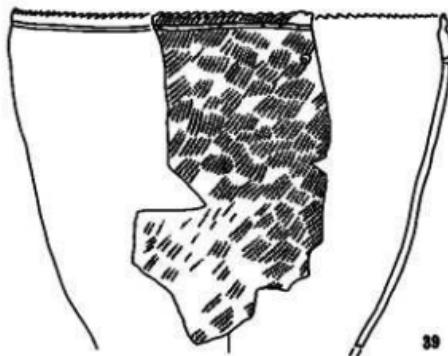




37



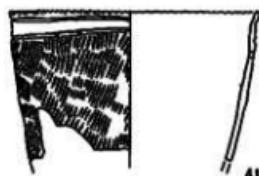
38



39



40



41

1 2cm

図3-100 包含層出土の土器 (実測図)



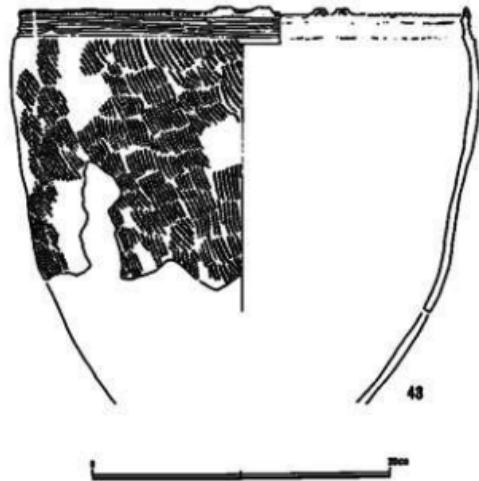
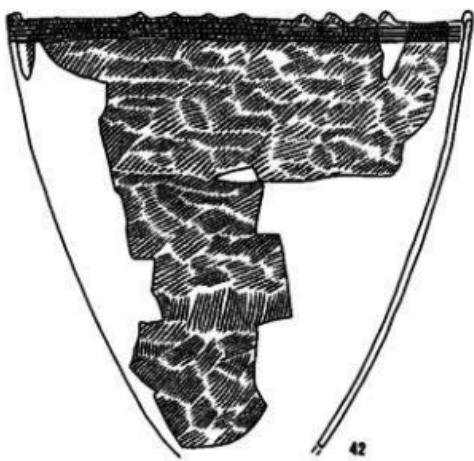


図3-101 包含層出土の土器（実測図）



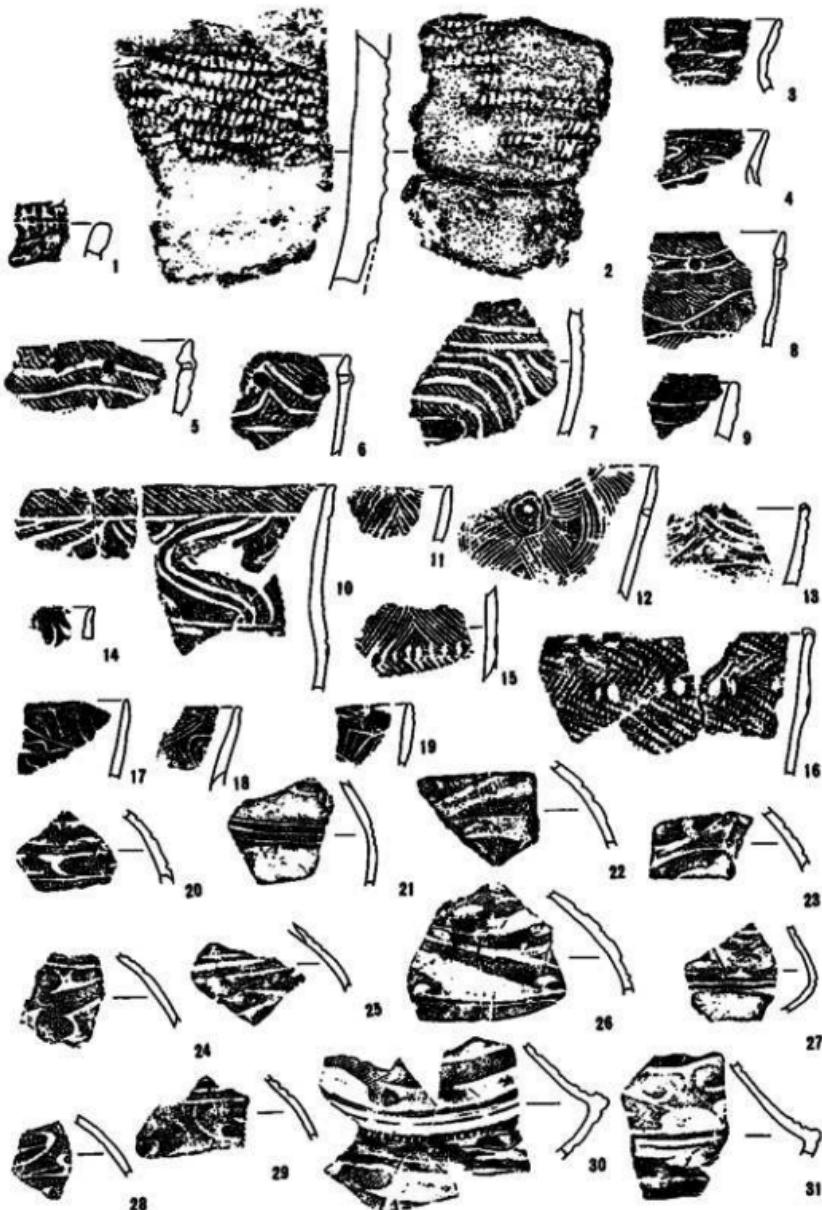


図3-102 包含層出土上の土器（拓影図）

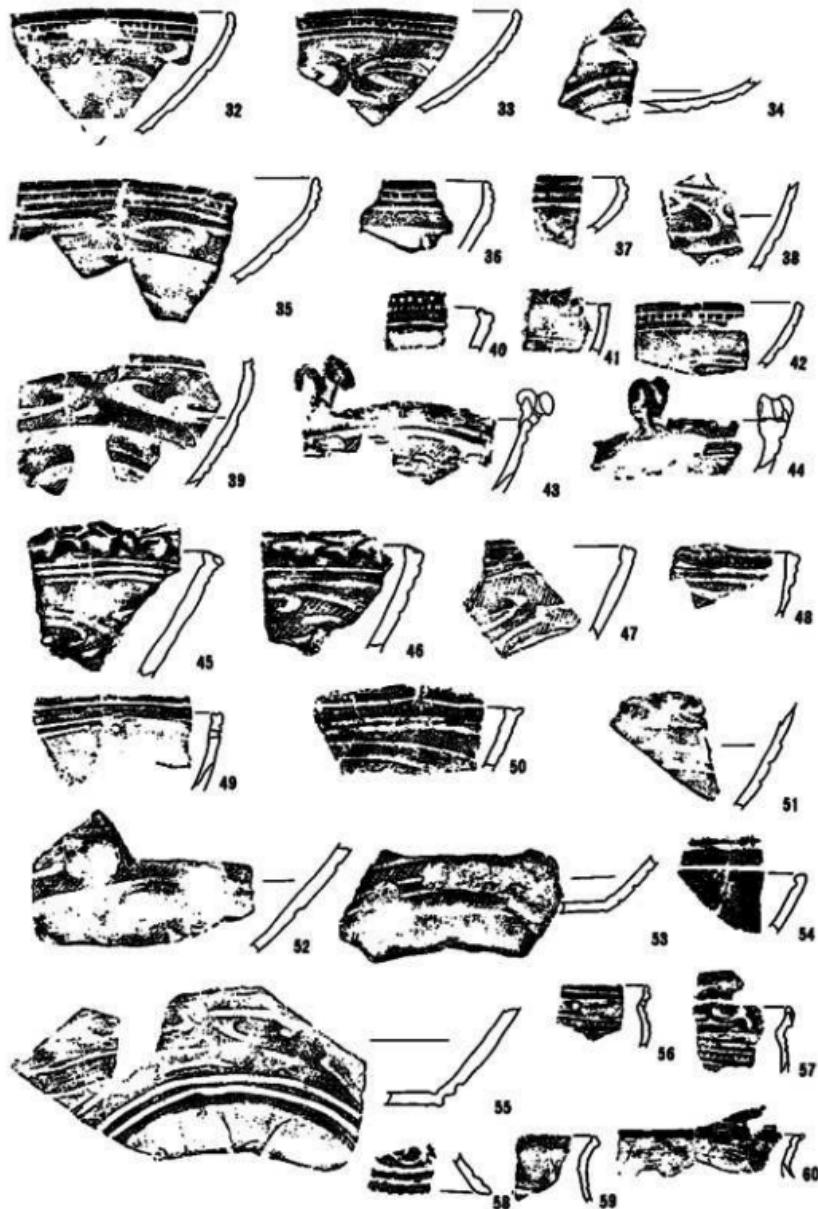


図3-103 包含層出土の土器（拓影図）

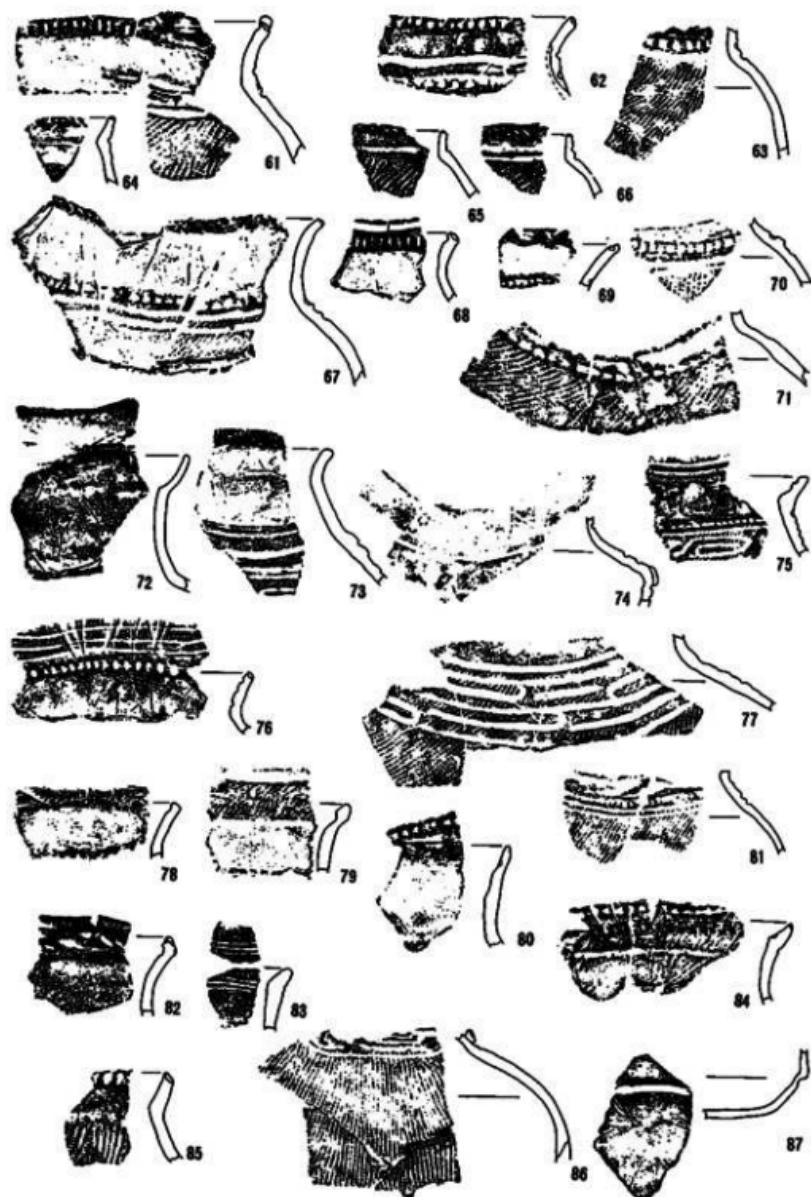


図3-104 包含層出土の土器 (拓影図)

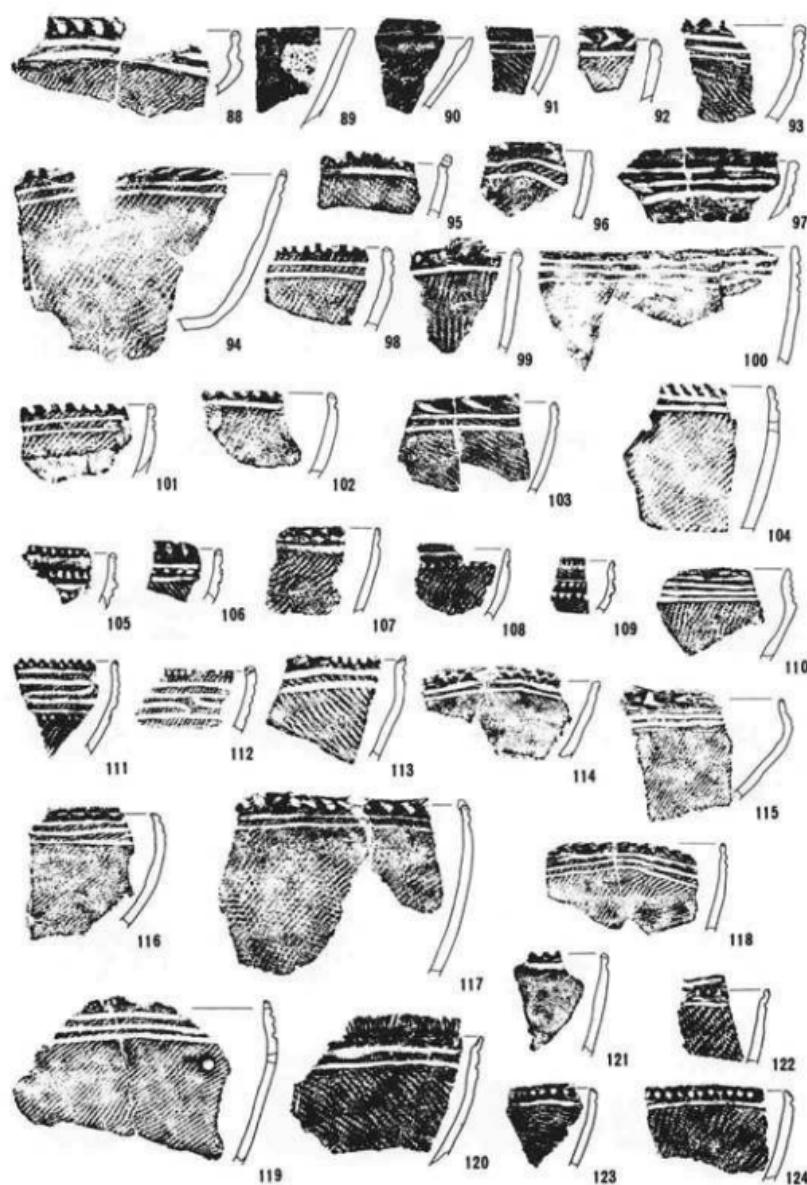


図3-105 包含層出土の土器（拓影図）

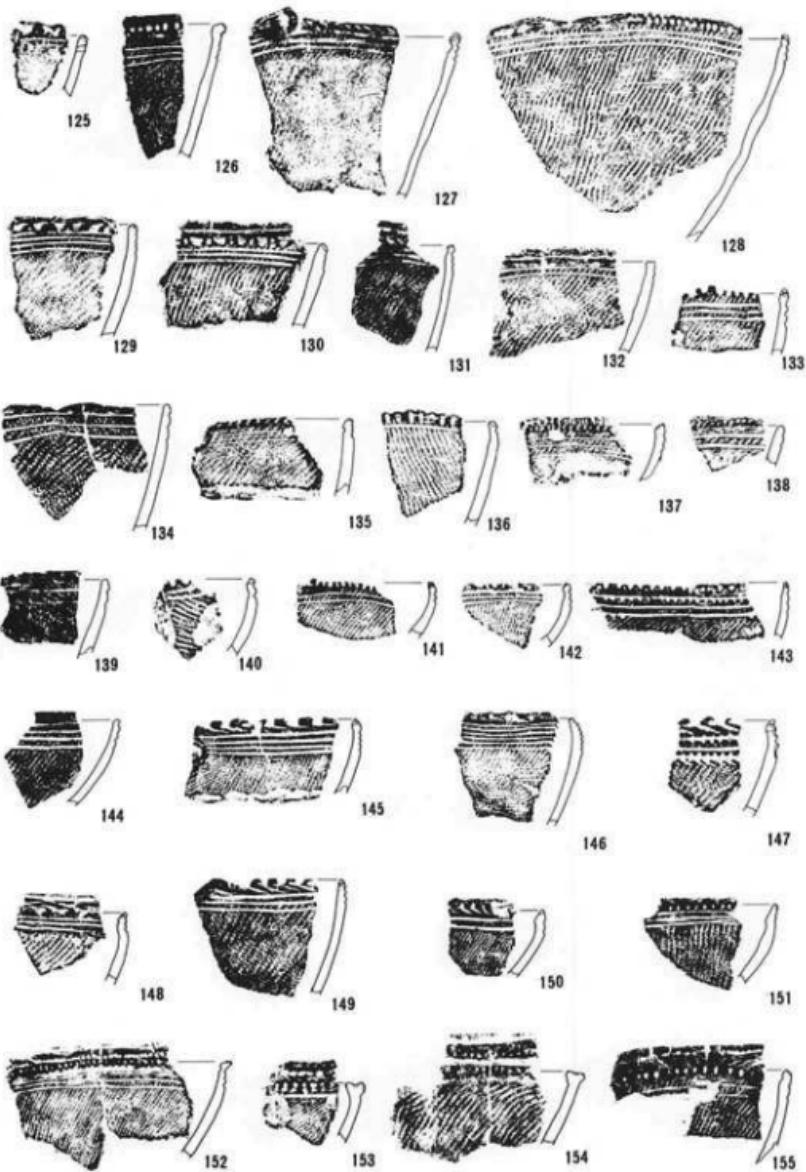


図3-106 包含層出土の土器（拓影図）

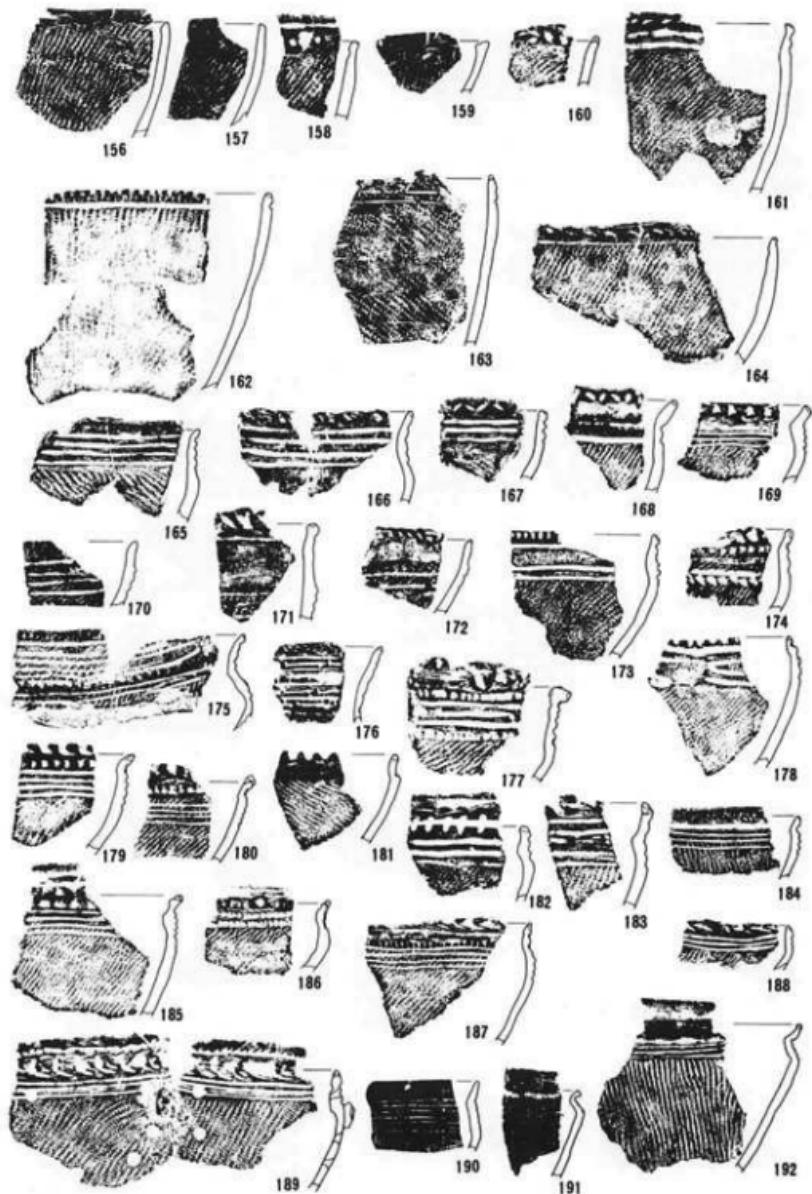


図3-107 包含層出土の土器 (拓影図)

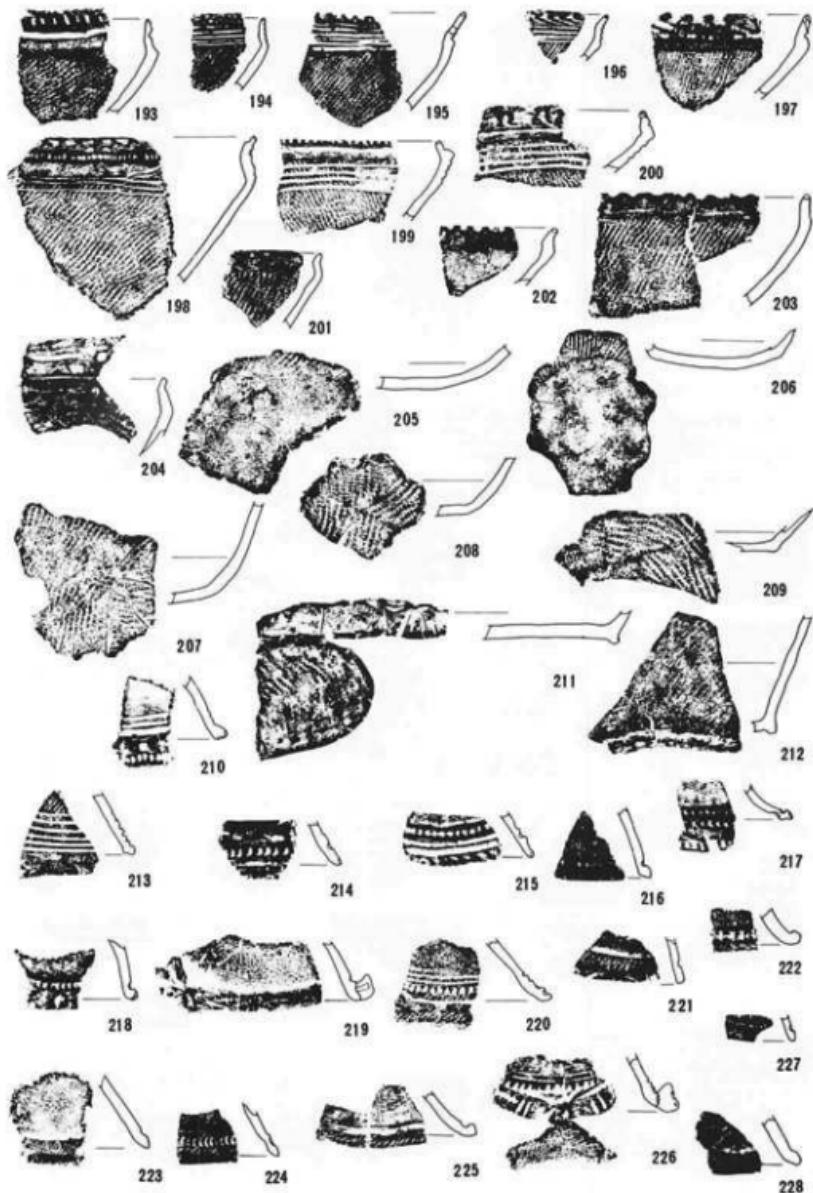


図3-108 包含層出土の土器 (拓影図)

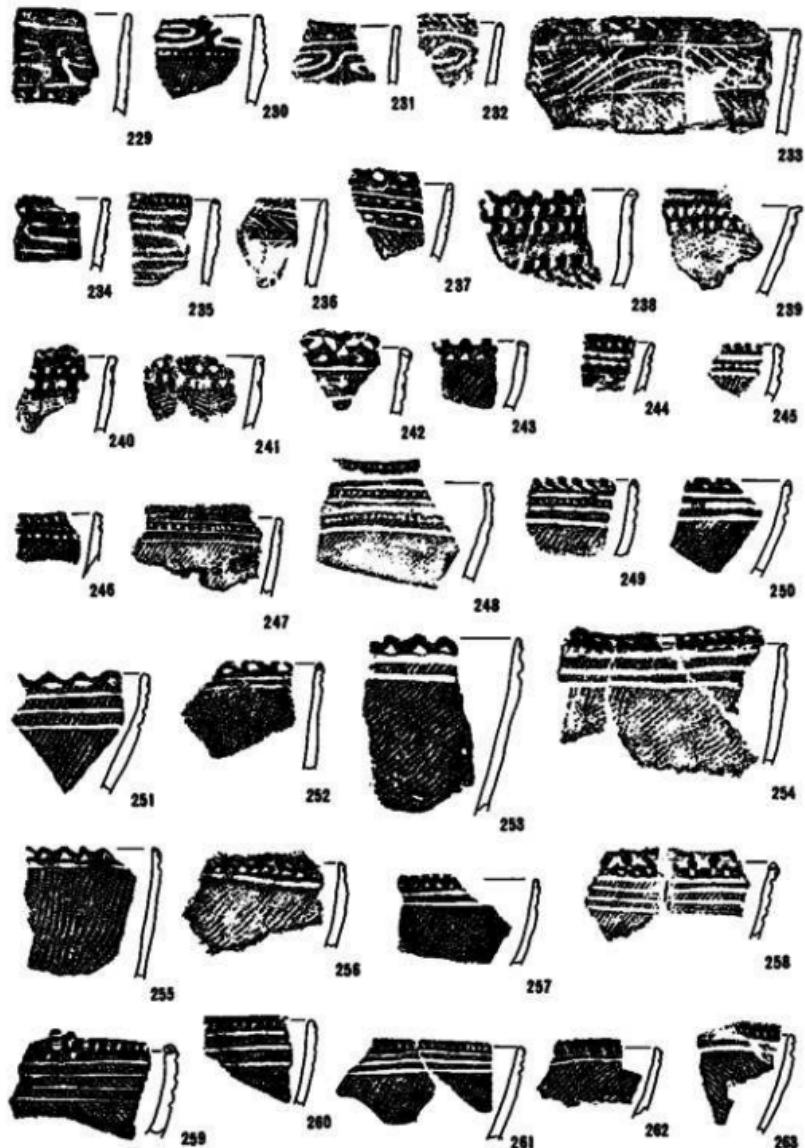
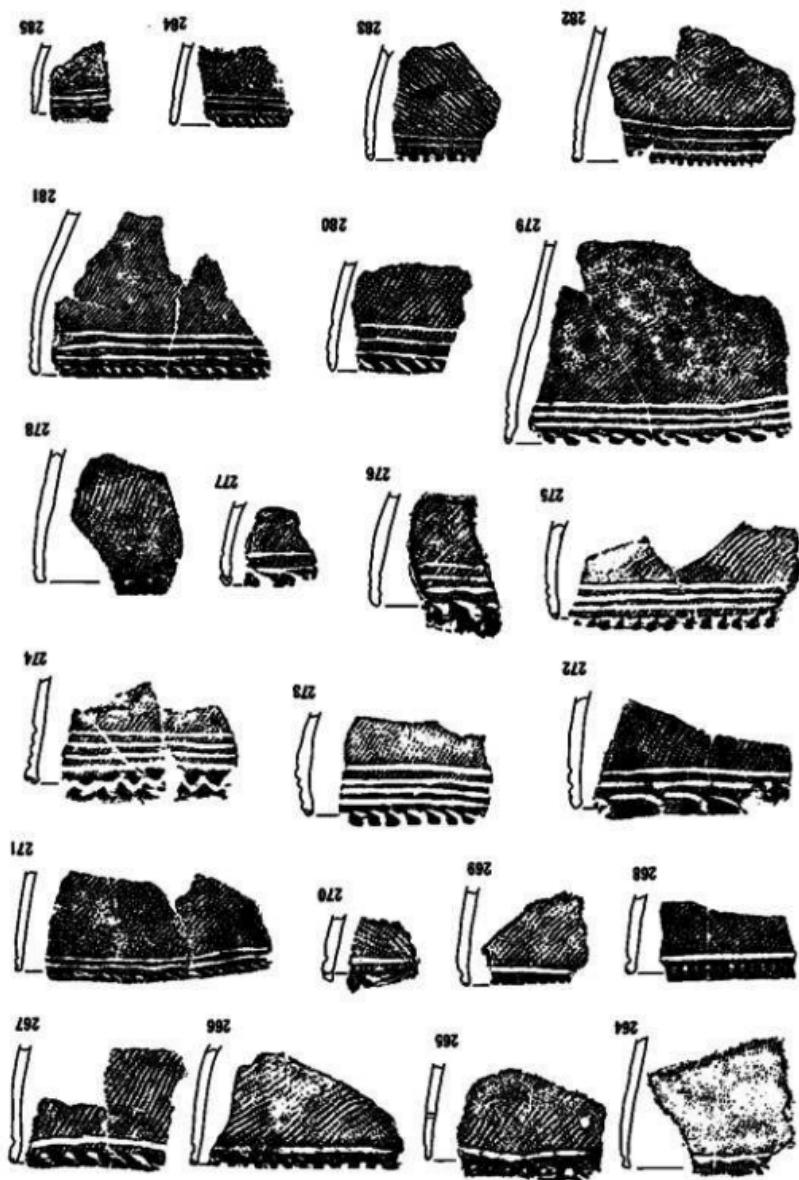


図3-109 包含層出土の土器（拓影図）

图3-110 包金器出土的玉器(拓片图)



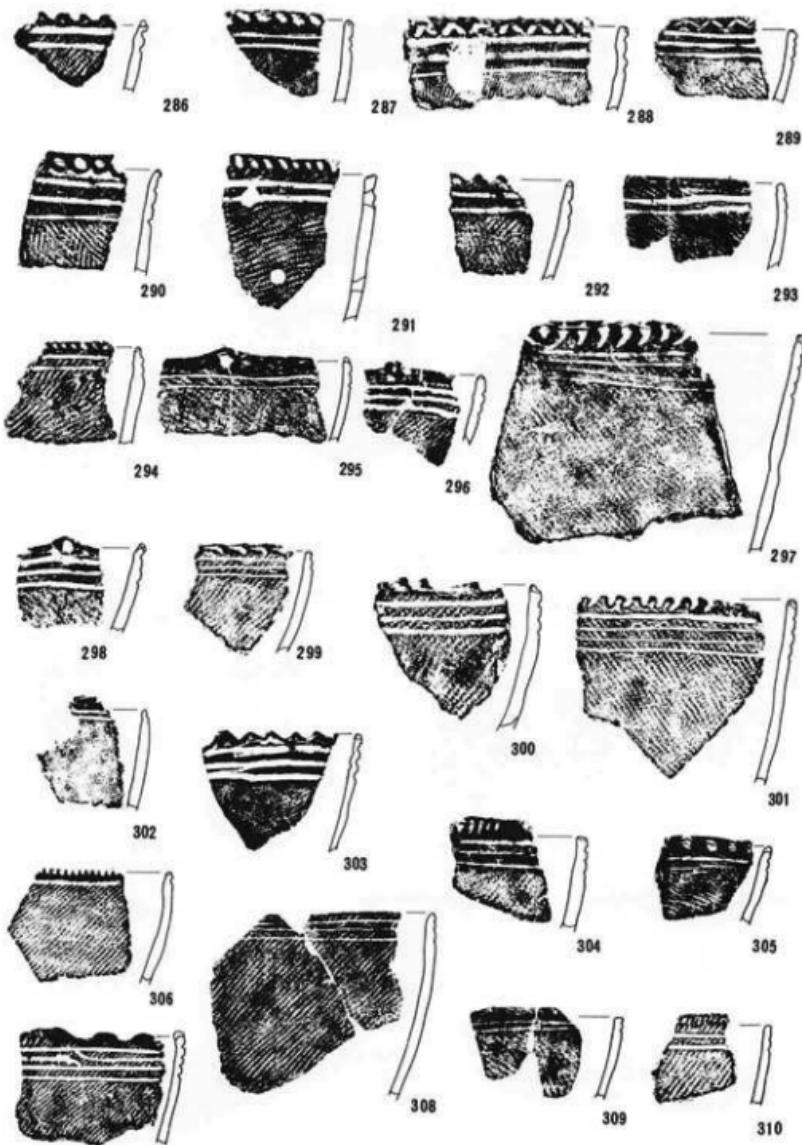


図3-111 包含層出土の土器（拓影図）

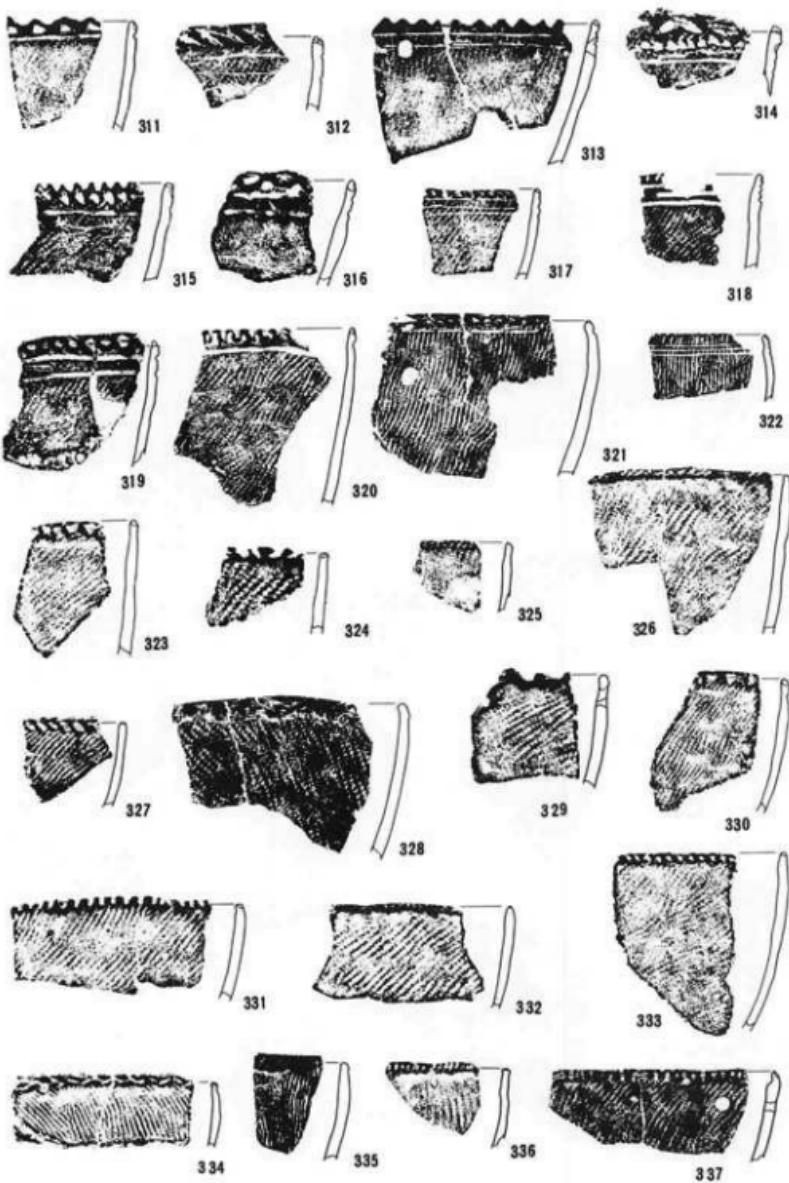


図3-112 包含層出土の土器（拓影図）

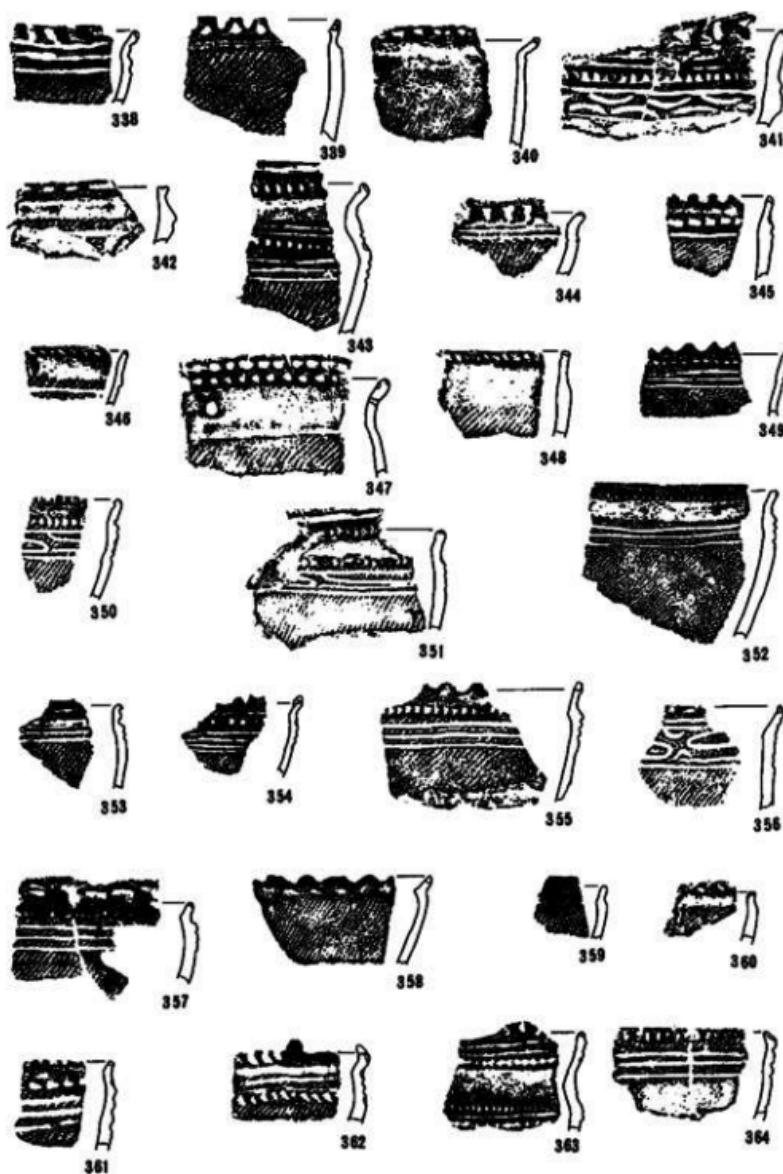


図3-113 包含層出土の土器（拓影図）

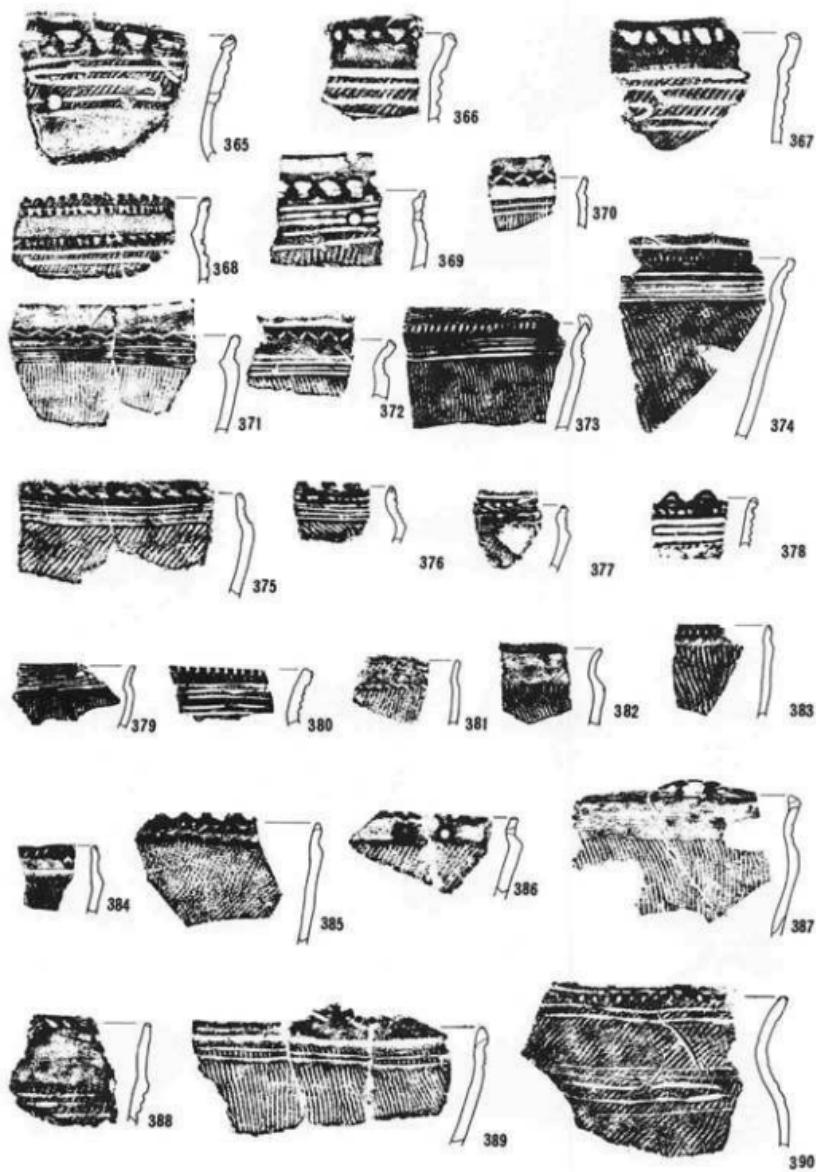


図3-114 包含層出土の土器（拓影図）

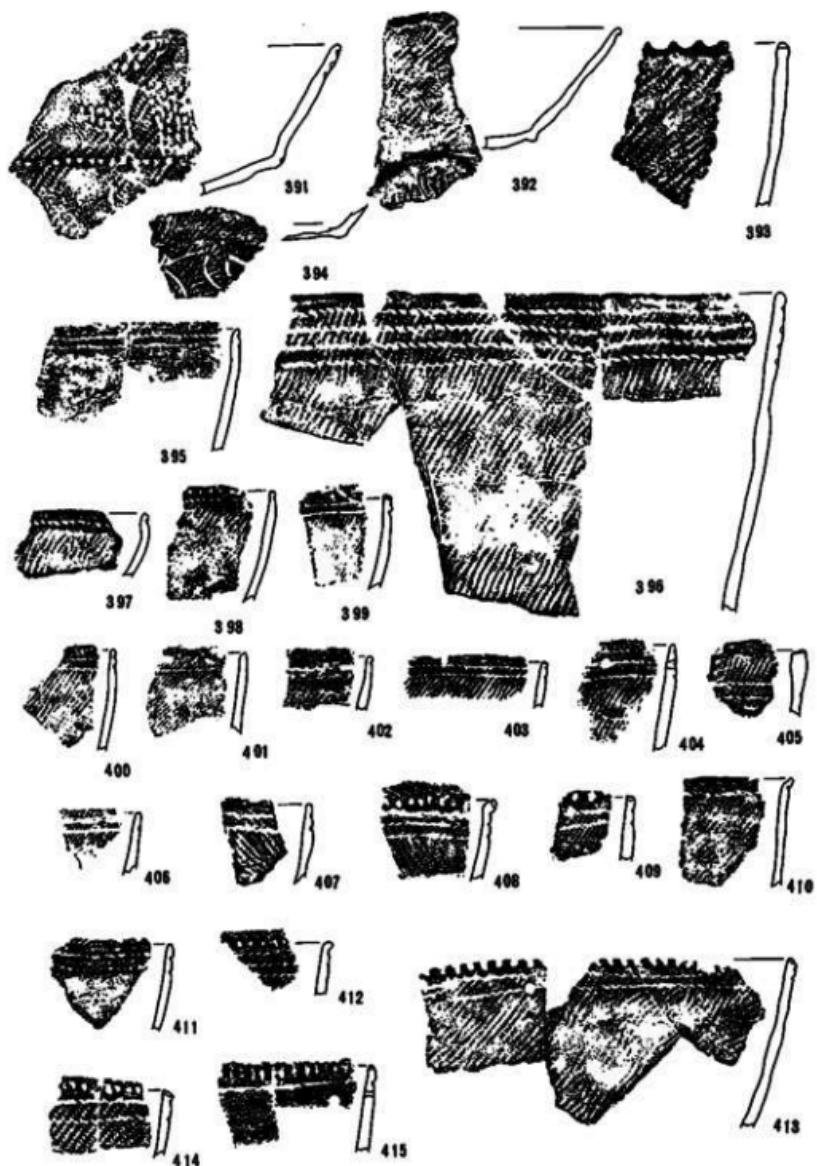


図3-115 包含層出土の土器（拓影図）

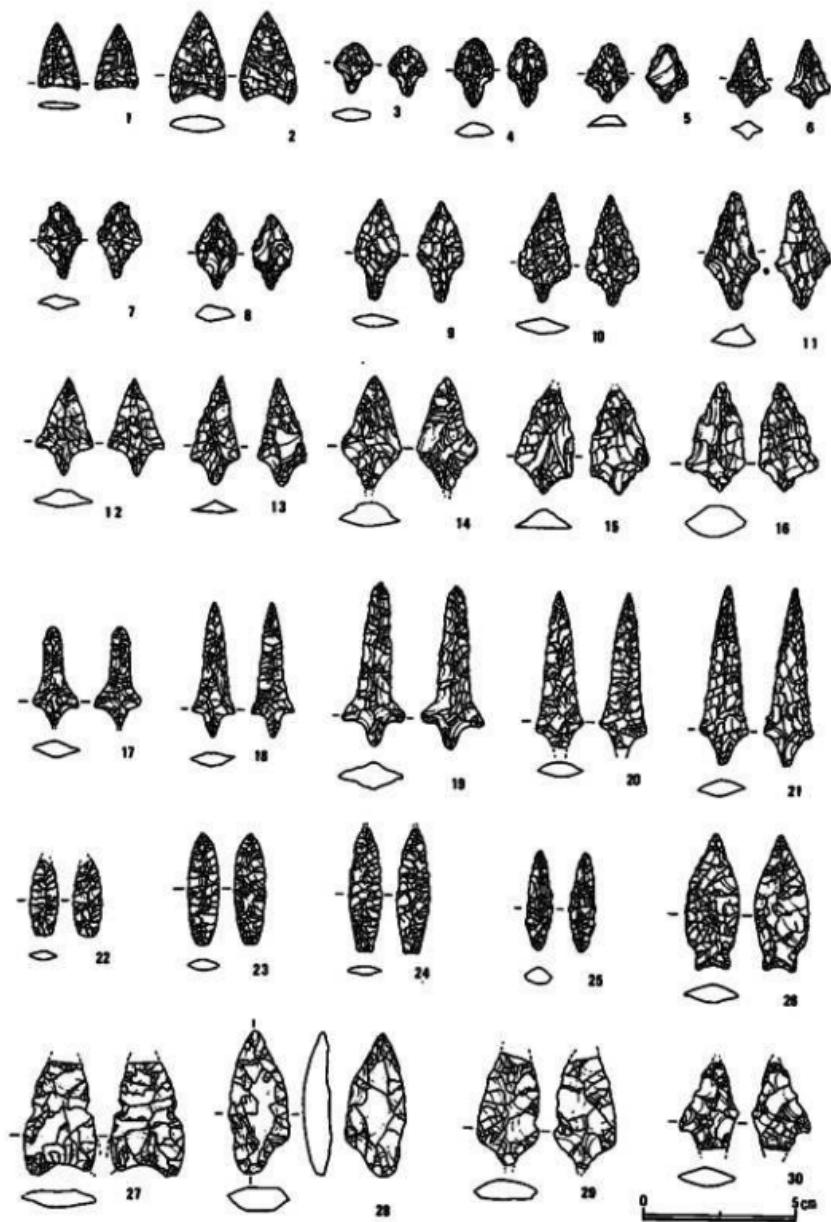


図3-116 包含層出土の石器

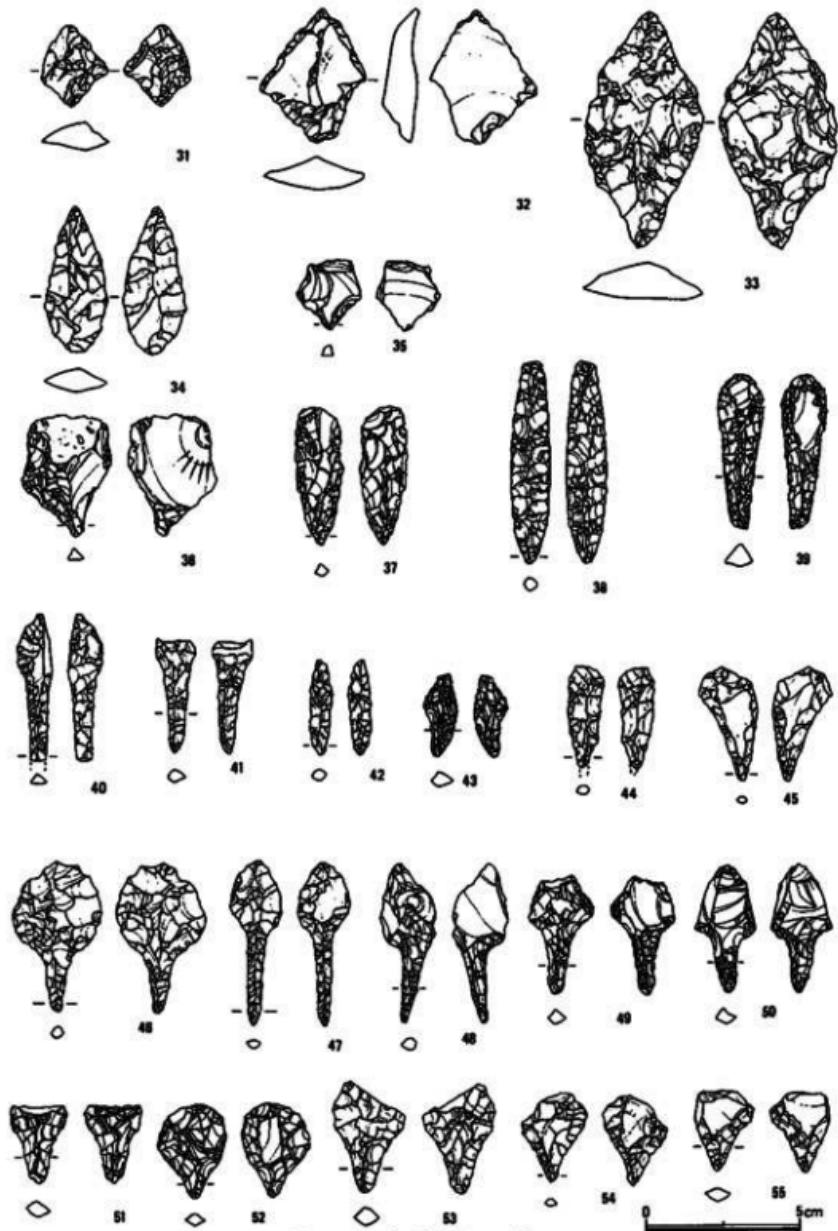


図3-117 包含層出土の石器

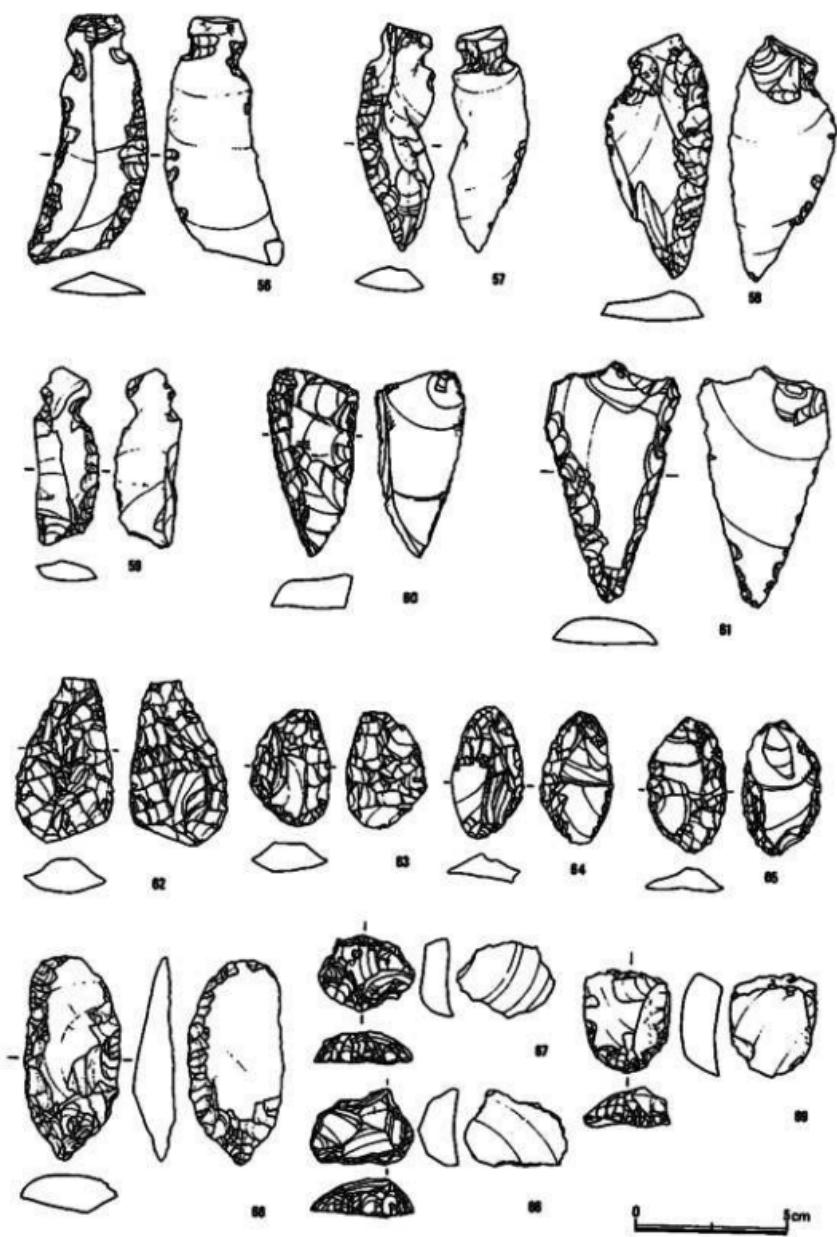


図3-118 包含層出土の石器

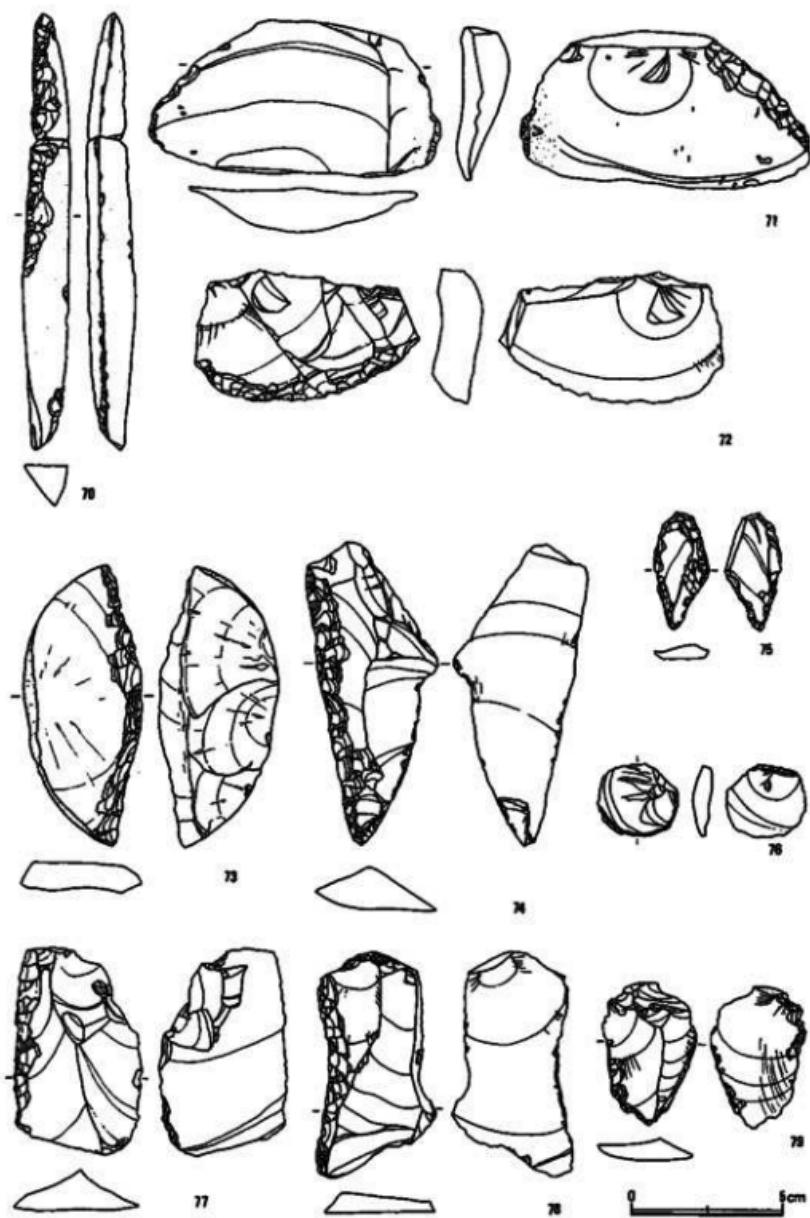


図3-119 包含層出土の石器

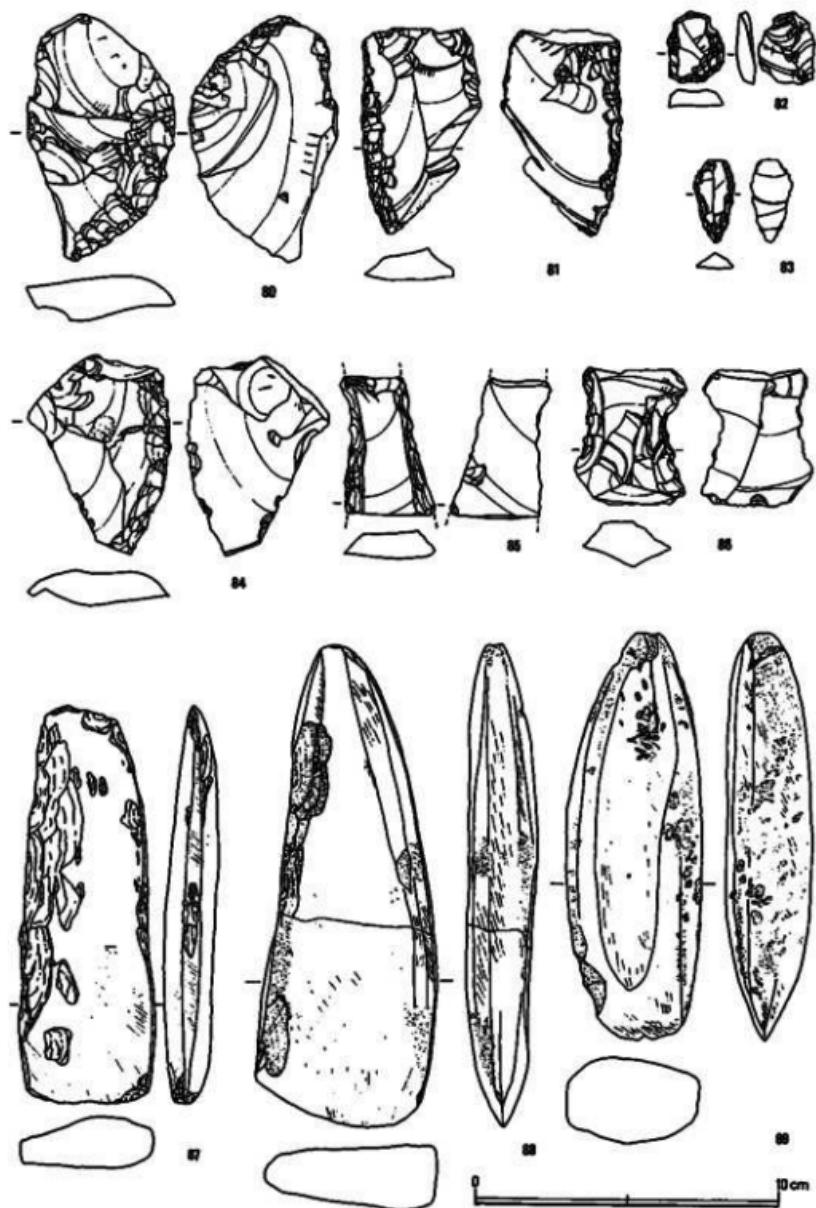


図3-120 包含層出土の石器

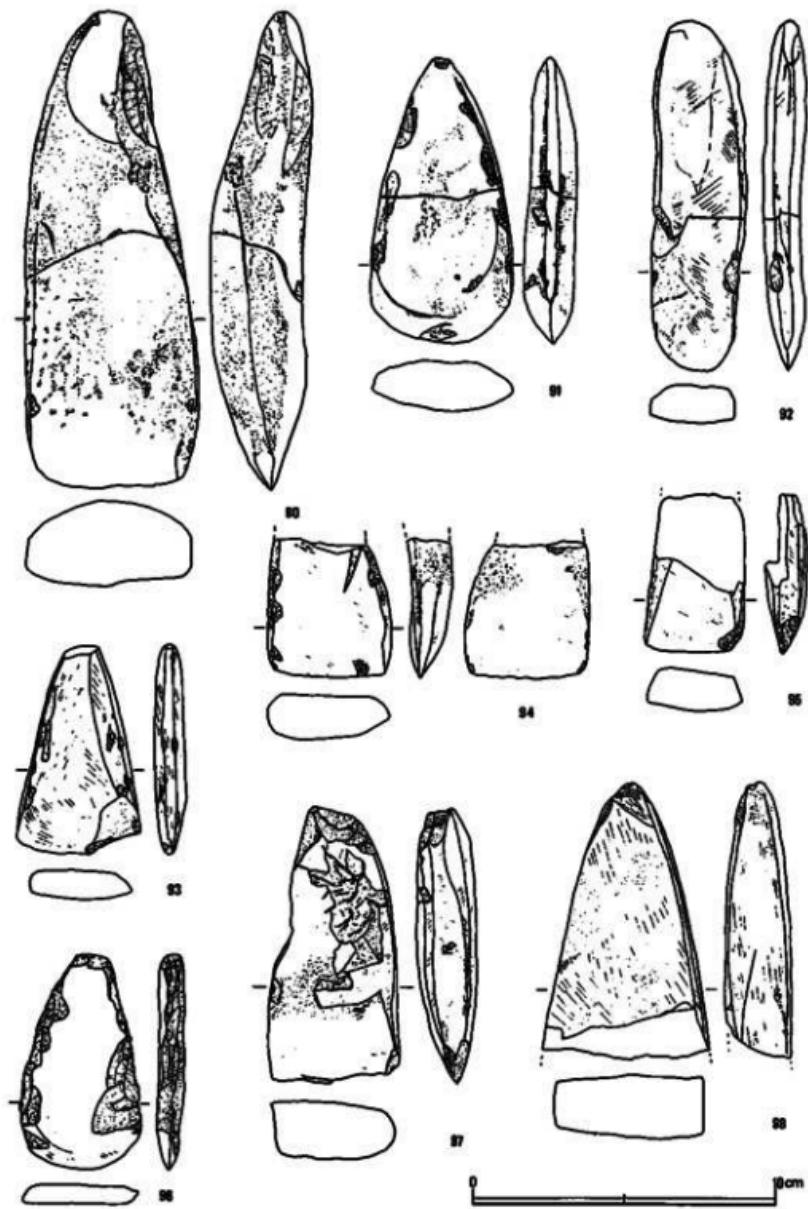


図3-121 包含層出土の石器

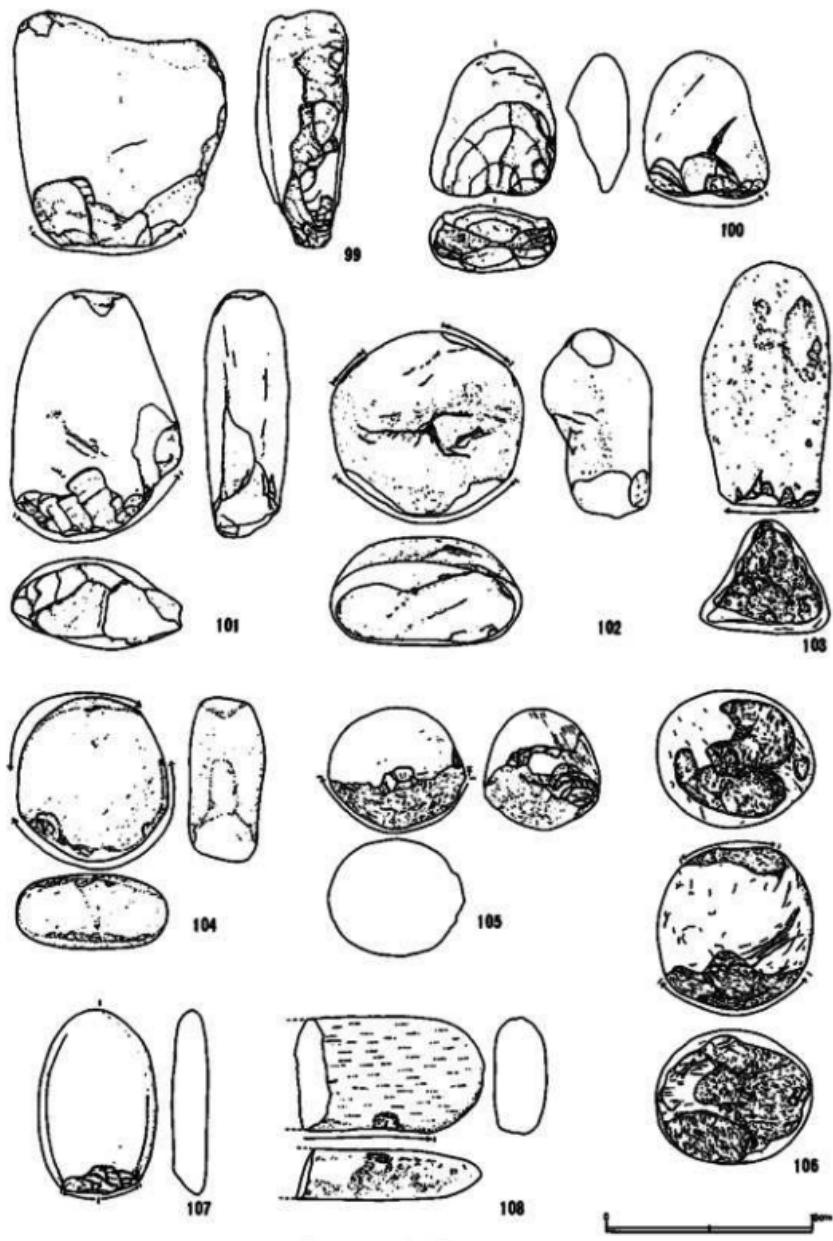


図3-122 包含層出土の石器

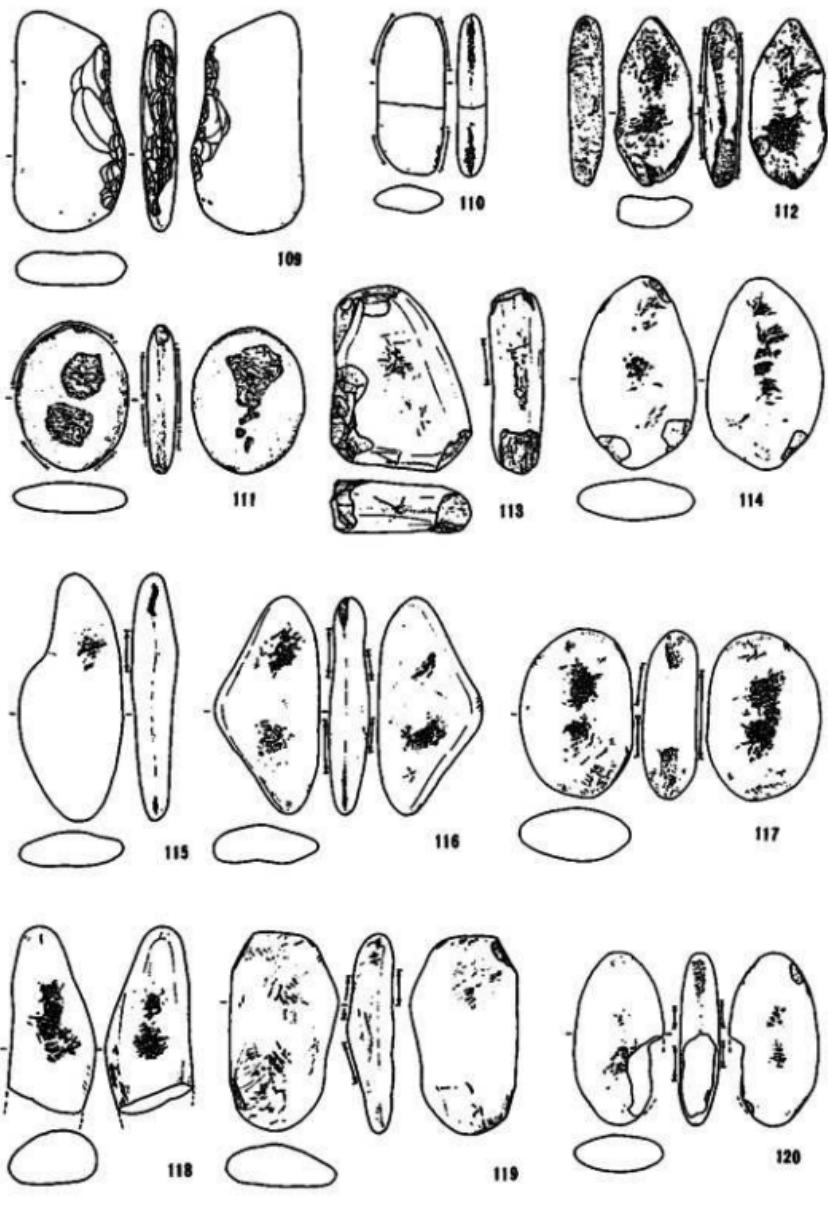


図3-123 包含層出土の石器

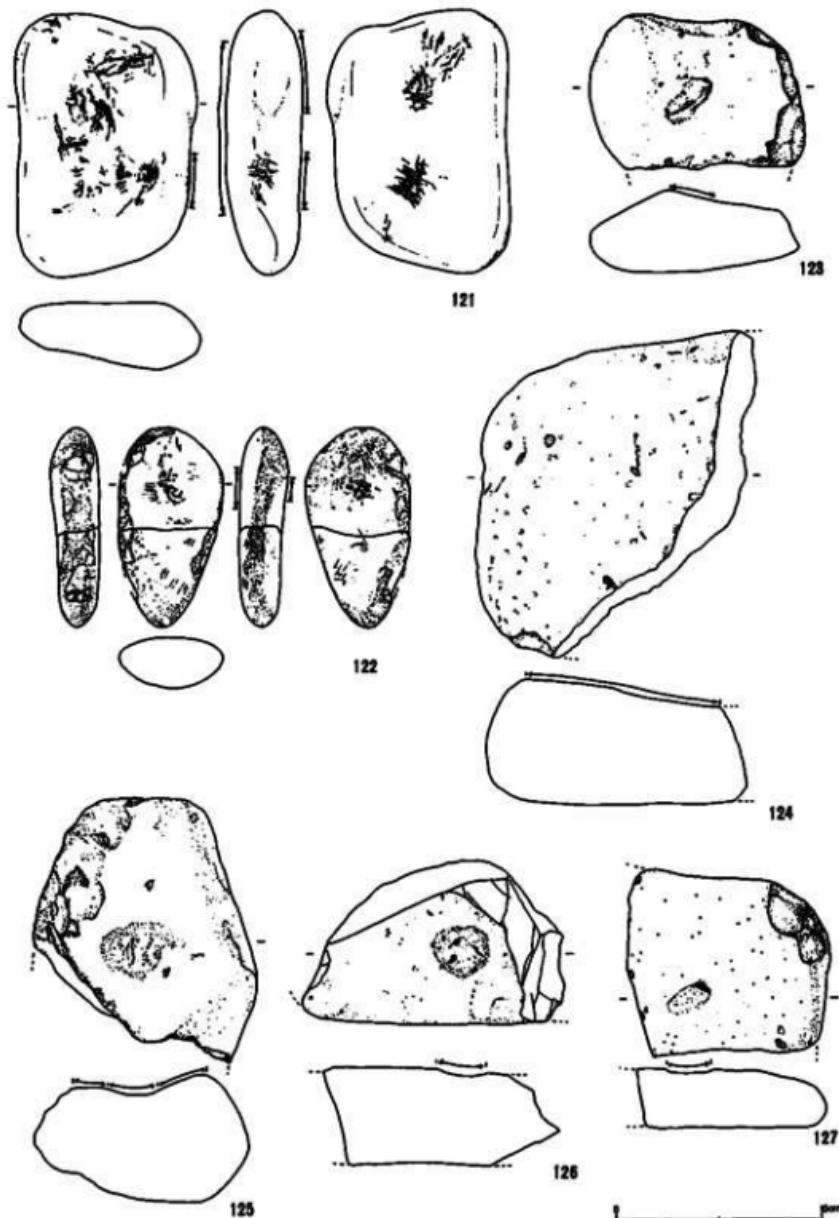
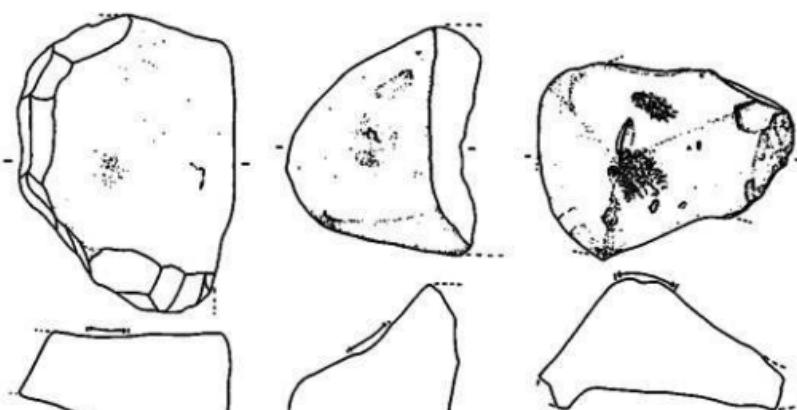


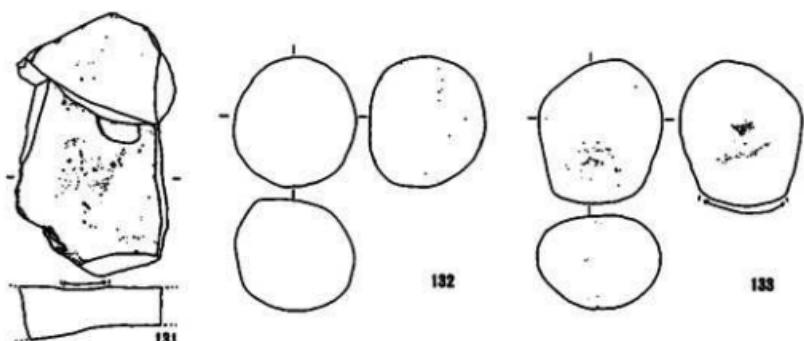
図3-124 包含層出土の石器



128

129

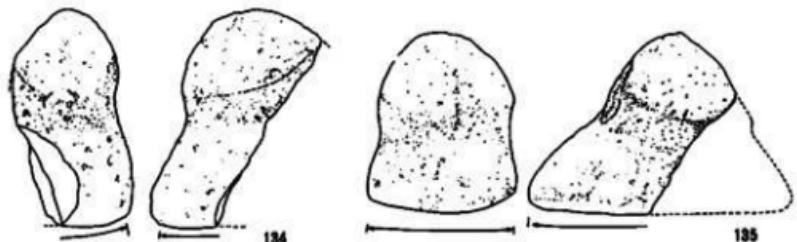
130



131

132

133

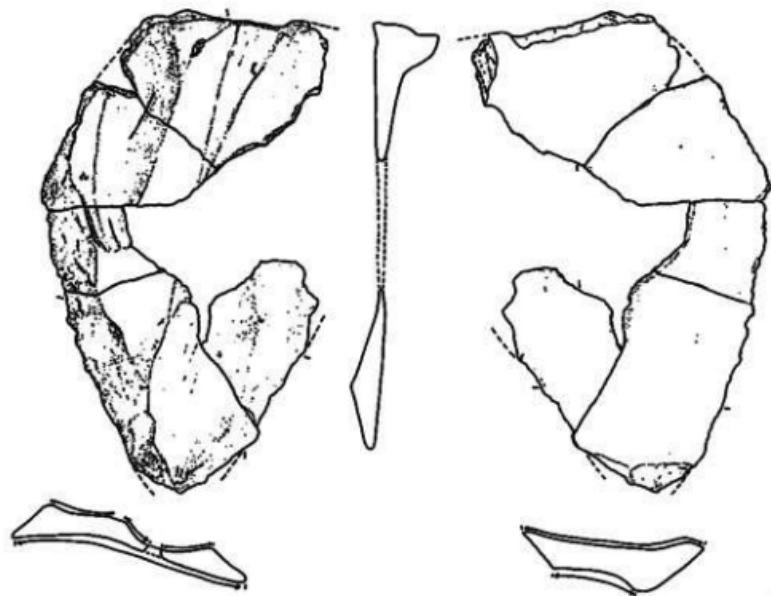


134

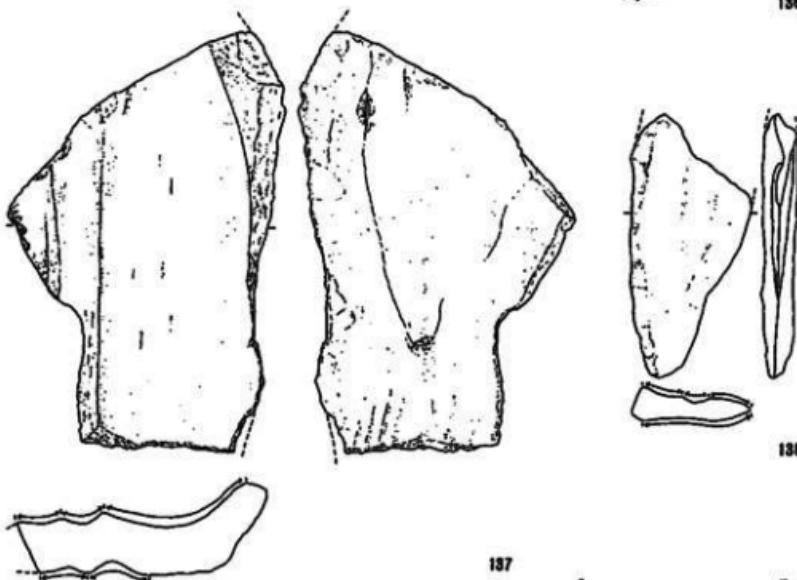
135

10cm

図3-125 包含層出土の石器



138



138

137



図3-126 包含層出土の石器

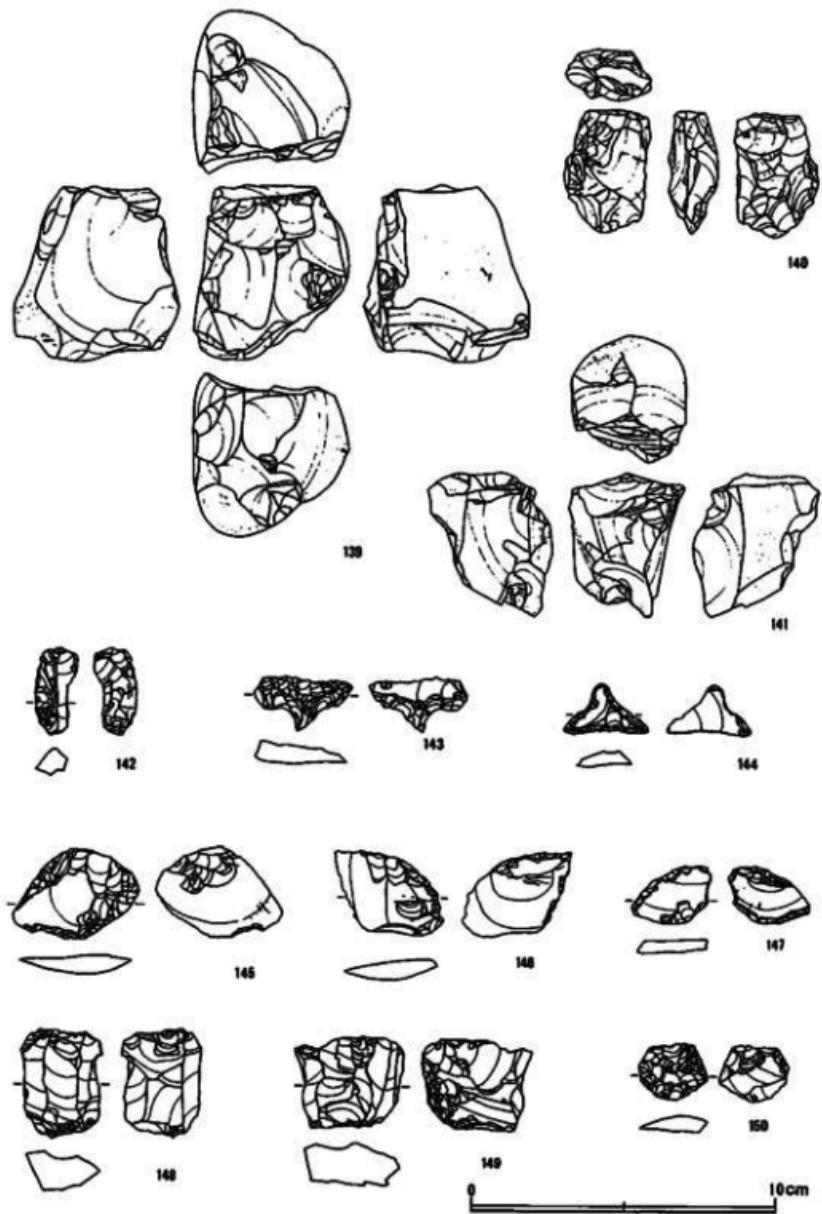


図3-127 包含層出土の石器

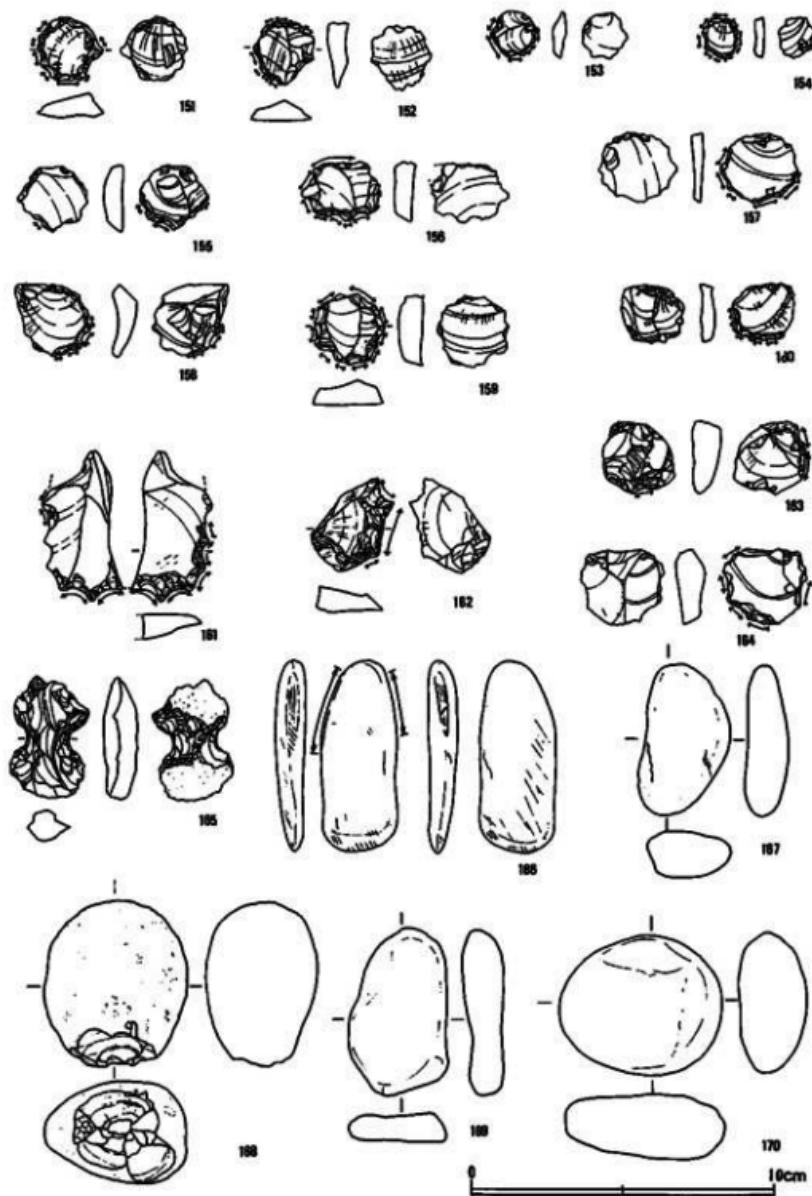


図3-128 包含層出土の石器

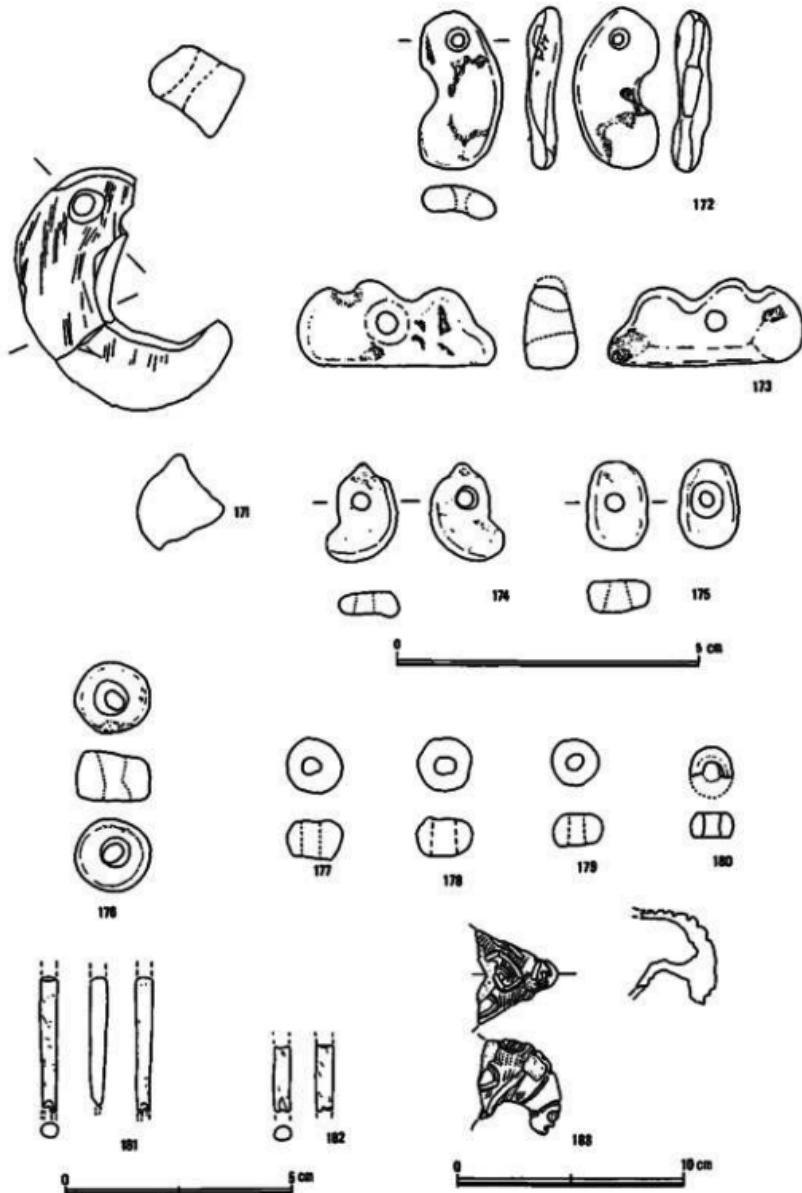


図3-129 包含層出土の石器等

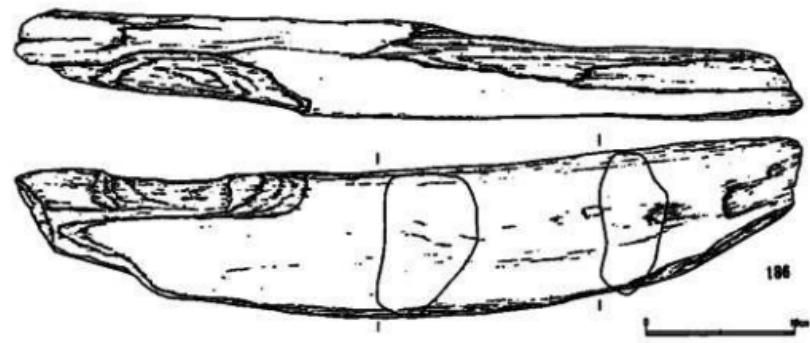
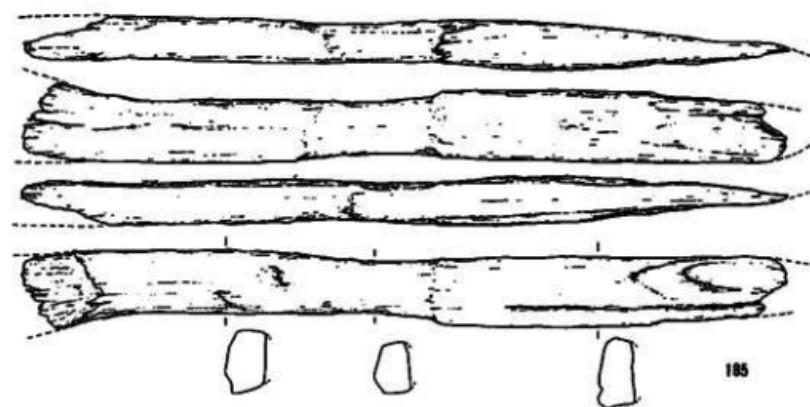
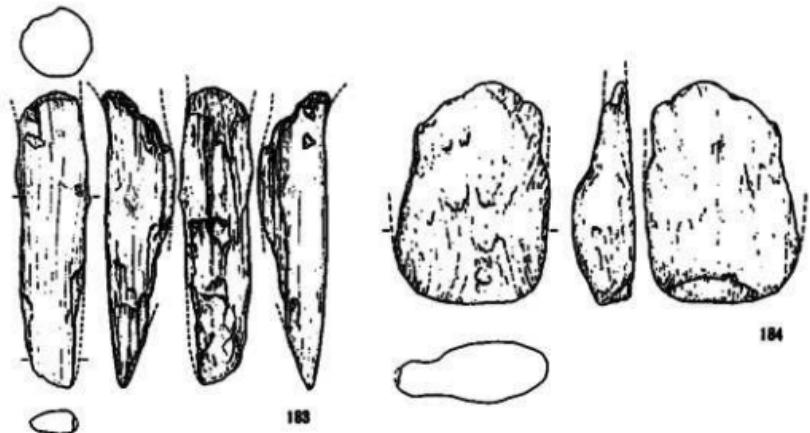
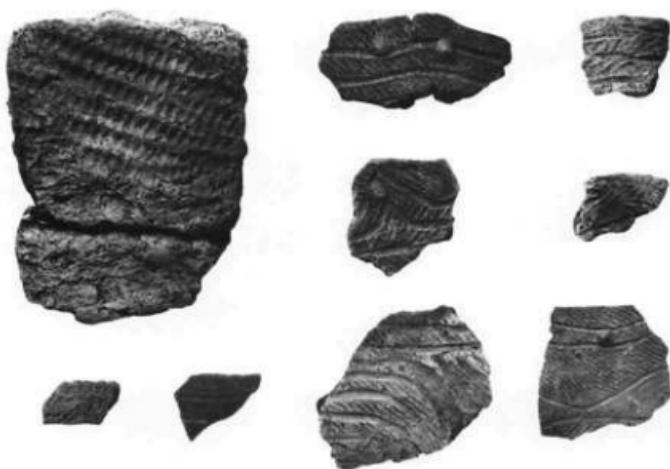


図3-130 木製品

表3-5 図示した包含層出土石器等一覧表

図 番 号	名 称	分 類	発掘区	計 測 値 (g)	出 土 層 位	材質 写真 番号	平 面 形 状	図 番 号	名 称	分 類	発掘区	計 測 値 (g)	出 土 層 位	材質 写真 番号	
1	石やじり	I A 3 a	I-4-a	0.6	面中	Obs	25	49	フリル	II B 2	J-5-a	3.3	面中	Ha-Sh	49
2		I A 3 b	K-5-b	2.5	面下	Ha-Sh	26	50				5.2	面下	#	50
3		I A 4 a	J-6-a	0.8	面中	#	1	51			I-6-b	2.3	面下	#	51
4				1.4	面下	#	2	52			I-4-d	5.1	面中	#	52
5			J-5-d	1.2	面中	Ha-Sh	5	53			I-4-a	5.6	#	#	53
6			J-6-b	1.1	#	#	3	54			J-5-d	2.6	面下	#	54
7			J-6-a	1.5	#	#	4	55			H-4-b	3.1	面	#	55
8				1.5	#	#	6	56	つまんづま ナックル	III A 1 c	J-6-a	21.3	面上	#	56
9			I-3-d	10.0	Obs	14		57			J-5-d	13.9	面下	#	57
10			K-5-d	2.4	#	#	13	58				22.7	面上	#	58
11			J-5-d	3.7	面下	Ha-Sh	7	59			I-4-d	8.1	面中	#	59
12			J-6-b	2.0	面中	#	11	60	スクレーパー	III B 2 a	J-5-a	21.5	面下	Obs	67
13			J-5-d	1.9	#	#	12	61			H-5-c	30.1	面	Ha-Sh	70
14			K-5-d	(4.2)	Obs	9		62	III B 2 b	J-5-d	18.9	面上	Che	71	
15			J-6-a	(4.1)	Ha-Sh	8		63			K-5-d	8.9	面中	#	66
16			J-4-d	4.6	面下	#	10	64				8.5	Ha-Sh	65	
17			H-4-b	(1.7)	V	#	15	65			J-5-d	7.8	面下	#	68
18			K-5-d	1.5	面中	#	16	66			I-6-b	24.9	面中	Che	69
19			J-5-d	5.0	面下	#	24	67	III B 5	J-5-c	7.6	#	Obs	62	
20			K-5-a	(3.3)	面中	#	17	68			H-4-b	10.8	#	Ha-Sh	64
21			K-4-d	3.5	面上	#	18	69			J-4-c	13.1	#	Obs	63
22		I A 5 a	I-4-d	(0.7)	面中	Obs	20	70	III B 7	I-4-b	25.6	V	#	60	
23			J-5-a	1.3	面下	#	21	71			J-5-a	62.9	面中	Ha-Sh	79
24			H-3-c	(1.3)	面中	#	22	72			K-5-d	44.0	面下	Mud	73
25		I A 5 b	J-5-d	1.3	#	#	23	73			J-6-b	39.7	面中	#	78
26		I A - J-6-b		3.3	#	#	19	74			J-5-c	42.4	#	Ha-Sh	77
27	石やり	I B 1 a	J-5-d	(6.1)	面下	#	32	75			K-5-d	3.5	#	#	83
28			I-4-d	9.3	面中	Ha-Sh	33	76			J-5-c	3.7	#	#	81
29			J-5-a	(5.2)	面下	#	31	77			J-5-d	42.4	#	#	76
30			J-6-b	(3.1)	面中	Obs	30	78			J-6-a	24.1	#	#	74
31			J-6-a	4.1	#	#	29	79			H-4-b	9.2	V	Obs	84
32			I-4-d	10.1	Ha-Sh	28		80			K-5-d	49.7	面上	Ha-Sh	72
33		I B 1 b	I-6-b	30.0	#	#	27	81			H-4-b	28.3	V	Obs	80
34		I B 2 a	K-5-a	6.3	Ha-Sh	34		82			J-5-d	2.7	V	#	82
35	斜突器	II A 2	K-5-d	5.2	#	#	36	83			J-5-a	2.4	面中	#	83
36		II A 1	H-4-c	10.0	V	#	35	84			J-5-d	31.9	#	Ha-Sh	75
37	フリル	II B 1	J-5-d	6.8	面下	Ha-Sh	37	85			H-4-b	(14.1)	V	Obs	85
38			K-5-d	6.3	面中	#	38	86			J-5-d	25.4	面中	#	86
39			I-4-a	4.5	面下	#	39	87	石	II A 1	I-5-c	167.0	#	Bl-sh	97
40			J-5-c	(2.0)	面中	#	40	88	II A 2	I-5-c	305.9	V	Gr-Mud	94	
41			I-6-b	1.8	Aga-sh	41		89			J-5-c	275.0	V	#	96
42			H-4-c	0.9	Ha-Sh	42		90			H-3-c	400.0	V	#	95
43			I-4-d	1.5	面中	#	43	91			K-4-d	109.0	V	#	100
44			K-5-a	(2.2)	#	#	44	92			J-4-a	92.6	面中	#	98
45			"	3.0	#	#	45	93			I-6-b	37.9	V	#	102
46		II B 2	I-4-d	10.3	#	#	46	94			K-5-a	(47.0)	面中	#	104
47			I-4-a	2.9	面上	Aga-sh	47	95			H-6-b	(34.8)	#	#	105
48			J-5-a	4.7	面下	Ha-Sh	48	96			I-5-a	34.5	#	#	103

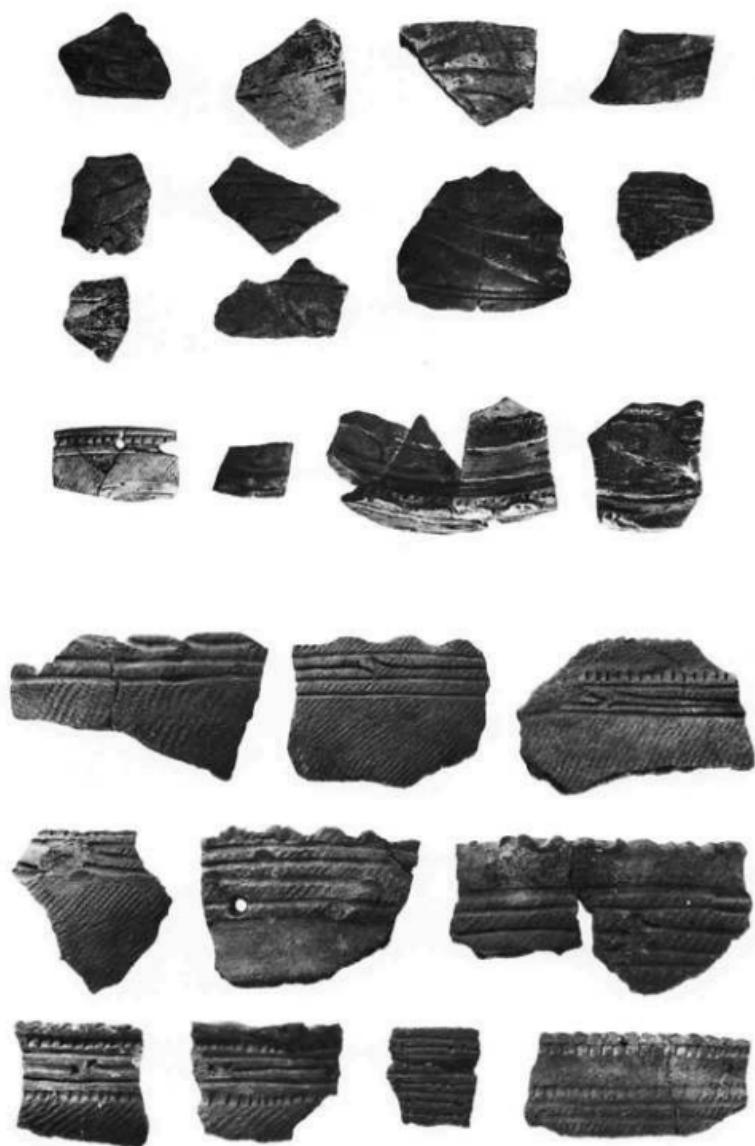
国番号	名 称	分 類	発掘区	計 潜 値 ( g )	出土 層位	材質	耳目 番号	国番号	名 称	分 類	発掘区	計 潜 値 ( g )	出土 層位	材質	耳目 番号
97	石 破	A 2	K-5-a	118.2	面中	Bl-Mud	101	146	Vフレイク	X	J-5-b	9.0	面中	Ha-sh	144
98			H-6-b	(161.9)	面	Gr-Mud	99	147			J-5-d	1.9	面下	#	150
99	たたき石	V A 1	I-5-a	770.0	面中	Gran	106	148			J-6-b	13.8	面中	#	147
100			J-5-a	560.0	面	Sa	88	150			J-5-d	17.2	面	#	146
101			I-5-a	500.0				151			J-5-c	2.8	Obs	149	
102			J-4-c	580.0		Granod	87	152			I-6-a	3.9	#	153	
103			K-5-a	500.0		And	90	153			J-5-c	3.1	#	154	
104			J-4-d	320.0		Granod	91	154			I-4-d	1.0	#	159	
105			J-6-b	270.0		Mud	93	155			I-4-a	0.8	#	158	
106			I-3-d	550.0	面下	#	92	156			H-4-c	2.9	V	#	156
107			K-4-d	153.0	面上	Phy	107	157			I-6-b	4.7	面上	Ha-sh	163
108	V	A 2	H-4-b	(250.0)	V	#	110	158			I-4-b	6.1	面中		161
109			I-6-b	173.3	面中	Gr-Mud	111	159			I-6-b	5.0	面上	Obs	157
110			I-5-a	62.5	面下	#	108	160				6.2	面中	#	152
111	V A 3	I-6-b	81.3	面中	Sa	109	161			I-5-d	2.5	#	151		
112	ストーン	V B 2	H-4-c	84.4	面	Gr-Mud	121	162			J-5-a	(10.9)	Ha-sh	164	
113			J-4-d	290.0	面中	Sa	124	163			I-6-b	2.7	Obs	160	
114			K-5-d	121.6	#	#	116	164			J-5-d	7.1	V	#	155
115			I-5-c	170.0	面下	Gr-Mud	122	165			I-6-b	8.5	面上	Ha-sh	162
116			H-3-c	135.2	V	#	123	266	石 製 品		J-6-a	10.0	面中	Obs	165
117			J-5-d	210.0	面中	#	117	167			I-4-c	25.6	面上	Gr-Mud	166
118			I-6-b	(153.1)		Bl-Mud	125	168	原 石		J-5-d	28.1	Aga	168	
119			J-5-c	168.3		Mud	118	169			H-4-c	108.1	面中	Obs	170
120			#	(93.3)		#	120	170			J-5-e	33.1	Aga	167	
121			J-5-d	670.0	面下	#	126	171			J-4-c	73.5	面下	#	169
122			J-5-a	(72.2)	面中	And	119	172	玉 勾	玉 J-5-b	13.5	面中	Ha-sh	173	
123	合 石	V B 3	J-5-d	(530.0)	#	133	173			J-6-b	2.2	面中	Ta	174	
124			I-6-b	(1,610.0)	#	139	174		垂 鏡	I-4-c	7.1	面上	嵌玉	176	
125			I-3-d	(1,040.0)	#	130	175			J-5-c	1.4	面中	#	175	
126			J-5-a	(720.0)	#	131	176		平 玉	I-5-b	1.3	面	#	177	
127			J-6-a	(410.0)	#	134	177		白 玉	J-5-d	1.5	面中	Ta	178	
128			J-4-a	(1,360.0)	#	136	178		丸 玉	I-4-d	0.4	面下	#	180	
129			K-5-d	(1,100.0)	#	135	179			I-5-s	0.5	面	#	179	
130			#	760.0	#	138	180		玉	J-5-d	0.3	面中	#	181	
131			J-4-d	(405.0)	#	132	181		丸 玉		(0.1)	面下	#	182	
132	透 石	V A -	J-5-d	320.0	#	113	182	骨 角 銛	針 H-4-b	(0.35)	面	嵌骨	171		
133			#	270.0	面下	#	112	182		針		(0.2)	#	172	
134	金 玛 瑪	V A 1	J-5-a	(330.0)	面中		114								
135			J-5-d	(540.0)	#	115									
136	透 石	V B 2	J-5-d	(380.0)		Sa	128								
137			I-2-d	(170.0)	面下	#	127								
138			面 B 1	I-3-d	(107.6)	#	129								
139	石 核	V B	I-5-c	159.6	面中	Ha-Sh	137								
140			J-6-a	17.3	V	Obs	141								
141			I-5-b	58.4	面下	#	140								
142	Vフレイク	X	I-3-d	3.1		Ha-sh	142								
143			#	3.2	面中	#	143								
144			J-5-c	2.0	面中	#	145								
145			J-6-b	10.0	#	146									



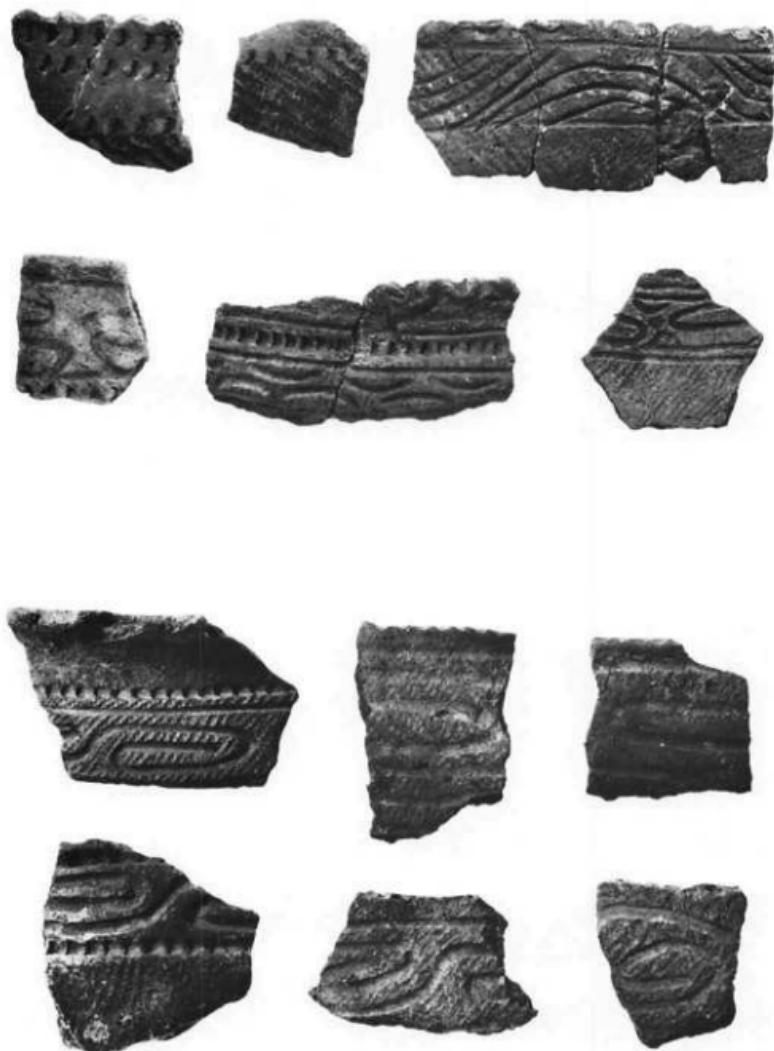
包含層出土の土器片



包含層出土の土器片



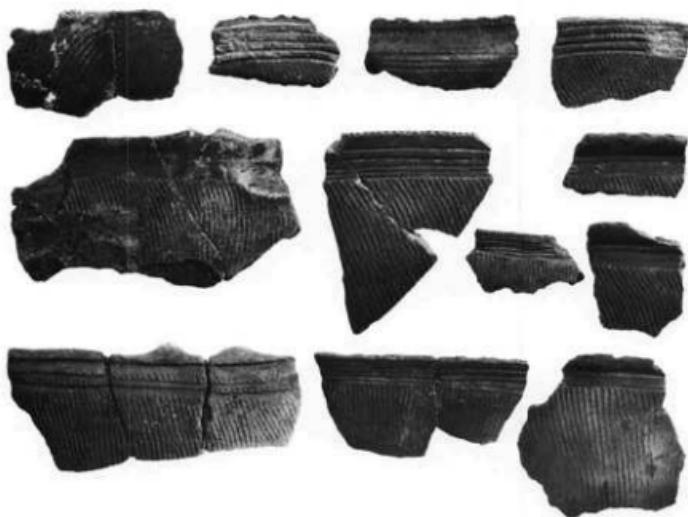
包含層出土の土器片



包含層出土の土器片



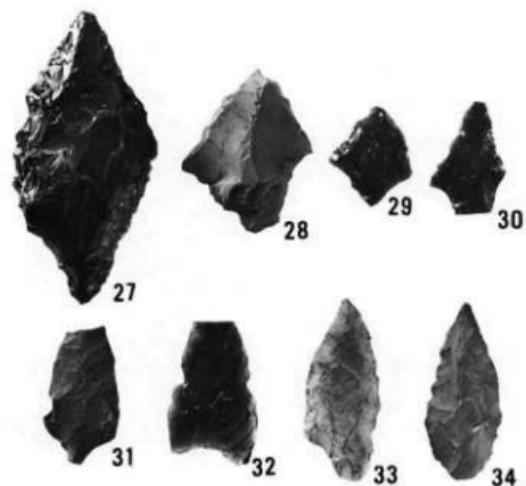
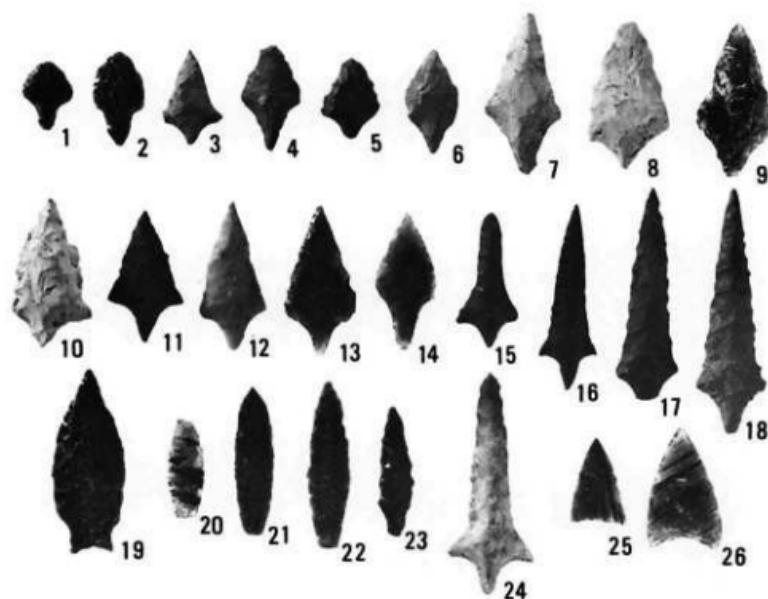
包含層出土の土器片



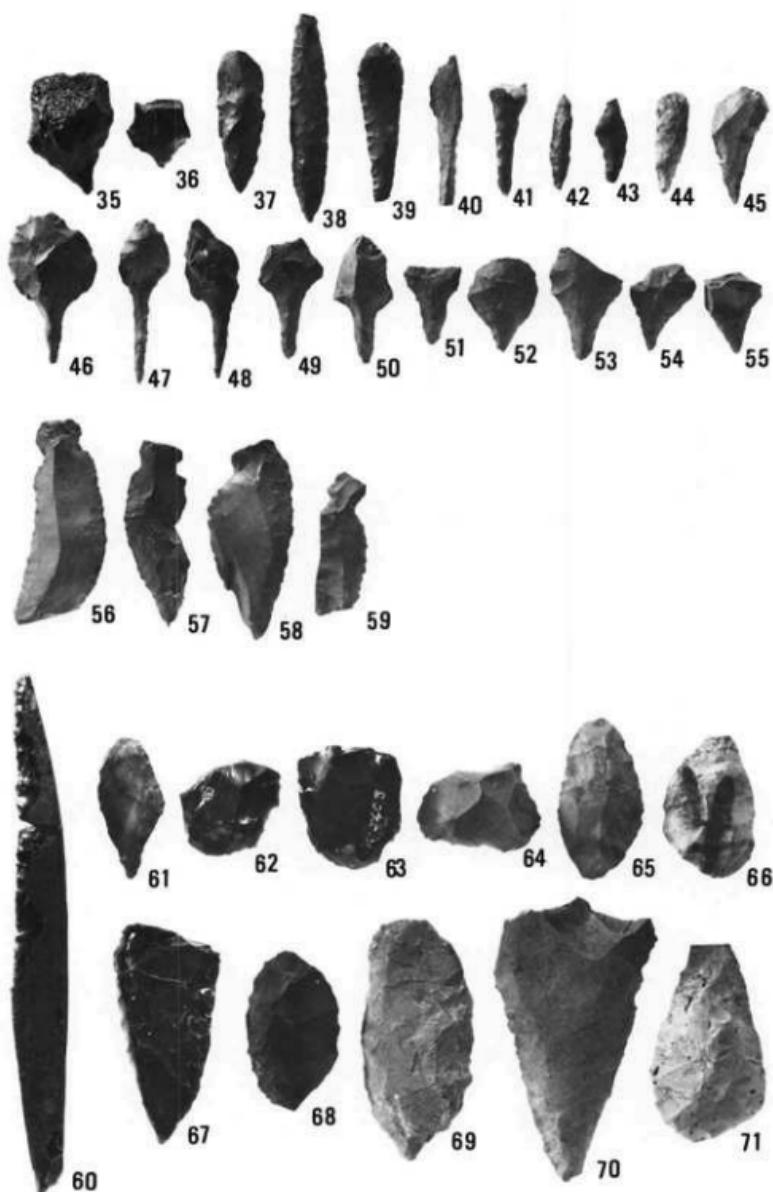
包含層出土の土器片



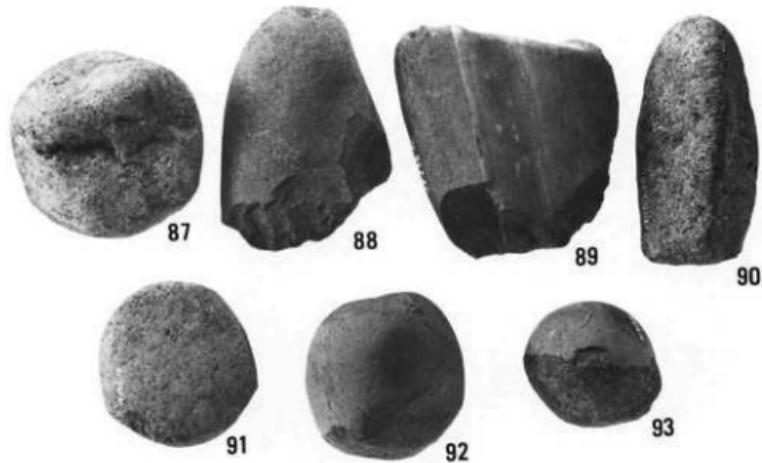
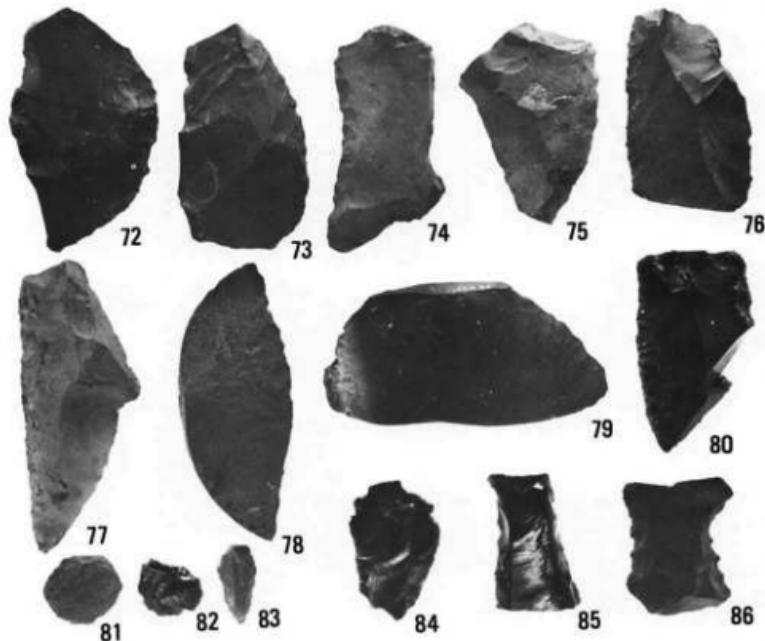
包含層出土の土製品



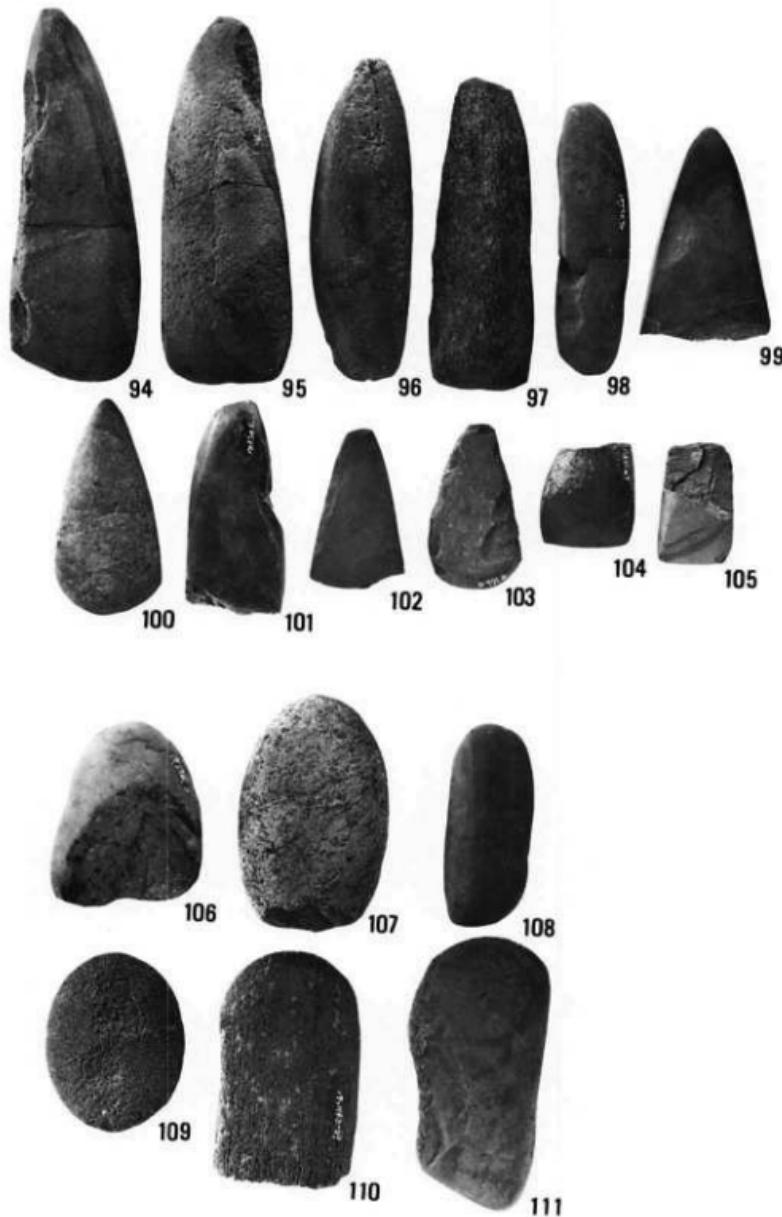
包含層出土の石器（写真）



包含層出土の石器（写真）



包含層出土の石器（写真）



包含層出土の石器（写真）



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124

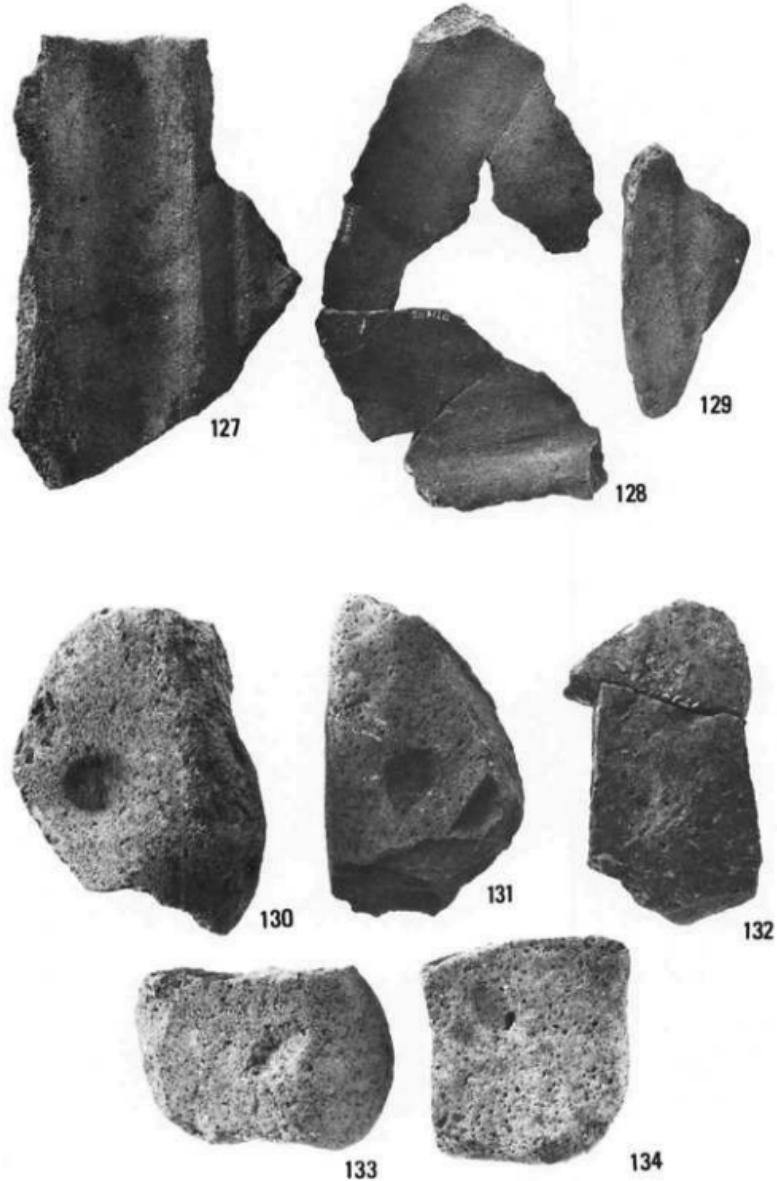


125

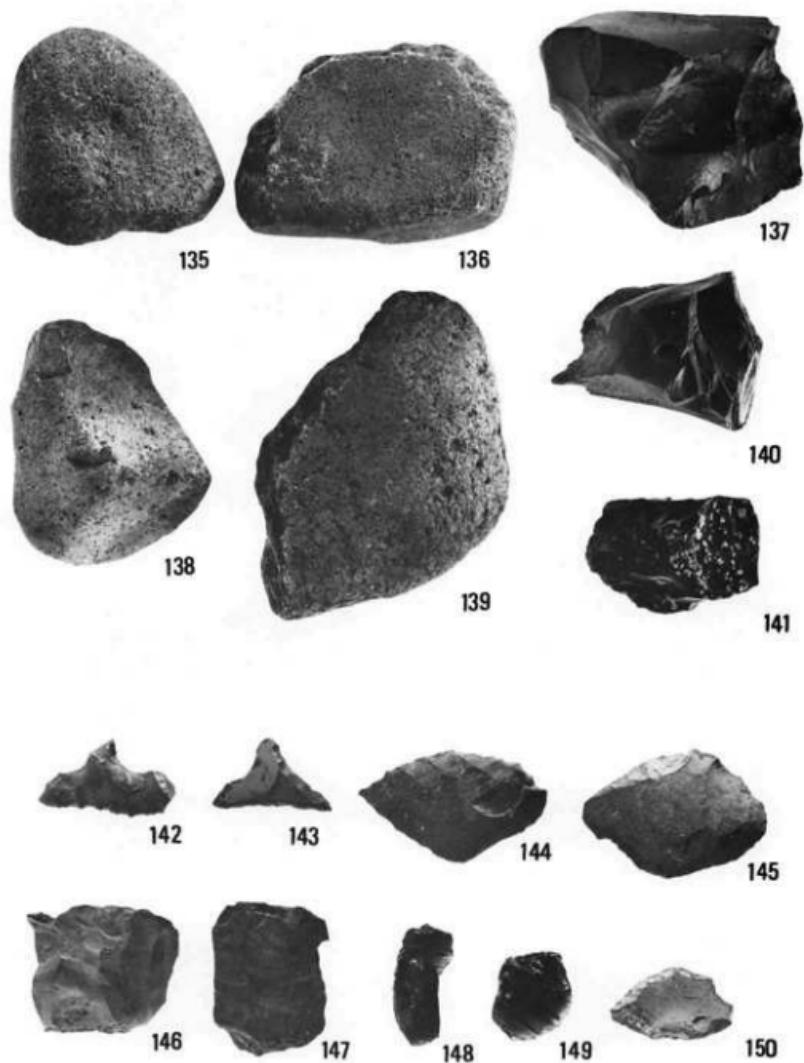


126

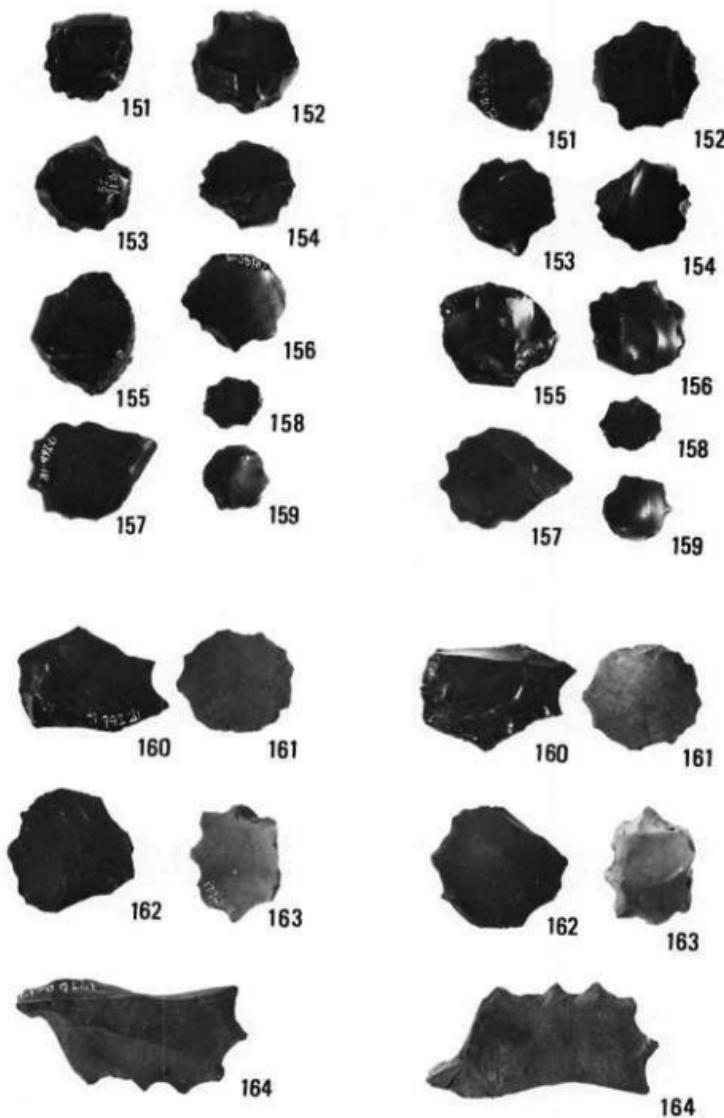
包含層出土の石器（写真）



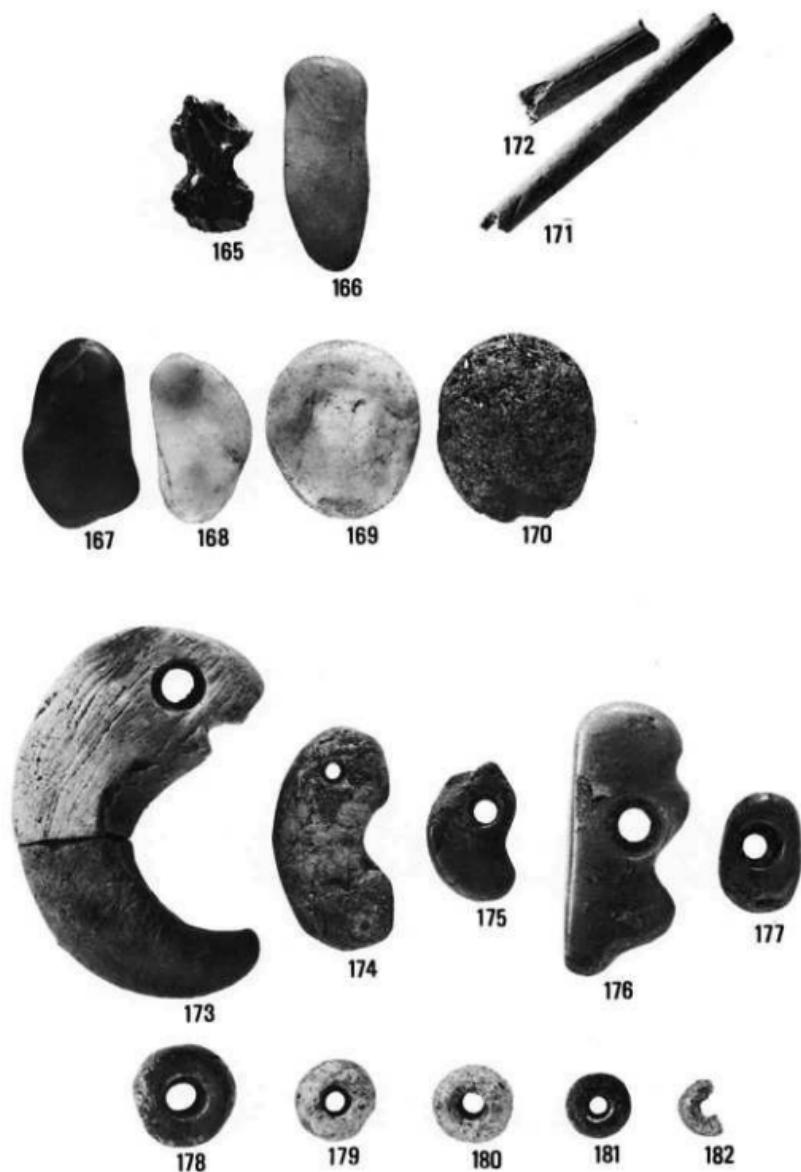
包含層出土の石器（写真）



包含層出土の石器（写真）



包含層出土の石器（写真）



包含層出土の石器等（写真）



木製品（写真）

#### 4.まとめ

##### (1) 古環境について

台地裾の包含層は、先にふれたように包水している。この低地は、VII層の遺物包含層の上にシルト、黒泥などが堆積していることから、晩期中葉のはじめにはすでに地下水位が上昇しつつあったようである。水位の上昇の原因については、次のようなことが考えられる。縄文時代中期頃から海退はじめ、後期になり海平面の変動が安定してくるとともに沖積作用の発達によって平野部が形成される。とともに、当地域では、海岸地帯に砂丘がつくられる。その砂丘が、川の浸蝕作用によって運ばれた土砂等を堰止め、平野部を湿地化させるとともに、別々川の河床をもちあげる要因となった。これにより地下水位が上昇したものと思われる。

この水位の上昇は、遺跡周辺の植生分布を変化させた。それ以前は、ミズナラ・コナラ・カシワ・ハルニレなどの樹木と、ヨモギ、キク科の乾地性の植物が遺跡周辺に分布し、それをとりかこむようにしてハンノキ林とカヤツリグサ・アブラガヤ・ガマ・アリノトウグサ・ミズバショウ・エゾキスゲ等の湿地性植物が生育していた。この植生分布は水位の上昇により、ハンノキ林が広がるとともに湿地性の植物が乾地性の植物の生育範囲にまで拡大していった。

東北地方では、「縄文時代後期後半からはじまる生産技術の発展にもとづく文化の高揚も晩期中葉にゆきづまりを生じ、自然現象面で生じた変化（沖積平野の発展など）にもとづいて、社会・文化の各方面にわたって、大はばな変質」<sup>3)</sup>が起り、大洞C<sub>2</sub>式以降単純遺跡が増えていくようである。本遺跡も、このような東北地方の大きな変動のなかでとらえていくべき性質なのかもしれない。

なお、低地の包含層の上に支笏輕石等の二次堆積層が3mほど堆積しているが、その堆積層の下で発見された流木のひとつを測定依頼したところB.P. 190±50 Y. (KSU-369) という年代が得られた。流木の年代測定および低地の包含層の上に流木があったことなどから、この二次堆積層は、江戸時代頃に川の氾濫によって運ばれた可能性が濃い。さらに、包含層と二次堆積物とが接するところで川底の痕跡が認められるが、これも江戸時代以降に本流から枝わかれした小川の河床と思われる（図版3の9下）。

##### (2) 墓に関して

本遺跡は、先にふれたように墓が主体である。72個の墓は、各小群の集合体と考えられる。墓壙の構造・副葬の仕方は、大きくとらえると東北地方のものとは異なり、札刈・シビシウス第4遺跡などの例に類似する。壙口に粘土を覆っている例が5例、小砂利を覆う例が2例ある。粘土を被覆する例は、シビシウス第4遺跡で3例、札刈遺跡で4例発見されている。壙口に粘土を被覆する例は、東北地方ではなく、北海道でもこの時期に限られるようである。本例の場合、粘土の上で焚火をしている可能性のものが1例発見されている。粘土を被覆する例は、埋葬の上で特別な意味をもつ地方的な特色か否かは不明である。

副葬品は、壇口・壇中・壇底から出土している。土器が多く、次に石器・玉類・漆器・籠胎漆器の順である。土器は、精製・粗製とも出土し、それらの多くは底部が破損している。これらの破損例は、P-19の浅鉢の出土例から考えると意図的に破碎しているようである。しかし東北地方で見られる小児骨葬のように、底部を穿孔している土器はない。また、札幌・シビシウス第4遺跡では土器の底部を破損する例は少ない。東北地方では今まで知られなかつたが、最近大洞C<sub>1</sub>式の墓にもそのような例が発見されているらしい。<sup>(註3)</sup> 土器の破損例は、北海道では後期末(堂林期)の周堤墓内の墓壙にその例が見い出される。すなわち、美沢1遺跡のJX-3・P-106では壇口から深鉢が1個体、壇底からは壺4個・浅鉢1個が破碎されて出土している。

墓の形態は梢円形で遺体は伸展葬である。本遺跡では、墓壙は円形に近いものが多く、P-55の玉出土例などから考えると屈葬と思われる。このように、北海道における晩期の墓を先行する後期の葬制との関係でどう位置づけるかは今後の課題である。

#### (3) 焼土群について

焼土は6か所発見され、いずれも焼けた獸骨片が含まれている。焼骨片は骨が白くなるほど強く焼かれ、ほとんどが四肢骨片で、頭蓋骨や下顎骨は意識的に除外されているようである。<sup>(註4)</sup> 獣骨片はシカが99%を占め、その他にイノシシの基節骨および末節骨、キツネの脛骨、ヒグマの中手・中足骨、そして海獣骨片が出土している。焼土中には魚骨は含まれていなかった。6か所の焼土のうち、F-1は焼土のまわりに小ピットがめぐらされている。これらの焼土は、「送り場」的な機能をもつ遺構の可能性が強い。例えば、岩手県の小田遺跡でも焼土ブロック群が発見されているが、その性格は当遺跡のそれと大きく異なるようである。小田遺跡では、①焼土は二次堆積で、他の場所から持ち込まれている。②焼土は土偶集中地帯の下から出土し、そこは一定期間集落内の特別な場所として設けられていた。③焼土ブロック横の炭化物は堅果類を中心としたもの等の事実から、この焼土ブロックをトチ・ドングリのアクリ抜き、加工処理に関連させてとらえているが、本遺跡ではトチの実は発見されていない。

#### (4) 土器群について

本遺跡出土の精製土器は、胴部に×字文・大腹骨文・雲形文がつけられ、粗製土器は半齒状文が消滅し、口縁部に2~3条の弦線がめぐらされるものが多い。

P-19出土の精製土器(浅鉢・注口土器)は、小田遺跡出土のIV群土器に比定されるものである。この土器群を大洞C<sub>1</sub>にするかC<sub>2</sub>にするかは、議論のわかれるところであるが、現時点では大抵として社台1遺跡出土の土器群は、大洞C<sub>1</sub>からC<sub>2</sub>にかけてのものとして位置づける。これらの土器群のなかに、地方的な特色をもつ渦巻文、亀ヶ岡文化とは文化圏を異にすると思われる繩線文のグループが少く認められる。渦巻文は室蘭出土の土偶に施文されるものを指し、本遺跡出土の例では包含層出土の鉢(図3-99の28)がそれである。繩線文グループは、後続するタンネトウシ式土器につながるものである。社台1遺跡の出土土器群は、札幌・シビシウスのそれより古く、日吉町1遺跡のものよりは新しいといえる。

##### (5) 墓と集落との問題について

当遺跡の墓群と住居跡の関係は、P-32と1号住居跡の関係からとらえると、墓は住居が廃棄された後につくられている。しかし住居跡出土の土器は、墓群出土のものと差はない。その事実からすると、墓群形成時の直前に住居が廃棄されたものであろう。廃棄の理由としては、地下水位の上昇によるところが最も大きかったと思われる。すなわち、直接には居住の範囲がせばめられ、間接的には植生の変化などによって、他の場所に移らざるをえなかつたものと考える。勿論、1号住居跡を残した人間の墓も墓群のなかに何個かあったと考えてもよい。しかし、それを差し引いたとしても、残りの墓を残した人々の集落の存在が問題となる。水位が上昇した結果、当地では沖積平野中の8m以下の微高地も冠水したと思われる所以で、それ以外で居住条件を満たすところとしては、別々川河口の古砂丘があげられる。ちなみに、登別地方では当地方と同様、海岸地帯に古砂丘があり、そこから大洞式土器の出土する遺跡が発見されている。今後は、墓と集落との関係を自然環境の変化からも追求してみる必要がありそうである。

- 注1 本報告書付編の山田報文参照
- 注2 林 謙作 「日本の考古学」II 「東北」 1965
- 注3 林 謙作氏の教示を得た
- 注4 本報告書付編の西本報文参照
- 注5 大迫町教育委員会 「小田遺跡発掘調査報告書」 1979
- 注6 同上
- 注7 『世界陶磁全集』 1 1958

## 付編

# 社台 1 遺跡の花粉分析

山田 悟郎

### 1. 試料

分析に使用した試料は H-3-a 区、K-5-b 区、K-5-c 区（以下、区は省略）より採取した 41 点の土壤試料である。

各試料採取地点の層序は次のとおりである。

H-3-a：上位より①軽石まじりの茶褐色腐植土、②軽石をまじえた腐植土、③火山砂、火山灰 (Us-b)、④軽石 (Us-c)、⑤腐植土、⑥赤褐色火山灰、⑦腐植土、⑧褐色土 (Ta-d の軽石を含む) の順に 15 点の試料を採取した。

K-5-b：上位より①黒泥とシルトの薄層の互層、②黄褐色火山灰、③二枚の黒泥の薄層を挟むシルトの順で、11 点の試料を採取した。

K-5-c：K-5-b の最下位層のシルトに連続する①腐植土（上位が泥質化）、②火山灰、③腐植土、④火山灰、⑤腐植土、⑥火山灰、⑦腐植土、⑧粘土で、①の下部より下の試料については、発掘担当者の諸氏に採取していただいた。

尚、K-5-c、①層の上位から赤色顔料が塗られた土器片が出土した。

K-5-b 及び K-5-c、①層の上部は水中堆積物と考えられる。

### 2. 処理方法

試料処理にあたっては試料約 500 g をビーカーにとり、下記のとおり処理した。

アルカリ処理→混雑処理→アルカリ処理→比重分離→アセトトリス処理→時計皿処理→フッ化水素酸処理のちグリセリンゼリーで封入し、マニキュア液でシール、各 3~5 枚のプレベラートを作成した。

検鏡にあたっては樹木花粉が 200 個以上になるまでに出現した花粉、胞子を無作為に同定し計数した。

表示にあたっては、樹木花粉は樹木花粉総数を基準とした百分率で、草本花粉、胞子については樹木、草本花粉、胞子の総数を基準とした百分率で表示した。また、樹木、草本花粉、胞子のそれぞれの出現比も表示した。

### 3. 分析結果

H-3-a、K-5-b、K-5-c 各地点から樹木花粉 26 属 2 科、草本花粉 2 属 23 科、胞子 3 科を検出した。

その内訳および想定される樹木、草木、胞子は下記のとおりである。

*Picea* (トウヒ属: エゾマツ、アカエゾマツ)、*Abies* (モミ属: ドマツ)、*Pinus* (マツ属: ハイマツ、ゴヨウマツ)、*Cryptomeria* (スギ属: スギ)、*Alnus* (ハンノキ属: セチハンノ

キ、ケヤマハンノキ等)、*Betula* (カバノキ属:シラカンバ、ウダイカンバ等)、*Fagus* (ブナ属:ブナ)、*Castanea* (クリ属:クリ)、*Corylus* (ハシバミ属:ツノハシバミ等)、*Carpinus* (クマシテ属:サワシバ等)、*Quercus* (コナラ亜属:コナラ、ミズナラ、カシワ等)、*Ulmus* (ニレ属:ハルニレ、オヒヨウニレ)、*Juglans* (オニグルミ属:オニグルミ)、*Acer* (カエデ属:イタヤカエデ、ハウチワカエデ、クロビイタヤ等)、*Tilia* (シナノキ属:シナノキ、オオバボダイシゴ)、*Araliaceae* (ウコギ科:ハリギリ、コシアブラ、クラノキ等)、*Phellodendron* (キハダ属:キハダ)、*Magnolia* (モクレン属:ホウノキ、コブシ)、*Sorbus* (ナナカマド属:ナナカマド、アズキナシ等)、*Rhus* (ウルシ属:ヤマウルシ、シタウルシ、ヌルデ等)、*Ericaceae* (ツツジ科:イソツツジ等)、*Myrica* (ヤマモモ属:ヤチヤナギ)、*Euonymus* (ニシキギ属:ツリバナ、オオツリバナ、ニシキギ等)、*Hydrangea* (アジサイ属:ノリウツギ、ツルアジサイ等)、*Ilex* (モチノキ属:ハイイヌシゲ等)、*Sambucus* (ニワトコ属:エゾニワトコ)

草本花粉: *Artemisia* (ヨモギ属:オオヨモギ、エゾヨモギ等)、*Carduoideae* (キク亜科:アキタブキ、ヤマハハコ、ハンゴンソウ、チシマアザミ等)、*Cichorioideae* (タンポポ亜科:エゾタンポポ等)、*Chenopodiaceae* (アカザ科:アカザ)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科:ミミナグサ、カワラナデシコ、ウシハコベ等)、*Ranunculaceae* (キンポウゲ科:ニリンソウ、カラマシソウ等)、*Polygonaceae* (タデ科:オオイタドリ、ミゾソバ、エゾノギシギシ等)、*Geraniaceae* (フウロウソウ科:チシマフウロウ、ゲンノショウコ等)、*Leguminosae* (マメ科:クズ、ヌスビトハギ等)、*Urticaceae* (オミナエシ科:オミナエシ等)、*Cruciferae* (アブラナ科:コンロンソウ、イヌガラシ等)、*Saxifragaceae* (ユキノシタ科:ユキノシタ、ズタヤクシコ等)、*Rosaceae* (バラ科:オニシモツケ、エゾノシモツケソウ、ナガボノワレモコウ等)、*Gentianaceae* (リンドウ科:フアリンドウ、リンドウ等)、*Epilobium* (アカバナ属:ヤナギラン等)、*Comelinaceae* (ツユクサ科:ムラサキツユクサ、ツユクサ等)、*Haloragaceae* (アリノトウグサ科:アリノトウグサ)、*Liliaceae* (ユリ科:オオバナノエンレイソウ、エゾキスゲ等)、*Iridaceae* (アヤメ科:ヒオウギアヤメ等)、*Labiatae* (シソ科:タツナミソウ等)、*Gramineae* (イネ科:ヨシ、ススキ、エノコログサ、ササ等)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科:アブラガヤ、カヤツリグサ等)、*Typhaceae* (ガマ科:ガマ)、*Lysichiton* (ミズバショウ属:ミズバショウ)

孢子: *Osmundaceae* (ゼンマイ科:ゼンマイ、ヤマドリゼンマイ)、*Lycopodiaceae* (ヒカゲノカズラ科:ヒカゲノカズラ等)、*Monolate type spore* (シダ類:オシダ、メシダ等)、*Sphagnum* (鮮苔類:ミズゴケ等)

又、各産出地点ごとの出現傾向は次のとおりである。

H-3-a: 樹木花粉では、全般に *Alnus*、*Quercus*、*Ulmus*、*Araliaceae*、*Fraxinus* が多く検出されるが、赤褐色火山灰層を境に出現傾向に変化がみられる。下位では *Quercus*、*Ulmus*、*Fraxinus* が大勢をしめているが、上位では減少し、*Abies* が増加をはじめ、Us-bより上位では更に *Pices*、*Pinus* も増加する。一時的に減少していた *Alnus* も再び増加し 50% を越す。

赤褐色火山灰より下位では *Quercus*、*Alnus*、*Ulmus* の優勢で、上位では *Alnus*、*Quercus*、

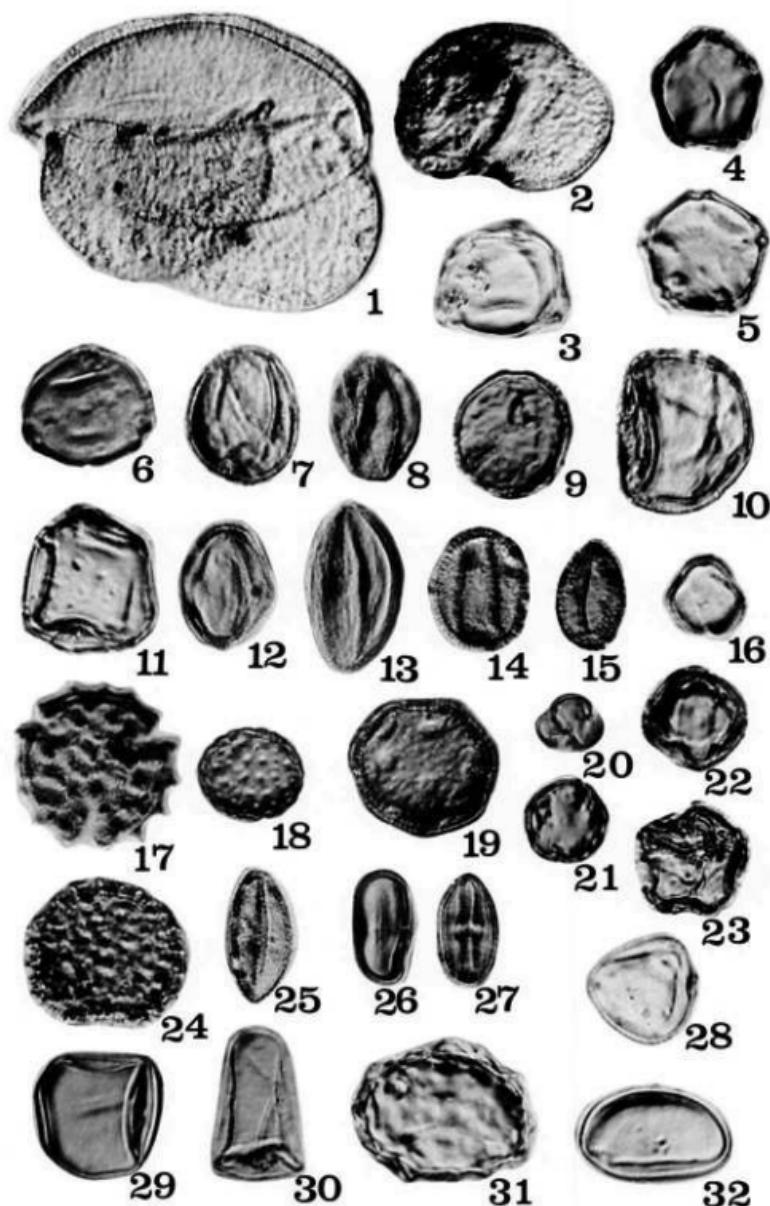


図 i 花粉写真

*Ulmus* と針葉樹の *Abies*、*Picea* の優勢で特徴づけられる。

草本花粉、胞子では、全般に *Gramineae*、*Artemisia*、*Monolate type spore* が優勢で、他に *Ranunculaceae*、*Carduoideae*、*Umbelliferae*、*Osmundaceae* が赤褐色火山灰付近で増加する。*Gramineae* は下位から上位にむけて 50% から 20% 前後に徐々に減少し、*Monolate type spore* は下位から上位にむけ増加し、Us-b 付近で 50% を越す。

尚、赤褐色火山灰下位の腐植土が遺物包含層である。

K-5-b、K-5-c：試料 No.12 より上位が水中堆積物のシルト及び黒泥である。No.13 以下の試料は斜面から流れこみ再堆積した厚さ約 1.5 m の腐植土層である。No.14 の試料を採取した際、土壤試料中に赤色顔料を塗った土器片が混じっていたことから、同層準付近が遺物包含層に対比されるのであろう。

全般に樹木花粉では *Quercus*、*Ulmus*、*Alnus*、*Fraxinus*、*Acer* が、草本花粉、胞子では *Artemisia*、*Carduoideae*、*Ranunculaceae*、*Gramineae*、*Monolate type spore* が多く出現する。

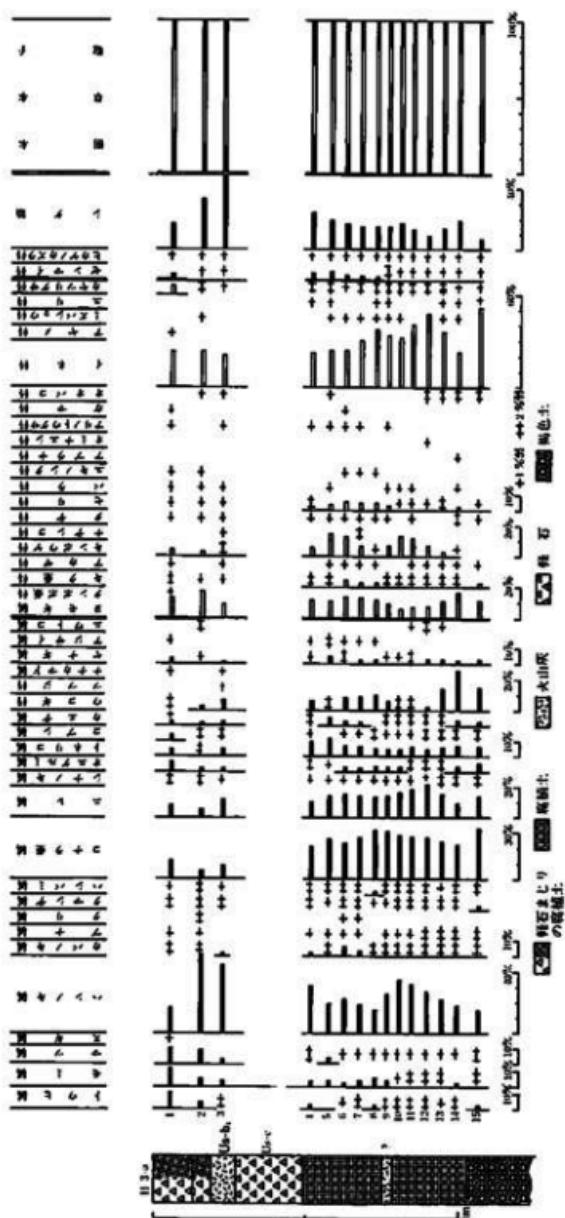
試料 No.14 付近で花粉の出現傾向に変化がみられる。

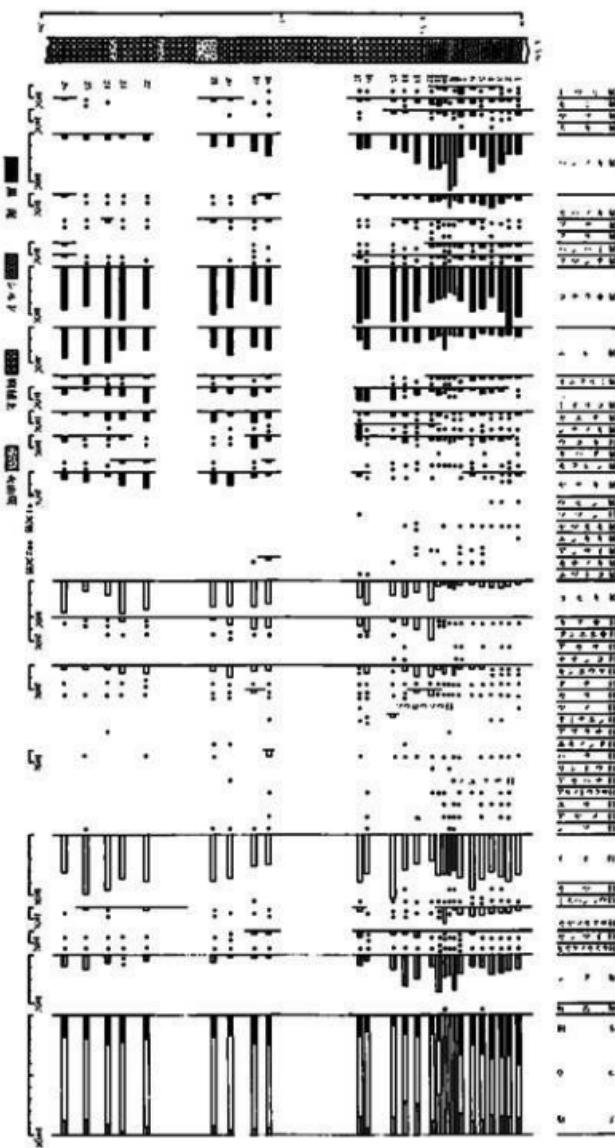
No.14 より下位では *Quercus*、*Ulmus* が優勢で *Alnus*、*Fraxinus*、*Acer*、*Salix* が次いで多く出現する。上位では *Ulmus*、*Acer*、*Salix* が減少し、*Alnus*、*Betula*、*Corylus*、*Carpinus*、*Abies*、*Picea* が増加して *Alnus* と *Quercus* が優勢を示す。

草本花粉、胞子では比較的多く出現していた *Artemisia*、*Carduoideae* が No.12 付近で急減し、*Cyperaceae* が No.10 付近から、*Monolate type spore* が No.15 付近から、*Osmundaceae* が No.21 付近から急増する他、*Haloragaceae*、*Liliaceae*、*Iridaceae*、*Typhaceae* 等の湿地性、水域性植物の花粉が低率ではあるが連続して出現する。

図 1 の説明	1 モミ属	K-5-c	No. 15	17 キク亜科	H-3-a	No. 10
	2 マツ属	K-5-c	No. 14	18 アカザ科	H-3-a	No. 14
	3 カバノキ属	K-5-b	No. 4	19 ナデシコ科	K-5-b	No. 14
	4 ハンノキ属	K-5-c	No. 13	20 キンボウケ科	K-5-b	No. 11
	5 ハンノキ属	H-3-a	No. 2	21 キンボウケ科	K-5-c	No. 16
	6 クマシテ属	K-5-b	No. 1	22 バラ科	H-3-a	No. 14
	7 コナラ亜属	H-3-a	No. 12	23 アリノトウグサ科	K-5-c	No. 16
	8 コナラ亜属	K-5-c	No. 14	24 タテ科	H-3-a	No. 9
	9 ニレ属	K-5-c	No. 13	25 タテ科	K-5-b	No. 12
	10 ブナ属	K-5-b	No. 6	26 セリ科	K-5-c	No. 15
	11 オニグルミ属	K-5-b	No. 6	27 セリ科	H-3-a	No. 8
	12 ウコギ科	H-3-a	No. 14	28 イネ科	H-3-a	No. 14
	13 カエデ属	K-5-b	No. 11	29 イネ科	K-5-c	No. 16
	14 トネリコ属	K-5-c	No. 19	30 カヤツリグサ科	K-5-b	No. 10
	15 ヤナギ属	K-5-c	No. 21	31 シダ類	K-5-b	No. 9
	16 ヨモギ属	K-5-c	No. 18	32 シダ類	K-5-c	No. 15

図III 江古 1 遺跡の花崗岩分析結果 (H-3区)





図III 杜台1遺跡の花粉分析結果（K-5区）

#### 4. 若干の考察

##### 1). 遺物包含層について

K-5-cなどの低地で、厚く堆積した腐植土が確認される。こうした腐植土は斜面上の腐植土が雨水で浸食され流下し再堆積したものと考えられる。シルトの下面より約10cm下の腐植土（試料No.14）から赤色顔料を塗った縄文時代晚期の土器片が出土したことから、同層準付近の腐植土が斜面上の遺物包含層に対比される。斜面上のH-3-aでは赤褐色火山灰より下位の腐植土が縄文時代晚期の遺物包含層である。

腐植土の約25cm上位シルト、黒泥に挟む黄褐色火山灰が確認された。この火山灰がH-3-aに於ける赤褐色火山灰に対比される。

これらのことから、低地における厚い腐植土の流入堆積時期と、斜面上での赤褐色火山灰下位の腐植土（遺物包含層）の堆積時期はほぼ同じ頃と考えていいであろう。

低地では遺物包含層の上位にシルト、黒泥などの水成堆積物がくる。したがって、縄文時代晚期から晩期をすぎた頃には水位の上昇があったと考えられ、厚い腐植土の流入堆積時期は縄文海進の極盛期以降から縄文時代晚期末頃までの間と考えられる。

##### 2). 古植生について

それぞれの遺物包含層の花粉組成から、縄文時代晚期頃の植生状況は次のように推定される。水辺や湿地にはヤチハシノキ、ヤチダモ、ヤナギ類からなる湿地林があり、林床や湿原にはキタヨシ、カヤツリグサ、アブラガヤ、ミズバショウ、オシダ、ヤマドリゼンマイ等が繁り、ハンノキーキタヨシ群集、ヤチダモーミズバショウ群落を形成していた。湿原ではヤチヤナギ、ノリウツギの灌木が繁りはじめた。

一方、比較的乾燥した斜面や台地にはミズナラ、コナラ、カシワ、ハルニレ、オニグルミ、イタヤカエデ、サワシバ、ハリギリ、コブシ、シナノキが繁り、ミズナラ群集、コナラ群集が形成され、林の切れ間やへりにはススキ、オオヨモギ、アキタブキ、ハンゴンソウ、チシマアザミ、オニシモツケ、ニリンソウ、カラマツソウ、エゾニユウ等の草叢が形成されていた。

その後、水位の上昇により水域がひろがって、ハンノキ林が拡大するとともに、カヤツリグサ、アブラガヤ、ガマ、アリノトウグサ、ミズバショウ、アヤメ、エゾキスゲ等の水域・湿地性植物やシダ類が増加し、遺跡周囲まで分布を拡大し、逆にヨモギ、キク科植物が減少した。

この頃、山地ではトドマツ、エゾマツ等の針葉樹やカバノキがいくぶん増加したようである。縄文時代晩期は、縄文海進時の温暖期から徐々に冷涼になってきた頃であり、気候的には現在と大きな違いがあったとは考えられない。

Us-b<sub>1</sub>と遺物包含層の花粉組成を比較した時、遺物包含層では、*Quercus*、*Ulmus*の勢力が強く気候的に温暖であったとも考えることができる。針葉樹やカバノキが増加するのはシルト、黒泥などの水成堆積物からであり、縄文時代晩期の遺物包含層の上位からである。

本州各地に於いて花粉組成上冷涼化が見られるのは縄文時代後期頃からである。北海道に於

いて花粉構成で針葉樹やカバノキが増加するのは晩期～晩期末にかけてであり、本州とそれが見られるのはこれまでにも道内で確認されている(山田、1977、1979)。

この現象は気候の変化と植生の変化は同時に進行するものでなく時間差を考えねばならないことを示している。

したがって遺物包含層の時期には現在よりも温暖であったとは言いきれない。現在とほぼ同様の気候下にあったと考えている。

苫小牧地域植生等調査報告書(1975)によると、過去に薪炭材として利用されたことにより二次林の可能性は強いが、同地周辺でカシワ群集、ミズナラ群集、ハンノキーヨシ群集を見ることがでいるという。これら群集の樹木構成は遺物包含層の花粉組成から考えられる樹木構成とほぼ同一であり大きな変化は見られないである。

#### 参考文献

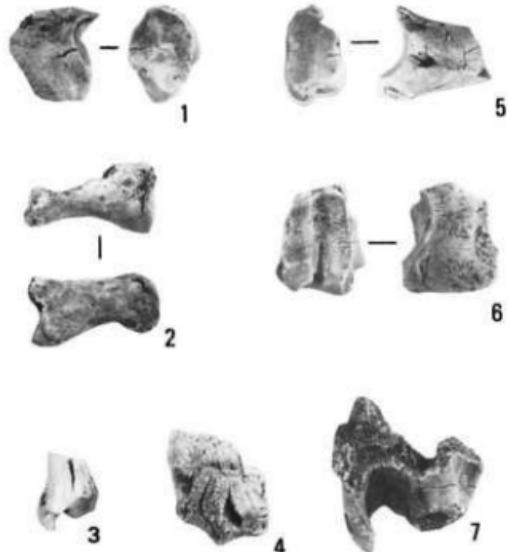
- 苫小牧市環境部(1975)：苫小牧地域植生等調査報告書  
山田悟郎(1977)：ウナベツ川遺跡B地点における花粉分析について、ウナベツ川遺跡、斜里町教育委員会  
山田悟郎(1979)：美々4遺跡から採取した土壌試料の花粉分析、美沢川流域の遺跡群III、北海道教育委員会

# 社台 1 遺跡出土の動物遺存体

西本 豊弘

社台 1 遺跡から出土した骨片は約 35,000 点である。それらはすべて白色化した焼骨であり、長さ 1 cm 未満のものが多い。強く火を受けていたために骨が収縮、変形し、指骨のような小さなものでも完品はほとんどみられない。第 1 表にその同定結果を示したが、骨片のほとんどは同定不可能な小片であった(陸獣骨片としたもの)。ただし、それらは大型の陸獣、おそらくエゾシカの骨が多いと思われる。エゾシカの他はイノシシ、ヒグマ、キタキツネ、種不明の海獣が少量含まれるだけである。

エゾシカの出土内容をみると、小破片のためにかろうじて部位が認定されたものは中手骨、中足骨、基節骨、中節骨、末節骨が多い。しかし、主要な四肢骨も少量認められており、また陸獣破片としたものの中に上腕骨や大腿骨等の中間部破片と思われるものも認められることから、これらの焼骨は四肢骨が主体であったと思われる。そして、エゾシカの出土内容で特異なことは、頭蓋骨片と下顎骨片が各 1 例ずつみられるとしても、歯がまったく出土していないことである。歯は火を受けた場合に骨よりも残りにくいとしても、土とともに一括して取り上げ



1・2、イノシシ (1、末節骨、  
2、基節骨)  
3、キタキツネ右脛骨  
4、ヒグマ中足骨?  
5-7、エゾシカ (5、末節骨  
6、基節骨 7、右側脛骨)

られ、また水洗せずに抽出された資料の中に、歯根の破片でさえも1片も含まれていないことは奇妙である。このことから、これらの焼骨には、焼く前に歯一即ち頭蓋骨や下顎骨—が意識的に除外されていたように思われる。そして、これらの骨が白色化してもろくなるまで強く焼かれていることや、魚骨を含まずエゾシカ主体であること、焼骨の分布が焼土F-1(H-4-b・H-4-c)～F-5を中心に分布すること、F-1の焼土の場合にはピットがその周囲に認められたこと等から考えると、その用途は明らかでないとしてもこれらの焼骨は何らかの儀礼的意味をもっていた可能性が十分に考えられる。

イノシシは指骨が計4点認められただけである。陸獣骨片の中にも含まれていると思うが、指骨の数からみて、その量は少ないと思われる。イノシシの形質については、当遺跡の場合、焼けて変形した指骨のためにくわしく分からぬが、J-5-dの資料が成獣と推測される他は不明である。イノシシは北海道南部の縄文時代後期末葉から晩期の遺跡で出土していることはよく知られており、当遺跡で出土して何ら不思議はないが、当遺跡人と本州の関連性を示す資料のひとつといえる。

ヒグマは中手骨または中足骨の遠位端が1片みられただけである。中型獣の胫骨遠位端が1点出土しており、大きさは現生のキツネの2/3以下であったが、その形状よりキツネと同定された。海獣骨片としたものは170片となつたが、火を受けた小片のために、その中に鹿角片やエゾシカの関節部分が含まれている可能性がある。しかし、明らかに海獣の骨も含まれるが種名は明らかではない。

地区	焼片 枚数	陸獣 骨片 枚数	海獣 骨片 枚数	エゾシカ						その他	地区	焼片 枚数	陸獣 骨片 枚数	海獣 骨片 枚数	エゾシカ						その他	
				中 手 骨 片	中 足 骨 片	四肢 骨 片	頭 蓋 骨 片	下 顎 骨 片	その 他の 骨 片						中 手 骨 片	中 足 骨 片	四肢 骨 片	頭 蓋 骨 片	下 顎 骨 片	その 他の 骨 片		
H-4-b	7329	7251	35	2	2	2	2	3	長骨右1 直骨片1	イノシシ7 鹿角片2	J-4-d	155	153	2								
H-4-c	12136	12114	20					2			J-5-a	33	31						2			
I-4-a	101	95	2						ヒグマ中手 中足骨1		J-5-b	109	107	1					尾骨1			
I-4-b	30	25	1	1							J-5-c	4225	4199	10	6	7	4	5	尾骨2 鹿角片7 直骨片1	イノシシ骨片1 鹿角片1		
I-4-d	3230	3204	4	2							J-5-d	3804	3756	23	7	7	4	2				
I-5-a	142	141	1								J-6-a	134	123	7			3	1	下顎骨片1 尾骨1			
I-5-b	256	253	5								J-6-b	81	77	1	1	1	1					
I-5-c	54	53		1							k-4-a	60	47	13								
I-5-d	734	707	25	1	1						k-5-a	35	34	1								
I-6-a	881	874	4	1			角片1	キツネ 頭蓋骨右1			k-5-c	11	7			2	2					
I-6-b	222	205	8	4	2	1	1	角片1			k-5-d	247	237	7	2	1						
J-4-a	1065	1001	2			2					k-6-b	10	10								未特定部分	
J-4-e	2	2									計	36508	34732	170	20	24	17	17		14	6	

注 陸獣骨片としたものは遺物表面におおよそその微細を保たるものであり、正確な枚数ではない。  
また、これらの骨片ほとんどがエゾシカと思われる。

表 I 烧骨内訳

# 北海道社台 1 遺跡出土のベンガラの 鉛同位体比の研究

室住正世、中村精次、大江純司

## 1. 緒言

鉛元素は質量数が 204, 206, 207, 208 の四つの安定同位体が、ある割合で混合したものである。これらの同位体を  $^{204}\text{pb}$ ,  $^{206}\text{pb}$ ,  $^{207}\text{pb}$ ,  $^{208}\text{pb}$  と記し、混合割合を同位体存在比と称し、また各同位体存在比の比、たとえば  $^{207}\text{pb}/^{206}\text{pb}$  を同位体比という。原始地球における同位体比  $^{207}\text{pb}/^{206}\text{pb}$  と  $^{208}\text{pb}/^{206}\text{pb}$  の値はそれぞれ 1.090 と 3.108 であったと考えられている。しかしこれらの値は、その後の地質年代間における放射壊変によって、 $^{238}\text{U}$  より  $^{232}\text{Th}$  が（半減期 =  $4.5 \times 10^9$  年）、 $^{238}\text{U}$  より  $^{207}\text{pb}$  が ( $7.13 \times 10^6$  年)、 $^{232}\text{Th}$  より  $^{208}\text{pb}$  が ( $1.39 \times 10^{10}$  年) 生成し、原始船に加わることにより変化した。放射壊変源の鉛同位体が、原始船に加わった条件の相違によって、現在自然界に見出される鉛の同位体存在比には、特有の性質が見出されることとなる。この相違は僅少ではあるが、表面電離質量分析法によって測定することができる。<sup>(1)</sup>

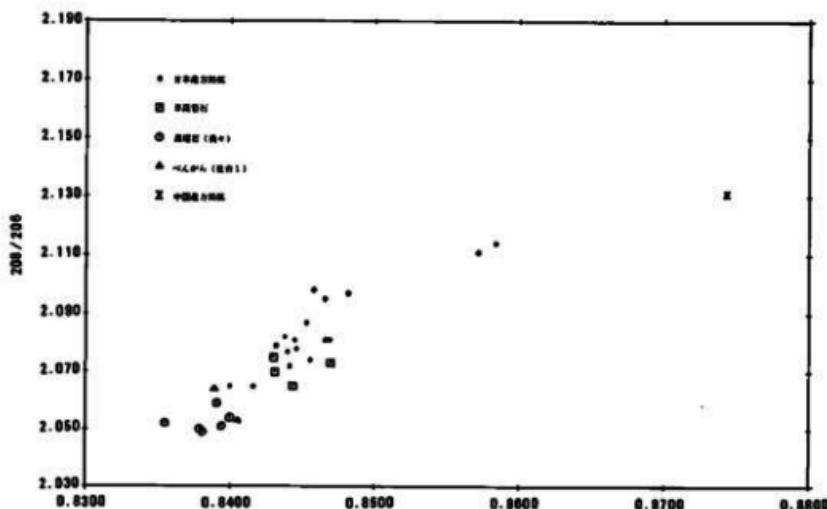


図 v 日本産方鉛鉱、日高岩石に対する、美々、社台 1 遺跡出土の黒曜石、べんがらの鉛同位体比の比較

第1図に鉛の主要鉱物である方鉛鉱の、日本産鉱物の鉛同位体比を示した。 $^{207}\text{pb}/^{206}\text{pb} \approx 0.84$ ,  $^{208}\text{pb}/^{206}\text{pb} \approx 2.08$  であることがわかる。これらの値は中国産、朝鮮半島産あるいは世界各地産の方鉛鉱の同位体比とは一般には違っていて、特性値である。しかし必ずしも、他国産にこれららの値と一致する同位体比をもつ方鉛鉱の存在を否定することはできない。北海道日高山脈の花崗岩や玄武岩その他岩石の同位体比が、日本産方鉛鉱の同位体比に近似していることを図Vに示す。

世界的視野に立って各地産の鉛の同位体比を知り、その上で出土品や伝世品中の鉛の同位体比を求めて対比することにより、出土品や伝世品の原料の産地を推定する資料がえられる。もともと、この可能性には前項で記したように ( $^{207}\text{pb}/^{206}\text{pb}$ ,  $^{208}\text{pb}/^{206}\text{pb}$  の 0.84 と 2.08 が必ずしも日本の特性値ではなく、また違った産地の材料を混じ合うことにより鉛同位体比が当然に変化するなど、「逆必ずしも真ならず」という) 弱点のあることに注意する必要がある。

しかしすでに、本州及び九州方面の古墳よりの出土品や伝世品に対して、この方法を応用した結果は、それらの考古遺物が日本の原料を用いて製作されたか否かに対し、重要な判定資料を提出することに成功している。この手法により、縄文・弥生時代における中国の朝鮮半島よりの日本に対する物質文化の導入や、その後の日本の鉱工業の発達の経緯などが明らかにされ始めている。

### 注

- 1) 鉛同位体比による産地同定の試み 山崎一雄、室住正世 考古学と自然科学 P.53 (1976)
- 2) 日本及び中国出土青銅器中の鉛の同位体比 山崎一雄、室住正世その他 考古学と自然科学 P.55 (1979)
- 3) 日本産方鉛鉱及び考古遺物中の鉛同位体比 山崎一雄、室住正世その他 日本化学会誌 P.1112 (1978)
- 4) 中国及び日本産ガラスの鉛同位体比 山崎一雄、室住正世その他 日本化学会誌 P.821 (1980)
- 5) 鉛同位体比測定による日本出土青銅器の研究 山崎一雄、室住正世 化学教育 P.279 (1978)
- 6) 考古学・美術史の自然科学的研究 山崎一雄、室住正世 日本学術振興会 P.383 (1980)

Sample	Sample Weight (g)	Radius (mm)	211msec current (A)	Ion beam intensity ( $10^{-15}$ A)	$\frac{207\text{pb}}{206\text{pb}}$	S.V. (%)	Precision (pmol)	Concentration (pmol/g)	Concentration (ug/g)	
HS-1 1.0±0.1-1	0.1208	13.14	1.700	6.05	0.3327	0.3	±0.05	±0.04	±3.2 ±0.3	17.2
HS-1 1.0±0.1-2	0.1208	13.19	1.680	13.2	0.3274	0.3	±0.05	±0.05	±3.5 ±0.3	26.5
HS-15 1.0±0.1-1	0.0410	3.820	1.500	6.34	0.6824	0.3	±0.05	±0.05	±12.3 ±0.7	37.8
HS-17 1.0±0.1-1	0.0179	3.546	1.720	2.45	0.0000421	1.6	±0.00000	±0.00000	±0.000 ±0.005	0.014

Pmol =  $10^{-15}$  mol  
ug =  $10^{-6}$  g

表2 美々4・5、社台1遺跡出土の黒曜石・べんがら、琥珀中の鉛濃度 $^{207}\text{pb}$ をスパイクとする同位体希釈表面離質量分析

Sample	Filament current (A)	Ion beam intensity ( $10^{-14}$ A)	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$
MM-1/5-4-1 1.840	3.76	0.8355(0.3) <sup>a</sup>	2.052(0.2)	19.36(0.3)	15.34(0.3)	37.44(0.3)	
MM-2/5-4-1 1.840	3.50	0.8363(0.2)	2.040(0.2)	18.21(0.3)	15.36(0.3)	37.31(0.3)	
MM-3/5-4-1 1.520	4.48	0.8400(0.1)	2.054(0.1)	18.33(0.3)	15.31(0.3)	37.44(0.3)	
MM-4/5-4-1 1.740	4.76	0.8391(0.1)	2.059(0.2)	18.32(0.2)	15.37(0.3)	37.72(0.3)	
MM-10/5-4-1 1.440	3.56	0.8394(0.2)	2.051(0.2)	18.29(0.3)	15.35(0.3)	37.52(0.3)	
MM-12/5-4-1 1.340	4.56	0.8379(0.1)	2.050(0.2)	18.23(0.2)	15.38(0.3)	37.39(0.1)	
MM-16/5-4-1 1.890	3.00	0.8389(0.2)	2.064(0.2)	18.35(0.4)	15.40(0.4)	37.88(0.4)	
MM-18/5-4-1 1.420	4.34	0.8405(0.1)	2.053(0.1)	18.18(0.2)	15.28(0.2)	37.33(0.2)	

\* Coefficient of variation.

表3 美々4・5、社台1遺跡出土の黒曜石及びべんがら中の鉛同位体比

## 2. 北海道社台1遺跡出土のベンガラの鉛同位体比

### 1) ベンガラ中の鉛濃度

$^{206}\text{pb}$ をスペイクとして用いる同位体希釈表面電離質量分析法によって測定したベンガラ中の鉛濃度は37.8 ppm(表2)である。この濃度は0.1 gのベンガラを供試することによって、その鉛同位体比の測定が可能なことを意味する。また、同地出土のコハク片中の鉛濃度は0.014 ppmであった。このことは、コハクの鉛同位体比測定のためには20~10 gの供試量を要することを意味している。

### 2) ベンガラの鉛同位体比

表3にベンガラの鉛同位体比を示し、図Vにその比を、日本産方鉛鉱や日高山脈産の花崗岩、玄武岩その他岩石の鉛同位体比に対比して示した。

ベンガラを、特に古墳墓中に用いられたベンガラを「鉛同位体比測定用の試料」として供試することは、不適当と考えられるが、一例として報告する。本法に供試されるものは、青銅器、ガラス、鉱石等地下水その他により、鉛同位体比に影響の受け難いものが基本的に望ましい。

なお、参考資料として、北海道美々4および美々5遺跡出土の黒曜石の鉛同位体比を図V及び表2・表3に示した。

北海道産の黒曜石は、北海道産の花崗岩・玄武岩とは違った鉛同位体比をもつことが、最近実証された。本報告で測定されている黒曜石の鉛同位体比は、北海道産の黒曜石の鉛同位体比に一致することが見出された。

IV こじょうはま  
虎杖浜 4 遺跡

## IV 虎杖浜 4 遺跡

### 1. 概要

遺跡は、クックラ台地を開析して南流するオモンベツ川の左岸、国鉄室蘭本線ちかくまでせり出した台地の先端部西斜面にある。標高は10~15mで、遺跡の範囲と思われる部分だけが緩く傾斜し、その中央部やや南寄りに小沢状の凹地がある。遺跡の東および南側は、標高15mあたりから急激に高度を増し、あたかも背後に壁がそり立つといった感じを受ける。また、遺跡の西側斜面は、台地の裾を通る現道により削平されている。

この調査は、縦貫自動車道関連の資材運搬用道路改良工事に伴うものである。調査区は北東から南西方向に細長く、そのうちの半分は現道部分であり、残りは雑草地である。現道部分は、一部遺物包含層を削平し砂利を敷いており、雑草地は明治末から大正期にかけて虎杖浜地区の墓地として利用され、その後最近まで耕作地として利用されていた。そのため、この発掘調査に先立って墓地の改葬が行われた。

調査の結果、住居跡5軒と多数の焼土及び縄文時代、統縄文時代の遺物が検出された。住居跡は調査区の南側に1軒と、遺跡北寄りに4軒検出された。住居跡のうち、ほぼ全容をとらえることができたのは1軒（2号住居跡）のみで、他は調査区外に及んでいることから全体をうかがうことはできなかった。焼土は、ほとんどが凹地の部分のⅢ層（黒色土）に集中して検出された。焼土にともなう遺物はなく、時期的には不明である。遺物は、縄文時代前期に属するものが圧倒的に多く、ついで、中期、後期が多い。晚期、統縄文時代の遺物は僅かである。

層序：遺跡の基本的な層序は、図4-4(左)に示したとおりである。Ⅱ層：黄褐色軽石層は、1663年に降下した火山灰である。Ⅲ層：黒色土層は、粒子が細かくやや粘性がある。Ⅳ層との間に0.5~1.0cmの灰白色火山灰が介在するが、Ⅲ層との分層は不可能である。しかし、このⅢ層は、遺跡のやや南寄りにある凹地においては上部より黒色土層、茶褐色土層、黄褐色土層の3層に細分される(図4-4(右))。上部の黒色土層部分からは統縄文時代の遺物が検出された。それ以下、黄褐色土層まではまったくの無遺物層である。Ⅳ層からⅥ層にかけて、大小さまざまな熔結凝灰岩が多量に混入している。これは、遺跡をとりまく東・南壁より崩落混入したものであろう。Ⅳ層からは縄文時代の遺構、遺物が検出された。Ⅴ層以下は無遺物層である。旧石器確認調査をⅤ層以下について行ったが、遺構、遺物は検出されなかった。

周辺の遺跡：遺跡西側に広がる低位沖積平野をとりまくクックラ台地の縁辺部には、縄文時代から、統縄文時代、擦文時代にかけての遺跡が点在する。これらの遺跡の大半は、いずれも台地を開析して太平洋へ注ぐ河川（アヨロ・ポンアヨロ・オモンベツ川）に立地している。このように、各時期の遺跡が点在する虎杖浜地区では、今まで、数多くの発掘調査がなされ、関係方面に貴重な考古学資料を提供している。

まず、本遺跡の北には石刀頭や縄文時代早期～後期、統縄文時代の土器を出土する虎杖浜5



この図は国土地理院発行の  
 図4-1 遺跡の位置図(2万5千分の1地形図、登別)  
 磐泉を複製したものである。



この写真は国土地理院発  
行の1万分の1空中写真  
を複製したものである。

遺跡がある。西方には、本年度縦貫自動車道予定路線内での調査を実施した虎杖浜 3 遺跡があり、貝穀文、撚糸文を主体とする縄文早期の遺跡である。また、本遺跡対岸の台地上には、2か所の貝塚を伴う縄文時代前期の虎杖浜 2 遺跡があり、その南にあるポンアヨロ川をはさんで縄文時代早期の竪穴と、「虎杖式土器」を出土する虎杖浜 1 遺跡がある。海ぞいの台地縁辺部には二基のチャシ跡（カムイエカシチャシ、カムイミンタルチャシ）と、縁辺部に接する一段低い台地には続縄文時代の墳墓群を主体とするアヨロ遺跡が知られている。

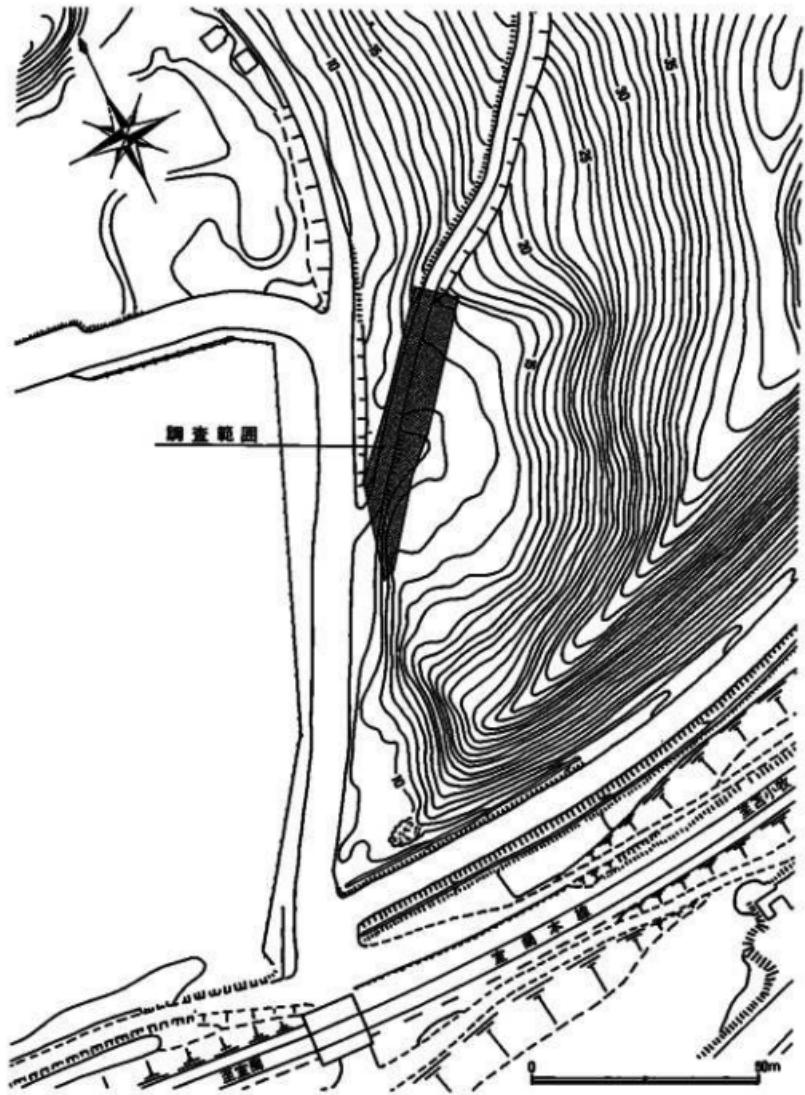


図4-2 遺跡周辺の地形図

## 2. 遺構

1号住居跡：確認した平面形の最大長が約12mと、規模の大きい住居跡である。床面はVI層（暗黄褐色粘土層）に掘り込まれた平坦をなすが、熔結凝灰岩がところどころに突出している。床面やや西寄りに2か所の石圓いを伴うほぼ円形の炉跡を検出した。一方は、石を床面上に円形にならべ、もう一方は石を床に埋め込んだ形態のものである。使用されている石は、すべて凝灰岩の礫である。壁は全周緩やかに傾斜するが、南側の壁には最大長約2m、高さ約1.5mの凝灰岩の偏平な大石があり、壁の一部をなしている。柱穴と思われる小ビットは床と遺構の周囲にあるが、配置関係は不明である。床面から土器の細片が得られたが、これから時期を判断するのは困難である。ただ、覆土および周辺から出土した土器が、縄文時代中期前葉のものであることから、同時期かこれより前の前期後葉頃のものと考えられる。

2号住居跡：発見された住居跡の中で、完掘された唯一のものである。ベンチ状の構造をもつ。外プランは、一部が黒色土層中に掘り込まれていたため確認されなかったが、径約5mのほぼ円形を呈する。内プランはVI層中に掘り込まれ、 $2.5 \times 3$ mの梢円形である。床は平坦で堅く、ほぼ中央部には径30cmほどの炉跡があり、これには石圓いは伴わない。主柱穴はP<sup>1</sup>～P<sup>4</sup>と思われる。ベンチ上にも小ビットがあるが、本遺構とどのような関連があるか不明である。遺物は、床面から数点のII群b類（円筒土器下層d式）土器が検出されている。

3号住居跡：調査区南端に、壁と床の一部が発見されたにとどまっており、詳細は不明であるが、ここでは一応、住居跡としておく。遺物は壁面に3点の石器が検出された。流れ込んだ可能性が大きい。

4号住居跡：やや傾斜が急になり始める調査区北東すみに検出された。北東壁とそれに続く床面の一部はVI層に掘り込まれているが、南半の床は黒色土層に掘り込まれているため判然としない。床のほぼ中央と思われる部分に、石圓いを伴う炉跡が2か所検出された。焼土中からは多量のシカの骨片<sup>(注1)</sup>と、イネ科と思われる種子<sup>(注2)</sup>が1点得られている。遺物は1が床面出土の土器で、II群b類土器である。

5号住居跡：調査区の東側境界、黒色土層中に石圓いを伴う炉跡を検出した。その後、周辺をVI層上面まで精査した結果、炉跡をめぐるように数個の小ビットを検出したので住居跡とした。炉は4号住居跡のものとほぼ同一規模である。遺物は、炉跡とほぼ同一のレベルで出土した一括土器を中心に床面出土とした。1は口径35cmの大型の深鉢形土器である。口縁がやや外反し、3条の燃糸圧痕文がめぐる。4つの波状口縁で、1個と2個の突起が交互に配される。胎土には若干の纖維と砂粒を含む。3～5は同一個体で、3は頸部と胴部の境に隆帯がある。頸部には燃糸圧痕文が隆帯と平行に施文される。また、隆帯上には縦の燃糸圧痕文、胴部には結束の羽状繩文が施される。1や6に比べて器壁は薄い。6は縄文地のみの土器で、口縁はやや外反する。7は土製有孔円盤の未製品である。以上の土器はII群b類に属する。

(注1) 西本豊弘氏の焼骨片同定による。

(注2) 矢野牧夫氏の焼土分析結果による。

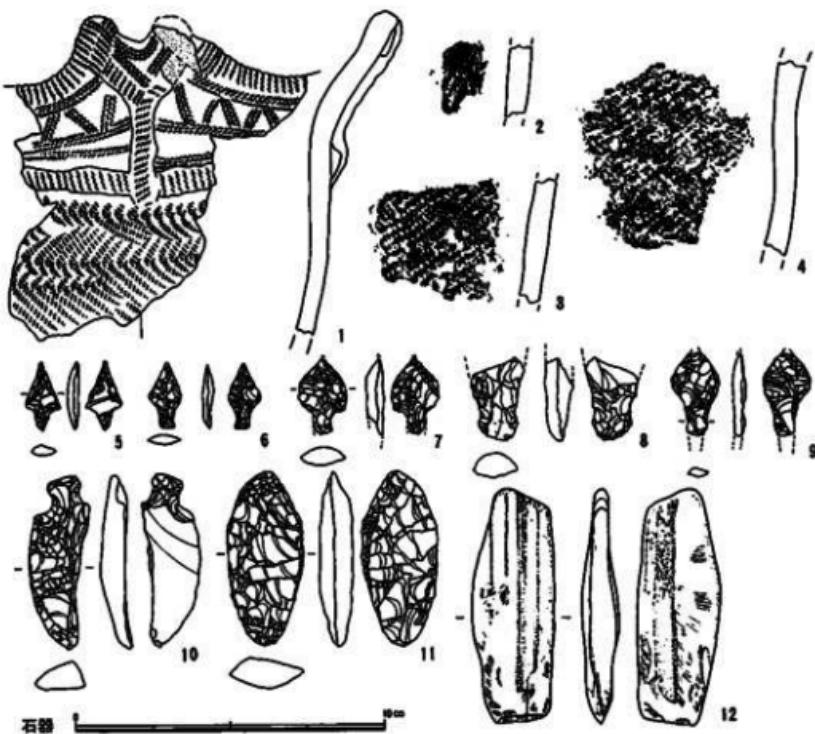
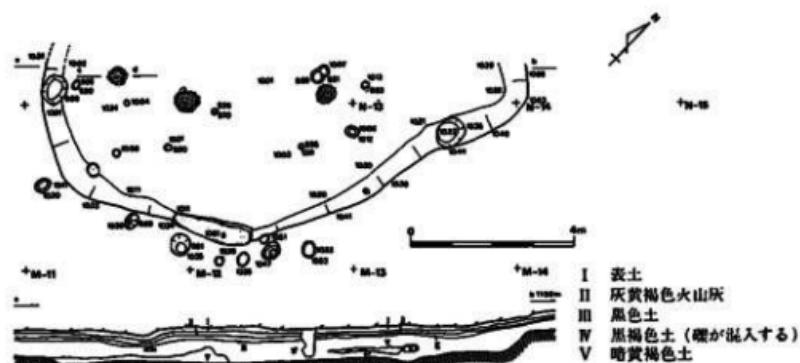


図4-5 1号住居跡と遺物



1号住居跡と遺物（写真）

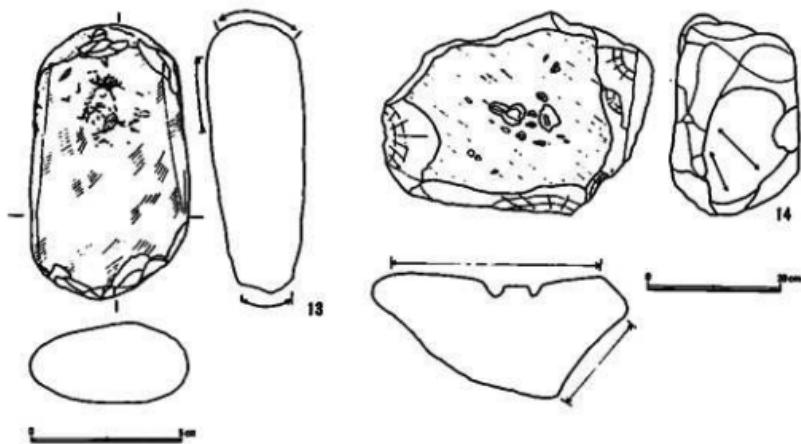


図4-6 1号住居跡の遺物

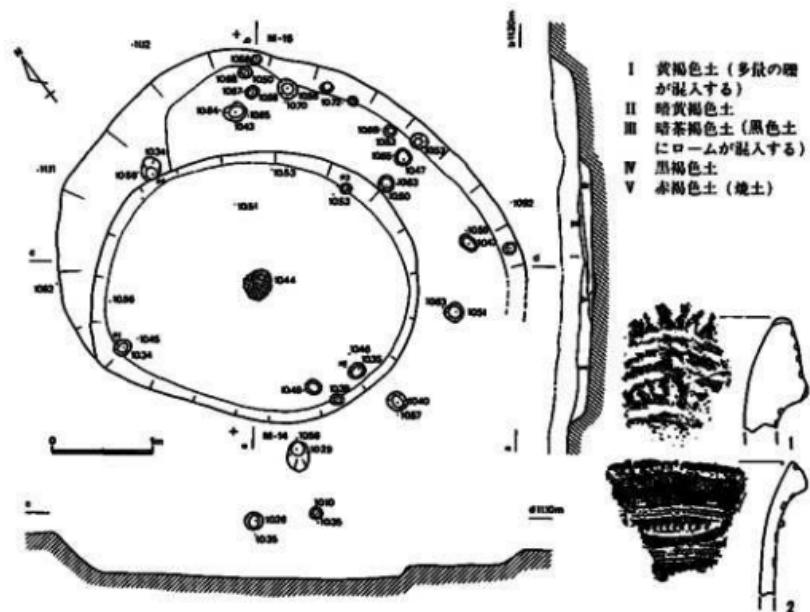
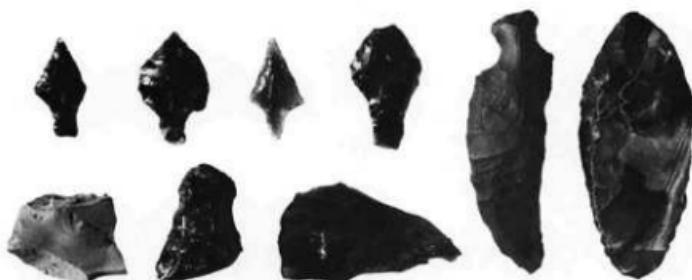
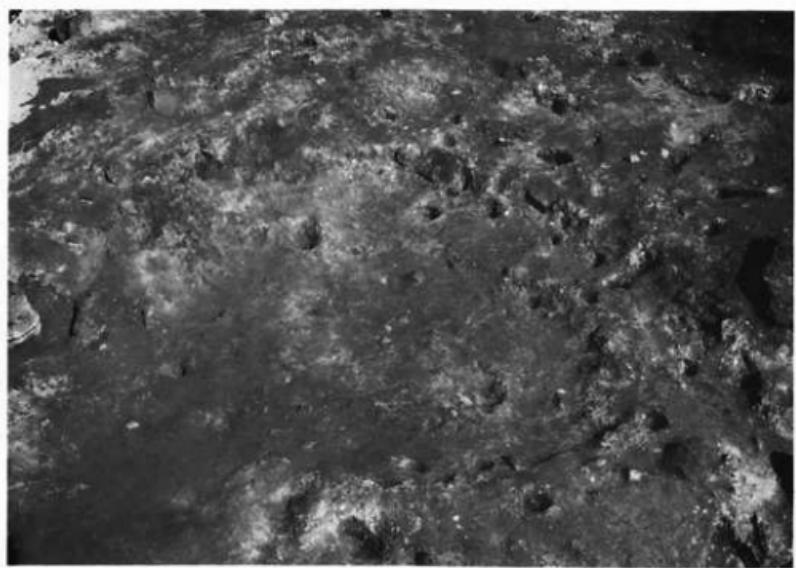


図4-7 2号住居跡と遺物



1号住居跡の遺物（写真）



2号住居跡と遺物（写真）

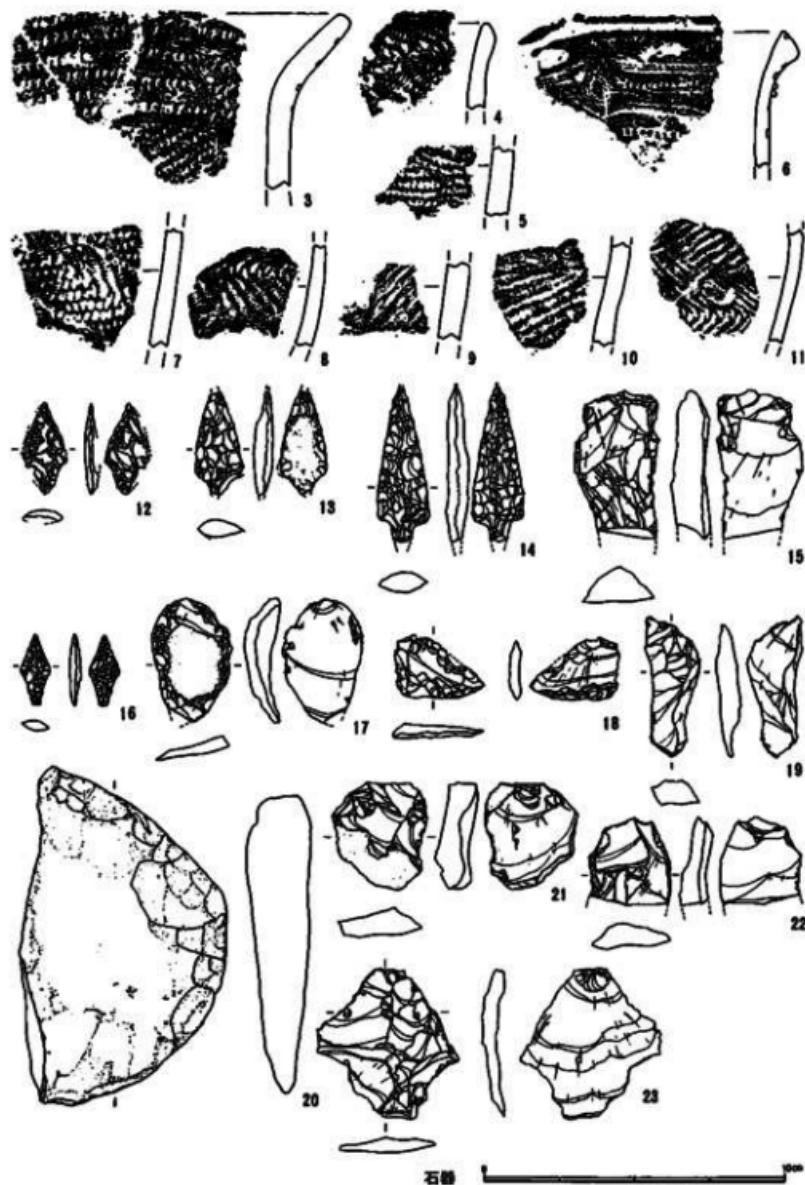
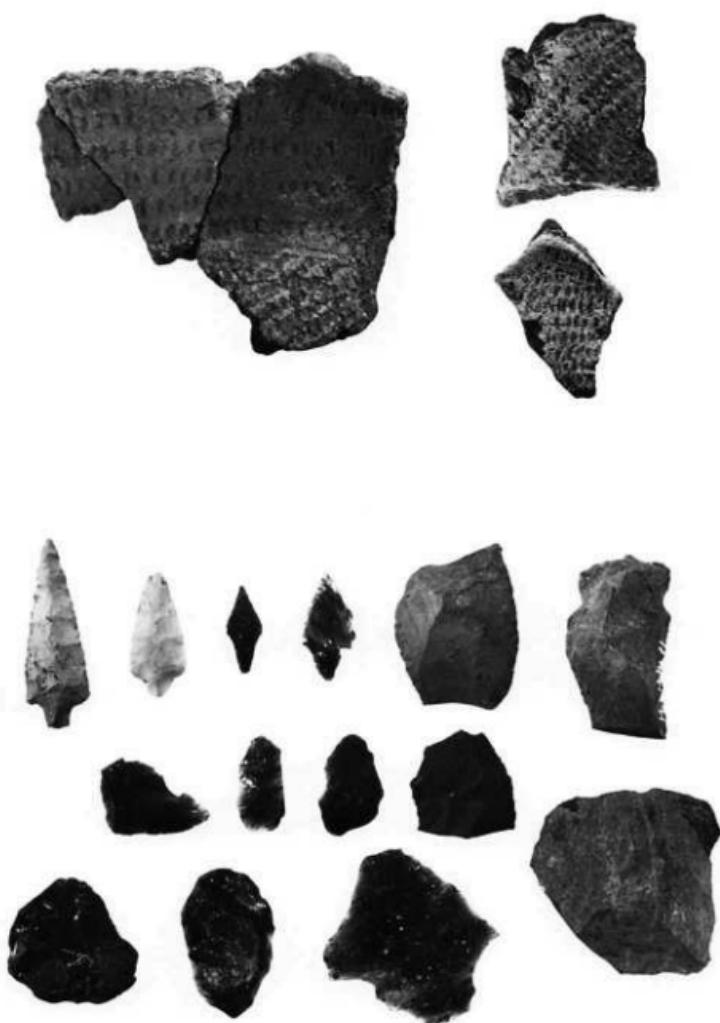


図4-8 2号住居跡の遺物



2号住居跡の遺物（写真）

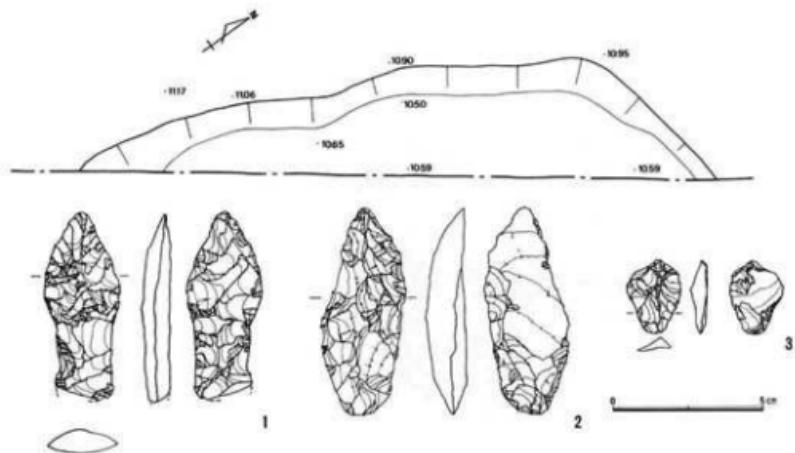


図4-9 3号住居跡と遺物

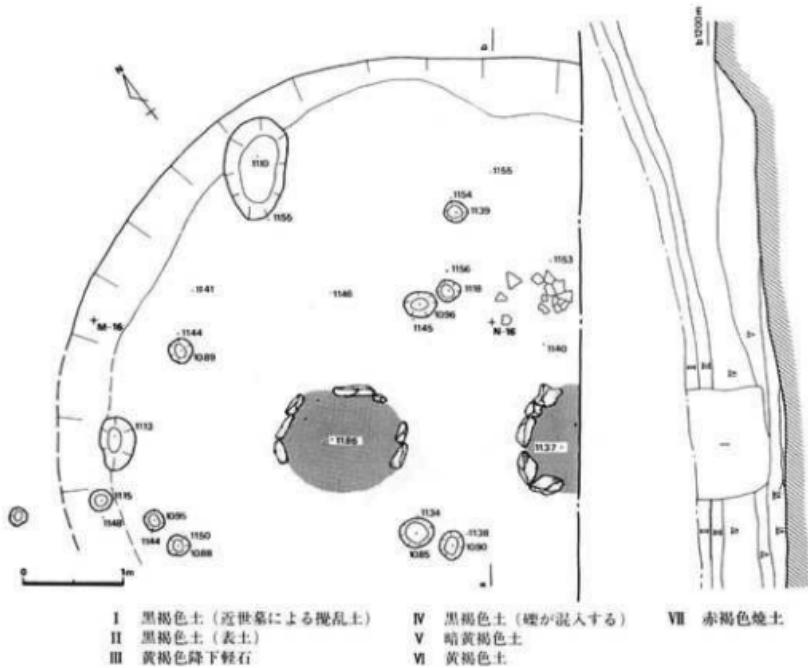


図4-10 4号住居跡



3号住居跡と遺物（写真）



4号居跡（写真）

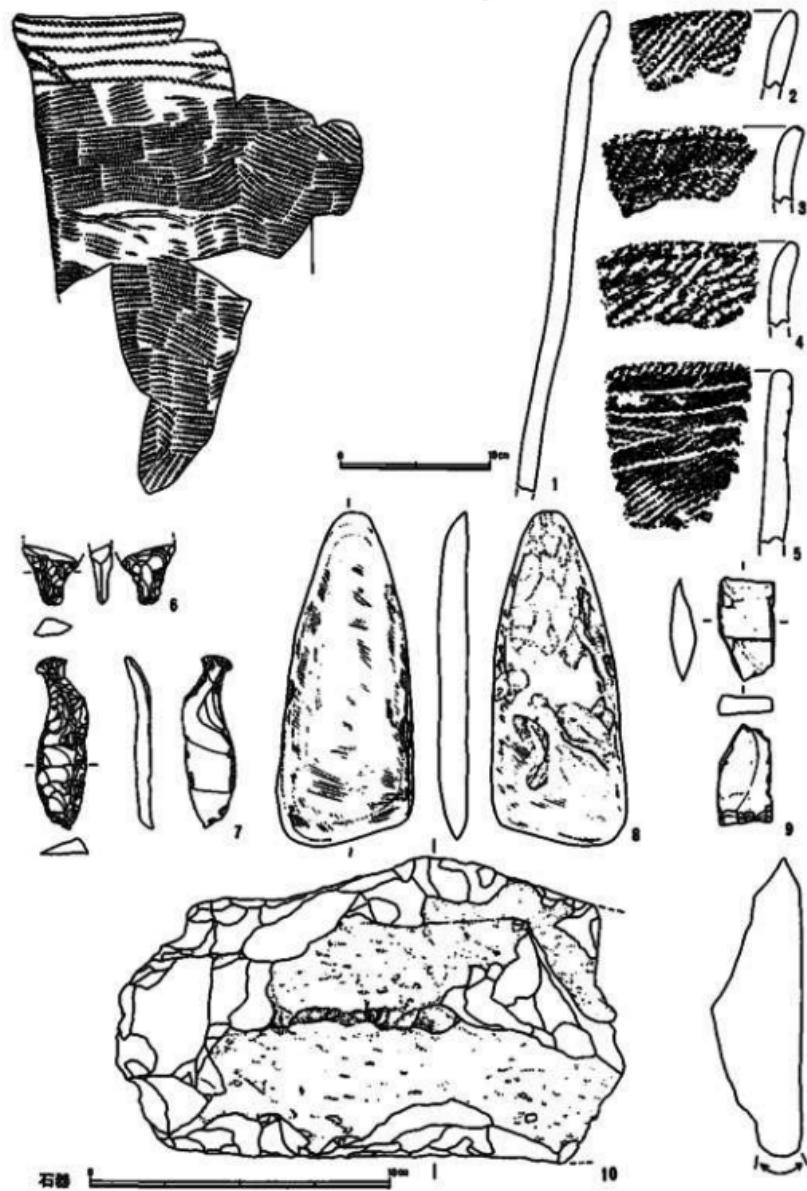


図4-11 4号住居跡の遺物



4号住居跡の遺物（写真）

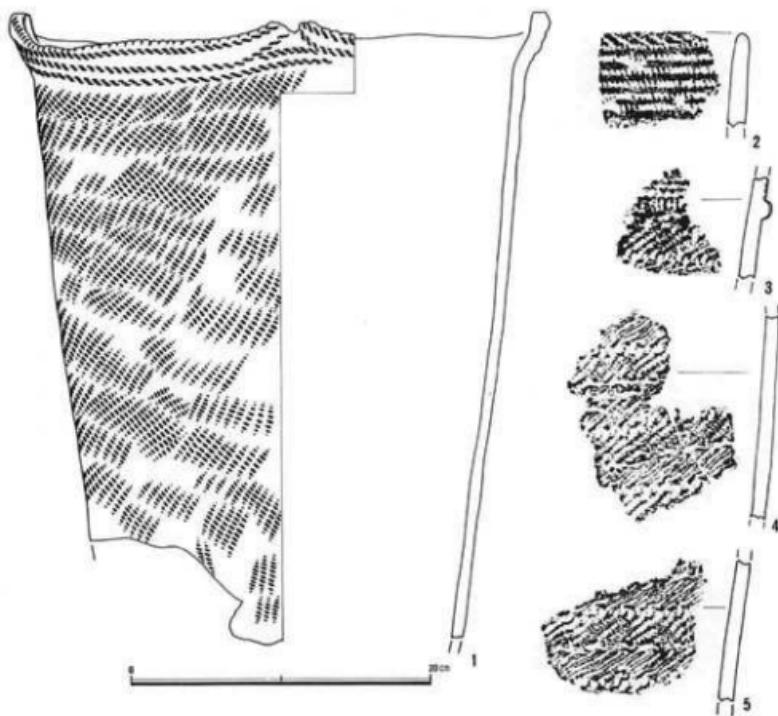
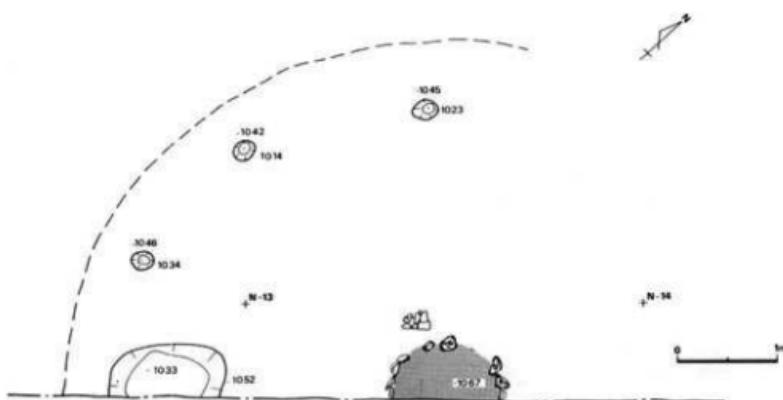


図4-12 5号住居跡と遺物



5号住居跡遺物出土状況と遺物（写真）

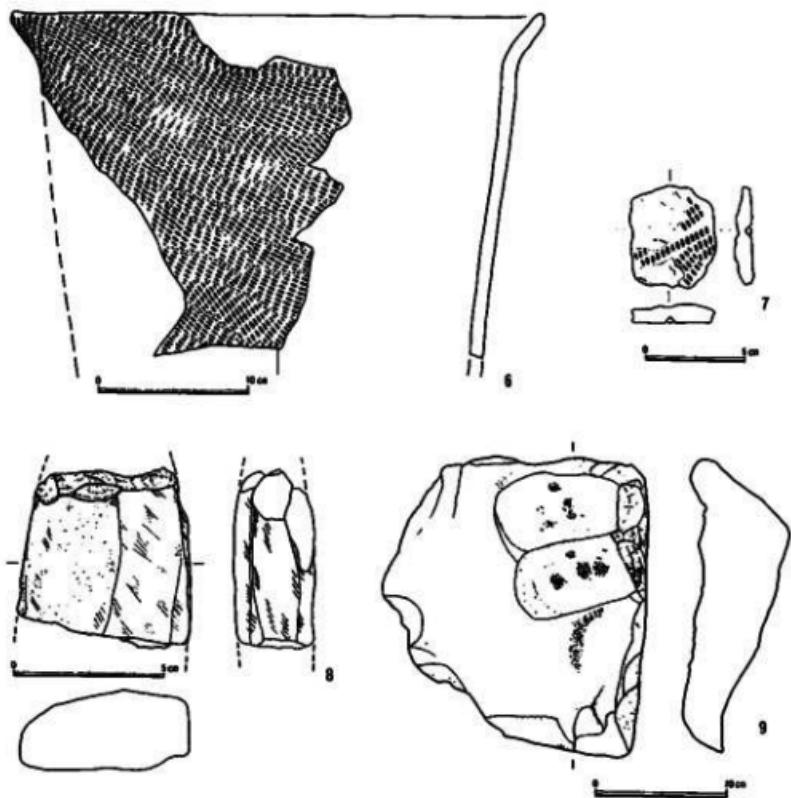


図4-13 5号住居跡の遺物

表4-1 図示した1号住居跡出土の遺物

相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位	相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位
1	土 器	III a			覆 土	8	石 やり	I B 1 a		Obs.	覆 土
2	"	II b			"	9	石やじり	I A 4 a	1.2	"	"
3	"	"			"	10	つまみ骨ナイト	III A 1 b	8.7	Ha-sh	"
4	"	"			"	11	スクレイパー	III B 2 b	14.8	"	"
5	石やじり	I A 4 a	1.9	Obs.	床	12	石 砕	V A 3	35.0	B1-Mud.	床
6	"	"	0.6	"	"	13	たたき石	V A 1		Gr-Mud.	"
7	"	"	1.7	"	覆 土	14	台 石	V B 3	2700.0	And.	覆 土

表4-2 図示した2号住居跡出土の遺物

相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位	相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位
1	土 器	II b			覆 土	13	石やじり	I A 4 a	1.5	Sh.	覆 土
2	"	III a			"	14	石 やり	I B 1 a		"	床
3	"	II b			床	15	ナイフ	III A 1 c	16.0	"	覆 土
4	"	"			"	16	石やじり	I A 4 b	5.0	Obs.	"
5	"	"			"	17	スクレイパー	III B 2 a	7.6	"	"
6	"	III a			覆 土	18	スクレイパー	III B 2 b	2.2	"	"
7	"	"			"	19	Uフレイク	X		"	"
8	"	"			"	20	すり石	V A 2		And.	"
9	"	"			"	21	Uフレイク	X		Obs.	"
10	"	"			"	22	スクレイパー	III B		Ha-Sh.	"
11	"	"			"	23	Uフレイク	X		Obs.	"
12	石やじり	I A 4 a	0.9	Obs.	"						"

表4-3 図示した3号住居跡出土の遺物

相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位	相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位
1	石 やり	I B 1 a	14.6	Obs.	床	3	フレイク				
2	スクレイパー	III B 2 a	21.3	"	"						

表4-4 図示した4号住居跡出土の遺物

相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位	相図番号	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	層 位
1	土 器	II b			床	6	石やじり	I A 4 a		Obs.	床
2	"	"			"	7	つまみ骨ナイト	III A 1 a	5.3	Ha-sh	"
3	"	"			"	8	石 砕	V A 2	33.3	Mud.	"
4	"	"			"	9	Uフレイク	X		Mud.	"
5	"	"			"	10	すり石	V A 2	680.0	And-	炉跡

表4-5 図示した5号住居跡出土の遺物

標識番号	名 称	分 類	深 度 (m)	材 質	層 位	標識番号	名 称	分 類	深 度 (m)	材 質	層 位
1	土 器	II b			床	6	土 器	II b			床
2	#	#			#	7	土 製 品				#
3	#	III a			#	8	石 犁	N A 2	18.0	Mud.	覆土
4	#	#			#	9	石 盆	VI B	2700.0	And.	床
5	#	#			#						

### 3. 包含層の遺物

遺構出土以外の遺物は、点数にして 29,000 に及ぶ。土器・石器が主体をなし、他に、若干であるが玉類・土製品・石製品・石炭礫などが出土している。土器は、縄文時代前期に属するものが主体をなす。出土遺物の分類別の詳細は、以下の表に示すとおりである。また、特徴的な遺物について、若干の説明を加える。

表4-6 包含層出土の遺物一覧

#### (1)土器

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
土 器	II b	11,139	土 器	III b - 3	116	土 器	IV c	60
"	III a	3,359	"	III b -	126	"	V c	15
"	III b - 1	260	"	III -	18	"	VI	696
"	III b - 2	1,634	"	IV a	2,608	"	不明	3,706

#### (2)石器

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
石やじり	I A 2 b	2	つまみ付ナイフ	2 b	1	台 石	B -	1
	3 a	2		A -	4	すり石	VA 1	55
	b	2	スクレイバー	III B 1 b	1			2
	4 a	105		2 a	25			2
	b	47		b	29			20
	4 -	1		4	2		A -	5
	5 b	1		5	6	石 盆	VB	3
	6	1		6	1		-B 1	4
	A -	28		7	68	石 刷	VA	1
石 やり	IB 1 a	46		III	3	砥 石	VB 1	3
	b	17		B -	33		VA 2	25
	1 -	5	石 斧	VA 1	14	石 鍋	VA 2	1
	2 a	2		2	105		石	1
	b	4		3	9	石 核 頭	IX	3
	B -	10		4	4		X	438
刺 突 器	II A 1	6		5	1	砾		147
	2	2		N	2	フレイク		1,984
F リル	B 1	2		A -	19	原 石		1
	2	2	石 のみ	NB	10	石 炭		9
	B -	1	た、き石	VA 1	21	鉄骨貝の未成品		1
つまみ付ナイフ	III A 1 a	7		2	9	玉		2
	b	7		3	3	石 製 品		3
	c	23		4	1	異形石器		2
	d	3		VA -	16	輕 石		1
	III A 1 -	1	台 石	VB 1	10			

### (1) 土器

II群 b 頸土器(1、26~60)：口部に文様帯をもつ土器のうち、胴部との境界が隆帯で明瞭に区分されるもの(26、27、28、46、47、50~52)と、隆帯などが伴わないもの(31~38)がある。頸部文様は、口唇に平行な撚糸圧痕文、絡糸体圧痕文などで構成される。胴部文様は、1、48~50の多軸絡糸体回転文、55、57の木目状撚糸文、27、57の綾くり文、53、54のヘラ描き沈線文などが特徴的である。口部に文様帯をもつもの外に、これに類似する土器も本群に含めた(39~45)。縄文地のみで、口縁部がやや外反する土器である。また、本群における特異な例として、魚骨を回転施したと思われる破片(56、58~60)と、すり切り痕のある土器片(37、39)が出土している。すり切り痕のある土器片は、後に実測図(図4-48)と写真(図版4の47、48)で示してある。

III群 a 頸土器(2~9、61~104)：2は無節の斜行縄文を地文に、沈線文が施される。突起の部分には、小さいコブ状の貼り付けが2こずつ配される。3は、口縁から胴部上半にかけて細い粘土紐と棒状工具での刺突が施される。波状口縁をなすと思われる。

III群 b-1 頸土器(105、106)：105は突起の部分の破片で、半さい竹管状工具での押し引き文が肥厚した口唇上に施される。106は胴部片で、沈線が横走する。

III群 b-2 頸土器(10~12、14、15、107~126)：胴部に膨らみをもつものが多い。10は縄文が口縁に平行して数条めぐる。11は、隆帯が口唇に1条と、頭部のくびれた部分に2条あり、その上に押し引き文が施される。15は、口縁部が無文で、胴部には縄文が施される。コブ状の突起が胴部に1個みられる。116~121の口唇上には、棒状工具などでの刺突が施される。

III群 b-3 頸土器(13、127~143)：13は口唇が肥厚し、その上に押し引き文が2条平行してめぐる。口唇肥厚直下には、器表からの刺突がほぼ等間隔でめぐる。口縁内面には、縄文が施される。127は、押し引き文を伴う粘土紐の貼付帯が胴部をめぐる。131も127と同様、胴部に貼付帯をもち、これには円形の刺突文が施される。

IV群 a 頸土器(19~25、144~184)：粘土紐の貼付帯をもつものと、沈線を主体とするものに分けられる。24、25、166、168は、指頭で押し潰したような粘土紐が、突起部分に貼付される。25は貼付帯周辺に2条の沈線がめぐる。25、166、168には口縁内面に縄文が施される。18、19、151、153、161の貼付帶上には、撚糸の圧痕文が施される。22は底部近くにまで貼付帯がつけられる。沈線文を主体とする土器は、地文が無文で、その上に渦巻状の沈線、平行沈線が施される。184は、精製土器で赤色顔料が付着している。

IV群 c 頸土器(185~189、191)：185と191は同一個体と思われる。底部はやや上げ底気味で、浅鉢状の土器である。186~188には器内面からの刺突文が伴う。

V群 c 頸土器(190、192~194)：190は底部にも縄文が施される。193、194は同一個体と思われるもので、2条の平行沈線文の間に、刺突文が等間隔に配される。また、口唇上には縄文が施され、更に、撚糸の圧痕文によって割まれる。

VI群土器（195～202）：195は口唇直下に等間隔に刻みがある。196は頸部の破片で、数条の沈線が横走する。197は注口土器の破片と思われる。198～200も197と同一個体と思われる。

## （2）石器等

石器の分類別の内訳は、表4-6で示した。縄文時代前期から統縄文時代までにわたる各時期の土器が出土しているが、それぞれの時期別の石器の組み合わせをとらえることは、できなかつた。

168の石やじりは、火熱によって、弓なりに曲がったものであろう。174の石炭石器（？）としたものは、石炭の亜円礫を素材としており、両面からの剥離・部分的な擦痕がみられる。169～173は、石炭の亜円礫である。

180は、赤色の火山岩礫に研磨面がみられるものである。赤色の顔料素材であろうか。軽石製とした186～188の3点は、紡錘形にかたちづくられたものである。

183～185は、素材・つくりからして、一見、石斧に類似するものである。ただ、刃部のつくりがなされていない。石斧の未製品とも考えられるが、研磨痕がほとんどみられない、「石斧もどき」として完成した石器であろう。

なお、土器片のすり切りに用いたと思われる石器は、確定できない。黒曜石製剝片のうち、使用痕、加工痕のある剝片としたものの中にあるだろうか。

199は、III群a類土器に伴う土器の把手部分の破片と思われる。

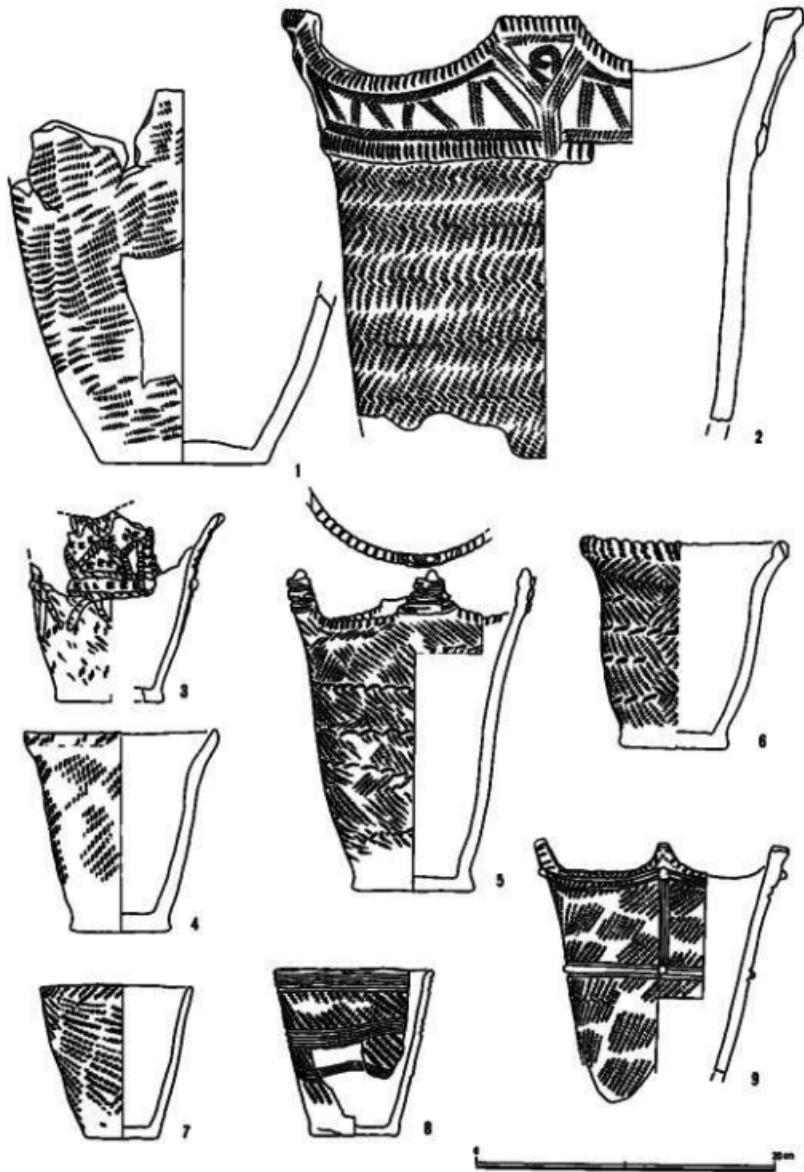


図4-14 包含層出土の土器

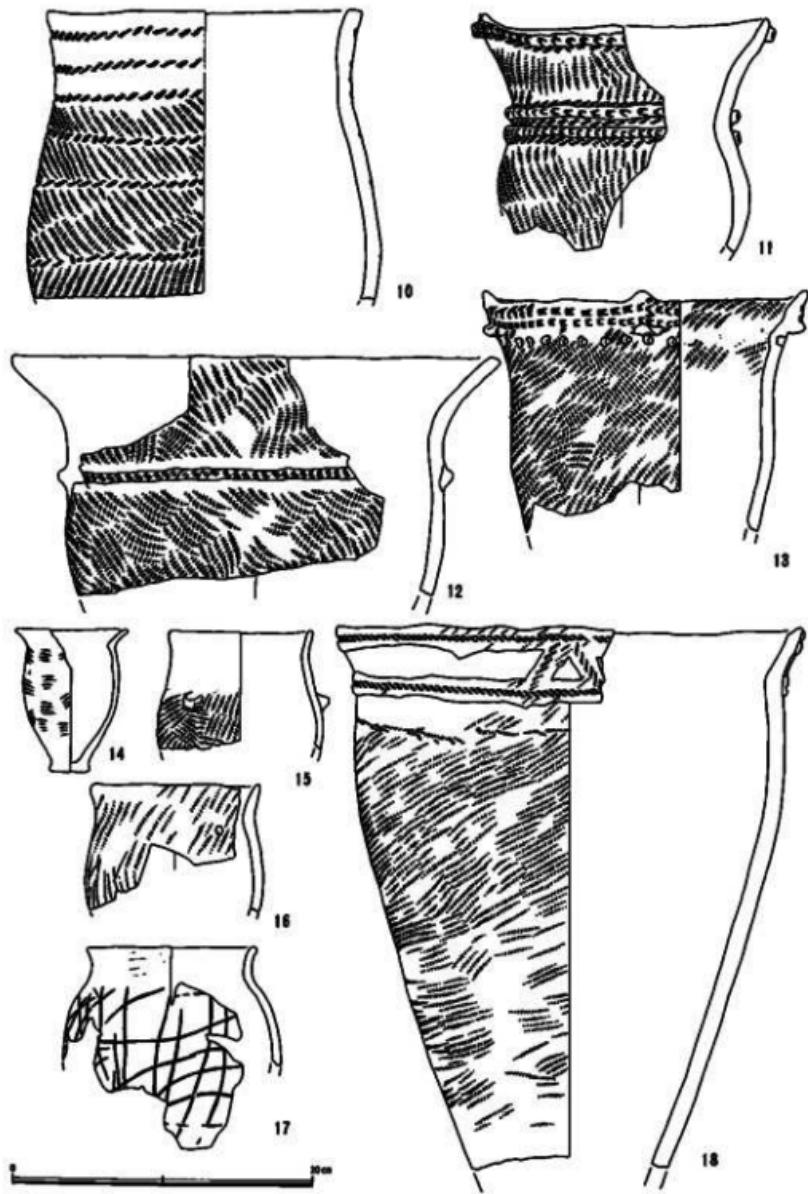


図4-15 包含層出土の土器

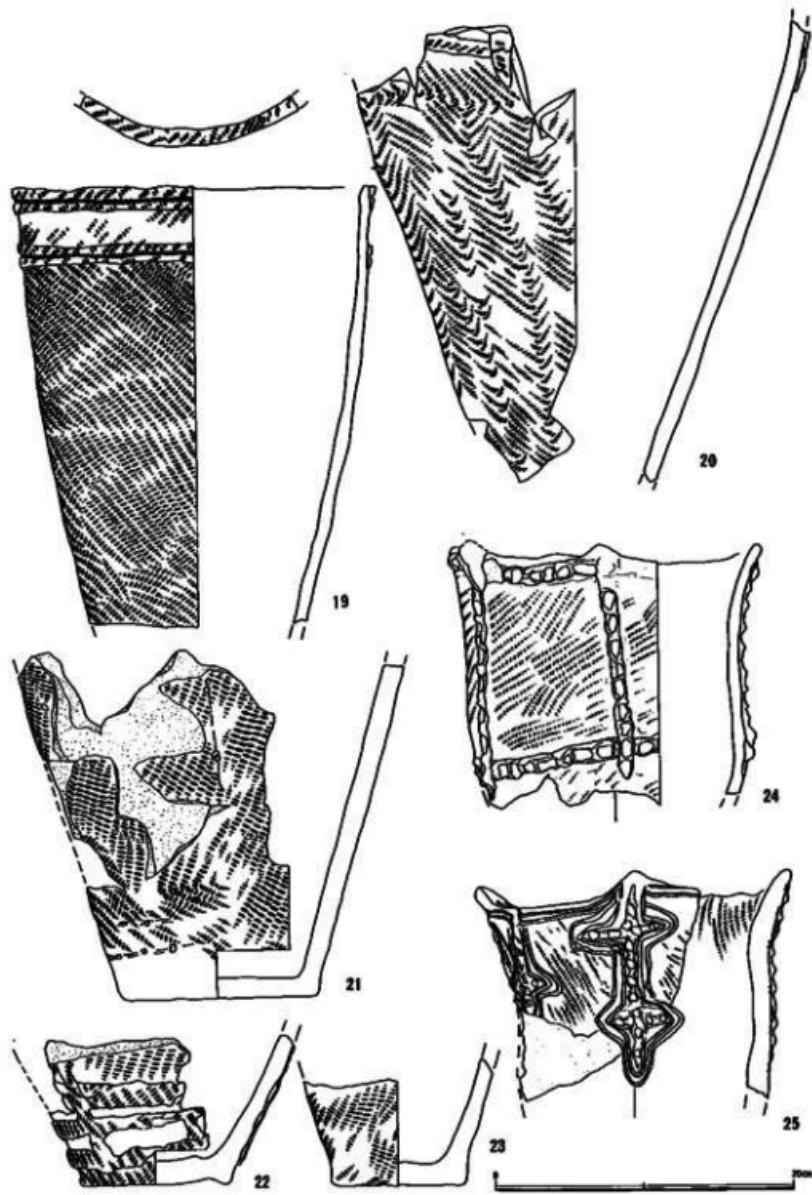


図4-16 包含層出土の土器

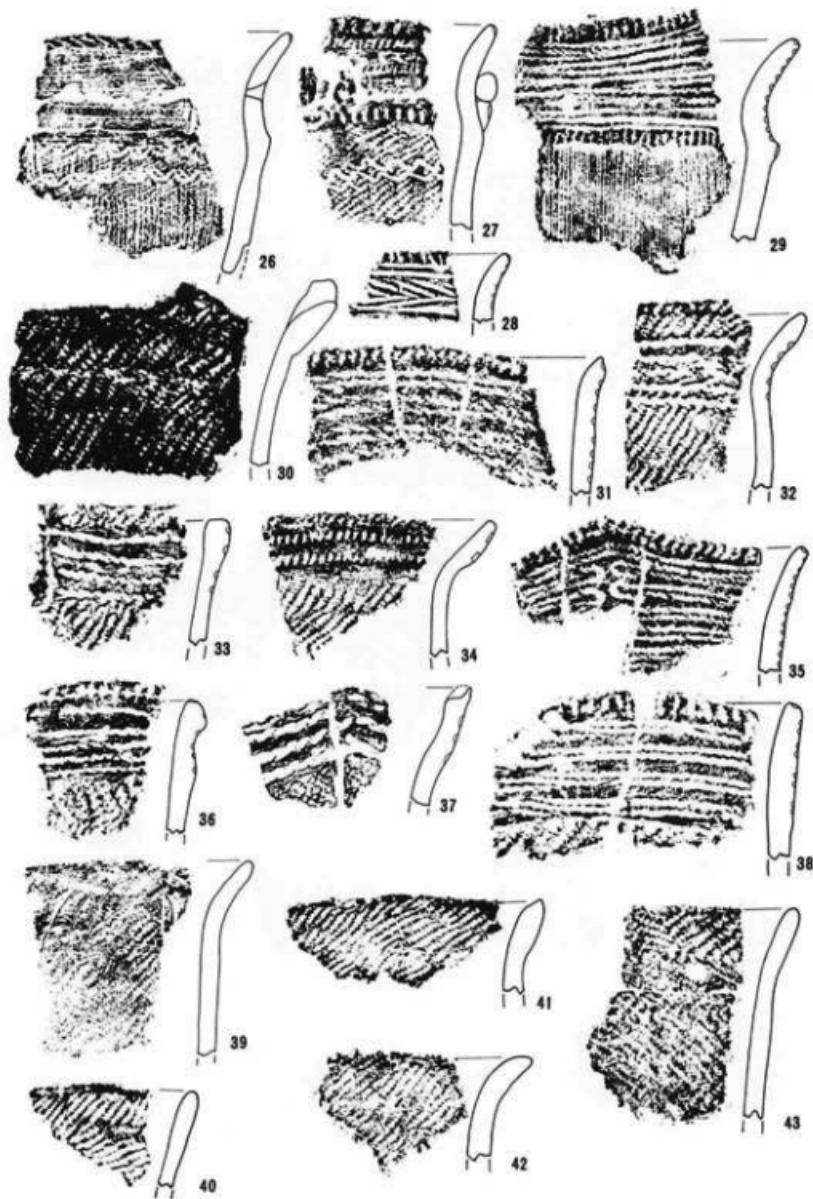


図4-17 包含層出土の土器

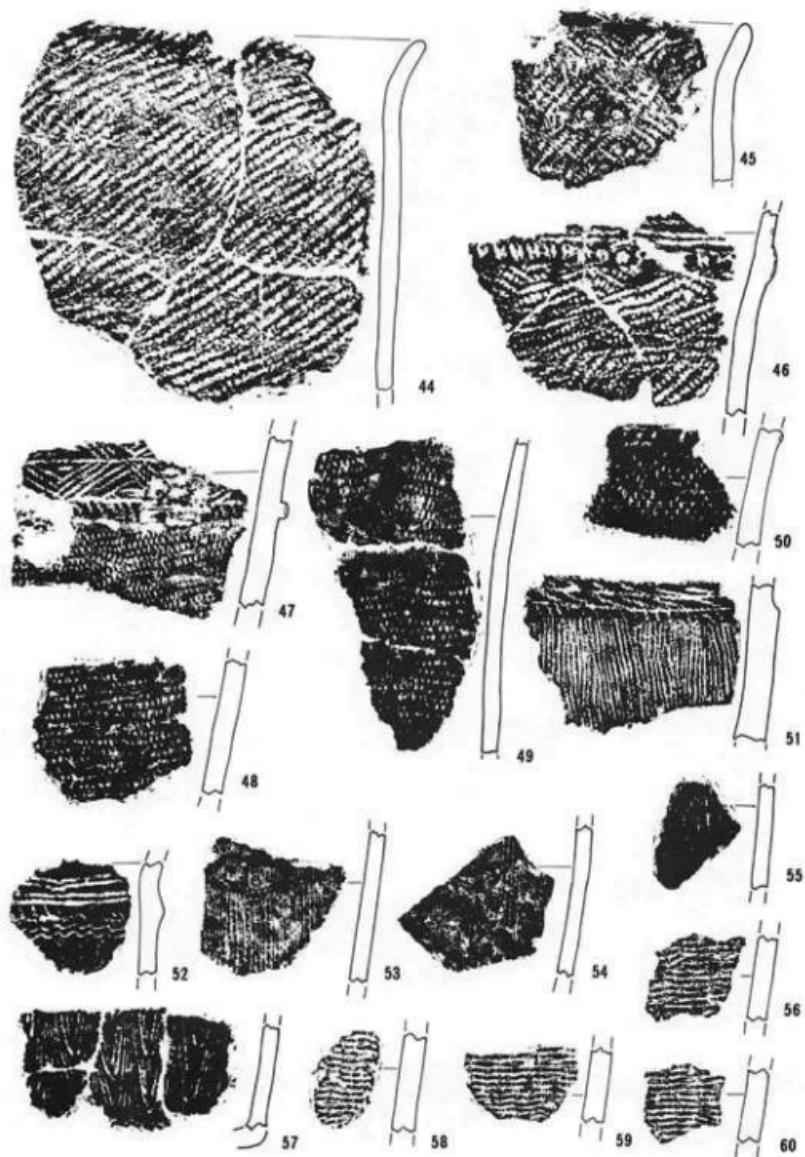


図4-18 包含層出土の土器

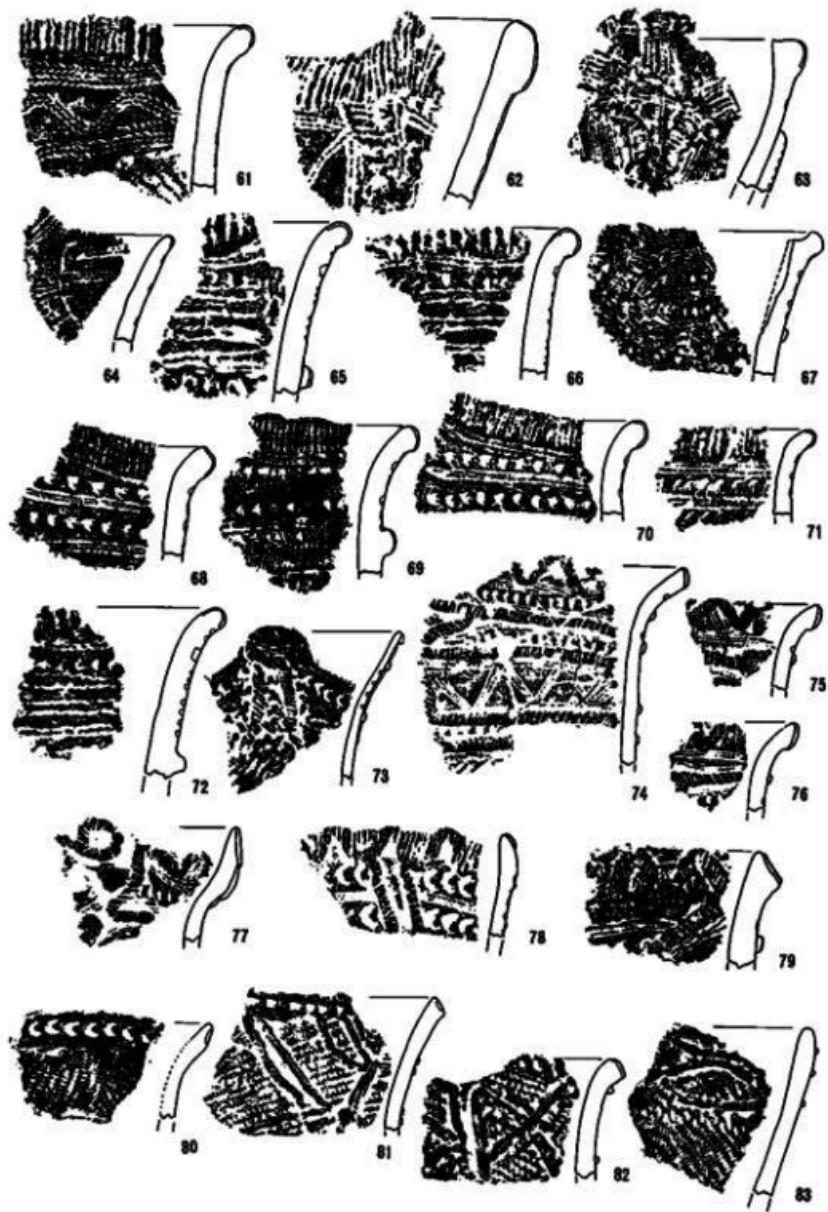


図4-19 包含層出土の土器

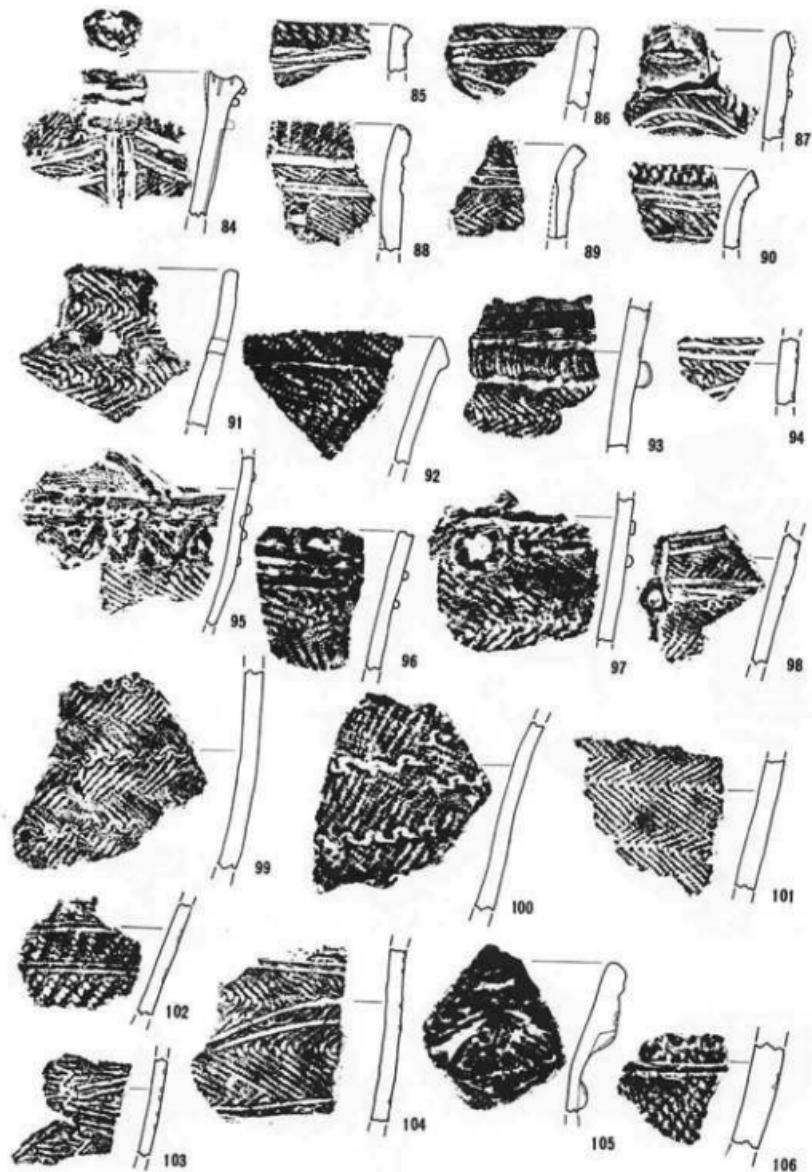


図4-20 包含層出土の土器

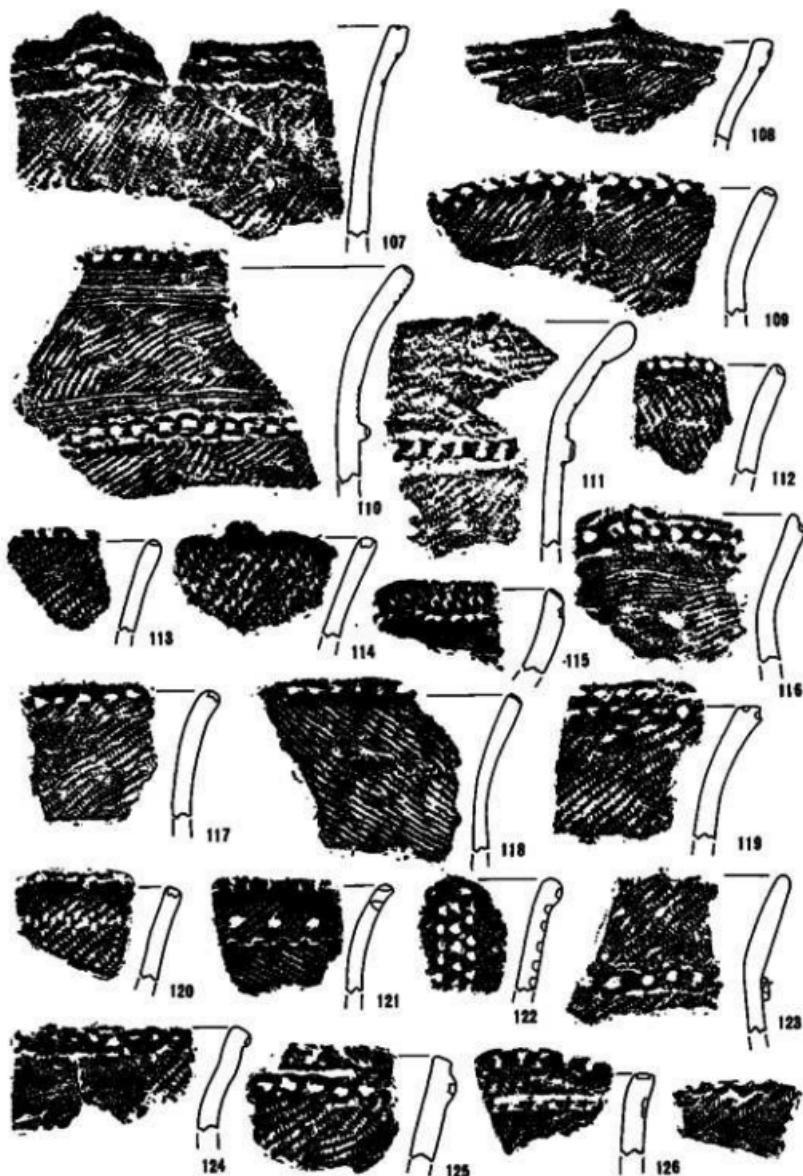


図4-21 包含層出土の土器

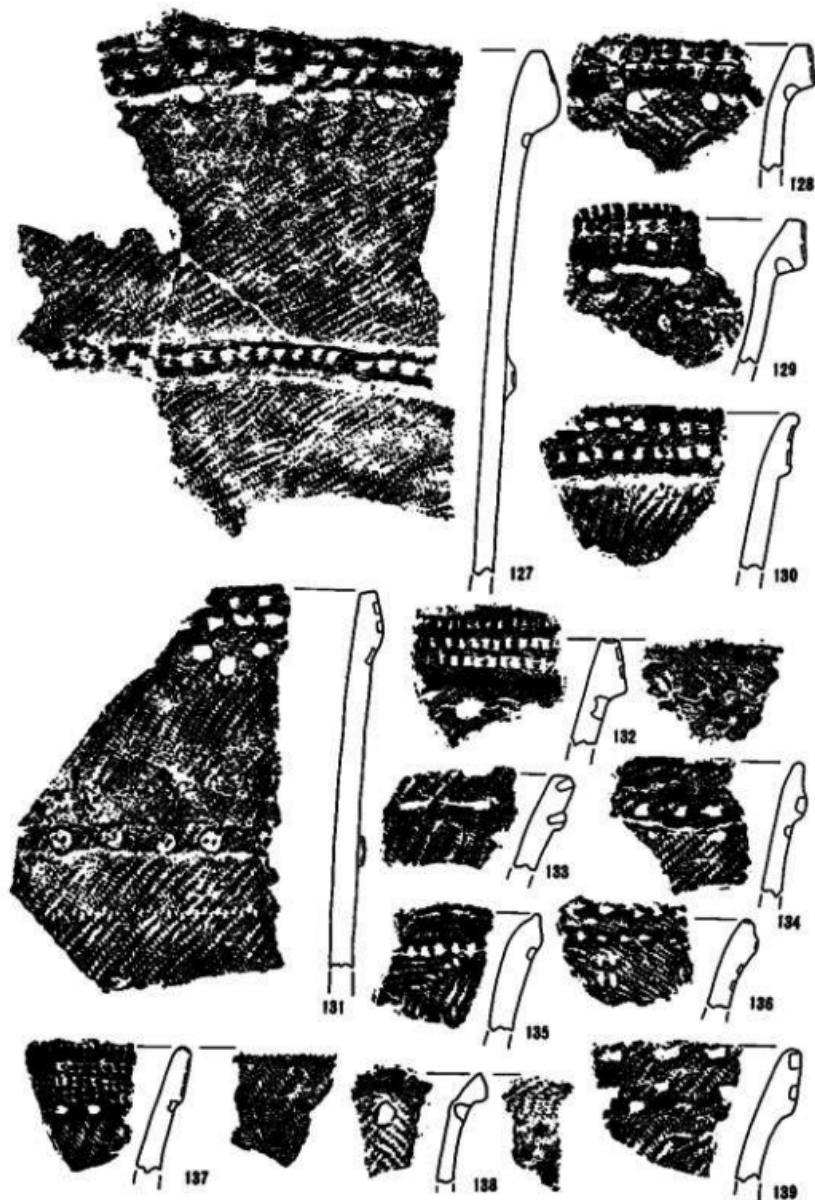


図4-22 包含削出土の土器

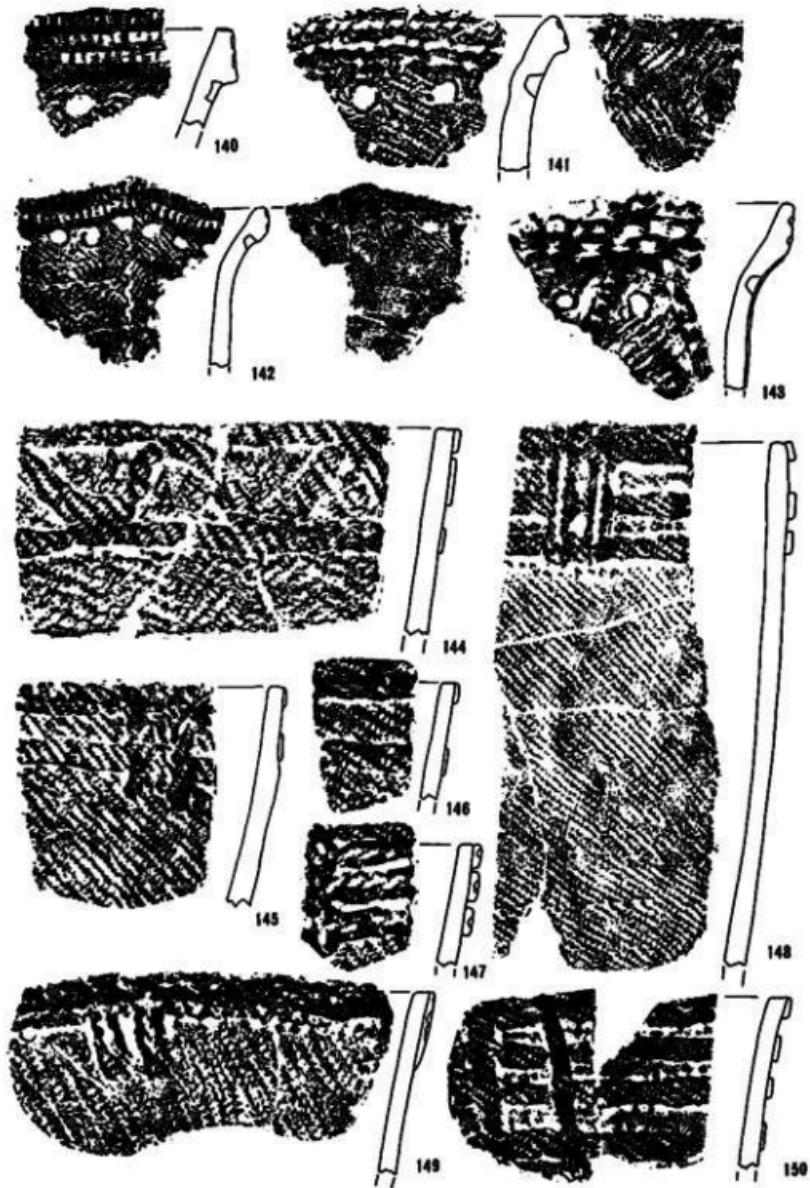


図4-23 包含層出土の土器

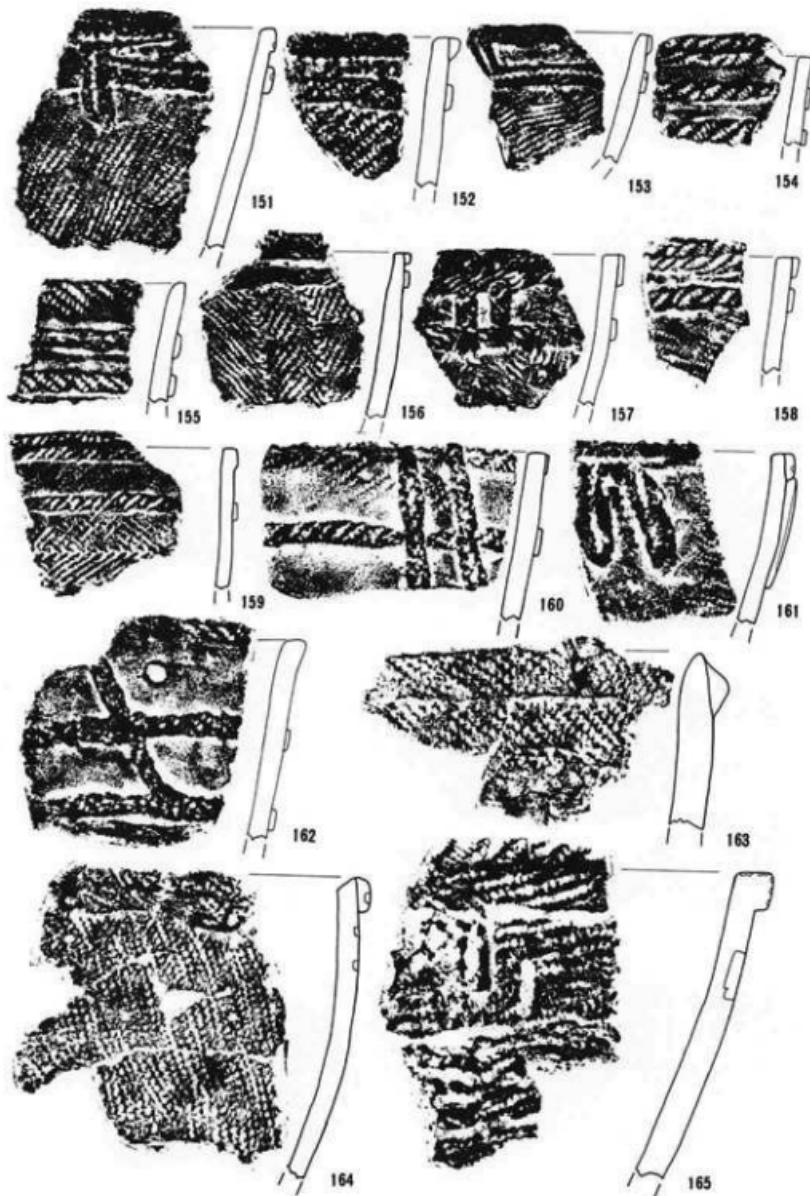


図4-24 包含層出土の土器

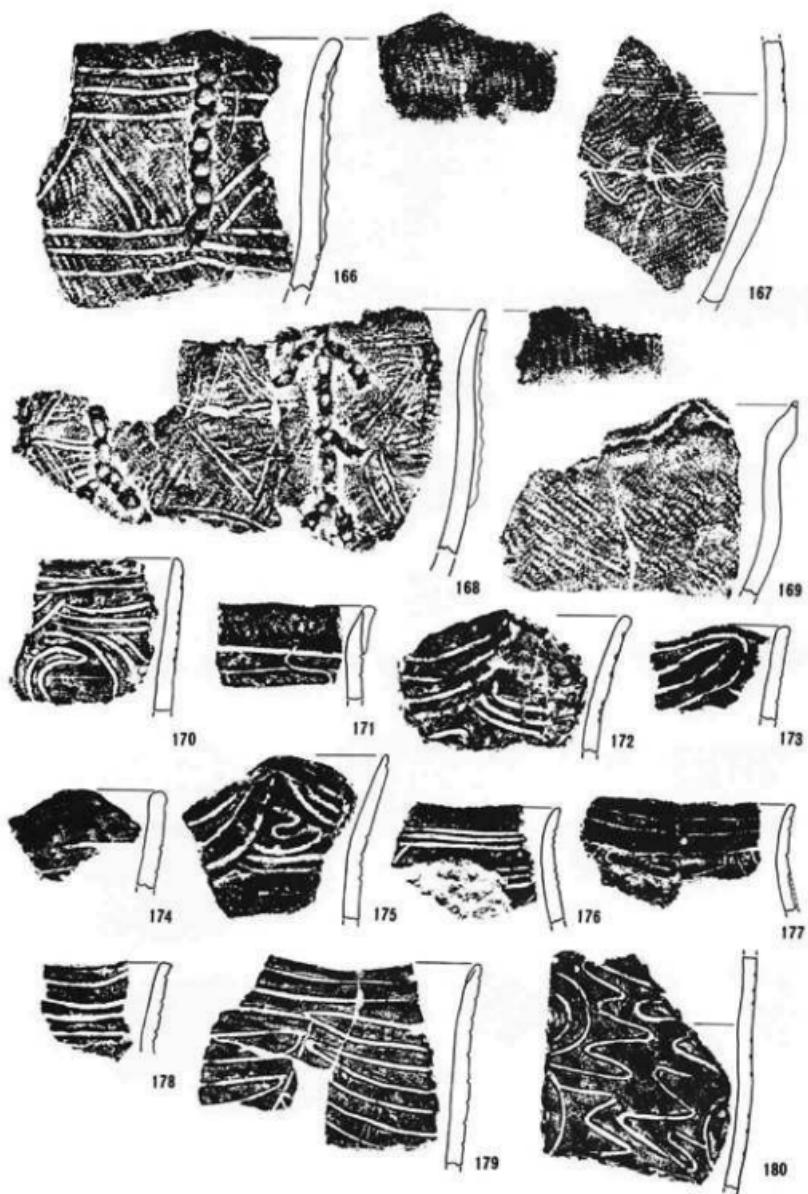


図4-25 包含層出土の土器

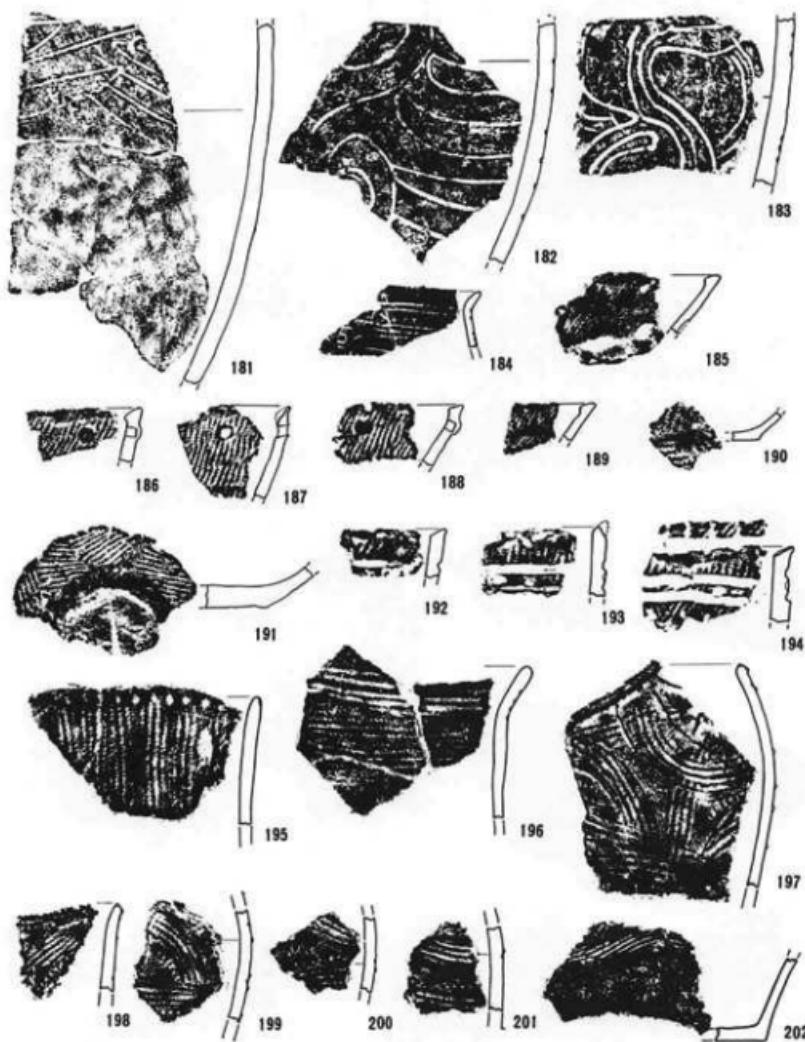


図 4-26 包含層出土の土器

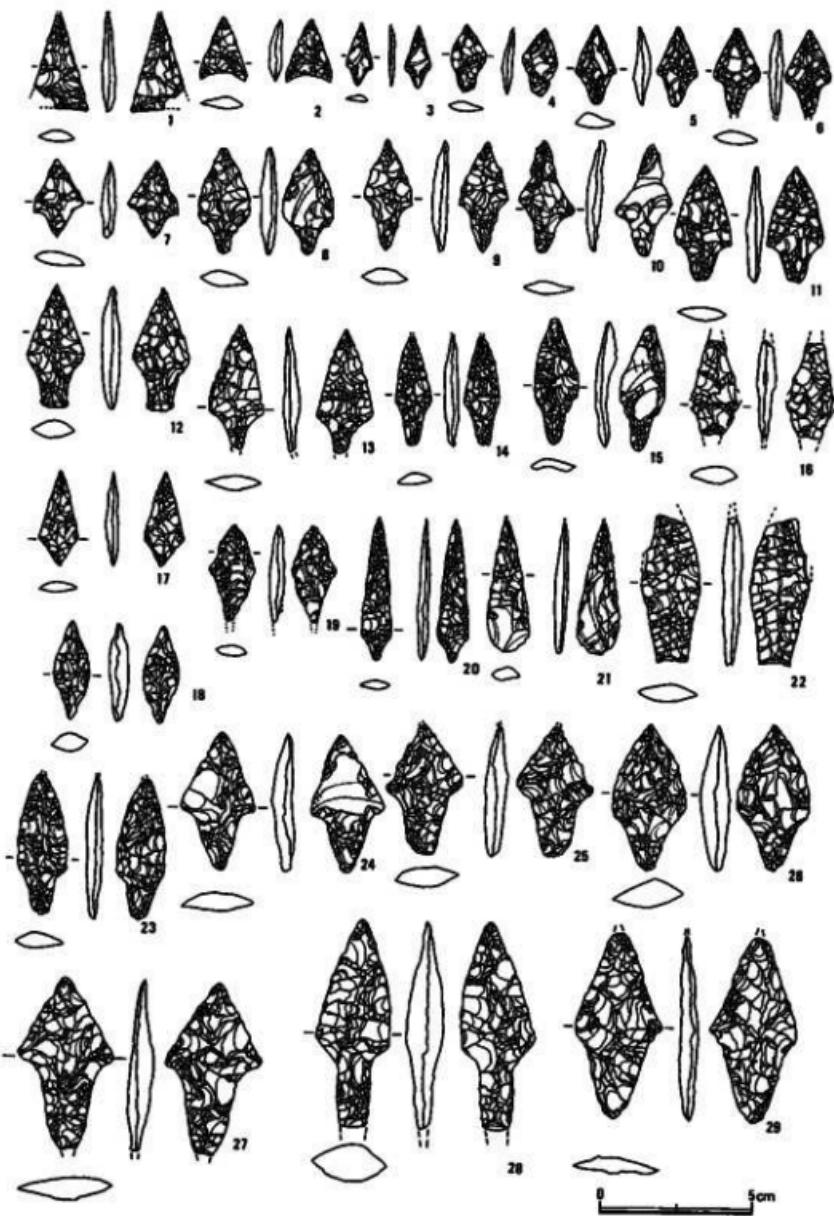


図4-27 包含層出土の石器

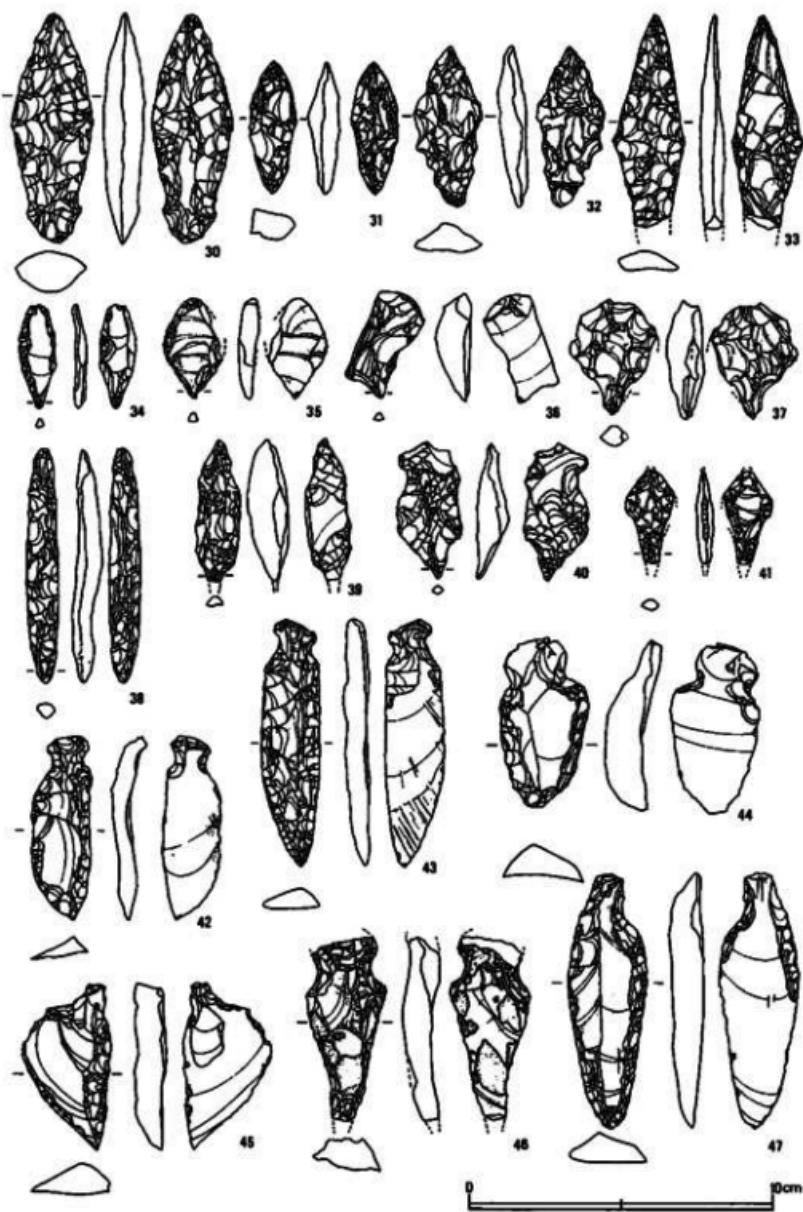


図4-28 包含層出土の石器

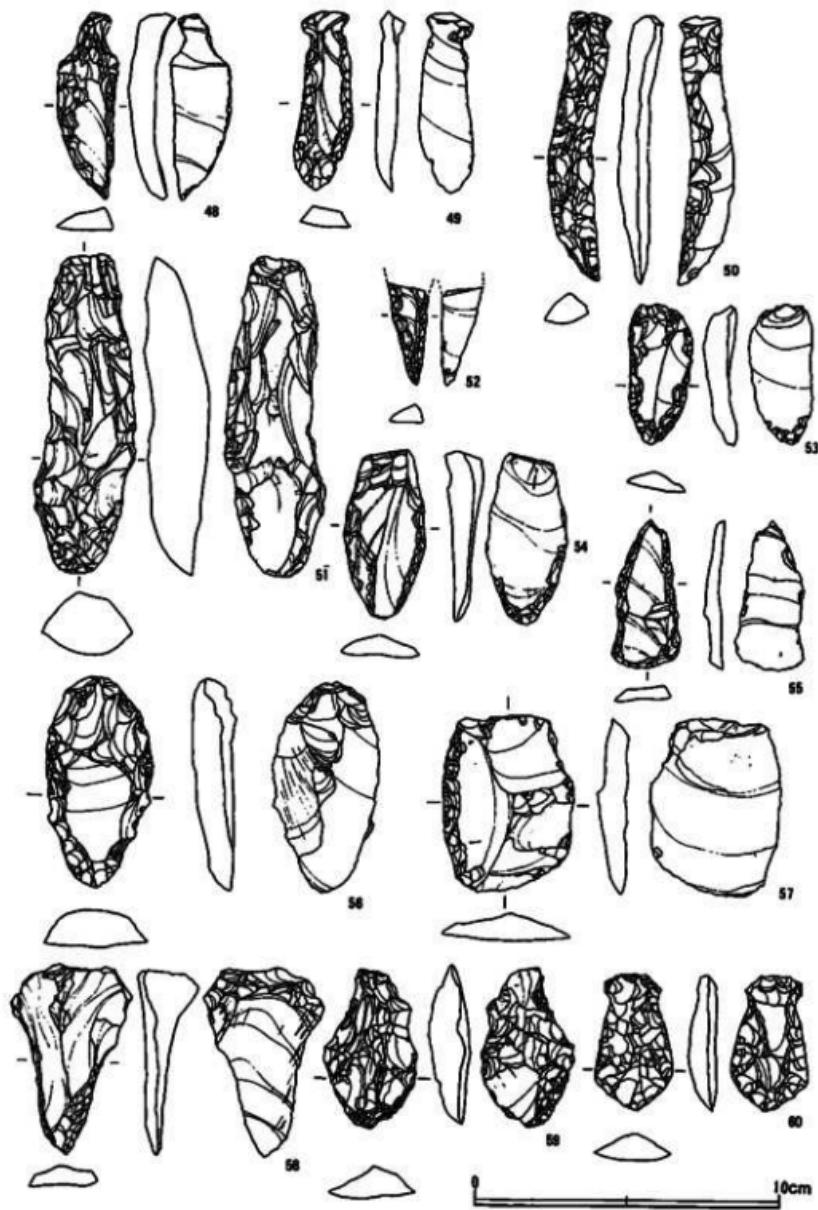


図4-29 包含層出土の石器

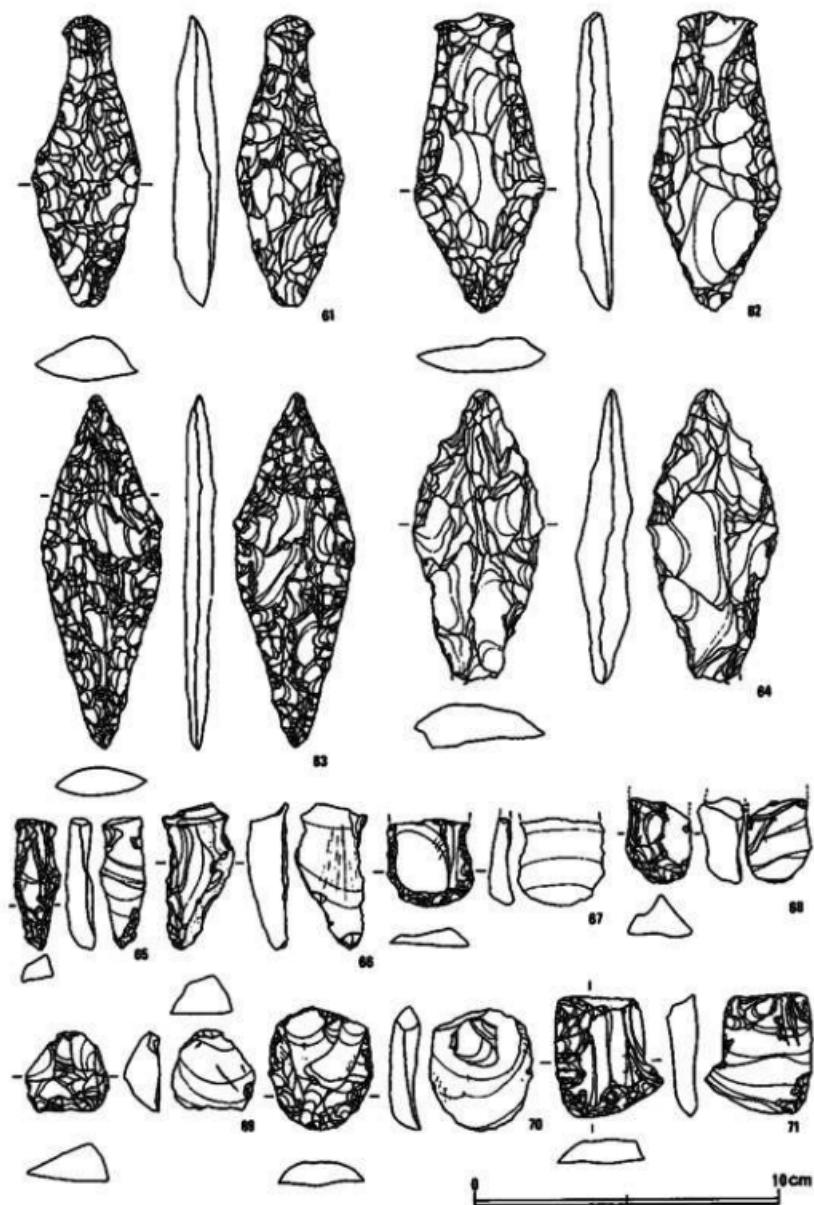


図4-30 包含層出土の石器

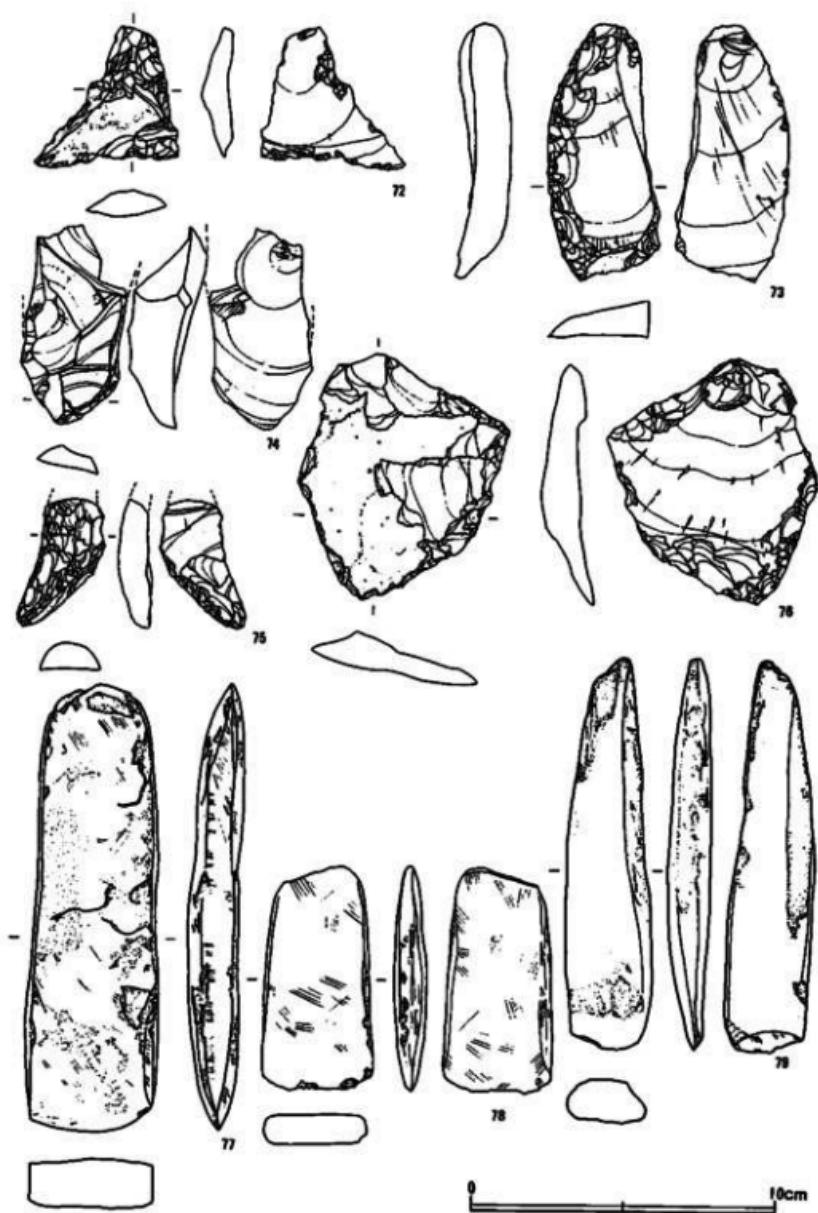


図4-31 包含層出土の石器

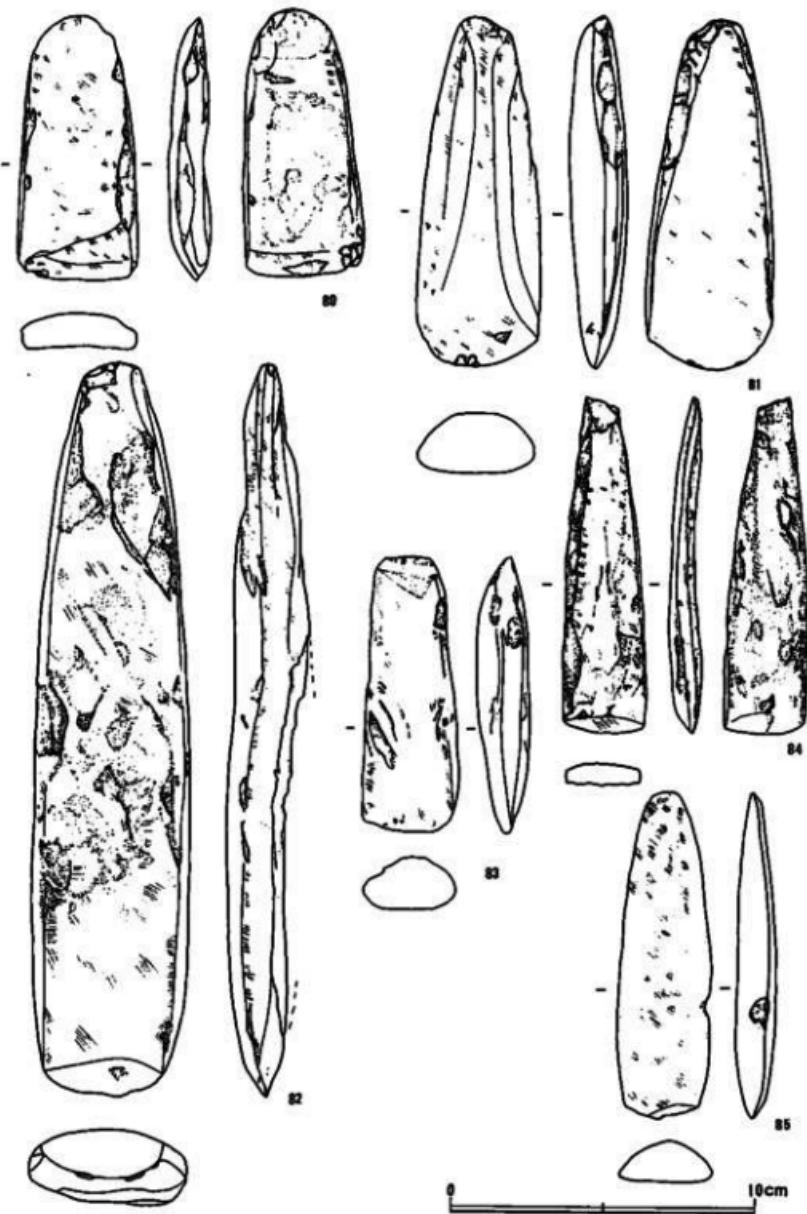


図4-32 包含層出土の石器

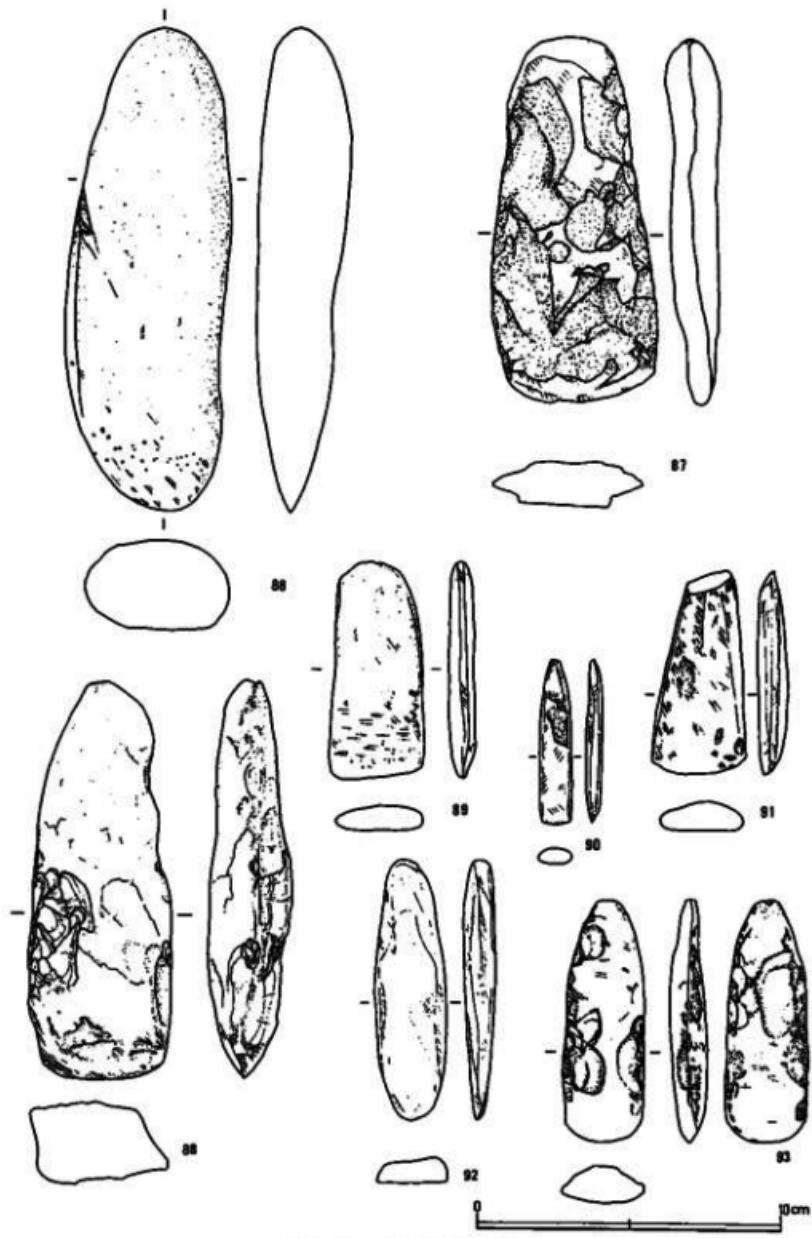


図4-33 包含層出土の石器

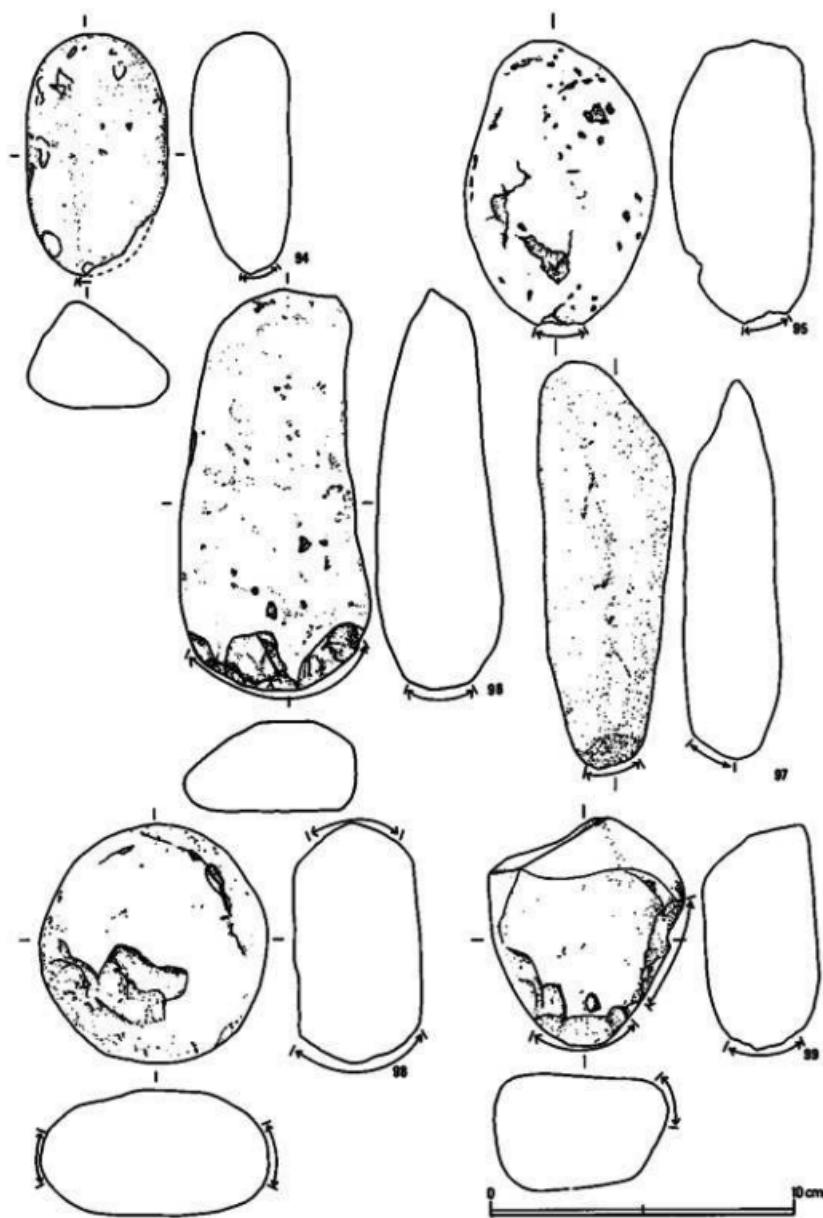


図4-34 包含層出土の石器

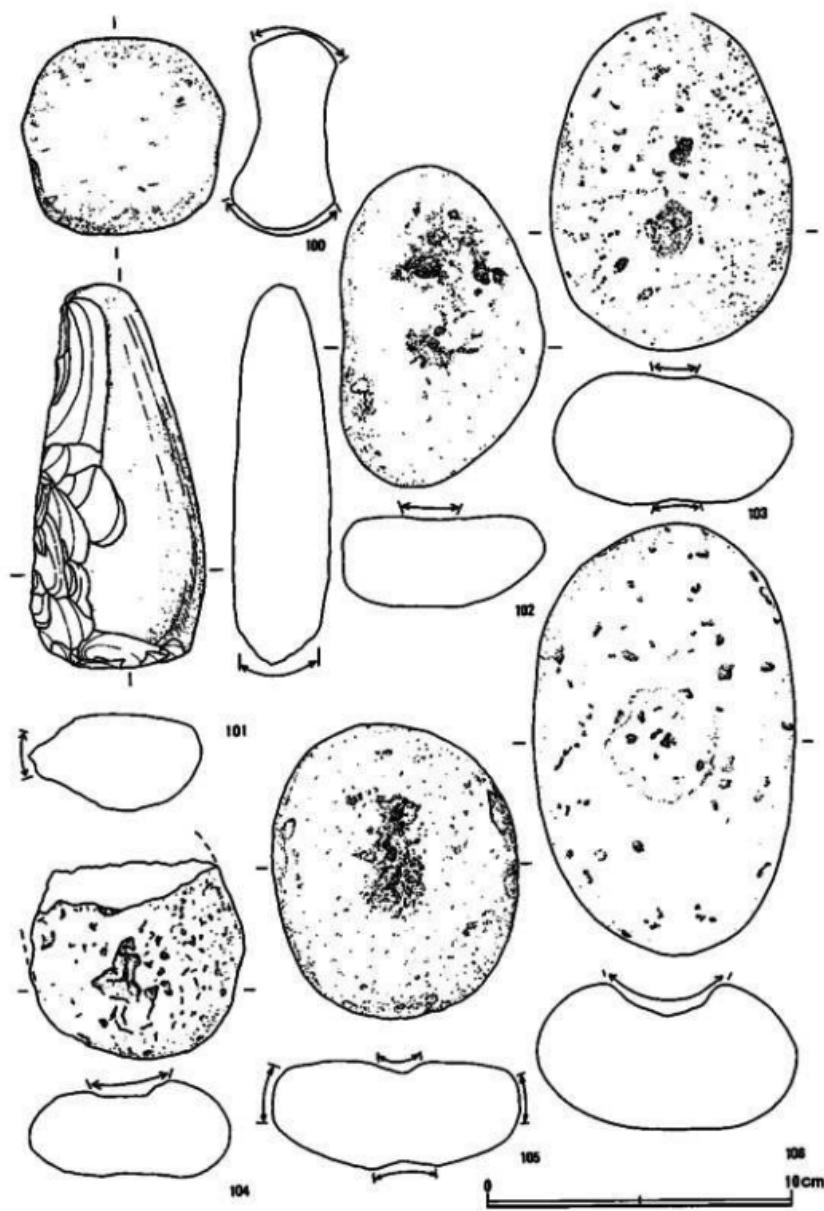


図4-35 包含層出土の石器

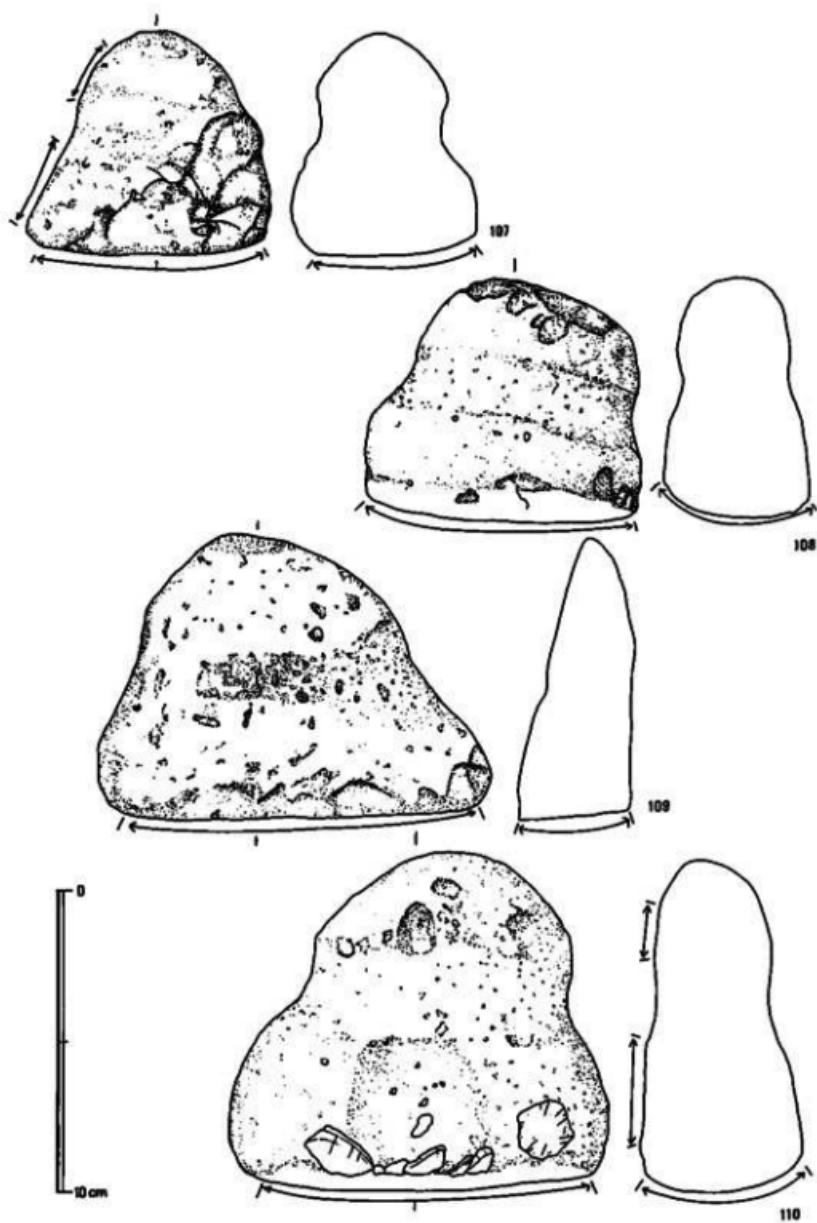


図4-36 包含層出土の石器

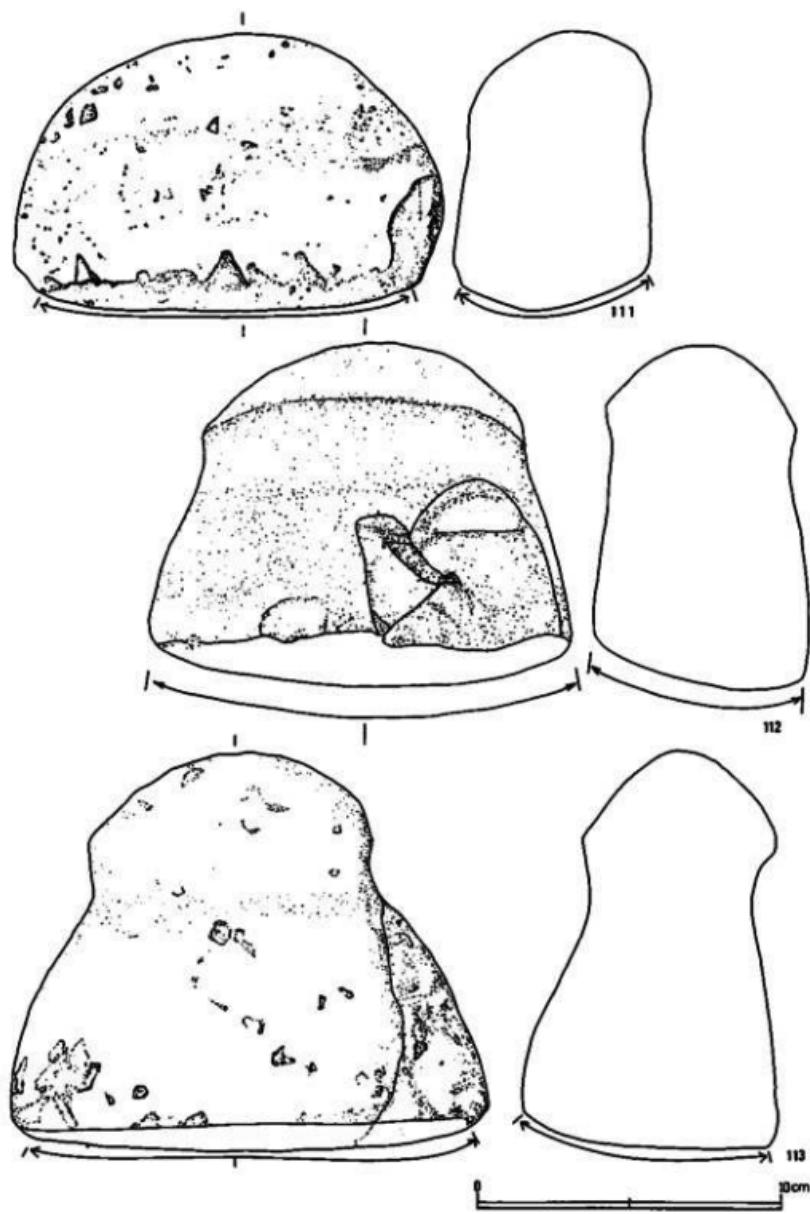
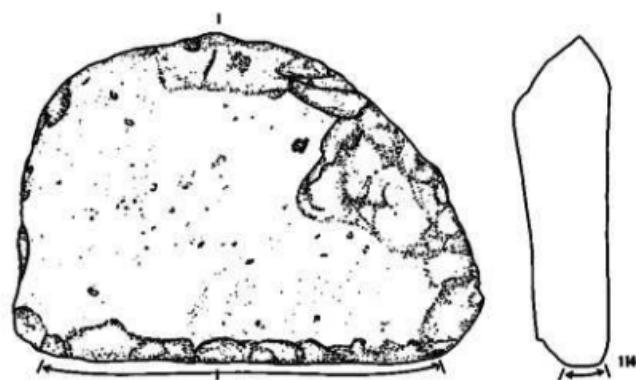
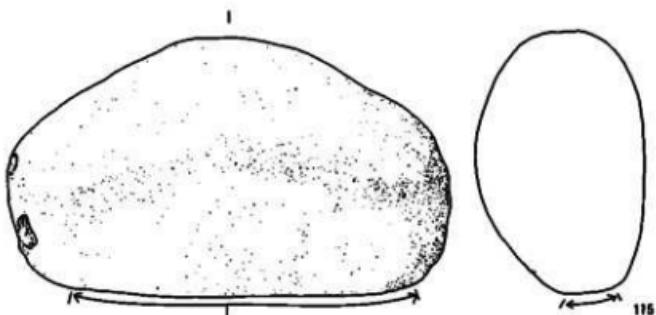


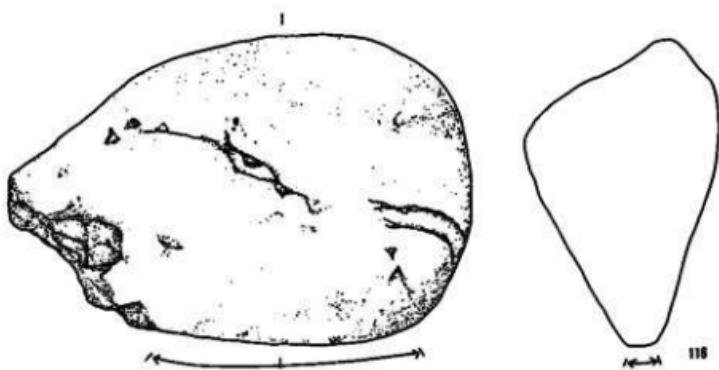
図4-37 包含層出土の石器



114



115



116



図4-38 包含層出土の石器

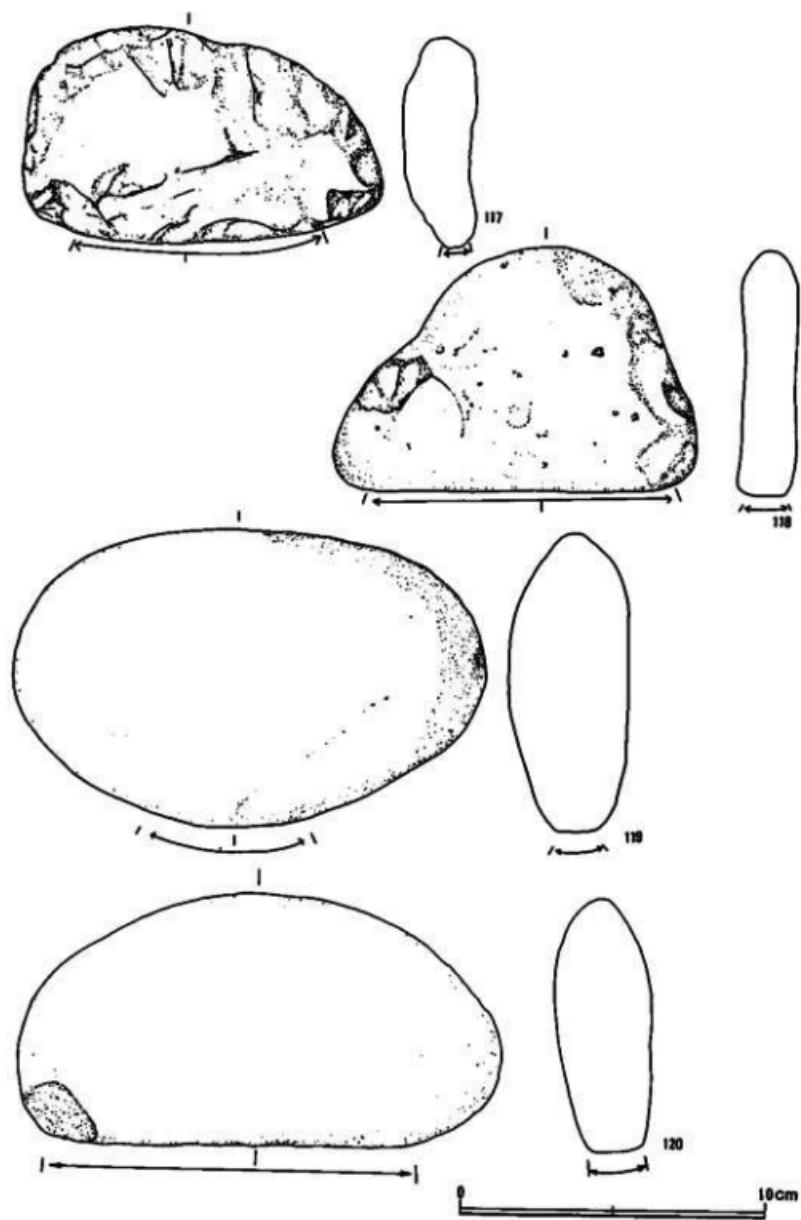


図4-39 包含層出土の石器

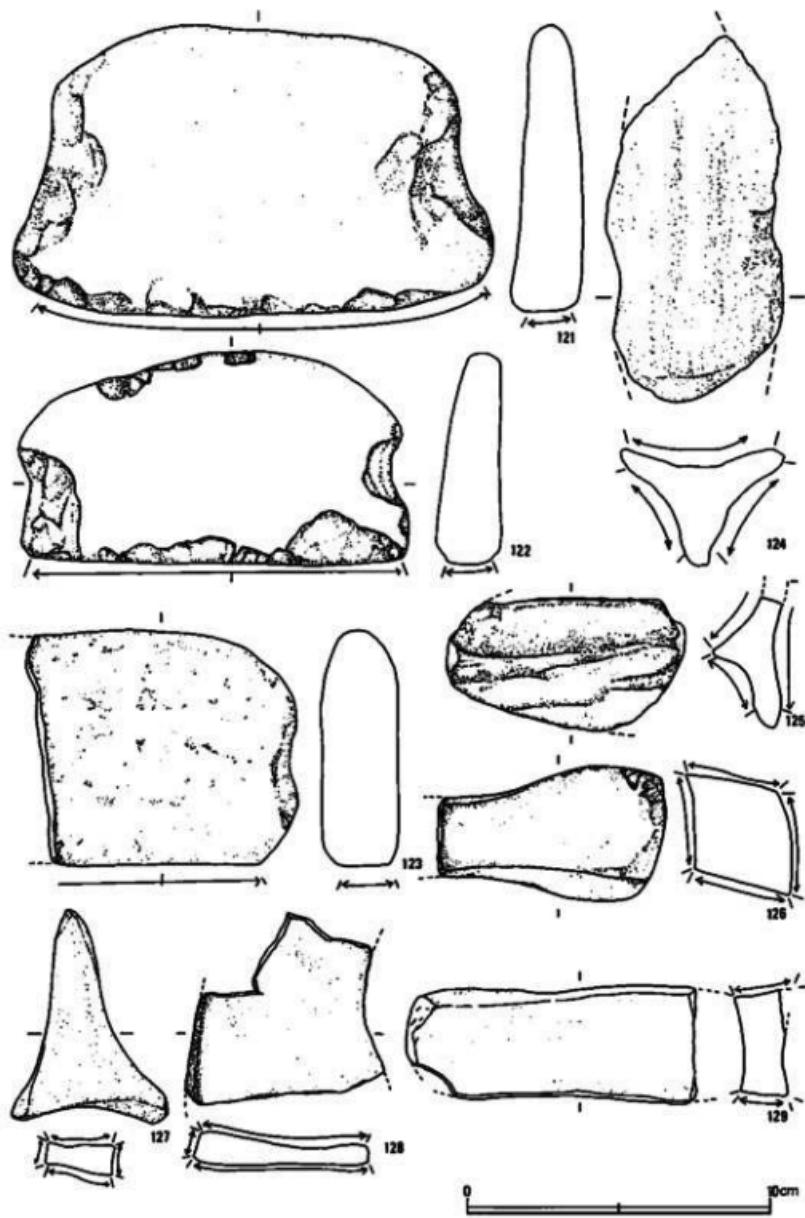


図4-40 包含層出土の石器

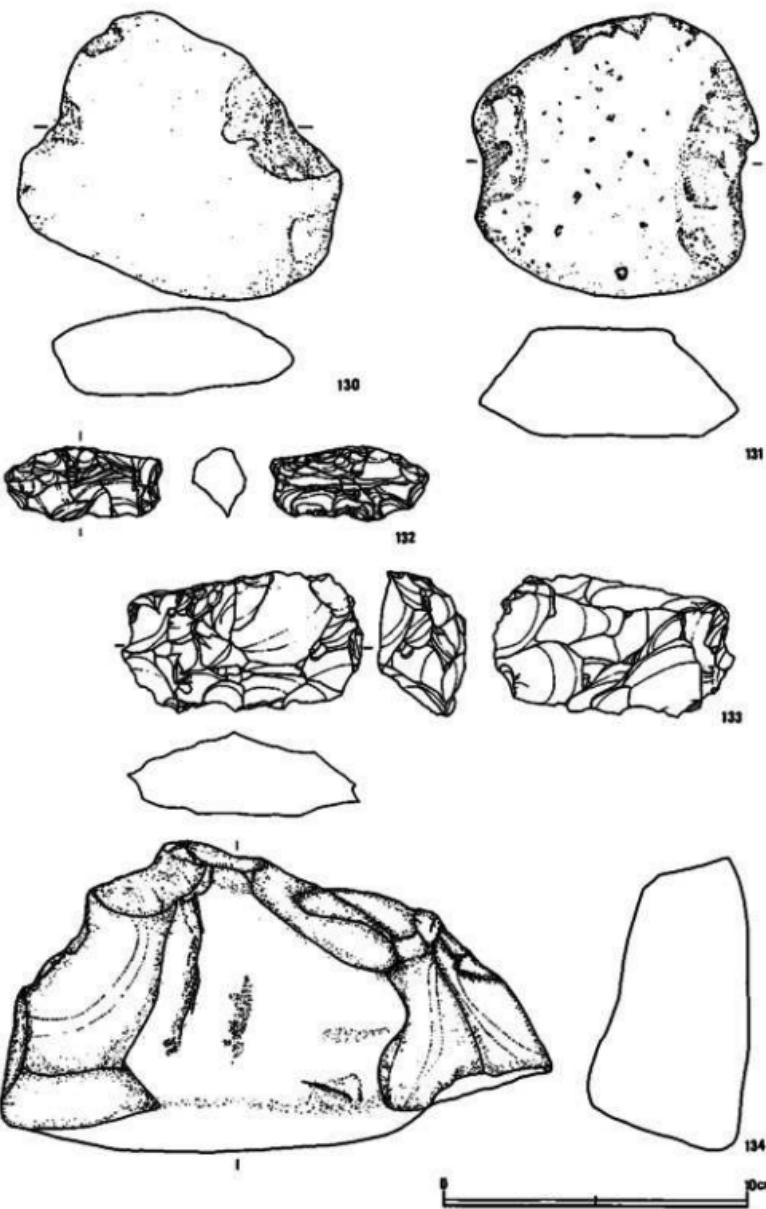


図4-41 包含層出土の石器

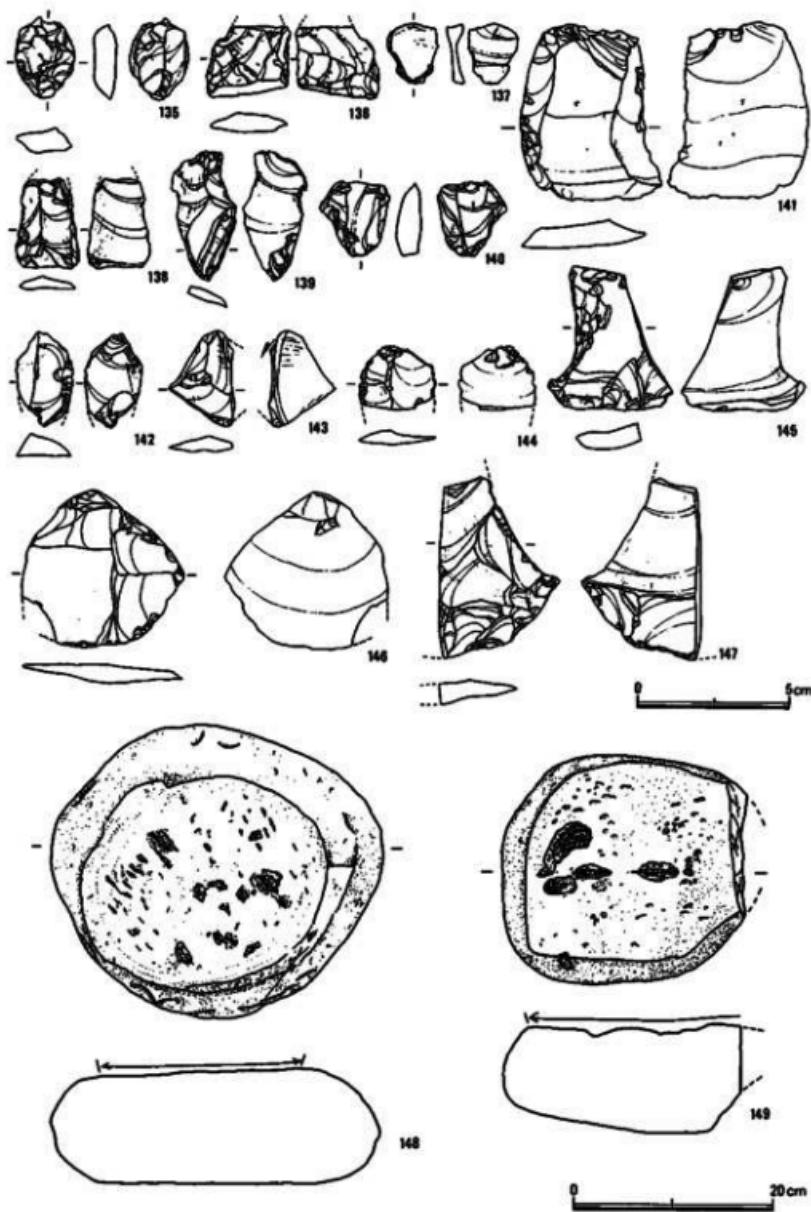


図4-42 包含層出土の石器

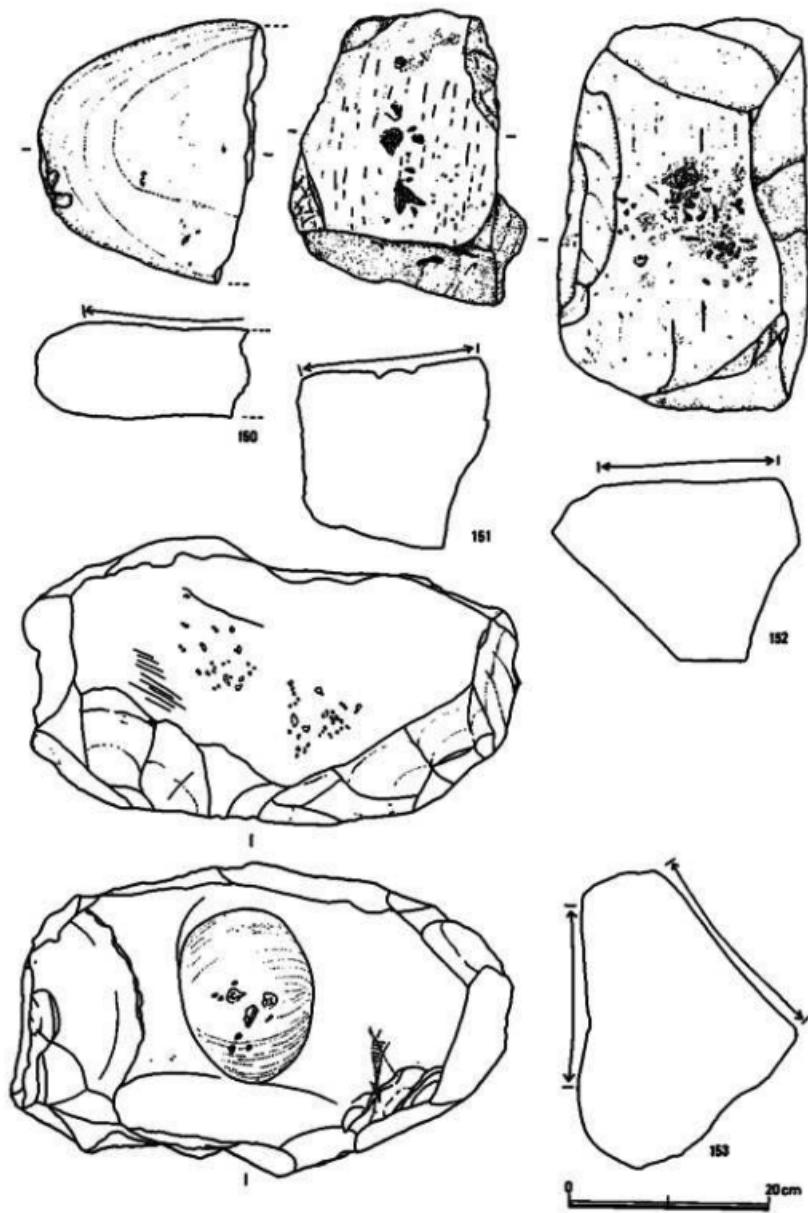
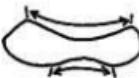
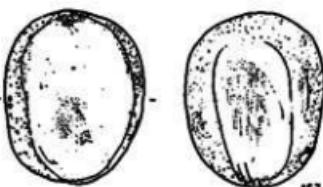
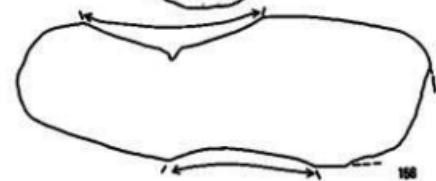
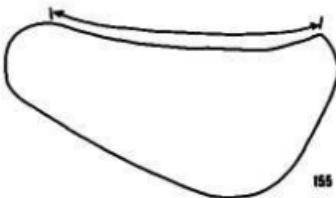
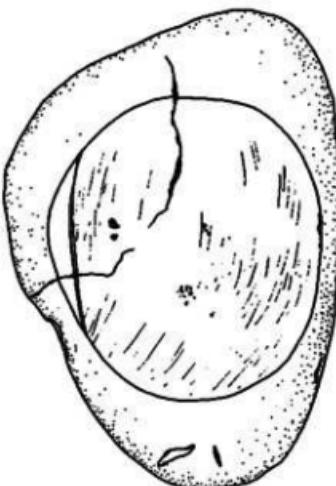
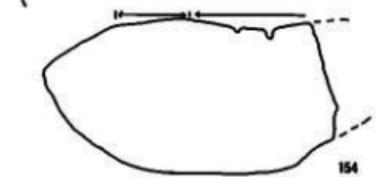
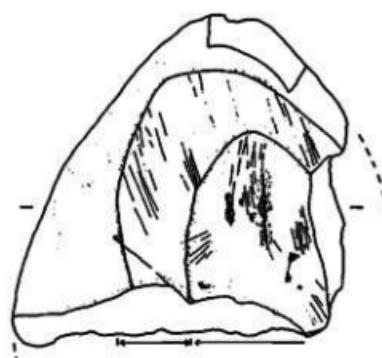


図4-43 包含層出土の石器



0 20 cm

図4-44 包含層出土の石器

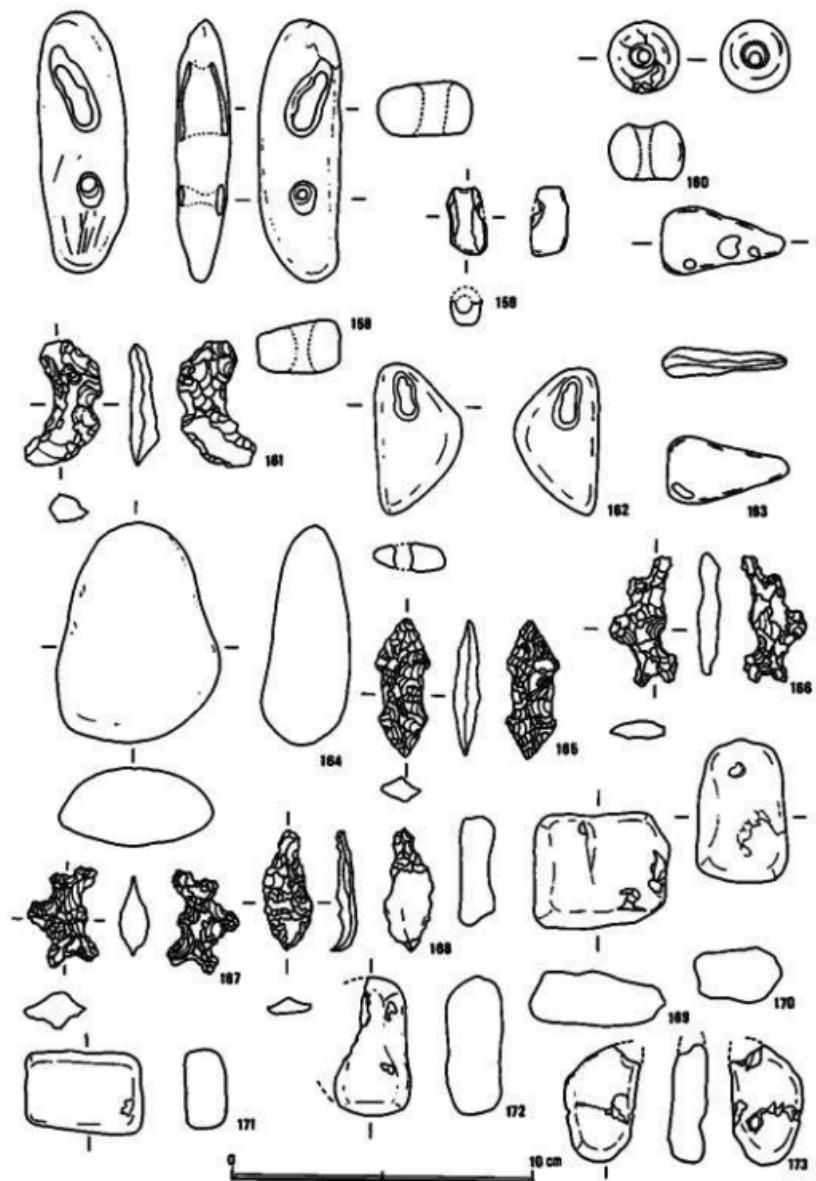


図4-45 包含層出土の石器

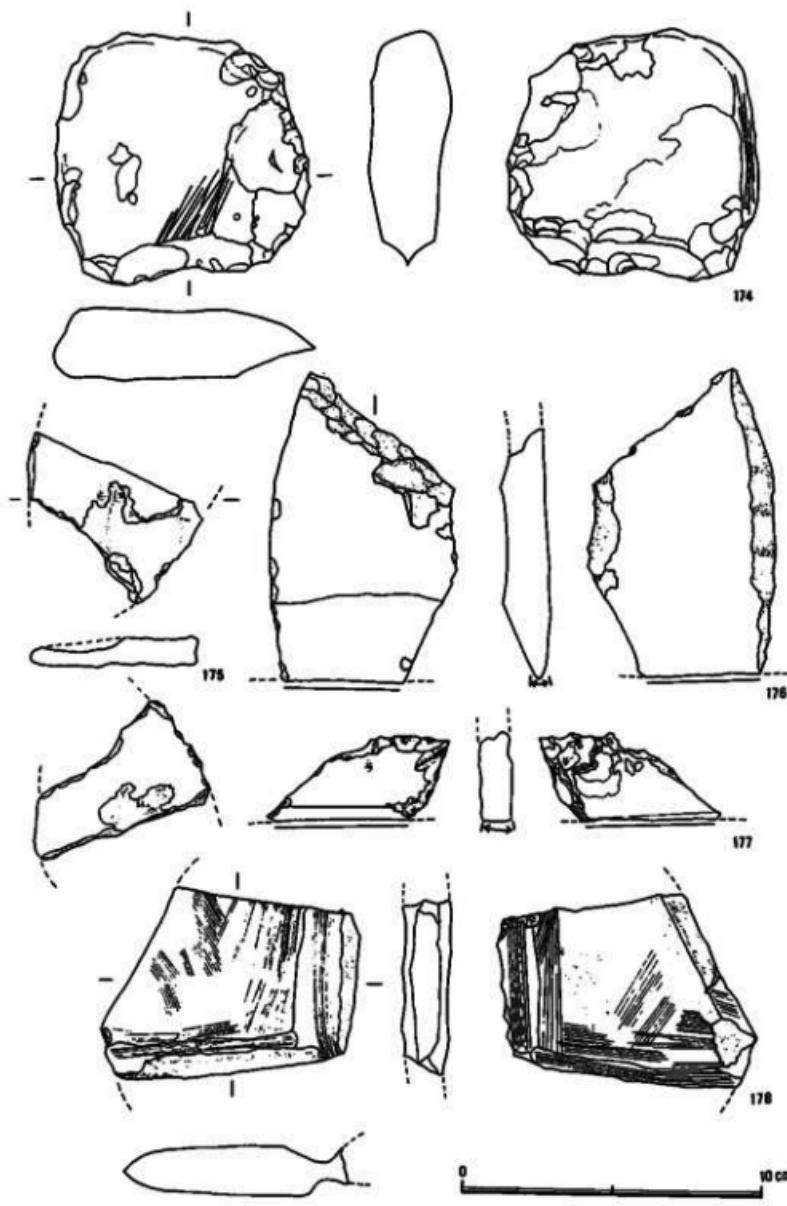


図4-46 包含層出土の石器等

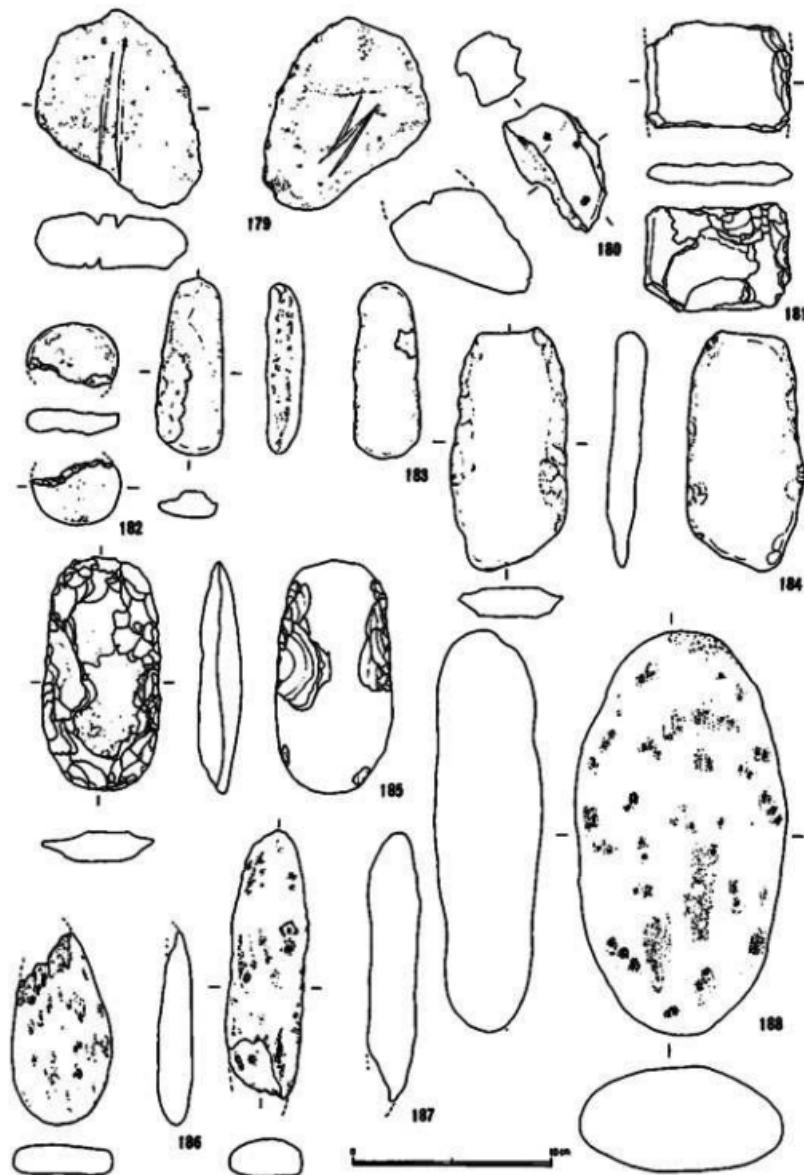


図4-47 包含層出土の石器等

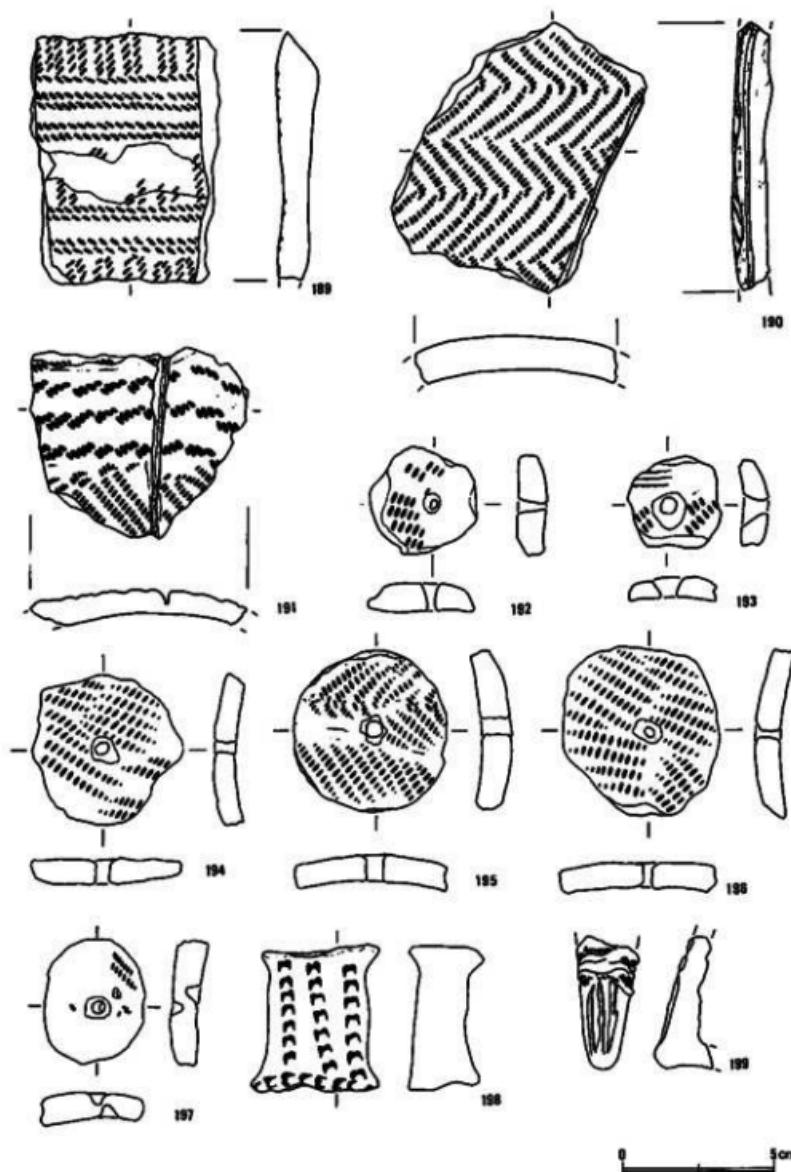


図4-48 すり切り痕のある土器片と土製品

表4-7 図示した包含層出土の土器

編番号	名称	分類	発掘区	層位	写真番号	編番号	名称	分類	発掘区	層位	写真番号
1	土器	II b	N-12-d			51	土器	II b	M-8-b	IV	
2	"	III a	M-12-c	IV	図版4の8-1	52	"	"	K-7-b	IV	
3	"	"	N-15-a	"	2	53	"	"	N-16-a	IV	
4	"	"	M-16-b		図版4の9-2	54	"	"	N-15-d	IV	
5	"	"	M-16-c	IV	図版4の8-3	55	"	"	N-15-a	III	
6	"	"	M-15-a	IV	図版4の9-1	56	"	"	M-6-a	IV	図版4の12-12
7	"	"	K-7-b	"	3	57	"	"	M-8-c	III	
8	"	"	M-14-b	"	4	58	"	"	M-6-d	IV	図版4の12-14
9	"	"	M-15-c	IV	図版4の8-4	59	"	"	M-8-b	IV	11
10	"	III b-2	K-6-c	IV		60	"	"	N-7-d	IV	10
11	"	"	N-9-d			61	"	III a	M-13-d	IV	
12	"	"	N-6-c	IV		62	"	"	M-7-d	IV	
13	"	III b-3	L-12-b	IV	図版4の10-3	63	"	"	N-10-a	IV	
14	"	III b-2	L-8-b			64	"	"	L-7-c	IV	
15	"	"	L-12-b	IV	図版4の10-4	65	"	"	L-13-b	IV	
16	"	IV a	L-8-d	IV		66	"	"	L-13-b	IV	図版4の13-2
17	"	"	M-12-b	IV		67	"	"	M-13-d	IV	
18	"	"	K-12-c	IV	図版4の11-2	68	"	"	N-15-a	III	
19	"	"	L-11-d	IV	" 1	69	"	"	N-13-a	IV	図版4の13-1
20	"	"	K-6-c	IV	" 3	70	"	"	M-15-b	IV	
21	"	"	M-6-a,c			71	"	"	M-7-c	IV	
22	"	"	N-6-c			72	"	"	L-13-c	IV	
23	"	"	N-8-a	IV		73	"	"	M-13-a	IV	図版4の13-9
24	"	"	L-6-c			74	"	"	K-15-c	IV	" 8
25	"	"	M-6-d	IV	図版4の11-4	75	"	"	K-15-c	IV	
26	"	II b	M-14-b	III	図版4の12-2	76	"	"	K-15-c	IV	
27	"	"	M-13-c	III		77	"	"	K-15-c	IV	
28	"	"	N-16-a	III	図版4の12-6	78	"	"	K-13-b	IV	図版4の13-7
29	"	"	L-12-c	III	図版4の12-1	79	"	"	K-11-b	IV	" 6
30	"	"	"	IV		80	"	"	L-8-c	IV	" 10
31	"	"	M-14-b		図版4の12-4	81	"	"	M-11-e	IV	
32	"	"	K-14-c	IV	" 8	82	"	"	L-11-b	IV	図版4の13-13
33	"	"	M-14-b	IV		83	"	"	L-7-c	IV	
34	"	"	M-13-a	IV		84	"	"	M-10-b	IV	図版4の14-5
35	"	"	M-15-c	IV	図版4の12-5	85	"	"	K-7-d		
36	"	"	M-15-a	IV	" 7	86	"	"	L-7-c	IV	
37	"	"	N-15-d			87	"	"	M-11-d	IV	図版4の14-9
38	"	"	L-13-a	IV	図版4の12-3	88	"	"	M-10-b	IV	
39	"	"	"	IV		89	"	"	M-10-c	III	
40	"	"	M-10-b	IV		90	"	"	L-14-b	IV	図版4の14-3
41	"	"	L-12-a	IV		91	"	"	M-9-d	IV	
42	"	"	M-15-a	IV		92	"	"	M-8-b	IV	図版4の13-11
43	"	"	M-13-a	IV		93	"	"	M-15-d	IV	
44	"	"	M-14-b	IV		94	"	"	L-12-d	IV	
45	"	"	N-9-a	IV		95	"	"	N-9-a	IV	図版4の13-15
46	"	"	M-5-c	IV		96	"	"	L-13-b	IV	
47	"	"	M-10-c	IV		97	"	"	L-11-b	IV	
48	"	"	M-14-b	IV		98	"	"	N-8-a	IV	図版4の14-10
49	"	"	N-15-a	IV		99	"	"	M-12-b	III	
50	"	"	M-15-b	IV		100	"	"	M-11-a	IV	

番号	名称	分類	発掘区	層位	写真番号	番号	名称	分類	発掘区	層位	写真番号
101	土器	田 a	N - 13 - a	IV		152	土器	W a	M - 8 - b	IV	
102	"	"	"	図版4の15-6	153	"	"	K - 12 - c	IV		
103	"	"	M - 8 - b	IV	図版4の14-12	154	"	"	M - 10 - c	IV	
104	"	"	M - 15 - c	IV		155	"	"	L - 6 - c	IV	
105	"	田 b - 1	M - 11 - a	IV	図版4の14-13	156	"	"	M - 7 - c	焼土	
106	"	"	L - 12 - b	IV	" 14	157	"	"	M - 9 - d	IV	図版4の18-13
107	"	"	N - 12 - d	IV	図版4の15-4	158	"	"	M - 10 - c	IV	
108	"	"	"	図版4の16-11	159	"	"	M - 11 - c			
109	"	"	M - 8 - d	IV		160	"	"	N - 13 - d	IV	
110	"	"	M - 15 - c	IV	図版4の14-16	161	"	"	M - 9 - d	IV	
111	"	"	L - 8 - d	IV		162	"	"	M - 7 - a	IV	
112	"	"	K - 6 - b	IV	図版4の15-12	163	"	"	K - 11 - a	IV	図版4の19-3
113	"	"	L - 8 - d	IV		164	"	"	M - 8 - a	IV	" 1
114	"	"	L - 8 - c	IV		165	"	"	L - 6 - c	IV	図版4の20-1
115	"	"	M - 15 - c	IV		166	"	"	M - 9 - a	IV	" 2
116	"	"	M - 14 - b	IV	図版4の15-1	167	"	"	M - 6 - b	IV	" 3
117	"	"	N - 8 - a	IV	図版4の15-8	168	"	"	M - 7 - a	IV	
118	"	"	M - 13 - a	IV		169	"	"	K - 13 - c	IV	図版4の20-6
119	"	"	L - 7 - a	IV	図版4の15-10	170	"	"	K - 11 - b	IV	図版4の21-4
120	"	"	N - 9 - d	IV		171	"	"	N - 13 - d	IV	" 2
121	"	"	M - 13 - b	IV	図版4の14-7	172	"	"	M - 9 - d	IV	
122	"	田 b - 2	L - 7 - c	IV		173	"	"	M - 7 - a	IV	
123	"	"	L - 8 - a	IV	図版4の15-9	174	"	"	K - 11 - a	IV	
124	"	"	M - 13 - a	IV	図版4の15-4	175	"	"	M - 8 - a	IV	
125	"	田 b - 1	M - 9 - d	IV	" 9	176	"	"	L - 6 - c	IV	図版4の21-5
126	"	"				177	"	"	M - 9 - a	IV	
127	"	田 b - 3	M - 10 - a	IV		178	"	"	M - 6 - b	IV	図版4の21-1
128	"	"	M - 13 - b	IV	図版4の17-2	179	"	"	M - 7 - a	IV	" 3
129	"	"	M - 13 - b	IV	" 5	180	"	"	K - 13 - c	IV	" 6
130	"	"	M - 14 - b	IV	" 17	181	"	"	L - 6 - b	IV	" 7
131	"	"	M - 14 - b	IV	図版4の10-2	182	"	"	N - 9 - a	IV	
132	"	"	M - 10 - c	IV	図版4の17-7	183	"	"	M - 9 - b		
133	"	"	L - 7 - c	IV		184	"	"	M - 7 - a	IV	
134	"	"		図版4の17-13	185	"	W c	N - 7 - d	IV		
135	"	"	N - 9 - a	IV		186	"	"	M - 7 - d	IV	図版4の21-9
136	"	"	N - 13 - d	IV	図版4の16-8	187	"	"	M - 7 - d	IV	
137	"	"	L - 10 - b	IV	図版4の17-8	188	"	"	M - 7 - c	IV	図版4の21-8
138	"	"	K - 12 - b	III	" 10	189	"	"	M - 7 - d	IV	
139	"	"	M - 8 - d	IV	" 15	190	"	V c	M - 11 - b	III	図版4の21-17
140	"	田 b - 2	M - 10 - c	IV	" 7	191	"	W c	M - 7 - d	IV	" 11
141	"	"	K - 7 - b	IV		192	"	V c	M - 11 - b	III	
142	"	"	M - 13 - d	III	図版4の17-1	193	"	"	M - 11 - b	III	
143	"	"	M - 13 - a	IV	" 9	194	"	"	M - 11 - b	III	
144	"	W a	M - 12 - c	IV		195	"	W l	K - 11 - b	III	図版4の21-1
145	"	"	M - 10 - c	III	図版4の18-11	196	"	"	L - 11 - d	III	" 3
146	"	"	M - 7 - c	焼土		197	"	"	L - 6 - d	III	図版4の22-10
147	"	"	L - 11 - d	IV	図版4の18-11	198	"	"	L - 9 - d	III	" 8
148	"	"	M - 8 - a	IV		199	"	"	M - 7 - a	III	" 12
149	"	"	M - 10 - b	IV		200	"	"	L - 7 - a	III	" 9
150	"	"	M - 11 - c	IV		201	"	"	M - 7 - b	III	" 11
151	"	"	N - 7 - d	IV	図版4の15-2	202	"	"	K - 7 - a	III	" 13

表4-8 図示した包含層出土の石器等

図 番 号	名 称	分 類	発 掘 区	計 測 値 ( g )	出 土 場 所	材 質	写 真 番 号	図 番 号	名 称	分 類	発 掘 区	計 測 値 ( g )	出 土 場 所	材 質	写 真 番 号
1	石やすり	I A 3 a	L-12-c	(1.4)	W上	obs	1-1	50	石	II A 1 d	M-13-d	14.9	W中	Ha-sh	1-7
2		I A 3 b	M-8-c	0.9			1-2	51	ストレーナー	II B 1 b	M-15-b	72.6			1-1
3		I A 4 a	M-11-d	(2.0)	III		1-3	52		II B 2 a	L-7-a	(1.9)			1-8
4			L-13-c	0.5	W上		1-4	53			L-15-c	8.7	W上		1-2
5			M-5-a	1.1	W中		1-6	54			M-10-c	13.9			1-4
6			M-13-c	(1.1)			1-7	55			M-10-b	6.1	W	obs	1-3
7			K-11-c	2.0			1-8	56			N-7-a	34.0	W上		1-11
8			M-13-a	2.4	Ha-sh	1-13		57			M-8-a	24.1	III	Ha-sh	1-9
9				2.1	obs		1-10	58			K-7-b	25.3	W中	obs	1-10
10			M-12-b	1.8	W上		1-9	59		II B 2 b	M-14-a	15.9	W	obs	1-6
11			N-9-d	2.4			1-14	60			L-8-d	10.5	W中	Ha-sh	1-5
12			M-5-a	3.1	W中	Ha-sh	1-16	61			L-8-a	38.7	W上	obs	1-7
13			L-14-c	(2.4)	obs		1-15	62			M-15-c	49.6	W中	Ha-sh	1-12
14			M-7-c	1.3	W		1-11	63			N-7-a	33.9	W上	obs	1-14
15			L-14-b	2.2	III		1-17	64			L-12-c	(42.9)	W中		1-13
16			K-8-c	(0.6)	W上		1-21	65		II B 4	M-13-c	5.5	W上	Ha-sh	2-9
17			M-13-b	1.2			1-18	66			N-8-d	12.4		obs	2-10
18			M-10-b	2.2	sh		1-19	67		II B 5	K-6-b	(6.3)	W中		2-12
19			L-8-d	(0.4)	obs		1-16	68			L-11-d	(7.9)			2-11
20			N-12-a	1.4	III		1-12	69		II B 7	M-8-c	8.0			2-1
21		I A -	N-14-d	(1.8)	W上	sh	1-20	70			M-9-d	13.4			2-2
22	石やすり	IB 1 a	佛土中	(5.0)	-	obs	2-1	71			L-8-a	14.1	W下		2-4
23			L-14-c	(3.1)	W		2-4	72			M-14-d	13.2	W中		2-5
24			M-13-b	4.8	W中		2-3	73			N-10-a	46.1	W上		2-7
25			L-12-c	(4.5)	W上		2-2	74			K-8-c	(37.1)	W下	Ha-sh	2-6
26			M-9-a	6.9	W		2-5	75			L-8-d	(9.4)	III	obs	2-3
27			L-14-b	(7.7)	III		2-6	76			M-9-b	65.5	W中		2-8
28			M-6-a	(14.4)	W下	Ha-sh	2-7	77	石斧	W A 1	L-14-c	176.7	W	Mud	1-1
29			N-15-a	(7.2)	W中	obs	2-8	78			M-7-c	47.1		Bl-Mud	1-6
30			M-15-b	22.7		Ha-sh	2-10	79		W A 2	L-8-a	74.3	W	Bl-Sch	1-9
31		IB 1 b	M-11-d	5.3	III	obs	2-11	80			M-7-a	72.1	W中	Gr-Mud	1-3
32			M-7-a	8.3	W下		2-12	81			M-15-a	135.9			1-6
33		IB 1 -	M-13-d	(8.7)	III	Ha-sh	2-9	82			L-8-d	(515.0)	W上	Bl-Mud	1-7
34	穿孔具	II A 1	M-12-b	1.4	W上	sh	1-2	83			M-10-b	81.5	W中	Gr-Mud	1-2
35			M-8-a	(4.0)		obs	1-3	84			M-13-c	40.4	W中		1-7
36			M-11-c	6.5	III	Agash	1-1	85			N-8-d	67.8	W中	Bl-Mud	1-4
37		II A 2	M-16-c	(8.2)	W中	Ha-sh	1-4	86		W A 3	M-15-d	430.0	III	Mud	1-5
38		II B 1	M-12-c	6.0	W上		1-8	87			M-10-a	140.3	III		1-10
39			K-7-b	(10.3)	W中	obs	1-7	88			L-11-d	240.0	W	Gr-Mud	1-8
40		II B 2	N-9-d	7.2			1-6	89			L-10-d	37.1	W下		1-5
41			L-10-d	(1.6)		Ha-sh	1-5	90	石のみ	W B	L-15-a	57.0		Bl-Mud	1-1
42	石匙	II A 1 a	L-13-c	7.4	W下		2-1	91			M-13-c	29.4	W	Gr-Mud	1-4
43			L-25-c	12.1	W上		2-2	92			N-8-d	35.1			1-2
44		II A 1 c	M-7-d	23.6	W中		2-8	93			M-15-a	35.7	W下		1-3
45			M-15-c	4.5	W上		2-3	94	花崗岩	W A 1	M-10-a	(164.2)	W上	And	2-1
46			K-10-b	(15.0)	W中	sh	2-9	95			M-11-d	335.0	W		2-2
47			M-12-a	21.5	W上	Ha-sh	2-6	96			L-10-c	470.0	W中		2-3
48			L-7-d	11.0	W中	sh	2-4	97			L-15-a	245.0			2-5
49			M-13-b	7.7	W上	Ha-sh	2-5	98		V A 2	M-15-c	385.0	III		2-7

番号	名称	分類	発掘区	計測値(g)	出土位置	材質	写真番号	番号	名称	分類	発掘区	計測値(g)	出土位置	材質	写真番号
99	石	V A 1	M-13-d	260.0	田	sh	1- 8	150	台 石	V B 3	M-5-b	(8,000.0)	W	And	
100		V A 2	L-7-a	227.0	W下	Mud	2- 6	151			M-13-b	15,050.0			
101		V A 1	M-15-b	373.0	W中	B-Mud	2- 4	152			M-13-a	2,405			
102	くぼみ石	V B 1	N-15-d	295.0		And	1- 5	153	石	V B 1	M-7-d				
103			M-8-a	480.0	田		1- 2	154			M-12-d	(21,000.0)			
104			L-12-a	(210.0)	W中		1- 1	155			L-11-b	32,000.0			
105			M-2-c	398.0	W下		1- 4	156			M-12-c	(19,000.0)			
106			M-8-a	930.0	W中		1- 3	157	砾 石	V B 2	M-5-c	W中	Sa	1- 7	
107	北海道灰岩	A 1	M-6-b	410.0	W下		2- 1	158	藍 鑿		M-4-c	66.1	Ta	1- 1	
108			M-10-c	505.0	W中		2- 2	159	玉		M-12-a	2.7		1- 2	
109			M-9-c	660.0	W上		2- 3	160			M-4-c	15.8		1- 3	
110			M-15-b	1,200.0	W中		2- 5	161	石 製品		L-15-b	6.5	W	1- 4	
111			M-8-c	460.0			2- 4	162	鹿 鹿		L-7-a	27.0	V	1- 6	
112			M-5-a	1,455.0	W下		2- 6	163	原 石		K-9-b	13.0	W上	Gr-Mud	1- 6
113			M-13-d	1,482.0			2- 7	164			L-8-b	125.4	W中	Mud	1- 7
114	磨 石	V A 2	M-13-b	680.0	W上		1- 4	165	石 製品		L-14-c	4.9	W	obs	2- 1
115		V A 3	M-8-b	1,060.0	W中		1- 3	166			L-9-c	5.3	W中	"	
116			L-11-d	1,250.0	W上		1- 2	167				4.4	田	2- 3	
117		V A 4	M-2-c	295.0	W下		1- 1	168	石やヒリ		L-7-c	1.9	W	"	2- 4
118			M-13-c	308.0			1- 9	169	石炭酸鉄		M-3-b	22.4	W上	石炭	
119			M-9-a	960.0	W中	Grained	1- 5	170			L-14-c	18.5	?	?	
120			L-6-b	780.0			1- 6	171			M-9-a	12.2	田		
121			L-7-d	610.0	W上	片岩岩	1- 7	172			L-11-a	10.0	W上		
122			K-8-c	395.0	W中	sh	1- 8	173			M-13-b	6.7	W中		
123			M-8-c	(385.0)	W	片岩岩	1- 10	174	石炭石器		M-10-c	118.7			
124	砾 石	V B 2	M-5-b	(176.0)	W中	Sa	1- 6	175	石 の こ		M-10-d	24.5	田上	Sh	2- 1
125			M-13-c	(68.0)	W下		1- 4	176			L-5-c	135.0	W	And	3- 1
126			K-6-b	(138.0)	W中		1- 1	177			M-10-c	18.5	W	"	3- 3
127			L-13-a	27.2			1- 5	178	すり鉢		M-7-a	150.0	W下	Gr-Mud	3- 4
128			L-12-b	(30.0)	W下		1- 3	179	四脚の馬		N-8-	177.0	W中	Sa	
129			N-15-d	(115.0)	W上		1- 2	180	赤色陶製H		L-12-a	102.3	W	火山岩	
130	石 烧	V A 2	M-9-a	355.0	W	片岩岩	2- 1	181	石 の こ		M-14-a	56.8	田	And	
131			M-9-c	435.0	W上	And	2- 2	182	赤色陶製H		M-15-a	20.5	W	Sa	
132	石 鋼	II	M-9-b	17.0		obs	3- 1	183	石 製品		M-7-d	70.0	III	Gr-Mud	
133			L-7-c	108.4	W	Ha-sh	3- 2	184			M-8-d	185.0	W		
134			M-16-a	1,090.0	W上	sh	3- 3	185			L-7-c	183.8	W中		
135	Uフレイク	X	L-7-c	4.1		obs	1- 2	186	鉛石製品		M-10-b	17.8	W	Pum	3- 2
136			M-9-c	(4.4)	W		1- 3	187	*	*		36.0		3- 1	
137			L-8-d	1.3	W上		1- 4	188	*	N-15-d	26.0	W	"	3- 3	
138			M-6-b	(2.3)			1- 8	189	ナリ切り		L-10-b	W		"	
139			L-9-c	3.9	W中		1- 5	190			M-10-b	W			
140			L-13-c	4.6	W下		1- 1	191			L-15-d	W			
141			K-12-b	24.4	V	Ha-sh	1- 12	192	土 製品		M-7-d	W			
142			M-12-b	(3.4)	W上	obs	1- 6	193			M-13-b	W			
143			M-8-a	(2.8)	W中		1- 7	194			M-14-c	W		3- 1	
144			M-7-a	12.9	W下		1- 9	195			*			3- 4	
145			M-6-d	16.1	W中		1- 10	196			K-11-c	W		3- 3	
146			K-7-b	(15.1)		Ha-sh	1- 13	197			M-7-d	W		3- 5	
147			L-6-d	(22.0)	W中	obs	1- 11	198			*			3- 2	
148	台 石	V B 3	M-11-c	14,050.0	W	And		199			M-14-b	W		3- 6	
149			M-7-d	(8,005.0)	W										



1



2



3



4

III群 a 類土器



1

2



3

4

III群 a 類土器



1



2



3



4

III群b-2類(1)・III群b-3類(2~4)土器



1



2

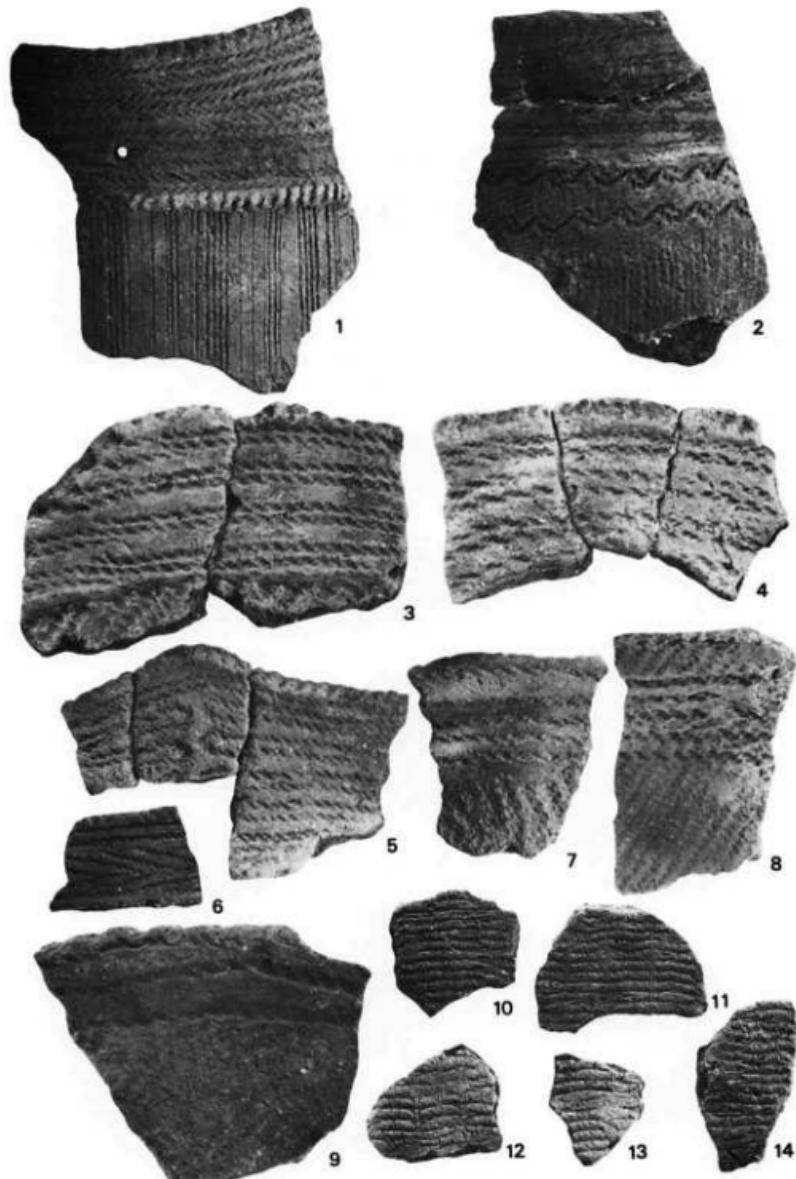


3



4

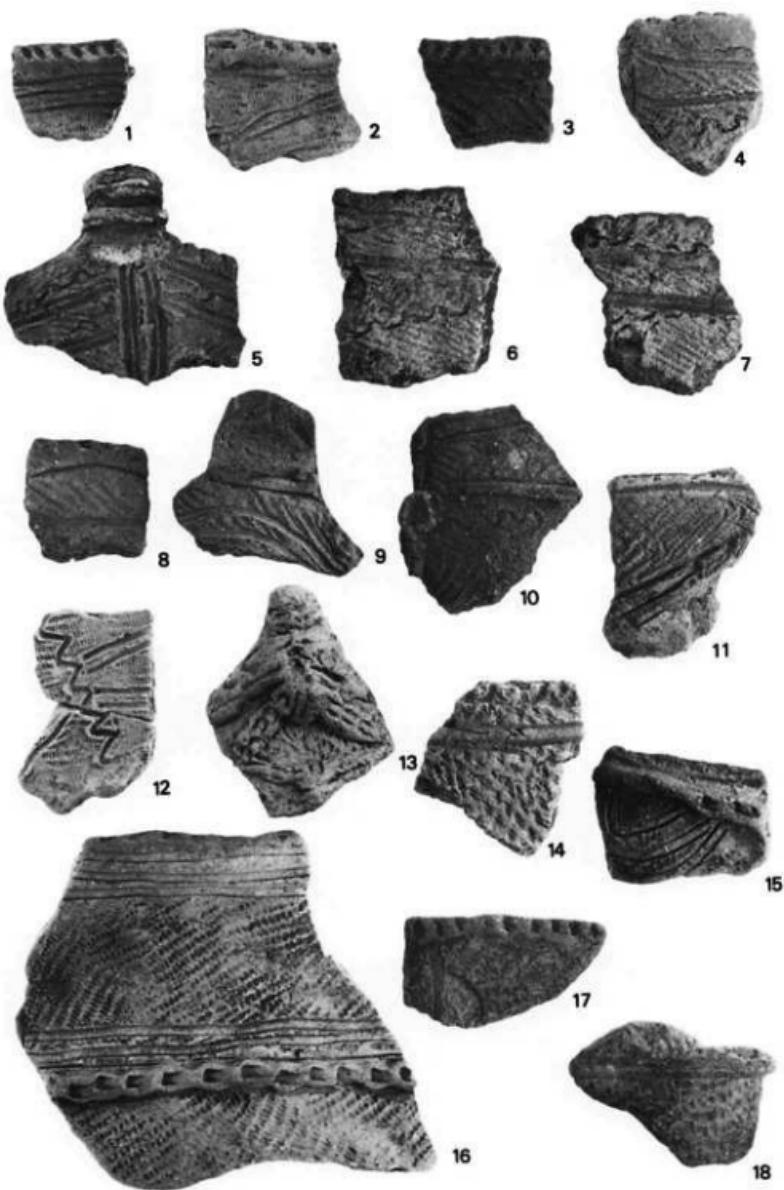
IV群a類土器



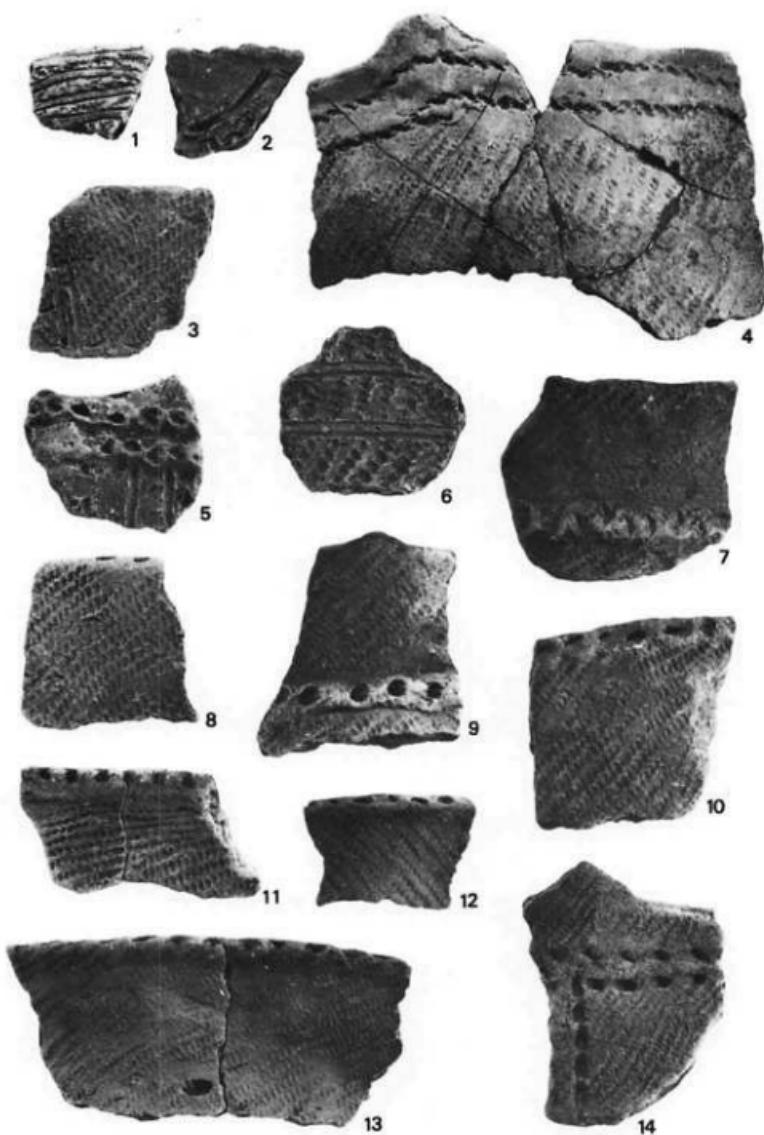
II群 b 類土器



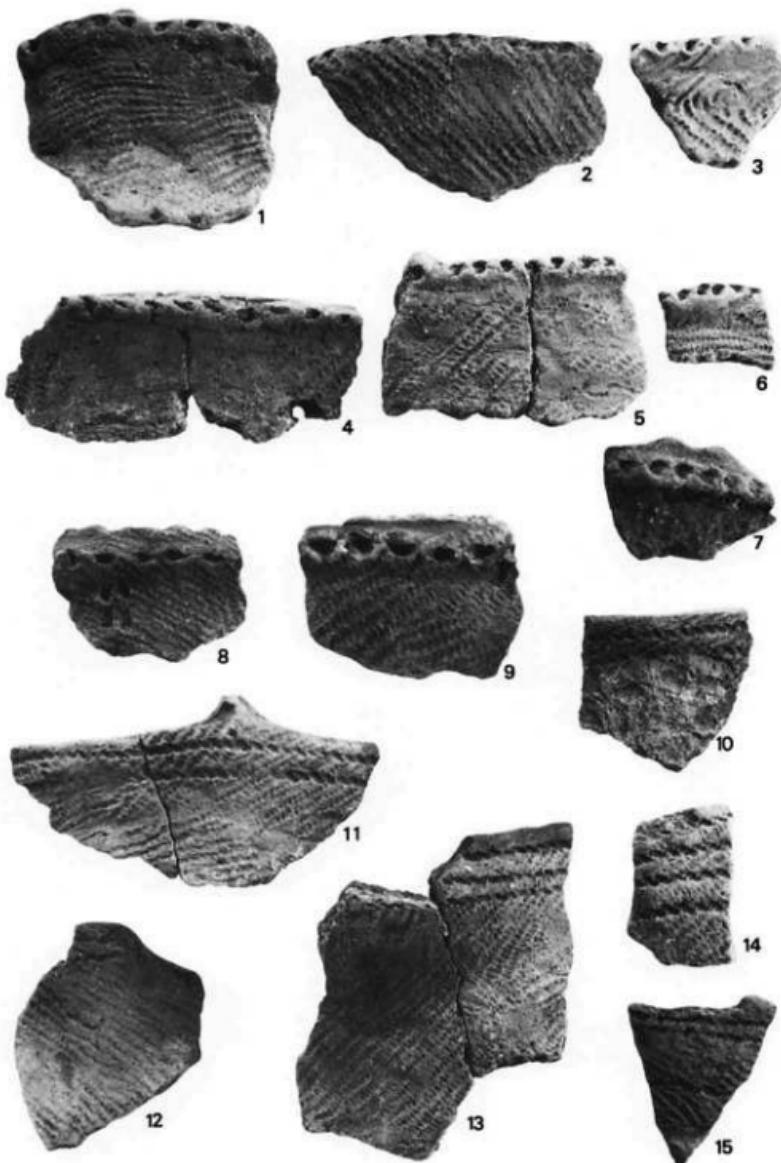
III群 a 類土器



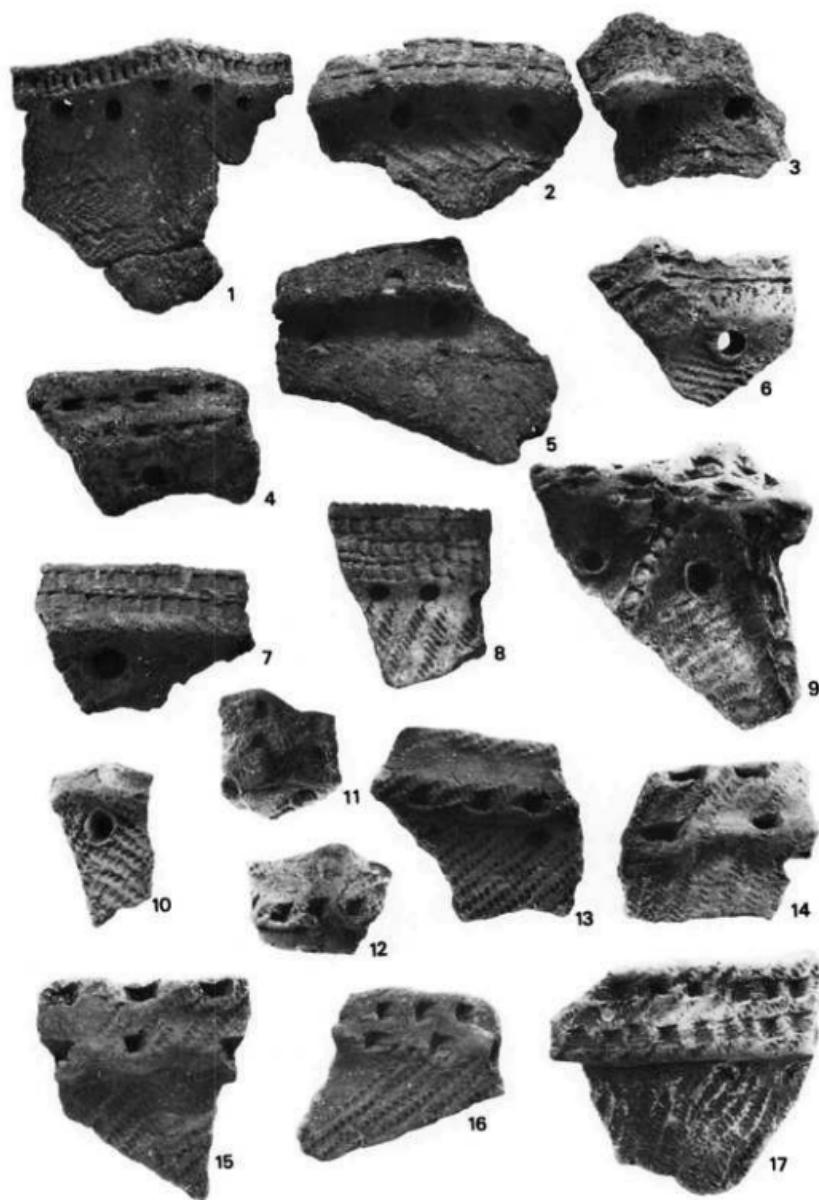
III群a類（1～12）・III群b-1類（13・14）・III群b-2類（15～18）土器



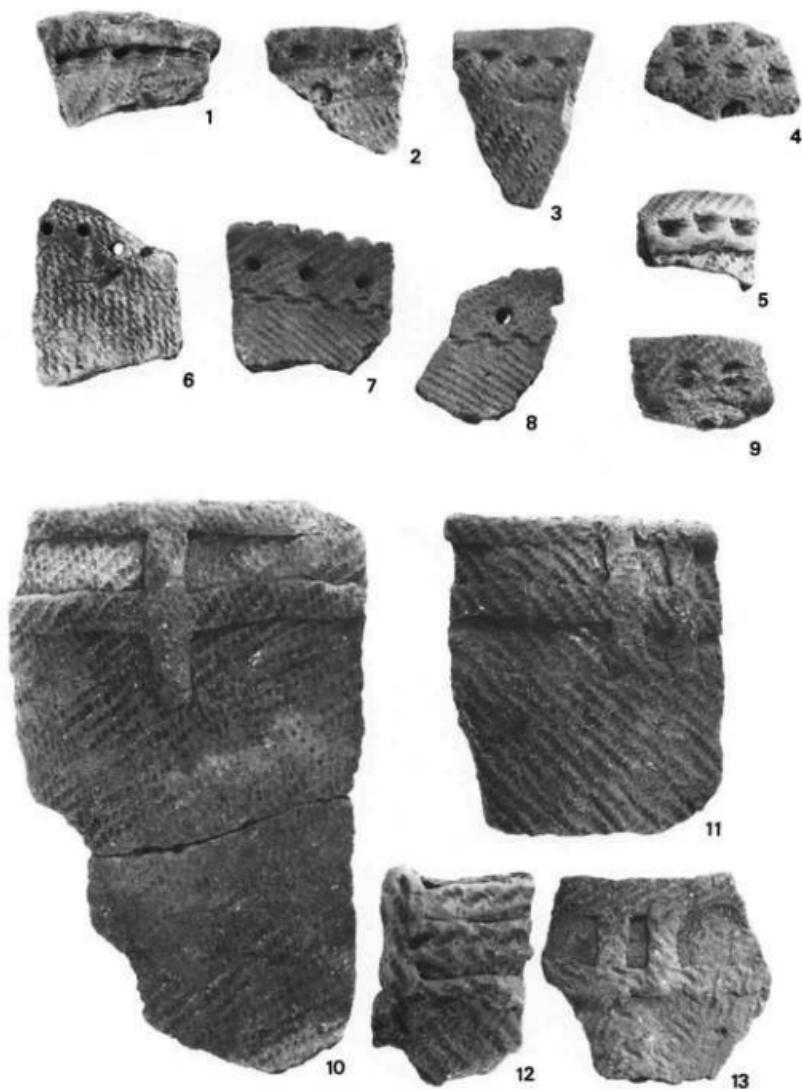
III群 b-2 類土器



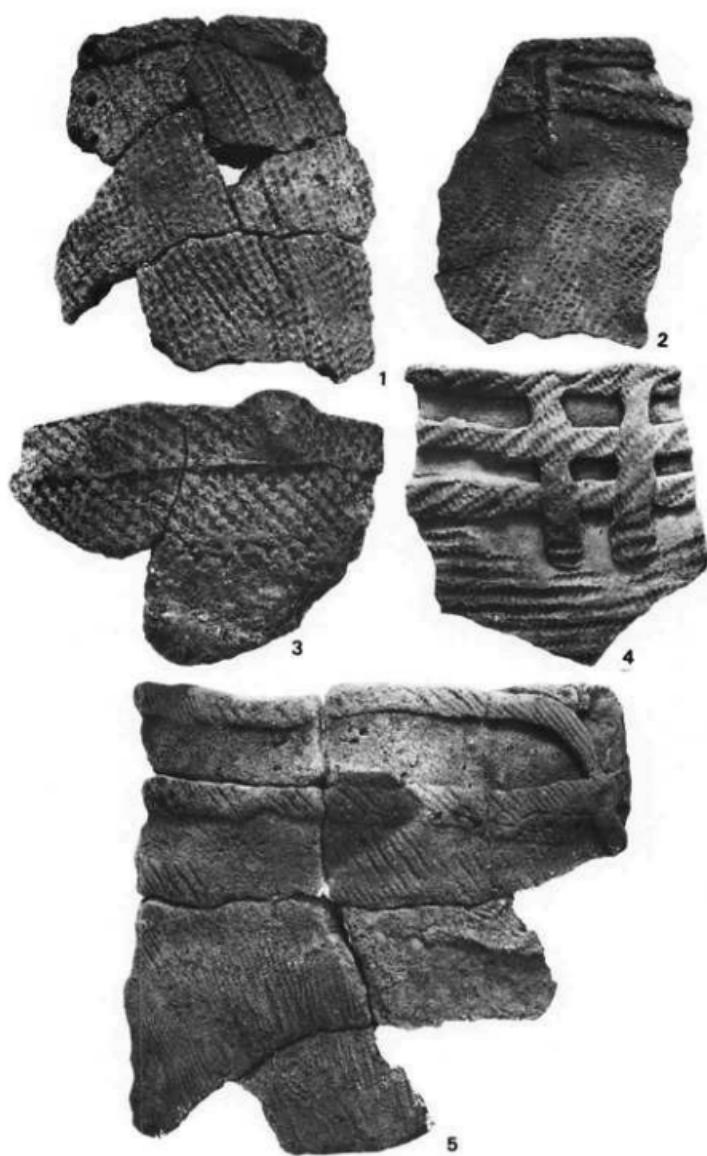
III群 b - 2 類土器



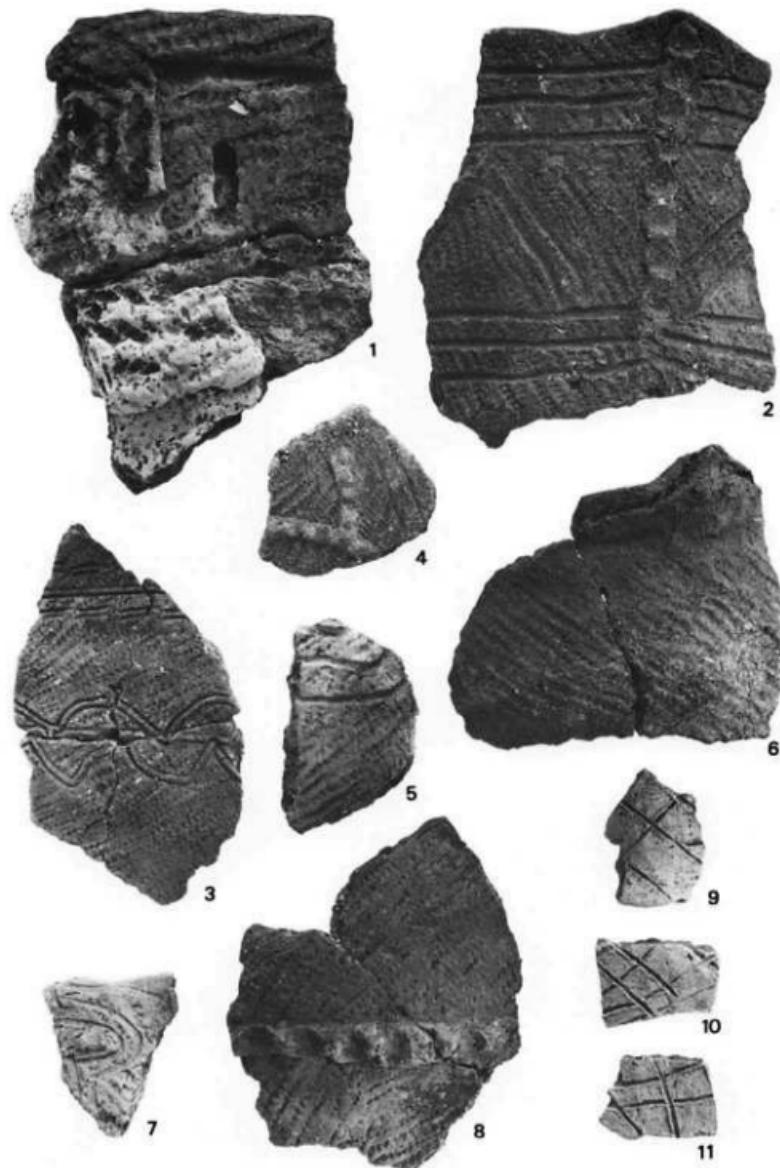
図群 b-3 類土器



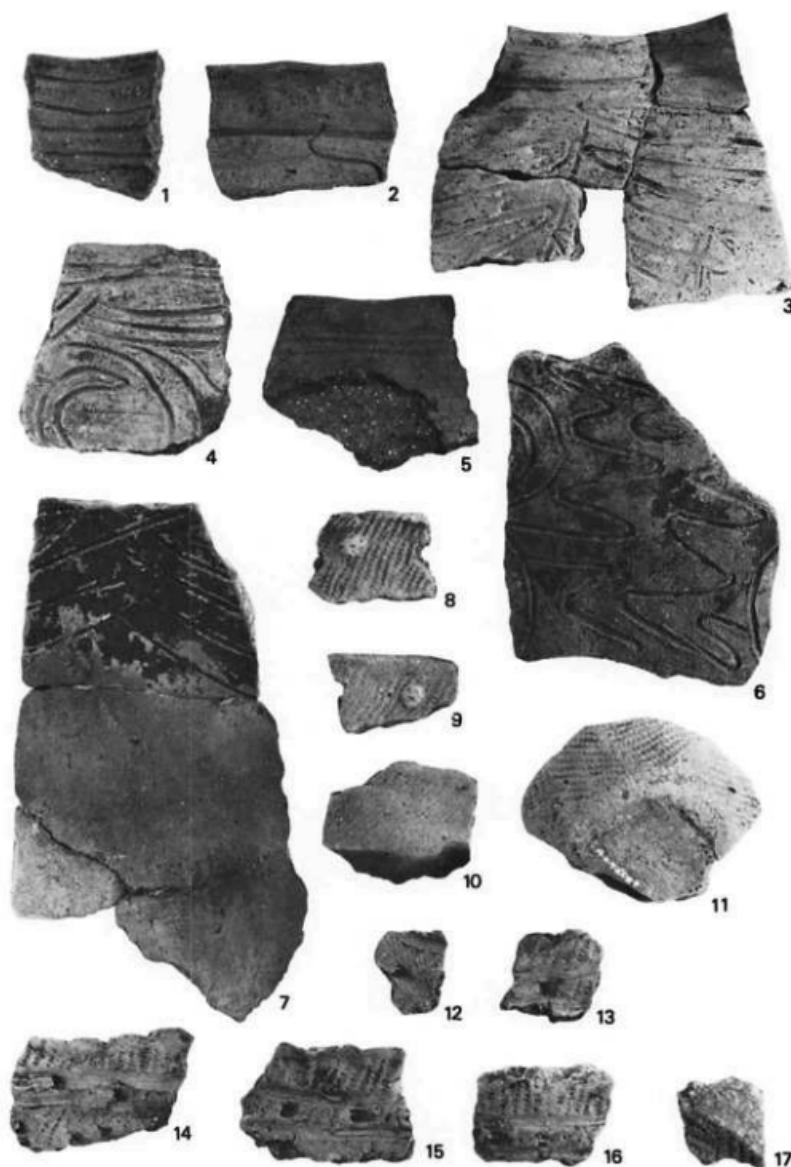
III群b-3類(1-9)・IV群a類(10-13)土器



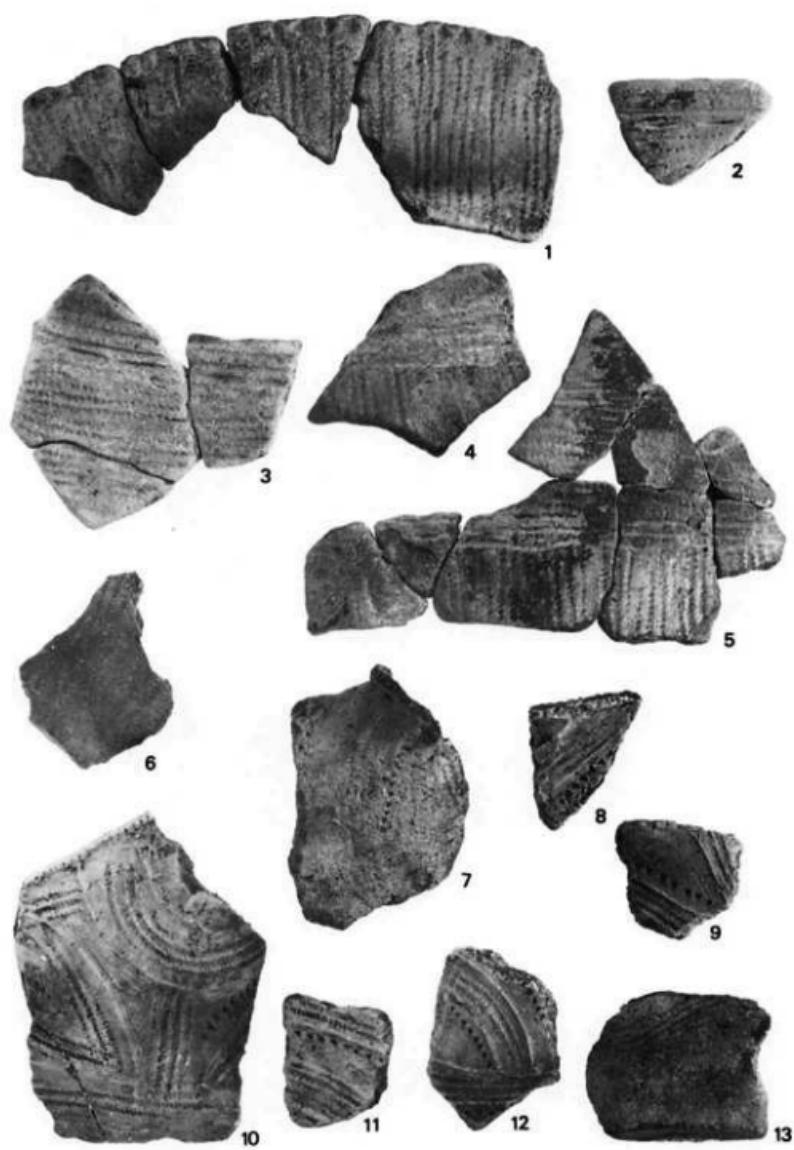
IV群 a 類土器



IV群 a 類土器

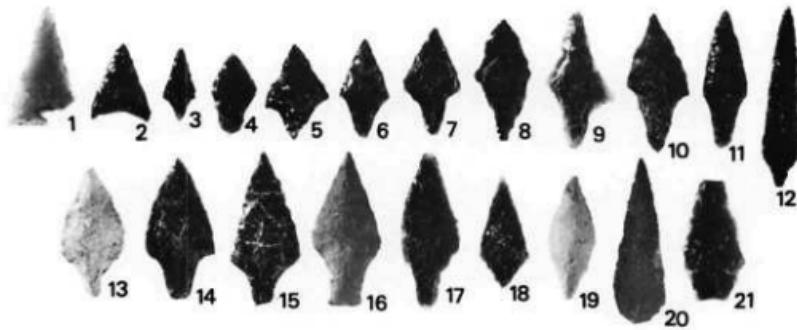


IV群a類 (1~7)・IV群c類 (8~11)・V群c類 (12~17) 土器

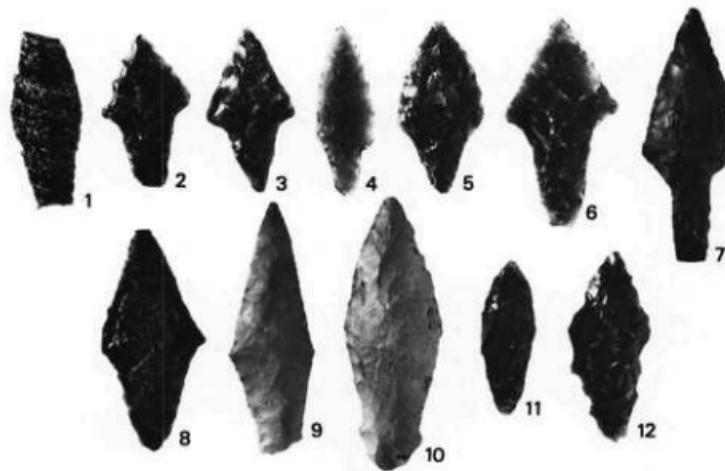


VI群土器

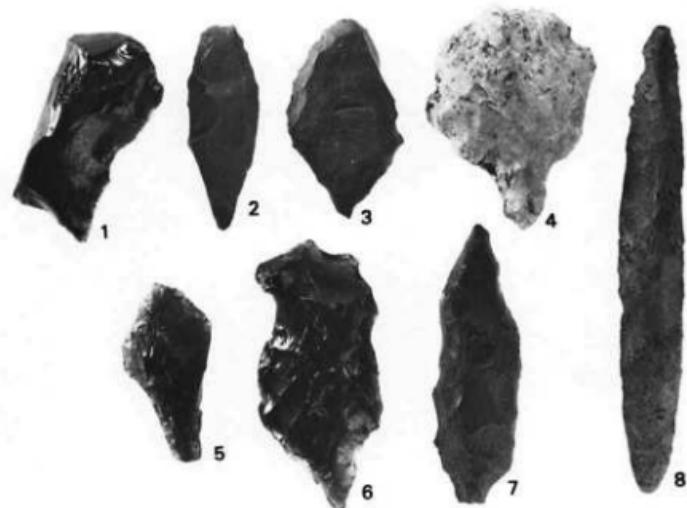
図版 4 の 23



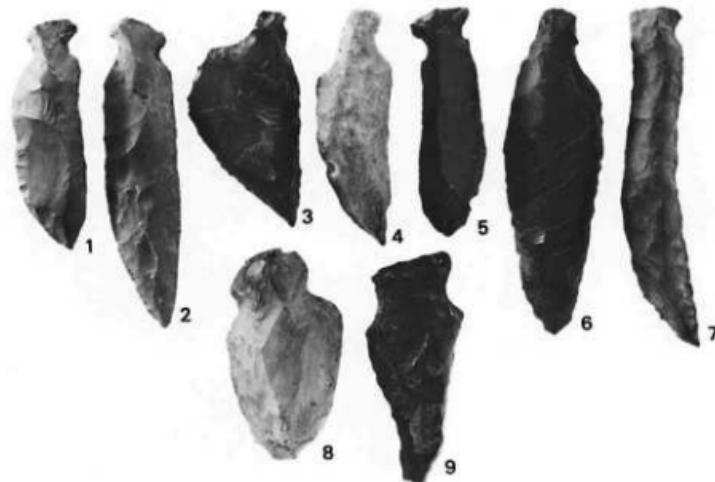
1. 石やじり



2. 石やじり

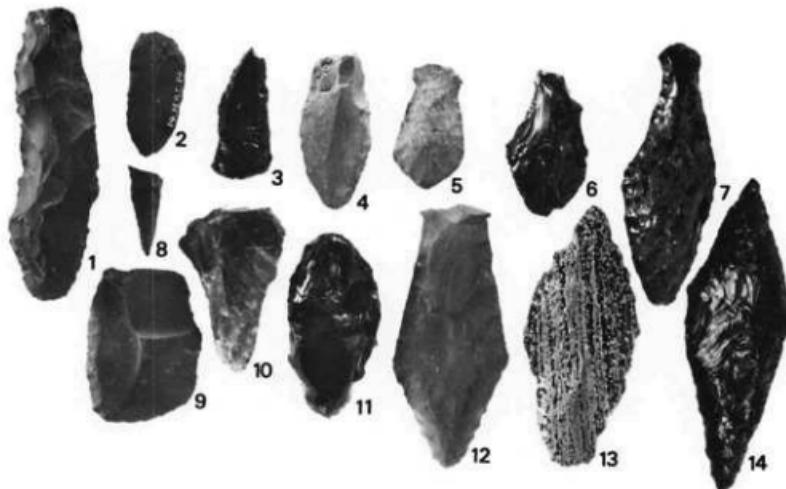


1. ドリル

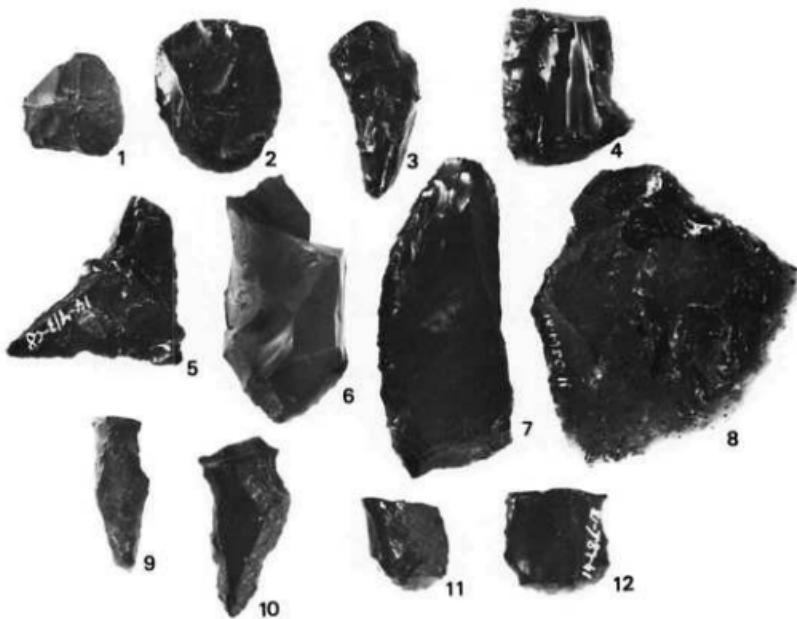


2. つまみ付ナイフ

図版 4 の 25



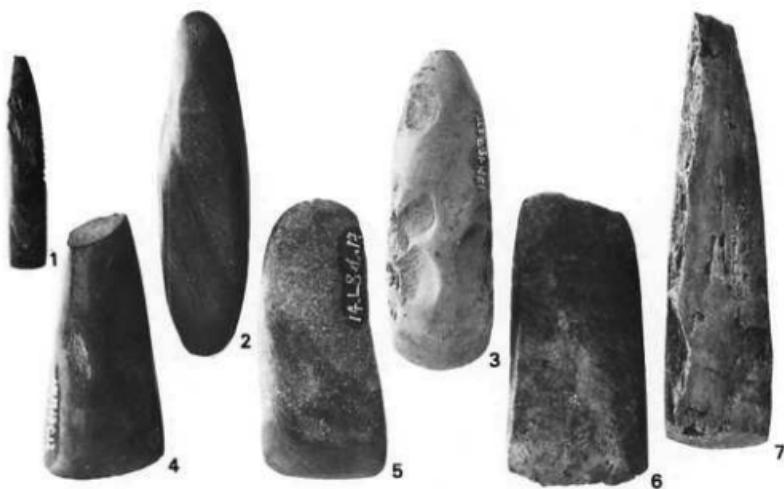
1. スクレイパー



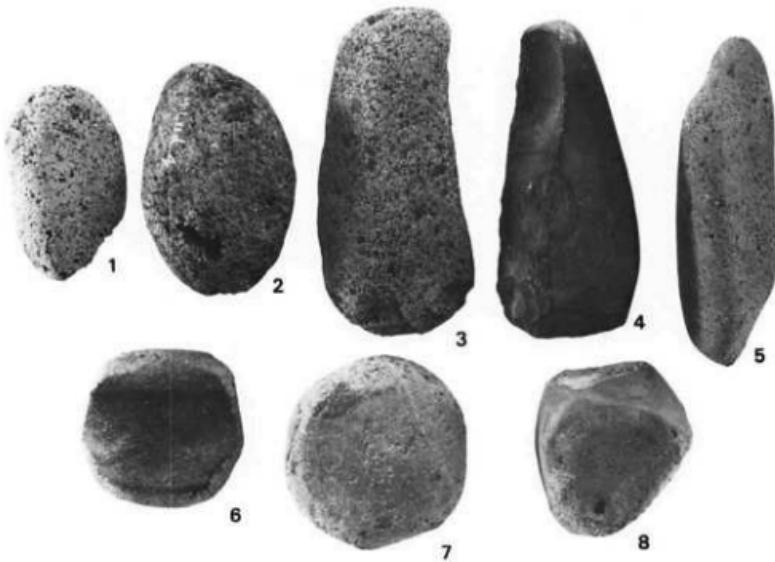
2. スクレイパー



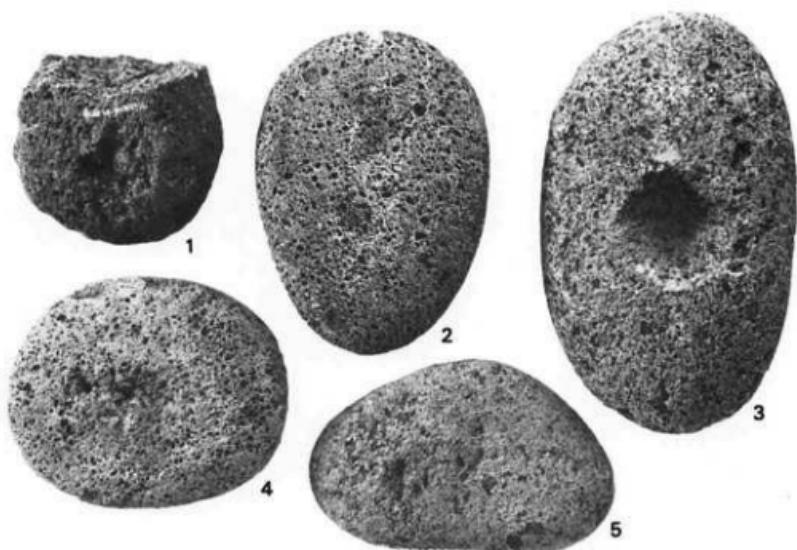
1. 石斧



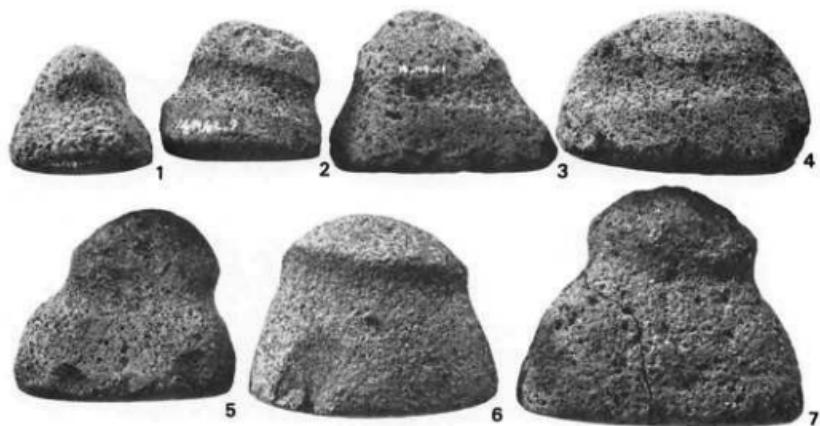
1. 石斧



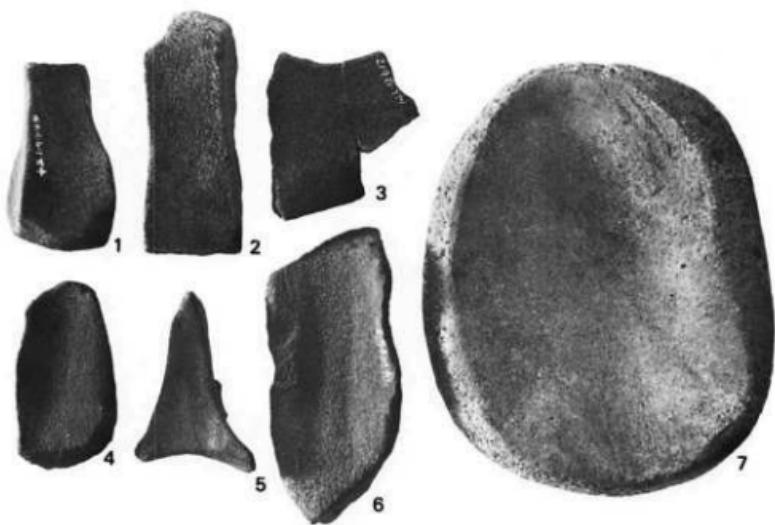
2. たたき石



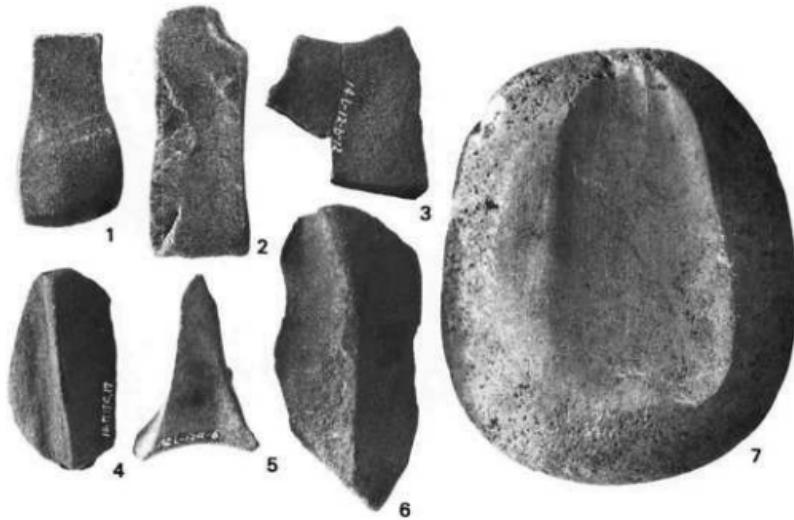
1. くぼみ石



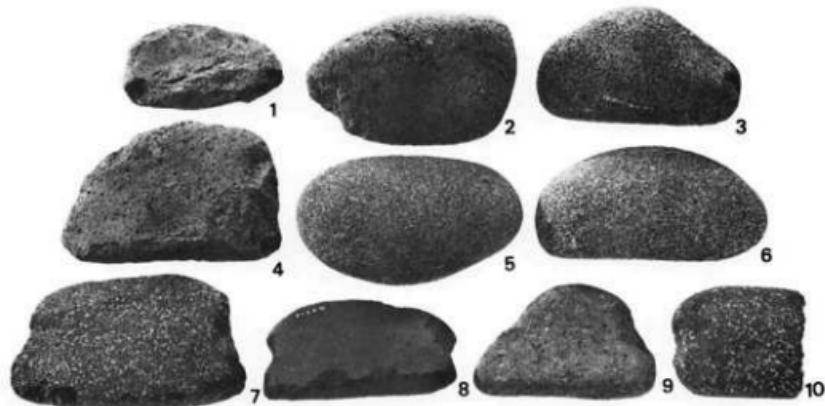
2. すり石（北海道式石冠）



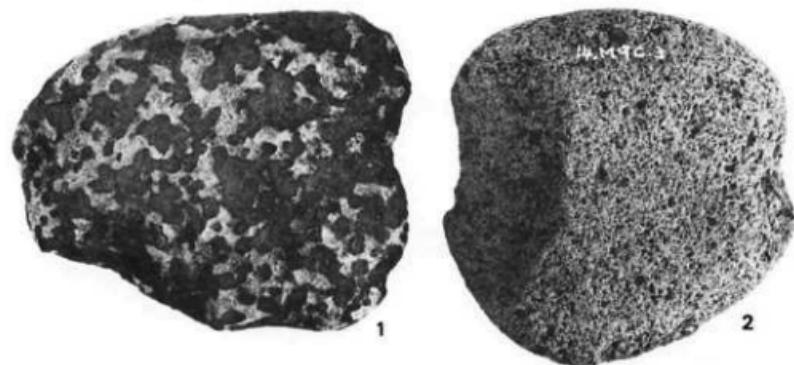
と石（表）



と石（裏）

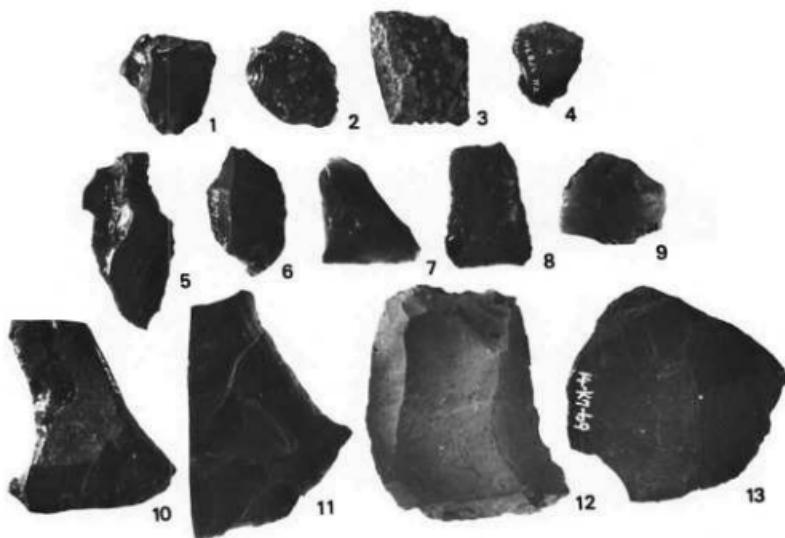


1. すり石

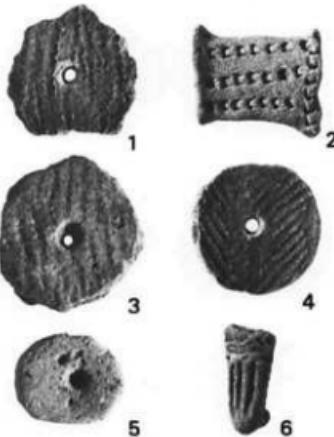


2. 石錘



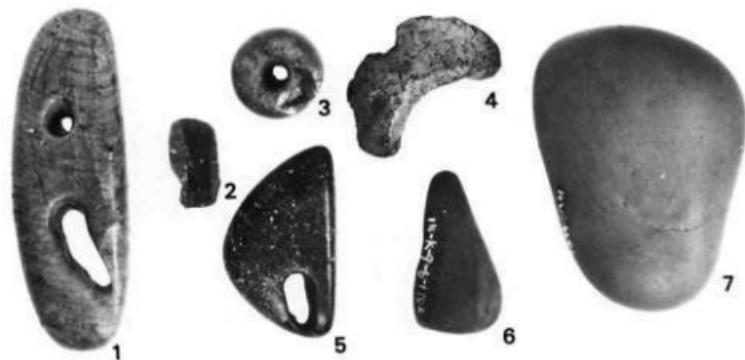


1. 使用痕のあるフレイク

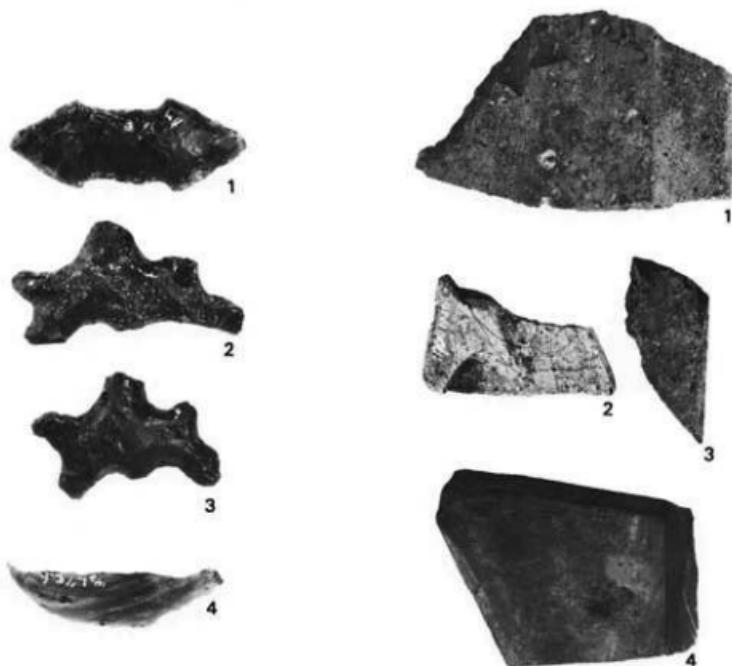


2. 石皿

3. 土製品



1. 玉類



2. 异形石器と加热を受けた石器

3. 石锯とすり切片



1. 石炭礫



1



2



3

2. 加工痕のある石炭礫

3. 軽石製品



すり切り痕のある土器

図版 4 の 35



すり切り痕のある土器片（拡大写真）

#### 4.まとめ

今回の調査で得られた成果について要約し、その中のいくつかについて若干の考察を加える。

- ① 遺跡は、縄文時代前・中・後・晩期そして続縄文時代にかけての複合遺跡である。
- ② 縄文時代前期後葉から中期前葉にかけての集落遺跡であることが推定される。
- ③ 現在のところ、本遺跡が円筒土器下層d式期の太平洋側における北端をなす。
- ④ 住居跡について
  - ・いわゆるベンチ状の構造をもつ、縄文時代前期の楕円形プランの住居跡が発見された。
- ⑤ 遺物について
  - ・魚骨を器面に回転施文したと思われる土器片が数点検出された。
  - ・すり切り痕をもつ土器片が数点検出された。
  - ・石炭の加工品、石炭礫が検出された。
  - ・多量の石皿、台石が検出された。

遺跡：遺跡の広がりは、急斜面に囲まれた西向きの台地、標高10~15mの部分の中で完結されるであろう。今回調査した面積は、そのうちの約4分の1に相当し、主体部と思われる部分は、標高11~14mで今回検出した住居跡につづく東側隣接地である。この遺跡主体部と思われる部分には調査区北寄りの造構出現状況からみて、住居跡が高密度に分布することが推察される。冬場には北~北西風がまともに吹きつけることが予想される西向き斜面に、密集した集落が形成されるためには、これに優る条件があったか、季節的な住居跡であったか、の2点が考えられる。遺物の出土量、石器組成、とくに後述する石皿、台石が多いことや、炉内のシカの骨片を混じえた焼土が厚く堆積していることなどから、季節的な住居跡の可能性は少ない。定着性の強い集落を成立させる条件には、遺跡の西縁を流れるオモンベツ川、海水が及んでいたと考えられる低位沖積地や、後背のクッタラ台地などにおける食料獲得の容易さが考えられるであろう。

遺物：魚骨の回転施文と思われる土器片は、これまでの出土例からみれば縄文時代早期撚糸文系土器に伴出している。今回、本遺跡で検出されたものは縄文時代前期、円筒土器下層d式土器の特徴をもったものである。また、すり切り痕のある土器片については、大島直行氏が注目している。同氏によれば、類例は入江貝塚から21点、寿都第3遺跡から1点出土していて、これらはいづれも円筒土器下層d式土器にすり切りを施しているという<sup>(4)</sup>。未発表資料であるが、恵庭市柏木B遺跡において植苗式土器（縄文時代前期）に伴って出土している。本遺跡のこれに類する資料は14点で、すべて円筒土器下層d式の土器破片が使われている。すり切りによって形成される溝は縦方向で、しかも器表面から施されたもののみで、その深さは、14点のうち2点が器厚の2分の1くらいに達し、他はかすかにその痕跡を残す程度のものである。（入江貝塚、寿都第3遺跡の資料は、すり切り痕は縦方向で、しかも、深いものが大半であるとい

う。)このことは、その土器の厚さ、胎土、焼成温度などに關係するものであろう。いずれにせよ、これらが何の目的のために再利用されたのか不明である。本遺跡出土遺物の中で土器を再利用したものには、有孔土製円盤(未製品を含め8点検出されている)があるが、すり切りによって作り出された土器片が使用されたものかどうかは分からぬ。魚骨回転の土器、すり切り痕のある土器とも、資料の増加が待たれるところである。

石器では、石皿、台石が多量に出土している。このことは、本遺跡が定着性のつよい、生活の舞台であったことを裏づけるであろう。また、特殊な遺物として、石炭の加工品と、石炭礫が出土している。類例は、登別市川上B遺跡(整理中)において、円筒土器上層式土器期の住居内で出土している。また、虎杖浜3遺跡(整理中)でも1点検出されている。遺跡の近くで石炭が掘り出されることは知られていない。また、現在知られている産炭地の中で、遺跡から一番近いのは夕張である。どのような経路で、何のためにもち込まれたか興味深い。

(注1) 大島直行氏のご教示による。

#### 参考文献

- 瀬川秀良 1974 日本地形誌・北海道地方  
北海道防災会議 1973 有珠山 北海道における火山に関する研究報告書第3編  
大場利夫他 1962 白老郡虎杖浜遺跡の発掘について 北方文化研究報告第17号  
岡田宏明他 1977 カムイエカシチャシ 白老町教育委員会  
加藤邦雄他 1977 白老町虎杖浜2遺跡 白老町教育委員会  
高橋正勝他 1980 アヨロ 白老町教育委員会  
佐藤一夫他 1980 白老町発見の石刀鎌の新例について 北海道考古学第16輯

V 千歳<sup>ちとせ</sup> 4 遺跡

## V 千歳4遺跡

### 1. 概要

本遺跡の発掘調査は、北海道縦貫自動車道の建設に關係する道路の改良工事に先立つて実施したものである。

登別市の中央部には、北に高く南に低い札内台地がひろがっている。この札内台地は幌別川・来馬川・岡志別川・登別川等の海へそそぐ河川によって大きくわけられ、さらに沢の浸食によつて、入りくんだ地形になっている。幌別から富浦の海岸近くには、沿岸流による古砂丘の形成が知られているが、近年、鉄道、道路、工場、宅地として利用され、現在では、痕跡的にみられるだけである。砂丘の内側は、低湿な谷地になっている。

遺跡は、幌別市街の北東 2.5 km の、岡志別川支流のエコイカウンオカシベツ川と、シンノシケウノカシベツ川の合流点にちかい丘陵西斜面にある。札内台地の一丘の末端部分にあたり、三方を丘に囲まれておりわずかに南側がひらいている。遺跡の前面には、道道上登別室蘭線が、せまい谷間にそって通つており、幌別市街と札内台地とをむすんでいる。

現在のシンノシケウノカシベツ川は、改修がなされ、遺跡の西方 50 m を直線的に流れて、エコイカウンオカシベツ川と合流している。図 5-2 の地形図によると、改修以前の流路は、遺跡の近くを蛇行していたことがわかる。遺跡は、道道のカーブするあたりを中心にして大きな広がりをみせている。地形的には、古い蛇行するシンノシケウノカシベツ川をはさんでいることになるから、北と南に分離してとらえるほうが、適切であろう。今回調査したのは北の方で標高 23~37 m の傾斜地である。

土層区分は図 5-3 のようにおこなった。I b 層の灰褐色火山灰は 10~20 cm 堆積しており、白色の軽石を含んでいる。II 層の黒色土は、II b 層の黒褐色土とともに遺物包含層である。III 層の黄褐色土は、無遺物層である。IV 層の黄褐色土は軟質で、最上面は赤茶化<sup>アカヒゼ</sup>いて、II 層の下部にブロック状に認められる。II 層、II b 層および III 層には、20 cm 大までの軽石、50 cm 大までの安山岩質角礫がみられる。

縄文時代早期、中期、後期の遺跡であるが、縄文中期後葉～後期中葉の資料が多い。平面的には、早期と中期前半の遺物は標高の高いところに点在的であり、中期末は高いところから低いところにひろがり、後期前半は低いところに集中してみられる。土器型式としては、コッタロ式、円筒上層式、天神山式、柏木川式、北筒式、余市式、入江式、手稻式、船泊上層式などである。

遺構としては、住居跡 6 か所、落し穴 1 か所、ピット 9 か所を検出した。5 号住居は、中央に石組み炉をもち、縄文時代中期末の土器・石器等を多く出土した。床面の木炭片による<sup>14</sup>C 測定年代は  $4,060 \pm 120$  y. B. P. と  $3,600 \pm 90$  y. B. P. である。3 号ピットは、角礫・軽石を多く

含み、石斧破片、縄文時代後期初頭の土器、微量のベンガラがみられることから、墓塚としてとらえられる。

周辺の遺跡としては、岡志別川の縁辺の丘陵・丘陵斜面に、千歳1遺跡、千歳2遺跡、千歳3遺跡、千歳5遺跡、千歳6遺跡、千歳7遺跡がある。

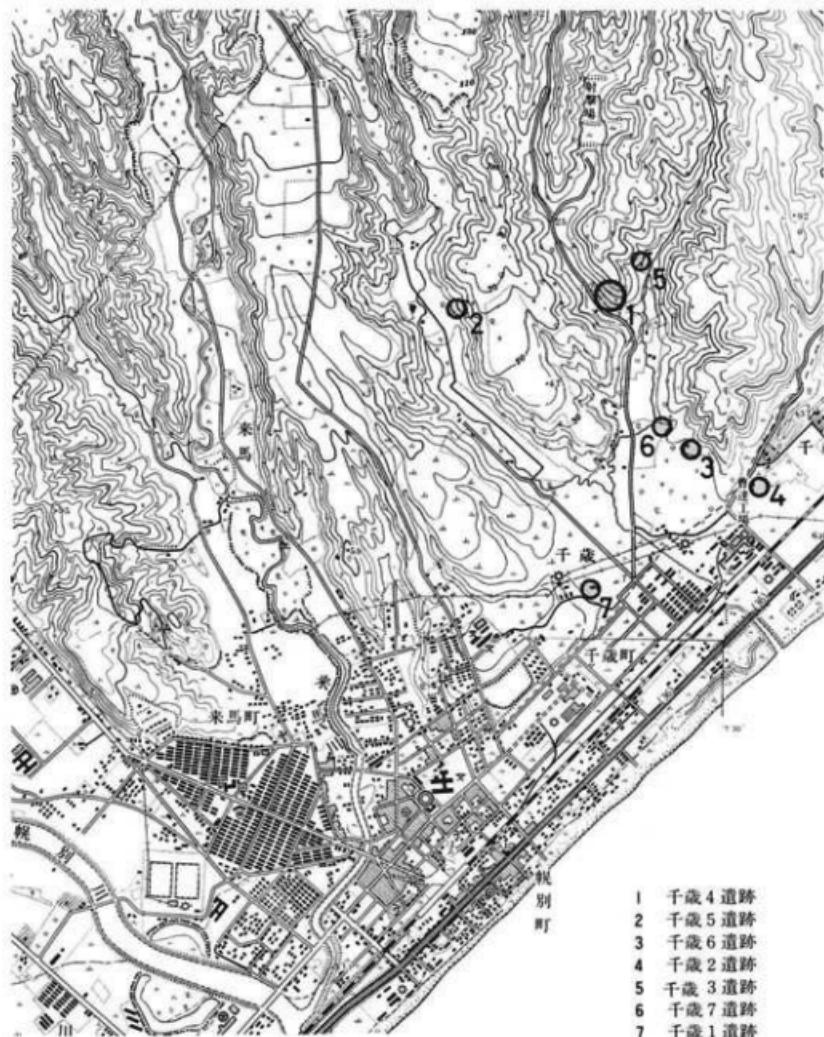


図5-1 遺跡の位置(この図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図・鶴別岳・登別温泉・空港東北部を複製したものである。)



図 5-2 周辺の地形図

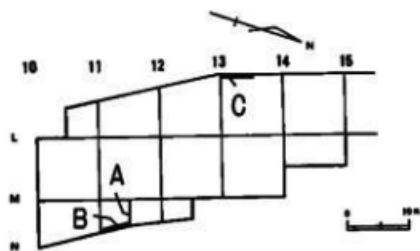
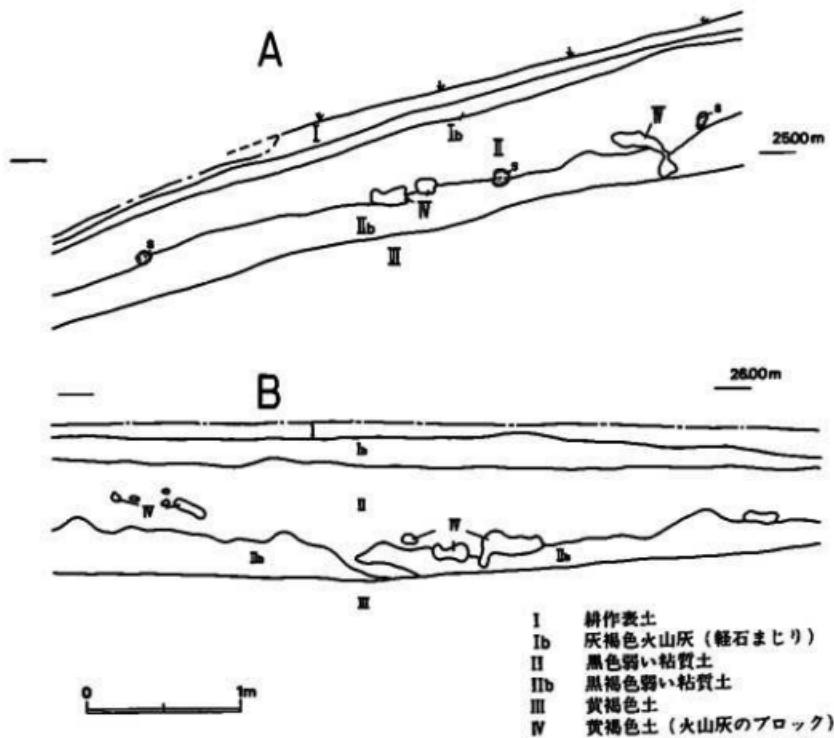
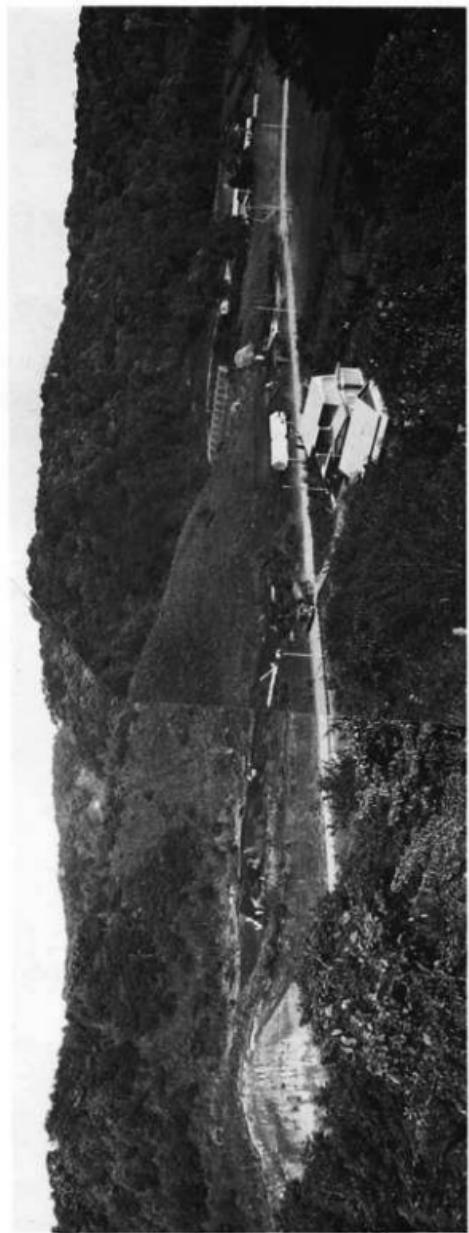


図5-3 土層図



遠景(西の丘から)



土壌[℃]

## 2. 造構

住居跡 6 か所 (H-1 ~ H-6)、落し穴 1 か所 (TP-1)、ピット 9 か所 (P-1 ~ P-9) を検出した (図 5-4)。

1 号・2 号・3 号住居跡 (図 5-5、図版 5 の 2) 傾斜地にあり、耕作による削平を受けており、竪穴の一方の壁を検出しただけである。出土遺物はない。

4 号住居跡 (図 5-5・図版 5 の 2) 造構確認面から床面までが浅く、竪穴の一方の壁を検出しただけである。出土遺物はない。

5 号住居跡 (図 5-6、7、8、9、図版 5 の 3、4、5、6) 傾斜地であるから、プランは北側半分しか確定できなかった。全体形は、土質の微妙なちがいや遺物の出土状態などをもとにして、推定した。埋積土は、黒色土である。柱穴は、北側だけで検出できた。中央の石組み炉は、ほぼ正方形であり、焼土がびっしりつまっていた。焼土は 2 層に分かれ、下層のほうは石組み炉とはすこしずれている。上層の焼土のなかから 3 cm ほどの黒曜石剝片が 1 点出土した。炉とは別に、東と西に焼土のまとまりがあり、炭化物もみられた。<sup>14</sup>C 測定年代は、東側のものが  $4,060 \pm 120$  y. B. P. (KSU-377)、西側のものが  $3,600 \pm 90$  y. B. P. (KSU-378) である。

土器は 4 個体分が、床面にちかいところで検出され、3 個体が復原できた。北筒式、鶴狩式と、最花式に近似するものである。

出土した土器、石器はすべて図示した。遺物としては、ほかに黒曜石、頁岩、安山岩などの剥片、破片が 113 点ある。黒曜石は 98 点あり、そのうち 80 点ほどは南西の隅に集中している。肉眼観察では、黒曜石は 3 個の原石に、頁岩は 4 個の原石になるものと思われる。

床面の土壤の一部 2.8 l を水洗処理したら、「不規則な炭化木片の多数の細片のなかから、ヒシの刺針を 1 点」検出している (開拓記念館、矢野牧夫氏による)。

6 号住居跡 (図 5-10、図版 5 の 7) 標高 33 m ほどの高いところにある。ほぼ円形で、内と外にピットがある。埋積土は、黒褐色土であり II b 層ととらえているものである。床面にちかいところから、すり石が 1 点出土している。安山岩製で、重量は 1,160 g である。縄文時代早期の造構であろう。

1 号落し穴 (図 5-10、図版 5 の 7) 長軸は等高線にはば直交する。底部は、長軸方向にひろがっている。出土遺物はない。

1 号ピット (図 5-11、図版 5 の 8) 確認面から底部までの深さは、0.1 m である。出土遺物は、頁岩製のつまみ付きナイフ (13.3 g) と無文土器である。土器は、船泊上層式である。

2 号ピット (図 5-11、図版 5 の 8) 確認面から底部までの深さは、0.2 m である。船泊上層式の無文土器が出土している。

3 号ピット (図 5-12、図版 5 の 9) 平面形は、隅がまるくなる三角形である。確認面から底部までの深さは 0.15 m である。底面ちかくには、角砾、軽石などが多くみられ、砾のあいだ

から土器片9点と石斧破損品が出土した。底部ちかくで、微量のベンガラを検出した。図示した土器は、1と5は入江貝塚の第3層に比定され、2は後期前葉、3、4は中期後葉に位置づけられる。石斧は泥岩を素材として、重量は410gである。

4号ピット(図5-13、図版5の10)傾斜地にあり、平面形は半円状に検出できた。出土遺物はない。

5号ピット(図5-13、図版5の10)5号住居跡に接している。確認面から底部までの深さは0.2mである。中央ちかくに、後期前葉とおもわれる、斜行縞文が底部ちかくまで施されている土器が、出土した。ベンガラも出土している。

6号ピット(図5-14、図版5の11)確認面から底部までの深さは、0.35mである。黒曜石の剥片が3点と、図示した円筒上層式土器と同一個体の小破片が1点だけ出土した。

7号ピット(図5-14、図版5の11)傾斜地にあり、確認面から底部までの深さは0.15mである。出土遺物はない。

8号ピット(図5-15、図版5の12)傾斜地にあり、確認面から底部までの深さは0.15mである。角礫がみられるが、出土遺物はない。

9号ピット(図5-15、図版5の12)傾斜地にあり、確認面から底部までの深さは0.2mである。3点の角礫がみられるが、出土遺物はない。

表5-1 5号住居跡出土の図示した遺物

(土器)

博団番号	名 称	分 類	備 考	博団番号	名 称	分 類	備 考
1	土 器	田b-3	北筒式	3	土 器	田b-3	城花式に近似する
2	土 器	田b-3	北筒式	4	土 器	田b-3	静待式

(石器)

順序	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	備 考	順序	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	備 考
1	石やじり	I A 4 b	2.4	頁 岩		14	スクレイバー	田B 7	4.4	O b s	
2	石やじり	I B 1 a	2.9	O b s		15	"	田B 2 a	2.7	O b s	
3	石 やり	I B 1 a	3.7	O b s		16	斜縞のある剥片	X	1.5	O b s	
4	石 やり	I B 1 a	4.3	O b s		17	"	X	2.0	O b s	
5	石やじり	I A 4 a	2.3	O b s		18	スクレイバー	田B 2 b	16.3	O b s	
6	石 やり	I B 1 a	5.7	O b s		19	石 斧	田A 2	123.4	泥 岩	
7	スクレイバー	田B 7	5.3	O b s		20	石 斧	田A	30.4	泥 岩	
8	石 やり	I B 1 a	4.8	O b s		21	礫	田A 4	118.7	泥 岩	
9	スクレイバー	田B 7	2.8	O b s		22	斜縞のある礫	X	605	S a	住居の外
10	"	田B 3 b	24.5	O b s		23	"	X	95.0	S a	2点複合
11	"	田B 7	3.1	O b s		24	延 石	田B 1	530	砂 岩	3点複合
12	"	田B 2 b	4.0	O b s		25	延 石	田B 2	156	砂 岩	
13	"	田B 7	9.9	頁 岩							

\*22と23は、同一個体と思われる

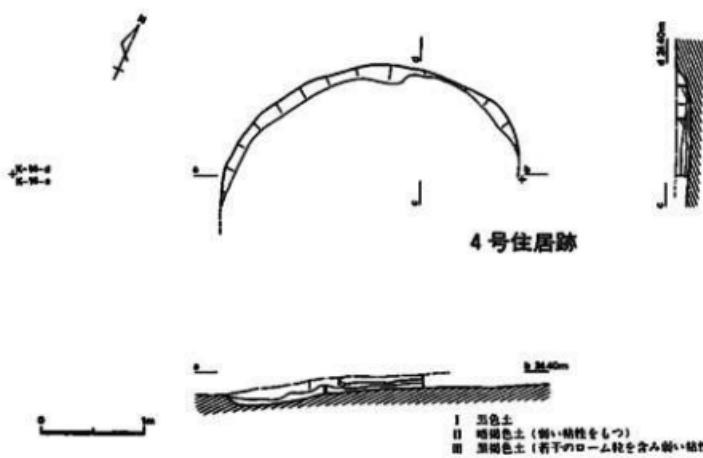
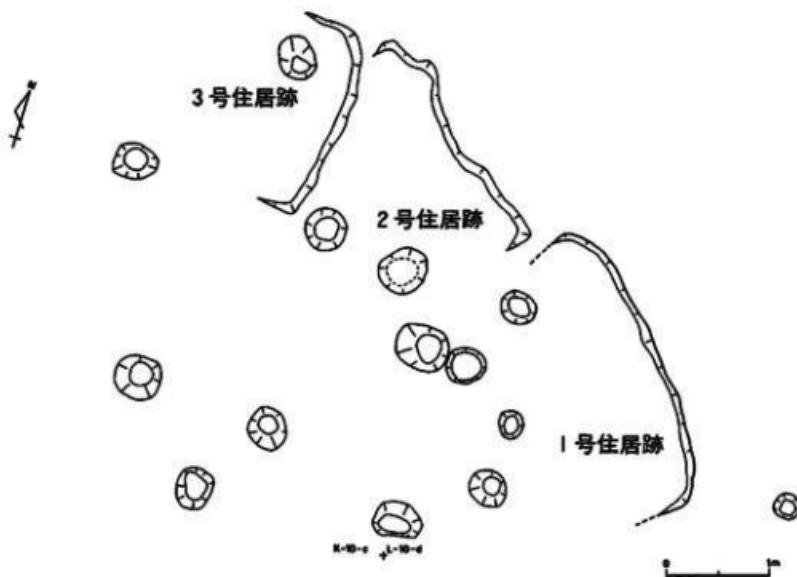


図5-5 1、2、3、4号住居跡

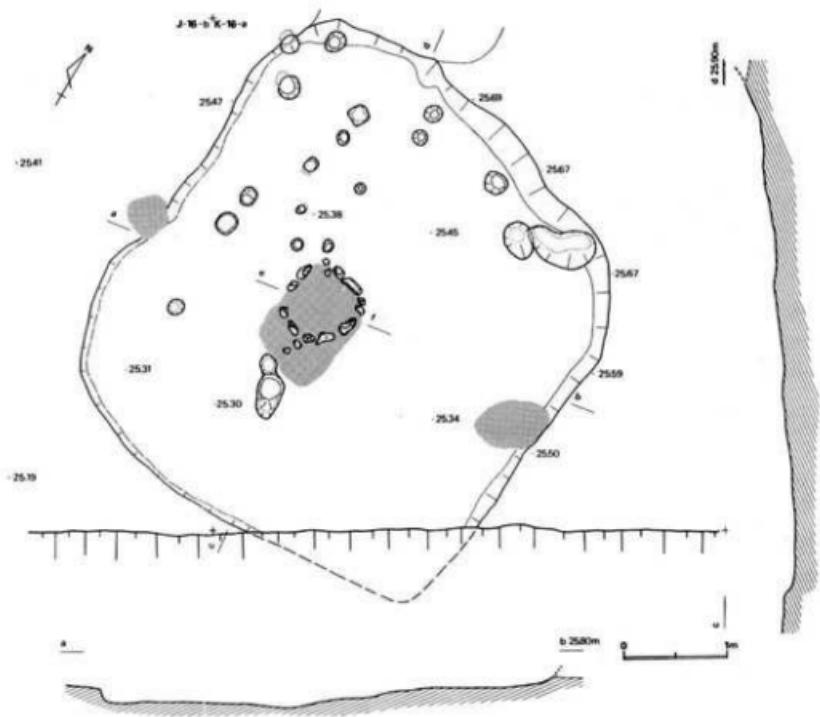


1、2、3号住居跡

4号住居跡



4号住居跡完掘



石組み炉跡

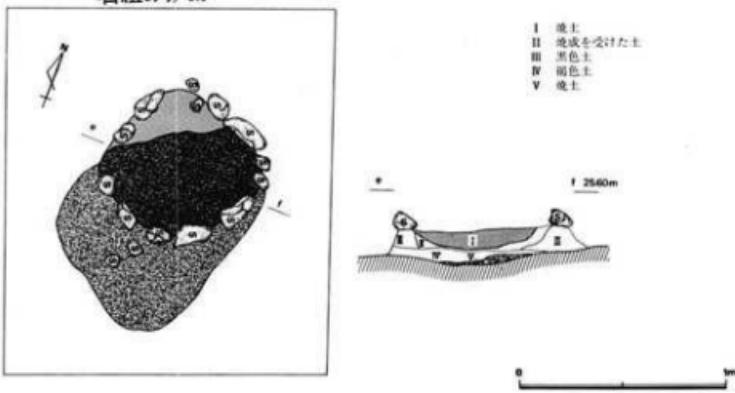


図5-6 5号住居跡



5号住居跡全景



5号住居跡完掘



5号住居跡

石組み炉

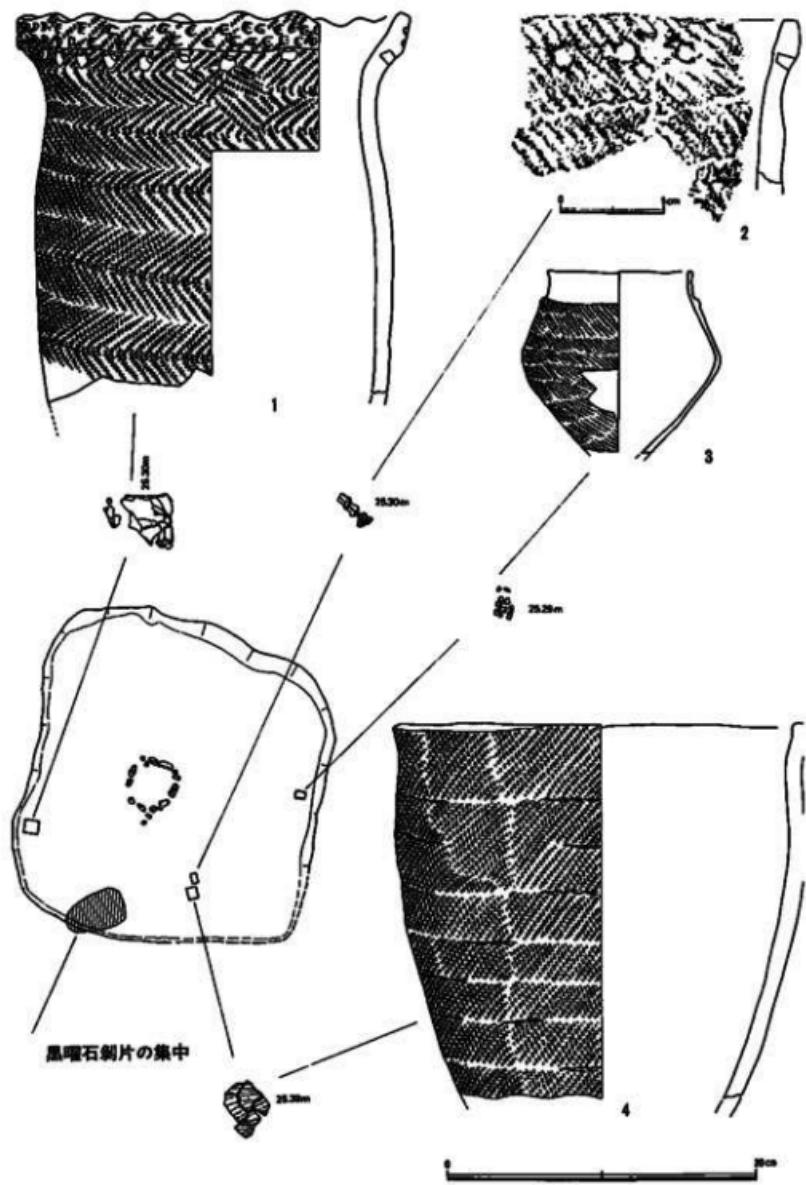


図5-7 5号住居跡の出土土器



5号住居跡の出土土器



図5-8 5号住居跡出土の石器



5号住居跡土器出土状態その2



5号住居跡土器出土状態その3



1



2



3



4



5



6



7



8

5号住居跡の石器その1

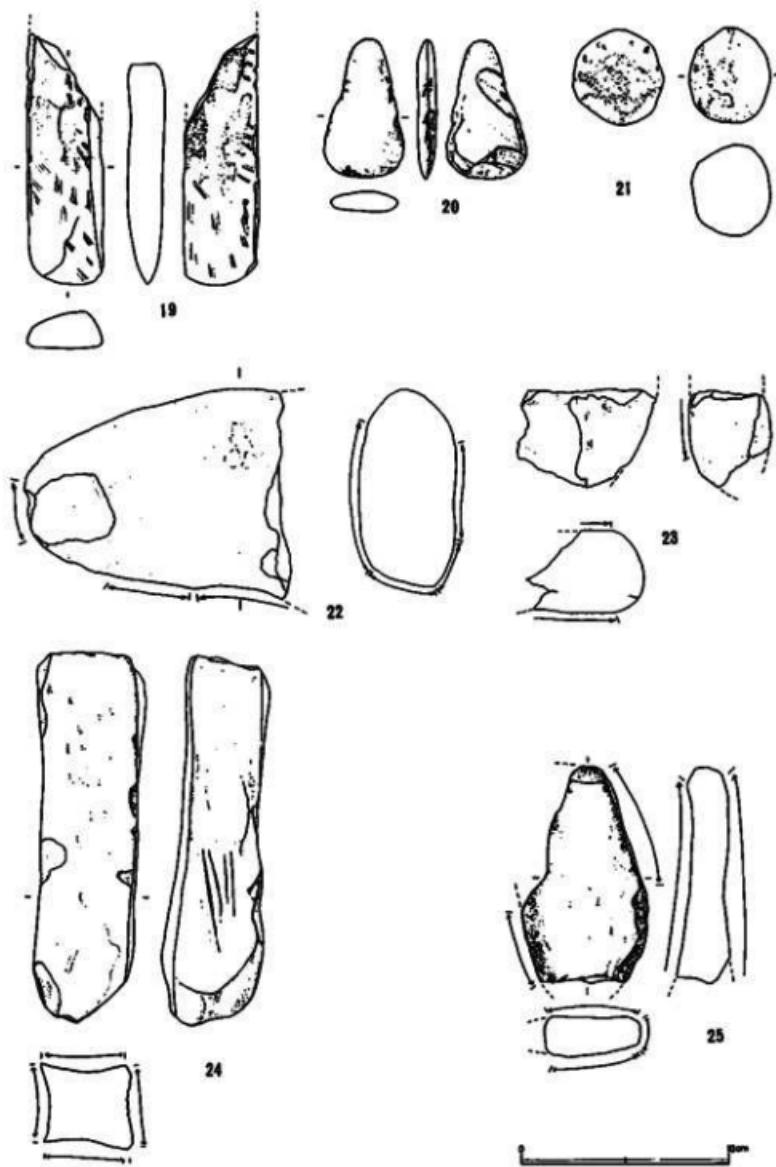
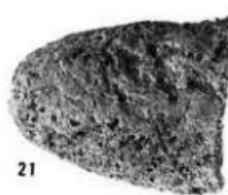


図5-9 5号住居跡出土の石器



5号住居跡の石器その2



その3

その4



22



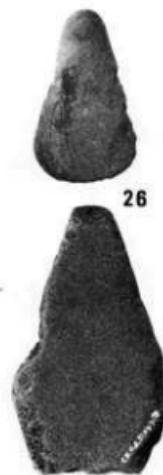
23



24



25



26

27

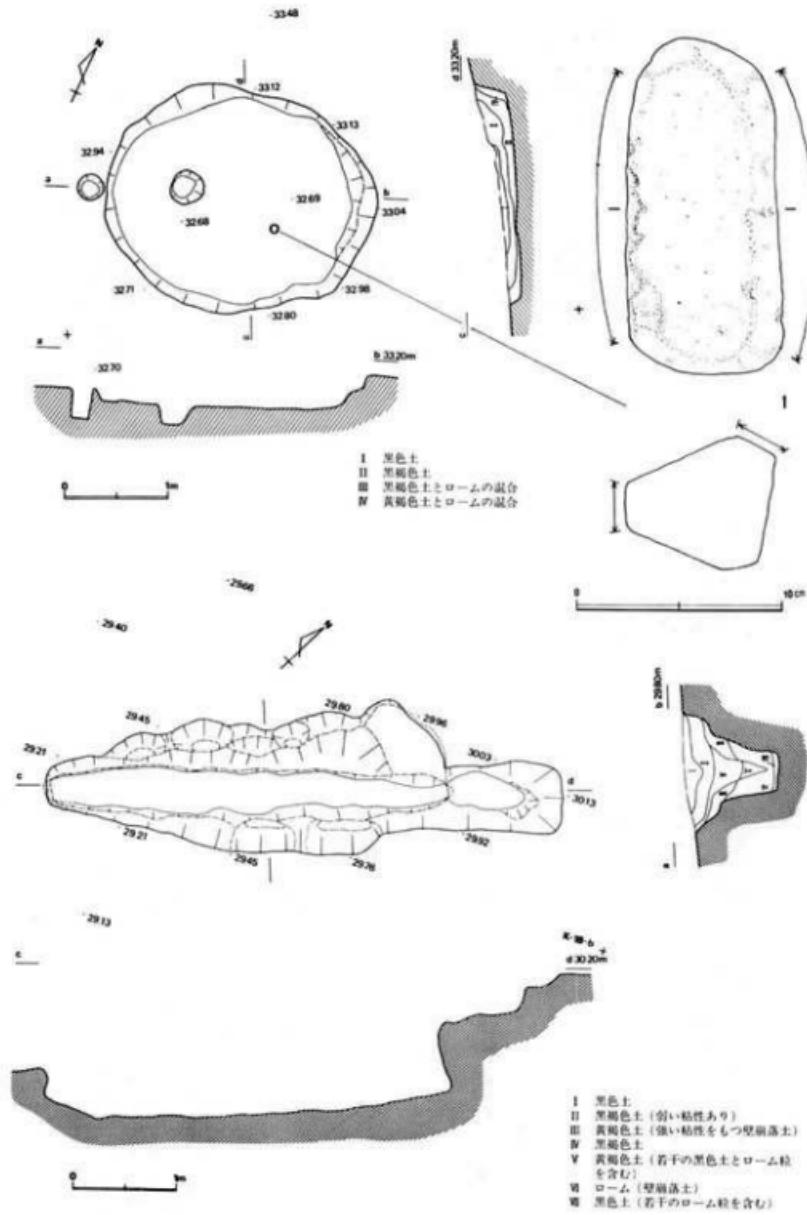


図 5-10 6号住居跡（上）・1号落し穴（下）



6号住居跡完掘

6号住居跡

出土石器



1号落し穴完掘



1号落し穴埋積の状態 1/2カット

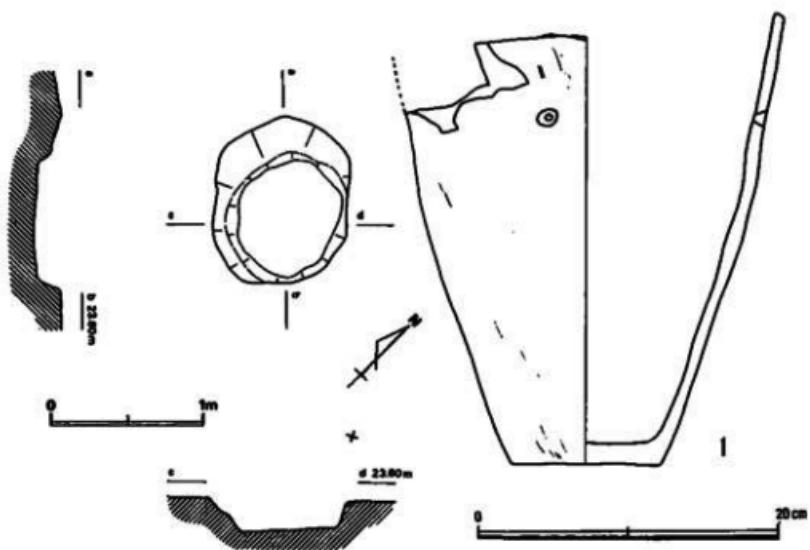
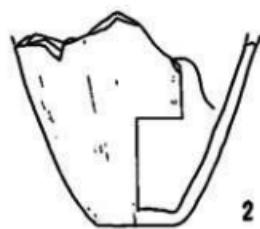
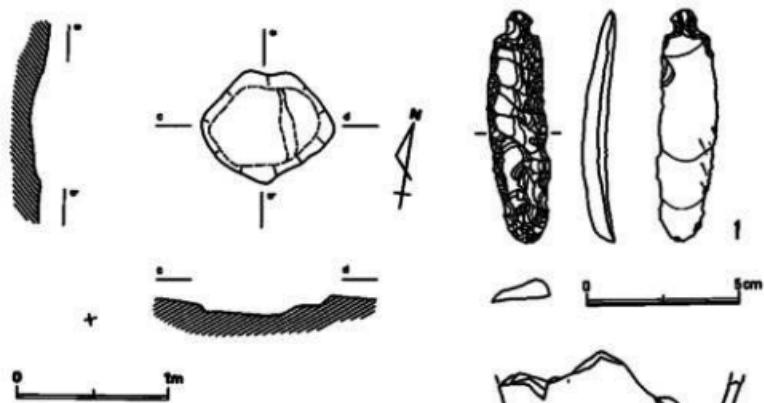
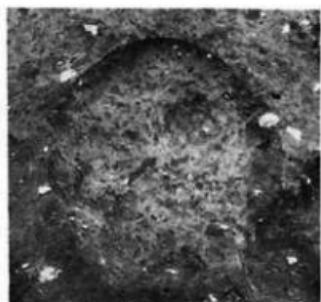


図5-11 1号ピット(上)・2号ピット(下)



1号ピット遺物出土状態



1号ピットその2



2号ピットその1



2号ピットその2



1号ピット遺物



1号ピット遺物



2号ピット遺物

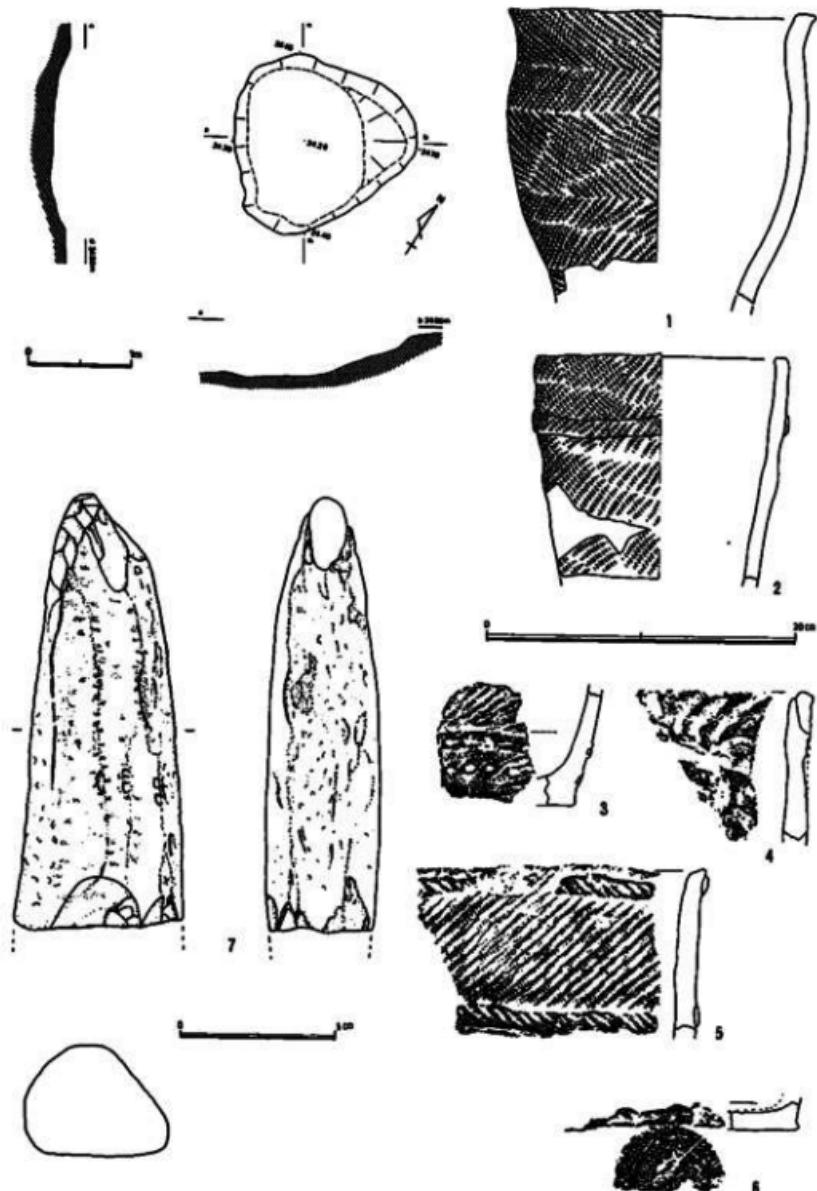


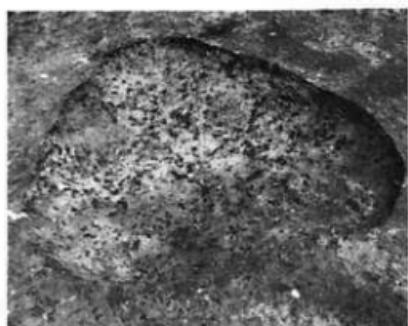
図5-12 3号ピット



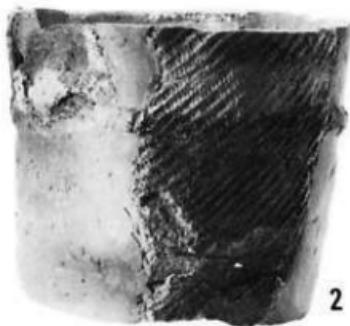
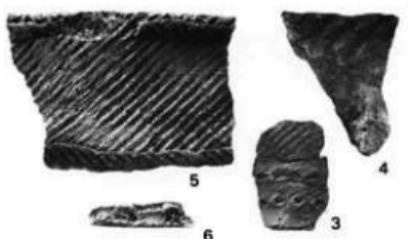
3号ピットその1



3号ピットその2



3号ピットその3



3号ピット土器・石器

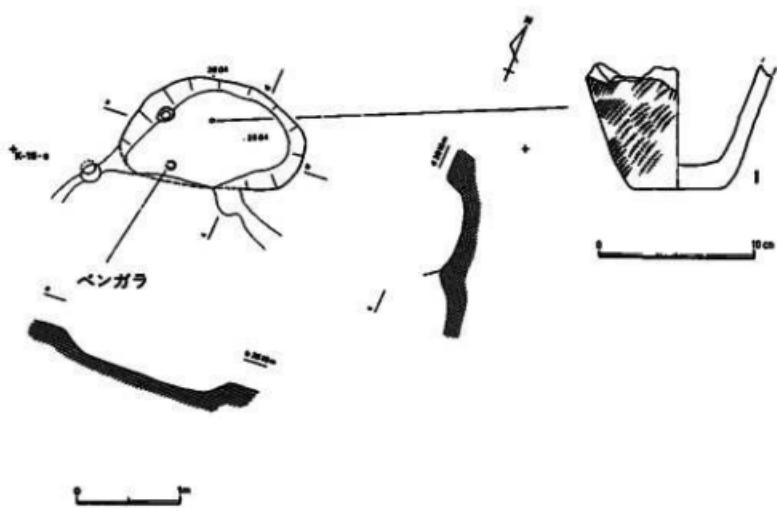
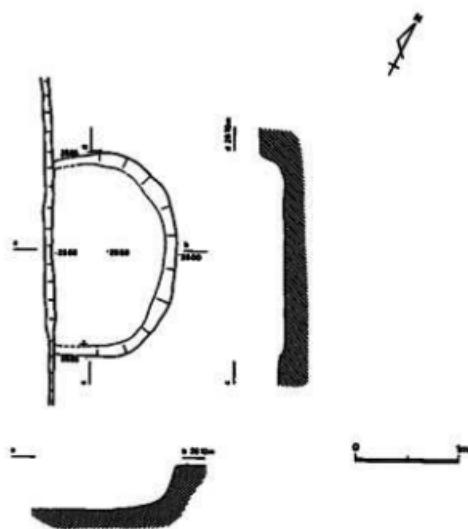
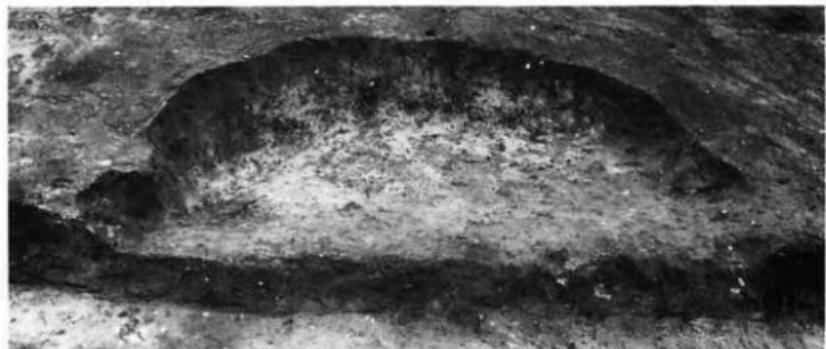


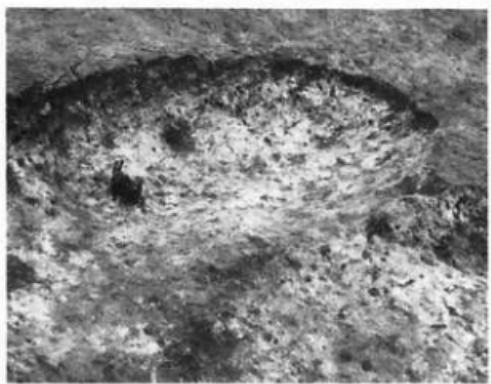
図3-13 4号ビット(上)・5号ビット(下)



4号ピット



4号ピット付近の作業風景



5号ピット



5号ピット出土土器

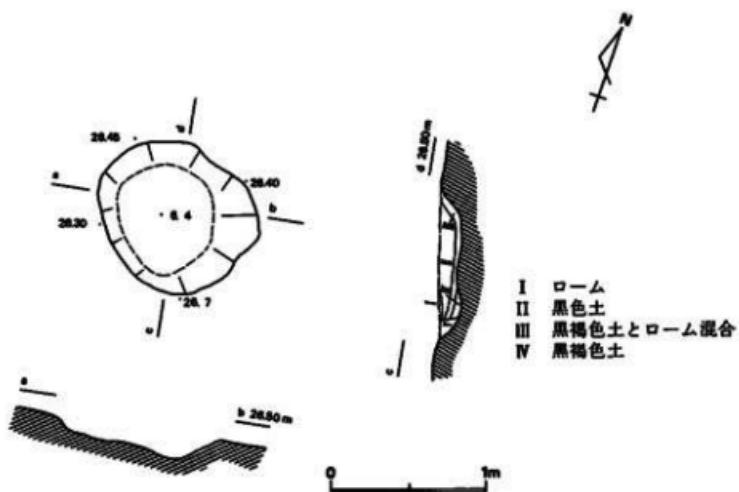
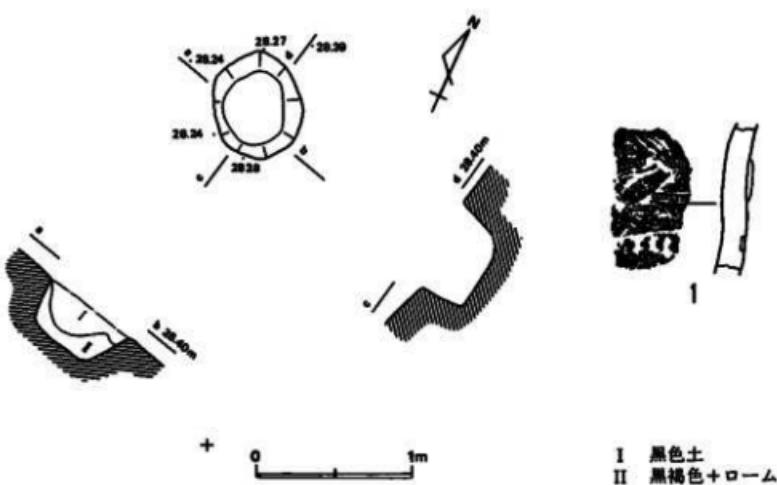
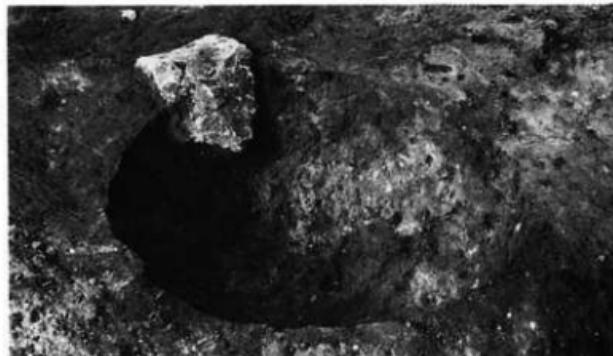


図5-14 6号ピット(上)・7号ピット(下)



6号ピット



7・8・9号ピット



7号ピット

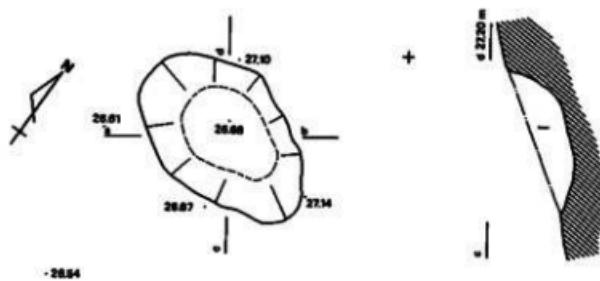
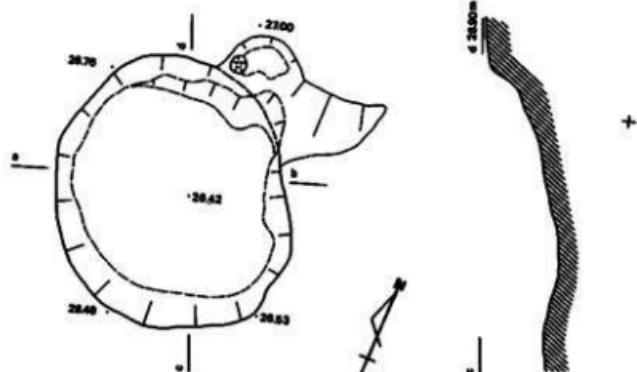


図5-15 8号ピット(上)・9号ピット(下)



8号ピット完掘



9号ピット完掘



作業風景（北から）

### 3. 包含層の遺物

縄文時代早期、中期、後期の遺物が出土している。中期後葉～後期中葉の遺物が多い。土器の時期による分類別のうちわけ、石器の器種による分類のうちわけは、表2と表3である。図5-16・17は、土器の破片、石器、剝片などの分布状態を示すものである。土器の分布は、時期によるちがいがよくあらわれている。

早期のものとしては、コッタロ式（I b-2）が2個体分みられるだけである（8・9・10）。II層の下部やII b層から出土している。

中期の前葉、中葉としては円筒上層式（III a）天神山式（III b-1）柏木川式（III b-2）などの破片が、点々とみられる。天神山式土器の大きな破片が出土している（図5-18）。

中期後葉（III b-3）のものとしては、北筒式、静狩式、ノダップII式類似のものなどである。ひろく分布しているが、5号住居跡のちかくと3号ピットのちかくに、まとまりを認められる。多くの破片が出土しているが、器形を復原できたものはない。

後期は前葉（IV a）と中葉（IV b）のものが出土している。前葉は余市式、入江式など、中葉は船泊上層式、手桶式などである。余市式、入江式などは標高26mより低いところに、小さなまとまりとしてみられ、個体ごとに散った状態である。78は3号ピットから出土した土器と接合する。手桶式、船泊上層式などは標高24mより低いところにまとまっており、1号ピット・2号ピットと重なっている。器形を推定しうるものを6点図示した（2-7）。

石器、剝片等の分布は、土器の分布状態とはほぼ同じである。剝片、破片のドットは、密集したところは、一部省略したところもある。49～53の5点の穿孔具は、めのう質灰岩を素材とする同じようなつくりの石器である。50は5号住居跡のちかく、他の4点は3号ピットのちかくから出土している。

表5-2 包含層出土の土器分類別一覧表

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
土 器	I b-2	55	土 器	III b-3	1,749	土 器	IV b	1,395
#	III a	9	#	III b-	2	#	不明	835
#	III b-2	6	#	IV a	304	#	総計	4,355

表5-3 包含層出土の石器等分類別一覧表

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
石やヒリ	I A 3 a	1	つまみ付ナイフ	III A 1 d	1	敲 石	V A 1	1
	I A 4 a	18		III A 1 -	1		V A 4	1
	I A 4 b	3		III A 2	1	磨 石	V A 3	1
	I A -	3	スレーバー	III B 2 a	3	石 頭	V B 1	1
石 やり	I B 1 a	17		III B 2 b	5	砥 石	V B 2	3
	I B 2	1		III B 4	1	石 核	IX	4
	I B -	2		III B 5	3	加使剝片	X	156
穿 孔 具	II A 1	3		III B 7	14	剝 片		687
	II A 2	5	石 片	IV A 2	3			87
	II B 1	1		IV A 4	1	總 口		1,035
つまみ付ナイフ	III A 1 b	1	石 芬	IV A -	2			
	III A 1 c	2	石 のみ	IV B	2			

から土器片9点と石斧破損品が出土した。底部ちかくで、微量のベンガラを検出した。図示した土器は、1と5は入江貝塚の第3層に比定され、2は後期前葉、3、4は中期後葉に位置づけられる。石斧は泥岩を素材として、重量は410gである。

4号ピット(図5-13、図版5の10)傾斜地にあり、平面形は半円状に検出できた。出土遺物はない。

5号ピット(図5-13、図版5の10)5号住居跡に接している。確認面から底部までの深さは0.2mである。中央ちかくに、後期前葉とおもわれる、斜行縄文が底部ちかくまで施されている土器が、出土した。ベンガラも出土している。

6号ピット(図5-14、図版5の11)確認面から底部までの深さは、0.35mである。黒曜石の剥片が3点と、図示した円筒上層式土器と同一個体の小破片が1点だけ出土した。

7号ピット(図5-14、図版5の11)傾斜地にあり、確認面から底部までの深さは0.15mである。出土遺物はない。

8号ピット(図5-15、図版5の12)傾斜地にあり、確認面から底部までの深さは0.15mである。角礫がみられるが、出土遺物はない。

9号ピット(図5-15、図版5の12)傾斜地にあり、確認面から底部までの深さは0.2mである。3点の角礫がみられるが、出土遺物はない。

表5-1 5号住居跡出土の図示した遺物

(土器)

博団番号	名 称	分 類	備 考	博団番号	名 称	分 類	備 考
1	土 器	田b-3	北筒式	3	土 器	田b-3	城花式に近似する
2	土 器	田b-3	北筒式	4	土 器	田b-3	静待式

(石器)

順序	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	備 考	順序	名 称	分 類	重 量(g)	材 質	備 考
1	石やじり	I A 4 b	2.4	頁 岩		14	スクレイバー	田B 7	4.4	O b s	
2	石やじり	I B 1 a	2.9	O b s		15	"	田B 2 a	2.7	O b s	
3	石 やり	I B 1 a	3.7	O b s		16	斜縄文の丸い剥片	X	1.5	O b s	
4	石 やり	I B 1 a	4.3	O b s		17	"	X	2.0	O b s	
5	石やじり	I A 4 a	2.3	O b s		18	スクレイバー	田B 2 b	16.3	O b s	
6	石 やり	I B 1 a	5.7	O b s		19	石 斧	田A 2	123.4	泥 岩	
7	スクレイバー	田B 7	5.3	O b s		20	石 斧	田A	30.4	泥 岩	
8	石 やり	I B 1 a	4.8	O b s		21	礫	田A 4	118.7	泥 岩	
9	スクレイバー	田B 7	2.8	O b s		22	斜縄文の丸い礫	X	605	S a	住居の外
10	"	田B 3 b	24.5	O b s		23	"	X	95.0	S a	2点複合
11	"	田B 7	3.1	O b s		24	延 石	田B 1	530	砂 岩	3点複合
12	"	田B 2 b	4.0	O b s		25	延 石	田B 2	156	砂 岩	
13	"	田B 7	9.9	頁 岩							

\*22と23は、同一個体と思われる

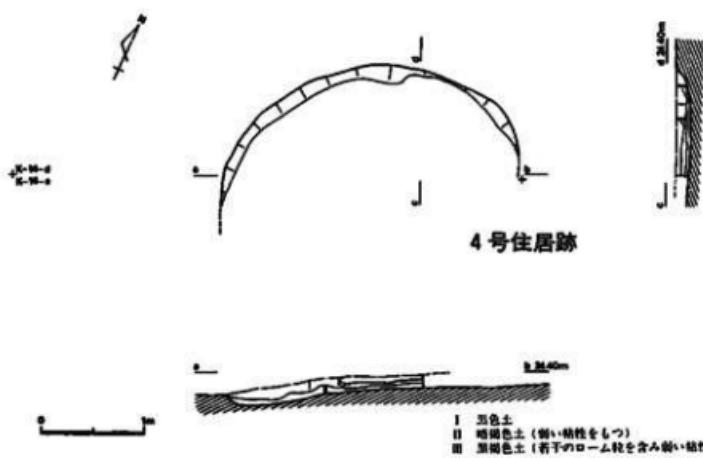
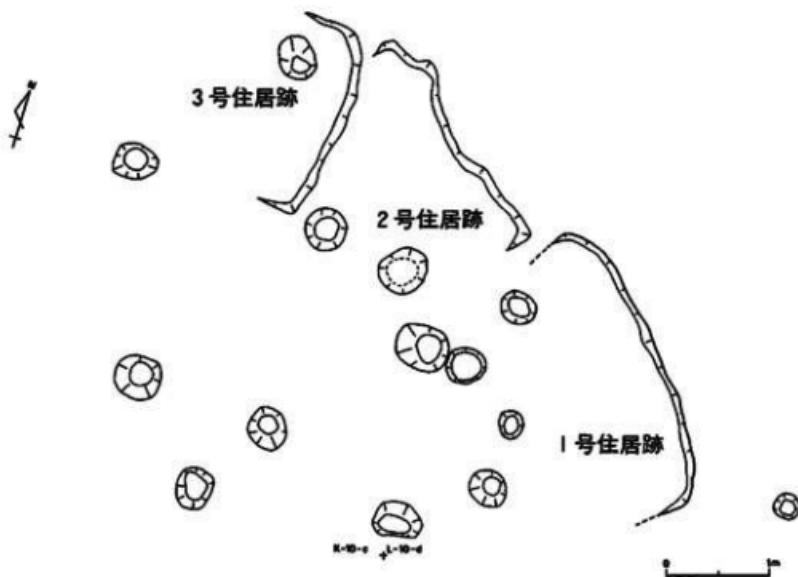
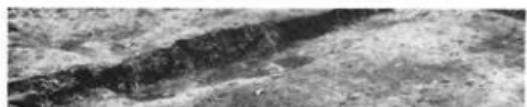


図5-5 1、2、3、4号住居跡



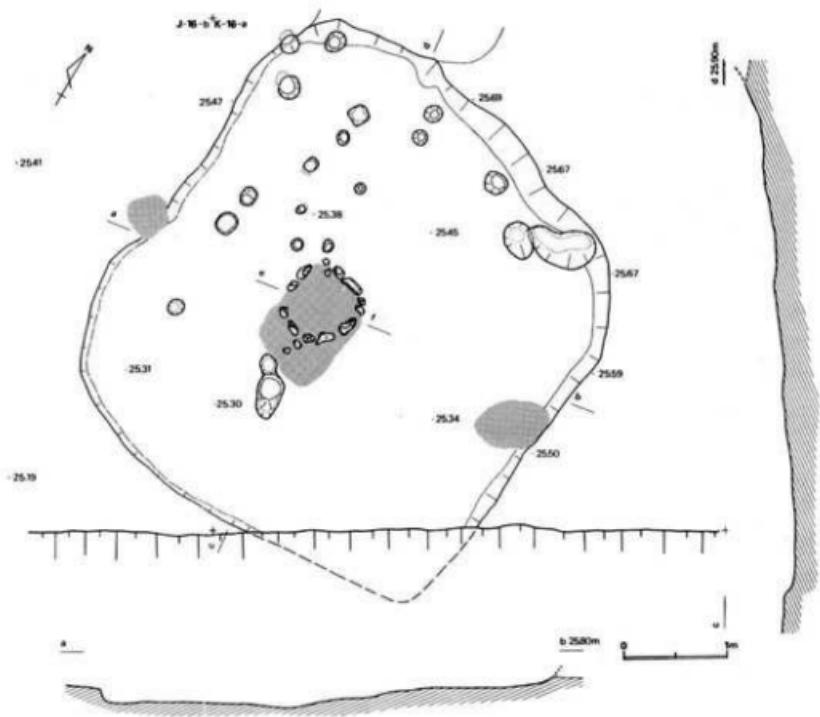
1、2、3号住居跡



4号住居跡



4号住居跡完掘



石組み炉跡

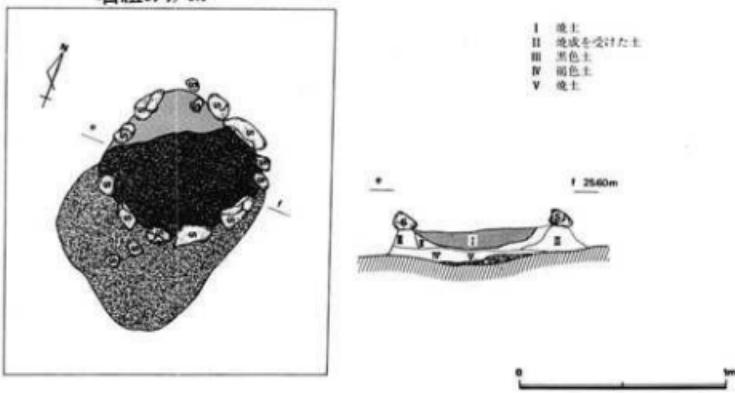


図5-6 5号住居跡



5号住居跡全景



5号住居跡完掘



5号住居跡

石組み炉

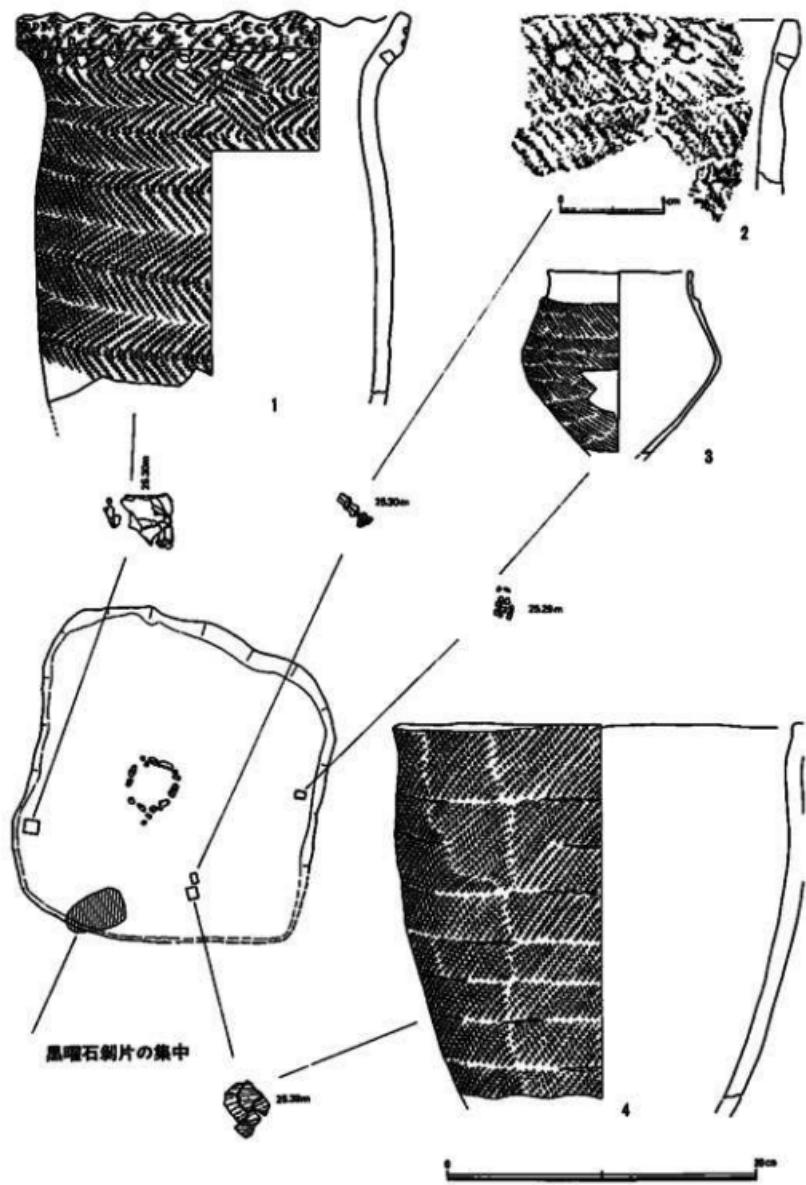


図5-7 5号住居跡の出土土器



5号住居跡の出土土器



図5-8 5号住居跡出土の石器



5号住居跡土器出土状態その2



5号住居跡土器出土状態その3



5号住居跡の石器その1

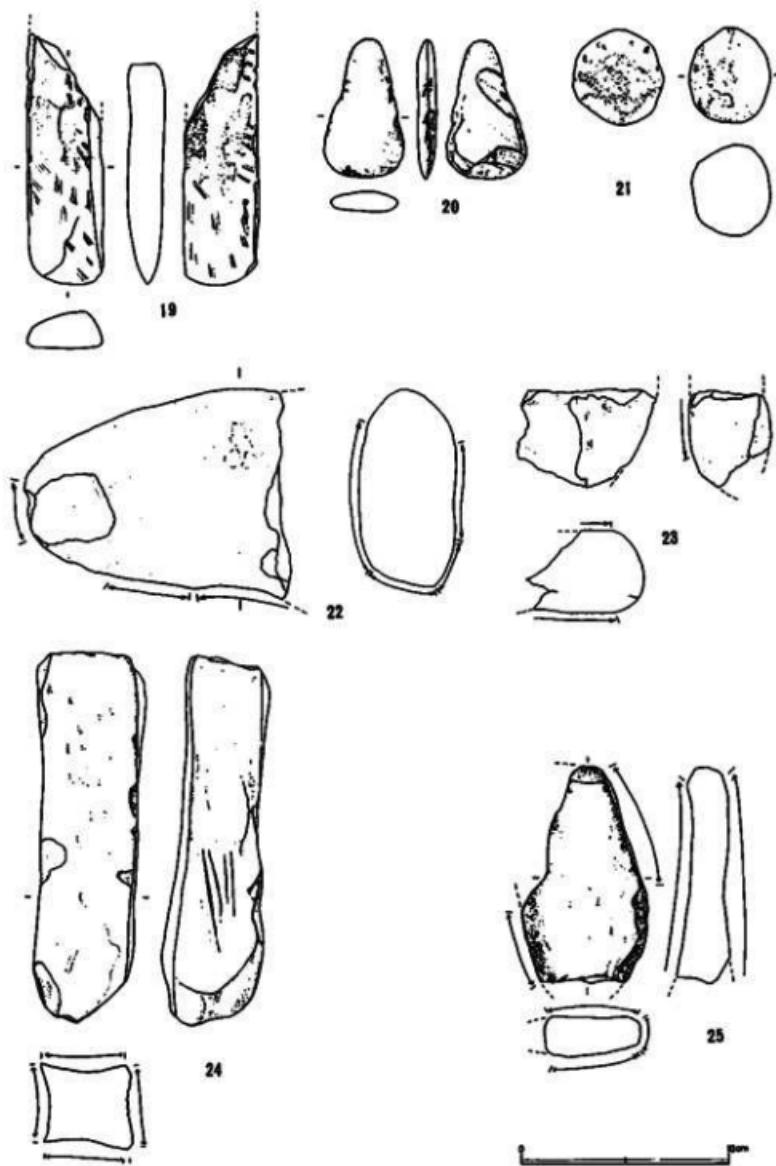
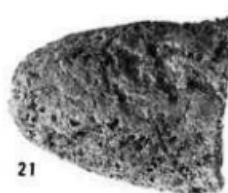


図5-9 5号住居跡出土の石器



5号住居跡の石器その2



その3

その4



22



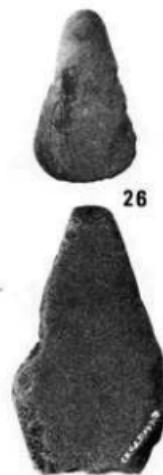
23



24



25



26

27

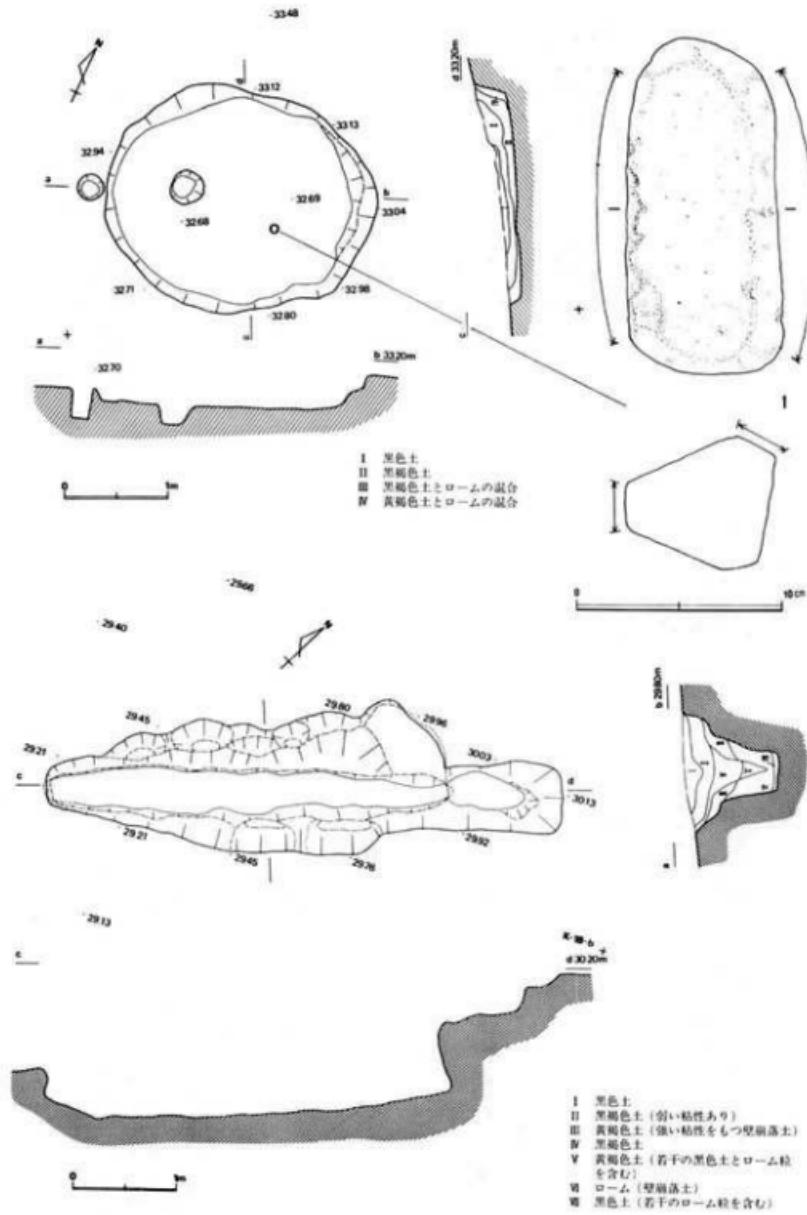


図 5-10 6号住居跡（上）・1号落し穴（下）



6号住居跡完掘

6号住居跡

出土石器



1号落し穴完掘



1号落し穴埋積の状態 1/2カット

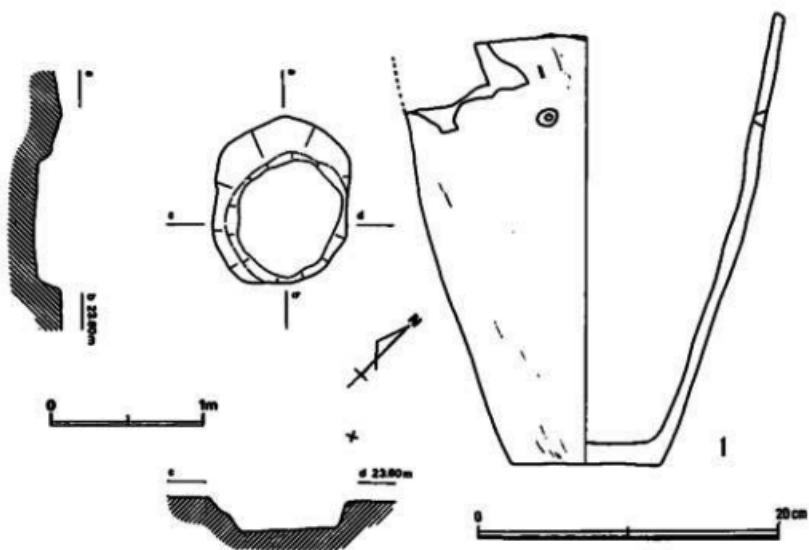
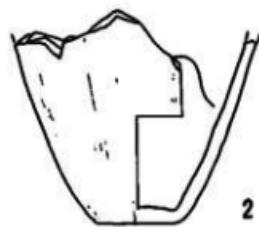
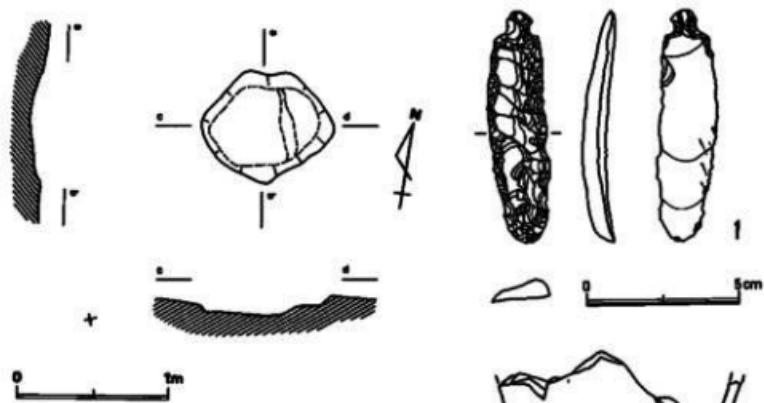
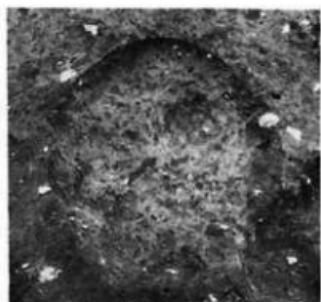


図5-11 1号ピット(上)・2号ピット(下)



1号ピット遺物出土状態



1号ピットその2



2号ピットその1



2号ピットその2



1号ピット遺物



1号ピット遺物



2号ピット遺物

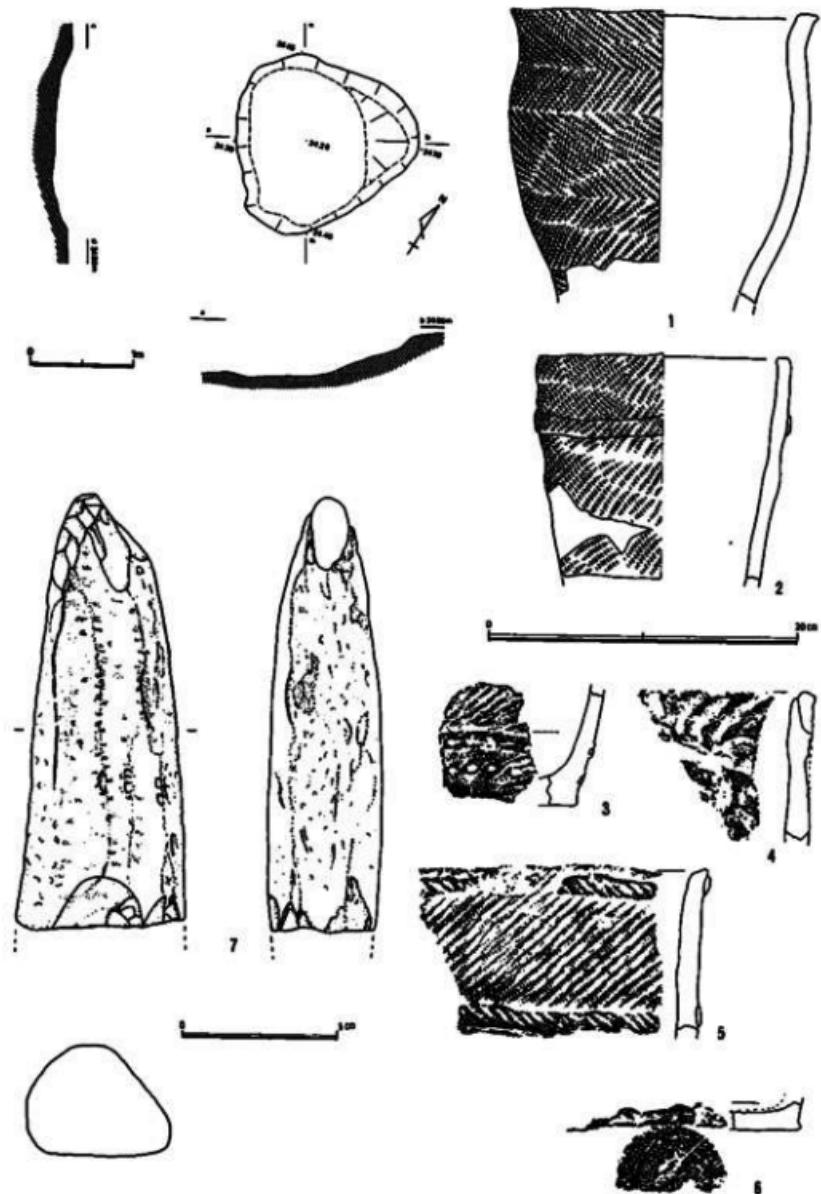


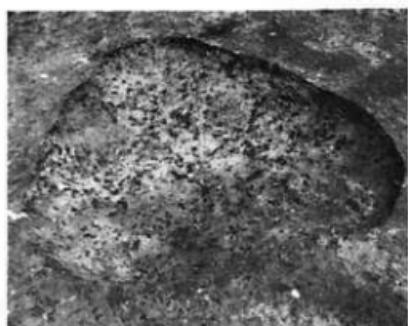
図5-12 3号ピット



3号ピットその1



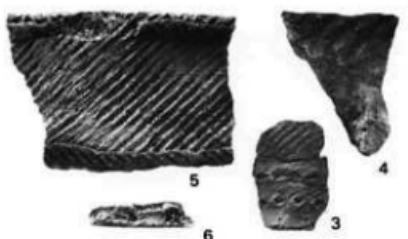
3号ピットその2



3号ピットその3



1



2

3号ピット土器・石器

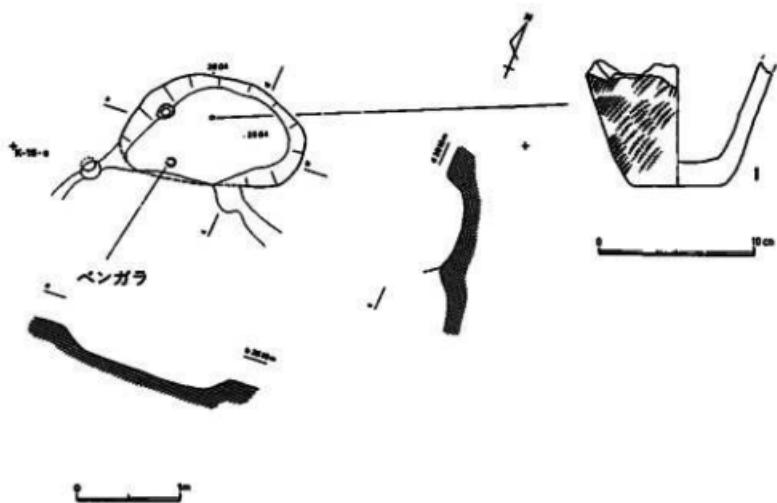
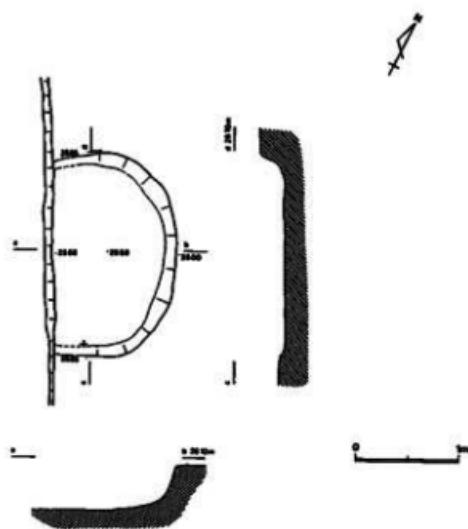
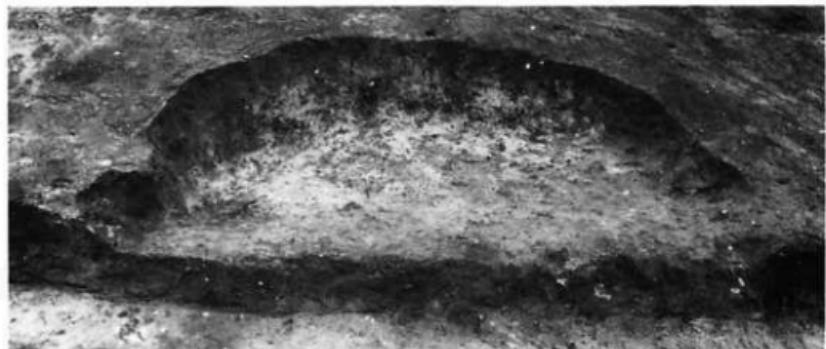


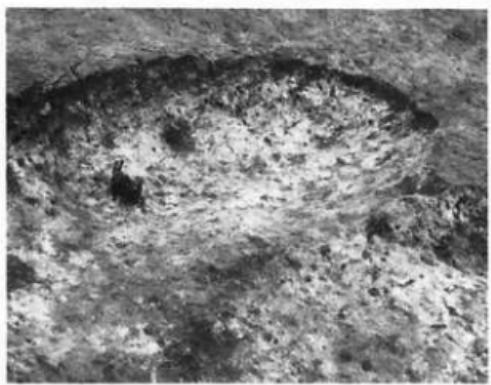
図3-13 4号ビット(上)・5号ビット(下)



4号ピット



4号ピット付近の作業風景



5号ピット



5号ピット出土土器

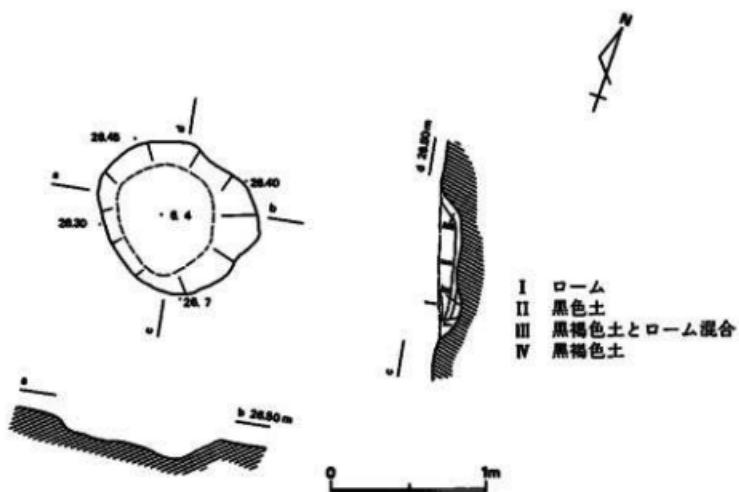
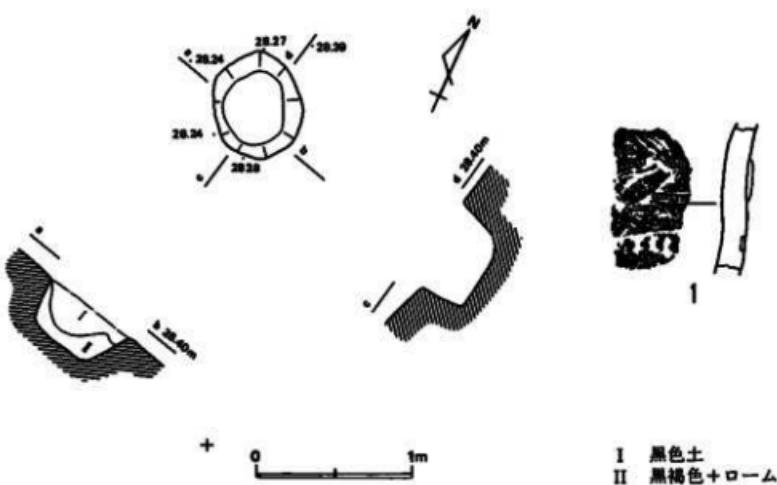
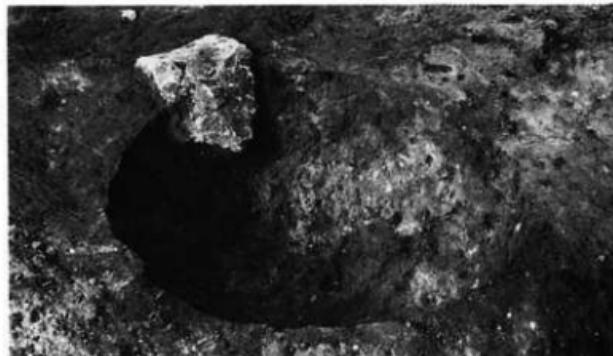


図5-14 6号ピット(上)・7号ピット(下)



6号ピット



7・8・9号ピット



7号ピット

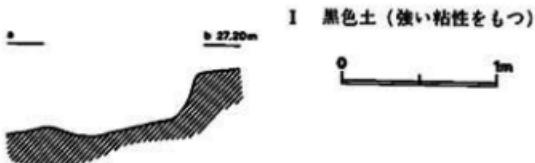
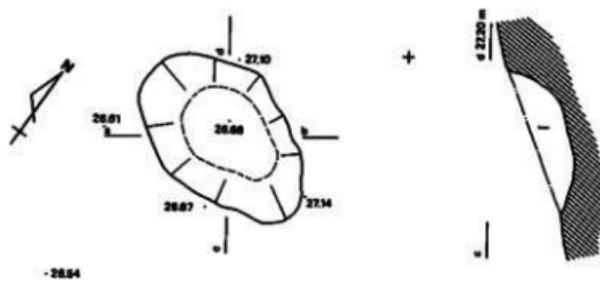
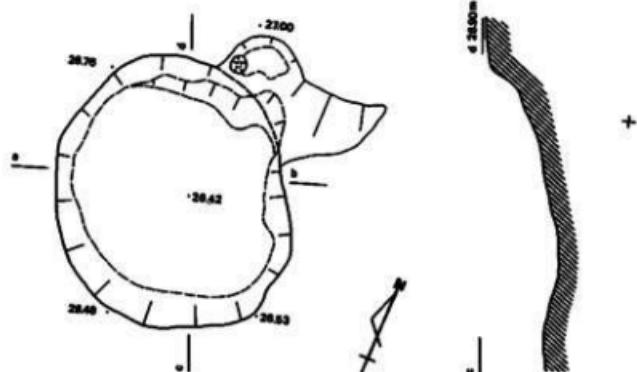


図5-15 8号ピット(上)・9号ピット(下)



8号ピット完掘



9号ピット完掘



作業風景（北から）

### 3. 包含層の遺物

縄文時代早期、中期、後期の遺物が出土している。中期後葉～後期中葉の遺物が多い。土器の時期による分類別のうちわけ、石器の器種による分類のうちわけは、表2と表3である。図5-16・17は、土器の破片、石器、剝片などの分布状態を示すものである。土器の分布は、時期によるちがいがよくあらわれている。

早期のものとしては、コッタロ式（I b-2）が2個体分みられるだけである（8・9・10）。II層の下部やII b層から出土している。

中期の前葉、中葉としては円筒上層式（III a）天神山式（III b-1）柏木川式（III b-2）などの破片が、点々とみられる。天神山式土器の大きな破片が出土している（図5-18）。

中期後葉（III b-3）のものとしては、北筒式、静狩式、ノダップII式類似のものなどである。ひろく分布しているが、5号住居跡のちかくと3号ピットのちかくに、まとまりを認められる。多くの破片が出土しているが、器形を復原できたものはない。

後期は前葉（IV a）と中葉（IV b）のものが出土している。前葉は余市式、入江式など、中葉は船泊上層式、手桶式などである。余市式、入江式などは標高26mより低いところに、小さなまとまりとしてみられ、個体ごとに散った状態である。78は3号ピットから出土した土器と接合する。手桶式、船泊上層式などは標高24mより低いところにまとまっており、1号ピット・2号ピットと重なっている。器形を推定しうるものを6点図示した（2-7）。

石器、剝片等の分布は、土器の分布状態とはほぼ同じである。剝片、破片のドットは、密集したところは、一部省略したところもある。49-53の5点の穿孔具は、めのう質灰岩を素材とする同じようなつくりの石器である。50は5号住居跡のちかく、他の4点は3号ピットのちかくから出土している。

表5-2 包含層出土の土器分類別一覧表

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
土 器	I b-2	55	土 器	III b-3	1,749	土 器	IV b	1,395
#	III a	9	#	III b-	2	#	不明	835
#	III b-2	6	#	IV a	304	#	総計	4,355

表5-3 包含層出土の石器等分類別一覧表

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
石やヒリ	I A 3 a	1	つまみ付ナイフ	III A 1 d	1	敲 石	V A 1	1
	I A 4 a	18		III A 1 -	1		V A 4	1
	I A 4 b	3		III A 2	1	磨 石	V A 3	1
	I A -	3	スレーバー	III B 2 a	3	石 頭	V B 1	1
石 やり	I B 1 a	17		III B 2 b	5	砥 石	V B 2	3
	I B 2	1		III B 4	1	石 核	IX	4
	I B -	2		III B 5	3	加使剝片	X	156
穿 孔 具	II A 1	3		III B 7	14	剝 片		687
	II A 2	5	石 片	IV A 2	3			87
	II B 1	1		IV A 4	1	總 口		1,035
つまみ付ナイフ	III A 1 b	1	石 芬	IV A -	2			
	III A 1 c	2	石 のみ	IV B	2			

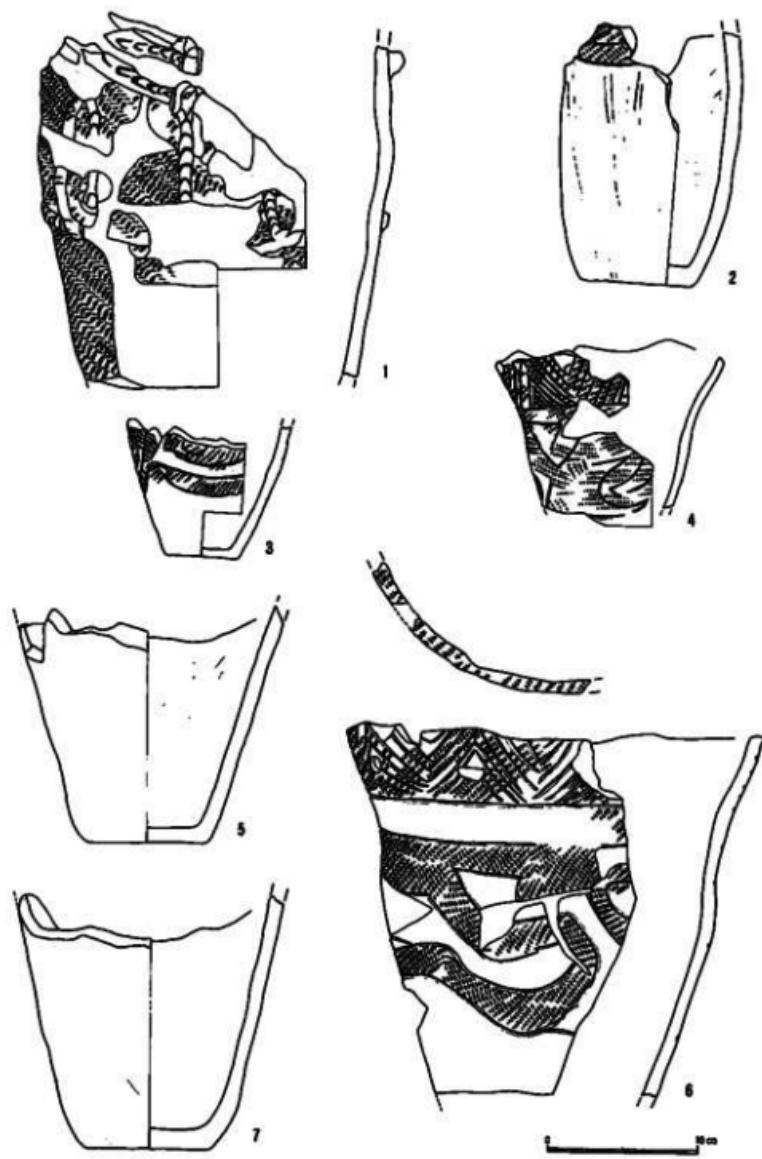


図5-18 包含層出土の土器

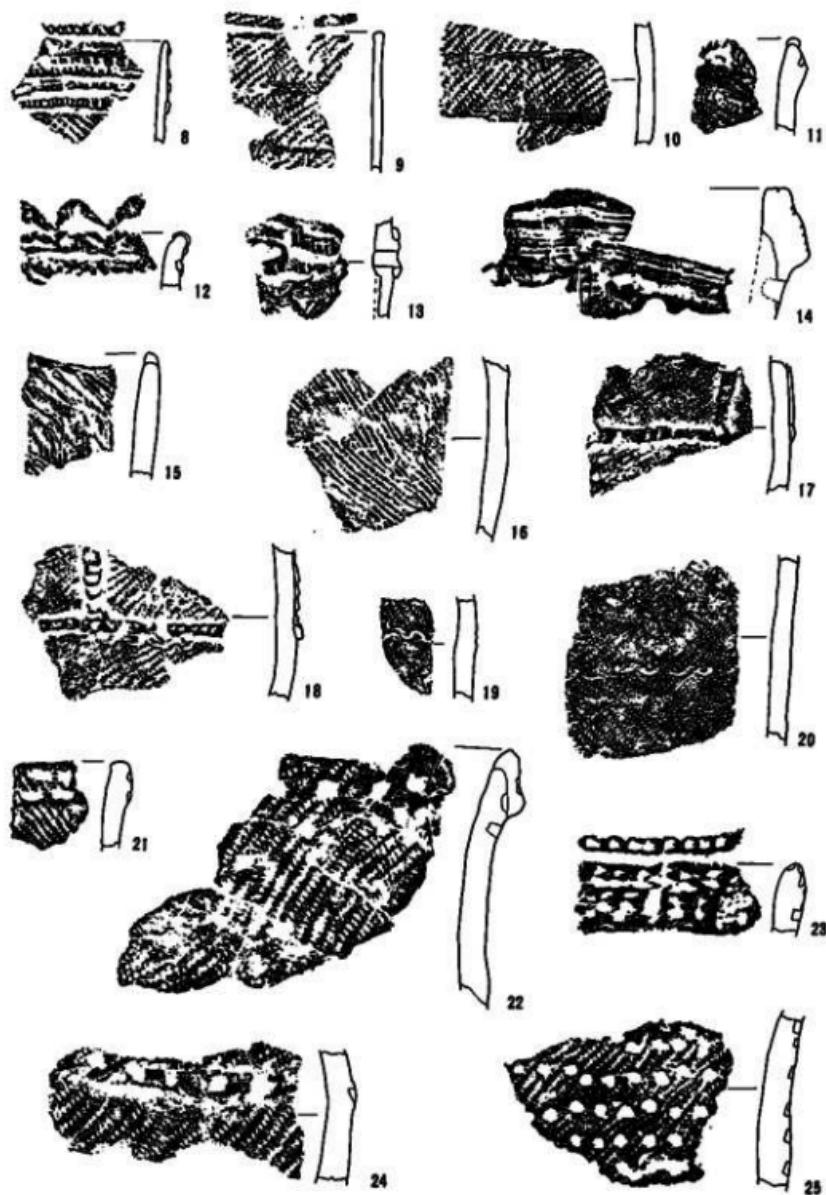


図5-19 包含層出土の土器

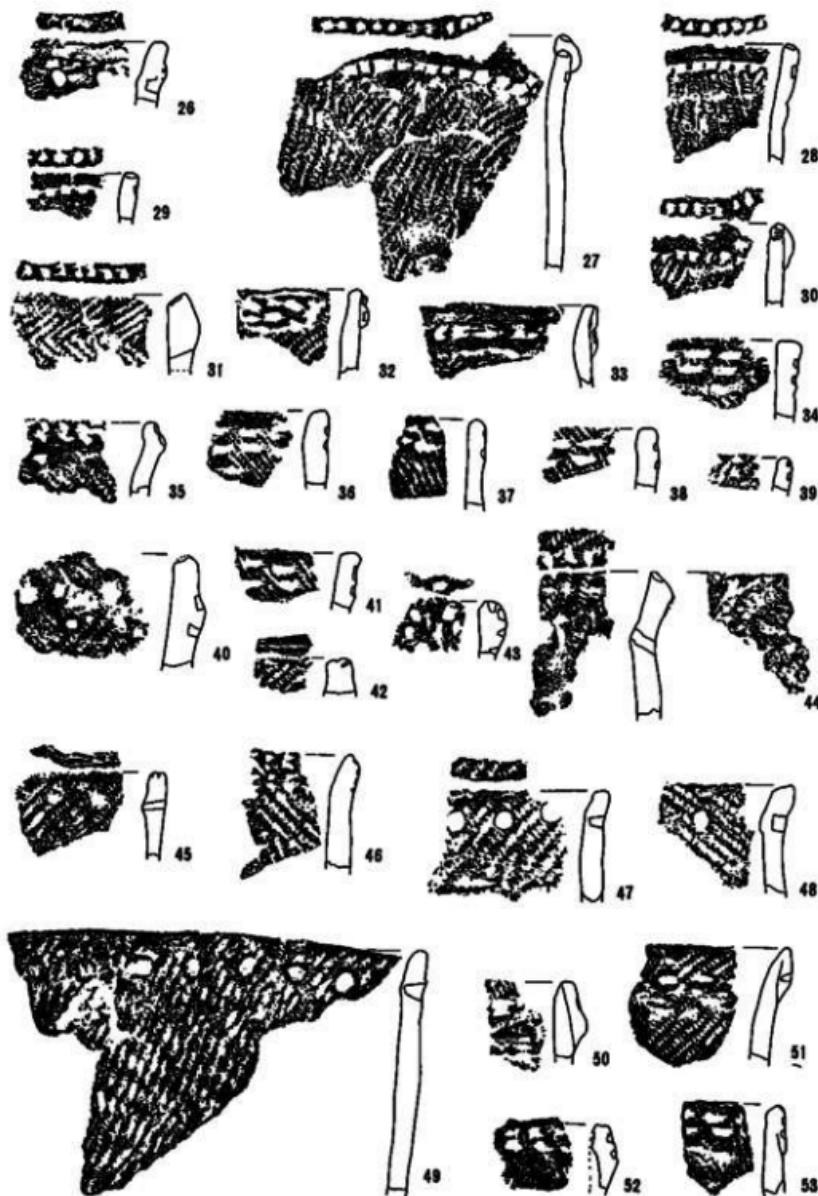


図5-20 包含層出土の土器

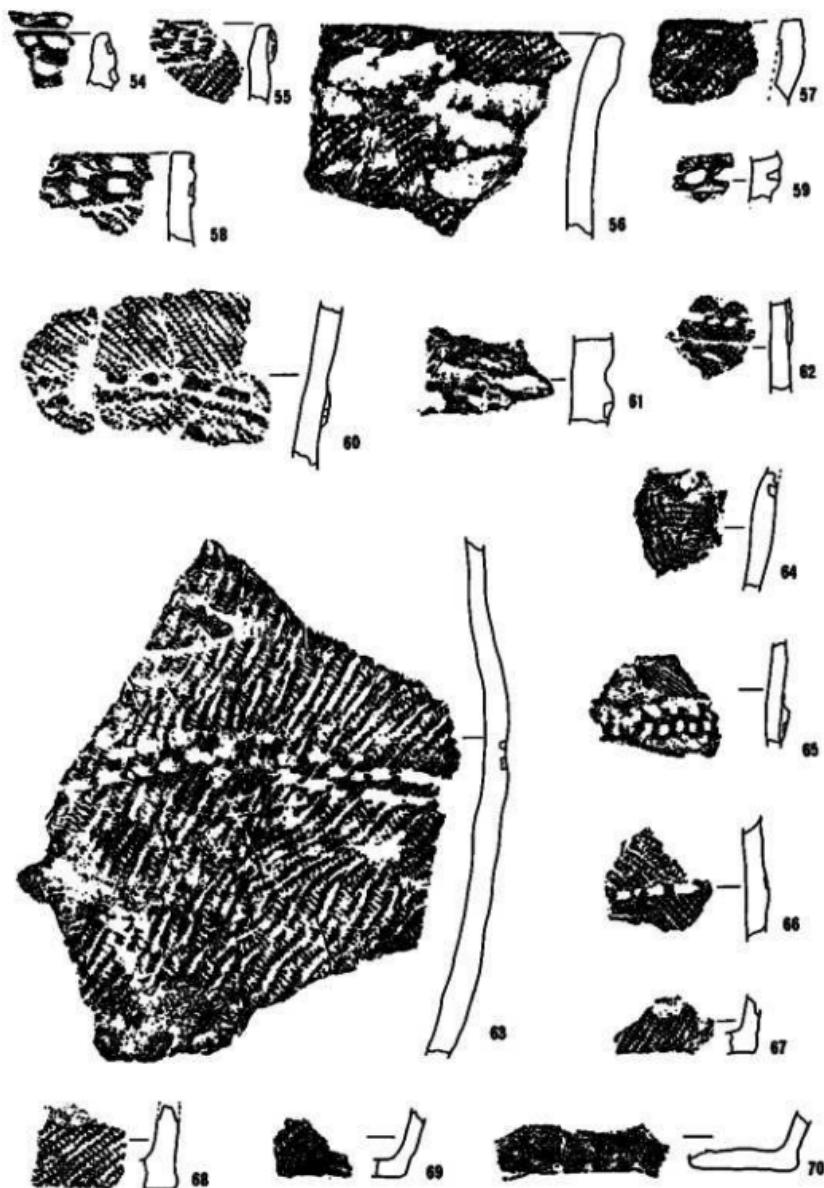


図5-21 包含層出土の土器

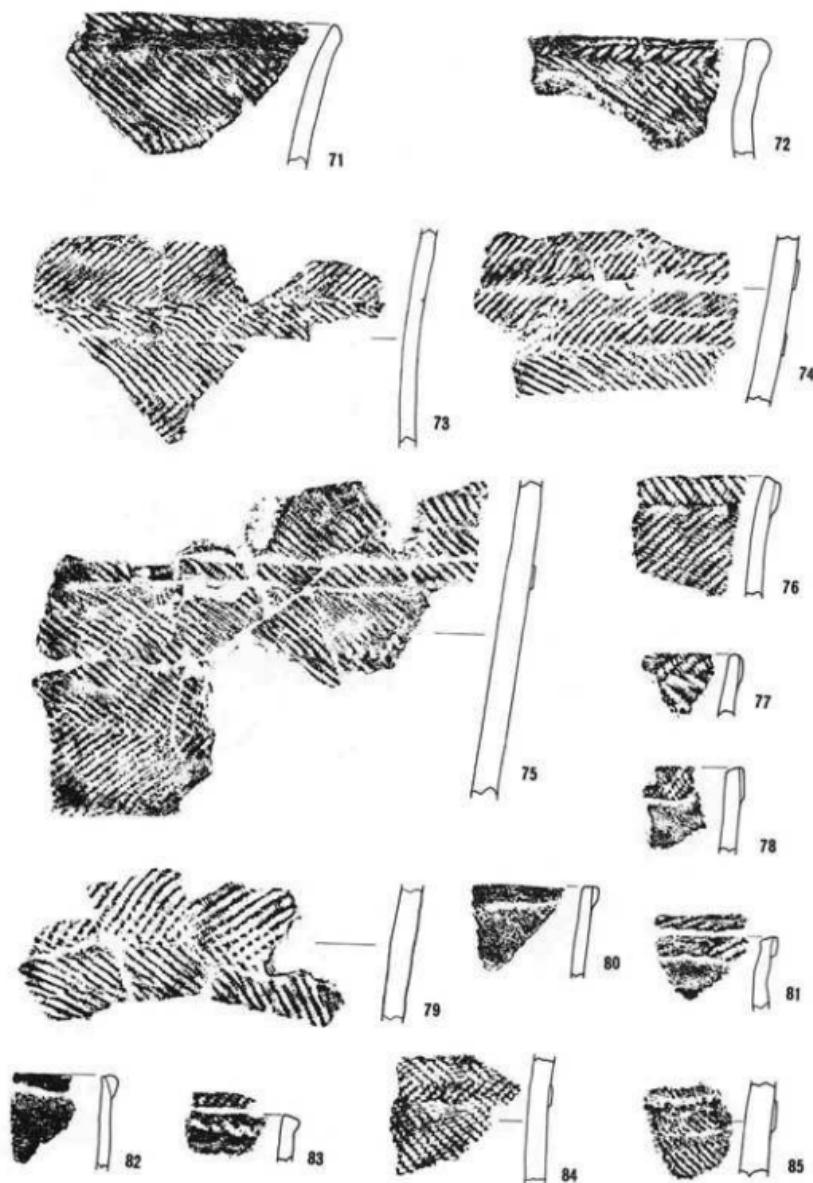


図5-22 包含層出土の土器

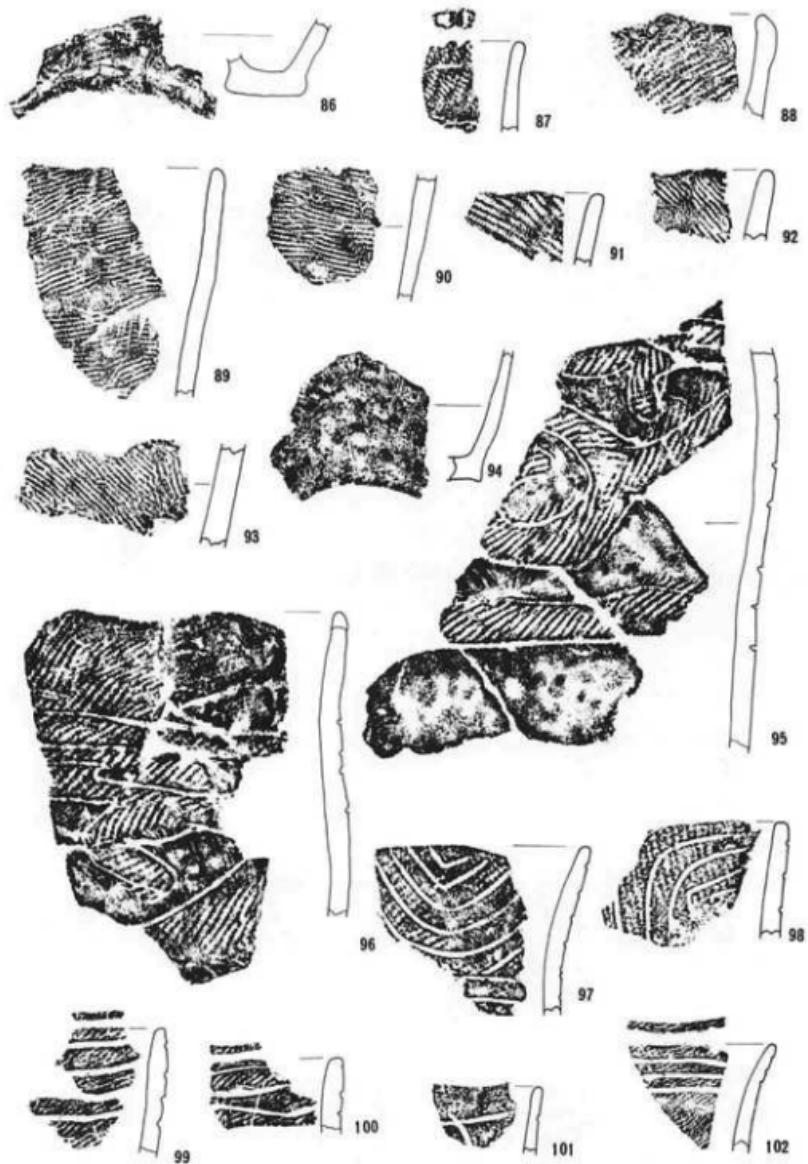


図 5-23 包含層出土の土器

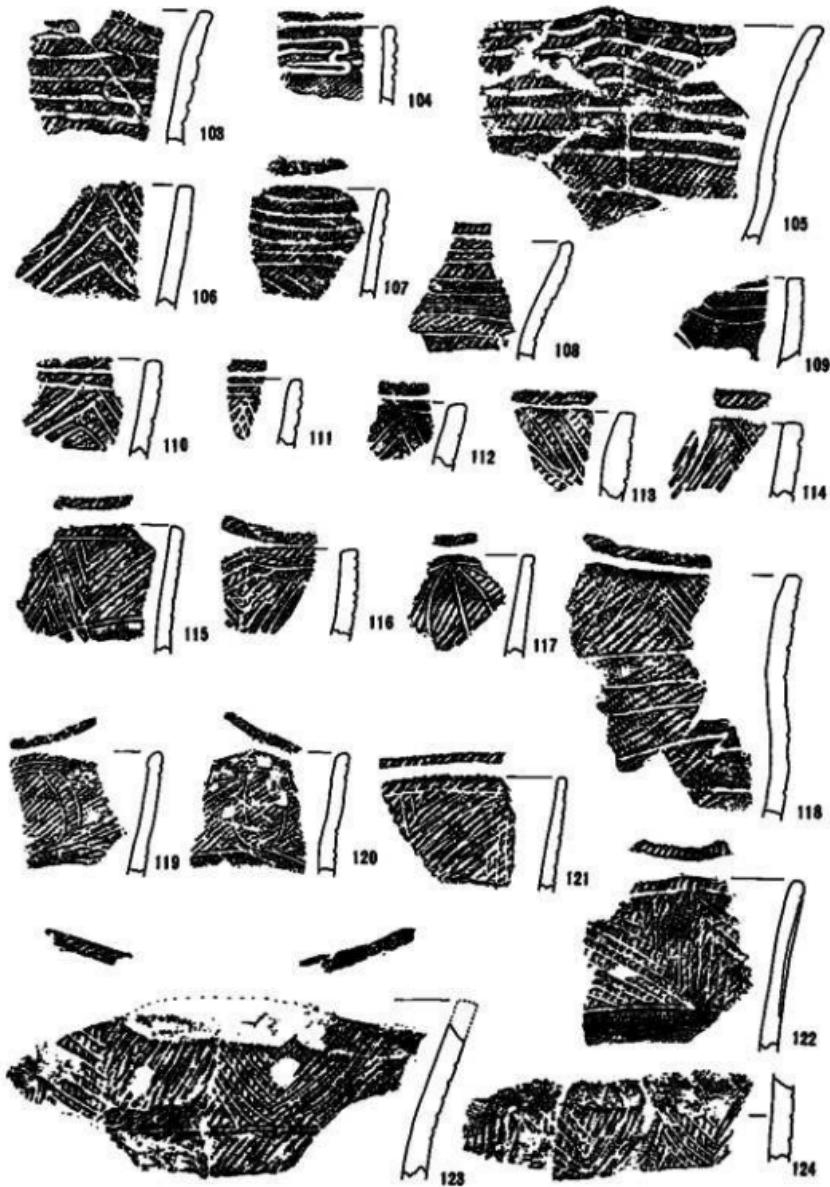


図5-24 包含層出土の土器

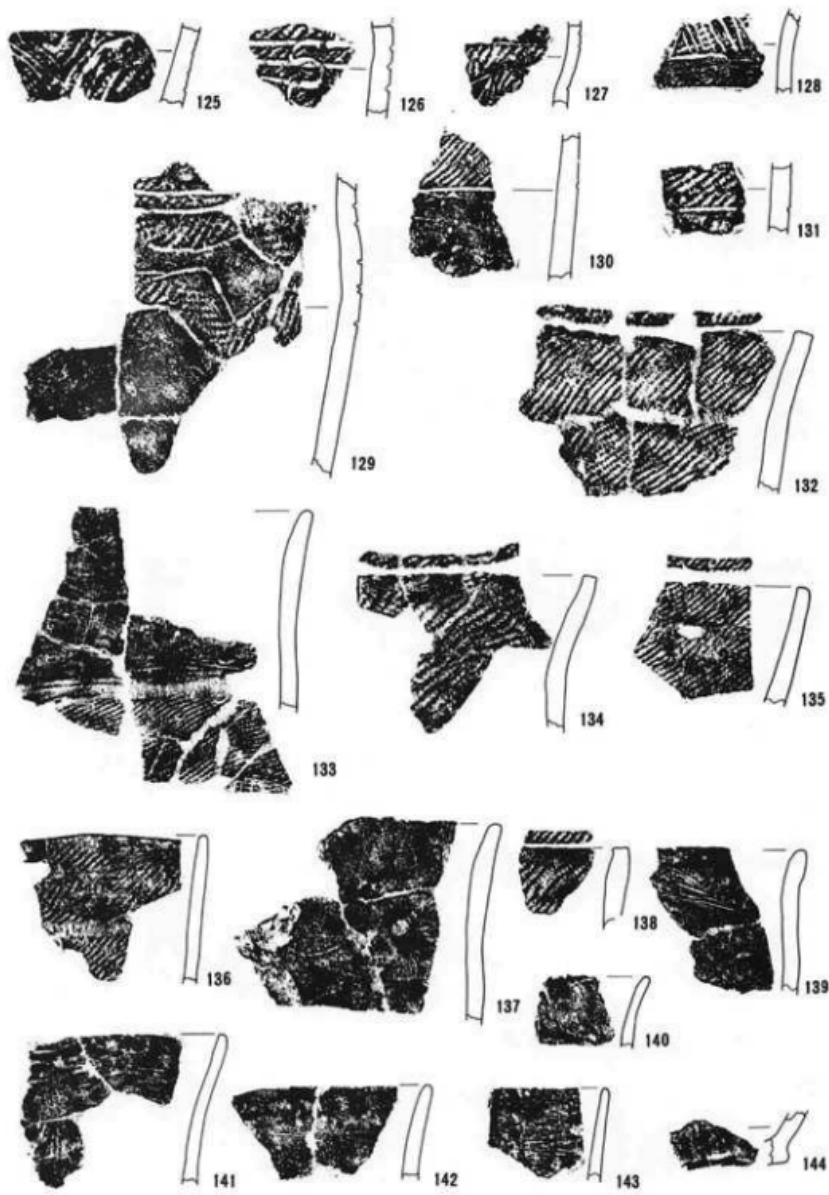


図5-25 包含層出土の土器

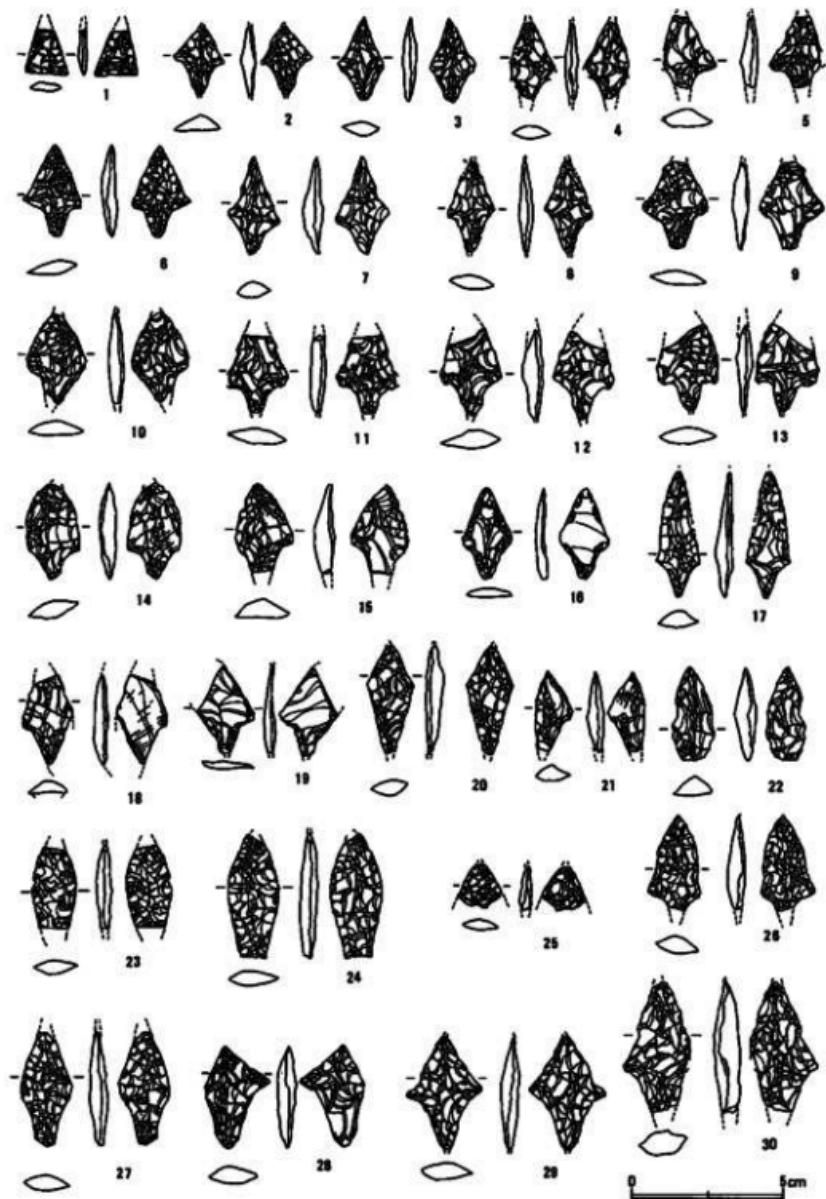


図5-26 包含層出土の石器

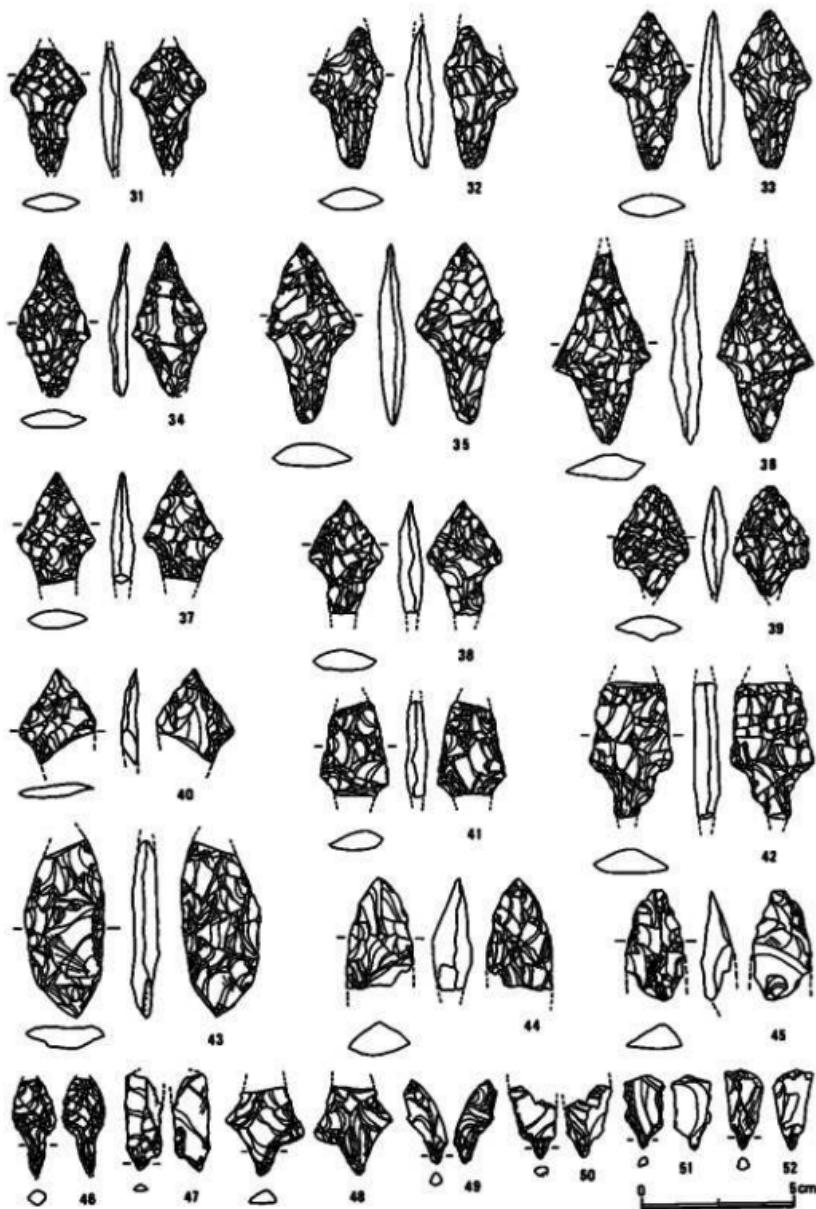


図5-27 包含層出土の石器

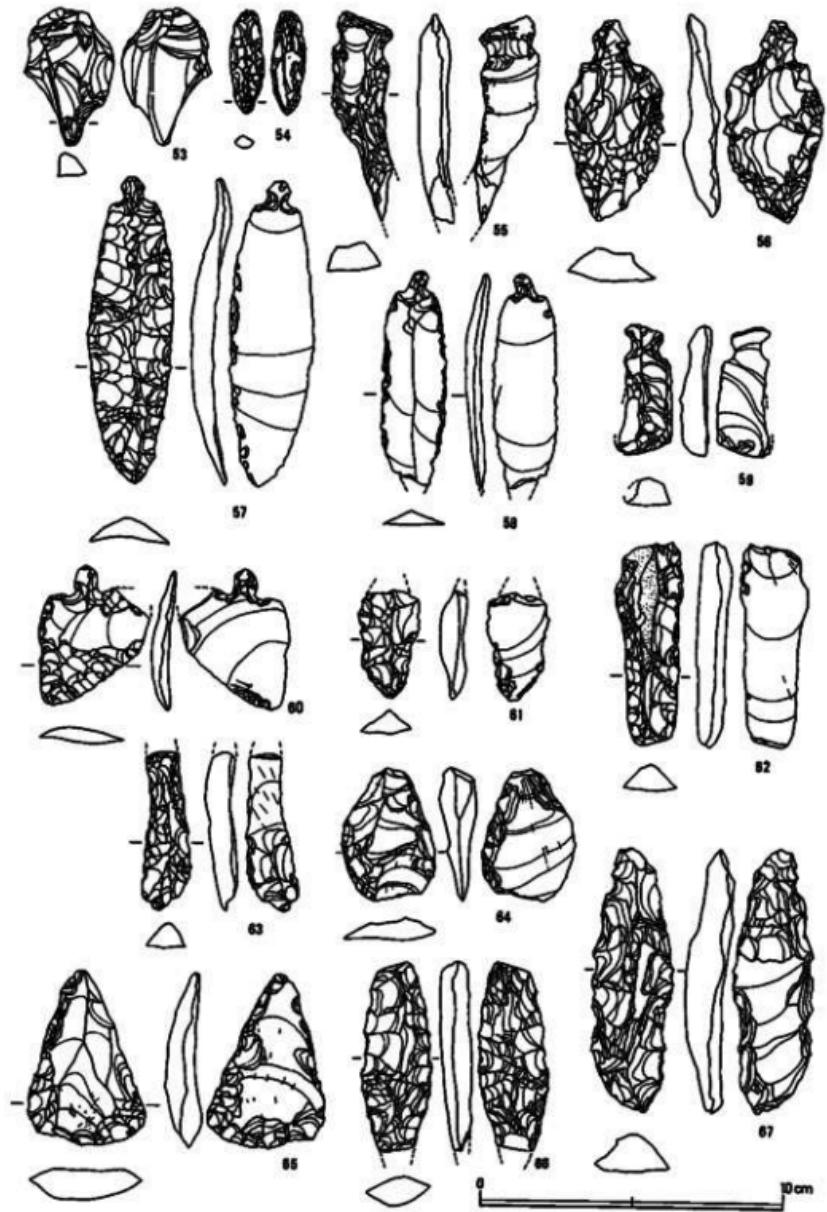


図5-28 包含層出土の石器

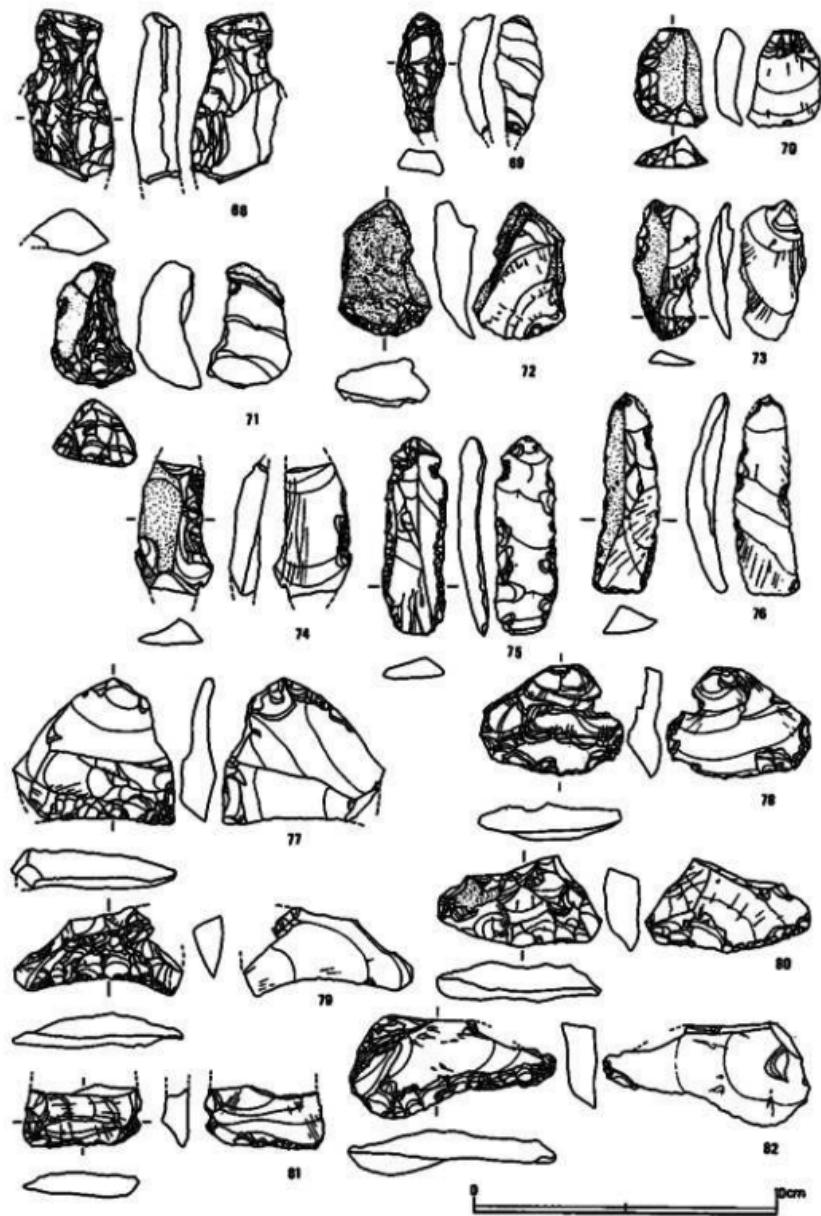


図5-29 包含層出土の石器

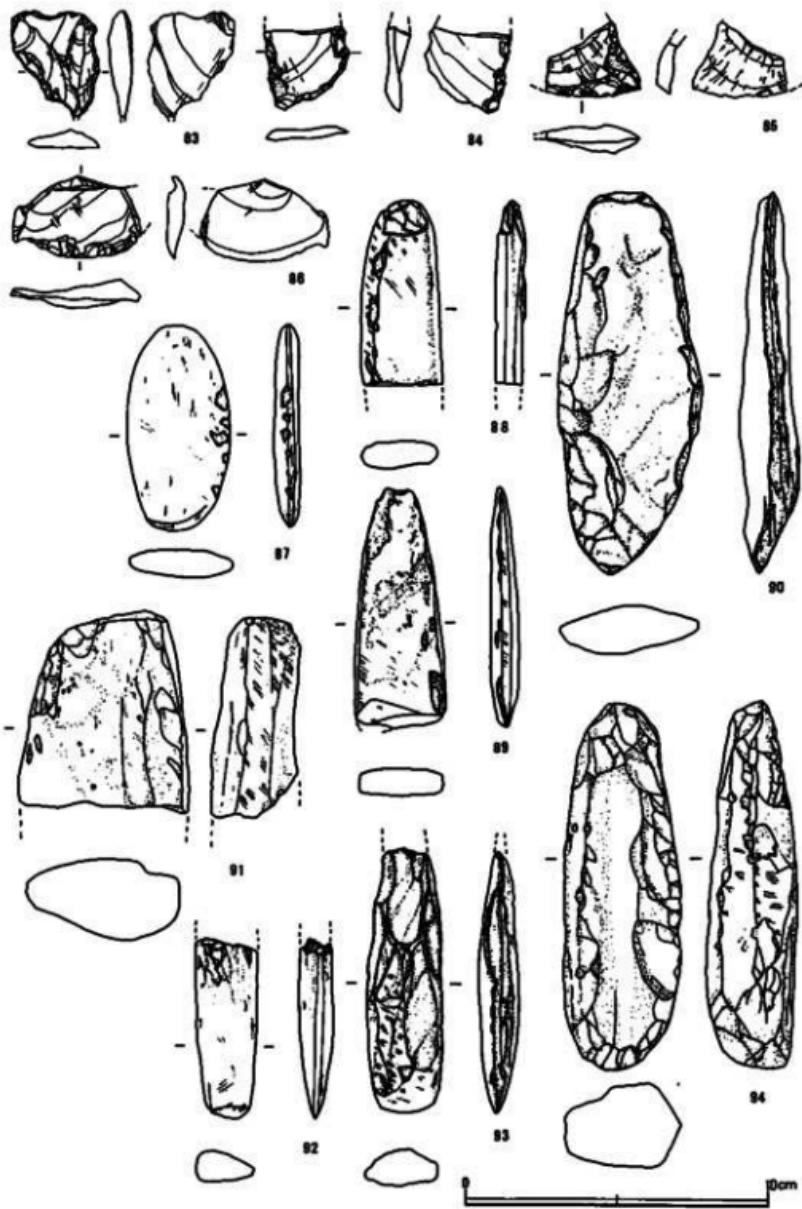


図5-30 包含層出土の石器

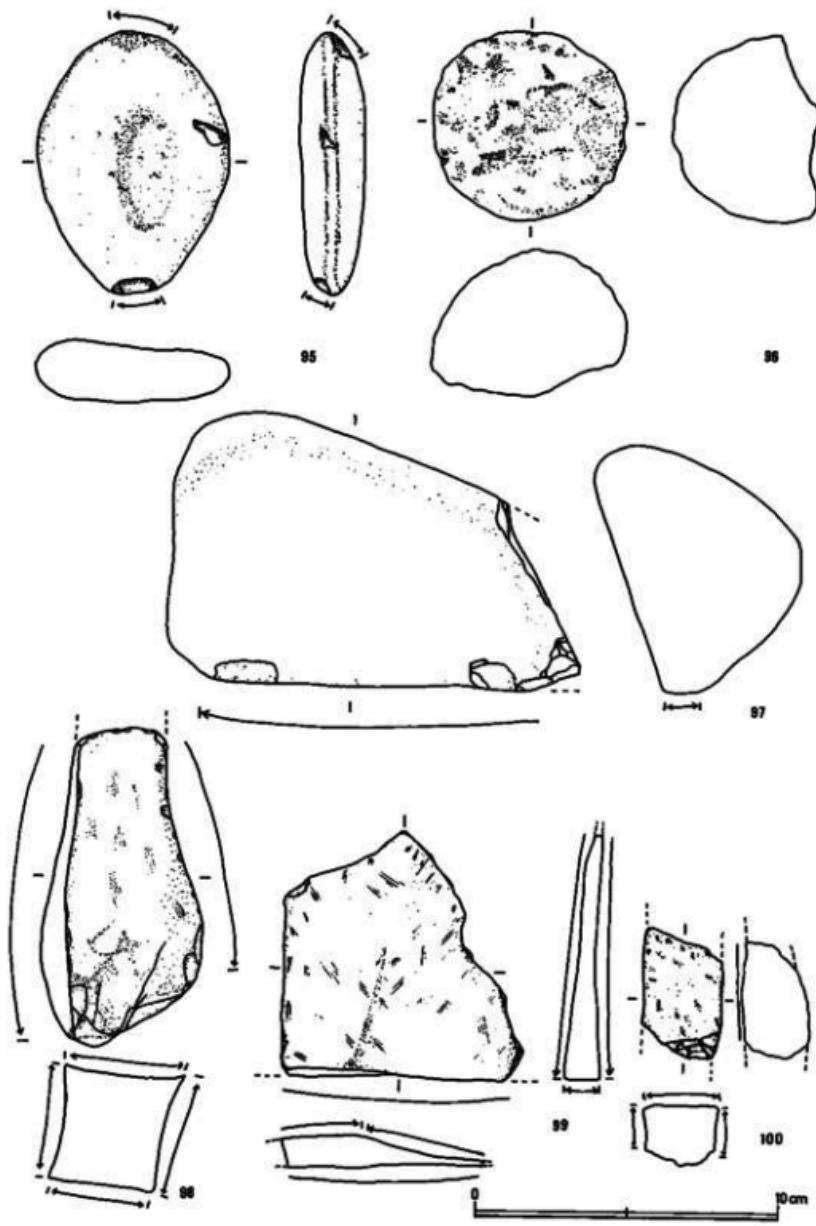


図5-31 包含層出土の石器

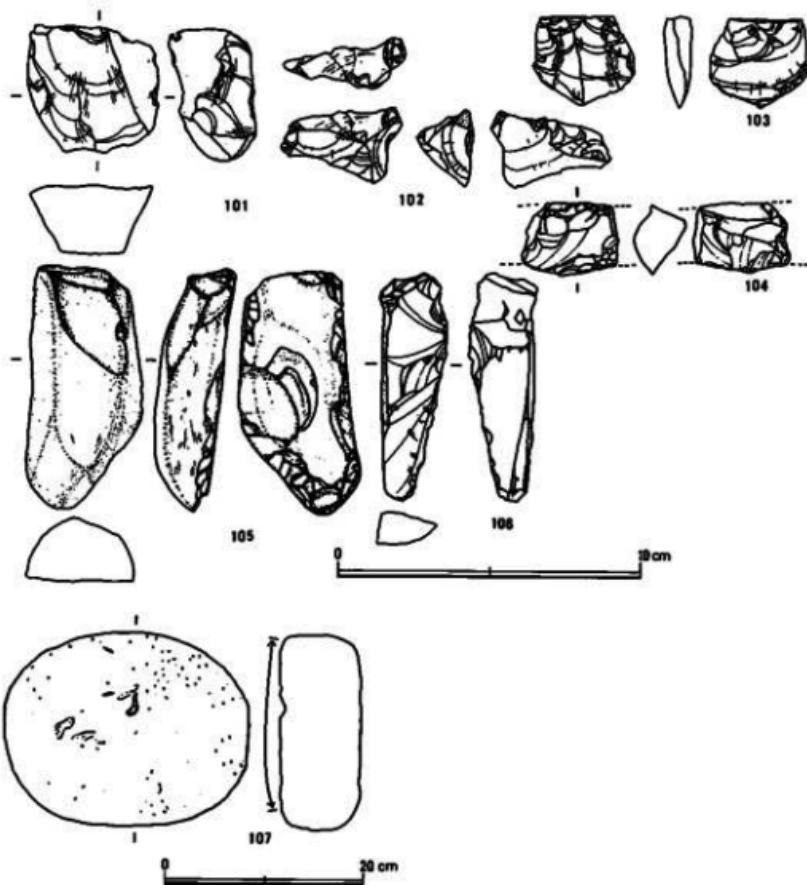


図5-32 包含層出土の石器

表5-4 図示した包含層出土の土器

番号	名称	分類	発掘区	相応する式	写真番号	番号	名称	分類	発掘区	相応する式	写真番号
1	土器	III b - 1	J - 19 - c	天神山	1	50	土器	III b - 3	K - 15 - d	北 間	17
2		IV b	c - 12 - a	船泊上層	2	51			L - 11 - c	"	
3			L - 12 - b - d	"	3	52			K - 16 d	"	
4			K - 12 - b	"	4	53			K - 12 - c	"	
5			K - 12 - b	"	6	54			L - 12 - b	"	
6			K - 13 - a	"	5	55			K - 12 - 9	"	
7			K - 12 - b	"	7	56			J - 15 - c	"	19
8		I b - 2	K - 19 - d	コッタロ		57			J - 15 - c	"	
9			"	"		58			L - 11 - c	"	
10			K - 20 - b	"		59			L - 12 - b	"	
11		III a	J - 17 - c	円筒上層		60			M - 11 - d		
12			J - 17 - b			61			K - 15 - b		
13			K - 12 - c			62			J - 15 - c		
14		III b - 1	L - 12 - b	天神山	16	63			K - 15 - b		20
15		III b - 2	K - 17 - b	"	12	64			K - 15 - d		
16			K - 15 - b	"	13	65			K - 15 - b		
17			L - 11 - c	柏木川		66			J - 15 - c		
18			M - 11 - d	"		67			L - 12 - b		
19			K - 11 - c			68			M - 11 - a		
20			L - 12 - b			69			J - 13 - c		
21		III b - 3	L - 12 - d			70			M - 11 - d		
22			L - 12 - b	北 間	18	71			K - 12 - b		21
23			J - 15 - d	"	14	72			K - 16 - a		21
24			L - 12 - b	"		73			L - 11 - c		21
25			K - 15 - d	"	15	74			L - 11 - d		21
26			J - 18 - c	"		75			L - 12 - b		21
27			L - 11 - c	"	10	76	IV a	K - 12 - c	余 市	21	
28			L - 11 - c	"		77			L - 12 - b	"	
29			K - 12 - c	"		78			K - 12 - d	"	
30			L - 11 - c	"		79			L - 11 - c	"	
31			M - 11 - a	"		80			K - 11 - b	"	
32			L - 11 - c	"		81			K - 12 - b	"	
33			L - 11 - b	"		82			L - 12 - d	"	
34			K - 11 - b	"		83			L - 11 - c	"	
35			M - 11 - d	"		84			L - 12 - d	"	
36			L - 11 - d	"		85			K - 11 - d	"	
37			L - 12 - b	"		86			M - 11 - d		
38			L - 11 - c	"		87			L - 18 - d		
39			L - 11 - c	"		88			K - 12 - c	入 江	
40			L - 11 - d	"		89			K - 10 - c		
41			L - 11 - c	"		90					
42			J - 19 - c	"		91			K - 11 - c		
43			L - 11 - c	"		92			K - 10 - b		
44			K - 14 - d	"		93			K - 11 - d		
45			K - 14 - d	"		94			L - 11 - c		
46			M - 11 - a	"		95	IV b	L - 11 - d	船泊上層	23	
47			L - 11 - b	"		96			L - 11 - d	"	23
48			J - 18 - b	"		97			L - 11 - d	"	23
49			J - 19 - b	"	9	98			K - 10 - c	"	

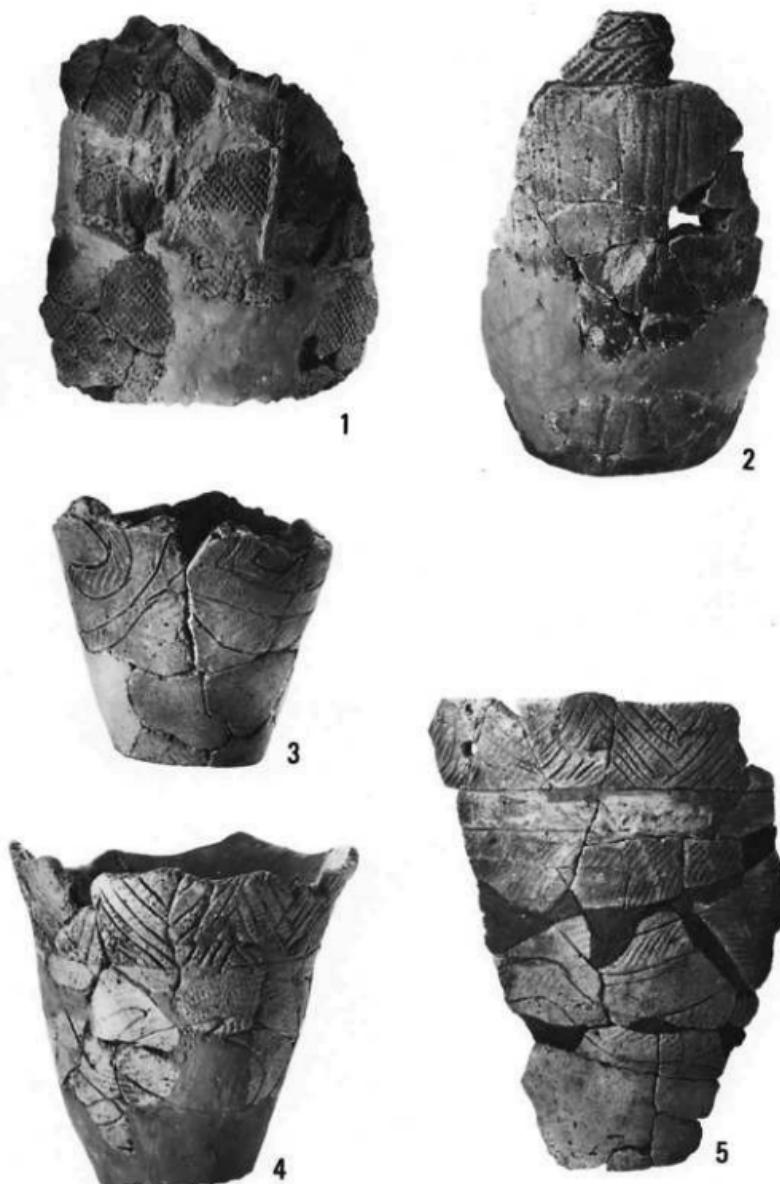
編番	名稱	分類	発掘区	組合せる型式	平均番号	出土地点	名稱	分類	発掘区	組合せる型式	平均番号
99	土器	N b	K-13-d	船泊上層		122	土器	N b	K-11-c	船泊上層	22
100			K-12-b	#		123			L-11-a	#	22
101			K-16-b	#		124			L-13-b	#	
102			L-11-d	#		125			L-15-c	#	
103			K-11-d	手縫		126			K-12-c	手縫	
104			K-12-d	#		127			L-13-a	#	
105			K-12-d	#	22	128			L-10-d	船泊上層	
106			K-12-b	船泊上層		129			L-12-d		
107			L-13-d	#		130			L-10-d		
108			L-12-d	#		131			L-13-b		
109			J-15-c	#		132			K-12-b		
110			K-13-d	#		133			L-11-d		
111			L-12-d	#		134			K-12-a		
112			L-11-d	#		135			M-10-a		
113			K-11-c	#		136			L-12-b		
114			K-10-c	#		137			K-12-b		
115			L-11-d	#	22	138			K-12-d		
116			L-12-d	#	22	139			L-14-d		
117			K-15-d	#		140			K-18-a		
118			K-12-d	#		141			L-12-d	船泊上層	
119			K-12-c	#		142			L-12-d	#	
120				#		143			L-12-d	#	
121			L-11-a	#		144			K-15-a	#	

\* P-3 (No.1)と接合する(同一個体)

表5-5 図示した包含層出土の石器等

編番	名 称	分類	発掘区	計測値 (g)	出土 期位	材 質	写真 番号	名 称	分類	発掘区	計測値 (g)	出土 期位	材 質	写真 番号	
1	石やすり	I A 3 a	K-12-b	(0.4)	II	Obs	20	20	石やすり	I A 4 b	(1.8)	II	Obs	3	
2		I A 4 a	J-16-c	(1.0)	#	#	5	21		L-11-a	(0.6)	II上	Ha-Sh	9	
3			L-11-c	1.0	II上	#	23	22		L-12-b	1.4	#	#	21	
4			J-15-c	(1.1)	#	#	8	23		I A -	表 振	(1.6)	-	Obs	2
5			"	(1.4)	#	#	7	24		K-18-c	(3.2)	II下	#	1	
6			L-12-d	1.5	#	#	6	25		K-12-d	(0.6)	II上	#		
7			L-11-d	1.8	II	Ha-Sh	13	26	石やすり	I B 2 a	J-15-c	(2.0)	II	#	38
8			M-11-d	(1.2)	II上	#	4	27		M-11-d	(2.4)	#	#	34	
9			J-15-c	(2.0)	II	Obs	15	28		K-18-b	2.4	#	#	39	
10			"	(2.0)	II上	#	14	29		K-16-d	(4.0)	#	#	30	
11			K-14-d	(1.9)	II	#	16	30		K-15-d	(5.8)	#	#	41	
12			L-11-c	(2.4)	II上	Ha-Sh	22	31		不 明	(3.9)	不明	#	26	
13			L-12-b	(1.7)	#	#	18	32		L-11-c	(6.0)	II	#	35	
14			"	(2.5)	#	#	17	33		J-19-b	6.4	#	#	37	
15			L-11-c	(2.3)	#	Obs	24	34		K-13-b	(4.1)	#	#	28	
16		表 振	1.0	-	#	10	35		K-15-a	(8.0)	II中	#	25		
17			"	(1.9)	#	Ha-Sh	11	36		M-10-d	(9.8)	II	#	27	
18			K-19-a	(1.4)	II	Obs	19	37		K-15-a	(4.4)	II	#	33	
19			L-11-c	(1.4)	#	#	12	38		J-15-c	(4.4)	#	#	29	

図番号	名 称	分 類	発掘区	計量値(g)	出土層位	材 質	写真番号	回数	名 称	分 類	発掘区	計量値(g)	出土層位	材 質	写真番号	
39	石やり	I B 1 a		(4.0)	II上	Obs	32	74	ステレイバー	III B 7	J - 15 - c	(9.6)	II	Obs	83	
40			K - 13 - b	(2.4)	-	*	42	75			K - 12 - c	11.7	*	Ha-Sh	60	
41			表 棒	(4.6)	II	*	36	76			K - 13 - b	(10.8)	*	Obs	59	
42			J - 15 - c	(9.0)	*	*	31	77			L - 12 - d	(25.8)	II上	Ha-Sh	63	
43	I B 2		K - 12 - c	(12.0)	*	*	74	78			K - 13 - a	12.8	II	Obs	66	
44	I B -	I - 15 - c	(6.2)	*	*	*	40	79			J - 15 - c	(11.3)	*	*	82	
45		L - 11 - d	(4.5)	*	*	*	43	80			K - 15 - d	19.8	*	*	78	
46	穿孔具	II A 1	表 棒	(2.0)	-	*	46	81			L - 11 - d	(6.9)	*	*	65	
47		II A 2	J - 16 - b	(1.7)	II中	*	45	82			M - 12 - a	(25.7)	II下	Ha-Sh	70	
48		II A 1	L - 12 - b	(2.6)	II上	*	47	83			M - 11 - d	(5.8)	II	Obs	67	
49			J - 15 - c	1.4	II	*	Aga-Sh	50	84			K - 15 - d	(3.3)	*	*	80
50			L - 11 - c	(1.3)	II上	*	52	85			K - 13 - b	(4.3)	II下	*	72	
51			K - 15 - c	1.4	*	*	51	86			L - 11 - d	(6.6)	II	Ha-Sh		
52			L - 11 - c	1.8	II	*	48	87	石 手	WA 2	K - 11 - d	32.1	II上	Gr-Mud	89	
53			L - 11 - d	12.9	*	*	44	88			K - 15 - b	(27.6)	*	B1-Mud	87	
54	II B 1	L - 11 - c	2.1	II	Ha-Sh	49	89			M - 10 - a	(35.2)	II	*			
55	石 鞍	III A 1 c	L - 12 - b	(12.4)	*	*	56	90		WA 4	M - 12 - a	134.1	II中	*	94	
56		III A 1 d	M - 12 - a	20.2	II上	Obs	55	91		WA -	J - 19 - c	(97.4)	II	Gr-Mud	90	
57			L - 12 - d	22.3	*	*	53	92	石 のみ	NB	K - 16 - c	(21.3)	*	Mud	88	
58		III A 1 c	L - 11 - a	(7.7)	Cu-Sh	Sh	54	93			表 棒	(4.5)	-	B1-Sch	85	
59		III A 1 -	K - 12 - c	(6.2)	II	Ha-Sh	57	94	石 手素材	WA -	K - 15 - b	22.5	II下	Mud	93	
60		III A 2	K - 15 - c	(8.2)	II上	*	58	95	鐵 石	VA -	L - 13 - c	166.2	II上	And	95	
61	ステレイバー	III B 2 a	L - 14 - d	(5.6)	II	*	77	96		VA 4	K - 14 - d	221	II	Gr-Mud	92	
62			J - 15 - c	6.9	*	Obs	68	97	鐵 石	WA 3	K - 15 - c	(938)	II上	And	84	
63			K - 15 - d	(7.1)	*	Ha-Sh	69	98	鐵 石	WB 2	M - 10 - b	(270)	*	Sa	96	
64		III B 2 b	L - 12 - b	11.2	II上	*	79	99			K - 12 - d	(75.2)	II	*	101	
65			J - 16 - b	22.0	II中	*	76	100			K - 18 - a	(29.6)	*	*	97	
66			L - 12 - b	(14.1)	II上	*	61	101	石 核	■	K - 12 - d	56.4	II上	Obs	98	
67			M - 11 - d	28.0	*	*	62	102			L - 12 - d	8.4	II	*	99	
68			L - 12 - b	(22.3)	*	Obs	64	103			M - 11 - a	7.3	*	Ha-Sh		
69		III B 4	M - 11 - a	(5.2)	II	*	81	104	加賀剣片	X	L - 11 - c	(15.2)	II上	*	100	
70		III B 5	L - 11 - c	6.7	II上	*	71	105			K - 15 - d	77.1	II	Obs	91	
71			K - 15 - a	17.4	II	*		106			K - 13 - a	16.7	II上	Obs	103	
72			M - 11 - d	16.6	*	*		107	石 置	WB 1	L - 13 - a	5900	II下	Tu		
73		III B 7	J - 15 - c	5.4	II上	*	73									



土器その 1



6



7



8



9



10



11

12

13

14

16

15

17

18

19



20



21

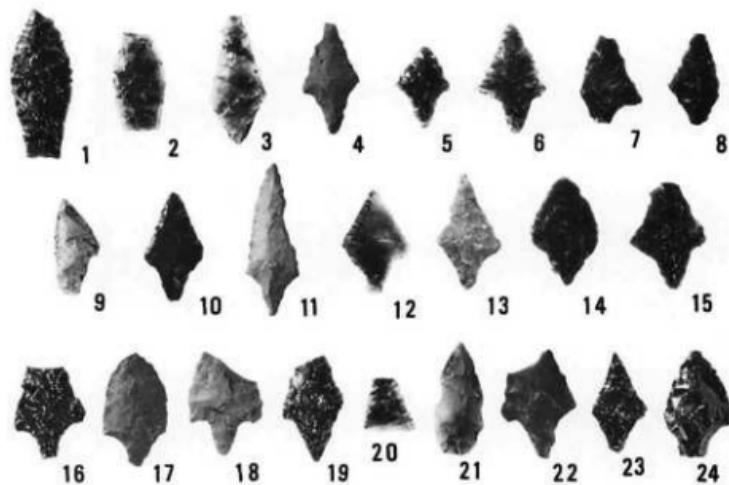


22

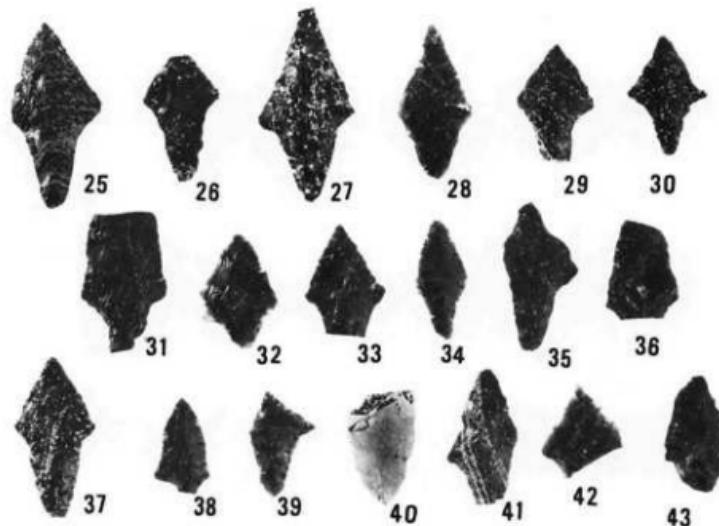


23

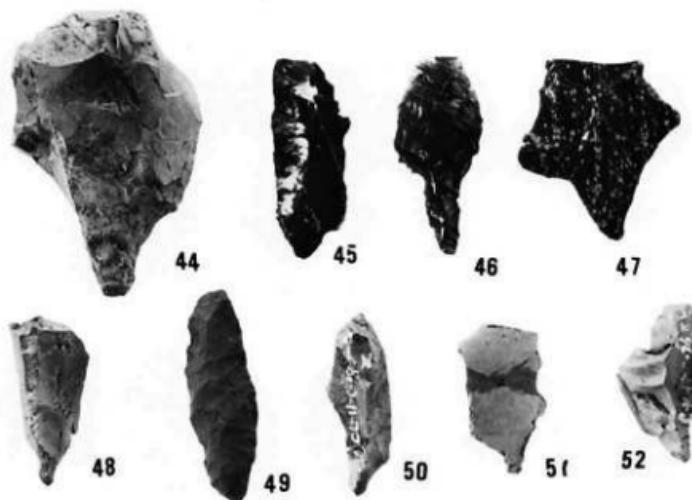
土器その 3



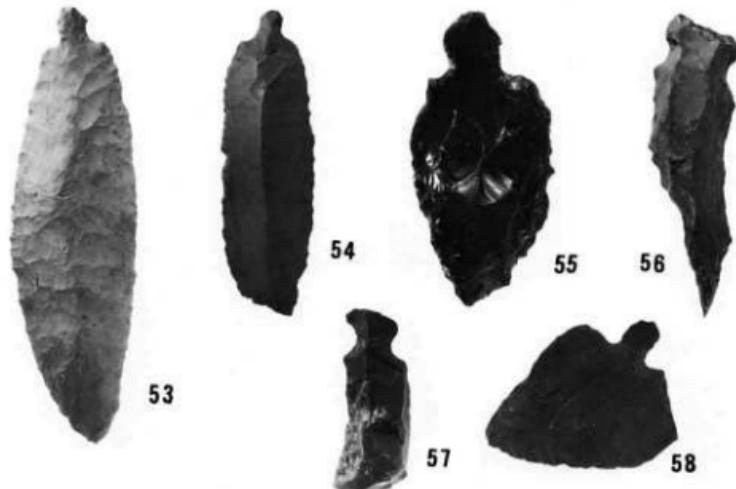
石器その 1



石器その 2



石器その 3



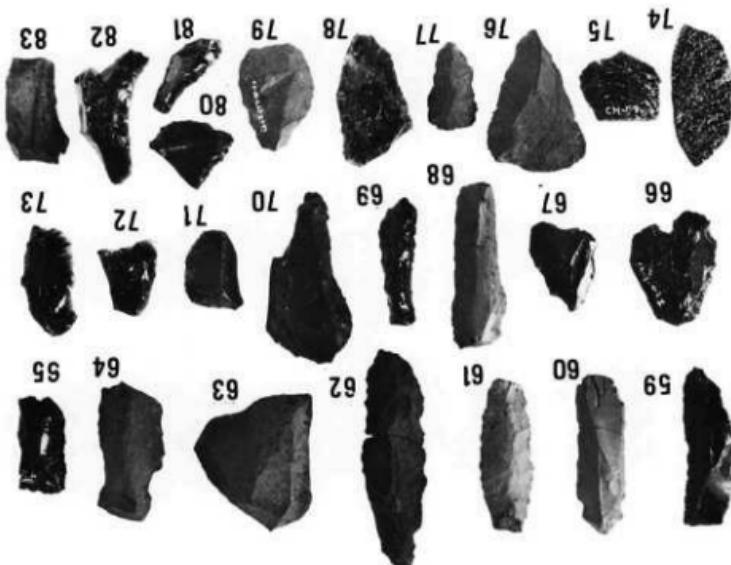
石器その 4

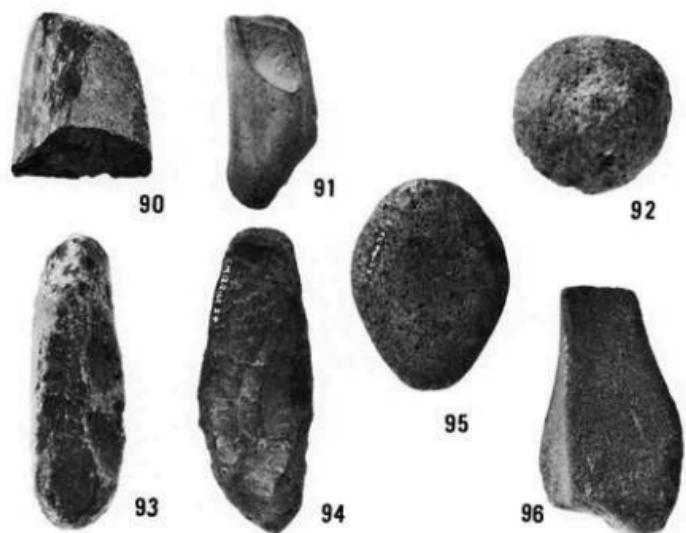
石器 17



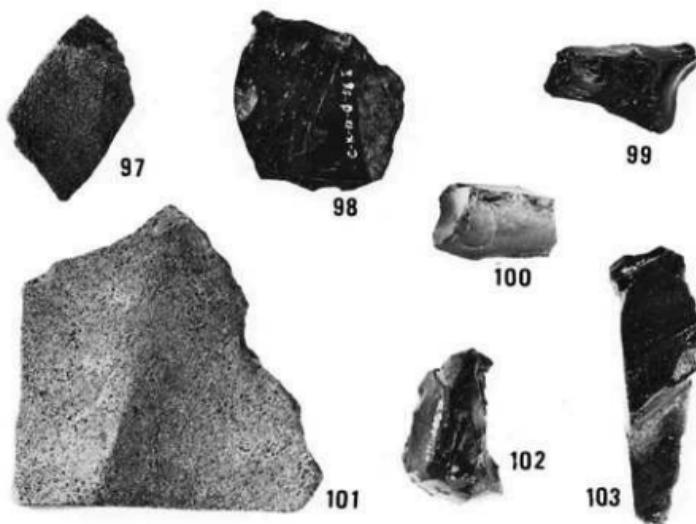
石器 16

石器 15





石器その8



石器その9

#### 4. まとめ

縄文時代早期、中期、後期の遺物が出土したが、中期後葉～後期中葉の資料が多い。層位的には、早期の土器はII層下部及びII b層に、中期・後期の土器はII層上半部に検出される。IV層とした火山灰は、縄文時代前期～中期に降下したと推定される。降下の時期、地域があきらかになれば、縄文時代の遺跡調査において、今後カギ（鍵）層となる可能性がある。

早期の土器は、コックロ式土器が2個体だけである。造構としては、すり石1点をもつ6号住居跡である。事前の予備調査ではまったく予想できなかったものであり、中期後葉～後期中葉のものとは、立地がことなっている。

中期のものは、円筒上層式、天神山式、柏木川式などの小破片が点在している。図5-18の天神山式は、比較的まとまって出土したものである。

中期後葉と分類したのは、北筒式、静狩式、ノダップII式類似のものなどである。ひろく分布しているが、とくに標高26mより低いところに密集中し、さらに5号住居跡のちかくと、3号ビットのちかくにまとまりを認めることができる。5号住居跡は、石組み炉の焼土が2枚に分かれることから、時期の推定、造構のありかたの理解には一考を要す。石組み炉をもつ住居跡には、複数の焼土、くみなおしの石組みを示すものが、道南地方において知られている。住居内の出土土器については、静狩式土器の出土位置の絶対高はいく分高いが、出土状態からして北筒式土器、最花式に近似の土器とは共伴するものととらえられる。北筒式土器、静狩式土器、最花式に近似する土器の共伴する出土状態は、道内、東北北部の縄文時代中期、後期の縄年にあたっては、無視しえない重要な事例となろう。住居内には多くの石器とともに、南西の隅に黒曜石の剝片・碎片のまとまりがみられた。石器の加工がおこなわれたのであろうか。

後期前葉の余市式、入江式などは、標高26mより低いところに個体ごとに散った状態でみられる。3号ビットは、多くの礫、軽石と石斧の破損品、土器片、ベンガラがあり、墓壙としてとらえられる。

後期中葉の手稻式、船泊上層式などは、標高24mより低いところに多くみられる。1号ビット2号ビットは、底部ちかくに船泊上層式の無文土器があり、副葬品の可能性がある。造構確認面から底部までは浅いが、もともとの深さは0.5mほどであったであろう。

石器、剥片等の分布は、土器の分布状態とはほぼ同じである。図5-27、28のNo.49～No.53の5点の穿孔具は、めのう質頁岩を素材とする同じようなつくりの石器である。No.50は5号住居跡のちかく、他の4点は3号ビットのちかくから出土している。土器の分布からすると、中期末葉の石器ということになる。

遺跡のあるところは、海岸から内陸の台地へぬける川沿いの道筋にあたり、繰り返し生活の場として利用されている。遺物分布図から判断すると、遺跡はさらに低い部分へひろがるものと思われる。

（参考文献）『静狩遺跡』 1955 長万部町  
『入江貝塚』 1958 北方文化研究報告13輯

VI 富岸遺跡

## VI 富岸遺跡

### 1. 概要

登別市の地形は、概略、火山性山地から、火山灰台地、沖積地とつづき、太平洋に及んでいる。山地や台地は、鶯別川、富岸川、幌別川、来馬川、岡志別川、登別川などの海へそぐ河川によって、わけられている。海岸近くには、沿岸流による古砂丘の形成が知られているが、近年、鉄道、道路、工場、宅地として利用され、現在では痕跡的にみられるだけである。砂丘の内側は、低湿な谷地になっている。

遺跡は、幌別市街の南西約4 km の標高30~35 m の台地上にある。沖積地との比高20 mほどで、南東へ0.6 km つき出る火山灰台地の付け根の部分にあたり、眼下には、富岸川の沖積地や、谷地が細長くのびている。なだらかな台地の平坦面は、從来畠地として利用されていたが、最近、大規模な宅地造成やバイパスの建設がおこなわれて、自然地形は変わりつつある。

遺跡の南方0.2 km にある、厚さ20 mほどの露頭断面の観察によれば、火山灰台地は、多くの堆積物からなっている。概略、下位から、火砕流堆積層が2枚、水底の堆積を予想させる青灰色砂質の水平互層(角礫、円礫を含む部分もある)2.5 m、褐色粘質土2 m、鮮明黄橙色軽石層2.5 m、黄褐色粘質土2.5 m、黒色土0.5 mである。

調査区域での土層区分は、図6-3のようにおこなった。I層は黒褐色の耕作表土である。Ib層の灰褐色で弱粘質土は、5~8 cmの厚さで堆積している。有珠山起源の火山灰の可能性がある。II層の黒色土は、30~50 cmの厚さを示し、遺物包含層である。縄文時代早期、前期、中期、後期の土器、石器などが出土する。乾燥の状態によっては、なかほどにかすかな砂質部分が観察できる。場所によっては、下半をII b層黒褐色で弱粘質土として、区別できるところもある。III層黄褐色粘質土は、3~5 cm大までの角礫を多く含み、かたくて不透水層となっている。部分的に50 cmほど深く掘りさげたが、遺物の出土はなかった。

縄文時代早期、前期、中期、後期の遺跡であり、今回は後期の資料が多い。平面的には、どの時期にも北側に濃密な分布を示している。土器型式としては、東鋼路IV式、円筒下層式、円筒上層式、静狩式、北筒式、余市式、涌元式、入江式、船泊上層式、塗林式などである。魚骨回転文土器も出土している。

遺構は、落し穴3か所、焼土1か所を検出した。落し穴のひとつは、掘り込み面が縄文時代中期~後期にあることを土層断面で、観察できた。

周辺の遺跡としては、亀田公園遺跡、富岸小学校遺跡、富岸神社遺跡などが知られている。富岸神社遺跡は、富岸遺跡と同じ台地に広くひろがっており、縄文時代後期の入江式土器が出土している。北東約2 km には、縄文時代早期、中期、後期の川上B遺跡(調査継続中)がある。



図6-1 富岸道路の位置 (この図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図(豊岡東北)部を複製したものである。)

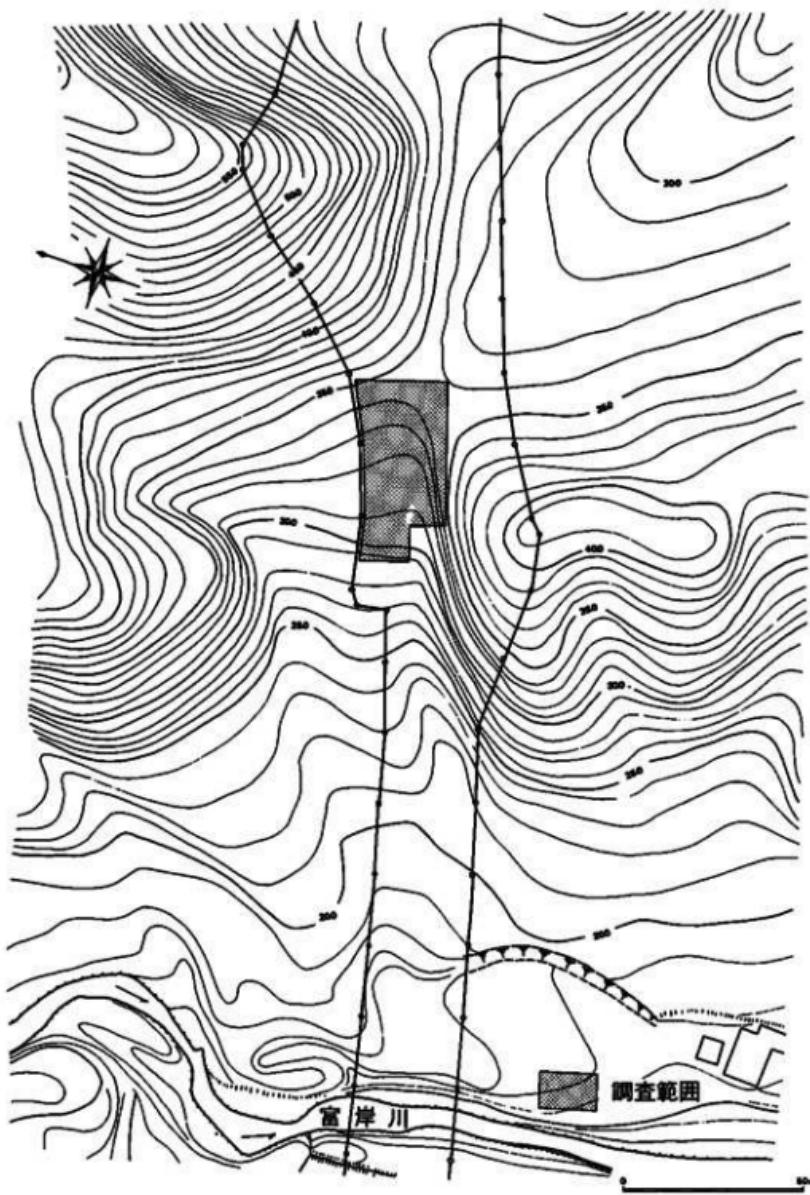


図6-2 遺跡周辺の地形図

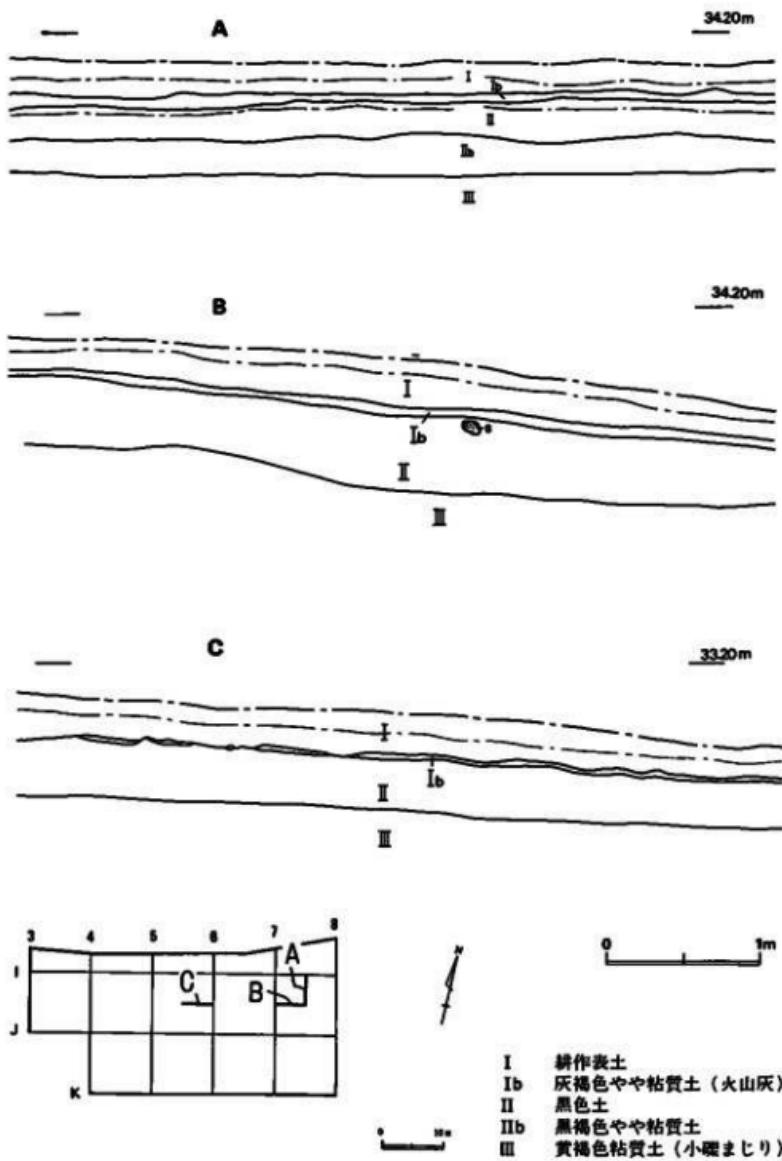


図 6-3 土層図

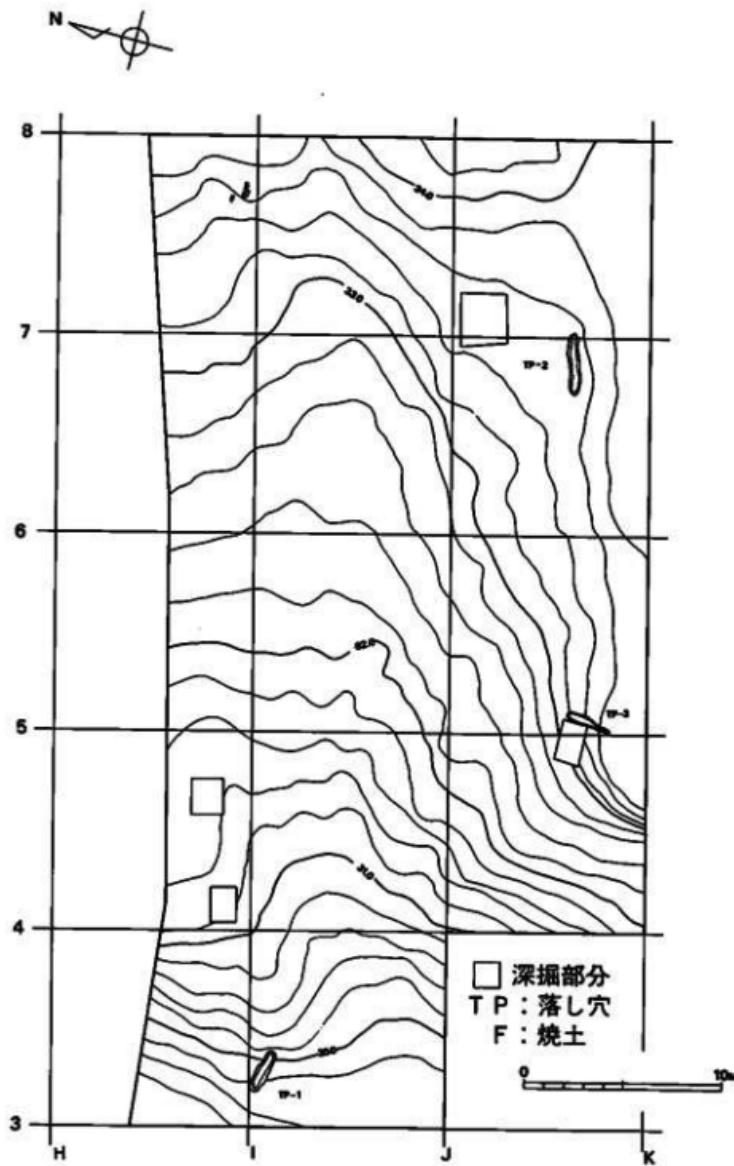


圖 6-4 遺構位置圖

## 2. 遺構

落し穴 3か所と、焼土 1か所を検出した。

1号落し穴(図 6-6)：長軸は、地形の等高線に直交する。出土遺物は無い。

2号落し穴(図 6-5)：確認面からの深さは、0.8 mほどであるが、たまたま検出できた土層断面を見ると、掘り込みのはじまりは II 層上半部であり、もともとの深さは 1.2 mほどになる。穴の底部は、長軸方向にひろがっている。出土遺物は無い。

3号落し穴(図 6-6)：幅がきわめてせまい。図版 6-2 では、穴の底部が長軸方向にひろがっているのがよくわかる。出土遺物は無い。

焼土(図 6-6)：II 層の上半部に焼土のかたまりを検出できた。厚さは 20 cm ほどである。出土遺物は無い。

## 3. 包含層の遺物

縄文時代早期、前期、中期、後期の遺物が出土している。土器の時期による分類別のうちわけ、石器の器種による分類のうちわけは、表 1・表 2 である。図 6-7・8 は、土器の破片、石器、石器片などの分布状態を示すものである。いずれも、調査区域の北側に多くみられる。

早期、前期の土器は、ごくわずかである。小破片であり、文様の明瞭なものはすくない。6～10 の魚骨回転文土器は、一個体分である。ニシンの骨と粘土板を使っての模式を図版 6 の 3 に示した。類例の拡大は、図版 6 の 4 に示した。

中期の土器は、中期後半(III b)と分類したものが多い。静狩式、北筒式などである。器形を復原しうるものはない。

後期の土器は、前業(IV a)、中業(IV b)、後業(IV c)と分類したものが、出土している。前業のものが、もっとも多い。

前業(IV a)は、余市式、涌元式、入江式などである。大きな破片は、すくない。器形を復原できたのは、図 6-9 の 1 (図版 6 の 5) の余市式のみである。

中業(IV b)は、船泊上層式などである。破片は小さい。

後業(IV c)は、堂林式などである。破片は小さい。磨滅したものが多い。図 6-9 の 5 (図版 6 の 5) は、復原できた、ただひとつの土器である。全面に羽状縄文が施され、口縁部には内側からの突き瘤が、等間隔にみられる。

石器、石器片、剝片などの分布図は、図 6-8 である。剝片、碎片などの集中部分については、ドットを省略したところもある。石器は、破損品も含めて、ほとんどを図示してある。剝片石器の素材となる頁岩礫が出土したので、図版 6 の 7 に示した。

出土状態、石器の形態などから判断すると、縄文時代早期、前期に属する可能性のあるのは 2、5、6、24、25、27、33、34、35、68、73、77 などである。

表6-1 包含層出土遺物一覧表

## (1)土器

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
土 器	I a	2	土 器	III a	24	土 器	III -	3
"	I b - 4	32	"	III b - 1	7	"	IV a	1,382
"	I b -	13	"	III b - 2	4	"	IV b	499
"	II a -	19	"	III b - 3	60	"	IV c	271
"	II b	23	"	III b -	733	"	IV -	144
							不明	1,253
							總計	4,473

## (2)石器等

名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数	名 称	分 類	点 数
石やヒリ	IA 3 a	2	つまみナイフ	III A 1 d	1	すり石	VIA 1	1
	IA 3 b	4	スクレイバー	III B 2 a	2		VIA 2	1
	IA 4 a	14		III B 2 b	4		VIA 3	2
	IA 4 b	2		III B 7	2		VIA 4	1
	IA 5 a	1		III B -	7		VIA -	4
	IA -	6	石 犁	VA 2	3	石 盆	VB 1	7
石 やり	IB 1 a	2		VA -	11	石 錐	VIA 2	1
	IB 2 b	2	敲 石	VA 1	2	石 核	IX	7
	IB -	1		VA 2	1	加 使 制 片	X	56
穿 孔 具	II A 1	2		VA 3	3	加 使 磨		3
	II A 2	1		VA 4	1	剥 片		184
つまみナイフ	III A 1 b	3		VA -	3	磨		454
	III A 1 c	5	台 石	VB 3	6			
						總 計		812

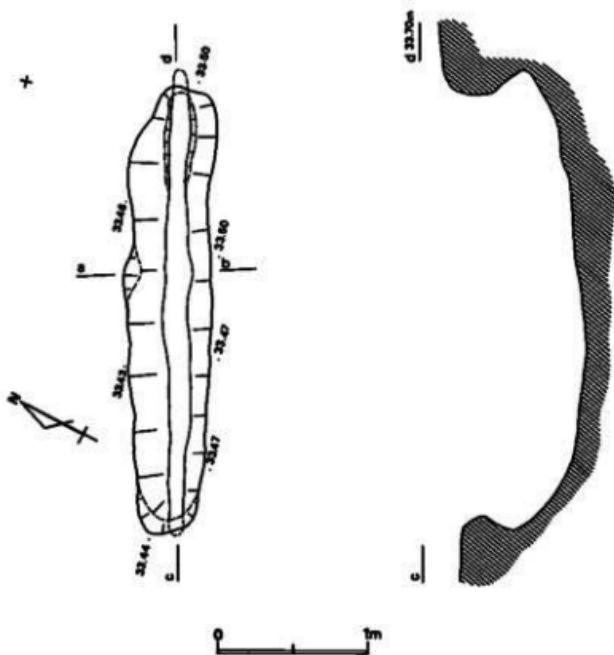
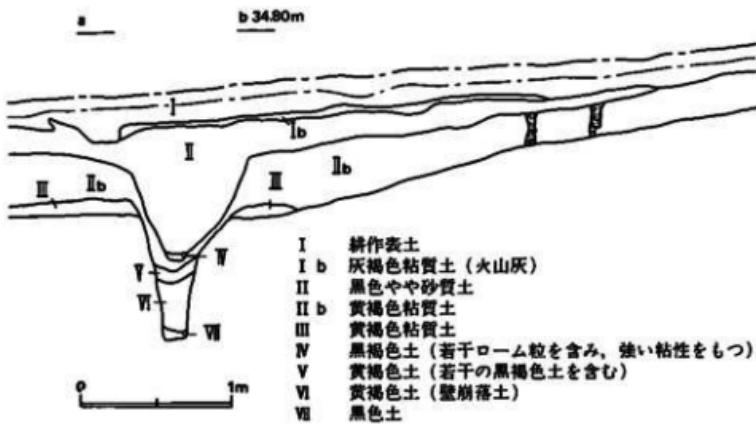
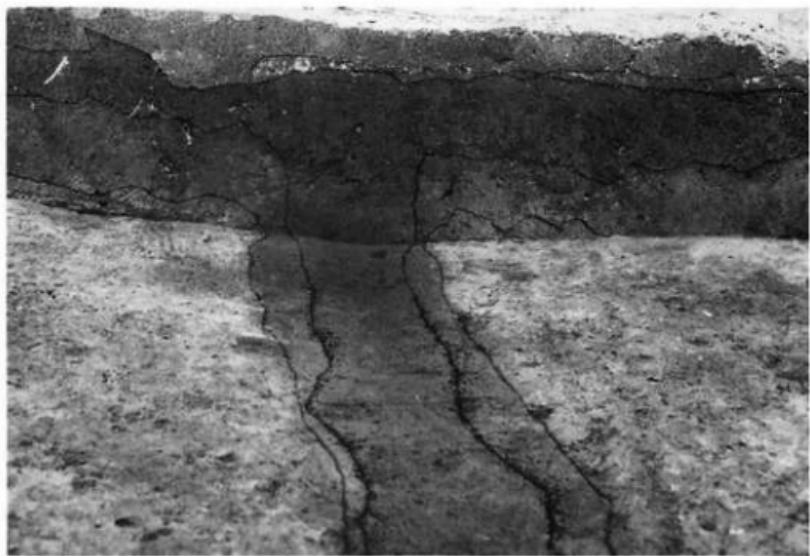


図 6-5 2号落し穴



2号落し穴土層断面



2号落し穴



2号落し穴完掘

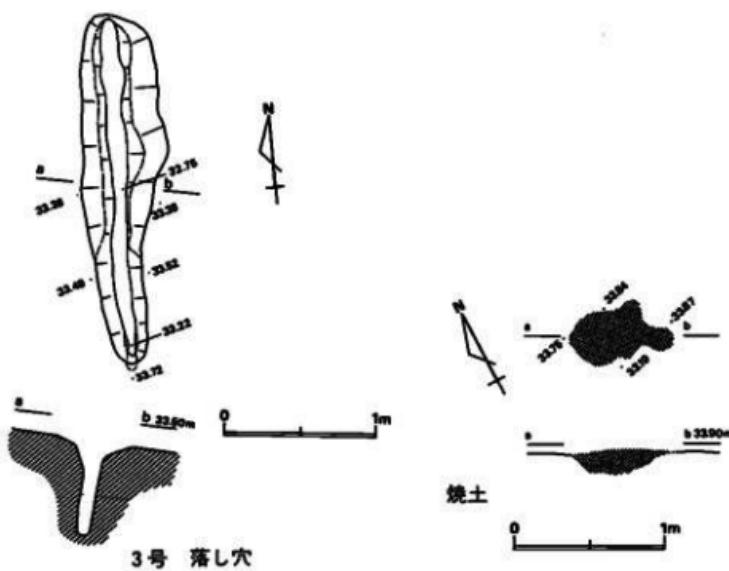
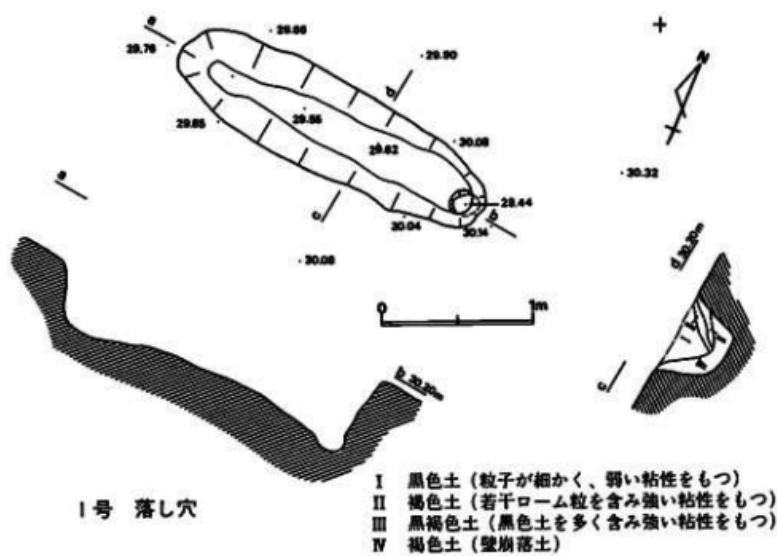


図6-6 1・3号落し穴と焼土



3号落し穴縦断面の一部



3号落し穴完掘後の横断面



焼土の断面

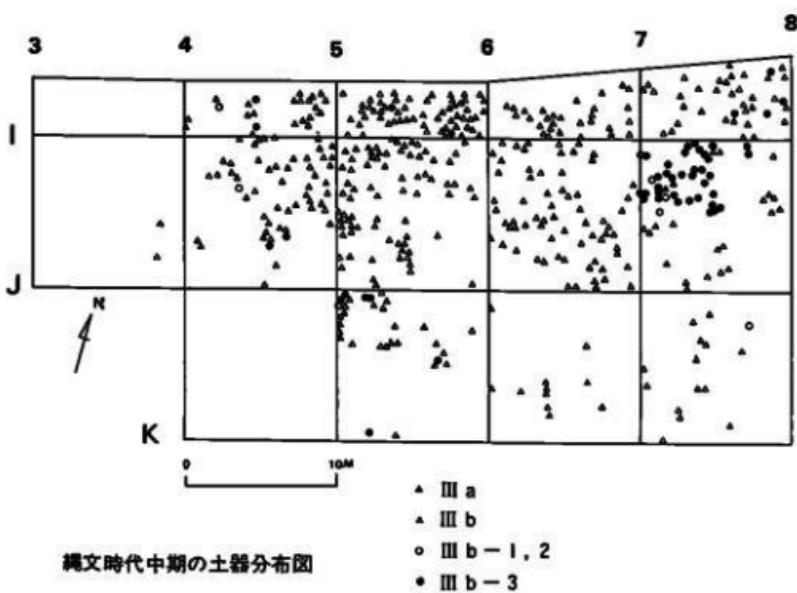
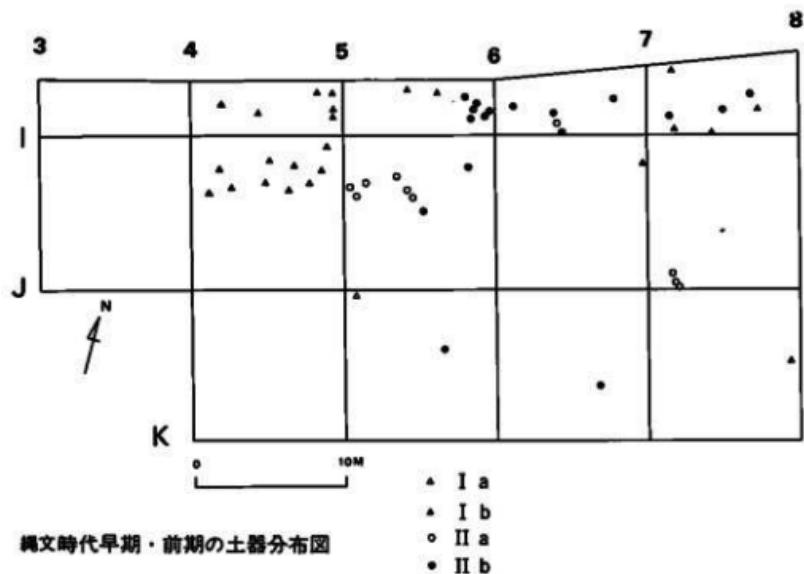
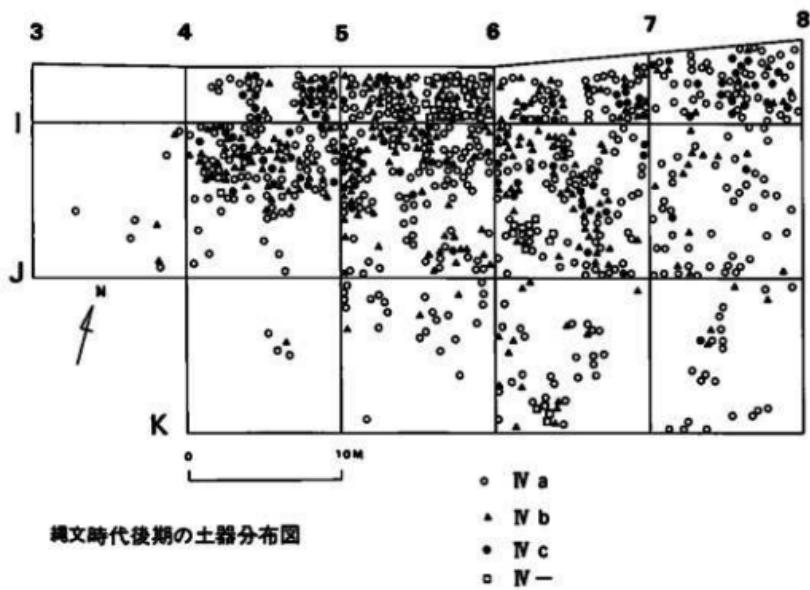
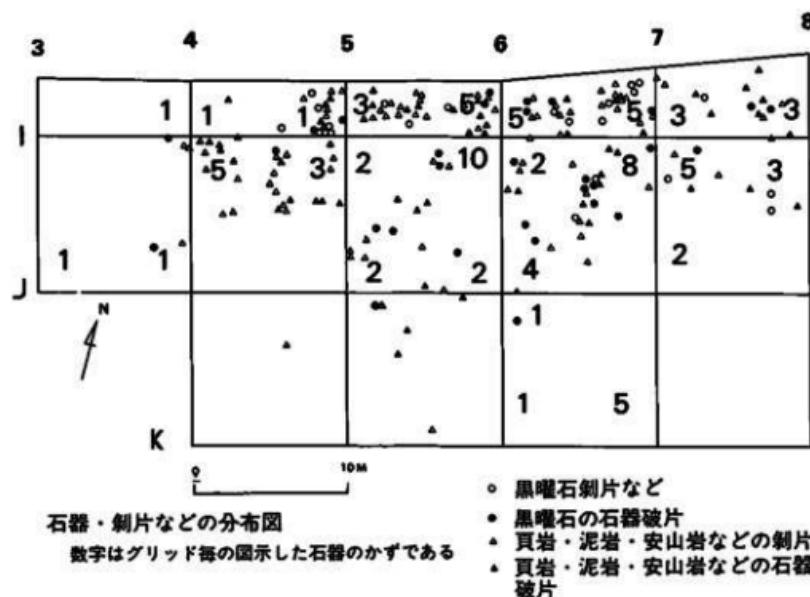


図6-7 遺物の分布図



陶文時代後期の土器分布図



石器・剝片などの分布図

数字はグリッド毎の図示した石器のかずである

図6-8 遺物の分布図

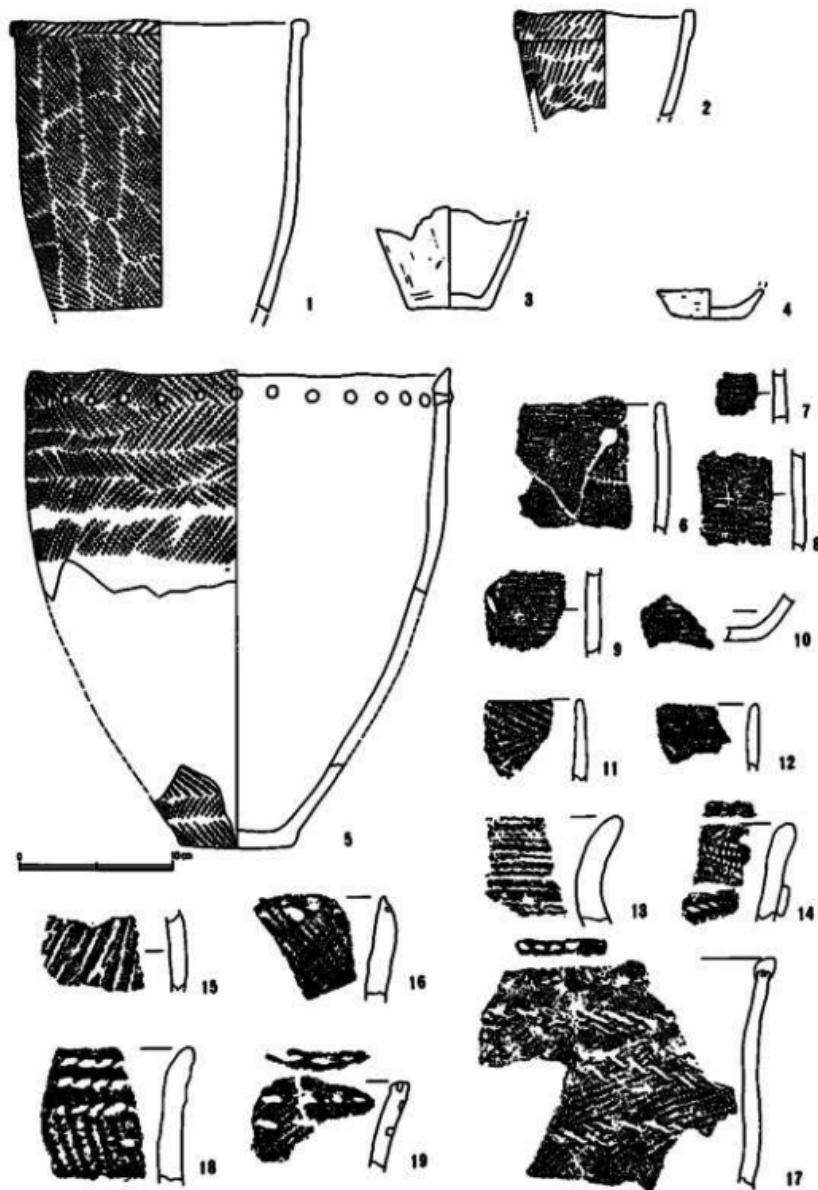


図6-9 包含附出土の土器

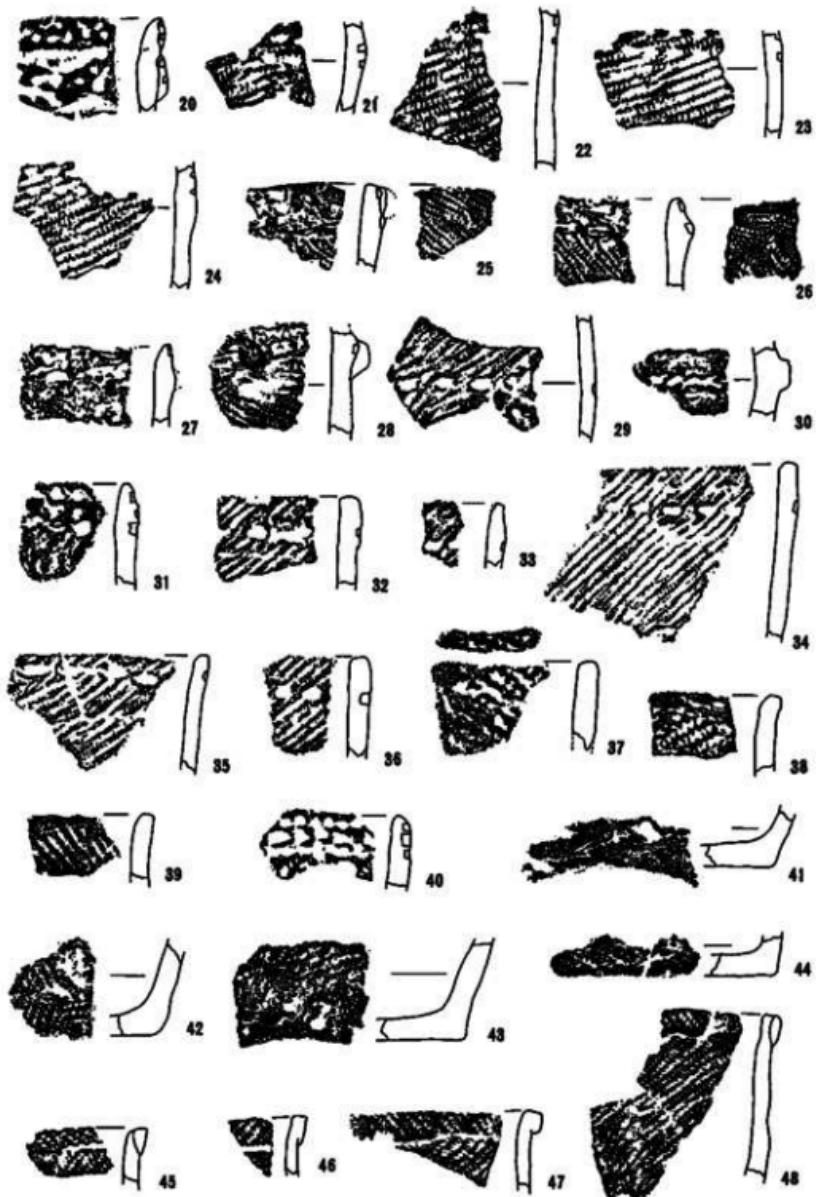


図6-10 包含物出土の土器



図6-11 包含層出土の土器



図6-12 包含層出土の土器

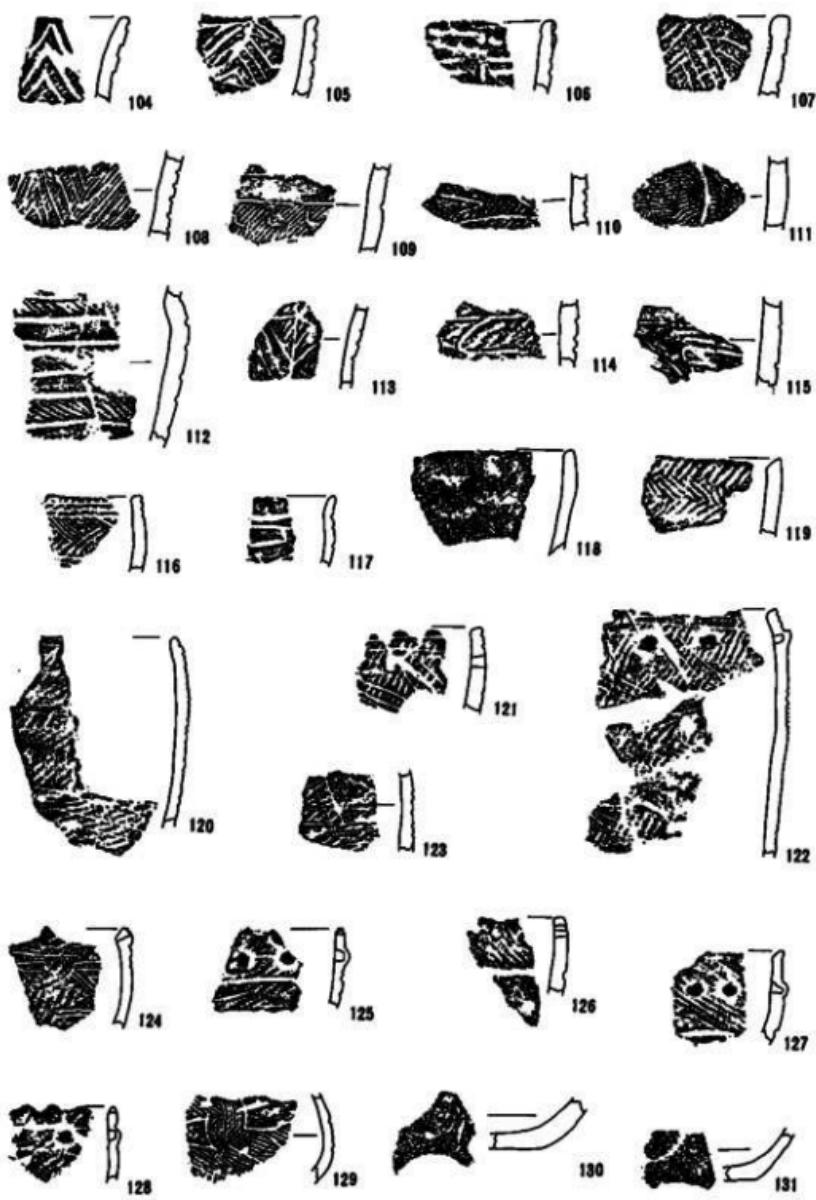


図6-13 包含層出土の土器

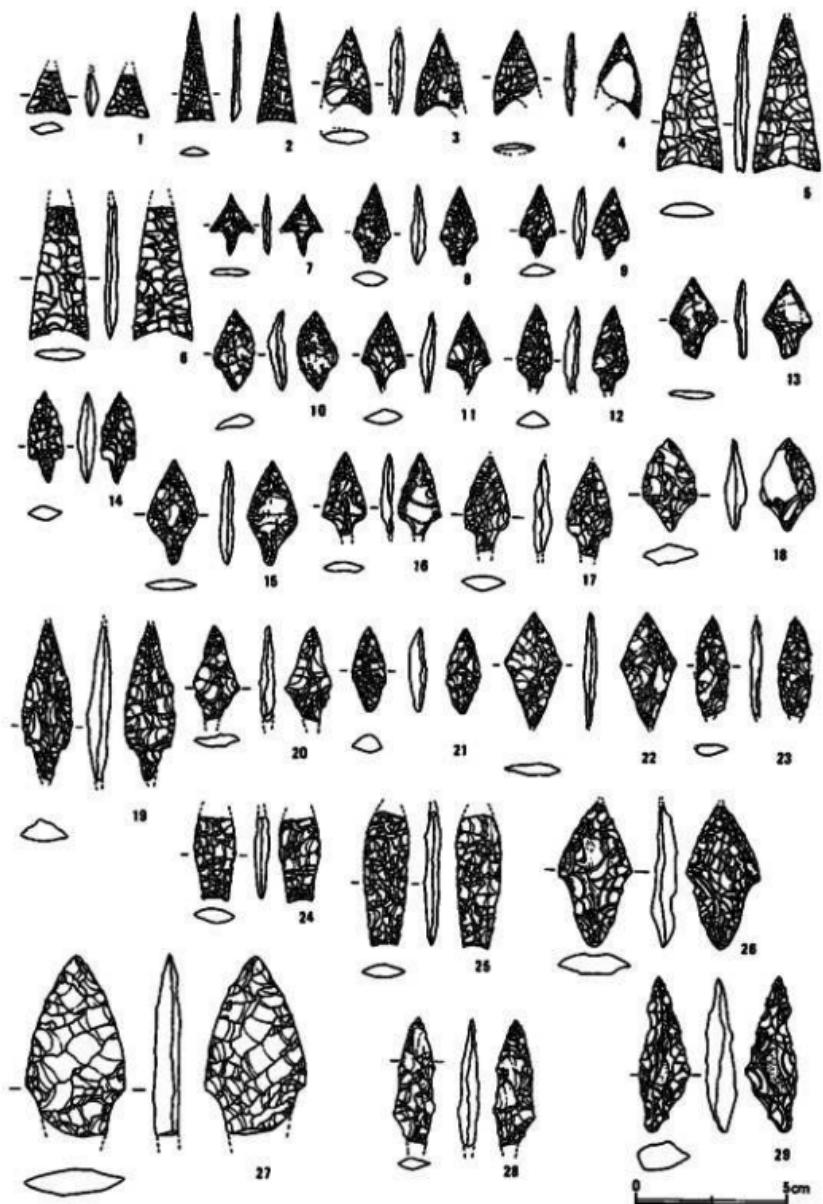


図6-14 包含層出土の石器

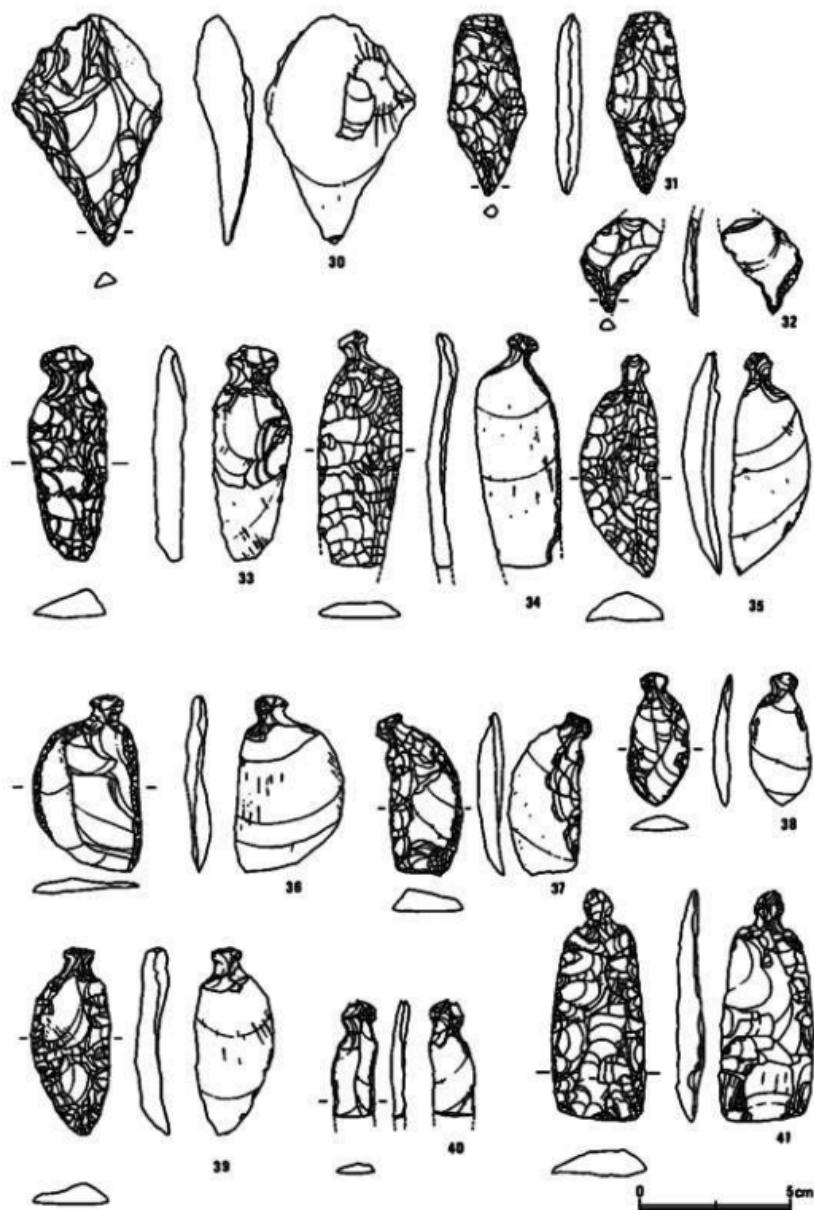


図6-15 包含層出土の石器

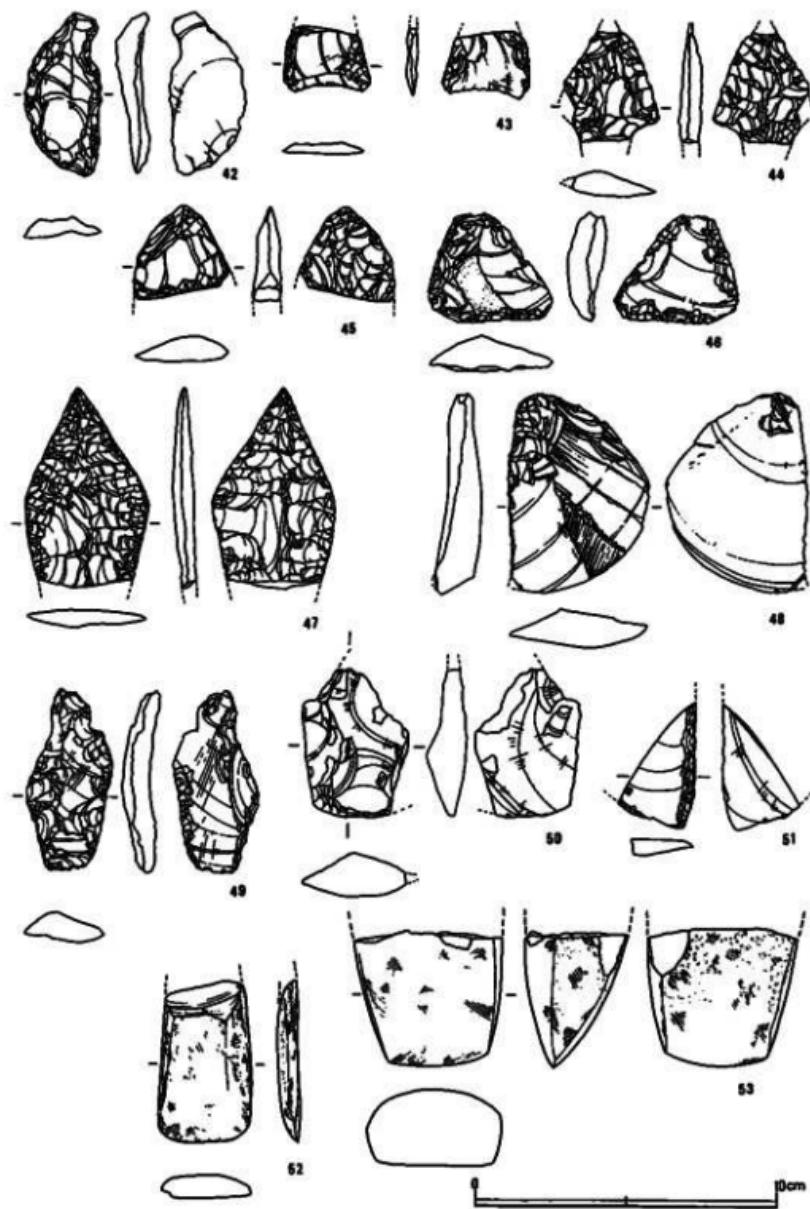


図6-16 包含層出土の石器

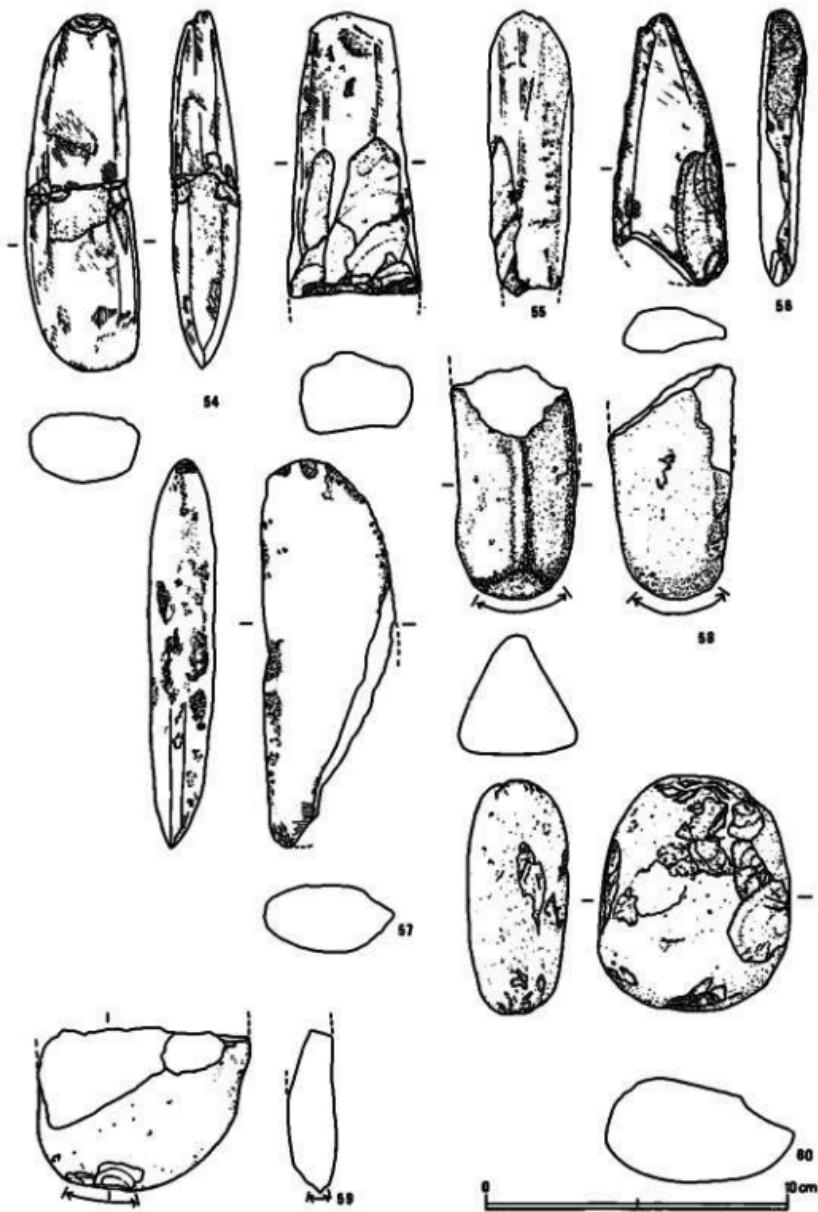


図6-17 包含層出土の石器

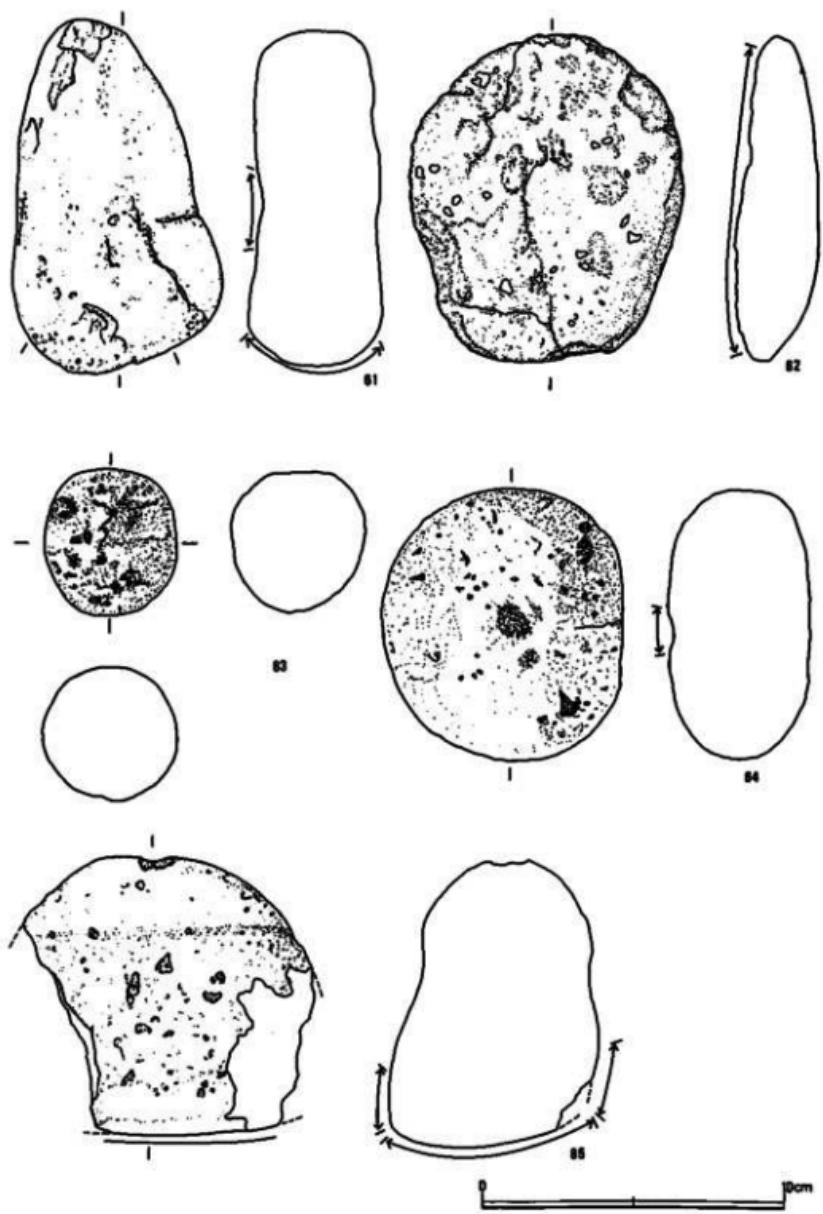


図 6-18 包含層出土の石器

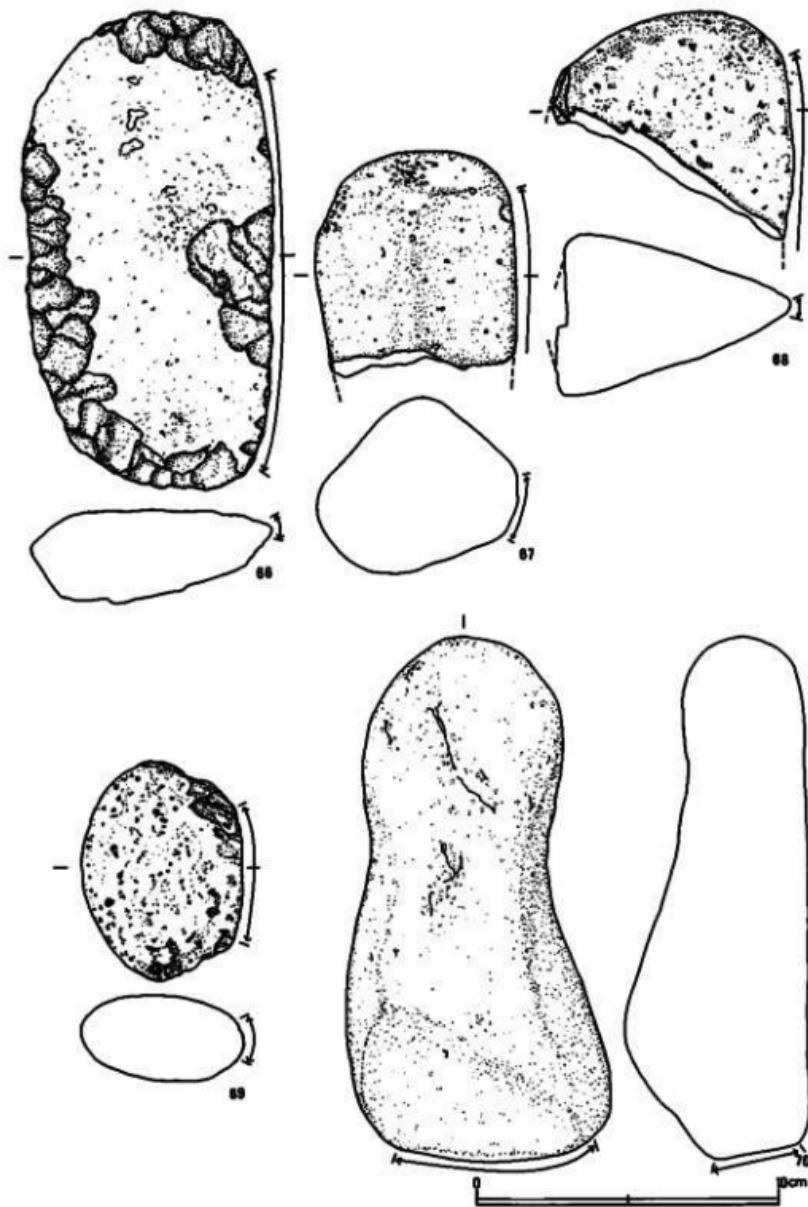


図6-19 包含層出土の石器

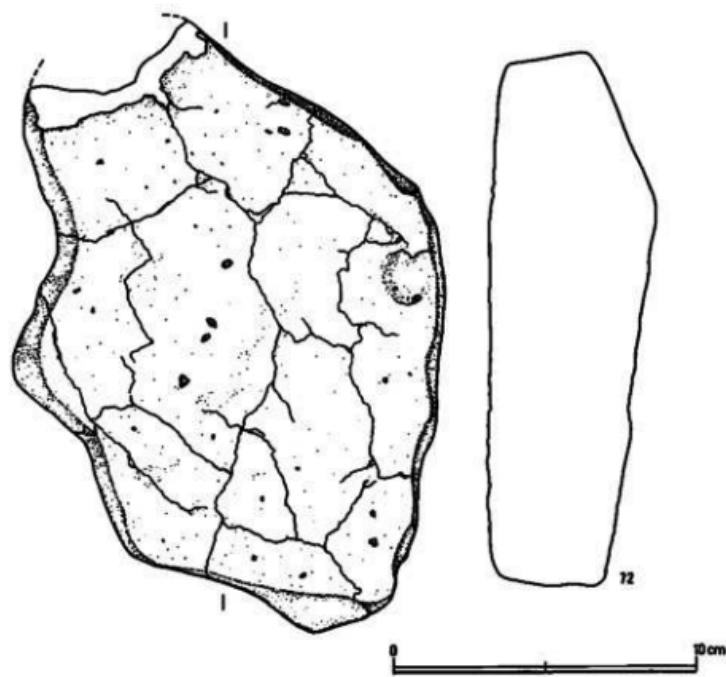
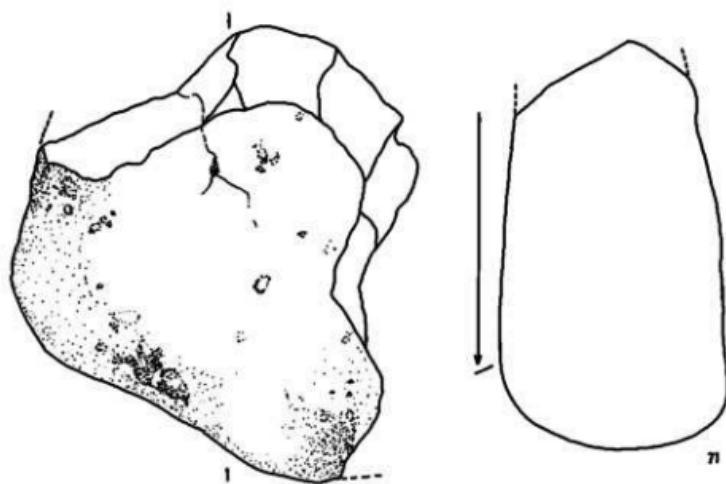


図6-20 包含層出土の石器

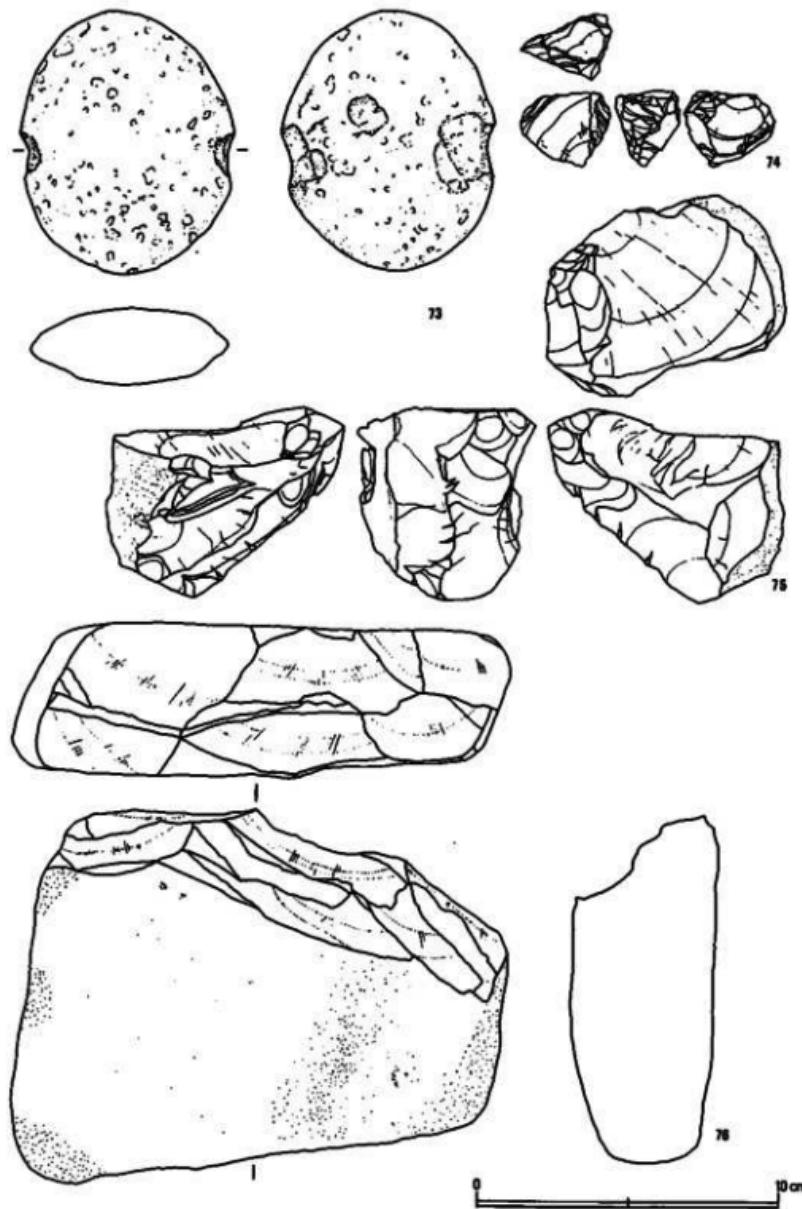


図6-21 包含層出土の石器

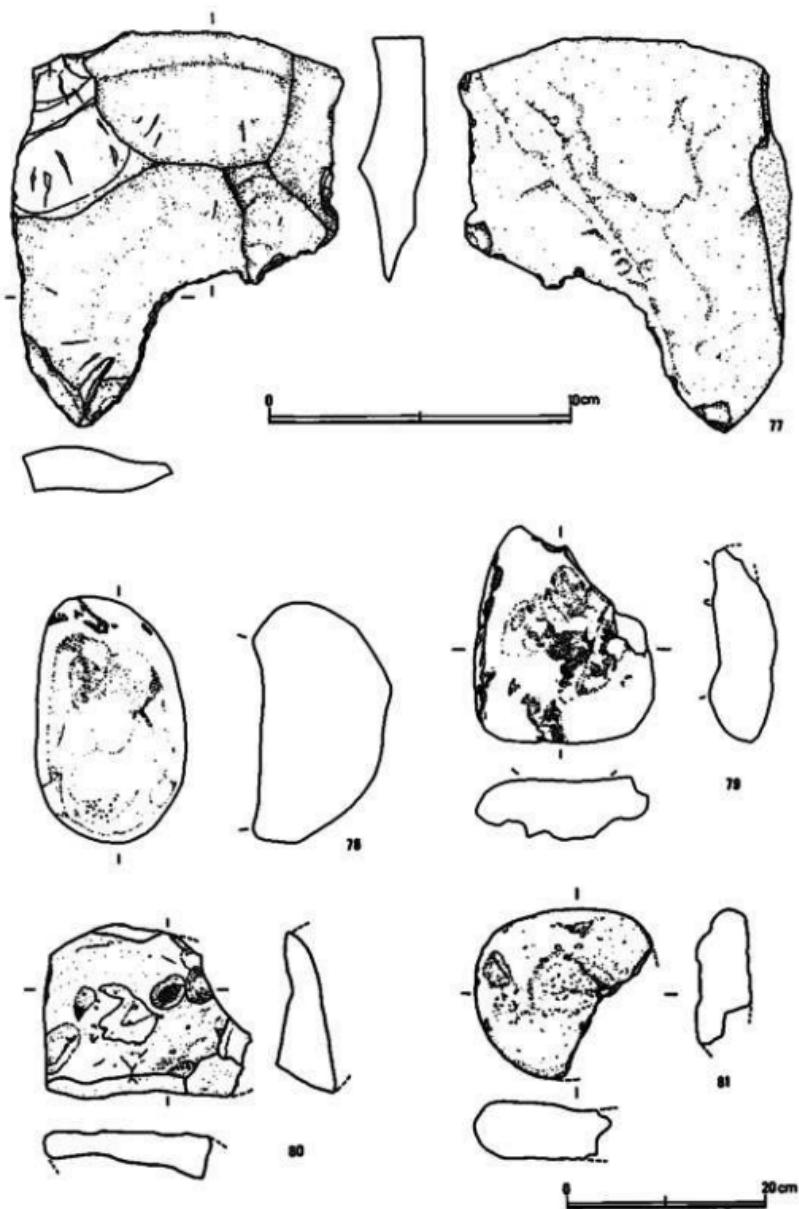


図 6-22 包含層出土の石器

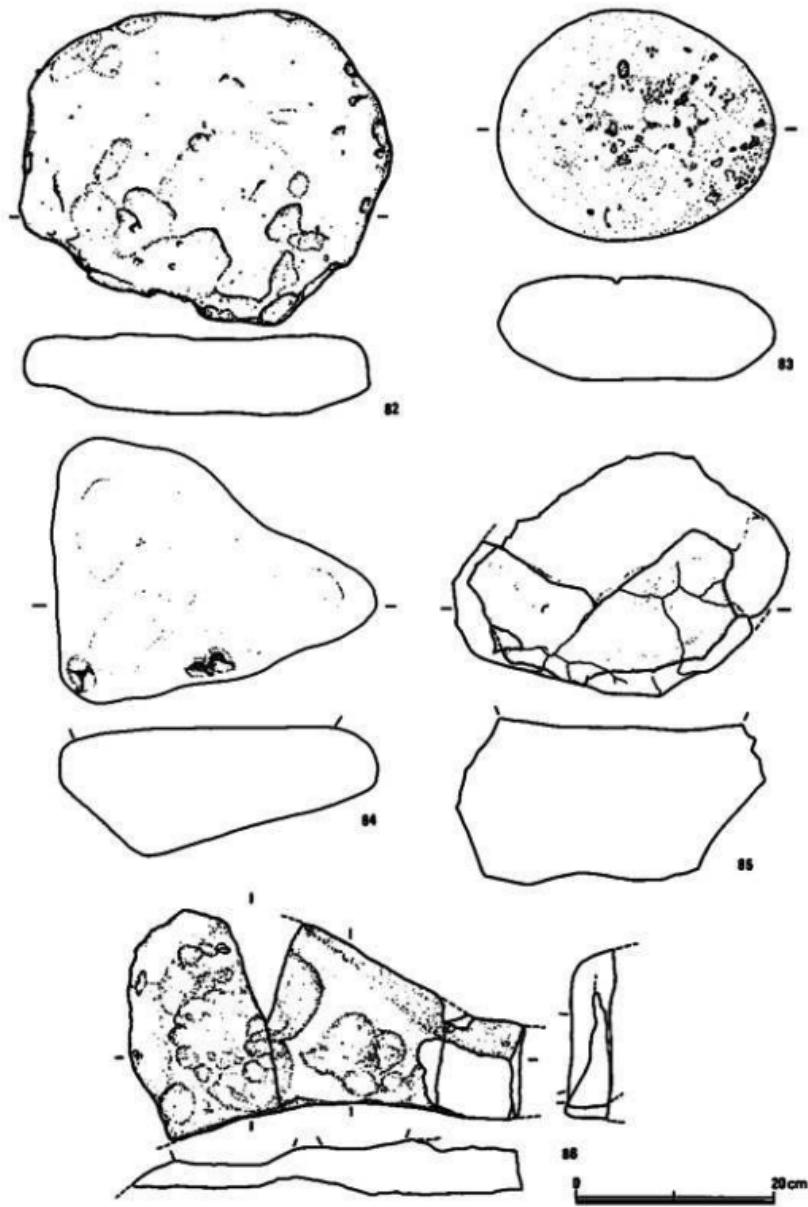


図 6-23 包含層出土の石器

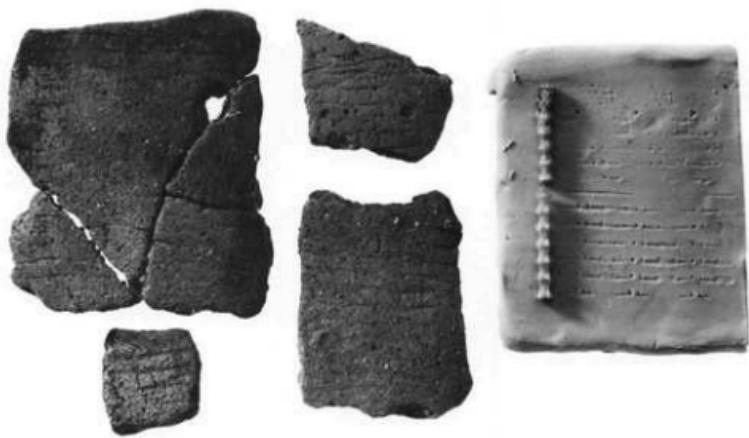
表6-2 図示した包含層出土の土器

順番号	名稱	分類	発掘区	相当する型式	写真番号	順番号	名稱	分類	発掘区	相当する型式	写真番号
1	土器	IV a	I-6-b	余市	3	49	土器	IV a	I-4-d	余市	?
2		III b-3	H-5-c	静狩	5	50		#	I-5-b	#	?
3		IV b	I-4-a		2	51		#	H-4-c	#	?
4		IV a	I-4-a	入江		52		#	I-5-b	#	?
5		IV c	I-6-b	當林	1	53		#	I-5-t	#	?
6		I b-4	I-4-a	魚骨文		54		#	I-5-b	#	?
7		#	"	魚骨文		55		#	I-5-b	#	
8		#	"	"		56		#	I-4-c	#	
9		#	"	"		57		#	I-5-b	#	
10		#	"	"	6	58		#	H-4-b	#	?
11		"	J-7-d	東洞路	6	59		#	I-7-b		
12		"	I-4-a	"	6	60		#	H-5-c		
13		II a-1	I-6-d	円筒下唇	6	61		#	I-7-a	通元	9
14		"	I-7-d	"		62		#	H-5-c	"	9
15		"	J-5-d	"	6	63		#	H-5-c		
16		III a	J-6-b	円筒上唇	10	64		#	H-5-b	通元	9
17		III b-2	H-5-b		6	65		#	I-4-d		
18		"	I-5-d		6	66		#	H-5-b		8
19		"	I-6-a		9	67		#	I-4-d		
20		IV a	I-6-a		6	68		#	I-6-b		
21		III b-3	I-6-d			69		#	H-6-b		
22		"	I-6-a		6	70		#	H-6-b		
23		"	I-7-d		6	71		#	H-7-a		
24		"	J-7-d		6	72		#	H-5-c		
25		"	H-5-b	静狩	6	73		#	I-6-c		
26		"	I-7-d	"	6	74		#	H-5-c		8
27		"	I-7-b	"		75		#	I-6-b		9
28		"	"	"	6	76		#	I-6-d		
29		"	I-6-b			77		#	H-5-c		
30		"	I-5-b			78		#	H-5-b		
31		"	I-6-a	北窓		79		#	H-5-c		
32		"	J-3-b	"		80		#	H-5-b		
33		"	I-7-a	"		81		#	I-5-b		4
34		"	H-7-c	"	6	82		#	I-4-d		
35		"	H-6-c	"	6	83		#	I-4-a	入江	9
36		"	I-7-a	"		84		#	H-6-b	"	9
37		"	I-5-b			85		#	H-5-c	"	
38		"	I-8-b			86		#	H-6-c	"	9
39		"	I-5-a			87		#	H-6-b	"	
40		"	I-7-a		9	88		#	J-4-a	"	
41		"	I-5-a			89		#	H-6-b	"	9
42		"	I-7-a			90		#	J-7-c	"	9
43		"	I-7-d			91		#	I-6-d	"	
44		"	I-4-a			92		#	H-6-b	"	
45		IV a	I-4-d	余市	7	93		#	I-7-d	"	9
46		"	I-4-d	"		94		#	J-7-d	"	9
47		"	I-5-b	"	7	95		#	J-7-b	"	
48		"	I-4-d	"	7	96		#	I-4-a	"	

編番号	名称	分類	発掘区	組合せる型式	写真番号	編番号	名称	分類	発掘区	組合せる型式	写真番号
97	土器	W a	I - 4 - a	入江	9	115	土器	W b	J - 6 - a	船泊上層	
98		W b	I - 4 - d	船泊上層	9	116		W c	I - 4 - d	堂林	
99	"	I - 6 - a	"			117	"	I - 3 - c	"		
100	"	I - 6 - a	"			118	"	I - 4 - a	"		
101	"	H - 5 - C	"	8	119	"	I - 5 - a	"			
102	"	H - 4 - C	"	8	120	"	H - 5 - c	"	8		
103	"	H - 5 - C	"	8	121	"	H - 4 - c	"	8		
104	"	H - 5 - b	"	8	122	"	H - 4 - c	"	8		
105	"	I - 5 - a	"		123	"	H - 5 - c	"			
106	"	H - 5 - b	"		124	"	I - 5 - a	"	8		
107	"	I - 4 - d	"		125	"	H - 4 - c	"	8		
108	"	I - 5 - b	"	8	126	"	H - 5 - b	"			
109	"	H - 7 - b	"		127	"	J - 5 - d	"	8		
110	"	I - 7 - c	"		128	"	I - 4 - d	"			
111	"	J - 5 - d	"		129	"	J - 6 - d	"			
112	"	I - 5 - b	"		130	"	I - 4 - a	"			
113	"	(不明)	"		131	"	H - 5 - b	"			
114	"	I - 6 - d	"								

表6-3 図示した包含層出土石器等一覧表

図 番 号	名 称	分 類	発 掘 区	片 幅 (g)	出 土 層 位	材 質	万 古 番 号	26 番 号	名 称	分 類	発 掘 区	片 幅 (g)	出 土 層 位	材 質	万 古 番 号
1	石やヒリ	IA 3 a	I-5-a	(0.4)	1	Aga-Sh		44	スカラベ	III B 2 b	H-7-b	(7.6)	II	Obs	
2			I-3-b	(0.7)	#	Obs	5	45			I-5-a	(6.7)	I	Aga-Sh	
3		IA 3 b	I-6-a	(1.2)	#	Aga-Sh	13	46			I-5-d	13.6	II	Obs	
4			I-5-b	(0.6)	#	Ha-Sh		47			I-5-c	(17.1)	#	Sh	
5			I-7-d	(3.4)	II	Aga-Sh	4	48	III B 7	I-7-a	38.6	#	Ha-Sh		
6			I-6-b	(3.2)	#	Agn-Sh		49			I-5-d	13.2	I	Obs	
7		IA 4 a	#	(1.1)	#	Obs	8	50	III B -	J-6-b	(14.8)	II	Ha-Sh		
8			I-5-b	1.0	I	Che	6	51			I-5-d	(4.0)	I	#	
9			H-6-b	(0.6)	II	Obs	7	52	石 砕	WA 2	H-5-c	(23.9)	II	Gr-Mud	
10			J-6-a	1.3	I	#	9	53			J-6-c	(109.1)	#	#	
11			H-5-b	(0.6)	II	#		54			I-6-d	(109.1)	#	#	
12			I-7-6	(1.1)	#	#		55	WA -	H-6-b	(193.6)	#	#	25	
13			H-5-c	0.8	#	#		56			I-4-a	(63.3)	#	#	
14			H-4-b	1.4	#	#		57			I-5-d	(106.0)	I	#	
15			I-4-d	1.7	I	#		58	敲 石	V A 1	#	(164)	II	And	
16			H-7-b	(1.0)	II	#		59			H-5-b	(165.1)	I	#	
17			I-7-b	(1.9)	#	Che		60	V A 2	I-4-a	26	II	Gr-Mud		
18			H-5-c	(2.6)	#	Ha-Sh		61	V A 3	I-6-d	58	#	And		
19			I-7-a	(4.5)	#	#		62			H-9-c	35	#	#	
20			I-5-d	(1.6)	#	Obs		63	V A 4	J-6-c	169	#	Gr-Mud		
21		IA 4 b	I-7-a	(1.4)	#	#	10	64	V A 3	I-4-a	46	#	And	29	
22			H-5-c	(1.9)	#	Ha-Sh	14	65	北朝式石冠	V A 1	H-6-b	(815)	#	#	28
23		IA 5 a	I-3-c	(1.2)	#	Obs		66	磨 石	WA 2	H-5-c	60	II	#	
24		IA -	I-5-d	(1.2)	#	#	2	67	V A 3	I-6-b	(430)	II	#		
25			#	(3.3)	#	#	1	68	V A 4	I-6-c	(255)	#	#		
26	石 や う	IB 1 a	I-6-b	(6.2)	#	#		69	V A 4	I-5-c	16	#	#		
27			I-7-b	(14.1)	#	Aga-Sh	18	70	WA -	I-6-d	1,150	#	#	27	
28		IB 2 b	H-6-b	(3.0)	#	Obs	11	71	石 盆	WB 1	#	(220)	II	#	
29			J-6-c	6.1	#	#	12	72	合 石	VB 3	不明	(250)	不明	#	
30	穿 孔 具	IB 2	#	47.2	#	Ha-Sh		73	石 銛	WA 2	I-7-d	187.4	II	#	24
31		II A 1	H-5-b	12.4	#	#	17	74	石 核	II	J-7-a	11.5	I	Obs	
32		II A 2	H-6-c	(2.5)	#	#	16	75			I-4-a	26	II	Mud	
33	石 鋸	IA 1 b	I-5-d	18.9	#	#	20	76	江戸式鋸	II	H-7-c	1,530	#	And	
34			I-3-d	(17.3)	#	#	19	77			I-4-a	29	II	Sh	26
35			I-5-d	14.0	I	#	22	78	合 石	VB 3	I-6-a	5,000	II	And	
36		IA 1 c	I-6-d	11.9	II	#	23	79			H-7-b	(2500)	#	#	
37			I-4-d	11.6	#	#		80			I-6-b	(2300)	#	#	
38			I-6-d	3.3	#	#		81			H-6-c	(2000)	#	#	
39			H-6-c	14.3	#	#		82	石 盆	WB 1	I-6-d	16500	II	#	
40			#	(2.8)	#	Sh		83			H-6-b	10000	II	#	
41		II A 1 d	I-7-b	21.7	#	Ha-Sh	21	84			H-5-c	13000	#	#	
42	スカラベ	III B 2 a	#	10.4	#	#		85			I-4-b	(16,000)	II	#	
43			H-7-b	(7.6)	#	Obs		86	使用痕ある壙	II	H-7-c	(5300)	#	#	



魚骨回転文土器とニシン・粘土板を使っての模式



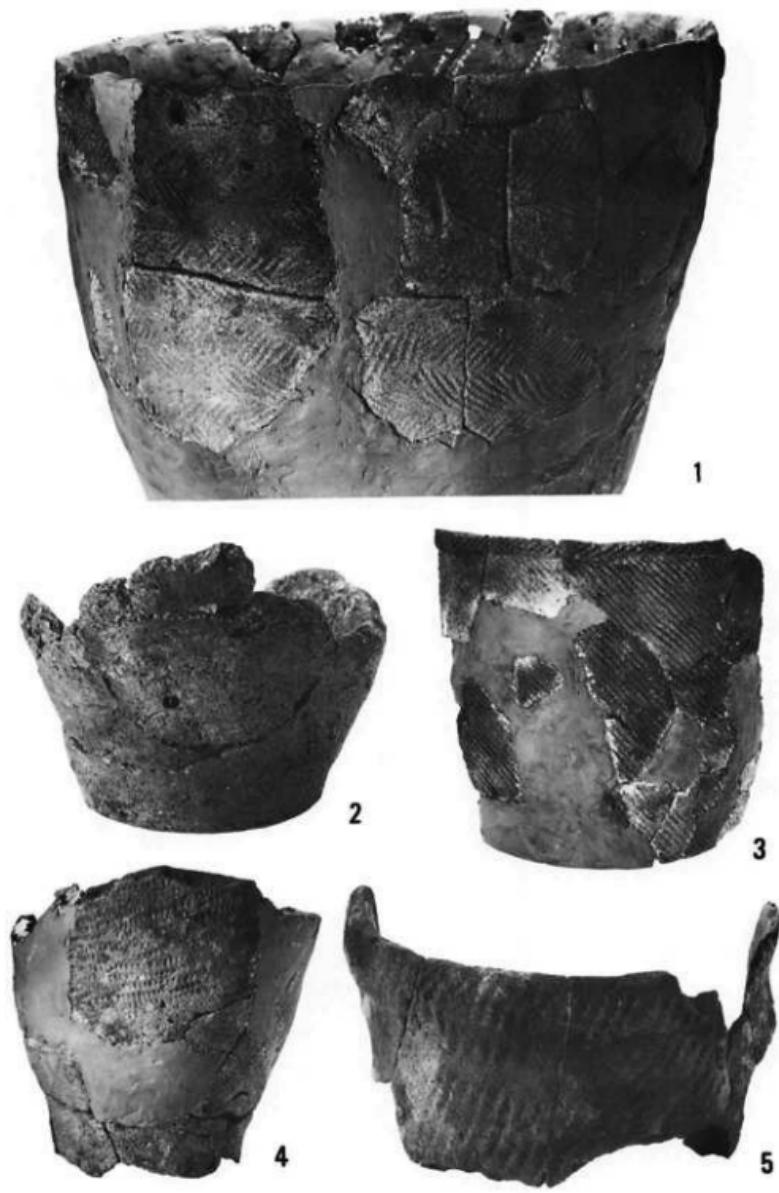
魚骨回転文土器の拡大



登別市ハシナウシの遺跡の魚骨回転文土器



千歳市美々 6 遺跡の魚骨回転文土器



土 器



6



7



8



9

土 器

図版6の7



10

土 器



1

石 器

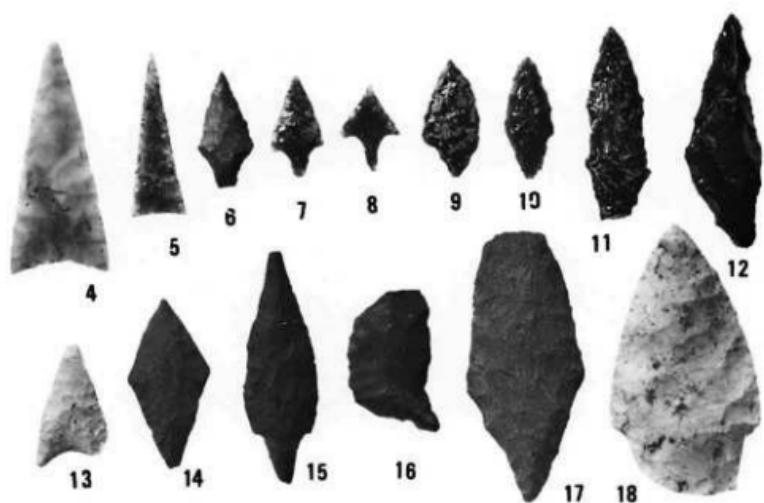


2

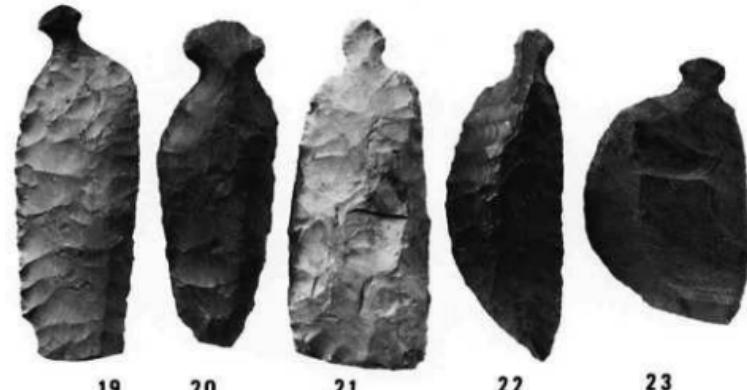


3

頁岩の礫

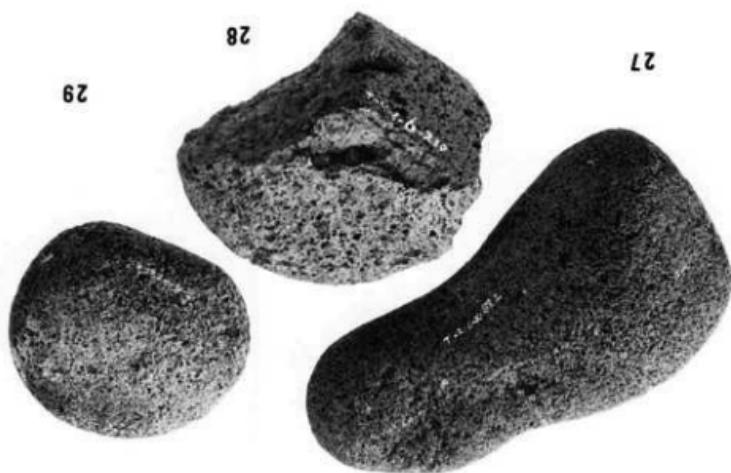


石 器

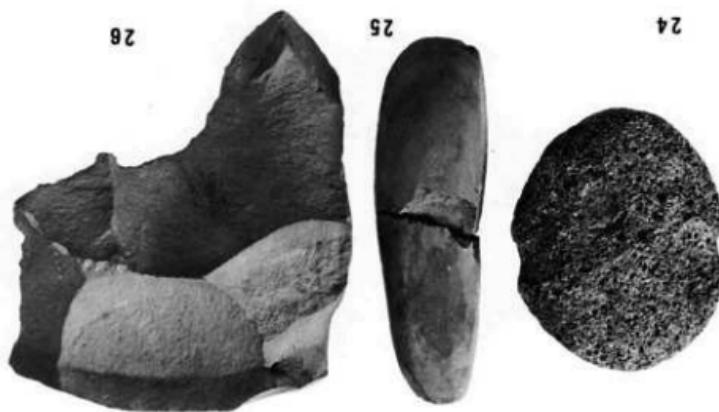


石 器

石 器



石 器



#### 4.まとめ

出土した遺物は、縄文時代早期、前期、中期、後期のものである。各時期の遺物を層位的に観察すると、II層の上半部には中期、後期の土器が、II層の下半部には早期、前期の土器がみられる。早期の土器は、II層の最下部から出土している。図6-7、図6-8に示したように、中期、後期の土器片は画面的なひろがりをみせており、生活面（文化的地表面）としてとらえられる。

明確な造構として検出できたのは、落し穴3か所と焼土1か所だけである。2号落し穴は、掘り込み面がII層上半部にあり、土器の出土状態及び土層断面の観察から、縄文時代中期から後期のころにつくられたことがわかる。

図6-9、図版6の3に示した「魚骨回転文土器」は、最近になって理解され注目されるようになった文様形式で、検出例が増えはじめている。最初に注目されたのは千歳市美々6遺跡で、縄文時代早期の東鉄路IV式土器に伴って出土した（注1）。苦小牧市有珠川2遺跡では、「魚の脊椎骨を転がし、平行沈線を形づくるもの」と表現され、縄文時代早期の東鉄路IV式に伴っている。恵庭市柏木B遺跡、白老町虎林浜4遺跡（本書所収）、登別市川上B遺跡（整理中）、登別市ハシナウシの遺跡（表面採集）、静内町駒場7遺跡、江別市後藤遺跡などでも出土している（注2）。

縄文時代早期、前期、中期、後期の遺物がみられたが、図6-7・8の遺物分布にみるとおり、いずれも北側に濃密に分布している。このことから、今回調査した部分は遺跡南縁にあたっており、主体部は北の方向にあると思われる。

（注1）「魚骨回転文土器」の呼称は、その発見、提唱者である大沼忠春にならった。美々6遺跡では「魚骨回転文土器」も出土している。また同氏によると、乙部町元和遺跡の「擦痕様の細沈線の施された」もの、同町栄浜第2地点のNo194~196の土器も「魚骨回転文土器」に含まれるという。

（注2）柏木B遺跡、駒場7遺跡、後藤遺跡については、調査担当者である、木村英明、古原敏弘、高橋正勝の三氏の収示を得た。他の遺跡は、当埋蔵文化財センターがおこなった調査による。

- 参考文献 「登別町史」 1967 登別町  
「宝庫遺跡」 1962 宝庫市  
「美沢川流域の遺跡群III」 1979 北海道教育委員会  
「有珠川2・植苗3遺跡」 1979 北海道教育委員会  
「北海道の火山灰分布図、1979」 1979 北海道火山灰命名委員会  
「北海道美沢川流域の遺跡群」 1979 大沼忠春 日本考古学協会第45回総会研究発表要旨  
「元和」 1976 乙部町教育委員会  
「栄浜遺跡」 1977 乙部町教育委員会  
「入江貝塚」 1958 北方文化研究報告13輯

この報告書は、日本道路公団札幌建設局の御了解を得て増刷したものです。

---

実費価格 1,020円（郵送料金別途）

---

(財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告第1集

社台1遺跡・虎杖浜4遺跡

千歳4遺跡・富岸遺跡

——北海道縦貫自動車道登別地区

埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和56年3月31日 発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南15条西17丁目

TEL. (011) 561-0067

印 刷 高 速 印 刷 セ ン タ ー

063 札幌市中央区北4条西3丁目

北洋駅前ビル6F

TEL. (011) 271-5101

---

---